神に違和感を覚える俺　～転生とか死ぬほどどーでもいい～

リュウガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神に違和感を覚える俺　～転生とか死ぬほどどーでもいい～

【Ｎコード】
Ｎ４２４９Ｎ

【作者名】
リュウガ

【あらすじ】
ギリシャ神話、ケルト神話、様々な物語があるように、様々な“神”が存在する。
この物語は、家庭の事情で少し歪んでいるオタクの物語・・・

は？神様？興味ないね。（前書き）

この物語の主人公は、読者を不快に思わせることを言ったりします。

不快に思っていても、見るのは自己責任でお願いします・・・

では・・・・

は？神様？興味ないね。

皆さん、”神”と聞いて何を想像しますか？
何かを創造して、生み出す存在ですか？
それとも、めちゃくちゃフリーダムで、なんかノリでチート能力を装備してくれる人の形をした者ですか？
明らかに女神みたいなナイスバディーの御姉さんですか？

・・・・・まぁ、ぶっちゃけ、俺はどうでもいい。

どうでもいいったらどうでもいい。
だって、俺、神信じてないもん。

だって、一々「困った時に神様が助けてくれるー」みたいな考えは考えたことすらない。
神を崇めても、意味は無い。

困った時に「はいはい、転生転生」とか言ってチートな能力を授けて転生させてくれるわけがない。
少なくとも俺はそう思う。

「・・・・・おい、お前。神って信じるか？」

俺の目の前に居るたばこをくわえたこのおっさん・・・

なーんか臭い。
まぁ、たばこの臭いなんだけどさ・・・・
「おっさん、俺ァ見ず知らずのおっさんに神がどーとかとーとかなんていうよーな質問される覚えがないんだけど？」
「まぁ、そりゃそーだよな。流石、俺が認めた男・・・まぁ、むっさいクソガキになんて興味ないんだけどな」
なんだよ・・・このおっさん・・・
滅茶苦茶うさんくせぇし、言動が理解不明だ・・・
「お前、魔法とかって信じるか？・・・・いや、質問を変えよう・・・」
「おっさん、死ぬ程どーでもいいから、とっとと消えてくれ。きゃー変態だーとか言って叫んでやろうか？」
「まぁ待て・・・人間として生きてるんだから、もう少し時間を大切にしろって」
・・・・胡散臭ぇ・・・・・
なにが“人間として生きてる”？
バカじゃねぇの？一々神みたいな口調でしゃべるなっつの・・・
「その言葉、そっくりそのままあんたに返してやるよ。」
「そーかいそーかい。まぁ、生きる事すら否定している人間なんて、早々居ないんだよ。なーに、おっさんと話でもねぇか？」

「・・・・その前に、おっさん誰だよ？」

俺がそう質問すると、待ってましたと言わんばかりに俺を見た
気持ち悪っ・・・俺同性愛嫌いなんだよね・・・
日本から離れて別の国でいい男見つけてくれないか？少なくとも、
俺の眼中からは消えて欲しいね

「俺かい？俺は・・・・・・」

その時、俺はこのおっさんに出会った今日、この日、この時間を永
遠に呪う事になるだろう・・・

「神様って奴さ・・・・・」

神様ねぇ・・・

「“神様”って知ってるだろ？」

「・・・・・・・・・」

何言ってんだこのおっさん・・・・

まさかの自称神ですか？

うわ、アホらしい・・・・中二設定もいい加減にしろよ・・・

結局「俺は神だ！！」とか言って、実はそうじゃありませんでしたー、ってオチだろ？

もう見え見えなんだよ。

くだらねぇな・・・・しかも何？その神様が俺に何の用？

「その顔、やっぱり俺が神って信じてないよな？」

「・・・・まぁな。第一、アンタが神なら、今すぐにでも殺してやりたいよ・・・神が居なくなった世界って、見てみたいしな。」

俺は静かに睨みながら言った

だってそうだろ？普通に考えて、自称神様のおっさんがこっち見てるんだぜ？

馬鹿馬鹿しい・・・俺は帰ってやらなきゃいけないことがあるんだっつの・・・・

「おいクソガキ、お前、なんでそんなに否定ばっかりするんだ？もっと他にも考えは無いのか？」

「知るかよ。第一、アンタがどの神話の神なのか聞いて見たいね。

どんな神様だよ？ギリシャ神話に出てくるゼウスか？それとも、他の何かか？ま、俺にはかんけーないけどね。」

俺は横に下げているバックに手をやった
中にはコーヒー牛乳が入ってる
他にも、授業で配られたプリントとか、学校の不用品とか

「はぁ～・・・お前みたいに歪んだ人間見てるとほんっとイライラするなぁ・・・」

「はいはい。歪んでる歪んでる。で？その自称神様が俺に何の用だ？」

とりあえず、話事態に興味がないので、コーヒー牛乳を開けて飲む・・・
うん。やっぱり美味い・・・・

「お前さぁ、もっと他に思う事はないのか？チート能力手に入れて、転生したいとか・・・」

「は？何言ってんの？」

コーヒー牛乳から口を離して言う
何言ってんだこのおっさん？

「バカじゃね？第一、転生ものってのは、大抵「うはｗｗｗ俺最強ｗｗ」とかそーゆーので、原作のあるアニメとか、ゲームの世界で無双するだけだろ？第一、そんなことさせようとする“カミサマ”が信じられないね。神様の事故で死んじゃいましたー、それで転生

させてあげまーす、ただし記憶はそのままー・・・それでいいのか？原作破壊させて楽しいのか？」

「・・・・おいクソガキ、お前がどう神を捉えてよーが俺には関係ないし、他の神のことなんて知ったこっちゃねぇ・・・第一、他の奴らが甘すぎるだけだ。事故で死んだんならそれでいいだろ？潔くそのまま死んで天国か地獄行くか決めて、罪を洗い流してから別の人生を送らせてやりゃいいじゃねぇか、ってトコはお前と同じだ。」

・・・このおっさん、ほんとに神か？

神って名乗ってるくせに他の神を思いっきり侮辱してるんだけど・・・

「でもな、どーしても優し過ぎる善人は善人なんだよ。それが神にあるまじき行動だってのに、なんで気付かないんだろうな？」

「さぁな。それなりに考えがあるんじゃねぇの？」

何故かおっさんと同じことを考えてる俺に嫌気がさしてきた・・・

「まぁ、お前見たいに歪んでる奴は、他の神は無視するだろーけど、俺はそーゆーの好きだぜ？俺みたいな考えしてる奴が他にも居るんだからな」

「はいはい。分かった分かった。じゃ、俺帰るわ。」

そういい、おっさんの横を通り過ぎて、家に帰ろうとした・・・

だけど、おっさんを通り過ぎた瞬間に見ていた景色が変わった・・・

「まぁ待てしょーねん。折角であった仲間同士、仲良く語り合おう

じゃないの」

「・・・・おっさん、あんたの言ってる事の１０割を嘘だと思ってたけど、３割信用できそうだ・・・」

「・・・結局７割は信じてねぇのかよ・・・・」

おっさんは、何故か後ろにあったベンチに座った
俺はおっさんが手招きするので、仕方なく隣に座ることにした
勿論、結構距離を空けて・・・・

「なァに、俺は同性愛主義者じゃねぇよ。少なくとも、ホモもレズも嫌いだね。」

「神様がそんなこと言ってちゃ終わりじゃねぇか」

「お前なぁ・・・俺以外の神のほとんどは同性愛認めてるんだぜ？お前だったらどう思うよ？」

・・・・・考えたくもない。
同性愛主義者が居るんならほっとけばいいし、少なくとも、俺の眼中には二度と映らないで欲しい

「でよぉ、お前にお願いがあるんだよ」

「・・・その前に、一個質問な。」

おっさんが俺にお願いがあるとか言いだしたが、その前に聞く事がある・・・

「ん？なんだ？」

「・・・おっさん、名前は？」

「名前・・・・・ねぇ・・・神が一々名前名乗っても意味ないだろ？そのままおっさんって呼びな。そっちのが俺も話しやすい・・・つーか、他人の名前聞く時ゃ自分から名乗るのが筋だろ？」

「自分の名前は名乗らないって言ってきながらそれかよ・・・」

まぁ、とりあえず、名乗っておくことにした

「俺は天野蒼≪アマノソウ≫・・・ま、どこにでもいるふつーの人間さ」

「よし、んじゃソウ・・・お前に頼みがある」

俺はおっさんの言う言葉には速攻で言う言葉を用意していた

「ちょっくら、別の世界に言ってやくれねぇか？」

「断る。めんどくせぇし、チート能力とかいらないし。原作破壊もしたくねぇし」

おっさんは分かり切ったように「そうか・・・」と呟いた

すると、おっさんは笑いながら言った

「そうかい。んじゃ、またな。クソガキ」

そう言うと、おっさんはその場から最初から居なかったように姿を消していた・・・

なるほど、神って瞬間移動も出来るのか・・・・

「・・・・・ここって、親父の・・・・」

辺りを見渡すと、自分の見知った景色だった

よく見渡せば公園があるし・・・・

ここは、昔親父と散歩とかで歩いた道だった・・・

昔のままの公園だったが、どこか古ぼけていて、今の子供達でも、中々来ることはないだろうと思っていた・・・

「・・・・・ちっ」

一回舌打ちをして、もう一度コーヒー牛乳を飲んだ

あんのクソ神め・・・一番来たくない場所に連れてきやがったな・・・

飲みきったコーヒー牛乳を公園のごみ箱に捨てて、一度あの公園を見た・・・

・・・ちっ、クソ親父め・・・・

「・・・・・・ふんっ」

背を向け、俺はその公園から去った・・・

そこに唾を吐き、忌み嫌っているかのように・・・・

はいはい。神様神様

俺はとっとと家に帰った

まさかよりにもよって電車を使って帰らされるなんて思ってもみなかった・・・

くそ、あの胡散臭ぇおっさんめ・・・今度会ったら３７０円請求するからなこの野郎・・・！！

「ただいまー」

「あら、蒼。おかえり。遅かったわねぇ・・・」

「まぁね・・・色々あった」

俺の母さん・・・天野秋江・・・

やはり、帰っても俺の親父は居なかった・・・

「今日の晩御飯グラタンだから、食べてね。お母さん仕事に行くから・・・」

「はいはい。分かったよ。」

俺は正直この人が嫌いだ。

人を嫌いになる理由なんて人それぞれだけど、俺はこの人が嫌いだ・・・

いってきまーす、と後ろから聞こえた

どうやら仕事に行ったようだ・・・・

「・・・・・・・」

一人となった家で、俺はめんどくさそうにため息をついた

「・・・・食うか。」

一人、寂しい食卓でグラタンを食べる・・・

・・・ふと、横に目を逸らすと、写真が飾ってあった

どれもこれもじいちゃん達の写真ばかり・・・

俺達家族の写真なんて一つも飾ってなかった・・・

「・・・・・・・バカ親父が」

俺の親父はずっと前に離婚した

俺が小学生の時だった・・・・

あの日のことは絶対に忘れない・・・

夜遅くに無理矢理叩き起されて、涙を流しながら無理矢理リビングに連れていかれたのだ

その時に言われた言葉が・・・

『よく聞けよ蒼。俺はもうこの人とは生活しない・・・俺はもう出て行く。お前はどうしたい？その人と一緒に暮らすか、俺と来るか・・・どっちがいい？』

・・・俺がまだ遊び呆けていた頃、当然の離婚・・・

俺は母さんと一緒に暮らすことを選んだ・・・
だが、それが同時に俺の人生を大きく変えるものとなった

親父が離婚した理由・・・・
それは、俺や親父にも許可なく勝手に働きだしたのだ。
理由は「お金がない」と言う理由・・・
ただ、自分の小遣い欲しさに働きだしたのだ

だが、それが火種となり、ばあちゃん達から借金をしてまで自分の
娯楽に使いだしたのだ
親父は何度も俺が寝ている間にも説得した・・・
だけど、あの人は全然止める気配がなくて、結局離婚した・・・

「・・・・・・はぁ」

一人、またため息をつく・・・
馬鹿馬鹿しい・・・なんで俺はあの時親父について行かなかったの
だろう・・・
親父だったら、俺もこんなことにならなかっただろう・・・
しかし、俺は選んでしまった・・・

もう失った時はもとに戻らない・・・

「・・・・・・・御馳走さま」

そこまで美味しいとも感じないグラタンを食べ終え、食器を片づけ、
洗った

風呂上りに牛乳を飲み、そのまま予約していたアニメを観直したり、
ＤＶＤを見たり・・・
至って普通の生活だと思う・・・・
ただ、俺は一般人ではなく、一般人から変な目で見られる存在・・・・
つまり、オタクであること以外は・・・

そのまま部屋に向かい、ＤＳを開いて俺なりに充実した時間を過ごす・・・
明日は日曜日なので休み。
俺は部活動に入っていないので、特に何もない、普通の日曜日・・・

「・・・・・・・」

ＤＳを横に持って、ただひたすらに彼女たちに会う・・・
３Ｄだけど、クオリティが高くて、とても面白い・・・・・
毎日毎日毎日ただ寝る前に開いて遊ぶ・・・

例え、それが一般人からごみのような目で見られようと、俺は構わなかった

「そろそろ寝るか・・・・」

「おー、もう寝るのか・・・早いなしょーねん。」

声のした方を見ると、おっさんが窓から侵入していた・・・

「おいおっさん。不法侵入だぞ？」

「まぁまぁ。気にすんな。それよりも、これとかやらないのか？このまま寝るのなんて惜しいだろ？」

そう言いながら、さり気なく俺のＰＳＰを手にしていた

中に入ってるのはリリカルなのはのＰＳＰゲーム・・・

あれは、なんとなーく買ったものだ。別段、嫁と言えるキャラクターは居ないが、中々面白かった

「・・・おっさん、あんたいい加減諦めたらどうだ？」

「はぁー？何言っちゃってんのお前？俺はそう簡単に諦めるような男じゃないっつの」

そういいながら俺のＰＳＰの電源を入れるな。

ほら、画面見て固まってるし・・・

「・・・・お前、これは流石に・・・・」

画面を俺に見せつけるように突き出した

俺のＰＳＰの画面に映っているのは３期のあの伝説のシーン・・・

まぁ、魔王降臨のシーンのあの時の顔が映し出されていた

ちなみに、アニメは全て見た。

楽しくて一日ぶっ続けで見たっけなぁ・・・

「いいだろ。俺がどんな画像にしようとしてまいと・・・つーか返せ」

そう言ってＰＳＰを取り返した
まったく・・・なんでこのおっさんは勝手なことするかねぇ・・・
「まぁ、アレだ。少しだけお前が歪んだ理由が分かった。嫌ーな人生送ってんのな」
「・・・・今はそうでもない。友達も増えたし、何より、毎週放映されるアニメがあるからな。俺はそれがあれば明日を生きていける」
「・・・・もう人間として末期なのな・・・」
おっさんが呆れながら言った
まぁ、誰が俺をどう思おうと俺はどうでもいい・・・
所詮そいつの価値観・・・俺がどうこう言えるものじゃない
「・・・・で、何の用だ？」
「なーに、煮え切らないクソガキの背中を後押ししようとしに来たのさ。どうだい？俺と一緒に別の世界に行ってみないか？」
・・・・正直、あの時の誘いに乗ってもよかった
コイツが神としての能力を持っていて、尚且つこのおっさんの言ってることが本当なら・・・
俺は、ある意味運命の選択を突きつけられているのだ
おっさんは手を差し出していた・・・・
恐らく、来るのであれば手をとれと言う意味だろう・・・
もしも、その世界に行けるのなら、二次元のキャラクター達に会え

るかもしれない・・・
もしかしたら・・・彼女たちにも・・・
俺はＤＳを見つめた・・・

・・・正直、今の生活は好きではない。
母親は俺の事をお荷物程度にしか思っていないような目で見てくるし、学校には俺の嫌いな奴もいる・・・

だが、好きな物もある。
毎週発売されるジャンプとかも好きだし、毎週放映されるアニメが俺の原動力である・・・
好きな漫画も発売されて、読みたい小説もある・・・

だけど・・・俺は何かを求めている・・・
何かを・・・・

「・・・いいぜ、その誘い、乗ってやるよ」

俺は差し出された手に握手をした・・・

「・・・さっすが、歪みねぇお前なら手をとってくれると思ったぜ」

「・・・その発言、微妙に危ないから・・・知ってる人が居たら困るから・・・」

・・・俺にレスリングの経験はないからな？

「さて・・・まぁ、早速だが、俺と一緒に来て貰うぜ・・・」

「待ちな・・・ちょっと用意してくるから・・・」

そう言って、俺はバックを取り出した

中にＤＳとか、ＰＳＰに、小説、漫画などを入れて、用意は完了した

「よし、これでよし・・・」

「よくねぇだろ。なんで「リリカルなのは」の世界に行くのにそのＵＭＤ持ってくんだよ・・・置いてけ。せめてモンハンにしな」

「えー・・・・仕方ねぇな・・・」

渋々ＵＭＤを抜き出して、モンハン２Ｇを入れた

・・・ん？なんか変な単語が聞こえたような・・・・

「おい、どーゆーこった？」

「何、簡単な事だ・・・俺と一緒に仕事してもらうだけさ。」

「・・・・仕事？」

まさか俺はこのおっさんのお手伝いとして同行するのか？

うわー、めんどくせぇぇぇぇ・・・・

「なァに・・・ただ世界に浸食しようとしてるバグの修正だ。簡単に言えば、ダウンロード式のクリーナーだな。」

「・・・条件とかあるのか？その世界に干渉してはならないとか・・・」

おっさんに質問すると
おっさんは「は？何言ってんのこの子？」みたいな顔で俺を見てきた
「そんなの最初（ハナ）っからねぇよ。ただバグの修正だけだ。まぁ、お前にとっちゃ色々と不便かもしれないけどな・・・」
「・・・不便？」
そう言った瞬間に、俺はおっさんの手刀で意識を失っていた・・・

チート能力？要らんよそんな物

「・・・・・うっそぉおおおおん！？」

物語の始まりがこんな物ですいません・・・

どうも、蒼です。

なんか、目ぇ覚めたら黒い服の男達に変な薬飲まされて、体が縮んでしまった！！

みたいな始まりなんですよ！

なんだよこれ！？

・・・・つか、ここどこ？どっかの森っぽいけど・・・

「おっさーん。おーい、どこ行ったー？」

とりあえず、おっさんを探す

でも、どこにも居なかった・・・

歩いて探しても、見つからなかった・・・・

「ったく、しょーがねぇな・・・」

確か、リリカルなのはの世界に無理矢理連れてこられたんだっけ・・・

あー、早くも帰りたくなってきた

やべぇよ、けいおんの録画予約してねぇよ・・・どうしよっかな・・・

『あー、あー。聞こえるかしょーねん？』

「・・・・おっさん、あんたどっから話てんだ？」

『気にすんなー。いわゆる念波で話してるから。勿論、神様の特権って奴を使って妨害も受けないけどな。』

「はいはい。神様神様・・・」

とりあえず、おっさんに向かい、話を始めた
めんどくさいし、とっとと終わらせて帰りたい。
今すぐに帰りたい・・・いや、マジで・・・

『えーっと、実はだな。お前をつれてきたのにはわけがある。実は、この世界にバグが発生しちまったんだよ。』

「・・・で、そのバグを駆除するのがお前の仕事だろ？俺ァヤダよ？なんか変な怪物とか、魔王様に戦いを挑むなんて・・・」

『いや、話聞けよ・・・まぁ、実はバグのせいで、俺達神が侵入できないように、変な結界張られてんだよ。まぁ、結界っつーか、黒いウナギみたいなもんつーか・・・』

黒いウナギ？丸焼きか？
あー、ウナギはあんまり好きじゃないんだよな・・・
何せ、土用の丑の日とかそーゆー日はあんまり家に居なかったしなぁ・・・

『で、とりあえず、そのバグがなんかしようとしてるから、駆除してくれ』

「・・・勝手にチート能力装備してないだろうな？」

『まぁ・・・チートって程じゃないけど、少しはした。』

「おいコラクソ神。俺を今すぐ元に戻せ。俺はチート嫌いなんだよ。地味ーにレベル上げる奴なんだよ。いきなり「俺ＴＵＥＥＥＥＥ！！！」みたいなの嫌いなんだよ」

『・・・・お前ってホント変わってるよな・・・・』

はっ！チートしないと倒せない相手が居るからチート改造した？
バカじゃん？そんなのレベル上げればいいだけじゃん。改造しなくても問題ないじゃん。
結局は自分の力に頼ってないってことじゃねぇか。
負けたんならもう一度やり直して立ち向かえばいいし、まだ負けたんなら一生懸命頑張ればいいじゃねぇか。
そうやって地道に努力して、倒せなかった奴を倒せた時の達成感がいいんじゃねーか。
初めてリオレウス倒した時なんて感動したね。ティガレックスとか、ミラルーツとか。
自分が弱いからってチートなんてしたくないね。

『まぁアレだ。その世界っぽい能力にしといた。』

「・・・どんな？」

まぁ、といっても魔法なんて使った事ないから憧れるわけですよ・・・
若干きらきらと目を輝かせながら聞いた・・・

『まぁ、ガンダムＳＥＥＤからＯＯまでの主役機体のバリアジャケットになれるし、能力も使える。』

よし、ストフリは使わない事にしよう。
後、ジャスティスとか・・・・核が原動力なんてチートだろ・・・
あ、ＯＯも駄目だな・・・ありゃとんでもない位のチートだし

つーことは、最初はストライク辺りからにするか・・・

「つーか、なんでＳＥＥＤから？俺は個人的に初代がよかったんだけど・・・」

うん、いいよね初代・・・
バランスもいいし、カッコいい・・・
一年戦争をよく生き残ったよ・・・

『まぁ、そこは俺の趣味だ。意外とラクス好きだし』

「知るかよ。第一、ＳＥＥＤとかしか見てない奴が語るな。初代とかＺＺとかを見ろ。滅茶苦茶感動するから・・・」

まぁ、なんでガンダムについて語っているかはさておき・・・
俺は何故か入っていた俺の財布の中身を見た

・・・おかしいぞ？札束がある・・・だと・・・！？

『あ、必要最低限の物はその金で揃えてくれ。まぁ、アレだ・・・
あの時電車で帰らせたお返しって奴だ』

「・・・あんたがホントに神に見えるよ・・・！！」

よし、この金、大切に使おう・・・・

・・・・・あ、そういえばあの本の最新刊とか発売だったな・・・
それに、ジャンプとかも買わないと・・・・

『くれぐれも一日で使い切るなよ？』

「・・・・・努力する」

『んじゃ、こっちも長々と話してられねぇんだよ。通話料かかるし』

「電話！？」

『んじゃなー。ちなみに、そっちは２０１０年じゃねーから、お前の欲しがるようなものは発売されてねーぜ。んじゃなー』

・・・・最悪だ・・・・
俺の金の使い道が一瞬にしてなくなった・・・

まぁ、リリカルなのはの世界に来て初めての買い物がコンビニに売ってるジャンプかよ・・・
コンビニで働いてる兄ちゃんも笑顔でこっち見てきたし・・・
なんなんだよ・・・いーだろ？別に・・・少年の心を忘れないうちにジャンプを読むのは悪いのか！？

まぁ、見た目も子供だからいいけどね・・・
流石に、ベンチで読む気ゃねぇし・・・・
さっきから道行く高校生から可愛いだの、なんだの言われるし・・・
なんなんだよチクショウ・・・・
まぁ、とりあえず、最初に行く場所っつったら・・・・
「・・・・・・・・」
やっぱり、はやての通ってるあの図書館だろ。
ここならジャンプも静かに読めるし、もしかしたら祝！はやてとご対面～♪みたいなこともできるわけですよ。
まぁ、俺はとっととジャンプが読みたいだけだけどＮＡ☆

「・・・・・・古い」
読み終わった後のそう呟いた
いや、まぁ、楽しいっちゃ楽しかった。
いや、めっちゃ嬉しかった。
だって昔のジャンプだぜ？懐かしいったらありゃしない・・・

あ、２００６年のジャンプのおまけにはオーシャンがついてきたっけ・・・
やべっ、買い集めとこ・・・・

あ、ちなみに、趣味は遊戯王だったりする。
おい、誰だ。遊戯王をバカにしたの・・・
なめんなよ！トリシュ―ラとかめっちゃ高いからな！！
勿論、意味もなくバックの中にはデッキがあったり・・・・

「・・・あ・・・・・」

突然、図書館の自動ドアが開いた・・・
その時、見えたのは車いすに乗っている少女・・・
八神はやてだった・・・・

よし、ここに病院を建てよう

・・・・・俺は思わず言葉を失った

それと同時に、涙がぽろぽろと溢れだしていた

まさか、本当に会えるとは思ってなかった・・・・・

おっさんの言ってる事恐らく本当だろう・・・

でも、何より嬉しかったのは、画面によって遮られていて、手が届かなかったキャラクターがそこに居るのだ・・・

なんか、周りの人たちが俺のこと見て少しだけ騒いでいた・・・

もしかしたら、本当に会えるかもしれない・・・

俺の、大切な人に・・・・

『おーいしょーねん。聞こえるかー？』

「・・・うっさい黙れ・・・俺はもう死んでもいいかもしれないんだ・・・」

『ちょ、何があったんだよ！？』

滅茶苦茶嬉しかった

初めてリオレウスを討伐した時と同じくらい・・・

『あー・・・とにかくわかった。分かったから、とっとと俺の言う

事聞け。バグだ。』

「・・・・・お前、今度会ったらぶっ殺な・・・」

俺の感動をぶち壊しやがって・・・！！

いいぜ、バグ野郎・・・・！！

お前等が俺の邪魔するってんなら、そのふざけた幻想をぶち殺す！！！

・・・・うわ、言っててイタいわ・・・

つか、恥ずかしっ・・・大声でこんな事叫びたくないわー・・・

『場所は神社。まぁ、あそこだ。無印の二話で出てきたあの神社だ。』

「うわー・・・めんどくせぇトコにある奴かよ・・・」

街の構造は勿論しらないし、その神社がどこなのか、俺にはさっぱり分からない・・・

なら、歩いて探すしかねぇのか・・・はぁ～、歩くのだるいなぁ・・・

そんなことを思いながら、俺は図書館から出た

『・・・歩くのだるいとか言ってるしょーねんにスペシャルプレゼントー。ほれ』

「うぉう！？」

突然自分の目の前に真っ黒な空間が生み出されて、俺の目の前に立ちはだかった
それはぶよぶよしてて・・・簡単に言えば、キングダムハーツの？？機関とかの使う闇の回廊だった

『ほら、さっさと行け』

「お、おう・・・・」

幸い、ここは人気の少ない道なので、誰も見ていなかった・・・

「・・・・チートうぜぇ」

そんなことを呟きながら、俺は神社の前に居た
神ってホントチートだな・・・
うぜぇったらありゃしない・・・死ねばいいのに
といっても、見渡しても特に何もなかった
まぁ、そりゃそうだよな・・・

だが、俺の後ろに何か黒い物体が蠢いていた

「これがバグねぇ・・・・」

見るからにぶよぶよしてて気持ち悪い・・・つーか、何？この暗黒物質？
バカなの？死ぬの？つか死ね。いや、俺が殺す。

『あ、ついでに変身方法な。まぁ、お前がなんか叫べば勝手に変身してくれるから。』

「あー・・・・なんかよく分からないけど・・・」

とりあえず、なんか叫びたくなったので、叫んでみた

「ガンダァァァアアア

最初に頭部バルカンでぶよぶよに攻撃・・・
まぁ、やっぱり意味もなく、ぶよぶよの暗黒物質はまた再生して、
今度は襲いかかってきやがった

「うっ！！！」

だが、俺は避けもせず、そのまま攻撃を受けた・・・
足でふんばって、暗黒物質を掴んだ
そこまで痛くは無い・・・
バリアジャケットが凄いのか、俺が頑丈なのか・・・
まぁ、どっちでもいいけど

「うりゃあああああああ！！！」

そのまま掴んだ場所を手刀で切断すると、バグは痛いとでも言っているのか、ぶよぶよと動き始めた

「・・・・・・装備換装」

そう呟き、俺はためしたかった事をした
なったのはランチャーストライク・・・・
勿論、コイツ≪ランチャー≫でやりたいことっつったらこれだろ・・・

「食らえェェェェェェ！！！」

魔力を溜めて、砲撃を放った
その一撃はとんでもなくて、凄いスピードでバグを包んだかと思うと、一瞬で消し去った

だがその変わり、空に俺のランチャーの放った砲撃が流星のように現れた・・・

「・・・やべっ、どうしよ・・・管理局に見つかりたくないし・・・ここは・・・」

今度は俺のバリアジャケットが変化した
エールストライクになって、とっととその場からおさらばしたのだ

介入してしまえば、物語は変わってしまう・・・
それだけは嫌だね。
原作ファンとして、原作は原作のままで見たい・・・
それも、俺は特別にその原作の世界に居るのだ。
ならば、フェイトＶＳなのはのあの決闘のシーンとかを生で見る事が出来る・・・！！
あ、流石にプレシアの落っこちるシーンは見れないか・・・

まぁ、もしも物語を変えてしまったのなら、俺が消えればいい話だ。
きっと誰も俺のことを知らないし、必要ともしないだろう・・・

さぁて、まずはどうすっかなー・・・・

よし、まずはもう一度図書館に行って、はやてを見よう。話はそこからだ。

蒼が騒動を起こした神社では、一人の少女と、一匹のフェレットがその場に立っていた

その場には戦った痕跡のような物が残されておらず、何もない、普通の神社だった

「ほんと？ユーノ君？」

「うん・・・昨日、ここでジュエルシードを回収した・・・けど、さっきここに異常なまでの魔力を感じたんだ・・・・」

少女・・・・高町なのはは静かに空を見上げた・・・

ここで、自分以外に魔法を使える者がいた・・・・

「・・・会ってみたいなぁ・・・」

そう呟くと、なのははユーノと呼ばれたフェレットと一緒に階段を下りて行った

神様特権うぜぇ・・・

俺はあの神社から離れて、どこかのんびりできそーな場所を探していた
まぁ、飛行しているんだが、誰も俺に気づいていない・・・

流石に危ないかなぁと思って人気のある場所は通っていないが・・・

だが、飛行中になんか嫌ーな予感がしてきた

ぼすんっ！と俺の背中から変な音がなった

「ん・・・・？」

後ろを見ると、エールストライクのブースター部分から煙が上がっていた

「え！？ちょ、ま・・・・！？」

どんどん出力は落ちて来て、そのまま人気のない場所に着地する事が出来た・・・
危ない危ない・・・

地面に着地すると同時に俺は変身が解除された
まぁ、特に光を放つわけでもなく、そのまま解除され、着ていた服に戻った

「あれー？おっかしいな・・・」

「よーしょーねん。その顔だと「どうして落ちたんだろう？」とか考えてるんじゃねぇかー？」

・・・おっさん、なんでアンタは俺の行く場所に先回りしてんだよ・・・

ストーカーか？ストーカーなのか？

ストーカーが許されるのはヤンデレな女の子って決まってんだよ！

帰れ！！

そして、全国のヤンデレ好きに土下座しろ！！

「・・・お前、今失礼なこと考えただろ？」

「死ねクソ神」

親指を突き立て、そのまま下に向けて下げた

まったく、いきなり説明もなしにバグとやらと戦わせるなっつの・・・

「・・・おい待ておっさん。なんでアンタがこんな所にいんだよ？

結界はどうした？」

「・・・・無理矢理突破しようとしたら跳ね返されたから、とりあえず、肉体だけは送ってきた」

・・・・・神様補正うぜぇ・・・

なんだよそのうぜぇ技・・・・

死ねばいいのに

「あ、そうだしょーねん。言い忘れてる事と、やり忘れていることがあったから、ここに来た」

「・・・・なんだよ？」

とりあえず、睨んでおっさんを見た

ったく、相変わらず嫌ーな顔しやがって・・・・

「まず一つ目・・・・お前はこの世界の住人じゃないのは知ってるよな？」

「当たり前だ。俺はそれを知ってここに来たんだよ」

「なら話が速い。単刀直入に言う。お前、帰れなくなった」

・・・・・・・は？

ナンデスト・・・・・・？

「まぁ、言うことはそれだけで「ちょっと待てェェェェェェ！！！！」・・・なんだよ？」

いきなり何口走ってんだこのクソ神！！！

帰れなくなった！？となると、俺の部屋にある詰みゲー達はどうなるんだ！？

今度の休みに全部やるつもりだったんだぞ！！

それに、録画したＤＶＤとか、ＤＶＤボックスとかどーなるんだよぉおおおお！！！

まだ予約したままで届いてない物とかもあるんだぞ！！！

「死ね！！とにかく死ね！！頼むから死ね！！！俺の家は！？部屋は！？島は！？リク・・・カイリ！！！」

「さらっとネタを挟むな。ついでに混乱しすぎだ。」

ぎゃあああああああ！！！もう何言えばいいか分からねぇ！！正解が見つからねぇよ！！誰でもいい！！このおっさんの顔面を思いっきりぶん殴ってやってくれ！！

「まぁ、アレだ。今は帰れないだけだ。少し落ち着け」

「な、なんだ・・・・良かった・・・」

よ、良かったぁ・・・

これで俺にも明日を生きる事が・・・・

「つっても、体はそのままだから、帰ってもお前は9歳のままだ。」

「そーだと思ったよチクショーーーーーー！！！」

無理だ・・・・

死のう・・・・・

はぁ・・・どうしよ・・・

けいおんの録画予約もしてなければ、欲しかったゲームもまだ買ってないし・・・

あ、今度発売される本も買うんだった・・・・

やべぇ、死にたくなってきた・・・・

つか、やっぱり俺９歳の姿だったのか・・・
まだ親父と母さんが喧嘩してなかった時のか・・・・・

・・・やべ、思い出したらトラウマが・・・

「話を進めるぞー。まぁ、もう一つ。お前にやり残した事があった・・・」

くそっ・・・携帯は部屋に放置したままだし・・・
あー、もう!!こっちくんなおっさん!!!

「あー、じたばたするな。」

「うるせー!!ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ☆」

頭に手を置くな!!そして見下すなこのやろーー!!!
だけど、一瞬俺の中に電撃が走り、俺はじたばたするのをやめて、胸を抑えた・・・

「な、なにしやがった・・・・」

俺が苦しそうに胸を抑えながら、おっさんを睨んだ
おっさんは楽しそうに笑い、言った

「なァに、お前の中の能力を少しばかり弄らせてもらった。お前チ

ート嫌いだろ？だから、枷をつけてやったのさ」

「か、枷だぁ？」

ようやく痛みが引いたので、俺はおっさんを見上げた
おっさんはニタニタ笑いながら俺を見た

「そっ、枷。お前は最初っからクライマックスなんてのは嫌だろ？
だから、お前が経験を積めば、その枷は外れるようになってる・・・
まぁ、Ｌｖ５から始めて、Ｌｖ１６になったら進化するってだけさ。
」

ポケモンで例えるな・・・
なるほど・・・つまり、俺がレベルを上げれば新しい姿を手に入れて、その力を使える・・・
でも、今はストライクしか使えない・・・
なるほど、俺好みの設定じゃねぇか・・・・

「それに、レベルを上げていけばお前の中の魔力も増大するし、一石二鳥ってことさ。」

「・・・つまり、俺は地道にレベルを上げていけばいいんだな？」

・・・簡単に言えば、バグを倒して経験値を貰おう的なことなのか・・・

「でも、最初は滅茶苦茶弱いぞ？最初はストライクしか使えないし、まだお前はインパルスに目覚めてない・・・魔力もランクで言えばＢ－からの始まりだ・・・」

「・・・・ま、関係ないね。ようは、バグを倒せばいいだけだろ？」

「それがなぁ・・・その条件がお前が嫌うような内容でな・・・」

ん？俺が嫌う内容の経験値を上げる術・・・？

どんなのだろ・・・・？

・・・・はっ！？ＭＡ☆ＳＡ☆ＫＡ☆

「お前の想像してる通り、原作を破壊する行動をすれば経験値が結構手に入る・・・お前がさっき倒したバグじゃ、経験値は３くらいしか上がらないってこと」

「ＦＵ☆ＺＡ☆ＫＥ☆ＲＵ☆ＮＡ！！！！」

たはは～って言いながら笑ってごまかしてんじゃねぇ！！！

バグの存在が原作破壊の根源なのに、物語に干渉するほどの物を倒さないと生き残れないだと？

ＦＵ☆ＺＡ☆ＫＥ☆ＴＥ☆ＲＵ

「はっはっは・・・頑張れ若者よ。おっさんは呑気に見物してるわー♪」

「ざけんな！！！」

そう言っておっさんに殴りかかった

すると、おっさんは俺の手を掴んで、俺をそのまま後ろに投げた

「あ、ちなみに、俺と模擬戦しても経験値手に入るから。まぁ、５

くらいだろうけどな。」

「そ、そーかよ・・・・」

背中から地面に叩きつけられたので、背中をさすりながらおっさんを睨んだ

ちくしょう、神様補正うぜぇ・・・

「はっはっは・・・んじゃ、とっとと行くぞ。」

「は？行く宛てもないのにどこ行くっつーんだよ？」

おっさんが俺を背にしてそのまま歩き出した

俺はおっさんに付いて行くように立ち上がり、そのままおっさんの横に並んだ

おっさんに質問すると、おっさんはニタニタ笑いながら言った

「いやー、流石に神でも野宿は嫌だからなー。面倒だから家買っちゃった☆」

「・・・・お前いっぺん死んでくれ。」

このおっさん・・・何気に家まで用意してたのかよ・・・

・・・だが、この時分かった事がある・・・

俺はこのおっさんと一緒に生活をしなければならないようだ・・・

ちっ、死ねばいいのに・・・

ようやく家の立っている場所へと出ると、おっさんは突然口を開いた

「あー、そうだ。お前に説明な。ストライクは、基本能力は弱い。防御にも優れてなければ、攻撃にも特化してない。」

「・・・そのための装備換装能力だろ？」

「まぁな。まぁ、分かる通り・・・エールストライクは中距離、ソードストライクは近距離、ランチャーストライクは長距離戦を得意としてる。」

「エールはバランス、ソードはパワー、ランチャーはスピードって考えればいいのか？」

おっさんの説明はまぁまぁ分かりやすかった。
でも、流石にＳＥＥＤを全話毎日欠かさず見てた俺を舐めるなよ、ある程度能力のことは分かる。
まぁ、ランチャーはどっちかっていうと、ディフェンス向きなんだけどな・・・

「まぁそんな感じだ。それで、一度装備を換装すると、魔力を少量回復してくれる。」

「なるほど・・・で、フェイズシフトはあるのか？」

「いんや。面倒だったからつけてない。ただ、魔力がなくなると、バリアジャケットが解除される」

「なーる・・・理解した」

そんな能力の説明だけの会話を続けていた俺とおっさんは、ある一軒家に到着した・・・
そこは、普通の何も変わらない二階建ての家だった

「ここが俺とお前の住む場所・・・まぁ、名字は適当に“天城”にしといた」

「ふーん・・・」

そう言いながら、俺はおっさんに聞いた

「・・・まさか、俺の名前勝手に変えてないだろうな？」

「勿論。勝手に変えたぜ。」

よし、コイツを火あぶりにして殺そう。
まずは油を買いに行かないとなー・・・・・

「なァに、一文字入って「天城蒼麻（アマギソウマ）」になっただけだ。」

「よし、まずそのふざけた考えをぶち殺してやる・・・」

明らかに最後の文字幻想殺しさんじゃん！
やべっ、カッコいい・・・・
・・・つか、この名前、大絶賛プレイ中だったクソゲーアワードに輝いた作品の主人公の名前じゃね・・・？

「ま、そんなことでよろしくな。そーま」

「・・・・おっさんの名前は？」

「正人。まぁ、てきとーにつけた。」

・・・・このおっさんの名前を呼ぶ事は一生無いだろう・・・

こうして、俺はこの自称神のおっさんとの同居生活を始める事になった・・・

おい！原作だけじゃなくて外伝も見ろよ！！

おっさんと生活を始めて初めての夜ー・・・・・

はぁ、なんで俺はこんなおっさんと一緒に生活しなきゃならんのだ・・・

「ぎゃーーーー！！そーま！閃光玉閃光玉！！無理！！死ぬ！！おっさん死ぬ！！！」

「あー、もう分かったから・・・」

ただ今リビングでおっさんと一緒にモンハンをプレイしているわけですよ・・・

なのにこのおっさん、滅茶苦茶弱ぇ・・・・

つか、ランクが2って、まだ始めたばっかじゃん・・・

「ったく・・・なんで下級のレウスでこんなに手こずってんだよ、おっさん・・・」

「無理！！おっさんの装備まだランポスだから！！まだサザミ装備作りかけだから！！！」

あー、夜だってのにうるせー奴だな・・・

ちなみに、俺のランクは9。

んで、装備はレックスX装備を使ってる。

まぁ、ミラルーツとか、ボレアスとかも頑張れば一人で討伐できる

んだけど、何せ時間がかかるからなぁ・・・

「で、おっさん・・・・よっと・・・」

「なんだそーま!?危な!?火球飛んできた!?」

まったく・・・レウスで何を焦ってるんだか・・・

つか、下級のレウスって速攻でケリつくだろ・・・

仕方ない、手伝ってやるか・・・

「で、今の俺の装備はストライクってことになってるけど、ASTRAYSとかのパックとかは換装できるのか?」

ぱっぱっぱっぱっぱ~♪と討伐が完了した音がした瞬間、おっさんは凄い勢いで飛びあがった

恐らく、初めてレウスを倒したのだろう・・・

「いいいいよっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

「・・・・・・」

「ありがとな!そーま!!!いやー、やっぱ楽しいな!!!」

・・・なんでこんなに重なるんだろう・・・

昔の俺そっくりじゃねぇか・・・

「・・・どーでもいいから。さっさと剥ぎ取るぞ。それと、質問の返事がまだなんだが?」

「まぁまぁ、そーゆーなって!んじゃ、今のうちに質問に答えるぞ

ー！！」

テンション高ぇなオイ・・・

まぁ、その分聞きやすいんだが・・・

「まぁ、アストレイズだっけ？俺、それ見てないからさっぱり分かんないんだわ」

・・・・はぁ？

「で、ストライクノワールとかはプラモ売り場で見た事あるけど、お前には装備できるようにはなってない。おっ、鱗ゲットー♪」

「・・・あんた、アニメだけじゃなくて、外伝も見ろ。すっげぇお勧めッスっから。真面目に面白いから・・・頼むから外伝も見てくれ・・・」

・・・多分、このままじゃＯＯＰとかも見てないな・・・

はぁ・・・・おっ、体液か・・・これは５００円で売れるから売っとこ・・・

「んじゃさー、今度はザザミいこーぜザザミ！！」

「あんたは中学生か・・・・まぁ、まだ時間はあるし、いいぞ。」

時計を見ると、まだ９時を指していた・・・

深夜アニメを見るためにはまだまだ起きていないといけない・・・

まぁ、この年の深夜アニメは一体何がやっていたかが気になって起きてるわけさ・・・

「さっすがそーま！！話がよく分かるぅ♪」

「おっさんがそんな言葉使うな。気持ち悪い・・・ほれ、とっととクエストボードに張っとけ」

「あれ？ネコ飯食わないのか？」

「下級のザザミ相手に一々食いに行くのがめんどくさい・・・」

・・・実はモンハンをやる前は色々と苦労をしていた
おっさんは料理できないから俺が料理をする事になったんだが・・・
俺は普通の高校生だったので、料理は美味いってほどじゃないけど、普通に作れる。
料理本とか買いに行って、料理作って、おっさんに作ったら好評だった・・・
まぁ、毎日俺がご飯を作る事が確定した訳だ・・・

それに、風呂もめちゃくちゃデカくて、こんな風呂あってたまるか！！ってツッコミたくなるほどのでかさだったので、ゆっくり風呂に入ってると、おっさんがなんか入ってきて「裸の付き合いって大事だろー？」って言っていたので、桶を思いっきり顔面に投げてやった

綺麗な音と鼻血を撒き散らしながら倒れて行くおっさんのあの表情は忘れられそうにない・・・
ぷっ・・・思い出しただけで笑いが・・・

「張ったぞー、とっとと行こーぜ。」

「あいよ・・・」

クエスト準備中という文字が出てきている間、俺とおっさんは呑気に話をしていた

「よっし、今回も頼むぜ！！」

「悪いけど、俺は手助けしかしない・・・止めを刺すのはお前な。・・・・それと」

俺は思いついたように付け加えた

「もしも、この世界のバグが全部消えたら、俺の願い・・・一つだけ聞いてくれねぇか？」

「・・・・・・・・」

画面ではすでにクエストが始まっていた

おっさんが、キャラクターを動かすと、おっさんは静かに言った

「考えとく。ま、俺に出来る範囲ならな。」

「・・・分かった」

恐らく、無理かもしれない・・・

でも、俺はそれでもよかった・・・

二次元のキャラクターに、すでに会う事が出来たのだ・・・

俺はもう、死んでもよかった・・・

ちゃんと、そこにその存在があると分かった瞬間から・・・・

こうして、おっさんと俺の一狩り行こうぜ！モンハン大会！はまだ始まったばかりだった・・・

「・・・・・・・・はっ！？」

気がつけば、もう朝になっていた

リビングでずっとモンハンをしていた俺達は、深夜になってもその勢いを止める事が出来ず、そのままずっと狩りを続けていた・・・

おっさんのランクも3になって、今ではシェンガオレンの前だった

俺はソファーで寝ていたので、何も問題は無い・・・
でも、おっさんは隣のソファーで寝ているかと思えば、地面に落っこちて、寝心地が悪いかのように寝返りをうっていた・・・

「・・・仕方のないおっさんだ・・・」

毛布を持って来て、おっさんにかけてやった
・・・今気付けば、俺はこの自称神のおっさんと一日を過ごしたのか・・・
神は嫌いだ・・・理由は、どんなに強く願っても、願いを聞き入れてくれなかったから・・・
涙を流しながら、親父たちの離婚を止めさせてくれと願ったのに、叶えてくれなかった・・・
それに、中学生の時も、どんなに願っても、願いが叶う事は無かった・・・
中学3年の頃・・・俺はもう神に祈ることはやめた・・・
いや、存在を否定し始めたのだ・・・
その日以来、宗教団体も嫌いになったりした・・・
神は信じる者を救うと言う、名の下で活動している人達に、勝手な偏見を持ち始めたのだ・・・
今もそう・・・嫌いなのだ・・・
何もかも・・・・

「・・・・・・はぁ」

ため息を一つつくと、俺はそのままキッチンへと向かった
このおっさん、もうすぐ起きそうだし、飯でも作ってやらないと、後でうるさくなる・・・

朝は普通にご飯とみそ汁と漬け物でいいだろう・・・

「・・・・・・・」

後ろを振り向き、寝ているおっさんを見た

気持ちよさそうに眠ってやがる・・・

「・・・はぁ・・・」

神も人のように寝て、人のように笑って、人のように喜ぶのか・・・

そんなことを考えながら、みそ汁を作り始めた・・・・

どんなに願っても、どんなに祈ろうとも、現実という壁はそこに立ちはだかる・・・

俺のように、歪んだ人間も生まれる・・・

俺は、勝手な偏見と価値観で全てを見ようとしている・・・

それはどうでもいい・・・・

でも・・・・・

俺の大切な人達は、こんな俺を見て、どう思うのだろうか・・・・？

リビングに置いてある俺のバックを見つめた・・・

中のＤＳに居る、とても大切な人・・・

彼女達は、俺を見てどう思うのだろうか・・・・

でも・・・・俺は・・・・

見つかる事のない答えを永遠に追い続けるのかもしれない・・・

でも、もしも、この世界でバグを駆除することができて、一つだけ願いがかなうなら・・・

彼女達に会って見たい・・・
会って、本当に話をしてみたい・・・
会って・・・・一緒に色々なことがしたい・・・
それが、許されない事でも・・・・

俺は、彼女達に会いたかった・・・・

魔法少女リリカルなのは　神に違和感を覚える俺～転生とか死ぬほどどーでもいい～

始まります・・・・

って、特にこれに不快意味はないからな！！
なんとなく言いたくなっただけだ！！！

一章　ようやく始まりじゃん・・・

今日は、記念すべき日になるかもしれない。

俺とおっさんは今、ある場所に来ていた・・・
無印の5話に登場する鳴海温泉・・・・
そこに俺達はいた

「いよーっし。んじゃそーま。今日のプランの説明な。」

「待てゴルァ。話の前になんで俺がお前と家族設定でこの旅館に泊らなきゃならねーんじゃこの野郎・・・！！」

とりあえず、ぽきぽきと殴る準備をしている俺に、おっさんは慌てて言った

「ま、待てや・・・仕方ないだろ？バグが現れるのは原作を破壊するため・・・なら、原作のシナリオに介入するはずだろ？」

「・・・確かに・・・」

そのバグが一体なんのために活動しているかは、おっさん達でも分からないらしい
でも、分かる事はあるらしい。
バグは、他の世界でも発見されているらしい。
でも、その世界の住人では倒すことは出来ない・・・いわゆる、原作破壊のために生み出された存在・・・
で、俺のような奴らを連れ出して、そのバグを駆除して回っている

らしい
被害はそこまで大きくないらしい・・・
「でもさぁ・・・・・」
“旅館山の宿”と書かれた宿の前で、立ち往生している俺は、なんだか落ち着きが無かった
だってさ、いきなり原作キャラとご対面なんてしたくないじゃん・・・
前は心の準備が出来てなくて、涙をぽろぽろ流したけどさ・・・
流石に緊張するんだよ・・・
「おっ、早速ご到着のようだぜ？」
「っ！？」
後ろを振り返ると、こちらに向かってくる車が二台・・・
運転しているのは、高町なのはの父親、高町士郎が運転していた
俺はそれを見た瞬間、おっさんに飛びかかって襟を思いっきり掴んで中に入った
「お、おい！！何すんだお前！？」
「うるさい黙れ！！入ってチェックインでも、なんでもしろこの野郎！！！」
おっさん若干キレ気味で言うと、門の方で降りてくる二人の少女に目が行った
月村すずかと、アリサ・バニングス・・・やばい！ホントに会えた！！

嬉しい！！いや、マジで！！！

はっ！？いかんいかん・・・

原作ブレイクはしないんだった・・・・

ここはおっさん引っ張って部屋に行くのが得策！！

「おっさん！！部屋どこだ！？」

「えぇっと・・・星の間ってトコだけど・・・」

「先行ってるッ！！」

「あ、おい！！！」

おっさんの言葉を無視して、俺は星の間と言う場所に向かい全力でダッシュした

後ろで釘宮ボイスが聞こえた時に振り返ろうと思ったのだが、全力でスルーした

「うぉおおおおおおお！！星の間どこだァァァァ！！！」

廊下で全力で走っている俺は、星の間を必死に探していた

だが、どこをどう探しても星の間は無かった！！

どこだちくしょう！！！！

「やべぇよ！マジやべぇ！！パネェパネェパネェパネェパネェパネェ！！

マジパネェ！！どんだけパネェかっていうと、マジパネェ！！！」

もう混乱してきて何が言いたいのかさっぱりだァァァァ！！

とにかく、落ち着け！ＣＯＯＬになるんだ！！
そうだ！！今は昔、はるか昔の世にもＣＯＯＬになって事件を解決した人がいるはずだ！！

「うおぉ！？」

突然前に人が現れたので、慌ててブレーキをかけたんだけど、まずい！！このままじゃぶつかる！！
よし、最終手段だ！！！

「うぉりゃぁぁぁぁ！！！」

このままぶつかるくらいなら、横に跳んで回避してやるァ！！！
ブレーキをかけていた両足を横にずらして、そのまま横に跳んだ！！
・・・・あれ？おかしいぞ？なんか、俺、水ん中に飛び込みそうなんだけど！？

ざっぱーーーーん！！と、水しぶきが上がった瞬間、俺は小さな小池の底に頭をぶつけていた
って、酸素酸素！！マジで酸素欲しい！！ＨＥＬＰ！！！助けてえーりん！！！

「ぶっはぁ！！！げっほげっほ・・・ぼっほ・・・ごっほ！！」

鼻痛ぇー・・・・水思いっきり入ったから、めっちゃツーンってなってる・・・
あー、もう最悪・・・俺の服ずぶぬれじゃねぇーか・・・

「大丈夫か？」

「・・・・・・え？」

あれ？おかしいな？緑川ボイスが後ろから聞こえるぞ・・・？
カタカタとロボットのように後ろを振り向くと、そこには、高町なのはの兄・・・
高町恭也さんがそこにいた・・・

「あ、いえ・・・あの・・・・」

「ほら、動くな。」

そう言って、俺を小池から引っ張り出してくれた・・・
やべぇ、カッコいい・・・

「ずぶ濡れじゃないか・・・君、名前は？」

「あ、天城蒼痲です・・・」

・・・・・・すげぇ、イケメンだ。
この顔で超強い剣士だっけ？
うわー、とらハの主人公・・・・

「俺は高町恭也。・・・今から温泉に行くつもりなんだけど、君もどうだ？」

「え！？いや、俺・・・星の間ってトコ探してて・・・」

「そんなずぶ濡れじゃ廊下も濡れちゃうだろ？絞るから、服脱いでくれ」

・・・・何この展開？
いや、素で嬉しいんだよ。
でもさ、原作ブレイクしに来たわけじゃないから、できれば関わりたくなかったんだけど・・・

「ふんっ！！！」

服を脱いで渡すと、恭也さんは絞ってくれた
いやー、親切な人だ・・・・

「ほら、下も」

「え！？いや、下は自分でできるんでいいです！！」

無理！！流石に自分の失態を他人に押し付けるような事は俺には出来ない！！！
そう言って、俺はズボンを脱いで自分で絞った
だけど、恭也さんは絞ったズボンを触ると、手に取り、もう一度絞った
うわっ、まだ出るよ・・・

「ほら、まだ絞りきれてないじゃないか」

「・・・・・・・・」

なんだこのイケメン・・・・
惚れてまうやろーーーーーー！！！

うわっ、主人公すげぇ・・・・・

「今から温泉行くんだけど、蒼痲もどうだ？」

「え！？いや・・・・・」

なんだこの状況・・・・

断れねぇじゃねぇか！！！

「ご、御一緒させていただきます・・・・」

ちくしょーーーー！！何言ってんだ俺！！！

このままだと別のフラグが立つ！！

恭也さんと士郎さんと一緒に入るフラグがァァァァァ！！！

「いやー、良い温泉だなー。なー、蒼痲君。」

「あ・・・・はい。」

結局、フラグは成立しちゃったわけですよ・・・

今、士郎さんと恭也さんとおっさんで温泉に入ってるんだよ・・・

「・・・・おっさん。どうしているんだよ？」

「おいおい息子よー？皆の前でおっさんは酷いんじゃないのー？お父さん泣いちゃうよー？」

コイツッ！！！ニタニタ笑いやがって！！！

さり気なく士郎さんと仲良くしてるんじゃねぇよ！！！

「・・・・・どうしてこうなった・・・・」

温泉に体を沈めながらそう呟いた・・・

おっさんめ・・・！！部屋に帰ってモンハンし始めたら絶対ボウガンで剥ぎ取りの邪魔してやる！！！

夜になり、俺とおっさんは呑気にモンハンを楽しんでいた

勿論、おっさんに憂さ晴らしでシェンガオレンとか、ティガレックスとかの剥ぎ取りは一回もさせてないけどな！！

「おいそーま！頼むからもうやめて！！貴重な装備が作れなくなる！！」

「黙れこの野郎！！俺の誓いを早速ぶっ壊しやがって！！てめぇだけはぜってぇ許さねぇ！！」

ＰＳＰをしまって、おっさんに跳びかかった
はたから見れば、息子と父親がじゃれあっているようにしか見えないが、俺はこのおっさんを１０発殴らねぇと気が済まねぇんだ！！

「きゅっきゅっ」

ん？後ろでなんか鳴き声が・・・
おっさんから下りて、襖を開けると、そこには・・・・

フェレット・・・・
つまり、淫獣ユーノがそこにいたわけですよ・・・
・・・そういえば今日、このアホは女湯に入ったんだよな・・・
なんと羨まし・・・げふんげふん！なんとけしからん事を・・・・！！
現実の女性にはまったく興味はないが、二次元の女性の体をフェレットに化けて見ていたなんて、ふざけたことしやがって！！

「あれー？ユーノくーん？どこー？」

・・・やべぇ！！
魔王さまの声が聞こえるヨ！？
どうしたらいい！？なァ、どうしたらいいんだ！？
えぇっと・・・よし、フェレットを大人しく返そう！！！

「・・・お前、ご主人様が呼んでるんじゃないのか？」

「きゅっ・・・・」

静かに俺を見つめるユーノ・・・

あー、恐らく俺の中の魔力でも計測してるんじゃねぇのか？

スカウターなのかその目は？

とりあえず、抱きあげて、声のする方に連れて行ってやった

「あ、ユーノ君！！」

・・・・まただ・・・

この前、俺ははやてに会う事が出来た・・・

しかし、実際に話をしたわけではない・・・・

ただ、目にする事ができただけ・・・

ただそれだけなのに、涙が出てきた・・・

「ありがとう！ユーノ君、勝手に人の所行っちゃ駄目だよ？」

「きゅーっ・・・」

ユーノは反省しているかのように頭を下げた・・・

「ありがとう。えっと・・・君、名前は？」

「あ、天城蒼痲・・・・」

俺は、次元の壁を越えて、彼女と話をしている・・・

その事だけで、俺の感情はいっぱいだった・・・・
心の中が何かで満たされていくような感じがした・・・・

「蒼痲君って言うんだ。私、高町なのは。お兄ちゃんとお父さんから、聞いてるよ♪池に突っ込んだんだって？」

くすくすと笑っている彼女は、天使のように思えた
でも、この笑顔がじきに魔王と呼ばれるような存在だとは到底思えなかった・・・
気がつけば、俺の目には涙が溜まっていた

「ど、どうしたの！？」

「いや・・・気にしないで・・・ちょっと、感動してるだけだから・・・」

涙をぬぐいながら言った
嬉しい・・・・でも、この後、彼女はフェイトとジュエルシードを賭けて戦うのだ・・・
ならば、少しでも休ませてあげるべきだろう・・・・

「か、感動・・・・？」

「うん・・・・んじゃ、俺はこれで・・・・」

そう言って立ち去ろうとした時だった
おっさんが部屋から出て、俺を見ていた

「おっ、なんだそーま？友達か？」

「違う・・・まだ会ったばかりだ。」

おっさんめ・・・

まさか、まだ俺に原作ブレイクをさせようというのか・・・・！！

（おいおっさん！！俺はもう原作ブレイクはこりごりだぞ！！）

念波を送っておっさんに話しかけた

ユーノ達には盗聴できていないようだ・・・

神様特権もたまには役立つじゃねぇか・・・・

（何言ってんだ？バグが発生した時点で、原作はもう崩壊してる・・・）

（はぁッ！？）

心の中で驚く俺に、おっさんは事実を言った

（原作の破壊されたこの物語の未来・・・それはもう決まっている。）

（・・・・どんな未来なんだ？）

（・・・高町なのはとフェイト・テスタロッサが死ぬ。）

聞かされたのは、原作がすでに崩壊していることと、このままでは俺の目の前にいるなのはと、フェイトが死ぬと言う宣告を受けたのだ・・・

（・・・・・俺にどうしろと？）

（だから言ったろ？バグを駆除しろって。まぁ、原作破壊が嫌ならそれでもよし。でも、その代わり人が死ぬ事を覚悟しろよ？）

原作は、原作のままだから良い・・・その考えは捨てろと言われたのだ

だが、原作を破壊しなければ目の前にいる彼女は・・・・

・・・このおっさんと関わって、俺は運命の選択ばかりを迫られているような気がする・・・

「そーま、まだ寝る時間にゃ早いから遊びに行って来いよ。俺はどっか行ってるから。んじゃなー」

手をひらひら動かしながら、おっさんは去って行った

残された俺となのはは、ただその場で沈黙を保っていた・・・

「あ、あのさ・・・・」

なのはがこちらを見て話しかけてきた

こうなったら、覚悟を決めるしかない・・・

バグのせいで未来が・・・原作が変わってしまうのなら、そうならないように俺がなんとかするしかない・・・

「卓球しない？私の他にも、友達が来てるんだ。蒼痲君がいいならいいけど・・・」

「・・・・・行く。」

ならば、俺は原作を保ちつつ、破壊をしようとするバグと戦う・・・

そう言う答えに行きついた・・・
原作を

仕方ない・・・俺はもう選んでしまった・・・
ならば、選んでしまったこの道を貫くとしよう・・・

二章　我慢しないと・・・

俺は、なのはと一緒に卓球場に向かって歩いていた
ユーノはなのはの横に歩いていた
ちょこちょこ歩いているユーノに愛嬌が沸いたが、これが女湯に拉致られて、小学三年生の素肌等を覗いたと言うのには納得いかない・・・

つか、今すぐにでも踏み潰したくなってきた
あー、流石に俺から原作破壊をするような真似はしたくねぇな・・・
・・・事故を装って殺るなら問題ないか・・・

「アリサちゃーん！すずかちゃーん！！」

「あ、なのは！！あれ？そっちの子は？」

卓球場に着くと、卓球をして遊んでいたアリサとすずかを見つけた
勿論、子供用の卓球台が設置されていた
なのはがこちらに向かってくるのが分かった途端、二人は卓球を中断し、こちらに向かってきた

「あ、天城蒼痲・・・よろしく」

ぎこちなく自己紹介をした
いくら子供の姿でも、女性は女性・・・俺は、女性は嫌いな部類に

入る・・・
まぁ、トラウマに残るようなことしかされてないからなんだけど・・・

「蒼痲って言うんだ。私はアリサ・バニングス！よろしくね！！」

あらやだ、この歳でくぎゅうううううう！！って大声で叫びたくなってきた・・・
すげぇよ、今にも死にそうだよ・・・・・
この声なら罵られてもいいかも・・・・はっ！？何を考えてるんだ俺は・・・

「私は月村すずか。よろしくね」

すずかもすずかで可愛い・・・
やべぇ、二次元すげぇ・・・・
今にも涙があふれそうだ・・・・！！

「蒼痲君、どうしたの？なんだか嬉しそうだけど・・・」

「あ、いや・・・なんでもないヨ・・・？」

まずい・・・片言になりかけてる・・・
つか、緊張してる・・・

「なんかハッキリしないわね・・・」

「し、仕方ないだろ・・・これが標準装備なんだから・・・」

「標準装備・・・？」

し、しまった！！
友達と話す口調で言っちまった！！
まずい！！このままじゃ偏見持たれる！！！
俺も持ってるけど！！！

「いや、気にしないで！！よくＲＰＧとかやるんだ！！うん！！！」
銀さんっぽいノリで言ってみたけど、なんかアリサは俺のこと冷ややかな目で見てくるんだけど！？
やべぇよ！！原作破壊するしかないって言われたけど、こんな破壊、俺は認めないぞ！！

「賑やかだな、そーま」

おっさん！！どっか行ったと思ったら卓球場に居たんかいィィィィ！！！
殴る！！あんな宣告しといて、呑気に卓球しに来てやがったのか！！！

「死ねクソ親父ィィィィィ！！！！！」

「ぬぉう！？」

飛びかかって思いっきり顔面に一発ぶん殴ってやった
俺のとった行動に、口を空けて唖然としているなのは達・・・
俺は悪くねぇ！！悪いのはこのふざけたおっさんだ！！！
人が結構真面目に考えて、原作破壊の道を選んだのに、コイツは卓球してやがったんだ！！

殴る権利位ある筈だ！！！

「いでででで！！そーま！！痛い痛い痛い！！ごめんなさい！！いや、マジで！！すんませんでしたァァァ！！」

「謝って許すかァァァァ！！！」

おっさんが倒れたのを見計らって、馬乗りになって、おっさんの頭を抑えて
思いっきりパチギを決めてやった
こう見えて、石頭なんで、痛みは全然ないんだぜ！！！

「正人さん大丈夫ですか！？」

士郎さん、なんでアンタがここに居るんだよ！！！
なんで！？俺が真面目に考えてる時にこのおっさんは原作キャラと仲良くやってんだよ！
くそぅ！！こうなったら、俺も何かしら行動起こしてやるこの野郎！！！

「あ、あの蒼痲君？」

「・・・あ、はい。なんでしょう？」

なんで同じ年なのに敬語使ってるんだろ俺・・・

「一応、それお父さんなんだよね・・・？」

「なのは、これをそれなんて高い目で見ちゃ駄目だ・・・これは父

親になってはならない人種でな・・・息子が絶対に苦労するから。
お母さん逃げ出すから。だから、こんなおっさんみたいな人と結婚しちゃ駄目だぞ？」

少なくとも、俺はこのおっさんの息子という設定・・・
だけど、母親と呼べる人物は居ない・・・
ならば、逃げだしたと言う設定・・・は、やめよう。
なんか、リアリティがないし・・・・・
よし、エロゲとか、ギャルゲでよくあるパターンの、両親は居ない設定でいこう
そっちのが楽そうだし。
・・・つか、そっちのがリアリティ無ぇや・・・

「まぁ、コレはほっといて卓球しようぜ卓球。」

「お、お父さんをコレ呼ばわりは酷い・・・」

そう言い残して、おっさんはばたんっと倒れた
ようやく悪は消え去った・・・・
これで、俺に平穏な生活が・・・・
・・・訪れねぇや・・・

「それじゃ、誰と誰が勝負する？」

すずかが話を進行してくれていた
うん。すずかはきっといいお嫁さんになるな。俺は保障する。
おっさんを放置して、俺達は卓球を始めた・・・・

いやー、よかったよかった。
3人と仲良くなれたし、何より、魔王様はまだご乱心になってないし。

・・・・時計は、もうすぐ9時を指そうとしていた
俺は、旅館から飛び出して、バグの現れそうな場所に居た

おっさんが枷をつけた時、俺にバグ専用のセンサーを装備してくれたので、どこに現れるか大体分かるようになってきた

「・・・・・・・・・・」

もうすぐ、フェイトとなのはがジュエルシードを巡って戦う・・・
だが、その前に、バグを駆除しないと、特等席でその戦いを見る事は出来ない・・・
俺は、静かにバグが現れると思われる地点で立っていた・・・

・・・だが、まだ時間はある・・・
流石に、無駄な時間は過ごしたく無いので、近くにあった木にパンチを繰り出していた
立ち木打ち・・・これは、立派な訓練方法だ。

こちらの世界に来る前、俺は色々な武術をやっていた
というか、親父が稽古で教えてくれたのだ

親父はそこそこ名の知れた格闘家だったらしい。
剣道も、空手も、柔道も、あらゆる分野ででも活躍していたらしい。
だが、母さんとの結婚を境に、そういうのは全部やめたらしい。
・・・だからといって、子供の頃から剣道とかを教えるのはやめて欲しい・・・
強い子に育てたいからって、いきなり立ち木打ちのやり方なんて教えるか普通？
他にも素振りとか、投げ技とか、受け身とかのやり方とか・・・
現代っ子の俺にとっては地獄のような日々だったけど、滅茶苦茶楽しかった

訓練が終われば、母さんの差し入れを食べたり、親父の武勇伝を聞かされたっけ・・・
どうせ嘘だろうと聞き流している自分の姿が見えた・・・

確か、じいちゃんも拳法家だったらしい
じいちゃんの家に行くと、三人で素振りの練習もしたような気がする・・・

「・・はっ！！・・・せいっ！！！」

高校に進級してから、まったくと言っていいほど訓練はしてなかったむしろ、パソコンを開いたり、アニメを見たりと、色々としていたために体がなまってしまっていた
だが、今は子供の姿・・・
あの頃を振り返るのも悪くないかもしれない

「はぁぁぁぁぁッ！！！」

立ち木打ちだけでは飽きたので、木に向かって上段蹴りや、親父から教えて貰った技の復習をしていた
流石に、体が未発達な分、体に対するダメージや痛みが半端ではない・・・
だが、このような地道な努力がいずれ実を結ぶのだ。
チートで力を与えられた奴らには絶対に分からないことだった・・・

「・・・・・そろそろだな。」

自動販売機で買ったペットボトルの蓋を閉じて、静かに立ちあがった
先ほどから体を動かしたくて仕方がない
どうやら、俺にも親父とじいちゃんの血が流れているように、まだ見ぬ相手と戦う前には、血が滾るらしい・・・

突然、木陰のからボコボコと何か音がすると、バグがそこから噴き出すように出て来た
・・・どうやら、影から出てくる習性があるらしい

「・・・・・・・・・よぉ」

今回は、変身しないで、自分の能力だけでどこまで行けるかを測る訓練・・・
バグは何体も現れて、人の形を作り出し、俺に襲いかかっていた

「ふっ!!シッ!!!」

まずはボクシングのジャブのようにパンチを繰り出す
顎や、鳩尾を狙った攻撃は効果的で、何発か打ち込めば消滅していった

「ウルァァァァ！！！」

上段蹴りで頭を狙い、確実に仕留める・・・
消滅する前に、まるで悲鳴のような声を上げて消滅するバグ・・・
だが、同情などはしない・・・

先にしかけてきたのはあちらだ・・・
ならば、同情などの感情は無用・・・・
挑まれた戦いは全力で受けて立つ・・・・
親父の武士道（ルール）が、いつの間にか俺の誓いの中に混じっていたらしい
忌み嫌っている親父でも、受け継がれたものは少なからずあった・・・

「シッ！！はぁッ！！！」

バグを倒しているにも関わらず、まったく減る気配がない・・・
いや、むしろ増えていた

「仕方ねぇな・・・・」

そういい、我流で生み出したファイティングポーズを解いた
今度は、目を瞑り、言った

「変身！！！」

流石に、夜にあんな恥ずかしい台詞を大声で叫ぶ訳にもいかず、自分なりに考えて、もっとも楽な変身方法・・・

昭和ライダーみたいにポーズはとったりしない・・・

ただ、握った拳をクロスさせ、後ろに引き、叫んだだけ・・・

しかし、能力は反応してくれた・・・

体を包み込むバリアジャケットは、白をメインとした物・・・

そして、体の所々に青や赤の色が現れる・・・

そして、背中にエールストライクのブースターが装着される・・・

俺は、エールストライクフォームとなった

そして、あの時初めて言った決め台詞を言った

「さぁ、お前の罪を数えろ!!」

この決め台詞と共に、エールに付属していたビームサーベルを手に取り、構えた

これも魔力で形成されているので、あまり長くは使えない・・・

「っしゃあ!!行くぜ行くぜ行くぜぇ!!!」

どこかの赤鬼のような台詞を言って、バグに斬りかかって行った

左手のビームライフルでバグを駆除しつつ、我流で生み出した自分の剣術で敵をねじ伏せていく・・・

だが、流石に数が多い・・・

「装備換装!!!」

今度はソードストライクフォームになり、先ほどまで持っていたビームライフルが消え、右手に大きな剣が握られ、肩にはブーメランを付属した装備が装備された

ソードストライクフォームになった時の決め台詞も考えていた
剣と言ったら、俺の中ではこれしか思い浮かばなかった

「最初に言っておく!!俺はかーなーり強い!!」

夏の大三角をモチーフにしたライダーを真っ先に思い浮かべたのだ
剣の長さは違うけど、思いっきり振るい、風圧で向かっていたバグを吹き飛ばす
何体ものバグを消滅させた風圧は、木を切り裂いたり、落ちようとしていた木の葉を切り裂いていた

よく見れば、先ほどまでバグが出てきたあの場所からバグは出てきていなかった
残ったバグは、俺を倒そうと、こちらへ向かってきていた

「来いよ!俺が消してやるっ!!!」

そういい、大剣を振るった
向かってきたバグを切り裂き、真っ二つにした
言っている事は完璧に中二病患者の台詞ばかりだった・・・
しかし、自分の中の士気を上げるにはこういうセリフが一番いいようだ・・・

「・・・・・・・・」

辺りを見回しても、バグはもう居なかった
ほっと一息吐くと、後ろに人の気配を感じた
ばっと振り返ると、そこには・・・

「そ、蒼痲くん・・・・・？」

「・・・・うっそーん・・・・・」

魔王様が立っていました・・・・
淫獣もセットで・・・・・

三章　なんだよ、原作破壊しなくてもいいんじゃん・・・

「蒼痲君・・・・まさか・・・魔法使い・・・・？」

「・・・・・・」

あー、なんて説明したらいいんだろ・・・
俺、デバイス持ってないし・・・
確かに魔力使ってるから魔法使いって言えるけど、なんつーんだろーな・・・

アレだ。ベルギーのワッフルにリエージュとブリュッセルの違いがある感覚だ・・・
簡単に言うと、某バカテスの秀吉と優子の違いだ。

「あー、一応魔法使い（仮）だな。」

「（仮）って・・・・」

まぁ、俺が自分がどーゆー存在なのか分からない通り、俺が魔法使いかどうかなんてわからないってことさ。

「あー、なんつーか、アレだ。ただの魔法使い（仮）だ。」

「まさか、君が本当に魔法使いだったなんて・・・」

おー、淫獣。
いきなり話しかけんな。驚くだろうが
まぁ、実は人間ってオチは分かってるから、お前は黙ってろ。

「うぉーぅ、ユーノだっけ？お前喋れんだ・・・すげぇなオイ。」
とりあえず驚いたフリをした
いや、流石に変な事思われちゃ嫌だしね。
「あんまり驚いてないんだね・・・」
「まーな。こーゆーのにゃ慣れてる。」
嘘だけどね。

「それより！ジュエルシードって知ってる？」
ジュエルシード・・・
確か、ロストロギアだっけ？
興味ないし、集める趣味は無いしなー・・・
「はぁ？なんぞそれ？俺最近魔法少年（笑）になったんだぜ？」
まぁ、言ってる事は正しいんだけどね。
魔法少年（笑）はデフォだ。
もしも題名つけるとしたら「魔法少年マジかよ蒼痲」だな
マジ笑えるｗｗｗ「リリカル」でも「マジカル」でもなくて「マジかよ」だしなｗ
「魔法少年って・・・君、デバイスは？」
「デバイスー？何言ってんだ？そんなもん、必要ねぇよ。魔法って、

一々道具に頼らなきゃ変身できないような物なのか？」

「まさか、デバイス無しで変身してるの！？」

「まぁな。デバイスがなんか知らないけど、その通りだな。」

まぁ、魔法の呪文なんてものは必要もないし、なんか、そっちのが楽そうだし

「そんな・・・どうやって・・・・」

「あーもー！めんどくせぇな！！とにかく！一応魔法使いなんだよ！！分かったかフェレットもどき！！」

まったく・・・一々うるさいなぁ・・・

だからお前は淫獣とか呼ばれるんだよ・・・

「も、もどき！？」

「どーでもいいんだよ！まぁいいや。俺やることやったし、俺帰るわ。」

「あ、ちょ、ちょっと待って！！」

・・・やべぇよ、魔王様に引きとめられちまったよ・・・

怖ぇよ。いやマジで・・・

「な、何？」

「え、えぇっと・・・蒼痲君、最近魔法始めたんだよね？」

「まーな。」

「じゃ、じゃあさ！！蒼痲君は、何と戦ってたの？」

・・・何って、バグだけど・・・

あー、そっか。一々バグって言うのも面倒だしなぁ・・・

よし、そろそろ名称つけとくか・・・

面倒だし、アレでいいや。

「あれはアレだ。闇の存在。人の負の念が集まった存在だ。」

まぁ、完璧に適当に考えたんだけどな。

いやー、やっぱ真っ黒で人型の形だからハートレスとか、アンヴァースとかでも良かったんだけど、闇の存在ってだけでいいだろう。

『おいそーまー。バグについて分かったことあったぞー』

『おいおっさん。なんで今になって念波送ってくんだよ。なんだ？今魔王様とご対面してるんだよ。淫獣もセットでな』

『まぁ聞けって。ようやくバグについて分かったんだよ。アレは人の負の感情が、集まった存在だ。簡単に言えば闇の存在って奴だ』

ウゾダドンドコドーーーーン！！！

ナズェダァ！！ナズェダァ！！！

オデノココロハボドボドダ！！！

はい、すいません・・・
オンドゥルってました・・・
いや、なんで俺の思った事が的中したの？
何？俺に考えた事が実現する能力でも備わってるとでもいうのか？

『えー？マジ？』

『あぁ。まぁ、どういった経緯で生まれたかは知らねぇけど、あいつ等が人の負の感情から生み出されたのは確かだ。』

なんだよ・・・魔王に闇の存在って、どこのＲＰＧですか？
つか、そんな小学生がやるようなゲームみたいな内容なんかい・・・
なんか、それに救世主（笑）として送り込まれた俺が恥ずかしいわ・・・

そんなことを考えてる時だった
突然、青い光が空に向かって放たれた
あー、ジュエルシードが封印されたんだな。
しかし、フェイトとアルフ早ぇな・・・
俺が呑気に訓練とか闇の存在（笑）と戦ってる時にゃぁもうジュエルシード見つけてたのか・・・
ま、俺はどーでもいいけど。

「あ、あれは・・・！！」

「・・・なんだかよく分からねぇけど・・・んじゃなー」

さり気なーく逃げる俺。
だって、アレだよ？魔王様とガチで戦って勝てるって思えないんだもん。

ガチで勝てるモノつったら、遊戯王くらいだな

まぁ、飛んで逃げたわけですよ。
でも、向かってる場所は実は旅館じゃなくて、フェイトんトコなんだけどな

こっそり遠回りしてるわけさ。

向かっている方から狼の遠吠えが聞こえた
恐らく、アルフがなのはに襲いかかろうとしている時だ
おっ、ようやく肉眼で見えた・・・

あーぁ・・・転移魔法で淫獣と一緒にどっか行っちまったよ・・・
ま、いっか。
俺は二人の戦いをのんびり見学させてもらうさ。

『話し合うだけじゃ・・・言葉だけじゃきっと何も変わらない・・・
伝わらない！！』

おぉ！！始まった始まった
さぁて、俺はこの戦闘を目に焼き付けとかなくちゃな。
つーか、９歳の子供がよくそんな大人びたこと言えるな・・・

・・・言葉だけじゃきっと何も変わらない・・・か・・・

確かにそうだな。現に、俺の親父が言葉で母さんを変えようとしたけど、結局は無理だったしな・・・
でも、話し合いは必要だと思うな・・・
あーぁ、アホらしい・・・なんで戦うんだろうな・・・

あ、勝負ついた

『レイジングハート！？何を・・・』

『きっと・・・主人思いのいい子なんだ』

あ、ジュエルシード回収された・・・
しっかしすげぇなオイ
速いし、ありゃ負けて当然かねぇ・・・・
・・・俺がやりあってもどーせ負けるし
ま、とりあえず拍手でも送ってやるか

「お疲れさーん」

「そ、蒼痲君！？」

「・・・・帰ろう、アルフ」

あ、帰ろうとしてるし・・・
サバサバしてるなー・・・あ、こっち見た・・・
やっべ、可愛い・・・！！

「・・・・君もジュエルシードを集めてるの？」

「いんや。そんなもんどーでもいい。第一、そんな宝石っぽいもん見つけたらどっかに売り飛ばしてるよ。２０００円くらいで。」

まぁ、それぐらいでいいだろう。

第一、ロストロギアだろーがなんだろーが、俺がなんでそんな危険な物を集めにゃならんのだ・・・
アホらしい・・・

「・・・そう。でも、邪魔するようであれば・・・」

「俺はそんなきらきらしたもんを集める趣味は無ぇよ。行くんならとっとと行きな。」

そう言う否や、フェイトはどこかへ行ってしまった
いやー、やっぱ凄ぇな・・・・

さぁて、この後どーすっかな・・・
落ち込んでる魔王様と、その横で俺に敵意むき出しの淫獣・・・
あーぁ、めんどくせぇ・・・

「ま、よく頑張ったな。俺も魔法について知ったのはつい最近だけど、お前、すげぇな。」

「え・・・？」

「最後まで話し合おうとしてたじゃん。戦いに関しちゃ素人だけど、そこまで自分の道を貫こうとする奴は初めて見た」

実際、俺は前の世界で、空手とかの大会に出たりしてるし
初めての戦いは恐怖しかなかったな・・・
でも、自分よりも強い相手と出会った時、自分の全力で倒せるかどうか分からない相手と出会った時、めちゃくちゃ怖いけど、勝ちたいって気持ちが一番になったっけな・・・

戦いの前に話し合いで解決する奴は、大抵偽善者として扱われる・・・

でも、俺はそーゆーのは嫌いじゃない。

「ま、ゆっくり体休めるんだな。俺は帰っておっさんを締め上げるって使命があるから。」

「あ、ま、待って！！！」

「また会おうぜー」

そう言い残して、俺も去って行った

いやー、アニメで見るよりリアルだったなー・・・

やっべ、今度はクロノが止めに来るけど、でっかいあの木の化け物と戦うんだっけ・・・

よっしゃ！楽しみだなー・・・

「おーうそーま。どうだった？」

「ようおっさん。それなりに楽しめたぜ。なんだよ、原作ブレイクしなくてもストーリー通り進むじゃん」

布団に入って眠ろうとしていたおっさんがいきなり話しかけてきた

まぁ、楽しかったっちゃ楽しかったな。

「それは、その世界が決める事だ。俺達神でも決める事はできない」

「は？どーゆーことだ？」

「話してなかったか？俺達神でも、世界の意志には逆らえないのさ。」

なんだ、神って意外と地位低いんだな・・・

そんなことを話しながら、俺とおっさんは眠りについた・・・・

四章　色々と疲れたんだＺＥ☆

あの後、俺達は眠った

流石に、戦った後だったので、ぐっすり寝れた

まぁ、俺は全然戦ってないけどな・・・

「ふぁぁぁ～～～」

俺の目覚めは、滅茶苦茶最悪な物だ・・・

なぜなら低血圧だから、起きた時は滅茶苦茶不機嫌なのだ

「・・・・・（眠ィ・・・・）」

「くか～・・・・・」

隣で呑気に寝ているおっさんを殴りたくなった

俺は今も眠いのに、呑気に寝やがって・・・

・・・・思えば、昨日は色々あったなぁ・・・

魔王様と出会ったり、金髪美少女に出会ったり・・・

まぁ、現実（リアル）に恋の出来ないが一々可愛いとか思えるのはこういう世界だけなのかもしれないな・・・

といっても、俺は告白なんてものを一度もされたことないんだけどな・・・

・・・まぁ、一度くらい告白はしたような記憶はあるけど、黒歴史

なので永遠にお蔵入りだけどな

「・・・・・・・寝よっ」

どうせまだ寝れる・・・
魔王様だってきっとまだ寝てるさ
だって俺みたいな夜型人間が朝行動してる方がおかしいんだけどな・・・
第一、俺に規則正しい生活なんて送った記憶がないな

そう思いながらも、俺はまだ温かい布団に入って、もう一度眠りについた

「それじゃ士郎さん。また今度会いましょう」

「はい。今度は遊びに来て下さい。蒼痲君も。」

・・・最悪だった
まさか高町家の人達とかと鉢合わせなんて聞いてねぇぞ・・・

「あ、はい。」

とりあえずお礼を言っておいた
まぁ、色々と世話になったし、まぁいいや・・・

ふと、我らが魔王様に目を向けると、少し悩んでいるような顔をしていた
はぁ・・・なんつぅか、ホント純粋というか、歪みねぇというか・・・

『おいなのは。』

『ふぇ!?そ、蒼痲君!?』

『おー、繋がった。良かった～、コレで人としゃべるの初めてなんだよねー』

とりあえず、念波で話しかけた
まぁ、悩んでる奴を無視するのは嫌いでね・・・

『蒼痲君も、話せたんだ・・・ちょっと意外・・・』

『意外って・・・言っとくけど、俺はお前みたいに才能があるような奴じゃないからな?落ちこぼれだ。』

昨日の戦いを見て思ったのは、コイツにはやっぱり魔法の才能があると言う事・・・
俺は、ストライクでチマチマ行動してるだけのネズミとでもいうべきか・・・

『そ、そんな・・・私、才能なんて・・・』

才能がある奴は大抵そう言う・・・
なんか聞いててうぜぇ・・・
ますます自分を美化して見せようとしてるみたいでイラッてきた・・・

『まぁ、お前が自分のことをどう評価しようと勝手だけど・・・あんま無理すんなよ？お前のその暗ーいオーラで皆を巻き込むなよ？色々と伝染るから。』

大抵、自分が不幸オーラを出してる時は６割の確率で誰かに伝染する少なくとも、俺はそうだった。
そのせいで俺の周りには陰キャラばっか集まったっけな・・・

『・・・・うん。ありがと』

『別に慰めてるわけじゃねぇけど・・・アレだ。友達は大切にしろ。友達は辛い時とか、苦しい時に助けてくれるから』

まぁ、これも実話だ。
俺が滅茶苦茶落ち込んでた時も元気にしようとしてくれたし、慰めてもくれたし・・・
無理矢理家から連れ出されてファミレスとかで奢ってもらった記憶

が・・・

「おーい、そーまー。行くぞー？」

「はーい。今行くー」

おっさんが先に歩いて、俺のことを呼んでいた

・・・おっさん、俺達闇の回廊でここまで来たんじゃないのか・・・？

「じゃあね蒼痲！」

「楽しかったよ♪」

アリサ達が笑顔で俺を見送っていた

なのはも、少し迷いが晴れたような顔をしていた

『ま、アレだ。悩みがあったら相談してみ。俺はいつでものんびりしてる人間だ。暇が合ったら会いに行くさ・・・・じゃあなー』

『ありがとう・・・蒼痲君。』

そう言い残し、俺は念波を切った

おっさんの横に急いで歩み寄り、一緒に歩き始めた・・・

さーて、バグの駆除の仕方も分かってきたし、俺も頑張るかな・・・

四章　色々と疲れたんだＺＥ☆（後書き）

おまけ

おっさん「あ、そーま」

蒼痲「なんだ？」

おっさん「一応お前レベルアップしたっぽいぞ？」

蒼痲「・・・・・・え？」

おっさん「アレだ。後少しで新しい装備とか手に入るから、頑張ってレベル上げろよー」

蒼痲「・・・・新しい装備・・・・？」

五章　すげぇよ！黒くになった！！

あの日以来、俺はおっさんを何かと観察するようになった

おっさんが予告した「なのは」と「フェイト」の死・・・
何故、おっさんがその事を知っていたのか・・・
そして、いつおっさんがその情報を手に入れたのか・・・
まぁ、おっさんの観察を始めたわけなんだが・・・

「・・・・・・」

呑気にスターゲイザー見てやがる・・・
何？俺が言った外伝とかも見ろ！って言った事気にしてたの？

「・・・・すげぇなノワール・・・カッケぇ・・・」

「おっさーん、ブルデュエルが壊されてるシーンで言われちゃ何も言えねぇよ」

あーぁ・・・最初はデュエルガンダムの改良版かなーって思って見てたけど、パイロットがパイロットじゃなぁ・・・

「しっかし、人間ってのは凄ぇのな。外伝作品にもこんなに手ぇ入れてるし・・・」

「いや、お前考えてみろよ？原作の外伝がとんでもなく詰まらなか

ったら・・・・」

俺だったらキレるね。

せっかく面白くしたのに、外伝でくだらない話だされたら俺だってキレるわ

「確かにそうだな・・・」

「ったく・・・・」

おっさんはスターゲイザーに夢中だし・・・

ったく、俺が掃除してんのに、そっちはスターゲイザーの観てんのかよ・・・

くそぅ！俺も見たい！！！

「お、そーまも見るか？」

「当たり前だ。ＳＥＥＤとかでキラは偽善者とか言って嫌われてるけど・・・俺はあぁゆー性格は嫌いじゃないんでね」

「それ、コレとまったく関係ないんじゃね？」

「知るか。」

まぁ、ＯＯは完全にガンダムという名前の別の何かって思えたしな・・・

途中から太陽炉が一体なんなのかさえ分からなくなるし・・・

「んじゃ、アニメ観賞会しようぜ！！」

「せめて外伝とかにしてくれ・・・」

おっさんの横にあった大きめの袋の中に手を突っ込んだ

なんだ、００８３とか、色々入ってんじゃん・・・

「・・・外伝ばっかだな」

まさか０８部隊もあるなんて・・・

まぁ、好きなんだけどね・・・・

とか言いながらも、外伝作品を見始めた・・・・

うん。やっぱ、０８部隊はいいよね。

陸ガンであそこまで戦ったシローに感激したね。

まぁ、Ｆ９１もなんだかんだ言っても面白かったしな・・・

「いやー♪本編しか見てなかったけど、外伝とかも楽しいんだなー」
「まぁな。ジオン視点の漫画もある位だ。それほど人気なんだよ」
まぁ、俺も好きだし・・・
ポケットの中の戦場も泣けたね。
ザクがあそこまでカッコよく見えたのは初めてだったし

気がつけば、結構遅くになっていた
もう日が暮れて、夕方になっていた
もうすぐ、太陽は沈んで月が現れる頃だなぁ・・・
まぁ、昼過ぎからずっと外伝作品見てりゃそうなるか・・・
途中で中断してポテチとか買いに行ったし
当然っちゃ当然だな

「あ・・・・・」
今、ニュータイプみたいに頭の中に電流のようなものを感じた
これは・・・バグが現れようとしてんのかよ・・・めんどくせぇ

「あー、どーやらまたバグが出たっぽいな」
「そーだな。んじゃ、俺は行ってくるわ」
そう言って、俺は玄関に向かおうとした・・・

だけど、途中で止まって、おっさんを見た

「ん？なんだそーま？」

「・・・・気になったんだけど、おっさん、アンタは来ないのか？」

正直、俺がこの世界に来てからおっさんは俺の戦いを見ていない気がする
なら、俺じゃなくておっさんが戦えばいんじゃね？って思って俺はおっさんに提案した
もし俺が戦わなくていいなら、それでもいいじゃん。

「お前、それじゃお前がこの世界に来た意味がねぇじゃん・・・まぁ、アレだ。大人の事情・・・つか、俺は肉体しかこの世界に遅れてないから、能力は1割以下しか持ってねぇんだ」

「・・・・死ねチート」

一割で人の能力に枷つけたりできんのかよ・・・
うぜぇ・・・まじうぜぇ・・・

そう言い残して、俺は家を出た
途中からおっさんが「晩飯の食材買い足してくれ」とか言ってきたから一旦止まったけど、すぐ歩き始めた

どうせ財布を見れば・・・・

ほらね。財布の横から一万円札がひょっこり出てるし・・・
ちなみに、あの札束はおっさんが持ってる

まぁ、俺の金だからいつでも言えば引き出してくれるらしい

「あーぁ、めんどくせぇな」

とりあえず、おっさんから直々に伝授してもらった闇の回廊を開く・・・

まぁ、チート使って覚えさせて貰うより、教えて貰った方が俺的にはＧＯＯＤなのさ

確か、魔力を形成して・・・

それを色々となんちゃらかんちゃらで・・・・

「あ、出た」

ホントに出たよ・・・

まぁ、チート能力で貰った時はどーせ消費する魔力が０になるだろうけど、俺はチート嫌いなんで、魔力を消費して闇の回廊を開いてる

「さーて、んじゃ行きますか！！」

そう言って、俺は闇の回廊をダッシュで駆け抜けた

「ここは・・・・？」

辺りを見渡すと、海が広がっていた

俺は浜辺にぽつんと立っていて、それ以外はまったく気配がなかっ

た・・・

だが、それは突然海の中から現れた存在によって激変した

突然、水面に影が浮かびあがると、その姿を現した

「んなぁ！？」

滅茶苦茶デカイ魚もどきが突然宙を舞い、そのまま空を飛んでいた
海に入る気配はなく、俺を見つけるや否や、攻撃を仕掛けてきた
どうやら、今回のバグはあれだけらしい
他に反応は無いし・・・
でも、あのでかさは反則だと思う

「ちょ、おま！？」

突然のことで驚きながらも変身した
いつも通り、エールストライクフォームで敵に向かい、ビームサーベルで斬りかかった
だが、その攻撃は空しく宙を切っただけで、あのデカイ魚の姿はなかった

バグ魚（俺命名）は、俺に向かい口を開き、口の前に魔法陣のような物を形成して、何かを溜めこんでいた
それは・・・・フェイントだった

「っ！！」

あっぶねぇ・・・
ヒレでこちらに向かって攻撃を仕掛けていた
パック捨てて回避してなんとか避ける事に成功した・・・
だが、ブースターのなくなった俺はそのまま海に向かって落ちていた
このままではまずい！！

「パック換装する！！！」

急いで新しい装備に換装した
だが、ソードでは先ほどのようにとてつもないスピードで回避され、
カウンターをされることは分かり切っていた
ならば、ここはランチャーで行くしかない・・・

ランチャーストライクとなった俺はブースターを限界まで酷使して、
陸まで飛んだ
危ない危ない・・・もともとアグニが滅茶苦茶重いのに、それを持
ったまま陸まで行けたことに驚いた
だが、今は戦いの最中・・・
俺はすぐに魚に向き直り、アグニを魚に向けた

「おかえしだぁ！！」

ビーム砲を発射し、魚を捕えたと思った瞬間だった
あっちも口からビームを発射して俺のビームを相殺した

「くっ・・・やるな・・・」

だが、今度は先ほどとは違い、口に魔法陣を展開し、俺に向かい砲
撃を放とうとしていた
あの攻撃は・・・恐らく、水の砲撃・・・

水は、ダイヤモンドを切り裂く無敵の刃と聞いた事がある・・・
そんなもん食らったら一たまりもないに決まってる！！
ならば、受けてたつしかねぇ！！
どうやら、あっちの砲撃には少し時間が必要らしい
だが、今か今かとエネルギーが充填されるのを待っているあの魚の顔が憎たらしく思えた
万全の状態で俺を消し去りたいようだ
小細工など一切なしの、本気の一撃で
「はぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」
アグニにエネルギーを溜めこみ、自分の限界までエネルギーを溜めこんだ
簡単に言えば、俺の全力全開
魔王様のディバインバスター程度位の威力しかない俺の全力・・・
それがあの魚との撃ち合いで勝てるかどうかは分からない・・・
でも、今俺にできることをやるだけだ！！
「食らえェェェェェェ！！！」
これが俺の全力全開！！
アグニ・エクスプローション！！！って叫びたくなったけど、イタいからやめた
あっちも俺と撃つと同時にエネルギー砲を発射してきた
お互いの攻撃がバチバチと音を立ててぶつかり合う・・・

しかし、俺の方が僅かに負けていた・・・
どんどんと押し返される俺の攻撃・・・・
だが・・・

「まだまだぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

火事場の馬鹿力という奴だ。
俺は魔力がカラになる勢いで砲撃を続けた
だが、押し返す事は出来ても、これでようやく互角・・・
しかし、俺の魔力はもうすぐ尽きる・・・

「ぐぅっ・・・・！？」

突然、自分の中から力が溢れ出た
俺の身体から真っ黒な魔力が溢れだしたのだ
その魔力は、アグニを黒く染め上げて、俺の砲撃の威力を高めていた

そして、俺達の魔力のぶつかり合いは、俺が魚の攻撃を押し返して
勝つ事が出来た
砲撃を受けた魚からは煙が上がって、中が見えなくなった

「な・・・なんだ・・・？」

力が・・・力が溢れだしてくる・・・
俺の体に少しずつ変化が表れ始めた・・・
肩に装備されていたパックが消え、新しいパックが背中に装備され
た・・・

だが、魚は生きていた
こちらに向かって口を空けて突撃してきていた
だが、不思議と何をすればいいか分かった
「はぁッ！！！」
両腕を前に突きだし、ワイヤーが勢いよく魚に向かって飛んで行った
ワイヤーの先端には刃のような物がついていて、魚の固い鱗を越え、
魚を突き刺した
そのまま向かってきた魚の勢いを殺さず、そのまま背負い投げの要
領で魚をぶん投げた
そして、俺は背中のブースターに魔力を込め、飛んだ
あまりのスピードに少し驚きながらも、陸に突き落とした魚に向か
い、剣を構えていた
「これでも・・・・くらっとけェェェェェ！！！」
剣を持ち変えて、そのまま地面に突き刺すように突っ込んだ
魚はぴくぴくと動くだけで、まったく逃げようとしていなかった
そのまま剣は魚に刺さり、魚から真っ黒な粒子が飛び出した
口からは血ではなく、黒い何か・・・
いや、あれはこの前戦った闇の存在達だ・・・
どうやら、俺がこいつで弱っている所にこいつらで畳みかける予定
だったらしい
「・・・・いいぜ、来いよ。」

剣を構え、いつでも相手のできる準備が出来ていた
だが、生憎今の俺はもの凄くテンションが高かった

「さぁ来いよ！！俺が消してやる！！！」

そういい、俺は高まったテンションと共に、闇の存在達の中に突っ込んで行った

六章　そげぶってカッコいいよね

「はぁ・・・・はぁ・・・・」

やべぇ、滅茶苦茶疲れた・・・
やっぱり、一時のテンションに身を任せちゃ駄目だね・・・
身体の節々が悲鳴上げてるよ・・・
こりゃ明日筋肉痛で動けなくなるな・・・

「・・・・・・・」

あの姿・・・・
間違いなく、ストライクノワール・・・・
おっさん、新しい装備ってこれの事だったのかよ・・・
ポケモンで言う、レベル上げるたびに新しく覚える技みたいな感覚なのかよ・・・

しかし、一番驚いていたのはその性能である
ストライクとまったく同じ感覚だったが、ブースターへの魔力の供給量や、剣を握った時の感覚がまったく新しくなっていた・・・
似ているが、どこか違いがあり、背中のワイヤーもちゃんと使いこなす事が出来た・・・

「あーぁ・・・夜んなっちった」

夜の街を歩く俺の左手には、ビニール袋が握られていた
まぁ、おっさんの作れる物がカップラーメンだけじゃ、流石に栄養偏るしなぁ・・・

とか思いながら歩いている俺に、ある存在が目にとまった

「・・・・げっ」

高町なのはが俺の前で携帯電話を見てしょんぼりしているんですよ・・・

あ、そっか。この後また戦うんだっけか？

確か、６話辺りだったような・・・・

・・・あれ？このままだったら俺も危なくね？

でもなぁ・・・なのはほっとけないし・・・

えぇい、仕方ない・・・

「よう。」

「え！？そ、蒼痲君！？」

はぁ・・・そんなあからさまに驚かなくても・・・

「どーした？こんな夜遅くに？駄目だぞー、世の中にゃお前みたいな子見て喜ぶ人間が結構いるんだぞ？」

その中には俺も含まれてたりしてます。はい。

「そ、蒼痲君はどうしたの？」

「見りゃ分かるだろ？買い物の帰り。」

そう言うと「そ、そっか」とか言ってなのはは俯いた

ったく・・・そんな目で俯くな・・・

「・・・・・・・」

俺は右手を前に出して、なのはの頭の上に置いた
なのはは驚いたようにこっちを見てきた

「だぁもう！何悩んでるかなんてどーでもいい！でもな、一々そんなに悲しそうな顔で俯くな。何か迷いがあるなら話してみろって。自分を責めて、答えを見つけようとするな。お前はアレか？Mか？」

まぁ、9歳がそんな単語知ってるわけがないので、なのはは苦笑して俺を見た
俺はおいた右手でなのはの頭を撫でた
・・・いいよなぁ、さらさらしてて・・・
俺の髪の毛なんてぼさぼさだから指通り悪いし、たまに引っ掻き過ぎてカサブタできるしなぁ・・・

「あ、ありがと・・・・」

・・・やばい・・・
今俺はとんでもない事をした気がする・・・
これ、フラグ立つんじゃね？
やばっ、早くやめないと・・・

「あ、ありがとね・・・声かけてくれて・・・」

顔を赤らめながら言ってるあたり、もう立った・・・？
いや！まだだ！世の中にはフラグクラッシュと言う最終手段がある

！！

そうだ！ＣＯＯＬになれ！！

俺はやればできる・・・・わけじゃないけど、やってみないと分からんだろうが！！！

俺はやらないで後悔するより、やって後悔する男だ！！

「い、いや別に・・・お前の為じゃないんだからな！！お前が元気がないのが悪いんだ！とっとと元気になりやがれチクショー！」

・・・・・・・最悪だァァァァァ！！！！！

やって後悔しちまったァァァァ！！！！

これならやらなきゃよかったぁぁぁ！！

ツンデレか！？ツンデレなのか！？何がしたかったんだ俺ぇぇぇぇ！！！！

「あはは・・・・・」

やべぇよ・・・なのは笑ってるよ・・・

ま、まだだ！！俺に対して減滅すれば、きっとフラグも折れるはずＤＡ☆

だけど、そう思った矢先、突然空が黒く覆われた・・・

もうやだ・・・・

「こ、これは・・・・・！！」

「あー、なんか大変そうだから俺退散するわ。じゃなー」

さり気なくエールストライクになってその場から離れた

なのはは俺の事を見上げて「待って！」とか言って来たけど、無視しといた
あーぁ・・・ビニールの中にある卵が潰れてない事を祈るよ・・・
・・・やべぇよ、帰りたいのに帰れねぇ・・・
ちくしょう！！ユーノの野郎結界張りやがったな！！！

「・・・・・・・・」

とりあえず、持ってるビニール袋と御相談
中に入ってる割れそうな物は卵だけ・・・・
んで、後ろを振り返ると、ジュエルシードが青い光の柱を出してる・・・
・・・・行くっきゃねぇか

「はぁ・・・・やれやれ」

そう呟きながら、光の柱へ向かって飛んだ
あー、頼むぞ卵ー、今日はチャーハンって決めてんだよ
お前が居なかったら俺の得意料理が作れなくなるだろー
頑張って生き残ってくれー

俺が向かって時には既に戦いが繰り広げられていた
まぁ、こっから見るほどドンパチやってんだから、相当凄いんだろーなぁ・・・

だが、いざ近づいて見ると、俺の目にはありえない光景が広がっていた

「んなぁ！？」

いきなりの事で驚いてしまった・・・

だが、今目の前で繰り広げられていることに、驚きを隠せなかったジュエルシードはぽつんとその場に浮いており、誰も触れようとしていなかった

目の前で、バグが二人を襲っていた

二人も必死に応戦していて、ユーノとアルフも必死に頑張ってサポートしていた

「うそーん・・・・」

さっきデカイ魚と戦って滅茶苦茶疲れてんのに、また戦うのかよ・・・

でもなぁ・・・明らか苦戦してるんだよねー・・・

見た事ないタイプのバグだし・・・

「くぅっ！！」

「フェイトっ！！」

「きゃぁぁッ！！！」

「なのは！！！」

だぁ！！もう！！見てられん！！

ブースターに魔力を送り込み、通常のスピードよりも速く移動した
俺が最初に目をつけたのは、フェイトに襲いかかろうとしていたバグだった

さらに加速して、某ライダーのような体勢で突っ込んで行った
それと同時に、なんか叫びたくなったので、叫んでいる事に

「食らえぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「っ！？」

フェイトの死角から攻撃を仕掛けようとしていたバグにキックを食らわせ、消滅させた
フェイト本人は、いきなりの事で驚いているようだ

「パック換装する！！」

着地すると同時にソードストライクとなって、アルフが戦っていたバグの中に突っ込んで行き、一振りで全滅させた
・・・あれ？なんか、明らかに威力上がってるんだけど・・・

だが、そんなことを考えても無駄・・・
後からゆっくり考えればいい

今俺のやるべきことは、バグを殲滅させることのみ

「倒すけどいいよな？答えは聞いてないッ！！！」

いやー、一回言ってみたかったんだよね
だってさ、魚のバグ倒し終わった時のあのテンションまだ残ってるんだよねー
まぁ、体の節々が痛いのを除けばなんも問題ないしな

「ウラアアアアアアア！！！」

剣で敵を薙ぎ払い、どんどんと敵を倒していく
まぁ、新型のバグはそこまで強くないって分かったし・・・
魚のバグが何体も居たらそりゃキツイけどさ・・・

「ラストォオオオオ！！！」

最後の一匹を倒して、俺は辺りを見回した
バグセンサーの中にも反応なし・・・、見渡しても他にバグは居ない
後ろを振り向くと、フェイトがバルディッシュを元に戻して、ジュエルシードに向かって飛び出していた
どうやら、バグと戦ってバルディッシュにヒビができたらしい
空を飛んでるなのはも同じようにレイジングハートにヒビができていて、もう戦える状態ではなかった

「ちょ、おま！？」

この後どうなるはか分かってる・・・
でも、バグが干渉しているので、どうなるかは分からない・・・
フェイトはジュエルシードを手にとり、握りしめた
だが、それと同時にジュエルシードが光を放ち、フェイトを包み込もうとしていた

フェイトの手から血が出ているのが分かった
だが、おかしい・・・
普通なら、そろそろジュエルシードが活動を止めるはず・・・
・・・やっぱり、バグの影響か・・・？

「ぐっ・・・ぁぁぁぁぁぁ！！」

フェイトから悲鳴が上がった
またジュエルシードは活動をするらしい・・・

「そんなことさせて・・・たまるかぁぁぁ！！」

この世界にバグが干渉して、原作が破壊されてしまった・・・
だが、それを駆除するために来た俺・・・
フェイトから聞こえる悲鳴に、俺の体は反応して、すでに彼女のもとまで駆けて行った

「っ！？何を！？」

フェイトの手を力強く握り、彼女を見つめた

「俺の魔力を使え！！」

「やめて！！そんなことしたら、あなたまで・・・」

「ごちゃごちゃごちゃごちゃうるせぇ！！どうなるかなんて分からないだろ！？なのに、初めっから諦めてたんじゃ、成し遂げられるもんも成し遂げられなくなる！！」

彼女の手に魔力を送り込む・・・
不思議と、握っている手が暖かかった・・・

「で、でも・・・」

「いいぜ・・・お前が人を信用できないってんなら・・・」

そういい、右手を放して、強く握りしめた
そして、彼女の手から離れようとしているジュエルシードに向かい、
拳を構えた

「まずそのふざけた幻想をぶち殺す！！！」

彼女の手から離れたジュエルシードを殴り、バチバチと電流のような
なものが俺の中に駆け廻った
そのまま魔力を注入して、活動を停止させようとしていた

だが、上手くいくかは分からない・・・
それでも、やらないで後悔するより、やって後悔した方が良かった

「うぉぉぉぉぉ！！幻想殺し（イマジンブレイカー）ァァァ！！」

そして、俺の身体の中に新たな力が目覚めたのが分かった
エールストライクとは違う、別の何かが俺の背中に装備された
背中にはエールストライクのように、広がった羽と、左手に装備さ
れた盾・・・

俺は新たなる力を手に入れたようだ・・・

ジュエルシードは青い光の柱を立ち上げ、活動を停止した・・・

俺の右手に、勝手に収まるジュエルシード・・・
あー・・・・なんか新しい力に目覚めちったし・・・

でも、一日で新しい装備と、新しい力を手に入れられただけで十分だと思った
まさか、この姿になれるとは・・・

「・・・・・・・・」

俺は無言でフェイトに歩み出して、目の前で止まった
そして、右手に収まっていたジュエルシードを渡した

「え・・・？い、いいの・・・？」

驚いたようにこちらを見てくるフェイト・・・
ユーノ達もあんぐりとこっちを見ていた

「言ったろ？俺ァこんなもん集める趣味は無ぇ。ほら」

そう言って、フェイトにジュエルシードを手渡した
フェイトは訳のわからないような顔をしていた

「言っとくけど、こりゃ借しだからな。今度ちゃんと払えよ、２００円。」

「え！？」

「ほら、さっさと行け。俺の気が変わらないウチに」
そう言って、俺は後ろを振り返った

「・・・・あ、ありがとう・・・・」

フェイトが去り際にそんなことを言っていたような気がした
なのははユーノと一緒にこちらに向かってきていた
だが、俺はある事に気づき、ユーノとなのはの間を走りぬけた
俺の目に入った物・・・それは・・・

「晩飯の食材がァァァァァァ！！！！」

やべぇ！！戦いに夢中になって、どっかに放り投げたのは覚えてる
けど、中に卵入ってるの忘れてたァァァ！！！
最悪だぁあああ！！買い直しすんの！？うわっ、ネギまで折れてる
！？

「あ、あの蒼痲・・・・君・・・・？」

「・・・・何・・・・？」

不幸だ・・・
そりゃぁもう上条先輩と同じくらい不幸だ・・・
せっかく買った物が全部おじゃんに・・・・

「あ、あの・・・・助けてくれて、ありがとね・・・・」

若干もじもじしながら言ってきた
やべぇ、可愛い・・・

「そ、それじゃあね！！」

そう言って、なのはは凄いスピードで去って行った
ユーノがなのはのスピードに耐えきれず、途中でユーノが振り落とされていた・・・

「・・・・・・はぁ・・・・」

誰もいない街に、俺のため息だけが木霊した・・・

その後、俺はまたスーパーによって同じものを買って家に帰ったのだが
おっさんが遅すぎるわボゲェ！っていってきたので、いっぱつぶん殴っておいた

六章　そげぶってカッコいいよね（後書き）

おまけ

蒼痲「おっさん、いつ俺に新しい装備なんて？」

おっさん「お前がこの前俺にぶん殴った時に、新しくお前の能力を更新しといた」

蒼痲「・・・・・・ノワール、カッコいいな」

というわけで、初めて・・・なのかな？

神に違和感を覚える俺　～転生とか死ぬほどどーでもいい～を見てくださってありがとうございます！！

作者のリュウガです！

いやー、蒼痲のツンデレ（笑）に自分で吹いてしまいましたね・・・

「このツンデレは無いわ」と思っていたので、飲んでいた麦茶を噴き出してキーボードが汚れるかと思いました（笑）

お気軽に感想や、御意見をお願いしますね！

では、次回！！

キャラクター紹介（前書き）

遅くなりましたが、キャラクターの紹介です

キャラクター紹介

天城　蒼痲（元天野　蒼）

年齢　１７歳→９歳

性別　男

見た目　黒髪の天然パーマ、よく髪の毛を引っ掻く癖がある

性格　チートやバグなどを嫌う少年
自分の価値観だけで全てを見ていたが、ある日突然謎のおっさんと出会い、彼の運命を変えた

過去に様々なトラウマがあり、女性が苦手になった
気がつけば、二次元にしか興味が示せなくなってしまい、現実で恋をすることを止め、オタクとしての道を生きる事を決めた

何気にノリが良く、本当は結構負けず嫌い。
ジャンプを愛読していて、毎週買っている
銀魂等が大好きで、好んでみている
努力家で、チートやバグなどをとことん嫌う
本人曰く『は？チート？バカなの？死ぬの？つか死ね。チートなんて「俺ＴＵＥＥＥＥ！！俺最強じゃね！？」みたいな事がやりたい奴のすることだろ？馬鹿馬鹿しい・・・結局チートに頼らなきゃ何もできないだけだろ？』と言っている

趣味はモンハンやゲーム、パソコン、遊戯王等

母親の事が嫌いで、なるべく話さないようにしていた
父親は好きだったのだが、離婚を期に嫌いになる
だが、心の中では認めており、もう一度あの頃に戻りたいなどと考えたことがある

おっさんの事は友達以下親以下にしか見ていないのだが、実は毎日やっているモンハンの時間が楽しかったりしている

少々歪んでいるが、結構イイ奴

実は結構ヘタレ

何故か持ってきた遊戯王の腕はまぁまぁで、Ｅ－ＨＥＲＯデッキや、サイバーダークデッキなどを持っている

おっさん

詳細　不明

神と名乗るおっさん
見た目は完璧な３０代後半のおっさん
髭を生やしていて、シャツなどの軽い服を好む

家事や料理などは全て蒼痲に任せ、だらだらしているだけのおっさん

しかし、中学生っぽい所があり、無駄にテンションの上がり下がりが激しい

実は少しオタクっぽい所があるのだが、蒼痲から「中二病まっさかりの奴」と思われている

存在そのものがチートらしいが、蒼痲のパンチを顔面に受けたりなどと、色々と不憫な人

モンハンの腕はからっきしで、蒼痲に任せっぱなしで、ちまちま援護をするも、吹っ飛ばされて力付きるのがオチである

一応、遊戯王もやっているのだが、蒼痲にボコボコにされた記憶しかないらしい

キャラクター紹介（後書き）

こんな感じですね。

蒼痲はヘタレ主人公で、おっさんは自由気ままな人を意識しました

でも、いつの間にかこんなことに・・・・

感想やコメントなど、いつでもお待ちしているので、お気軽にどうぞー♪

ではー♪

七章　休息って必要じゃね？

家に帰ってから、俺はベットにダイブして、ＤＳを開いていた

いやー、体の節々が悲鳴上げてとんでもないことに・・・

やっぱ、慣れない事しちゃ駄目だね

とりあえず、今日もリンコとデートっと・・・・

話はそっからだな

俺の部屋に彼女の声だけが響いていた

そんな中で俺はとある事を考えていた

「・・・・・原作崩壊しちまったなぁ」

一番やりたくなかった事をやってしまった・・・

まぁ、それが世界の意志とやらなら仕方が無いな・・・・って、言いたいけど・・・

「・・・・納得いかねぇ」

とにかく納得できなかった

俺がやったことじゃないけど・・・なんだか、心の中がもやもやしていた

おまけに、なんかフラグ（？）を立てちったし・・・

「・・・・はぁ・・・憂鬱だ・・・・」

デートが終わり、一度データをセーブして、ＤＳを閉じた

机の横に転がっているバックからデッキケースを取り出し、デッキ

を見た

「あー・・・そういや、まだ此処じゃグレトルもサイバーエルタニンも出てないんだっけ・・・」

デッキを開いて、もう一度見直した

俺のガチデッキと言えるＥ－ＨＥＲＯデッキのエクストラデッキに入っているカードの殆どがまだ未発売のカードばかり・・・

おまけに、サイバーダークデッキにもシンクロモンスターが居るのでそれも取り除かねばならん・・・

「むぅ・・・これじゃ、シンクロはおろか、昔のデッキで戦わなくちゃいけねぇのか・・・」

・・・まぁ分かってたんだけどね・・・

あ！！でもその分俺にはいい事があるぞ・・・！！

ＥＸＴＲＡ　ＰＡＣＫで闇の誘惑が出る！！おまけに、絶版になったから、価値もつく！！

おまけに、ディアボリックガイの入ってるエド編のパックも発売されんじゃん！！

やべぇや・・・箱買いしなくちゃ・・・

つか、近くのカードショップ行ったら知らねぇガキ共がガキ大将気どりで俺にデュエルしかけてきたし・・・

まぁ、サイバーダークでぼっこぼこにしてやったけどな・・・

見た事ないカードでキョドってたあの顔忘れらんねぇ（笑）

サイバーダークインパクトでサイバーダーク出した時なんて

「けっ！たった１０００の融合モンスターかよ！ザッケー！」とか言ってきたからプチっとキレた

その後、融合召喚に成功したことによって、墓地に送ったブルーアイズ装備して、４０００になった後にもう一つの効果で墓地に増やしまくったモンスター×１００ポイント攻撃力アップしたしなぁ

いやー、相手の場のブラックマジシャンを綺麗さっぱりおさらばしてやったよ（笑）

つか、昔のカードってホント力押しなんだなぁーって改めて実感したよ・・・

伏せカードに魔法カードしかセットしてない奴なんて久々に見たよ・・・

そんなことを考えている俺をよそに、二階にある俺の部屋へとどたどたと近寄ってくる足音が聞こえた

まぁ、そんなことしに来るのはあの人だけだしなぁ・・・

「そーま!!デュエルしようＺＥ☆」

ばたん!!と開かれたドアと共に、おっさんがデッキを持って来て俺にサムズアップしてきやがった・・・

「違う違う。」

そういって、俺はおっさんを止めた

まったく・・・やり方がなってないじゃん

「デュエルを申し込む時は「おい、デュエルしろよ」って言わなくちゃいけないんだぞ。」

ちなみに、中学時代の連中とデュエルする時は大抵「おい、デュエ

ルしろよ」で暗黙の了解だった
まぁ、挑まれた決闘(デュエル)を無視するほど、俺はバカじゃないんでね・・・

「いいぜ。受けて立ってやる」

「っしゃぁ!!今度こそお前をレモンでブッ飛ばしてやる!!」

レモンとは「レッドデーモンズドラゴン」の略である。
少なくとも俺はそう呼んでる。

「はぁ・・・ったく・・・何のデッキで行って欲しい?イービルか、シンクロか、サイバーダークか・・・」

「んなの決まってるだろ!!シンクロだ!!今度こそセイヴァースターは出させん!!」

あーぁ・・・またデッキ枚数増えてるし・・・
まぁいいや。
それなりに頑張るか・・・

ということで、デュエルシーンは省かせて貰うわ。
理由?そんなの分かってるだろ?

・・・・・まぁ、見たい人が居るかどーか知らねぇけど、一応、内容少しだけ見せるな

ちなみに、現在中盤に差し掛かった俺達のデュエル
俺の場にはスターダスト・ドラゴンが一体、んで、攻撃表示のチェンジシンクロンと、墓地にチューニングサポーターが居る。
ダストは、サモプリとミストバレーの戦士とのシンクロで出した奴。
伏せてあるカードはリビデとトラップジャマーが二枚と、カウンターカウンターが一枚。

おっさん場は、レッドデーモンズが一枚と裏側のモンスターが一枚、
伏せカードが二枚
レモンは意外とあっさり出てきたんだけど、攻撃宣言時に攻撃の無力化で攻撃させなかったんだけどなぁ・・・

ライフは俺が６７００と、おっさんが５４００。
最初のターン、俺は何もしないで居たらダーク・リゾネーターで殴られたんだよなぁ・・・

んで、俺のターン

「俺のターン。ドロー」

引いたカードは・・・ジャンクシンクロンかぁ・・・
手札にはおろかな埋葬か・・・

「俺は手札からおろかな埋葬を発動」

まぁ、とりあえず墓地肥やしと行くか・・・

「俺はデッキからチューニングサポーターを墓地に送る」

おっさんの手札は一枚だし・・・
なんか余裕で勝てそうな気がしてきた・・・
デッキからサポーターを墓地に送って、とりあえず・・・

「俺はジャンク・シンクロンを召喚。効果で、俺はサポーターを・・・」

「チューニングサポーターが選択された時に、手札のＤＤクロウを捨てて、場に出る前に除外させてもらうぜ！！」

うわっ・・・あの手札クロウだったのかよ・・・
うわーぉ、やっぱ簡単に引っかかるなぁ・・・

「ＨＡＨＡＨＡ☆お前がシューティングスター出そうとしてるのはお見通し・・・」

あ、死亡フラグ立った
いや、なんとなくそんな感じの事思っただけ。
まぁ、どうなろうと、俺は勝つけどな

「伏せカードオープン。リビングデットの呼び声。俺はもう一体のチューニングサポーターを召喚。」

「・・・・・え？」

あーぁ、展開に追いつけてねぇな・・・
終わったな。

「レベル1、チェンジシンクロンに、レベル1、チューニングサポーターをチューニング！！」

まぁ、何が出るかは分かるよね？遊戯王見てればさ・・・

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、《フォーミュラ・シンクロン》！」

いやー、蟹さんの台詞全部言えて良かったぁ・・・

つか、これ覚えるまで結構かかったんだよなぁ・・・

「フォーミュラシンクロンの効果を発動！シンクロ召喚に成功した時、俺は一枚カードをドローする！そして、チューニングサポーターの効果で、もう一枚ドロー！！」

ふむ・・・手札もそこそこだな

「さらに、シンクロ召喚の素材となったチェンジシンクロンの効果を発動！お前の裏守備のモンスターの表示形式を変更するぜ！」

・・・ダークリゾネーターかよ・・・

危ねぇな・・・

「おっさん。どーなるか分かるよな？」

「こ、こいよ・・・まだ負けたわけじゃねぇ！！」

あーぁ・・・強がっちゃって・・・

ま、いいや。俺も勝つために頑張るか

「レベル8のスターダスト・ドラゴンにレベル2のシンクロチューナー、フォーミュラシンクロンをチューニング！！」

よし、とりあえずどうなるか分かりますよね？

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！アクセルシンクロ！！生来せよ、《シューティング・スター・ドラゴン》！！」

おー、出た出た。俺のダストシンクロデッキの新メンバー

まぁ、黒薔薇とか、色々入ってるけど、コイツ出すの難しいんだよなぁ・・・

「セイヴァースターじゃないのかよ！？まぁいい！罠オープン！神の宣告！！」

バカが。俺がそう簡単にシューティングスターを消させるかよ

「チェーン発動。カウンター・カウンター。カウンター罠の発動を無効にして破壊する」

「それなんて鬼畜・・・？」

あー、おっさんの顔絶望してるｗｗｗ

ざまぁｗｗｗ

「シューティングスタードラゴンの効果を発動！デッキからカードを5枚めくる！一枚目！」

まぁ、これで3枚以上出ればいいんだけどなぁ・・・
出てくれると嬉しいなぁ・・・

「一枚目はエキセントリックボーイ！二枚目・・・邪帝ガイウス！三枚目・・・エフェクトヴェーラー！四枚目・・・サイバードラゴン！五枚目・・・・」

これで決まるのか・・・
うわ、なんでこういう時ってめっちゃドキドキするんだろ・・・
さぁて・・・次のカードは・・・！！

「五枚目！！ゾンビキャリア！！これでチューナーは3枚！3回攻撃が可能だ！！」

っしゃあ！！俺の勝ち決定じゃん！！
あー、やべ・・・おっさんマジで泣きそう・・・
突っ伏してるし

「っしゃあ！！バトルだ！！行くぜシューティングスタードラゴン！レモンに攻撃！スターダストミラージュ！！」

まぁ、カッコよく言っても意味ないんだけどさ・・・
とりあえず、なんとなーく言ってるだけ。

「甘いぞそーま！！罠発動！次元幽へ「トラップ発動。トラップジャマー」・・・
ｏｒｚ」

ざまぁｗｗざまぁｗｗｗマジざまぁｗｗｗ
まず３００ダメージｗｗ

「もう一回攻撃！！スターダスト（以下略）」

今度は２０００のダメージだなｗｗ
おまけに、リゾネーター死なねぇから、まじざまぁｗｗｗ

「もうやめろ！！俺のライフはゼｒ「ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ！！もう一回！スターダス（以下略）！！」もうやめてえぇぇぇ！！」

「黙れ虫野郎！！」

リゾネーターも消えて、俺の場にはジャンクロンがまだ攻撃してないｗｗ
ざまぁｗｗｗこれで４３００のダメージｗｗ
残り１１００のおっさんに俺は容赦なく言った

「ＴＯ☆ＤＯ☆ＭＥ☆ＤＡ！！」

「いやァァァァァ！！！」

結果、俺の勝ち。
まぁ、俺のシンクロなめんなっつの

そんなこんなで、明日会う、むっつりスケベのクロノや、なのは達のことを考えながら、俺はベットに入った

「そーま寝るのか？んじゃ、おっさんも・・・」

「ＧＯ　ＴＯ　ＨＥＬＬ！！」

寝間着のおっさんがベットに乗り込もうとしていたので、思いっきり蹴っといた

うん。やっぱ、おっさんってＭだなって、実感した

八章　ガキってほんと理不尽だよな

さぁて、朝だヨー

俺の目覚まし時計は現在、５時を指していた
今日も元気に頑張りますかーと、心で意気込んでみる。
まぁ、俺はゆっくり行動するけどネ。

「・・・・・・」

階段を下りて、キッチンに向かい、料理本を開く

「・・・・ふむ」

料理歴の少ない俺にとって、この本に書いてあることは結構役に立つ。
今日もシンプルにご飯とみそ汁にするか・・・
それとも、適当にトーストでも・・・

ふむ。朝のメニュー考えるのも案外楽しいのかもしれない

どーせおっさんは寝てるし・・・
俺は呑気に朝ご飯でも考えて、時間を潰していた

しばらく時間が経って、俺はジャージにランニングシューズを装備

して、外に出た
理由は、朝ご飯のトーストに必要なモノを揃えるため。
パンが丁度なくなっていたので、いい機会なので買いにいくことにした

まぁ、それはオマケなわけで・・・
実は、俺は朝方は基本ランニングしているのだ。
適当に走り込んで、ゆっくりと体力作りに励んでいるのだ

「さぁて・・・」

ガチャッとドアを開けて、俺は家の前でぴょんぴょんと跳ねて準備運動を始めた
さぁて・・・今日も愉快に素敵に・・・

「行きますかァ！！！」

ばびゅんっ！という効果音がつきそうな勢いでダッシュした・・・
そりゃぁもう全力で・・・

「・・・ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

まぁ、昨日の筋肉痛がまだ治ってない訳で・・・
めっちゃ足が痛い。どれくらい痛いかは、だいたい分かるだろう。
走って20分後にはもうバテバテで、めちゃくちゃ足が痛かった

「あー・・・あの頃ならもっといけたのになぁ・・・」

親父がいた頃は一日5キロ位走ったような・・・走ってないような・・・
まぁ、子供から見た目線だから、本当は3キロ未満なのだろう。
でも、あの時は爺ちゃんもいたし・・・親父も居たし・・・

「・・・・あー、もうメンドイ！！！」

頭の中に思い浮かぶ父親と母親の笑顔を掻き消すように俺は頭を振った
あぁー・・・バカ親父のこと思い出したら頭痛くなってきた・・・

「・・・・パン買ってかなくちゃ・・・」

もう考えることを放棄して、俺は近くの２４時間営業のスーパーに買い物に行った

「はぁー・・・不幸だ・・・」

とりあえず、パンとチーズの入った袋をぶら下げて、俺は帰路を歩いていた
だが、なんとなーく遠回りしたい気分になったので、俺は遠回りし

て、鳴海市を散策していた

「・・・・あっ・・・・」

ふと、俺は気づいた

俺は今・・・ある場所の近くに居た

確か・・・鳴海市の中丘町だっけか？

いつの間にそんな場所に来ていたのは、俺はある事に気付いた

ここは・・・

「はやての・・・・家・・・・」

二期で、シグナム達が拠点にする場所・・・

そして、闇の書が覚醒する場所・・・

「・・・・・・・」

ボーっと立ち止まり、後数メートル先にあるはやての家をボーっと見ていた

・・・あれ？これヘタしたらこれって、ただのストーカーじゃね？

って思って、俺は歩み始めた

はやての家の前を通りかかろうとした時、からからと何かが開く音がした

後ろを振り返っても、何もない・・・

恐らく、どこかの窓が開いたのだ

とりあえず、辺りを見渡すと、ある場所に目が行った

そこには・・・

「あっ・・・」

窓から顔を出していたのは・・・八神はやてだった
律儀にも朝日を眺めていた
そして、伸びをして、こちらに気づいたのか、俺と目があった

「・・・・・」

なんか、この前見た時はちらっと見た程度だったけど
改めてみると、本当に可愛かった・・・
まぁ、現実に恋する日は永遠に訪れないと思うので、俺は二次元に
恋をするとしよう

「・・・・・・（ぺこっ）」

とりあえず、頭を下げて挨拶をしておいた
そのままもう一度俺は歩き出した

まぁ、はやての顔も見れたし・・・今日はいい日・・・なのか？

とりあえず、家の前までジョギングしながら帰って、家の前に到着
ドアを開けて、玄関に荷物を置いて、ふぅっと、息を吐いた
汗をぬぐい、そのままリビングまで入ると・・・

「そーーーまーーーー！！おっさん寂しかったよーーーーー！！」

「死ねェェェェェエエエ！！！！」

いきなりおっさんが俺に抱きついてきやがった！！
くそぅ！！なんなんだよオイ！！！

「いきなり何しやがるゴルァ！！」

思いっきりビンタして引きはがしてやった
だけど、おっさんはぶんぶんと腕を上下に振り上げたり振り下げたり、なんか気持ち悪いことをしていた

「だってー！！珍しくおっさんが早起きしてそーまにデュエル申し込みに行っても誰も居ないし！毎朝ジョギングに行ってるなんて、おっさん聞いてないぞーーー！！」

きめぇ・・・
素でそう思った
なんで俺がおっさんにジョギングしていること教えなくちゃいけないんだよ・・・
おまけに、朝っぱらからデュエルって・・・どんだけヒマなんだよ・・・

「・・・はぁ・・・」

ため息を吐いて、俺はゆっくりとパンの入った袋をおっさんにつきだした

「買い物もしてきたんだよ。おっさん、酒のつまみでサンドイッチ作ったろ？」

「うぐっ！！」

そんなリアクションすんな・・・

枝豆食え。枝豆。後、かきの種とか。

あ、ビーフジャーキーってのもアリだな・・・

・・・言っとくけど、俺は酒飲めないからな？

ついでに言うと、大嫌いだ。

俺は酒は嫌いだけど、おつまみは大好きな人間なんだよ。別にいーだろ？

「はぁ・・・・とっとと作ろうぜ」

そういい、トースターにパンを入れて、チーズを乗っける

まぁ、そりゃぁもうこんもりと・・・

「そーまー！おっさんのはチーズ少なめで！」

「あいよー。」

とりあえず返事して、おっさんの分のパンの上にチーズを少量乗っけてやった

「んじゃ、出来あがったら起こしてくれーィ。おっさんは寝る！」

「待てコラ駄目人間！！！」

そう言って、おっさんがソファーで寝っ転がったので、思いっきりグーでぶん殴ってやった

「いってぇー！？おいそーま！！おっさんは駄目人間じゃなくて、神！！神様なの！！分かったか！？」

「着眼点が違ぇぞ！？じゃあ言いなおしてやるよこの駄目神！！！」

「おっさんは駄目神じゃねぇ！！」

もうおっさんとの掛け合いは疲れてきた・・・

まぁ、元々ツッコミ属性の俺と相性がいいのか・・・悪いのか・・・

さっぱり分からない会話になっていた・・・

まぁ、そんな他愛のない話をして、おっさんと俺は焼けたトーストを頬張りながら、今日の予定を言いあった

俺はこの後昼ごろまで昼寝して、おっさんは、適当に外で過ごすらしい。

なんでも、神様の集会があるとか、ないとか・・・

俺にゃぁ関係ないけどね。

「いてて・・・」

シャワーを浴びた俺は、わしゃわしゃと髪の毛をタオルで適当に拭きながら冷蔵庫を開けて、コーヒー牛乳を取り出した
まだ体の節々が痛い訳で、俺はその痛みに耐えながらも牛乳を飲んだ
そんな時、外から声がした

『おい！！急げよ！このままじゃ遅刻しちまうぞ！！』

『分かってるよー！！』

幼い少年の声・・・
二階に上がって、ベランダから外の様子を見た

そこには、自分の家の目の前で、３人の少年が誰かを待っていた
良く見ると小学生だと言うのに、ランドセルを背負っていない・・・
あー・・・服からして、なのは達のトコの学校の生徒っぽいけど、
バス間に会うのか？
そんなことを考えていると、彼らに送れるように、一人の少年が遅れて走っていた

・・・・その３人のバックを担いで

４つの荷物を背負いながら走っている彼は、いかにもいじめられっこのような雰囲気を放っていた
じっとその光景を眺めると、とうとう１人の少年が怒り出した

『おい遅ぇぞ！！お前のせいで遅刻したらどーすんだよ！！』

そいつは少し小太りで、ジャイアン的なポジションの子供だった
・・・よく見ると、この前カードショップで俺にぼろ負けした少年じゃないか
理不尽な理由で怒るあの少年を見て、俺は頭を抱えた

やれやれ・・・理不尽な奴だ・・・
そう思いながらも、俺はその光景を見ていた

『もういいよ！コイツ置いて行こうぜ！！』

『そーだな。おい、俺の荷物返せよ！』

そういって、3人は荷物を無理矢理少年から奪いに走り出した
残された少年は、その場でぜぇぜぇと息を吐いていた

・・・見てらんねぇなぁもう・・・

俺はその場で飲み干した牛乳をゴミ箱に投げ捨てて、下に降りて冷蔵庫からアクエリを取って、玄関に向かった

ドアを開けて、息を整えようとしている少年に歩み寄り、頬に冷たいポカリを当てた

「え・・・・？き、君は・・・・・？」

「ほら、飲めよ。」

俺の見て驚いているのか、少年は俺を見てぎょっとしていた
その手に無理矢理アクエリを持たせた

「え！？あ、いや・・・そのぅ・・・」

「いーから。お前、朝っぱらから走らされて喉ガラガラだろ？」

少年は少し俯いて、下を向いた
どうやら図星のようだ・・・

「あ、ありがとう・・・えっと・・・」

「蒼痲。天城蒼痲だ。」

「き、君学校は？もう遅刻しちゃうよ？」

学校ねぇ・・・・
俺元高校生だから、いまさら小学校なんてなー・・・

「行ってねぇ。最近越してきたばっかだから。」

「そ、そうなんだ・・・あっ・・・今何時か分かる？」

「あ？今は７時４５分だ。」

「そ、そっか・・・・」

俺は腕時計を見て、時間を確認して、伝えた
時間を聞くと、少年は俯いた
あー、絶対遅刻するって諦めてるな・・・

「・・・はぁ・・・ちょっと待ってな」

「え？」

そう言って、俺は家の裏の倉庫に入った
そこには自転車が置いてあって、二人乗りができるようなママチャリがぽつんと置いてあった
それを出して、ぱんぱんと埃を掃って家の前に出した

「ほら。乗れ。」

「え！？い、いいよ！そんなこと・・・どうせもう遅刻なんだし・・・」

こいつ・・・ネガティブだなぁ・・・
そんな事を思いながら、少年の抱えていた鞄を奪ってチャリのカゴの中に突っ込んだ

「お前、もう諦めてるだろ？」

「え・・・・？」

思っていた事を当てられたのか、少年はぎょっと驚いていた
まぁ、道はジョギングの時あらかた分かったし、こっからいけない距離じゃねぇし

「乗りな。その幻想、俺がぶち壊してやる」

「・・・・・・・」

そう言うと、少年は後ろに座って、ぐいっとアクエリを飲んだ

やっぱ、そーこなくっちゃな

「っしゃあ！アクエリは飲み終わったな！？」

「うん！！」

何もなくなったペットボトルを俺の家の庭に放り込んで、俺は自転車をこぐ準備をしていた
少年は何か吹っ切れたように自転車のサドルを掴んでいた

「っしゃあ！！行くぜ！！」

そういい、俺はペダルを漕いだ
少年はどこか楽しそうに、蒼痲の背中を見ていた

「次どっちだ！？」

「右っ！！」

俺が一生懸命ペダルを漕いで、後ろの少年が学校へと道筋を教えてくれた
そのスピードは半端なくて、正直、人にぶつかったらタダじゃ済まないものだと思った
まぁ、二人乗り事態悪いことなんだけどネ。良い子は真似すんなよっ☆

「あっ！！見えてきたよ！！」

少年の指差す先には、学校があった
うわーぉ。あれが噂の私立聖祥大付属小学校・・・だっけ？
すげぇーな・・・でけぇし、すげぇ・・・
こんなトコ通ってんのかなのは・・・

「っしゃあ！！！行くぜ行くぜ行くぜ行くぜぇ！！」

正直、時間はギリギリだった
途中、何台ものバスを横切った気がする
その中で、何人か、この少年と同じ制服を着ていたような気がする

しかし、もの凄いスピードで突っ込んでってる俺はゆっくりとブレーキをかけて、私立聖祥大付属小学校の近くに自転車を止めた

「ほら、後は走ってあそこまでダッシュすればいいだけだ。」

１００メートル先には正門が見える
腕時計は８時を指差していて、もうそろそろチャイムが鳴る頃だった

「え、えっと・・・ありがとう・・・」

「気にすんな。困った時ゃお互いさまってな」

ぜぇぜぇと荒い息を整えて、俺は少年を見た
結構可愛い部類に入るな・・・世間で言うショタ顔って奴だな

「ぼ、僕は火野（ひの）　敦（あつし）・・・」

「敦・・・か。いい名前じゃん。んじゃ、俺ぁ帰るわ。頑張れよ」

そういって、俺は自転車の向きを変えて、帰ろうとした
すると「ま、待って！」と後ろから止められた
そこには少年・・・敦が何か言いたげに俺と向き合っていた

「ま・・・・またね。天城君」

「・・・そーまでいいよ。敦。天城って呼ばれんの、慣れてねぇし・・・んじゃな」

そういって、俺は自転車で走り出した
後ろから「ありがとねー！！」という敦の声が聞こえたので、片手運転で左手をひらひらさせながら俺は去って行った

後後気づいたのだが、体が悲鳴を上げて、速く休ませろと言わんばかりに俺の体がビキビキと悲鳴を上げていた

まぁ・・・同年代の男の知り合いができただけ、十分か・・・

八章　ガキってほんと理不尽だよな（後書き）

「そんなわけで、あとがきターイム！！」

蒼痲「おい、どーゆーことだ？」

「いやー、最近あとがきなんて全然書いてないから、とりあえず書いてみよーかなーなんて思ったり思わなかったり」

蒼痲「どっちだよ・・・」

「で、どうだった？新キャラの登場は？」

蒼痲「どーせぽっと出ただけのキャラだろ？どうせ忘れ去られるさ」

「ふっ・・・安心しろ」

蒼痲「は？何を？」

「なぁに。それはお楽しみってことで。」

蒼痲「・・・・なーんか嫌ーな予感しかしねぇ」

「いやー、最近コメントやら感想やらがめっきり減ってさ。お前が女装すればきっと何か起こるかと思って」

蒼痲「おい！！色々とおかしい！！」

「だいじょーぶ！！お前9歳だから！！まだ女装しても大丈夫な歳

だから！！」

蒼痲「どーでもいいわ！！さっさと死ね作者！！」

「断る！！俺は・・・生きる！！」

蒼痲「知るかよ・・・あー・・・なんだこのカンペ？読めってか？」

「うん。読め」

蒼痲「ちっ・・・しゃーねーな・・・えぇっと何々？『こんな小説を見てくれてありがとうございます。作者のリュウガです。神に違和感を覚える俺　～転生とか死ぬほどどーでもいい～を読んで頂き、まことにありがとうございます。お気に入り登録してくれる方々、応援のメッセージを送ってくださる方々、本当にありがとうございます。最近リアルが忙しいので執筆が進みませんが、どうぞよろしくお願いします。

感想やコメントを頂けると発狂するほど嬉しいです・・・蒼痲が』っておい！！俺は嬉しくないぞ！！」

「えー？実際嬉しいんじゃねぇの？他の小説のオリキャラさん達と会話できるかもしれないんだぞー？」

蒼痲「・・・その８割近くはチート野郎だけどな。・・・まぁ、チート抜きで、ただの話し合いならしてもいいかもな」

「バトルは？」

蒼痲「嫌だね。チート能力使ってる野郎に勝つなんて、バグでも使わない限り無理だ。だからチートはうぜぇんだよ・・・」

「流石チート嫌い・・・・」

蒼痲「まぁ、感想やコメントはいつでも待ってる。作者が歓迎するから」

「お前もな？」

蒼痲「断る。俺じゃなくておっさんにしろ。チート好きだし」

「お前ってほんっと主人公っぽいけど、違うよな」

蒼痲「うっせい。それじゃ、今回はここまで！」

「それではまた～♪」

九章　すげぇなオイ！

『おとーさーん！おじーちゃーん！』

とてとてと小さな体で駆けよっていく小さな影がある・・・
その小さな体で必死に誰かを追いかけていた

『蒼ー！こっちだぞー！』

『待ってよー！』

必死に追いかけて、転んでも泣かずに追いかけて・・・
もう一度転んで、泣きそうになっても必死に追いつこうとしていて・・・
その姿は何かを一生懸命成し遂げようとする姿だった

『はぁ・・・・はぁ・・・・』

何度も転んで、土で汚れた小さな服
涙がぽろぽろ出ていて、必死に涙を流すまいと堪えている顔
古い昔の家の前で、何人の人影が少年を待っていた

そして、ようやく辿り着いた時
ぐしゃぐしゃになった顔で、少年は言った

『ただいま！！』

先ほどまでの涙が嘘かのように・・・
純粋な笑みで・・・・

「うぉぉぉおおおおえええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

さ、最悪だ！！
なんつぅ夢見てんだ俺ぇぇぇぇぇぇ！！！

昔の夢を見て吐き気がこみあげてきた
最悪だ・・・一番思い出したくない記憶なのに・・・！！

胃袋の中に入ってる物全て吐き出すかのような俺の悲鳴はとてもうるさかった

あー・・・最悪。

・・・・しかももう午後じゃん
今頃世間の人達ゃ昼飯食い終わってる頃じゃん

あーぁ、折角の俺のお休みタイムが無駄になっちまったじゃねぇか・・・

とりあえず、洗面所にいって顔を洗ってくることにした
・・・・はぁ・・・なんであの夢見たんだろ・・・

ふと、リビングを見ると、おっさんが買って来たであろう、ＣＤの入った袋が見えた
どうせもう聞いた後の曲ばっかだろーし、どんな曲好きなんだろ？っていう疑問が浮かび上がった

・・・まぁ、おっさんのだし、見ても問題ないよな？

そーーーっと覗きこんで見てみる
だが陰っていて全然見えない・・・まぁ、となるとこうするしかないよな

「そいっ」

右手を突っ込んで中を漁り始めた
そん中から適当な物を掴んで、掴んだ物を見た

「・・・・・・ゑ？」

な、なんで結構有名なアニソン？
あー・・・・まぁストレートに言うと「るろうに剣●」のそば●すって言えば分かるか？
ビックリしすぎて「え」じゃなくて「ゑ」になっちまったじゃねぇか
懐かしいなー・・・

よく親父達と一緒に見たっけ・・・
さらに手を突っ込んで中を見ると、龍の球を集めるＧＴのメインテーマとか、なんか色々と負けないでって思えるような曲とか、色々出てきた
どれもこれも懐かしくて、感動できる歌ばかりであった
「・・・・・・・」
おっさんのことだから、ばりっばりのアニソン祭りかと思ったけど、全然違った
なんつぅか、凄いって言うか・・・やっぱり大人なんだなーって思った
「・・・・・やべぇ、懐かしい」
ラジオの中にＣＤを入れて、懐かしい曲を聞き始めた
あー・・・・いい曲ばっかだ・・・
他にもなんか３５８／２のサントラとかあって、滅茶苦茶感動した
簡単に言うと、素直に驚いてる
途中からぽろぽろ涙出てきたり、ほんとにいい曲ばっかだなぁって思った
電波な曲もいいと思うけど、やっぱり昔の曲もいいと思えた
なんかもうシーソルトアイスが食べたくなった
つっても、ガリ●リ君に塩吹っ掛けるだけなんだけどね
ホントにしょっぱくて甘くなるから、美味いんだよなー・・・

分量は自分で考えてくれよっ☆

「・・・・・・」

なんだか、こういう曲ばっか聞いてるとしんみりした気分になってきた

こうゆー時って体動かしたくならね？

まぁ、俺だけかもしれないけど・・・・

「・・・・図書館に行こう」

俺はふとはやての事を思い浮かべた

彼女は、今何をしているのだろう？

困っていないだろうか？

独りで・・・寂しい想いをしていないだろうか？

「・・・行くか」

思い立ったが吉日とはこの事。

俺は財布と鍵だけ持って家を出た

俺の知ってる原作はとっくに破壊されてるらしいし

はやてをちょろっと見るくらい問題はないだろう。

まぁ、フラグなんてもんはそう簡単に立つものじゃないし、問題ないだろう

つーわけで、俺は図書館まで歩いて行くことにした
そろそろ小学校は終わって、中学校や高校はまだ授業が続いている時間帯だ
帰る途中に何人かの子供とすれ違ったような気がする

・・・・敦、大丈夫か？
またあのガキどもにいじめられてねぇかな・・・？
もしもいじめられてたら、俺がアイツ等をボコす
喧嘩なんて中学校の時によくあったし、あれは正当防衛って奴だ。
問題はない

「・・・・・・あっ」

図書館までの坂の途中で、俺はある存在に目を奪われた

（はやて・・・）

車いすで必死に坂を登ろうとしていたのだ
確か、二期の方ではシャマル達が迎えに来てたような・・・

なんか、はやての後ろ姿を見て、彼女を放っておけないと言う気持ちがふつふつとわき上がってきた
原作破壊は嫌いだけど・・・ちょっと位関わってもいいよね？って最近想い初めてきたんだが、俺は断固拒否する
だってさ、あれだよ？原作一筋の俺がいきなり「原作なんて知ったこっちゃねぇ！！」とか言いながら原作じゃ考えられない行動なんてして見ろ？

・・・・未来が変わる。確実に。
そんなことを考えながら、俺ははやての後姿を見ていた
・・・・これストーカーじゃね？って思ったので、俺は思い切って
声をかけてみる事にした
「あー・・・大丈夫か？」
「あっ・・・・君、朝会った・・・」
朝のこと覚えてたんかいってツッコミをいれたくなった
いや・・・普通に朝起きたことなんて覚えてられるか？
俺は夜型人間だから、朝は基本寝てるしなぁ・・・
「えぇっと・・・君、名前は？」
「・・・そーま。天城蒼痲。」
とりあえず、名乗る事にした
まぁ・・・・アレだ。
友達にはなる気はねぇけど、知り合いＡにはなるって寸法よ。
「蒼痲君って言うんや・・・あ、私は八神はやて。」
「はやて・・・か。良い名前だな。・・・よっ」
はやてが名乗ると同時に、俺ははやての車いすを押した
すると、はやてがわたわたと驚いた表情をしていた

「え、えぇよ。私、大丈夫やから・・・」

「細けぇ事ァ気にすんな。いんだよ。俺がなんとなーくやりたくなっただけだから。」

「なんとなーくって・・・」

そういいながら、俺は車いすを押した

意外と軽いなぁ・・・そんな事を思いながら俺は図書館に向かい歩き出していた

いやー・・・・こうも簡単に話が進むと怖く感じるのは俺だけじゃないはずだ

「ありがとう。蒼痲君」

まぁ、はやてに会いに行くのが目的で図書館に来た訳なんだけど、俺は特にやることがないわけで・・・

「んじゃ、俺帰るわ」

「え・・・？蒼痲君って、図書館に用があったんやないの？」

「あー・・・・実はただ散歩しに来たわけだったり・・・」

まぁ、さらっと嘘言ってるけど、そこらへんはスルーで。
ふっ・・・思いついた嘘は以外と速攻で言えるんだぜ？そりゃぁもうサイクロンの如く

「へぇ・・・あ、蒼痲君、学校は？」

「学校？あー・・・俺最近越してきたから、学校も何もなぁ・・・」

とりあえず、新しく引っ越してきた少年Aを装っておく
はやては簡単に騙されてくれて「へー」って言ってる
・・・なんか、騙してる俺にめちゃくちゃプレッシャーが・・・

「へぇー・・・お父さんとか居るん？」

「・・・母さんは駄目親父に愛想尽かして逃げた」

とりあえず、はやて達原作キャラの間ではおっさんの地位を陥れることにした
だってさ？あれだよ？こっちが風呂洗いとかしてるのに、呑気にお笑い番組観てるような奴だぜ？

「え！？」

「まぁ、そんなこんなでおっさ・・・その駄目親父と一緒に居る。」

「へ、へぇー・・・」

まぁ、複雑な家庭で生まれたのは前からそうだったから、特に何も思わないしなぁ・・・

子供からしたらとんでもなく心配する内容なんだよなぁ・・・

・・・俺からしたらはやての方がよっぽど心配だけどな

「あ！！そろそろスーパーの安売りの時間！！」

図書館の前で俺は腕時計を確認して驚いた

まずい！！このままではおばちゃん達のラッシュに飲み込まれる！！

「へ、へぇー・・・蒼痲君って大変なんやね」

「もう慣れたよ。んじゃ、はやて！」

そういって、俺は図書館の自動ドアの前まではやてを押して、自動ドアが開くと同時に振り返り、ダッシュの準備をしていた

ふとはやてを見ると、少し悲しそうな顔をしていた

・・・・・やっぱり放っておけない・・・

「またな！！！」

何故か、俺は「また」会おうと彼女に言っていた

それは凄く自然で・・・自分でも何を言っているのか途中から理解

不能になった
え・・・？なんでそんなことといってんの？俺？バカなの？死ぬの？
だってさ、あんなに原作破壊嫌ってるくせに原作キャラに「また会おう」ってどうよ？

「あ、うん！また！」

・・・・・かわぇぇぇぇ！！
別にロリコンってわけじゃねぇけど、はやてめっちゃ可愛い！！
いや、マジで惚れそうな位！！
・・・・まぁどうせ俺に運命の人なんて現れないけどさ？夢くらい見ても良いじゃん？
やべぇよ、今日フェイト達と会うけど、負ける気がしねぇよ
バグなんてちょちょいと倒せそうな気がしてきてならねぇよ！
後ろではやてが手を振ってるのが分かった瞬間、俺の足がマスタースパーク！！！
やべぇよ！！荒れ狂うおばちゃん達も今じゃ勝てる！！
ｋｔｋｒ！！勝つる！！

もうすぐクロノが現れるであろうと心で思いながらも、俺はホクホク顔でお買い物を楽しんでいるわけですよ。
いやー、すげぇよはやてパワー。
９８円の卵がすぐ買えたよ。やべぇ・・・すげぇはやてパワー・・・

「さぁて・・・」

家に帰って、ちゃんと戸締りの確認を終わらせて、財布を持ったかを確認して
俺は家の前に出た

そして、拳を握り・・・

「っしゃあ!!」

気合を入れた。
まぁ、某仮面ライダーの龍の騎士さんの主人公のモノマネだけどね。

っしゃあ!!張り切って行きますか!!

九章　すげぇなオイ！（後書き）

「・・・・感想が来ないｏｒｚ」

蒼痲「知るか。」

「いやー・・・やっぱ蒼痲の性格が悪いのか？」

蒼痲「何もかも俺のせいにするな。俺は無関係だろーが」

おっさん「いんや、どーだろぉねぇ・・・そーまの性格もあるんじゃねぇの？」

蒼痲「げっ・・・おっさん・・・」

「おぉ、おっさん！あんた大丈夫なのか！？」

蒼痲「よく生きてたな。死ねばよかったのに」

おっさん「え？何？おっさん、なんでそーまに嫌われてるの？」

蒼痲「元々嫌いだ。」

「あー・・・・とりあえず、また次回のあとがきで！！」

蒼痲「無理矢理締めた！？」

おっさん「そーまー！！デュエルしよーぜー！！」

蒼痲「はぁ・・・・はいはい。」

十章　空気は読みましょう。

神様から当てられたパワーを駆使し！俺は大地を駆ける！
原作なんて知るもんか！さぁ行こう！無限の彼方へ！

・・・なぁんて中二設定のことは断じてしない。

中二病って奴は、男が生まれて一回は経験する、言わば門みたいな物だ。
いつまでもその門の前で立ち止まるなｋｓって言ってやりたいけど、言う相手が居ないので仕方がない

まぁ、そんなわけで、俺は今淫獣の野郎が張った結界（笑）の中で、呑気に散歩中

あー・・・少し前にフェイトがプレシアに鞭打ちされてたって考えると、何か心の中がもやもやするなぁ・・・

「おっ、見っけ」

目の前では、巨大な木のデカ物がフェイトの攻撃をバリアで防いでいた
多分、アルフがバリアなんて生意気な！的なことを言ってる気がする

改めて見ると・・・・
うん。フェイトの衣裳ってアレだよね？やっぱエロいっつぅか・・・
際どいよね。

あれ？これ前にも言ったっけ？デジャヴ？

別にロリコンってわけじゃない。・・・多分。
流石に同性愛は無理だけど、ロリはまだイケるってだけ。
そこ、「嘘つけ」とか思ったろ？
俺はヤンデレの幼馴染がいい！！いや、まじで！！
スタイルは抜群だと嬉しいなぁ・・・
特に胸とか、太ももとか

まぁ世の中ゲームみたいに進むなんて思っちゃいねぇけどな（笑）

『貫け轟雷！！』

あ、そろそろ決まる。

フェイトが放った電撃と、なのはの砲撃が重なって、木のデカ物を押し潰して・・・
うわーぉ、シュールな光景（笑）

あ、ジュエルシード出てきた

すげぇな・・・・
・・・・あ、フェイトに二千円請求しないと・・・
でもなぁ、この後のクロノの出しゃばる所見たいし・・・

うーん・・・二千円は後回しにするか。
仕方ないし。

『ジュエルシードには・・・衝撃を与えたらいけないみたい・・・
この前の奴らが出てくるから』

『そうみたいだね・・・前は蒼痲君が居てくれたからいいけど・・・
今度は、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも、また傷ついちゃうね・・・』

・・・・は？
今なんつった？

ジュエルシードに衝撃を与えてバグが出てきたってのか！？
バグセンサーに反応は・・・・無い。
なら、今回は出ないパターン？
良かったぁ・・・筋肉痛で体痛いし、何もかもやってらんねぇ中で
また戦うのは俺にとって悲劇なんだよなぁ・・・

いやー、良かった良かった。そろそろクロリン（笑）もくる頃だし、
ゆーっくり見学させてもらうか

『ストップだ！』

あ、来たｗｗｗｗ
おー、ホントにデバイス受け止めてやがる。

『ここでの戦闘は危険すぎる！』

時空管理局のどこどこ所属の誰誰なんていいんだよ！
とりあえず、そのＫＹ行動を観察させてくれやｗｗ

『詳しい事情を聞かせてもらおうか！』

ほんっとKYだなぁって実感するよ。
しかし・・・こうやって見るとほんとシュールだよなぁ・・・
あのちっこい体のどこにデバイスを受け止める力があるのか、本当に気になるぜ

「そこの君もだ！」

「ふえ？」

突然呼ばれて、俺は驚いた
え？なに？お前のKYって、俺にも及ぶ訳？
フェイトとなのはがクロノと一緒に地上に着地すると、俺が居る木に向かい話しかけてきやがった

「君も降りてきたらどうだ？」

「めんどーだからパス。俺一般人だし。」

「そ、蒼痲君！？」

とりあえず、両足を木に引っかけて、逆さまになりながら応答した
おー・・・世界がとんでもねぇことになってるー
そんな俺の顔を見て、なのはが驚いたように声を上げた

「おー、全部逆に見えるー。当然っちゃ当然だけど・・・」

「君は、どうしてここに居る？」

ＫＹ野郎がぺちゃくちゃぺちゃくちゃ話し始めたので、俺は無視して逆の視点から見える世界を堪能していた
おー、頭に血が上ってるのが分かる・・・めっちゃ頭痛ぇ
ん・・・・？なんかジュエルシード若干光ってね・・・？

「聞いているのか！」

「おーい、時空なんとかだっけ？そこの魔法使い（笑）さんよぉ。」

「時空管理局だ！！それと、魔法使いじゃなくて・・・」

「アレ」

とりあえず、おちょくるように言った
クロノは不機嫌そうにこちらを睨んでくるが、俺はクロノの言葉を無視して、そのまま右手を上げて、ジュエルシードを指差した

「だからなんだと・・・・・！？」

ジュエルシードから黒い闇の霧のような物が溢れだして、黒い何かを生み出していた
あー・・・これがさっきなのは達が言ってたバグの登場・・・
なーる。理解理解。

「な、なんで！？衝撃は与えてないのに！？」

やっぱりなぁ・・・原作破壊を望んでるバグにとって、俺が管理局と関わるのが一番嬉しいらしいな

運が良ければ、原作キャラと仲良くなれるし、あっちも何かしら行動を起こしやすいんだろうな
まぁ、俺が相手じゃ難しかっただろうな（笑）

「あー、まためんどくせぇのが出たなぁ」

「君はアレがなんなのか分かるのか！？」

驚いたような顔でこっちを見てくるクロノ
まぁ、知ってるっつっても、少しだけなんだけどネ

「知らん。俺は趣味でアイツ等と戦ってるだけだし。」

「しゅ、趣味！？」

「とりあえず、さっさとしないと、ジュエルシードがまた暴走するぞー？」

黒い霧は人型の・・・ハートレスのシャドウって言えば分かると思うけど、その姿になって、なのは達を襲い始めた
俺は逆さまになってるせいで、頭に血が上って、少し休憩しないと、マジでやばくなってきた・・・
うえっ・・・気持ち悪っ・・・

「き、君は戦わないのか！？」

「ごめん。ちょっと休ませて・・・うえぇ・・・気持ち悪っ」

「君は一体なんなんだ！！！」

そう言われてもなぁ・・・
俺の存在なんて、世間一般で言う社会のゴミって奴だからなぁ・・・

「なんなんだ・・・ねぇ・・・うーん。」

とりあえず、足と腕を組んで考えるフリをした
だって、アレだよ？俺だって一応考えて行動する人なんで、それなりに考えたりするんだぜ？

・・・・あっ、クロノ殴られた。
ざまぁｗｗｗ

でも、なのはとフェイトもキツくなってる頃だし、ちゃっちゃと終わらせて醤油煎餅でも食べるかねぇ

「めんどくせぇなぁ・・・・・変身」

そう呟いて、俺はストライクフォームではなく、新しい力を解放したストライクによく似ているが・・・手にしている力はまったく違うと言える
この姿は・・・インパルスフォーム
新たな俺の力だ。

「さぁ・・・・・・」

右手でシャドウを指差すように構えて、右手を握る

「お前の罪を数えろ！！」

別に決めポーズと言うものではない。決め台詞もパクったものだし。
だが、一つだけ言えることがあった

「とっとと終わらせてやる」

そういい、俺はビームライフルでシャドウを狙撃した
向かってくるシャドウには得意の体術で回し蹴りと、上段蹴りを食らわせてやったり
興味本位で竜巻旋風脚をやってみた
・・・でも、やっぱ難しいんだよなぁ・・・
背中のブースターとかもなんだかんだで重いし・・・

「食らえェェェ！！」

まぁ、新たな力を解放して、簡単にシャドウが減る訳でもなく、一体一体確実に消していった
そんなこんなで、シャドウは消えて、ジュエルシードの暴走も収まり、俺はジュエルシードを掴んだ

「・・・封」

小さく呟き、まるで封印しているかのように蒼い光が辺りを包んだ
だが、実はやっていることは全然違う
封印はおまけみたいなものだ。
俺は、バグセンサーで、ジュエルシードの中を見ていただけだ
だが、何も得ることはなかった

バグが入った痕跡もなければ、中に何かを仕組まれていた痕跡もなかった

・・・結局無駄骨ってわけか・・・

「・・・・・・」

まぁ、持ってても仕方ないので・・・
またフェイトにでもくれてやるか・・・
でもなぁ・・・それが原作破壊に一歩ずつ近づいて行くんだよなぁ・・・
もう始まってるけどさ（笑）

後ろを振り向くと、フェイトとアルフが何か言いたげにこっちを見ていた

「はぁ・・・・・」

ため息をついて、一言言った

「その言葉は、また今度言ってくれ」

「え・・・・？」

「んじゃ、さいならー」

くるっと回ってその場を去ろうとしたら、がちゃりと金属音が鳴った
あーぁ・・・クロノめ・・・俺のこと捕まえようとしてるな？

「動くな。それは・・・」

「どーでもいい。ロストロギアだか、ロストビーフだか知らんが、俺が封印した。それとも何か？新しい主人を見つけたこの宝石を奪おうってのか？時空管理局って奴ァ、随分とケチ臭ぇんだな」

「君はそれの危険性が分かっているのか！？それは・・・」

その時だった、クロノの後ろから何かが空に舞う音がした

あ、フェイトとアルフが逃げた

「逃がす訳には！！」

クロノが動いた瞬間、俺がクロックアップにも勝るんじゃないかと思えるほどのスピードでクロノの前に立った

「動くな。お前、動いたらこの宝石がどーなっちゃうか知らないよー？」

人差し指と親指に力を込めるフリをした

すると、クロノが俺にデバイスで殴りかかってきた

・・・確かにキレのある言い攻撃だ。でも・・・

「それ。」

「っ！？」

隙だらけの顔に握った拳を寸止めで止めておいた

魔法とかじゃ勝てる気がしねぇけど、伊達に１０年以上武術学んでねぇよ

「やめとけ。体術じゃ、お前は俺に勝てない」

「・・・・・っ！！」

「無駄だ」

クロノが何もしないかのように見せかけて、俺に攻撃を仕掛けようとデバイスを構えた瞬間だった

俺の左手がクロノのデバイスを掴んで阻止させた

「何度でも言ってやる。体術だけじゃ、お前は俺に勝てない。俺に勝ちたいなら、棒術の道場にでも通うんだな。」

俺がそういうと、クロノがデバイスを下げた

まぁ、無理矢理黙らしたんだけどさ

フェイトはどっかに消えたし、俺もこれで帰れる・・・

「んじゃ、俺帰ｒ『それは困るわ』

Σ（０ｗ０）ウェ！？」

いきなりクロノの横から魔法陣が展開して・・・

あー・・・・嫌な予感しかしねぇ・・・

俺が艦長・・・リンディ・ハラオウンの話を無視して、そのまま去ろうとした時だった

「君も一緒に来て貰おうか。」

ほーらね。嫌な予感的中。

どーせ帰っても何もすることねぇし・・・しゃあねぇか。

十一章　無理しちゃいかんよ

うわーい☆
なんか変な空間に飛ばされちゃったぞー☆（棒読み）

はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・
もうヤダ。帰りたい。
帰ってアマガミやりたい・・・・

あぁぁぁぁぁ・・・・働きたくねぇよー・・・
管理局の犬的なポジションになりたくねーよ・・・
そういえば、前の世界でバイトしてたけど、シフトとかどうなってるんだろうと思い始める今日この頃・・・

「うわー、広イヨー（棒読み）」

「そ、蒼痲君、なんで棒読みなの？」

「いや・・・なんとなーく」

だってさ？この後何があるか分かるんだぜ？
こんな無駄にバカでかい艦なんて作りやがって・・・
環境を考えろ！今はエコの時代だぞ！！
地球温暖化なめんなよ！てめぇらが艦でうろちょろされると、そのガスが（以下略

で、俺が地球温暖化について、熱く語っている間に、ユーノが本性を現した
といっても、元の姿に戻っただけなんだけどな
なのはがそれをめっちゃ驚いて、クロノがクールな表情を崩さないように艦長の居る場所まで誘導してくれた
まぁ、俺は立ったまま寝てたわけで、なーんも話しなんて聞いちゃいなかったけどね。

んで、時間は経過してアースラの食堂
なのははユーノと一緒にご飯を食べている。
俺はというと・・・

「えぇっと・・・スカノヴァを出すにはまず・・・終末の騎士を召喚して・・・墓地にディアボ落として・・・その後におろかな埋葬でゾンキャリを墓地に・・・」

呑気にスカーレット・ノヴァドラゴンデッキを編集中というわけですよ
ずらーっと遊戯王のカードを並べて、そのままデッキの編集と、構築・・・
まぁ、暇つぶしをしているわけである。

「君は何してるんだい？」

すると、クロノが俺の方に来て、俺の席の前に座った
・・・よく見ると、ほんっとこいつってイケメンだよなーって思う
カッコいい服着せればきっと年上の人でもほっとかないぞ・・・

「いんや・・・ちょっと暇つぶしをな。」

「そうか・・・君のことだ。話をしてもまともに聞いていなかったのだろう？」

「まぁな。ずっと色んなこと考えてた。今日の献立とか、おっさんをバレないように殺す術とか・・・」

「・・・君の内事情に深追いはしない・・・だが、問題はあの存在だ」

あー・・・ハートレスね。
俺が勝手に名付けただけだけど、その呼びかただけで十分だろう
闇の存在なんて言ったら、魔物と言うカゴテリーに収まってしまうだろうし
適当な名前でもつけてやればいいっていう結論に至った

「ハートレスの事か？」

「ハートレス・・・それが、あの黒い存在の名称なのか？」

「まぁな。俺が勝手に名付けただけだけど。・・・あれはお前達じゃ一生知る事はないな。諦めな」

とりあえず、深追いしないように釘をさしておくことにする
あれがどんな存在で、どうすればいいのか聞きに来たのだろう。

まぁ、俺も知らないんだけどネ・・・

「しかし！君が情報を言わないと！犠牲者が出るかもしれないんだぞ！？」

「知るか。第一、俺がお前達に情報を与えて得があるのか？仮に人が助かっても、俺はただの一般市民。どーせ俺にゃぁなんにも出されないんだろ？出されるとしても書状だけだろ？そんなもん、いずれは捨ててなくなる」

なのはの一期の最後を見た時、なのはに渡されたのは書状だけだったような記憶がある
どーせ俺もそんなものだろう。
そんなもん、いずれ捨ててなくなるし、なのは達の地球で持ってても仕方がないというものだ
そんな中、クロノが静かに言った

「しかし・・・」

「まぁ、別段欲しい物もないし、俺は徳のない事はしない主義（嘘

だけどね）だから。金銭面でも困ってないし、生活面でも困ってない。・・・出直してくるんだな」

さらっと嘘を混ぜながら、俺は編集していたデッキをデッキケースの中に入れて保管

ちゃんと全部あるか確認して、俺は食堂に闇の回廊を開いた

「んじゃなー。俺は暇つぶしに海でも眺めてるさ。」

そういい、俺はアースラから去った

・・・・・どこに向かったかなんて分かるだろ？

そう！俺が居るのはフェイトがジュエルシードを強制発動させる場

所！・・・・の海の中

さすがに、何もない空中で見学してたらばれるじゃん？

いやー、インパルスって凄いな。
アビスガンダムみたいに水ん中入ってもなんも起きないんだもん（笑）
ストライクになって海に突っ込んだことがあったんだけど、その時は通常の3倍以上のスピードで魔力が飛んで行ったね。
いやー、すげぇすげぇ・・・
酸素ボンベ的なものもあるし、ちゃんと水の中で息できてるのが一番嬉しいよ・・・
インパルスは、ストライクよりも、扱いやすいと分かったぜ・・・

・・・・って、あれ？
なんか、波が段々荒くなってくんだけど・・・？

って、渦巻いてる！？やばくね！？これまずくね！？

い、急がねぇととんでもないことになる！！
ちょ、早く這いあがらないと！！

ここで、問題です。

俺は何メートルくらい沈んでいたのでしょうか？
1、10メートル
2、5メートル
3、15メートル

４、ウホッ、いい男・・・

さぁどれ？

正解は・・・・３でしたー♪

だってさ？１０メートル潜ってたら、すぐに見つかりそうじゃん？かといって、１００メートルなんてトコに行ったら、見れなそうじゃん？つか、水圧で潰される。

んで、間取った結果がこれだよ！！

「ウヴェヴェヴェヴェヴェ！！！アボゴぼぼぼぼぼぼ！！」

もう自分で何言ってるのか分からない！

水すげぇー！やべぇ、水怖い！！

ちょ、鼻に水入ったんですけどぉぉぉぉぉ！！

めっちゃ鼻痛い！やべぇよ！もう嫌！帰りたい！！

「ブヴォばヴォベデェェェェェェ！！！（誰か止めてーーーーーー！！！）」

おまけになんかビリビリする！

ビリビリ少女に攻撃されてるわけじゃないけど、めっちゃ痛いぃぃぃぃぃ！！

何これ！？拷問！？俺にそんなに恨みでもあるのか世界の意志とやらはぁぁぁぁぁぁ！！

おっさんめぇぇぇぇ！こうなること予知してたらぶっ殺してやる！

絶対に殴るだけじゃ許さねぇ！アイツのレモンを俺のスカノヴァでボッコボコにしてやるぅぅぅぅ！！
ふとおっさんの顔を思い浮かべると、おっさんはニタニタした顔で俺を見下すようにこっちを見ていた

おっさんの野郎ぉおおおおおおお！！
俺の不幸がそんなに嬉しいのかこの野郎ぉおおおおお！！
ならはっきり言ってやる！
ビリビリだろぉがバリバリだろうが鼻が痛かろうが知ったことか！！
全力で叫んでやる！！！

「おっさぁぁぁぁぁぁん！！帰ったら目ん玉抉りだしてやるからなァァァァ！！！」

その時、俺は怒りにまかせて登場していた
なんか、近くからユーノ達がめっちゃビックリした顔で俺を見てた気がする・・・

十二章　チートドローじゃねぇ！運が良いだけだ！

「うぉおおおおおお！！！」

なんか怒りにまかせて持ってたインパルスの盾を思いっきり近くに渦巻いていた渦に向かってぶん投げた
その後、ブーメランみたいに回転する盾に向かってビームライフルで打ち抜いた
回転している盾に攻撃すると、盾がビームを反射して、遠くの渦を打ち抜いた

「コンチクショウがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ブースターに魔力を最大限まで送り込み、そのままの勢いでフォースシルエットと分離した
シルエットはそのまま渦に突っ込んで行って、渦の中に入る瞬間を狙って、俺がビームライフルで射撃

すると、渦に入ると同時に俺のビーム弾が直撃。
渦の中で爆発が起きて、その渦は消え去った

この時、俺は左手に違和感を感じた・・・
さっきまで盾のあった左腕に、なんか、どこかで見た事あるようなものがくっ付いていた

・・・・なんでデュエルディスクあんの？
ご丁寧にもデッキ入ってるし・・・

何か知らないけど、俺の左腕に勝手に装備されていたデュエルディ

スク（蟹さんの使ってる奴の改良版で、なんか全体的に赤い）が黒い光を放つと、インパルスフォームとなっていた俺の装備は勝手に解除されて、足元になんか魔法陣のような足場が現れて、俺はその場に着地した

「・・・・なんか嫌な予感・・・・」

その予感が的中したのは5秒後のことだった
なのはが俺の元までご丁寧にも飛んできたのだ

「そ、蒼痲君！大丈夫！？」

「あぁ・・・なんとかな。」

「・・・・・・」

その近くで、フェイトが無言で俺を見ていた
まぁ、そりゃ戦場だってのに、学校の制服（ご丁寧にも夏服で、半袖で、長いズボン）で知りもしない魔法陣の上に立ってりゃそうか・・・

「蒼痲君、その格好、どうしたの？」

「知らん。」

なのはが心配そうに俺を見て言ったが、俺はそれに1秒も隙を与えることなく返した
だってそうじゃん？俺だって知らんよ。こんな格好・・・

・・・つか、なんか一つ渦が真っ黒に染めあがってるんだけど・・・

俺が黒い渦を見つめ、なのはとフェイトがそれに気付き、振り向いた瞬間だった

『グルァァァァァァ！！！！！』

『キシャァァァァ！！！！』

なんか出たァァァァァ！！！！

前に俺を苦しめたバグ魚が何十匹も出てきたんだけど！？

しかも、一番奥にやばそうなバグ魚の親玉的なのが居るんだけど！？

「な、なんなのあれ！？」

「亜種だな。いつものハートレスは陸と空を自由に動き回れるけど、アイツ等は海と空を自由に動き回れるな。」

「な、なにそれ！？」

とりあえず、なのはにも分かるように説明した俺に「説明乙」とだけ言っておこう

この前戦った時は一匹だけだったのになぁ・・・

そんな中、俺達に向かい、一斉に水のブレスを溜めるバグ魚・・・

やばくね！？これ、俺に死ねっていってるようなもんじゃね！？

今の俺飛べないのよ！？さっきからストライクになろうと必死に変

身しようとしてるのに、なんかロックされててできねぇし！！
待て・・・落ち着くんだ俺・・・
とりあえず、今はデュエルディスク（コイツ）をどう使うか考えねぇと・・・

とりあえず、デュエルディスクを起動させてみた
すると、デュエルディスクは勝手に起動して、あっというまに展開した

「・・・・・・」

俺は無言でカードを五枚ドローした
どうやら、このデッキはさっきまで俺が編集していたセイヴァーシューティングノヴァデッキのようだ。

「蒼痲君！早く逃げて！」

「お前等、離れてろよ！！」

俺はそういい、カードを一枚ドローした

・・・ちょっと待て。なんだこの手札事故は・・・
なんでディアボが2枚とも手札に居るんだよ・・・
まぁ、後は二重召喚と、チェンジ・シンクロンとダーク・グレファーとバトルフェーダーか・・・
これなら案外楽にデュエルが進みそうだな・・・

「行くぜ、俺のターン！俺は手札のＤ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイを墓地に送り、ダーク・グレファーを特殊召喚！！」

すると、俺の前にダーク・グレファーが実体で現れた
やばっ・・・結構怖っ・・・
だが、今はそんなことを考えている場合ではない・・・
とっととデュエルを展開しないと、とんでもないことになる・・・

そして、手札に居たチェンジ・シンクロンを手札の一番端まで順番を変えると、俺はダーク・グレファーのモンスター効果を発動した

「ダーク・グレファーのモンスター効果！手札のチェンジシンクロンを墓地に送り、効果を発動！デッキから、ゾンビキャリアを墓地に送る！！」

チェンジシンクロンを墓地に送り、そのままデッキを見てデッキからゾンビキャリアを墓地に送った
その後、デッキをシャッフルし、デュエルディスクに入れた

さて・・・
こっからがこのデッキの真骨頂だぜ・・・！！

「墓地のゾンビキャリアの効果を発動！手札のＤ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイをデッキの一番上へ！墓地のゾンビキャリアを特殊召喚！そして、ディアボリックガイのモンスター効果を発動！墓地のこのカードを除外して、デッキから、ディアボリックガイを特殊

召喚！」

ふぅ・・・これで俺の場は整ったな。
まさか、ディアボが実体だとこんなにカッコいいとは思わなかった・・・
・・・ゾンキャリはなんか不気味だけどな

「行くぜ！レベル６、Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイに、レベル２、ゾンビキャリアをチューニング！」

ディアボリックガイとゾンビキャリアが飛び出して、バグ魚達の居る所まで飛行して向かっている・・・
それに驚いたのか、バグ魚達が一斉にディアボリックガイとゾンビキャリアに攻撃を仕掛けた
だが、そうなる前に、ディアボリックガイとゾンビキャリアは球体となり、６つの青い球体に、２つの青い球体がくるくると回転していた

・・・やべぇ、なんかテンション上がってきた・・・！！

この時、実はどっちのモンスターをシンクロ召喚しようかと迷っていた
だけど、なんだかあのバグ魚を見て、俺は決めた

こんな状況なら、俺はこう出るね

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！」

力で攻めよう・・・
アイツ等が反撃できないようなドデカイ一撃でこの場を切り抜けられる、純粋な強さを・・・
俺が長い台詞を言う終わるや否や、８つとなった球体は一筋の赤い炎を発して、今まさに、王者の降臨を待っていた

「我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！！！」

『グルアアアアアアアアアアアア！！！！』

その炎は、激しく燃え上がり、ゾンビキャリアとディアボリックガイに向かって放たれた水のレーザーを一瞬で蒸発させた

なんつぅ炎だよ・・・
心ではそう思っていながらも、俺は今猛烈に感動していた・・・

今、俺の目はきらきらと輝いている気がする・・・
まるで、街の危機に颯爽と現れるヒーローを見た子供のような顔・・・

「すげぇ・・・・」

勝手に口が動いていた
そのまま、俺は口を動かし、この喜びが嘘でないかを確かめるように、その場で跳ねた

「すっげぇすっげぇすっげぇ！！本当に、レッド・デーモンズ・ドラゴンが居る！！！」

本当に少年のように、心から喜んでいる気がする・・・
バカみたいに声を出しているが、それよりも喜びが大きかった

心の底から喜んでて、なんか・・・言葉に出来ないくらい嬉しかった
はっ、と現実に帰り、俺は先ほどまでの自分の行為に若干恥ずかしがりながらも、俺はバトルフェイズに移行した

「っしゃあ！バトル！レッド・デーモンズ・ドラゴン！その業火で敵を焼き尽くせ！灼熱の・・・クリムゾン・ヘルフレア！！」

まだテンションが高いせいで、攻撃名を高らかに言う俺・・・
でも、全然恥ずかしくはなかった
ジャックは毎回こうやって戦っているのか・・・そう思うと、俺は羨ましいと言う気持ちと、今こうやってジャックのように戦っている自分がとてもいい経験をしているように思えた

レッド・デーモンズ・ドラゴンは、俺の掛け声とともに、灼熱の炎を放った

その炎を見て、驚き防御体勢をとり、レッド・デーモンズ・ドラゴンの灼熱の攻撃を防御するバグ魚が８割近くいた

そんな中、果敢にも放たれた攻撃に向かい水のレーザーを放つバグ魚が２割いた
しかし、レッド・デーモンズの攻撃の前に、その攻撃は無となり、レッド・デーモンズの攻撃を止めることができずに、無と化した

攻撃体勢を取ったバグ魚は灼熱の炎に焼け、防御体勢をとったバグ魚はその灼熱の炎を必死に防御していた

しかし、2割のバグ魚が消滅し、防御体勢をとっていた8割のバグ魚は今か今かと、炎が止まるのを待っていた

だが、レッド・デーモンズのモンスター効果を忘れて持っては困る

「レッド・デーモンズ・ドラゴンのモンスター効果！このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する！焼き尽くせ・・・アブソリュート・パワーフォース！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが雄叫びを上げると同時に、防御していたバグ魚は全て消え去り、残されたのは先ほどからこちらをただただ見ていたバグ魚のボスだった

そして、ようやくあの巨体を渦から出すと、その大きさに俺は驚きを隠せなかった

デケェ・・・あまりの大きさに正直、恐怖を感じていた

詳しい大きさを言うと、地縛神と同じくらいのデカさ・・・

本当に大きくて、見ているだけで吹っ飛びそうになるくらい怖い・・・

でも、俺は臆することなく、そのモンスター（バグ魚）と対峙していた

ふと、デュエルディスクを見ると「すでにバトルフェイズは終了しています」と、表示されていた

おかしい・・・まだダーク・グレファーの攻撃が残っていたはずな

のだが・・・

「ま、まさか！？」

デュエルディスクを見て、相手の場を確認すると、相手の場にはあの巨大なボス魚のイラストの書かれたカードが一枚だけフィールドに出されていた
相手の手札は０で、場に伏せカードは無く、墓地を確認するとバグ魚のモンスターカードが何枚も墓地に送られていた

恐らく、レッド・デーモンズ・ドラゴンが破壊したバグ魚だろう

だが、相手の場をよく見ると、ボス魚のモンスター効果の詳細があったので、それをゆっくりと見ると、俺はキレた

「えぇっと・・・効果は「このカードがフィールドに存在する限り、相手はバトルフェイズ中、一度の攻撃しかできない。
このカードはフィールド魔法が無ければ自分のターンのエンドフェイズ時に破壊され、攻撃力の数値分、お互いはライフポイントにダメージを受ける
フィールド魔法が存在する時、以下の効果を得る
●このカードは相手に直接攻撃する事が出来る。
●このカードは相手モンスターの攻撃対象に選択する事が出来ない」
攻撃力３５００、守備力３０００・・・ふざけんな！インチキカードもいい加減にしろぉ！！」

なんだよそのガチャピン（満足神）の強化バージョンは！！
インチキ過ぎんだろ！！インチキなんて問題じゃねぇ！これはチートだろ！！

チートカードもいい加減にしやがれ！！！
ん・・・？でもフィールド魔法って・・・

「フィールド魔法って・・・海の事か！？」

自分の下に広がる海を見て驚いた
まさか・・・海の効果で攻撃力上がるんじゃね・・・？
なんか、水属性っぽいし・・・

「くぅっ・・・・レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果で、攻撃できなかったダーク・グレファーは破壊される・・・俺はターンエンドだ」

俺はターンエンドして、相手のターンとなった
その時、フェイトとなのはが俺の方に向かい飛んできてくれた

「そ、蒼痲君・・・な、何やってるの・・・？」

「・・見て分かる通り。決闘（デュエル）」

「でゅ、デュエル・・・？」

なんか、フェイトが少し不思議そうに俺を見てきた
まぁ、そりゃそうだろうね・・・
見た事ない方法で戦ってるんだから、当然っちゃ当然だよな

「遊戯王って聞いた事あるか？そのカードを組み合わせてデッキを作って、それで戦う。はい。説明終了。」

まぁ要点を纏めればだいたい合ってるはずだ
そうやって適当に説明してやって、俺はあのボス魚に向き直った

ジュエルシードはどうやら・・・アイツの中にあるようだ
アイツからジェエルシードの波動を感じるし・・・
どうやら、アイツを倒さなきゃ、ジュエルシードも回収できなければ、物語が進む事もできない。
おっさんの予知した「なのは」と「フェイト」の死が実現してしまうらしい・・・

なら、俺がそうならないようにするしかないようだ

すると、いつの間にか相手のターンのバトルフェイズとなっていて、あのボス魚は口にとんでもないほどの魔力を集めていた

その標的は・・・・俺ェ！？

「ちょ、まさかの俺へのダイレクトアタックかよ！？」

「そ、蒼痲君！はやく逃げないと危ないよ！？」

「バッキャロウ！男が決闘から逃げだしてどうする！！」

「えぇッ！？」

とりあえず、俺は逃げずにデュエルを続行することにした
そして、ボス魚は俺に向かい、さっきのバグ魚軍団の攻撃とは比にならないくらいのドデカイ攻撃をしてきた
どうやら、真スターライトブレイカーと名付けた方がいいらしい。
いやー、ドデカイあの攻撃が俺に迫ってるっていうのに、なんか、

全然怖くねぇや・・・

まぁ、このカードのおかげなんだけどさ！

「俺は手札のバトルフェーダーの効果を発動！相手が直接攻撃宣言した時、このカードを手札から特殊召喚！そして、そのバトルフェイズを終了させるぜ！！」

手札からバトルフェーダーが特殊召喚され、あの巨大な攻撃に向かい、笛を吹くと、その攻撃は空に消え去り、バトルフェイズは終了され、そのまま相手は何もせずターンエンドしてきた

「す、凄い・・・あの砲撃を止めるなんて・・・・」

フェイトが驚きを隠せず、素直に俺を褒めてくれていた

まぁ、嬉しいっちゃ嬉しいんだけど・・・

なんか、むず痒いというか、なんというか・・・

「俺の・・・・」

このドローで、全てが決まる・・・

サンダー・ブレイクなどの破壊カードを引けば、俺は勝利する

だが、ネクロガードナー等のモンスターだったら、状況は悪化する・・・

このドローで全てが変わる・・・

そう考えると、不思議とワクワクしてくるんだよな・・・・！！

「ターン！！ドロー！！！！」

昔から、俺のドローは主人公補正だと、友達から言われてきた
本当にピンチの時、俺に必ず何か一発逆転のカードを引くからだ
でも、そのカードを使っても一手足りなくて負けた事もある。
それでも、俺はデッキを・・・カードを信じて、ずっとデュエルし続けてきた
負けない・・・いや、負けられない！

「・・・・！？」

俺にはやっぱり主人公補正のようなものがあるらしい
俺が引いたカードは・・・
救世竜・セイヴァー・ドラゴン・・・

「っしゃあ！やっぱ、デュエルはこうでなくっちゃな！ピンチな時こそ、諦めない！それが俺のデュエルだ！！」

「そ、蒼痲君？何言って・・・」

「これから、それを見せてやるぜ！」

なんか、なのはの言ってる事を全体的に無視して、俺はデュエルを続けた
そんな中で、遅れて俺の方に向かってきたアルフとユーノ・・・
俺の本当のデュエルを見せてやるぜ！

「俺は手札から、救世竜　セイヴァー・ドラゴンを召喚！」

小さな竜が現れ、その竜がバトルフェーダーの横を飛翔している

そして、俺は拳を握り、叫んだ

「レベル８のレッド・デーモンズ・ドラゴンにと、レベル１、バトルフェーダーに、レベル１、救世竜　セイヴァー・ドラゴンをチューニング！！」

うっし！こっからがキング（王）の魂の見せどころって奴だ！
空高く飛翔する竜・・・
俺はその竜を見つめ、あの長ったらしい台詞を言った

「研磨されし孤高の光、真の覇者となりて大地を照らす！光輝け！シンクロ召喚！大いなる魂、セイヴァー・デモン・ドラゴン！！」

セイヴァー・デモン・ドラゴンが空に飛翔し、その力強い姿を現したその勇ましい姿を見て、ユーノ達が驚いたように言った

「凄い・・・・」

「綺麗・・・・」

雄々しく、そして力強いあの姿・・・
力の象徴と言っても、過言ではないだろう
アニメでも、赤き竜の化身としてセイヴァー・スター・ドラゴンと共にダークシグナーを倒し、地縛神を封印した・・・

その姿に俺も見惚れてたわけで、遊戯王をやってて良かったと言う気持ちがこみ上げてきた

「セイヴァー・デモン・ドラゴンの効果を発動！相手フィールド上のモンスターの効果を無効！そして、そのモンスターの攻撃力分こ

のカードの攻撃力をアップする事ができる！パワー・ゲイン！！」
セイヴァー・デモン・ドラゴンが雄叫びを上げると、ボスの身体から赤いオーラが現れて、セイヴァー・デモン・ドラゴンがそれを吸収していた
そして、俺はバトルフェイズに移行した
「バトル！」
俺がバトルフェイズに移行するや否や、セイヴァー・デモン・ドラゴンは空高く飛び、今か今かと俺が攻撃名を言うのを待っていた
「行くぜ！セイヴァー・デモン・ドラゴン！奴を葬り去るぞ！アルティメット・パワーフォース！！」
俺が攻撃名を雄叫びのように叫ぶと、セイヴァー・デモン・ドラゴンはそれに答えるように空高く吠えた
そして、灼熱の炎で出来た丸い道を突貫していった
セイヴァー・デモン・ドラゴンに対抗しようと、突貫してくるセイヴァー・デモン・ドラゴンに向かい、水のレーザーを放つボス魚
しかし、攻撃力は遙かに劣り、セイヴァー・デモン・ドラゴンの攻撃を阻む事は出来ず、セイヴァー・デモン・ドラゴンの炎を纏った突撃を受け、身体が貫かれた
ボス魚から黒い血のようなものが空に飛び散り、消えていった
それと同時に、俺の足元にあった魔法陣がふっ、と消え
俺は重力に逆らえる訳でもなく、そのまま落下を開始した

「ぎゃあああああああああああああああ！！！」

「そ、蒼痲君！？」

「っ！？」

ちょ、重力すげぇ！

パネェパネェ！！すっげぇよ！命の危機だってのに、なんかすっげぇ気持ちいいんだけど！！

俺がそんなことを考えながら海までまっさかさまに落っこちてる最中に、突然、俺の落下が止まった

気が付くと、俺は誰かに手を掴んで貰って、落下が止まっていた

「だ、大丈夫・・・？」

上から声が聞こえた・・・

澄んだ声と、赤く、深い瞳・・・

そして、長い金髪の女の子が俺の落下を止めていた

「え・・・・あ、うん」

やべっ・・・ちょっと惚れそう・・・

お、おまけに近いって！いや、そんな目で俺を見ないで！なんかどんどん恥ずかしくなってくるから！！

「・・・・あっ」

いつの間にかセイヴァー・デモン・ドラゴンは消えていて、俺のデュエルディスクには「デュエルに勝利しました」と言う簡単な文字

がモニターに映し出されていた
でも、手札にはまだカードが残っていて「デュエルに勝利しました」の横に「カードをドローしてください」という文字が表示されていた
何？４０００ポイントライフだったの？８０００じゃなくて？
嫌だわー、そんなアニメルール・・・

フェイトは俺の手を掴みながらなのはの近くまで引っ張り上げてくれた
そのまま、なんか知らないけど魔法陣がまた勝手に現れて、俺をそこに降ろしてくれた
隣では二人が空に浮いていて、一度俺を見て、見つめあった
俺も黙ったまま、お互いを見つめあっていた
・・・二人とも、本当に可愛いなぁと思う
まぁ、どうせ俺には一生彼女やら、嫁やらはできないけど、パソコンとＤＳさえあれば、俺は一生幸せに過ごせそうだなぁ・・・

「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

俺達の前に現れる６つのジュエルシード
今頃、なのはが考えて、自分の考えに答えを見つけている頃だろうだが、問題はこの後だ。

プレシア・テスタロッサの魔法が、フェイトとアースラを襲い、アルフが必死にジュエルシードをとろうとするのだが、クロノがジュエルシードを横取りして、ほんの少ししか手に入れられないというオチが待っている数分後

そろそろなのはが「友達になりたいんだ」と言って、フェイトに切り出す頃だろう

・・・・どうっすっかなぁ・・・原作はとっくに破壊されてるけど、俺が自分から原作破壊はしたくねぇなぁ・・・

でも、そうしないとフェイトが痛い目に合うし・・・

なのはも危なくなるし、色々と後悔しそうなんだよなぁ・・・

ふと、デュエルディスクを見た

・・・俺自ら手を下さなければ・・・いいんだよな？俺？

俺は意外と簡単な答えを手に入れた

だが、それが間に会うかどうかは分からない

クイックドローというものを知っているだろうか？

速攻でデッキのカードをドローするという、ちょっとした遊びの事だ

昔、十代みたくカッコよくドローしたかったであろう少年が、デュエルディスク持参で、店内で大失敗してたなぁ・・・

「友達に・・・なりたいんだ」

「・・・っ！！」

なのはが言った瞬間、俺は下げていた左腕をもう一度胸元の前まで

持っていき、ドローをしようとしていた

「・・・蒼痲君も・・・」

「なっ・・・・・!?」

一瞬の迷いだった

デッキの一番上に手をかけた瞬間、なのはに声をかけられた

それが、俺のドローを躊躇した理由だった

そして、突然空は曇り、今まさに雷が落ちようとしていた

紫色の雷が突然俺達の近くに落っこちた

「か、母さん・・・?」

フェイトが不安そうに空を見上げた

なのはも一緒に見上げ、俺には目も向けて居なかった

よし、今がチャンスだ!!

魔法陣を後ろに向かい移動させつつ、俺はドローした

ドローしたカードは・・・魔法カード・・・

これは・・・・?

「俺は、手札から「おろかな埋葬」を発動!俺はデッキからネクロ・ガードナーを墓地に送る!!ターンエンド!」

後少しでフェイトに雷が当たってしまう・・・!!

その前に、状況を整えなければ・・・!!

相手のターンになった瞬間相手はなにもせず、そのままターンエン

ドしてきた

「よし！俺のターン！！ドロー！！」

うっし！これで、俺の場を整える事が出来るぜ！！
俺がドローしたカードはサモンプリースト
こいつで、俺の場を整えさせて貰うぜ！

「俺はサモンプリーストを召喚！効果を発動！このカードは召喚・反転召喚に成功した時、守備表示になる。１ターンに１度、手札から魔法カード１枚を捨てる事で、自分のデッキからレベル４モンスター１体を特殊召喚する！俺はミストバレーの戦士を特殊召喚！」

相手の場を確認しつつデュエルする俺・・・
相手の場には「？？？？」と書かれたカードが場に出ていて、テキストを見た

「（このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。
相手の場にモンスターが存在する場合、相手に１０００ポイントのダメージを与える。
この効果を使ったターン、自分は攻撃する事が出来ない
攻撃力？？？？、守備力？？？？）・・・なるほどねェ」

なら、なんとなーくデッキに入れた、あのカードが役に立つ時が来たか！！

「俺はレベル４、召喚僧サモンプリーストに、レベル４、ミストバレーの戦士をチューニング！黒き疾風よ！秘めたる想いをその翼に現出せよ！シンクロ召喚！舞い上がれ、ブラックフェザー・ドラゴン！！」

黒き翼を広げ、舞い上がるブラックフェザー・ドラゴン
その姿に驚くなのはとユーノ・・・
アルフは必死にフェイトを助けようとフェイトの方に飛んで向かっていた
だけど、安心しな！俺が護ってみせる！！
俺のターンだというのに攻撃を行う「？？？？」
でも、残念だったな！フェイトに攻撃は通さねぇぜ！！
「俺は墓地のネクロ・ガードナーの効果を発動！このカードを除外して、一度の攻撃を無効にする！」
フェイトの前に半透明の戦士が代わりに雷の攻撃を受けた
そして、俺はそのまま雷が放たれた方をじっと見ていた
「・・・・っ！」
戦士の勘というものだろうか、俺の中に何かが過り、雷の放たれた場所に向かい、ブラックフェザー・ドラゴンを飛翔させていた
「行くぜ！バトル！ブラックフェザー・ドラゴン！ノーブル・ストリーム！！！」
ブラックフェザー・ドラゴンもそれを理解したのか、一度高く吠え、ノーブル・ストリームで新たに放たれた雷とぶつかりあった
実際のデュエルではありえない光景である。
しかし、今度の雷は先ほどの雷とは違い、紫ではなく闇の色に染めあがった、真っ黒な物だった
原作は紫のはずなのだが・・・

「いけぇぇぇぇぇ！！」

だが、俺はブラックフェザー・ドラゴンを信じて、お互いの攻撃がぶつかり合う空を見上げた

ノーブル・ストリームは雷を押し返し、雷が押し負けると、そのまま空を貫いた

うっし！と心でガッツポーズをしておく

だが、今度はまったく違うものがフェイトに向かい放たれた

今度は黒い槍のような物だった

いつのまにか、俺のターンは終了されていて、相手のターンとなっていたのである

「？？？？」の効果が発動されているらしい

だが、俺のブラックフェザー・ドラゴンを舐めるなよ！！

「ブラックフェザー・ドラゴンの効果を発動！ダメージを与える効果が発動した時、代わりに、このカードに黒羽カウンターを置く！ダメージ・ドレインっ！！」

フェイトに放たれた黒い槍は、ブラックフェザー・ドラゴン代わりに受け、ブラックフェザー・ドラゴンにカウンターが乗った

だが、突然空は晴れて、第二波は来る気配がなかった・・・

後ろを見ると、フェイト達が俺を見ていた

俺はそれを確認し、一度サムズアップして、ブラックフェザー・ドラゴンに乗り、そのまま何処かへ飛んで行った

十二章　チートドローじゃねぇ！運が良いだけだ！（後書き）

「あぁー・・・指痛ぇ」

蒼痲「知るか。通学中に事故るお前が悪い」

「ですよねー・・・」

蒼痲「それにしてもよかったな。ようやくコメントがきたな」

「佐遊樹さん！ありがとうございます！」

蒼痲「これからもコメント、感想ともどもお待ちしてるぜ」

「はぁー・・・なんでリリカルなのはなのに遊戯王の要素いれてんだろ・・・自分・・・」

蒼痲「別にいいだろ？あぁー・・・レモンとＢＦＤカッコ良かったなぁ・・・今度はスタダ出したいぜ・・・」

「まぁ、亀更新になるかもしれませんが、よろしくお願いします・・・」

蒼痲「んじゃ、また次回のあとがきでな」

十三章　一々ネガティブに考えすぎんな！今を楽しめなきゃ、未来も楽しめない

現在、俺はブラックフェザー・ドラゴンの背中からとある海を眺めていた・・・

その海は、鳴海から遠く離れ、１０キロ以上飛んだであろうところにあった
そこは、何故か海だと言うのに真っ黒に染まっている場所だった
決して、なにか汚い液体が集まって出来たものではない・・・

この中から、バグではない、何かを感じる・・・
さっきから、バグセンサーが、この地点を示してぴこんぴこんうるさいのだ
ようやく辿り着くと「中には入れ」と言わんばかりに何度も何度もピコンピコン！とうるさい音が俺の脳内に響いていた

ブラックフェザー・ドラゴンが心配そうに俺を見ていた
俺はそっと背中に手を置き「大丈夫」と小さく呟いた

「・・・ありがとな。ブラックフェザー・ドラゴン。」

そういい、俺はブラックフェザー・ドラゴンの背中から飛び降り、
その真っ黒な海の中に飛び込んだ
その途中、デュエルディスクの電源が勝手に消えて、ブラックフェザー・ドラゴンが消えた

そして、ボチャン！！と言う音が響き、俺は謎の空間の中を浮遊している事に気付いた
息は・・・できる。

「・・・・うわぁーぉ・・・・」

その空間に広がっていたのは、どこか見た事のある世界だった
まるで、どこかの通路を通っている気分だった
その通路の前後左右、上も下も全てに謎の空間が広がっていたのだ
空には竜が飛翔し、激しい空中戦を繰り広げていた
その姿は白く、青い目の美しい龍・・・
その姿とは対にあるように、黒く禍々しいが、とてもカッコいいドラゴンが、白い龍を相手に一歩も引かない攻防を繰り広げていた

「青眼の白龍（ブルーアイズ）！？それにレッドアイズも！？」

それは、遊戯王の中のドラゴン族の代名詞といってもいいほどのモンスターだった
ブルーアイズは社長の嫁で、レッドアイズは、レダメとかで有名だからなぁ・・・
とにかく、ドラゴンデッキはパワーで相手をねじ伏せるデッキなんだよなぁ・・・

「すげぇ・・・・あっ」

ブルーアイズとレッドアイズの攻防が繰り広げられているゾーンを超えて、俺は別のゾーンに来ていた

そこでは、空と陸で凄まじい戦争が起きている場所だった
先陣を走り、敵を斬り伏せていく切り込み隊長・・・
その横にフリードや、ギルフォード・ザ・レジェンド等が先陣を切って、切り込み隊長と共に戦場を駆けていった
どうやら、戦士族と悪魔族の戦争らしい
なんか、切り込み隊長の前に闇よりいでし絶望が立ちふさがってるし
何より、その後ろで、ハ・デスが悪魔軍の指揮取ってるし・・・

そして、その空間を通り抜け、俺は別の空間に辿りついた

「ここは・・・・？」

なんか、研究所っぽい雰囲気で辺り一帯が埋まっているようだった
遊戯王でいう「脳開発研究所」みたいな雰囲気と言えば分かるだろうか？
まぁ、そんな感じ・・・
今まさにサイキック族のモンスター作ってそうだし・・・

あ、でも、ガスタのウィンダとカームは違うと思う。
あの二人はおかしいって・・・あの娘達は魔法使いだってずっと思ってたのに・・・！！
まぁ、カームは俺の嫁だし。異論は無しだ
だって可愛いじゃん。クーデレっぽいじゃん。

でもなぁ・・・生憎、カームは一枚しか持ってないんだよなぁ・・・
リチュアなら作りかけのデッキがあるんだよなぁ・・・
後、エリアルがあれば完成何だけどなぁ・・・

まぁ、そんなことを思いながらも研究所の奥へと足を踏み入れる・・・

どんどんどんどん空気が重くなっていく感じがしていた

そして、俺はある部屋の前で立ち止まっていた

なんか、そこからカタカタキーボードをたたく音がするんだもん。

だって、それがスカリエッティだったらヤじゃん？

俺ァやだよ？あんなマッドサイエンティストに肉体改造されるなんて・・・

でも、中から聞きなれた声がしてきた・・・

そっと扉に耳をつけて、盗聴を始めた・・・

『ふぅむ・・・実に興味深い』

『だろぉー？チート嫌いの癖にチートドローが出来る奴なんてアイツくらいなもんだぜ？』

・・・・前者は誰か分からないけど、推定２０代後半のマッドサイエンティスト的な男

でも、後者は間違いなくおっさんだと分かった

『しかし驚いた・・・』

『ん？何が？』

『あのデッキ、上手く構成されている・・・それに、何にでも対応できるようにしっかりとしたデッキだ』

『あれ？あれって専用デッキじゃないのか？スカノヴァが出しやすくしただけのデッキじゃないのか？』

・・・確かにおっさんの言うとおりだ。
このデッキはスカーレット・ノヴァ・ドラゴンを出しやすくするために構成されたデッキだ
でも、もう一人の男は何か悩むように静かに言っていた

『それじゃ、普通のデッキじゃあそこまで力を出す事は出来ん。・・・まさか、あの少年には・・・』

・・・もう聞いてらんねぇや。
本人が居ないのに、勝手に俺の話されてたんじゃ、陰口っぽく聞こえるし
俺は耳を当てるのをやめて、そのままドアを開いた

ガチャっという音と共に、俺はその部屋に入った
そこには案の定、おっさんと知らない男がパソコンでなんかを見ていた

「あ、そーま！？」

「よぉおっさん。・・・そっちの人は？」

俺がおっさんと軽い挨拶を交わし、おっさんの隣でパソコンをいじくってた人を見た
後姿だけ見ると、２０代の男性に見えた。

だけど、その人が振り返ると、俺の予想通り、もうすぐ三十路を迎えそうな青年（？）がいた
世間一般で言う変な雰囲気を持った人だった

「君が、リュウが連れてきた少年か・・・」

「・・・リュウ？」

リュウって・・・まさか・・・
俺はおっさんの方を向くと、おっさんはたははーと笑いながら頬を掻いていた

「おっさんの愛称さ。あ、紹介が遅れたな。コイツは、俺の親友。名前は・・・」

「ロードだ。お前等で言う、神って存在だ。」

・・・なんだ。コイツも神かよ・・・
・・・本当に神様って奴が消えた世界ってどうなるのか見てみたいなぁ・・・
ためしに今度聞いて見るか・・・

「といっても、俺は神と言うカテゴリーに分類されただけの人間だと思っている。おまけに、俺は世界の管理を任されているが、基本放任しているがな」

・・・なんか、このロードって人、俺と同じ気配がする・・・
いや、アレだよ？同族の匂いって奴っつぅか・・・なんつーか・・・

「つぅかさ・・・なんでリュウじゃなくて俺が世界の管理なんて仕

事しなくちゃいけねーんだよ・・・俺ァ働きたくねぇのにさ・・・
なんでリュウがだらだらしてるのに、俺が無駄に仕事しなくちゃい
けねぇんだよ・・・あぁー、働きたくねぇー・・・けいおん見てぇ・
・・」

「・・・アンタと同じこと考えてる俺が恥ずかしくなってきた・・・
」

・・・なんというか、本当に同じこと考えてて気持ち悪いんだけど・
・・
・・・ん？でも、今世界の管理って言ったよな・・・？

「なぁ、一個質問。」

「ん？なんだ少年？」

ロードが俺のことを見て静かに言った
・・・なんつぅか、この人良く見ると結構カッコいいんだけど・・・

「世界管理してるっつったよな？“カミサマ”って奴は世界の意志
には逆らえないんじゃないのか？」

「まぁ、普通はそうだな。でも、一部の世界は世界の意志とやらが
なくてな・・・俺達クソ神が管理してるんだよ・・・あぁー、めん
どくせぇ。しょーねん、俺と変わってくれ」

「断る」

「ですよねー」

やっぱ、この人俺と同じ感じがする・・・
ホントヤダわー・・・

「まぁ、俺が管理してる世界ってのがおかしくてな・・・世間でいう遊戯王の世界って奴さ」

「え！？マジか！？」

「あー、変な期待持ってるっぽいけど、残念だが、武藤遊戯も、遊城十代も、不動遊星も居ない。遊戯王のカードの世界って奴だ。当然だが、デュエリストもいれば、モンスターもはびこってる世界だ」

・・・なんだ。十代と戦えないのかぁ・・・
残念だ・・・十代とＥ－ＨＥＲＯ対決できるかなーって思っちまったじゃねぇか・・・

「あー、だからさっきの空間で青眼の白龍（ブルーアイズ）とかが映ってたわけだ・・・」

「！？　さっきの空間？」

「あぁ。ここ来る途中に変な通路らしき所を通ったんだよ。そこでレッドアイズと戦ってた」

俺がさっきあったことを伝えると、ロードは面白い物を見つけたかのようにニヤっと笑った
・・・なんか、嫌な予感しかしない・・・

「良かったなしょーねん。お前は俺の世界に行く権利を得た」

「・・・・はぁ？」

何言ってんのこの人？
おっさんは横で「ちょｗｗおまｗｗ」みたいなことを言ってた気がする
その時、俺の入ってきたドアがもう一度開かれた
俺達が一斉に振り向くと、一人の少年がお茶を運んできた

「すいませーん。お茶の準備ができましたぁ・・・・」

「・・・・あり？」

なんか、どっかで見た事あるショタ顔なんだけど・・・？
えぇっと・・・いつだっけ？前に自転車で小学校まで連れてった記憶があるんだけど、誰だっけなぁ・・・

・・・って、あれぇ！？なんでコイツがこんなトコ居るの！？

「「あああああああああああああ！！！！！」」

人差し指で指差して盛大に叫んだ
あっちもまったく同じ行動をして、俺を指差して叫んでいた
ご丁寧にも、お茶を置いたお盆は机に置いて

「敦ぃぃぃぃぃ！！？」

「天城君！！？」

「おーい、少年二人ー、うるさいぞー。」

ロードは呑気に敦の持ってきたお茶を飲んでいた
おっさんも一緒に飲みだしていたが、俺と敦は何がなんだか分からなくなって、とりあえず状況の整理を始めた

「ちょ、おま、え、えぇっ！？なんで敦が居るんだよ！？敦はこの世界の住人だろ！？」

「ロードさん！どういう事ですか！？どうして、この世界の住人のはずの天城君が居るんですか！？」

・・・ん？なんで敦も“この世界”って言ってるの？
おかしくね？あれ？明らかにおかしいよね？

「・・・・あるぇー？」
「・・・・あれぇー？」

なんかお互いで顔を見合わせてあれー？と首をかしげている
すると、お茶を飲んでいる神達が俺達を見ていった

「ま、簡単なことだ。」

「お前達二人は同じ目的でこの世界に送り込まれた・・・いわば、救世主って奴さ」

いや、ロード！あんたが締めるなよ！
おっさん横で残念そうにお前睨んでるじゃん！！
・・・つまり・・・俺と敦は同じ目的でこの世界に送り込まれたってことだよな・・・
つぅことは・・・

「ま、まさか敦もハートレスを倒すために・・・・？」

「あ、あはは・・・・」

・・・・いや、苦笑いされても困るんだけど・・・・
こっちも困ってるから・・・・

「敦は前の世界では高校生だったんだよ。でも、電車に撥ねられて死んでしまったのさ」

・・・なんだその厨二設定の始まりは・・・
何？コイツもチート能力授かってバグと戦うのかよ・・・
死ねばいいのに・・・

「でも、その時不可思議なことが起こった。彼は、誰の手も借りずに転生してしまったのだよ」

「・・・・はぁッ！？どっかで見た事あるよーな神様とか天使がチート能力授けて別世界に転生っていうよーなありきたりな設定じゃねぇのかよ！？」

「話は最後まで聞け。・・・ついでに、天使じゃ転生させてやれるほどの権限なんて持ってねぇ。仮に出来たとしても、そいつは堕とされる」

なるほど・・・天使って奴じゃ転生なんてものはできないのな・・・
んじゃ、どうなるんだ？天使って奴らが勝手に転生を許可したらどうなるんだ？
・・・・世間一般で言う堕天使って奴になるんだよな・・・？
やべぇ・・・ちょっと見てみたいかも。

それがスタイル抜群の女性だったらどんな姿に・・・
・・・・なんという俺得ｗｗ

「おーい、妄想の世界から帰ってこーい。」

ちっ・・・ロードめ・・・
俺の思考なんてお見通しってか・・・

「んで、話し続けるぞ。まぁ、そんな感じで敦は転生したわけなんだが・・・今はなんの能力がないままの一般人・・・」

「そ、そうなのか。そりゃ、残念だったな敦」

「う、うん・・・」

「まぁ、簡単に言えば転生しただけの少年Ａだなｗｗｗ」

おっさんのアホォオオオオオオ！！！
折角傷つかないように話逸らそうと思ってたのにいいいい！！
ほら！そこで敦体育座りして泣いてるし！！

「リュウ、お前という奴は・・・空気というものを読めないのか・・・」

「何言ってんだよロード。空気は読むものじゃなくて、吸う物だぞ☆」

「黙れＫＹ。ほら、敦。男だろ？泣くなって。」

まったく、ふざけたおっさんだ・・・

敦も横で泣いてるし・・・・

「うん・・・天城君、やっぱり強いんだね・・・どうせ僕なんてさ・・・」

・・・それどこの地獄兄弟？って聞き返したくなったけど
そこは、空気を読んで言わなかった。
だってさ？高校生がライダーネタ知ってると思うか？
そりゃ、ライダーオタだったら知ってるかもしれないけどさ・・・

「・・・・で、あんた等“カミサマ”は何してんだ？呑気にお話か？」

「いんや。実は敦に力を渡そうかなーと思ったんだけど・・・その力がさ・・・」

「力？」

力って・・・あぁ、能力ね。
そっかぁー、これで俺だけ戦わなくて済むってわけか・・・
なーんだ。良かったぁ・・・

「そう。力。・・・でもさ、その力がさぁー・・・」

「？　力がどうしたんだよ？」

おっさん、そんな微妙な顔でたははーなんて言われても困るんだが・・・
ロードさんもそんな微妙な顔されても・・・

「とても言い難いんだが・・・実は、その力が新たな主を見つけてしまったんだよ。」

「へぇー。そりゃ大変だな。んじゃ、その主から取り上げればいいんじゃねぇの？」

「・・・その主が、君なんだよ。天城蒼痲」

・・・・・・・・・・・・は？

「な、なんだってぇぇぇ

「・・・へぇー」

そ、それは・・・と、敦はどもっていた
なるほど・・・そんなに強いのか・・・
デュエリストとして、一回戦うか・・・

「で、だ。魔力の消費を極力少なくしつつ、敵を倒すという能力を授けようと思ったのだが・・・何故かその能力が君を主だと決めてしまって、君の能力になってしまったというわけだ。しかも、その能力を使っている間、別の能力は使えなくなってしまうのだ。」

どーりで俺が変身しようとしてもロックされてたわけだ・・・
んじゃ、俺から取り出せばいいんじゃね？

「んじゃぁさ、俺から取り出せばいいんじゃね？」

まぁ、スターダストとかも召喚したかったんだけど、仕方ないよな・・・
本来使うべき奴が使った方がいいに決まってる。

「でもな・・・残念ながら、君から取り出そうとしているのだが、どうやっても取り出せないのだ・・・」

「・・・はぁー・・・・どうしたらいいんだよ・・・」

もう嫌・・・
本来敦が持つべき能力を俺が持ってるって・・・
絶対おかしいって・・・
持ち主が決まってるのに、どうして俺が使わなければいかんのかね

え・・・

そう思った時だった
俺の中から赤い球体と青い球体が現れた

「おっ。ようやく出てくれたか・・・これで敦に能力が授けられる・・・」

おー、これが敦に渡されるはずだった能力か・・・
ん？でもおかしくね？
なんで二つに分離すんの？
赤と青の球体になる意味なくね・・・？

「おや・・・どうやら、能力は君達を二人を主と認めたようだな・・・」

「はぁ？」

そりゃどーゆー意味だって聞こうとした時だった
俺の方に青い球体が身体に入ってきて、赤い球体は敦の方に入って行った
ポゥと小さな光が俺達を包み込んだ・・・
その光は少し発光して消えたけど、明らかに新たな能力が俺の中に流れ込んできたのが分かった

「こ、これが僕の・・・力・・・」

敦は早速能力を解放して、デュエルディスク（全体的に青い）を構

えて、触って確かめていた
敦の服はオベリスクブルーの制服で、俺とは違ってシンプルでカッコよく見える
まぁ、俺もためしに変身すっか・・・

「・・・・なんでさ？」

今度の俺の服は新しくされていて、普通の上条さんの姿から少しランクアップして、オシリスレッドの制服（中はやっぱり上条さんのまま）で、シャツの中の服は黒いTシャツだった
まぁ、簡単に言うと、十代と上条さんの服を足して二で割った感じ。

「おー、そーまカッコよくなったじゃん！！」

「敦、君もカッコいいぞ。」

「そ、そうですか？えへへ・・・嬉しいです・・・」

おっさん達が俺達にお世辞を言ってくれているが、俺は全面的に無視する方向性にした
敦は本当に嬉しそうに笑っていた
でも、俺はなんとなく気になっていたので、デュエルディスクを展開した
ちなみに、デュエルディスクはなんかオシリスレッドっぽく前に白かった所が赤く染めあがった新しいデュエルディスクになってた・・・
やべっ、なんか遊戯と十代と遊星のデュエルディスクを混ぜ合わせた感じなのに、めっちゃカッコいい・・・！！

「おい」

「ん？どうしたの天城君？」

敦が不思議そうに俺を見ていた
だが、俺は敦の言葉を無視して、お決まりのセリフをいった

「デュエルしろよ」

そういうと、敦は「な、なんだってー！？」みたいな顔をして俺を見ていた
なるほど・・・敦は隠れオタっと・・・
意外な奴ほど道を踏み間違えてたりすんだよなー

「おいおい、ここはデュエル場じゃないぞ？せめて、やるならそこでやってくれ」

ロードが指差したのは、扉だった
その扉へと歩み寄り、扉を開けた・・・
そこは、白い空間で、訓練するにはうってつけと言っていいほどの場所だった
それなりに広いし、お互いに本気で殺し合っても耐えられそうなイメージがあった

「んじゃ、敦。デュエルだ」

「え、え、えぇ！？」

「ほら、速くしな。」

俺は敦の手をとって、その部屋まで連れて行った
敦はめっちゃ焦っていて、俺と一緒に部屋に入った

おっさん達は入って来なかったが、どうせこのスペースのどこかに
監視カメラ的な何かがあるのだろう
そんな分かり切ったことはどーでもいい・・・

俺がやるべき事は一つ・・・

「さぁ敦！デュエルだ！！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！僕、まだ遊戯王の初心者だよ！？まだ
ルールも覚えたてだし・・・僕なんかが天城君に勝てる訳ないよ・・
・デッキだって、まだ作りかけだし・・・」

デュエルディスクに入っていたデッキを取って、それを見せる敦
へぇ・・・サイバーエンドデッキか・・・

「僕なんかが・・・勝てる訳ないよ・・・」

「・・・・・・」

本当にネガティブだなぁ・・・
そんなに深く考えなくてもいいじゃん・・・

「ほら、また諦めた」

「え・・・・？」

とりあえず、上条さんには及ばないが、説教をしてやろう・・・

「ったく、そうやってすぐ諦めやがって・・・どんだけネガティブなんだよ？もっと自信を持てって。上級者でもミスはするんだよ。それで一々泣きごというなよ。まだお前は終わってもなければ、始まってすらいねぇ。なら、やることぁ一つだろ？その能力に恥じないように、自分に自信を持てよ。これから、ソイツ（デッキ）が相棒だろ？相棒を信じてみろって。そうすれば、デッキは答えてくれる。頑張れって。俺もお前が楽しくデュエル出来るようにすっから。だから・・・な？信じてみろよ。自分と・・・デッキを」

「・・・・・・・」

・・・台詞長ぇなオイ・・・

言っててて恥ずかしくなってきたじゃねぇかこの野郎・・・

でも、敦は俯くのをやめて、一度デッキとデュエルディスクを見た

そして、ようやく決心したのか、俺を見た

「分かった・・・でも、お願いがあるんだ・・・」

「なんだ？」

「僕が勝ったら・・・僕と友達になってくれる・・・？」

「・・・・さぁな。」

・・・アホかコイツ

そんな風に言わなくても、俺だってお前と友達になりたいわ・・・

いや・・・これからなるのか・・・

「分かった・・・・勝負だ！天城君！！」

ガチャンと、デュエルディスクが展開した

俺はニヤっと一回笑い、言った

「おう！！そうこなくっちゃな！！」

「「デュエル！！！」」

こうして、俺達の初めてのデュエルが始まった

十三章　一々ネガティブに考えすぎんな！今を楽しめなきゃ、未来も楽しめない

「というわけで、次回は蒼痲ＶＳ敦の初デュエル！」

敦「勝負だ天城君！僕の全力で、君を倒す！！」

蒼痲「いいぜ！受けて立ってやるよ！ただし、そう簡単に勝てると思うなよ！！」

敦「行くよ！！！」

「・・・・なんか、いつから遊戯王の小説になったんだろう・・・？」

蒼痲「知るか！！」

「あ、感想などがあればどうぞ・・・」

十四章　友達ってのは気づいた時にはなってるもの

「「デュエル！！」」

さぁて、敦と俺の決闘（デュエル）が始まりを迎えた
先行か後攻かはデュエルディスクにあったじゃんけん機能で、決めた
先行は俺。
後攻は敦という流れだ

まぁ、流石に初心者相手でも、俺は俺の全力を尽くすぜ！
ちなみに、デッキはサイバー・ダーク・デッキ。
あっちが表サイバー流なら、こっちは裏サイバー流で相手をしなくちゃ失礼ってなもんだろ？
あ、ちなみにライフは８０００ポイントからのスタート。
まぁ、流石に４０００だったら、パワー・ボンドで出されたサイバー・エンドでぶっ殺される落ちは見えてるからｗ
そうならないように努力はするけどな！

「俺のターン！！ドロー！！」

ふぅむ・・・手札の状況は悪くねぇ
事故ってもなければ、特別運が良いというわけでもない
手札にゃサイバー・ドラゴンと、サイバー・ダーク・エッジとボマー・ドラゴンと炸裂装甲か・・・
ま、ドローしたカードがハウンド・ドラゴンなのがちょっと微妙だけど、まぁまぁだな
残りの一枚は未来融合・フューチャー・フュージョンだ。
まぁ、最初のターンで飛ばし過ぎても困るし、ここは普通にデュエルするか・・・

「俺はモンスターをセット。」
モンスターをセットして、一応警戒のためにカードを伏せておくことにしよう
「俺はカードを一枚セットして、ターンエンド。」
「僕のターン!!ドロー!!」
さぁて、敦のターンだな・・・
ま、どんな感じのデッキなのか見せてもらうか・・・
「僕はサイバー・ドラゴンを手札から特殊召喚!」
フィールド上に現れた銀色の機龍、その姿は煌めいていて、とても美しい・・・
だが、まだ始まったばかりだ・・・そんな速く手の打ちを晒していくと、後で痛い目に会うぜ・・・!!
「僕は、手札のサイバー・レーザー・ドラゴンとグリーン・ガジェットを墓地に送って、手札のマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚!!」
うげっ、一ターンで、そんなに展開するか?
そんなに急いでもデュエルは始まったばっかだっつの・・・
「行くよ!バトル!!僕は、マシンナーズ・フォートレスで攻撃!!」

「くっ・・・だが、俺のモンスターはボマー・ドラゴン！このカードが戦闘によって破壊された時、このカードを破壊したモンスターを破壊する！！ダイナマイト・クラッシュ！！」

「な、何！？」

フォートレスが攻撃すると同時に、俺のボマー・ドラゴンが破壊された

だが、ボマー・ドラゴンのいた場所に爆弾が落とされ、それに巻き込まれる形でフォートレスは破壊された

「でも、僕の攻撃は終わってないよ！僕はサイバー・ドラゴンで攻撃！！エヴォリューション・バースト！！」

「それも通さねぇよ！俺は炸裂装甲を発動！！お前のサイバー・ドラゴンを破壊する！」

攻撃をしようとしていたサイバー・ドラゴンは突然爆発し、俺に攻撃をすることなく破壊された

「だけど！僕の場に存在するモンスターが破壊されたことにより！機皇帝ワイゼル∞を特殊召喚！まだ僕のバトルフェイズは終了してない！ワイゼル∞！攻撃だぁ！！」

「ぐぅっ！！」

ワイゼルの攻撃の前に、俺は成す術もなく、そのままワイゼルの攻撃を受けてしまう・・・

だが、アニメのような合体モンスターではなくて良かった・・・ち

ゃんとジャンプに付属してたカードだ・・・

「僕はサイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚して、ターンエンド」

なんでサイバー・ドラゴン・ツヴァイを出さなかったんだ・・・？

アイツは結構強いアタッカーだったような記憶があるんだが・・・・・・・つぅかさ、あれ初心者ってレベルじゃないんですけど！！

結構強いんだけど！！何！？ワイゼルの召喚方法を初心者が分かる訳ねぇだろ！！

おまけに、なんだよいきなりフォートレスとかのコンボ！？

明らかに初心者ってレベルじゃねぇ！！

ちっくしょう・・・なら、こっちも本気で行くぜ・・・！！

「俺のターン！ドロー！」

手札に来たのは・・・オーバーロード・フュージョンか・・・

ちっ、これは切り札としてとっておくか・・・

「俺は、手札からサイバー・ドラゴンを特殊召喚！！」

今度は俺の黒いサイバー・ドラゴンがフィールド上に現れる

その黒い姿に一瞬心を奪われそうになった・・・

まぁ、なんつぅか、やっぱカッコいいよね・・・

「いくらサイバー・ドラゴンでも、僕のワイゼル∞には敵わない！！」

「あぁ！！んじゃ、そのワイゼルさんを頂くとするよ！！俺は、場

に存在する機械族モンスターをすべて墓地に送る！！」

「なに！？わ、ワイゼル！？」

相手の場にいたワイゼルとツヴァイは嵐に巻き込まれるように、俺の場のサイバー・ドラゴンと共に消えて行った・・・

だが、俺の場にとても大きな機龍が現れた

「現れろ・・・キメラテック・フォートレス・ドラゴン！！」

まさか、このカードを出す事になるとは思わなかったぜ・・・

といっても、切り札はこのカードじゃないけどね。

いや、アニメ版の効果カッコ良かったじゃん。

攻撃力０の最強モンスターだって思って、カード化されたのが決まって喜んだんだけど・・・

効果が変わってたのにがっかりしたんだよなぁ・・・

まぁ、裏サイバー流の切れ味を思い知らせるにはうってつけのモンスターだけどな・・・！！

「キメラテック・フォートレスの効果を発動！このカードの攻撃力は、融合の素材となった機械族モンスターの数×１０００ポイントとなる！！」

「攻撃力３０００！？」

さぁて、攻撃力３０００のキメラテック・フォートレス・ドラゴンにどう立ち向かうのかねぇ・・・

手札にバトル・フェーダーでもあるのか？まぁ、機械族デッキにそれはないと思うけど・・・

「行くぜ！バトル！」

「ぐぅっ・・・！！」

バトルフェイズに移行する俺に、敦はぐっと歯を食いしばった
いくら初心者（？）でも俺は容赦しないぜ！！

「行くぜ！キメラテック・フォートレス・ドラゴンの攻撃！エヴォリューション・レザルト・アーティラリー・・・ダイイチダァ！！」

「ぐあああああああ！！」

俺は容赦なく３０００ポイントのダメージを与え、敦にダメージを与えた
俺のライフはワイゼルの攻撃で５５００まで下がってる・・・
しかし、今の攻撃で敦に３０００ポイントのダメージ・・・
相手の残りはライフは５０００ポイント・・・少しだけ俺の方が押している
だが、油断してはならない・・・相手は初心者と言っているが、結構強い・・・
油断したら負ける恐れがある・・・

「俺は、ターンエンドだ・・・」

手札に伏せれる罠カードはないし、オーバーロードを伏せて、サイクロンなどで破壊されてはたまったもんじゃない
おまけに、サイバー・ダーク・エッジを出してダメージを与えてもよかったけど、オーバーロードで融合されたら、俺負けんじゃん？

まぁ、ここは様子見だな・・・
こんなに圧倒的な状況下で、敦はどんなデュエルをしてくれるのか、
俺は正直楽しみだ・・・
それに、敦の目にゃ、決意を新たにした力強い意志を感じる・・・
俺は敦が何をするのか、ゆっくり見させてもらうことにしよう・・・

「僕のターン・・・ドロー！！」

ドローしたカードを見て、敦の表情が変わった
ほぅ・・・なんかキーカードを引いたみたいだ・・・

「僕は・・・オーバーロード・フュージョンを発動！！」

「な、なにぃ！？」

嘘ぉ！？表サイバー流が裏サイバー流の機龍を使うと言うのか！？
ふざけんな！！表サイバーなんだらか、ちゃんと全部カイザーのフ
アンデッキにしやがれ！！

決めた。絶対に勝つ！絶対にぶっ殺す！！

「僕は墓地に存在するサイバー・ドラゴン・ツヴァイと、サイバー・
ドラゴン意外の機械族モンスターを全て除外！！」

ええっと・・・墓地の機械族はフォートレスのためにコストにした
のが2枚・・・
ツヴァイが1枚・・・んで、ワイゼルとフォートレスだから・・・
5枚か！？

「現れろ、キメラテック・オーバー・ドラゴン！！！」

げぇ！？めっちゃ怖いんだけど！？
今まさに俺を殺そうとこっちガン見してんだけど！？
だけど、そいつの効果で場のカードが全部墓地に・・・って、場にキメラテック意外に居ねぇ！？

「僕は手札から、一族の結束を発動！！」

ここでさらに８００アップの永続魔法かよ！？
いい加減にしろや！俺を虐めて楽しいのかちくしょう！！

「バトルだ！！キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃だ！！！」

キメラテック・オーバー・ドラゴンがフォートレスに向かい攻撃を仕掛けた
だがフォートレスもそれに対抗しようとして、反撃をするが、あっというまにレーザーに巻き込まれ、破壊されてしまった

「よし！！キメラテック・オーバー・ドラゴン！！止めだ！！」

しーん、と辺り一帯が静寂に包まれた
・・・

「な、なんで!?こ、攻撃だって!!」

「あー・・・・敦ー?もしかして、キメラテック・オーバー・ドラゴンの効果・・・知らないのか?」

「ど、どうして天城君!?教えて!?これが決まれば、僕の勝ちなのにぃ!!」

まぁ、確かに俺のライフの残りが３７００だからなぁ・・・
これが決まれば、晴れて大勝利で終わるんだけど・・・
まさか、効果知らないなんてな・・・

「テキスト良く見てみろ。「このカードは融合素材にしたモンスターの数だけ、相手モンスターを攻撃する事ができる。」って書いてあるだろ?いくら融合の素材を増やしても、俺の場のモンスターが居なければ、一回しか攻撃できないぞ?」

「そ、そんなぁ・・・・・」

い、いや、そんなにがっくりされても困るんだけどさ・・・
ごめんね。敦・・・さっきぶっ殺すって決めちゃったんだ・・・
だから、手加減出来ないんだ・・・

「僕は、ターンエンドだよ・・・」

まぁ、でも俺の劣勢には変わりないんだけどネ。
攻撃力４８００のキメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力を上回るモンスター・・・か
まぁ、俺の手札にこれ（オーバーロード・フュージョン）と未来融合があるから、俺の勝ち確定したんだけどね・・・

問題は、次に出てくるカードなんだけどさ・・・

「さ、さぁ！君のターンだよ！でも、僕のキメラテック・オーバー・ドラゴンを倒すモンスターが居るかい？」

敦・・・若干テンションあがってるな・・・

まぁ、ここは主人公っぽく言って、勝ちフラグでも立てておくか・・・

「でもな敦。いくら強いモンスターが場に居ても、それを扱う者によって、色々と変わるんだぜ？俺だって、まだ終わった訳じゃない・・・こんなにワクワクするデュエルは久しぶりだよ！ありがとな！」

・・・嘘を言っているわけじゃない。

これは、俺が素直な気持ちをいっているだけだ。

“使えないカードなんてない”って、どっかの誰かが言ってた気がする

実際そうだ。どんなカードだって、役目はある。

ガイヤ・パワーとか、バーニング・ブラットだって、使う人によって姿も、形も変わる・・・

俺の使うＥ－ＨＥＲＯデッキも、他の人の作ったＨＥＲＯデッキと似ていて、違う所もある

あいつのキメラテック・オーバー・ドラゴンだって、他の誰かが使えば、まったく異なる結末を生む・・・

なら、こんな絶望の中でも、幽かな光って奴を見つけてやろうじゃねぇか！！

「俺のターン！ドロー！！！」

十代みたいに、居合い切りをするように、大げさにカードをドロー

した
しかし、この瞬間、俺は何故か確信することができた・・・
俺は・・・勝てると

「俺は、未来融合　―フューチャー・フュージョン―を発動！！俺はキメラテック・オーバー・ドラゴンを選択！！俺のデッキのすべての機械族モンスターをすべて墓地に送る！！！」

「でも！そのキメラテック・オーバー・ドラゴンは二ターン後に出てくる！君が二ターン凌げなければ、召喚ができないよ！」

つっても、場にでてきたら、全部墓地に送られるから、間接的にバカなことをやってるだけなんだけどね。

「わぁってるよ！！でもな、俺はカードを信じて戦うだけだ！！俺は、オーバーロード・フュージョンを発動！！」

「なっ！？」

さぁて、俺も本気で潰しにかかってやるぜぇ！！！

「墓地に存在する全ての機械族モンスターを除外！！現れろ・・・キメラテック・オーバー・ドラゴン！！！」

敦のキメラテック・オーバー・ドラゴンよりも、真っ黒に染めあがった俺のキメラテック・オーバー・ドラゴンが場に現れる・・・
その姿は、機械族モンスターの象徴といっても過言ではないと言うほど暗く禍々しく煌めいている

さぁて、場のカードも全て墓地に送ったし、こっからが地獄の始まりだァ！！！

「俺は手札から、装備魔法ミスト・ボディを発動・・・対象は・・・」

ゆっくりと手を上げ、人差し指を空高く掲げる・・・

そして、降り下げると同時に言った

「お前のキメラテック・オーバー・ドラゴンだ！！」

「な！？」

「さぁ、バトルだ！！！」

さぁて、こっから始まるのは俺の一方的ないじめだぜぇ！！

敦、表サイバーかと思いきや、実は裏サイバー流のカードを入れていた事を後悔しな！！

まぁ、人のデッキからあんま言いたくないけど、レーザー入れてるくらいなら、全部表サイバー流を貫こうぜ・・・

「これが俺の勝利への執着だァッ！！！キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃ィ！エヴォリューション・レザルト・バーストォ！！グォレンダァ！！」

あっという間に俺はオーバーキルを達成し、圧倒的力の差を残して敦に勝利した

その場に膝をついてキメラテック・オーバー・ドラゴンを見つめる

敦・・・
その目にはうっすら涙が浮かんでいるように見えた・・・
「僕の・・・・キメラテック・オーバー・ドラゴンが・・・・負けた・・・」
「・・・・・敦・・・・・」
どうやら、思い入れのあるカードだったらしい・・・
まずい・・・それじゃ、結構傷つくよなぁ・・・
おまけに、初めての能力使って、負けるのは痛いよなぁ・・・
俺は少し悩み、ゆっくりと敦に歩み寄って、言った
「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！またやろうな！」
何もない白い空間に俺の嬉しそうな声が響いた
ちゃんと十代みたいに笑顔で、本当に純粋そうに言った・・・
何故だろう・・・心の何かが吹っ切れたような気がする・・・
そのまま、敦に向けていた手をほどき、手を差し伸べていた
「ほら、立てよ」
「え・・・・・あ・・・・うん」
敦は少しさびしそうに・・・・
そして、悲しそうに言った・・・・
・・・そんなに悲しかったのか・・・今度お詫びしないとなぁ・・・
「・・・また・・・僕は独りに・・・・」

「・・・・・・は？」

敦が小さくつぶやくと、敦はぽろぽろと涙をこぼしていた

え、ちょ、おま！？いきなり泣くなよ！？

俺が慌てながら敦に問いかけた

「ど、どうしてだよ！？お前は独りじゃないだろ！？」

「・・・・僕ね・・・一人なんだ・・・ずっと・・・・お母さんもお父さんも・・・居ないし・・・親戚のおじさんも・・・・僕の事、そんなに気にかけてくれなかったし・・・友達も・・・・居なかったし・・・・」

・・・・・こいつは、複雑な家庭で育ったようだ

俺と同じくらい・・・いや、それ以上に・・・辛い想いをしてきたのだろう・・・

・・・気が付くと、俺は敦に差し伸べていた手をさらに近づけていた

「・・・・友達が居ない？バカか？」

「え・・・・？だって、僕、デュエルに負けたし・・・僕と君は友達になれないよ・・・そんな資格・・・僕にはないんだ・・・」

「このドアホォ！！！」

俺が怒鳴ると、敦は一瞬ビクッと震え、俺を見上げてきた

そして、俺は言った・・・俺の偏見と価値観で勝手に決めていた、俺の考えを・・・

「友達になる資格がないぃ！？このアホ！友達になるのに資格なんか必要あるかぁ！！第一、お前がそんなにねちねちねちねちねちしてるから友達ができねぇんだよ！一人がさびしくて、辛いのも分かる！でも、そうやって、殻に閉じこもってちゃ、何もできねぇよ！殻の隙間から他の子達が遊んでいる姿見て楽しいのか！？違うだろ！？本当はそこに混じって遊びたかったはずだろ！？笑顔で走り回ってみたかったんだろ！？」

「で、でも・・・」

「“でも”も“ガチホモ”も知るか！！いいか敦！これだけは言っておいてやる！！俺もう、お前の友達になってる気でいる！！これは俺の一方的な片思いかもしれないけど、友達ってのは、少なくともお互いで認め合ってできるもんじゃねぇ！気づいた時にはとっくになってるものなんだよ！！分かったか！？」

俺がぜぇぜぇと荒い息を整えて、敦を見た
そして、怒鳴っている最中に下げた、俺の右手を差し出した
俺は握手を求めるように、いった

「俺は、お前の、友達、だ。」

「っ・・・・！！！」

カタコトだけど、俺は俺の思いを敦に伝えた
すると、敦はぽたぽたと流れる涙を袖で拭い落とし、垂れた鼻水をそのままにして、俺の右手に握手をした
そして、少しかれた声で言った

「よ゛ろ゛しく・・・うぅっ・・・お願いしま゛す!!」

左手でぽたぽたと流れる涙を袖で拭っているが、まだ涙が溢れていた
まったく・・・世話の焼けるダチだ・・・

俺は敦が泣きやむまで、ずっと手を握っていた
同性愛は、大嫌いだ・・・・
でも、男同士の友情は認めている。
俺は、何かを否定し、何かを認めなければ気が済まない男だ・・・
仕方のないことだろう・・・

ようやく泣きやんだ敦は、泣き崩れた顔のまま立ちあがった
俺はふぅと一息吐いて、敦を見た

・・・・なんつぅか、振られて泣き崩れた女子を見てる気分だ・・・

「・・・・・ぷっ」

「くっ・・・・・」

「「あはははははははははは!!!」」

白い空間で、俺達の笑いあう声が木霊した・・・
こうして、俺達の初めてのデュエルは俺の勝利で幕を閉じた・・・

十五章　ちょー→ビックリだよ！カミサマって奴が無責任すぎてちょー→ビック

俺達がデュエルを終え、ゆっくりと部屋の扉を開けると、先ほどと同じ場所に到着した

まぁ、当然っちゃ当然だよな。
変な場所に転送されて戦闘になったらたまったもんじゃねぇ・・・
おまけに、敦はまだ能力に慣れてないし・・・

ここは、先輩として俺がなんとかしてやるしかねぇな・・・

「おーい、おっさーん、ロードー？どこだぁー？」

「ロードさーん！リュウさーん！デュエル終わりましたよー？」

先ほどおっさん達の居た場所に辿り着くが、おっさんとロードは居らず、俺達が地道に探しているわけである。
敦は若干嬉しそうに鼻歌を歌っていた

・・・やっぱ友達が出来るって嬉しいよな

内心、俺も嬉しがっている。
だって、隠れオタで遊戯王初心者の友達だぜ？
遊ぶんなら話が盛り上がって、楽しい決闘（デュエル）ができる友達ってよくね？

「くそ・・・おっさんめ・・・トーストの上のチーズにタバスコビタビタに乗せた事まだ怒ってんのか？まったく、ガキかあの野郎・・・」

「あ、天城君・・・それ、辛くて眠気が吹っ飛ぶと思うよ？」

「お、ナイスツッコミ。でも、天城じゃなくて、蒼痲な。そこ間違えないよーにな？」

「あ、うん・・・というか、なんでリュウさんのトーストにそんなことしたの・・・？」

そんなことした理由？
んなもん決まってるじゃねぇか

「え？だって、“カミサマ”って奴らは全知全能（笑）で、自分のミスで殺した人間を「はいはい転生転生」とか言って簡単に別の世界に転生させるような奴なんだぜ？そんな奴になんで一々俺が味付けしたものをとやかく言われなくちゃいけないんだ？第一、俺“神”嫌いだし。」

「え・・・？天城君は転生したんじゃないの・・・？」

「あー・・・聞いてないのか？俺は転生してここに来たんじゃないんだぜ？世界の壁越えーて、いつでも会いに行くー♪みたいなノリで来た」

「それどこのフィーバー・・・？あ、リンは僕の嫁で・・・」

「んじゃ、ハクとルカは俺の嫁で・・・異論は無しだ」

異論を唱えようとしていた敦に一応釘をさしておいた
いや、ネガティブなハクって可愛いじゃん？なんか、こう・・・愛でたくならない？

ルカは・・・一生懸命頑張る姿が眼に浮かぶんだよ・・・ｗｗｗ
やっぱ、こうゆー話が出来る相手がいるって、いいよね。

「おーぅ、ようやく帰ってきたかお前達」

廊下を歩いていたおっさん達にようやく会える事ができた
やっと会えたぜ・・・

「ロード、どうせお前等見てたんだろ？」

「まぁな。点数をつけるなら・・・敦は７２点。蒼痲は８１点だな。敦、お前は相手の場を警戒しすぎだ。蒼痲、お前は慎重になりすぎだ。だが、それのおかげでキメラテック・オーバーの攻撃を止めることができたな」

「止める・・・？どういうことですか？」

ぐっ、ロードめ・・・
俺の手札も分かってんのかよ・・・！！

「実は、コイツの手札にサイバー・ダークの一体が手札に居たのだ。しかし、コイツは万が一のためにダメージを優先せず、大人しく様子を見ていたのだ。それが幸か不幸か、勝利の女神という者は、敦ではなく、蒼痲に微笑んだのだ」

「なるほど・・・・」

・・・俺の手札のサイバー・ダーク・エッジを出さない理由が分かってたのか・・・
まぁ、あの時はただ単にチキってただけなんだけどな・・・

ふと、ポケットに入れていたカードに手が当たって、俺はあることを思い出した

「・・・あ、ロード。アンタ見て思い出した」

「ん？なんだ？」

「これ、俺のデッキに入ってたんだよ。俺、このカード持ってないはずなんだよ。多分、お前なら分かるだろ？」

俺は、ロードにあるカードを渡した
そのカードは「おろかな埋葬」
あのボス魚と戦い終わった後、フェイトを助けるためにネクロ・ガードナーを墓地に落とすために使用した物だ。
だけど、あのデッキにはおろかな埋葬は一枚も入っていなかったはず
理由は、俺はおろかな埋葬を一枚しか持っていないからである
確か、出来かけのリチュアの中に入ったままだったはずだ
さっきの白い空間から出る途中でデッキを確認しても、身に覚えもないこのカード・・・
若干おかしいし・・・
オカルト的な物かと思ってたんだけど、多分、ロードが仕組んだものだと思い、俺は簡単に流していたのである

「これは・・・おろかな埋葬・・・？」

「これ、俺がフェイト達を守るために使ったんだけどさ、俺、おろ埋は一枚しか持ってないんだ。でも、何故か二枚あるんだよ」

「・・・どういうことだ？俺は知らんぞ？・・・あぁー」

ロードは何か思い出したかのようにぱんっと手を叩いた
なんか思い出したのか・・・？

「多分、それお前の能力のせいだ。」

「は？」

俺の能力・・・？
まさか、デュエルディスク（これ）のせいなのか・・・？

「お前達は気づいてないと思うが、お前達をサポートするように、俺はその能力にとある能力を与えておいたんだ」

・・・能力に能力を与えるって、なんだよ？
いや、むしろ俺が聞きたいんだけどさ・・・
そんな無駄な自問自答してんじゃねぇよ俺・・・

「デュエルに勝利すると、一定の確率でそのデッキに必要とされるカードが作られるようにプログラミングしといたんだよ。その状況に適したカードをな」

「・・・なるほど・・・俺はあの時デュエルに勝利したから、その時に適したカード・・・つまり、おろかな埋葬が俺のデッキに入ってたわけか・・・」

・・・まぁ、こういう能力ならまだ許せる。
一定の確率なら、俺にも嬉しいし、勝たなきゃいけないって条件もあるし、チートじゃないから許す

「まぁ、大体3回に一回の確率で出てくるから、デュエルターミナ

ル的な感じで受け止めてくれ。」

「あぁー。分かった」

「僕は今回負けたから貰えないんですか・・・ちょっと残念です・・・」

「なぁに、落ち込むなって。今回はチキって勝ったけど、今度はチキらずにお前と正々堂々デュエって勝つさ。」

少し俯きそうになる敦の背中をぱんぱんと叩きながら言った
だって、悲しそうな顔されちゃ嫌じゃん？
そんな時、おっさんが若干困りながら俺に向かいあった

「あー、そーま？」

「ん？どうした改まって？」

・・・こう言う時は、大抵俺にとって不幸な出来事が起きる。
理由なんて分かるだろ？
おっさんがきっと何かをやらかしたからだ・・・

「じ、実はさ・・・外がとんでもないことになってるんだ・・・」

「・・・・・よし、ちょっとそこに座れ」

ポキポキと俺の手から音がした
さぁて、顔面をぶん殴られるのと、顔面にドロップキック・・・
どっちがいいなかなぁ～♪

「ご、ごめん！そーまにこの空間のこと話してなかった！！」

「説明しろ♪」

若干笑顔でおっさんに問いかけた
人間、どうしようもない時に怒ると、笑顔になれるんだってさー♪
俺の姉さんが言ってた気がするー♪

「は、はい・・・えぇっと、実はですね？この空間は、外の世界と違う空間に位置しててですね・・・こっちが一日だと、あっちが数日経ってることになってるんですよ・・・」

「・・・で？」

「そ、それで・・・今、あっちじゃ結構時間が経ってて・・・少なくとも何日かは経過してるんだ・・・はい。すいません・・・この事伝えてませんでした・・・」

俺がイライラしていることに気を使って丁寧に説明してくれたおっさん
だが、俺の怒りは有頂天に・・・なってるわけじゃなかった
まぁ、仕方ないって言葉でやり過ごすには少々惜しい物だ
だって、なのはとフェイトが必死になってジュエルシードを集めている間に、俺はデュエルをしていたのである
だけど、その代わりに、俺は友達を得る事が出来た
だってさ？原作は好きだよ？ファンとして。
だけど、それを一緒に語れる友達も必要じゃん？
一人で作品見て喜ぶより、他の人と一緒に作品について熱く語るのも悪くないと思う。

「・・・まぁ、今回は許してやる」

「ほんとか！？」

いや、そんなに驚かなくても・・・

まぁ、怒ってるのは少しだけだし、今回は仕方ないの一言で流してやろう

今度は敦も一緒に見れるし。

「・・・で、外はどんなことになってんだ？」

「えぇっと・・・今、なのはとフェイトが戦ってて・・・」

「よし、殴らせろ」

おっさんがいい訳を言う前に殴っておいた

ざけんなよ！！今回のメインと言っても過言じゃねぇのに！

ちくしょう！！こうなったら今すぐ行くしかねぇ！！

そして、行って満足するしかねぇ！ドデカイ満足しようじゃねぇか！！

「ロード！出口どこだ！？」

「あぁ、それなら、この道を真っ直ぐ行くと、出口がある。速くいけば間に合うかもしれんぞ？」

「りょおおおおかいしたぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺は全速前進ＤＡ☆という社長の掛け声を頭の中で思いだしながら走り出した

敦はぽかーんとこっちを見ていた

『あ、天城君！』

だが、ぽかーんとしていた敦は突然念波で俺に語りかけてきた
おぉー、敦もできんのか、これ
便利だなぁオイ

『僕は、まだこの能力を上手く使えないから、後で行くよ！その時は、またデュエルしてね！』

『あぁ！！勿論だ！今度は俺のガチデッキで挑んでやるよ！今度も負けねぇかんな！！』

『うん！！また会おうね！天城君！！』

『おう！！！』

念波で話し合う俺達を見て微笑んでいるロードとおっさん
俺達が友達になるきっかけを与えてくれたことにゃ感謝しておくとしよう
だけど、カミサマってのは認めないけどな

俺はそのまま走り、出口と思われる扉を見つけると、その扉に向かい、勢いを殺さずに飛びあがった

そして、何故か叫びたくなったので、叫んでみた

「だらっしゃああああああああああああああああああああああ！！！！」

バンッ!!と扉が蹴破られ、俺は白い光に包まれて
謎の浮遊感に襲われた

「・・・しっかし、お前の連れてきた奴は面白いな。リュウ」

「だろー?俺の眼は他のバカ神と違って狂っちゃいないのさ」

蒼痲が去った後、残された三人は、訓練場に向かう道を歩いていた
理由は、敦の訓練と、ロード先生による遊戯王講座
ちなみに、ロードの授業にはリュウこと、おっさんも受けている
だが、受けているにも関わらず、蒼痲には勝てないのである

「ロードさん!今日の授業の内容はなんですか?」

敦は嬉しそうに微笑みながら質問している
どうやら、初めての友達である蒼痲ともう一度デュエルをしたいようだ

ロードも「分かった分かった。焦るな焦るな」と彼を宥めていた
「今日の授業は“チェーン”と“デッキロック”についてだ。」
「分かりました！それじゃ、僕、先に行ってますね！」
「転ぶんじゃないぞー」
「分かってまーす！」と敦が嬉しそうに先を走って行った
残された神二人はやれやれと若干呆れていた
昨日まで考えがネガティブだった敦が、こうも変わることができるとは・・・
天城蒼痲・・・面白い存在である・・・
「それにしても・・・リュウ、お前見えたか？」
「・・・あぁ。ばっちり見えた」
二人は敦が去ると同時に二人は歩きながら会話を続けた
敦や蒼痲には見えぬ存在が、二人の瞳にはばっちりと移っていたようだ
「アイツ・・・天城蒼痲はカードの精霊に好かれているようだな」
「あぁ・・・。俺も最初見た時は驚いたよ」
彼らには見えていたようだ
蒼痲を守るようにいつも後ろにいる彼女の存在に
他にも様々な精霊が居るのだが、蒼痲を気遣い、いつも隣に居る彼女はとても優しそうな笑みを浮かべている

「・・・今度、伝えてみたらどうだ？彼にはカードの精霊が居る、と。」

「無理だと思うなー・・・そーまの野郎、おっさんの話全然信じてくれねぇから・・・アイツ、無駄にシビアだからさ」

「ふっ・・・違いない・・・」

彼女のあの嬉しそうな笑みを見るたびに、心の中のひっかかっていた何かが吹っ切れるような感覚がある・・・
それは、彼女が精霊だからか・・・
それとも、また別の何か・・・

いずれ、蒼痲も知る事になるであろう
しかし、彼はいつものように自分の価値観と、偏見だけで全てを見据えるのであろうか・・・？

「まぁ、なるようになるさ。この物語の結末が、一体どんなことになるかなんて、俺達にゃぁ分からないんだからさ」

「・・・・そうだな。」

そういい、二人の神は歩みを止めず、そのまま進んで行った
真の親友は、幾つ歳をとろうと、その絆は消えることはない・・・
この二人を見ると、そんなことを思えてしまう・・・・

「だらっしゃあああああああああああああああああああああああああああ！！！！・・・・・って、え？」

謎の浮遊感に襲われた俺は、また謎の空間に居た
今度は、先ほどみたいに戦争などは起きてはおらず、平和に暮らしている人間の姿があった
その中に一つだけ、何故か心に引っかかる存在が居た
緑色の髪を一つに束ね、白いマントが風になびき、ゆらゆらと揺れていた
あれは・・・・

「が、ガスタの静寂・・・カーム・・・・？」

ふと思い出した名がそれだった。
俺の嫁と語っているだけあって、本当に可愛かった
まさか、この空間を通る羽目になるとは思わなかったが、まさか、カームに会えるなんて・・・
ロード！ありがとな！！
今なら死んでもいい気がする！！！

カゴの中に果物を入れて運んでいる
無口な顔でせっせと果物を入れている

「・・・・・・・・・」

まるでストーカーのように彼女を見ている気がする・・・

だってさ、なんか、こうやって見えるとさ、俺ってただの変態にしか見えねぇ・・・

「・・・・・あっ」

光が溢れだして、俺にもうすぐ出口だと伝えてくれる・・・
カームが見れて嬉しい気持ちと、少し残念だと言う気持ちが押し寄せてきた
やっぱ、こうやってこの空間を通してだけど、会えてよかった・・・

「・・・・じゃあな」

そういって、カームに別れを告げるように言った
そして、ようやく出口に辿り着いた俺は、ぐっと拳を握った

「っしゃあ！行くぜぇぇぇぇぇ！！！」

なんとなく叫びたくなったので、叫んでみた。
反省はしている。しかし、後悔はしていない！！！
っしゃぁ！！このまま原作の戦いを見させてもらうぜ！！！

「・・・・って、あれ？」

なんか、俺、今めっちゃ来ちゃいけない場所に来た気がする・・・

いや、なんとなくそんな感じがしてるだけ。

だってさ・・・周りがなんか暗いんだもん。

明らかにここ・・・・

「ここって・・・時の庭園・・・・・？」

よりにもよって、ラスボスの居る場所に送られちゃったわけですよ・・・

ちくしょーーーーー！！不幸だァァァァァァァ！！！！

十六章　間に会ったか！？あ、ギリギリアウトッスか・・・そうッスか・・・

「・・・・あるぇー？」

なんていうんだろうなぁ・・・

今の俺の気持ちを簡単に説明すると・・・

修学旅行で、３日間家を開けてて、持ってき忘れたゲームを楽しみに家に帰ってきたらラスボスのまん前でセーブをかかれていた時の気分だ。

うん。姉気が暇つぶしでプレイしやがったなこの野郎♪って気持ちで笑って流せるけど・・・

「（ざけんなゴルァァァァァ！！ロードの野郎ォオオオ！！はめやがったなぁぁぁぁぁ！！）・・・っ！？」

・・・思い出した。

俺、ここから出る簡単な方法があるじゃないか・・・

おっさんから教わった通り道があるじゃないか・・・・

「わ、忘れるトコだったぜ・・・」

ぶよぉぉんと、闇の回廊を開き、その中を通る

ふぅ・・・これでラスボスフラグは無くなったぜ・・・

しゃぁ！！これで今度こそなのは達の決闘に間に合う！！！

だが、俺が抜けた先には足場はなく、バシャン！！という音と同時に、俺は口いっぱいに広がる塩の味に驚いた

「ガボボボボボボ！！！」

よ、よりにもよって、開いた場所が海の中かよ！？
く、くそぉ！！変身しなければ！！！

「ベンジン（変身）！！」

ふぅ・・・危なかったぜ・・・
インパルスになってなければ、溺れていた・・・
まぁ、泳げるけどさ？
息出来ないんじゃ話にならないじゃん？
さて、ちょっと海から顔を出して見てみるか・・・

「・・・・・うわーお☆」

海面に頭を出して今、上（空）ではどんな戦いが繰り広げられてるんだろうなー♪みたいなノリで海面から顔を出した
間に合った・・・間に合ったんだけどさ・・・

「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション！！」

・・・あっはっは・・・
なんつぅタイミングで帰って来たんだ俺・・・・
もう終わりじゃん・・・
スターライトブレイカーが初めて撃たれた時じゃん。
チクショウ・・・そこそこセーフ、ギリギリアウトなタイミングじゃねぇか・・・！！
つか、なんで俺海の中でこんなにのんびりしてんだろ・・・？
・・・ん？なんか心に引っかかるヨ・・・？

「これが私の全力全開！！」

・・・・・思い出したァァァァァァ！！！

こ、この後海が間欠泉の如く、とんでもない事になるんだったぁぁぁぁぁ！！！

「ちょ、ま、待って！？」

「スターライト・・・ブレイカーーーー！！！！」

最悪だァァァァァ！！俺、フェイトの真下だぞ！？

あかん！！ホンマあかんて！！！死ぬ！！ウチ死んじゃう！！！！

いや、マジで危ないから、自分でも何言ってるか分かんない！！！！

「ちょ、ま、間にあえぇぇぇぇぇ！！」

急いでシールドを展開して、俺の魔力を一点に集中させる

だって、フェイト達みたいに魔法陣みたいなシールド使えないんだぞ！？俺は！！

一般人（パンピー）舐めんなよ！！もっとも、俺は一般人（パンピー）じゃないけどな！！

ドゴォオオオオオオオオオオオオオン！！！と爆発にも似た凄まじい音が鳴り響いている・・・

そんな中、俺は必死になのはの攻撃から身を守っていました

でもさ・・・・

「あ、ありえねぇぇぇぇぇぇ！！」

どんなに魔力を放出しても、この砲撃が終わる気配を見せません！

助けてください！ＨＥＬＰ！！助けてえーりん！！！
そして、攻撃に耐えている俺は、ようやく終わった砲撃にほっと一息吐いて、シールドを見た

「うげっ・・・・」

インパルスのシールドのほとんどが黒く焦げていて、よくここまで耐える事が出来たと、心から称えておこう。
よくやった、シールド。お前の犠牲は無駄にしないぞ・・・！！！

「・・・・あっ」

空を見上げると、金髪の女の子が海に向かって落下をしていた
・・・フェイトか・・・

ボチャンッ！という水しぶきと共に、フェイトは海に落ちた
・・・仕方ない。なのはも見る限り疲れてそうだし・・・

「・・・しゃあねぇな・・・」

ブースターに魔力を込めて、海に潜り、フェイトの居る所まで潜り、彼女を抱え、そして、バルディッシュを取って地上に上がった

「そ、蒼痲君！？」

「よぅ、魔砲娘。お疲れ」

地上に上がると同時に、俺はフェイトを助けようとしたなのはとすれ違った
なのはの息は整っておらず、いかにも疲れましたみたいな顔をして

いた

「ど、どうして・・・」

「海で昼寝してて、上（海上）がうるさいから起きた。まったく・・・いきなり砲撃してくんじゃねぇよ・・・ビックリしちまったじゃねぇか」

「ご、ごめんね・・・あ、フェイトちゃん・・・」

俺がフェイトを抱えていることに気付いたなのはは、少し残念そうに俯いた・・・

・・・まさか・・・百合・・・？

・・・なのは達とは少し距離を置く事にしよう。

だって、俺同性愛大っ嫌いなのに、あからさまにそんなことされても、俺困る・・・

俺はフェイトを抱えて、空に飛び、朝日を見た

いやー、なんか朝日見るとやる気っつぅか、なんかが溢れるよネ

「ん・・・・」

「おっ、起きたか２０００円。」

「に、にせっ・・・き、君はあの時の・・・」

おぉーう、起きたか・・・

さて、抱えたまま話す気はないし、とっとと話しを済ませるか・・・

「飛べるか？」

「・・・うん・・・」

そういって、フェイトは自分で飛んだ
そして、俺は彼女にバルディッシュを手渡した
俺の後を追うように、なのはが俺の方に飛んできた

「・・・・あっ」

フェイトの周りにジュエルシードが現れた
・・・さぁて、コイツ等が全部プレシアに持っていかれるのか・・・
まぁ、俺は被害受けたくないし、とっとと離れるかねぇ・・・

「・・・・っ！？」

俺が少し距離を置こうとした時だった
突然、バグセンサーにバグの反応が現れた
俺に目がけて放たれた黒い雷・・・
俺はシールドでそれを防いだ

だが、あまりの威力に、シールドが破壊されてしまった

「ぐぅっ！！」

い、痛ぇ・・・！！！
おまけに、ビリビリと俺の身体を駆け廻る痛み・・・
半端じゃないくらい痛い・・・！！

「蒼痲君！！！」

「ぐぅあぁぁぁぁぁ！！！」

だけど・・・俺はビームライフルを構えた
そして、雷が放たれた場所に攻撃を仕掛けた
一直線に進むビームは黒く濁った雲を打ち抜いた

「どうだっ・・・！！！」

ようやく止んだ攻撃に、俺は笑みを浮かべ「どうだこの野郎」みたいな眼で雲を睨んでやった
だが、雲は形を変え、女性の姿となった

「か、母さん・・・！？」

「え！？」

なのはがフェイトを支え、俺を心配そうに見ていた
だが、形の変わった雲は、プレシア・テスタロッサの姿となり、俺に襲いかかってきた
俺はソードインパルスとなって、彼女の攻撃を剣で受け止めた

「ぐぅっ・・・！！！」

『邪魔しないでくれる？私はお子様に付き合ってるほど・・・・余裕はないのよ！！』

黒い雷で出来た剣と、俺のエクスカリバーがぶつかり合う
バチバチと火花を散らす剣・・・
ほぉ・・・俺の事をお子様扱いとは・・・！！

「お子様だぁ？舐めんじゃねぇぞこの野郎！！！」

俺は黒いプレシアを殴り、ひるんだ所をたたき落とした
女性だからといって、勝負の世界で手を抜いてやれるほど、俺は優しくない

「どうだこの野郎！！一昨日きな！！」

『そうね・・・でも、私の目的は貴方を殺す事じゃないの！！』

「なんだと！？」

そういい、黒いプレシアは俺に向かい飛んできた
俺は警戒して、エクスカリバーを構えるが、黒いプレシアは俺を通り過ぎ、フェイトの居る場所に向かった
やっぱ狙いはジュエルシードか！？

『これさえあれば・・・・フェイト、貴女にもう用は無いわ。消えて！！』

そういい、フェイトに剣を振りおろそうとする黒いプレシア・・・

ブチッと何かが切れる音がした

「・・・・・・・・」

『な、何よこれ・・・・！？あああああああああああああ！！！』

突然、叫び声を上げる黒いプレシア・・・
フェイトとなのはは、何が起こったか分からず、ただ茫然と、その場を見ていた
死神の纏う服のように、俺の姿は真っ黒に染めあがり、ブースターも先ほどとは違い、エールストライクフォームとよく似たブースターとなっている

握っていた剣は、すでにその手を離れていた

黒いプレシアは、突然走った痛みに、叫び声を上げた

そう・・・俺が剣をプレシアに向かって投げたのだ
その剣は彼女を貫き、振りおろそうとしていた手で刺さった部分を必死に抑えていた

「・・・・・・・・・・・・」

俺は冷たい瞳でプレシアを睨みつけて、ゆっくりと近寄った
それに怯えるように、彼女も魔法を使って俺に抵抗してきたが、一発も被弾せず、俺は彼女の近くにまで辿り着いた

『なんなのよ・・・なんなのよ貴方!!!』

「・・・・・知るか!!!」

そんなこと・・・俺が聞きたいぜ・・・
でもな、いくら原作が分かってても、こんな原作崩壊、誰も望んでねぇんだよ・・・
母親の顔をした影が、なんつぅ事抜かしてやがる・・・

俺は黒いプレシアに向かい、拳を振り上げ、殴った

すると、その姿は先ほどと同じ黒い雲となって、ジュエルシードを奪い、そのまま空に消えようとしていた

「逃がすかよ・・・・」

俺が望んでいたのは原作の破壊じゃない・・・

俺は、ただ単に原作の面白さを、原作のまま見たかっただけだ・・・

でも・・・たかだかバグ風情にそれを破壊されちまった・・・

それが何よりも俺の怒りを頂点まで高まらせてくれた

「・・・待ってろこの野郎・・・今行ってやる・・・！！」

雲目がけて全速力で飛び、ジュエルシードと共に時の庭園へと移動を試みた

だが、やはり、現実はそうは甘くなかった

「ぐっ・・・・うぅっ・・・！！」

転送途中の不安定な空間の中、意識を失わず、必死に俺はジュエルシードを追っていた

だが、バチバチと雷が俺の身体を襲う・・・

「ぐっ・・・・あああああああああああああ！！！」

そして、俺はとうとうジュエルシードを見失い、不安定な空間の中で、彷徨い始めた・・・

「大丈夫・・・フェイトちゃん・・・？」

私は、消えた蒼痲君の心配をしながら、フェイトちゃんを連れてアースラまで戻ってきました

蒼痲君とジュエルシードが転送された地点を特定したエイミィさんが、武装局員の人達を送り込みました

だけど・・・さっきから、フェイトちゃんの様子がおかしいんです・・・

まるで、生きる希望を失ったかのように・・・ずっと俯いています・・・

「・・・・・」

問いかけても、フェイトちゃんは何も返してきませんでした・・・

やっぱり、あの人はフェイトちゃんのお母さん・・・だったのかな・・・？

なら・・・酷過ぎるよ・・・自分の子供に・・・あんなこと・・・

「あっ・・・・・」

モニターに、一人の女性と、それを取り囲んでいる武装局員の画面が映し出されました・・・

だけど、画面は切り替わり、別の武装局員の居る場所が映し出されました
扉の向こうに何かあると武装局員の人達が扉を開けると・・・・

『・・・・・・』

緑色の液体の中に、フェイトちゃんとよく似た女の子が居ました・・・
フェイトちゃんも、それを見て驚いていました
武装局員の人達が近づこうとすると、突然プレシアさんが目の前に立ちふさがり、武装局員の人達を吹き飛ばしました

『アリシアに・・・・近寄らないで!!』

『う、撃てぇ!!』

『・・・・うるさいわ・・・』

そういい、手をかざすと、辺り一面に黒い雷が落ちて、武装局員の人達全員にその雷が当たりました
辺り一帯に、武装局員の人の悲鳴が響き渡りました
でも・・・プレシアさんは、それをゴミを見るような目で見て、アリシアと呼ばれた女の子が入っているポッドに縋るように触れました

『もう駄目ね・・・時間が無いわ・・・たった9個のロストロギアでは、アルハザードにたどり着けるかどうかは分からないけど・・・』

そう言うと、画面(こちら)を睨むように後ろを向き、続きを告げました

『でも・・・もういいわ・・・終わりにする。この子を無くしてからの暗鬱な時間も・・・この子の身代りの人形を娘扱いするのも・・・』

「ぁ・・・っ・・・」

私の隣に居るフェイトちゃんの顔がどんどん暗くなっていきました・・・

そんな・・・まさか・・・・フェイトちゃんが・・・

『さっき告げたはずよ・・・？貴方に、もう用は無いの・・・あの時殺すはずだったのに、あのお子様が邪魔してくれたせいで、処分しそこねてしまった・・・聞いていて？フェイト、貴女の事よ？』

「あ・・・あぁっ・・・」

『・・・最初の事故の時にね・・・プレシアは、実の娘アリシア・テスタロッサを亡くしているの・・・彼女は、最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる・・・使い魔を超える、人造生命の生成・・・そして、死者蘇生の秘術・・・“フェイト”って名前は、当時、彼女の研究につけられていた、開発コードなの・・・』

艦内の放送スピーカーから、エイミィさんの声が艦内に響き渡りました・・・

じゃあ・・・本当にフェイトちゃんは・・・

『よく調べたわねぇ・・・そうよ、その通り・・・だけど駄目ね、ちっとも上手くいかなかった・・・作り物の命は所詮作り物・・・失ったものの代わりにはならないわ・・・アリシアはもっと優しく

笑ってくれたわ・・・アリシアは時々我がままも言ったけど、私の言う事をとてもよく聞いてくれた・・・』

「やめて・・・・」

やめて・・・もう、これ以上聞きたくない・・・

そんな・・・酷いよ・・・そんなこと・・・・

『アリシアは・・・いつでも私に優しかった・・・』

そういって、プレシアさんは、ガラスによって遮られたアリシアちゃんの頬を撫でていた

『フェイト・・・やっぱり貴方はアリシアの偽物よ・・・せっかくあげたアリシアの記憶も・・・貴方じゃ駄目だった・・・』

「やめて・・・やめてよぉ!!」

それ以上はもうやめて!!

そんな悲しい事・・・言わないで!!

『アリシアを蘇らせるまでの間に・・・私が慰めに使うだけのお人形・・・だから貴方は要らないわ・・・どこへなりとも消えなさい!!』

「お願い!!もうやめて!!!」

フェイトちゃんを振り払うようにこちらを向くプレシアさん・・・プレシアさんに止めて貰おうと、必死に叫ぶ私・・・でも、プレシアさんはそれを見て楽しむように嗤いました

『あっはっはっは！！あはぁ・・・あっはっはっはっは！！ふふふ・・・いい事を教えてあげるわフェイト・・・貴方を作り出してからずっとね・・・私は貴女の事が・・・大嫌いだったのよ！』

「っ・・・・・・」

そして、プレシアさんはそれを言い終えると、また高く笑いましたフェイトちゃんは、絶望に押し潰され、その場に倒れてしまいました・・・

プレシアさんの背中から、黒い闇のような物が浮かび、それが蛇のようにプレシアさんを包み込みました・・・

そして、プレシアさんは手を広げて言いました

『私達は旅立つの・・・忘れられた都、アルハザードへ！！』

『娘が嫌いか・・・・奇遇だな。俺は親が大嫌いなんだ。』

『っ！？誰！？』

その時、モニターに、一人の男の子の姿が映し出されました・・・

柱の陰からゆっくりと現れる彼は、私が悩んでいたの時に、いつでも側に居てくれた人・・・

『やっぱ、娘とか息子って邪魔だよなー。わんわん喚くし、うるさいし、無駄に金だけを消費していくだだけの存在なんてさ。』

『お前は・・・・っ！！！』

コツコツと部屋に入っていく・・・

その姿はボロボロで、服の至る所が破れている・・・
髪はぼさぼさで、天然パーマが目立つ少年だった

『親も親だ。子供にあーしろ、こーしろって、うるさいし。心がボロボロで、泣いてる時だって「嘘泣き」はやめてくれる？とか酒飲みながら言いやがってさ・・・』

『お前・・・転送中に消えたんじゃなかったの！？』

『まぁな。お陰で中々楽しい空中フライトを楽しめたよ。まぁ、雷が当たって痛かったけど。』

プレシアさんと、アリシアさんに近づきながら語りかける彼・・・
はぁ～～と深いため息をついて、彼は言いました

『プレシア・テスタロッサ・・・だっけ？アリシアだか、フェイトだかどーでもいいけど、実の親が娘になんつぅ事言いやがる』

そういって、彼は姿を変えて、剣を構えました
その黒い姿は・・・まるで、死神を思いつかせるように・・・

『謝れ、クソ婆。』

そこに・・・天城蒼痲君は居ました・・・

十七章　大切な事ほど忘れやすい。でも、それを思い出すたび、強くなれる（前）

作者「いやー、最近感想がどんどん増えて来て嬉しいよー♪指摘などのコメントもいただけて、作者は満足ですよー♪」

蒼痲「インフェルニティデッキでも作るのか？」

作者「ちゃうわ！！」

おっさん「さてさて、そろそろ無印も終わりに近づいてきたな・・・」

蒼痲「で、その後の予定は？」

作者「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

おっさん「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

蒼痲「・・・考えてねぇのかよ！？」

十七章　大切な事ほど忘れやすい。でも、それを思い出すたび、強くなれる

俺は今、大魔導士と向き合っている・・・
殺気も普通の人間とは比にならないくらい出ている・・・

でもさ・・・俺にゃぁ分かる。
バグセンサーって奴が、さっきからプレシアから感じるバグの波動で起動しなくなってる・・・
明らかにおかしい・・・妨害電波みたいな物が出ているのか・・・？

「貴方は・・・本当に邪魔しかしないのね・・・」

「まぁな。社会のゴミなんで、人の邪魔しかできないんだ。悪いね。」

「何を言っているの？まだ9年くらいしか生きていないお子様が・・・」

「さぁ？俺は何才だろうねぇ・・・それは俺にも、お前にも分からないさ。」

アリシアの入っているポッドに結界を張るプレシア・・・
どうやら、俺を本気で殺る気らしい

「ふざけた事を・・・・！！いいわ、まず貴方から消し去ってあげる！！！」

「だが断る！！！」

プレシアが黒い雷で俺に攻撃を仕掛けてきたため、俺はそれを回避して、プレシアにビームライフルを向け、こちらも仕掛けた

「甘いわ」

しかし、俺の攻撃は彼女に届くことなく、目の前で掻き消されたったく、チートもいい加減にしろっての・・・！！

「さっすが、歳相応の技術を持ってるってわけか。やるな、駄目人間」

「そうね・・・貴方の攻撃なんて、私には絶対に届かないわ」

ほう・・・えらい自信だな・・・

なら、俺はその自信をぶち壊してやる！！

「ほぅ・・・んじゃ、俺の攻撃、絶対アンタに届かせてやるよ」

「無理ね・・・だって、もう私の勝ちは決まっているんだもの」

「どういう意味だ？」

「足元をごらんなさい。」

プレシアに言われるがまま、地面を見ると、黒い蛇のような物が俺の足に巻きついていた

な、なんだこれ！？いつの間に！？

「さぁ、噛みつきなさい・・・私のペット達・・・」

ガブッ！！と俺の足に噛みつく蛇達
な、なんだ！？か、身体が急に重く・・・・・！？

「その子達はねぇ・・・ある存在が私にくれた物なの・・・噛みつくと、身体の中にある魔力を根こそぎ持って行って、私の魔力に換えてくれる・・・面白いでしょ？」

「へぇ・・・そりゃ面白いな！！」

そういい、俺はブラストインパルスフォームになってプレシアにケルベロスの一撃を放つ
しかし、やはり先ほどと同じように、黒い壁のような物に阻まれ、攻撃が通らない・・・

「ふふふ・・・言ったでしょ？貴方の攻撃は絶対に私に通らないって」

「・・・やるじゃねぇか」

頬に、冷たい汗が流れた・・・
俺の直感が言っている・・・“逃げろ”と・・・
目の前まで迫っている“死”というものから逃げようと、必死に俺に訴えかけている
だけど・・・俺にゃぁやることがあるんだ・・・！！
俺の大好きな原作を・・・・そして、フェイトを傷つけたバグ（コイツ）をぶっ倒さなきゃ、俺の気が収まらねぇ！！

「うぉおおおおおおおおおおおお！！！」

魔法は諦め、俺は肉弾戦でケリをつけることにした
足に食いついている蛇を振り払い、俺はプレシアまでの距離を詰めた

「甘いわ」

だが、彼女は杖で地面を軽く叩くと、地面は割れ、俺の足場を奪った
俺は急いで回避するが、その先には先ほどと同じ黒い蛇が俺を待ち受けていた

「ぐぅっ・・・・!!」

また俺の身体に噛みつき、魔力を根こそぎ持っていく蛇達・・・
くぅっ!!痛ぇじゃねぇかこの野郎・・・・!!

「ふふふっ・・・いいわぁ・・・貴方の魔力・・・私好みの味だわ・・・」

ふふふっと笑みを浮かべ、俺を見下すプレシア・・・
魔力に味なんてあるのかよ、ってツッコミたいけど、戦いの最中にボケとツッコミをやってる暇があるのは銀魂くらいだ・・・
俺にゃ無理だ・・・そんな高等技術、できたらやってみたいわ・・・

「くうっ・・・・・!!うぉおおおおおおおおおおおお!!!!」

俺は雄叫びを上げてプレシアとの距離を詰めて、いっきに拳を叩きこんだ
しかし、障壁によって攻撃が遮られ、俺の攻撃は一発も通らない・・・
・
なら、それをぶち壊すまでだ!!!

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！」
キックとパンチのラッシュで、障壁を破壊しようとするが、俺の手を足が痛みに悲鳴を上げるだけ・・・
そんな中、俺の右ストレートを片手で止めたプレシアが言った
「・・・御遊びはここまでよ？」
そういうと、俺を掴み、そのまま遠くに投げ飛ばして、不敵な笑みを浮かべた
「なにっ！？」と聞き返そうとした時、プレシアはすでに俺の前に居て、俺の腹にパンチを叩きこんでいて、俺は少し宙を舞うと、彼女の踵落としで地面に叩きつけられた
そして、地面に叩きつけられても、彼女の攻撃は止むことなく、俺に当たり続ける・・・
「ぐぅっ！！！あぁッ！！」
これは一方的な戦いだ・・・
最初に調子に乗ってデカイ口叩きすぎたな・・・
俺・・・やっぱ弱いな・・・
「さぁて、貴方の魔力、頂こうかしら・・・」
そう言うと、手から黒い蛇を生みだして、俺の首元に巻きつかせた
そして、その黒い蛇は命令通り、俺の首元に噛みついて、俺の魔力を奪っていった
「俺の魔力なんて食っても、使えなきゃ何の意味もないだろ？」

こうなったら、挑発でもして、隙が出来るのを待つしかねぇ・・・
身体の節々が痛ぇし、痛みが電流のように俺の身体を駆け廻ってる・・・

俺がプレシアを挑発するように言うと、プレシアは俺をもう一度掴み、遠くに投げ飛ばした
ぐぅっ・・・！！痛ぇ・・・・！！

「それはどうかしら？」

「何・・・・！？」

プレシアが杖を突然緑色の光を放ち、その形を変えた
あ、あれって・・・・
俺のランチャーストライクのアグニ！？

「あらあら・・・子供なのに、随分と重い物持てるのね・・・」

そういい、プレシアは俺に銃口を向けていた
まずい・・・！このままじゃ確実に死ぬ！！

「トリガーは・・・ここね・・・」

銃口に黒い魔力の塊が集まり始めた・・・
ぐぅっ・・・！なんとか、アグニを元に戻さねぇと！！
でも、なんでだ！？さっきからランチャーストライクになろうとしても、なれねぇ！？
まさか・・・

俺は、自分の足に巻きついていた蛇を見た

さっき振り払ったはずの蛇が、緑色の染まり、俺の足から離れて行った

まずい、俺のアグニが完璧に乗っ取られてる！？
この蛇は、奪った能力をプレシアに魔力ごと送るのか！？

「死になさい」

そういい、プレシアは引き金を引いて、俺にドデカイ砲撃を放った
その大きさは、なのはのスターライトブレイカーと同等・・・いや、それ以上！？
この時、俺の直感が告げていた・・・
もう、“死ぬ”と・・・・
今までに起きた事が走馬灯となって俺の脳内に駆け巡る・・・
嫌だ・・・・俺は・・・・死にたくない！！
まだ、来週号のジャンプ見てないし！新しく追加されるガスタのシンクロモンスターの絵も見てない！！

「負けて・・・・」

凄いスピードで迫る攻撃に、俺は動く事が出来ず、俺はケルベロスを構え、アグニから放たれた黒い砲撃に抵抗しようと、俺はケルベロスに俺の中にある全部の魔力をつぎ込んで、撃ち出した

「たまるかあああああああああああああああああああああ！！！！！」

だが、俺の魔力は蛇に根こそぎ持っていかれ、僅かな魔力で撃ちだした物・・・

それが、なのはのスターライトブレイカーを超える黒い砲撃に勝てる訳がなかった・・・

俺はあっという間に砲撃に巻き込まれ、意識を失った

「あ・・・・あぁっ・・・・」

画面に映し出されていたのは、蒼痲君がプレシアさんの放った砲撃で、吹き飛ばされている所でした・・・

となりで、涙を流しながら画面を見ているフェイトちゃんの顔が、さらに暗くなっていきました・・・

嫌・・・そんな・・・蒼痲君・・・・

プレシアさんの攻撃が止み、プレシアさんが一度ため息をつきました

『やれやれ・・・執念深くて困るわ・・・』

『・・・・・・・・・』

そこには、真っ黒になっている蒼痲君の姿がありました

ボロボロで、今にも倒れそうで、服も所々焦げてます・・・

「蒼痲君!!返事をして!!」

「蒼痲!!そこは危険だ!脱出しろ!!」

「天城君！！」

アースラの局員の人達が艦内で必死に通信で話しかけますが、彼にはまったく届きません・・・

プレシアさんがゆっくり近寄り、驚いたように顔を歪めました

『まさか・・・・立ったまま気絶するなんてね・・・』

「嘘・・・・」

彼は、立ったまま気絶していたのです・・・

だけど、プレシアさんが触ると同時に彼は倒れてしましました・・・

蒼痲君を持ち上げ、そのまま壁にまで放り投げたプレシアさんは、手から蛇のような物を作りだして、壁にもたれかかっている蒼痲君に向かい放ちました

『いいわ、それじゃ、残っている魔力、全部頂こうかしら』

私は、居ても立ってもいられなくなって、モニタールームから駆けだして、転送ポートまで向かいました

「クロノ君！？何処行くの！？」

「決まってる！あそこに行って、蒼痲を助ける！！」

「それじゃ、私も連れて行って！」

「僕もだ！！」

私の後ろからユーノ君が追いついて来て、私の横に立って、説明をしようとしました
だけど、クロノ君は何も言わず、腕を組みました
「・・・いいけど、無茶はしない事。いいね？」
「うん！！」
そういって、私は転送ポートから蒼痲君の居る時の庭園に向かいました・・・
待ってて、蒼痲君・・・・！！

・・・・・・俺・・・どうしたんだろ・・・？
あ、そっか・・・・
俺、プレシアに負けたんだっけ・・・・？
「・・・・ん・・・・ぁ・・・・・？」
目を開けても・・・
何も見えない・・・・
ただ、暗く薄暗い場所に居るのが分かるだけ・・・
「・・・あ～あ・・・俺、死んだのか・・・・」

あーぁ、死んだのかぁ・・・
勿体ねぇなぁ・・・
これで、来週号のジャンプも、読みたい本の最新刊も、見たかったカードも、新しい遊戯王のパックもぜーんぶおさらばか・・・

「・・・・あれ？ありゃなんだ？」

突然、謎の空間が明るくなったと思ったら、俺の前にデカイ石板が現れていた
大きさを言えば・・・あれだ。遊星とかキチアーノとかがカードを手にする時に落っこちてくる石板だ。
なんでだろう・・・・なんか、見た事ない文字なのに、読める気がする・・・

「・・・『汝、神を忌み嫌う者よ、汝、異端を忌み嫌う物よ、我の問いに答えよ。
汝がここに来た理由はなんだ？』・・・俺が・・・ここに来た理由？」

ドデカイ石板のくせに、それしか書かれてなかった
俺のするべき事って・・・・
そりゃ、バグを駆除して、原作を守るんじゃないのか？
・・・いや、あの時点で原作は破壊されてたから、違うか・・・
その前に・・・・俺はなんのためにこの世界に来たんだっけ・・・・？

・・・・・あれ・・・？
凄く大切なことなのに・・・全然思い出せない・・・？

「な、なんでだ!?えっと・・・あれぇ!?」

全然思い出せない・・・

おかしいぞ・・・?死んで頭が狂ったのか・・・?

悩む俺は、腕を組んで、真剣に考えた

(落ち着け・・・まず、おっさんが手を差し伸べた日の事を思い出せ・・・あの時は、学校帰りで、その辺にあったコンビニによってコーヒー牛乳買って・・・おっさんに出会って・・・)

取りあえず、初めておっさんにあった日の事を思い出して、その時に、何を決心したのか、思い出そうとして居た

(で・・・家帰って・・・飯食って・・・風呂入って・・・リンコと会って・・・・・・!!そうだ!!)

俺は、歪んでるから・・・・

そう、人に嫌われる存在なんだ・・・

でも、そんな俺でも、大切な物があるんだ!!

(ようやく、思い出した!俺がこの世界に来た理由!!)

そうだ!!俺がこの世界に来た理由は・・・!!!

「俺は、大切な人達に会いに来たんだ!!」

そう!!俺は、リンコや、カーム、ルカ達に会いに、おっさんの差し伸べた手をとったんだ!

たった一言・・・“ありがとう”の一言を言うために！！
それが、どんなに一般人から蔑まれようと・・・
それが、どれだけ俺に苦痛を与えたとしても！！！
俺は、彼女達（みんな）に会いに来たんだ！！！

こんなに歪んでいる、腐った社会のゴミを救ってくれた彼女達に、
会うためだ！！
彼女達が俺の事を知らなくても、俺は覚えてる！！
ちゃんと、この心に刻み込まれてる！！
あの時の俺の気持ちや・・・俺の想いが！！

俺は、そんな大切な事も忘れてたのか・・・

「お前は・・・・そんな大切な事を思い出させるために・・・」

俺は軽く石板に触れた・・・
そうだ・・・俺は、力を手に入れたから、そんなとても大切な事を
忘れてしまったんだ・・・
俺が、一番忘れてはならないことを、忘れてしまったのだ・・・

「・・・頼む、石板・・・・・」

俺はそういって、石板の前で拳を構えていた
あの異端（バグ）を倒す、力を！！！

「俺のすべてを賭けても良い！！だからお願いだ！！俺に、あの異
端を討ち消す力をくれぇぇぇぇ！！！」

俺は、右手を空高く掲げ、石板の前で雄叫びを上げた

まだ崩壊が始まっていない時の庭園・・・
そこに、プレシア・テスタロッサは居た
口元を抑え、咳き込む彼女の手から、血がぼたぼたと垂れる

「ゴフッ・・・！！そろそろ、管理局の執務官が乗り込んでくる頃ね・・・行く準備を済まさないと・・・！！」

「んなこと・・・・させっかよ・・・」

「！？」

ガラッと、彼を取り巻いていた蛇と瓦礫が一緒に落ちて行く・・・
蛇は、彼に触れた瞬間に次々と消滅し、奪った魔力が黒い霧状の物となってプレシアに送られる・・・
そこには、先ほどまでボロボロになってまで戦っていた少年の姿は無く、その少年が何年もの時をかけて育った姿があった・・・

先ほどのように、バリアジャケットは装着されておらず、白い夏服の半そでのシャツ、そして、学校帰りを思い浮かばせるズボン・・・
声も先ほどとは違い、大人に近づいている青年の声をしていた

「プレシア・・・いや、バグ野郎・・・」

立ちあがると同時に、ぼさぼさの天然パーマが嫌というほど目立ち、
そして、格闘家も恐れるような殺気でプレシア（バグ）を睨んでいた

「なんなのよ・・・貴方は！！」

「・・・ただの・・・・」

そういい、彼は拳を構えた
彼が喧嘩の為に編み出した我流のファイティングポーズ・・・
そして、相手を殺す勢いで睨みつける瞳・・・

「大馬鹿野郎だ・・・・覚えておきな・・・」

何より・・・彼から放たれている物に、魔力は一切感じない・・・
つまり、何の能力もない無能力者が、大魔導士、プレシア・テスタロッサと対峙しているのである・・・

十八章　原作破壊？そんなもんとっくに始まってんだろ！？なら、それを始めた

俺は・・・もう一度、プレシアと対峙している・・・

さっきの空間から帰ってきて、俺は力を・・・手に入れたはずなんだが・・・

まったく、力の波動とやらを感じない。

なんつぅんだろうなぁ・・・内側から出てくる何かが感じられないんだよ

「それが・・・貴方の本当の姿なのね・・・」

「あぁ・・・ちょっと呪いにかかってな。ガキの姿にされてたのさ。」

「面白い呪いにかかったのね・・・じゃあ、どうしてその呪いが解けたのかしら？」

「知らん。むしろ、俺が聞きたいくらいだ。」

第一・・・俺が子供の姿になったのは、おっさんがこっちに送り込む際に俺に何かをしたんだろう

それがどういうわけか、勝手に外れたとしか言いようがないじゃないか。

「そう・・・でも、貴方が姿を変えても、私には貴方の攻撃は通らないわ・・・絶対に。」

「・・・・・・・」

挑発に乗ってはいけない・・・・

それは、勝負の世界での心構えだ。

己を見失えば、勝利すら見失う・・・

ならば、俺は・・・一人の戦う者として、プレシア・テスタロッサを・・・倒す！！

「んじゃ・・・」

俺は右手を胸元まで近づけ、強く握った

そして、決意を込めた瞳で睨んだ

「俺がその幻想をぶち殺す！！！」

そして、俺はプレシアに向かい駆け出した

距離を詰めるにつれて、魔法が放たれるが、紙一重で全てかわす・・・

やっぱ、子供の力だけじゃプレシアにゃぁ届かないわな・・・

でも！今の俺は１７歳の姿だ！！

９歳の時とは違って、筋肉も、喧嘩のやり方も！全てにおいて凌駕している俺を舐めるなよ！！

「ウォオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

「っ！？」

俺がプレシアとの距離を詰め、俺の拳の届く範囲に入ったプレシアに俺の拳を叩きこんだ

だけど、プロテクションでガードされてしまい、俺の攻撃は届かなかった
ぐぅっ！！なんつぅ固い鉄壁だよ！！殴った左手がビリビリして痛いじゃねぇか・・・！！

「邪魔よッ！」

「あっぶねぇよ！！！」

アグニを杖に変え、杖から鞭に変形させ、俺に鞭を放つプレシア
だけど、反射神経や肉体的にも成長した俺を舐めるなよ！！
全て紙一重で避け、俺は後ろに後退した

「何よ・・・・何よ何よ！！なんなのよ！！！」

上手くいかない事に怒りを隠せないプレシアは、怒りにまかせて俺に鞭を振るった
だが、俺はまた距離を詰めた
ピシンッ！！と先ほど俺が居た場所にプレシアの鞭が当たった
そして、走りつつ、俺は近くに転がっていた少し大きな石を手に取り、プレシアに投げた

「食らえぇぇぇぇ！！」

「っ！？」

鞭を手元に戻した隙をつき、俺は石を投げた
プレシアは反射的に鞭でその石をはたき落そうとしたが、石にはひびが入っており、プレシアの鞭に当たった瞬間砕かれ、プレシアを襲った

「っ！！！！」

プレシアが砕けた石に注意を向けている間に、俺は戦いの最中に落ちてきた大きな岩の影に隠れた
プレシアが俺を見失い、怒りを露わにして俺を探している・・・
だが、彼女は魔力を持っている者にのみ反応する直感を頼りに、俺を必死に探していた

「・・・・ふぅ」

ほっと一息吐いて、これからの事を考える・・・
俺は右手を掲げ、掌を見た

「（俺の全てを賭けて力を欲したのに・・・手に入れたのが、もとの身体かか・・・ちっ・・・あんなにデカイ石板なんだから、もっと別の何かをよこせっての・・・異端（チート）じゃない能力ならなんでもいいから・・・）・・・っ！？」

「どこに隠れたの！？出てきなさい！！！」

そういい、怒り狂ったプレシアは近くにあった大きな岩に鞭打ちをした
爆発音にも似た音が響き渡り、岩は木端微塵に砕け散っていた

（こ、怖～っ・・・・・はぁ・・・やっぱ、分の悪い賭けだったのか・・・）

『そーま！！聞こえるか？！』

俺が真剣にこの状況を打破する考えを考えていると、おっさんが俺の通信に割り込んできやがった

『あんだよ・・・今、俺は真剣にだな・・・』

そういい、俺は右手で頭を触り、がむしゃらに引っ掻いた
だが、突然ブツンッ!!と何かが切れる音がして、おっさんの声は聞こえなくなった

『お、おい!?どうしたんだよ!?』

『そ・・ま!!・・・お・・・え・・・どう・・・し・・・』

『おい!?どうしたんだよ!?』

まるで電源の切れかかったトランシーバーで連絡を取り合っているような感覚だった
おっさんの声が途切れ途切れに俺の脳内に響く・・・
え!?俺なんかしたのか!?
俺が右手を頭から話すと、徐々に回線が回復するような感覚がした

『そ・・・ま!なんだよ・・・い・・・の!!』

『あぁもう!!聞こえるかこの野郎!?』

『聞こえる!!やっと通じた!!そーま!!時間が無いから、お前に簡単に説明するぞ!!』

おっさんが必死に俺に連絡をとっているという事が分かった

なんか、おっさんの回線の方から爆音とかがするんだもん・・・
そりゃ、驚くよ・・・

『お前、変な石板の前に行かなかったか！？』

『あぁ！！さっき行って、戻ってきたら身体がもとの姿に戻ってたんだよ！どうなってんだ！？説明しろ！』

『それも踏まえて説明する！今、この世界の意志が滅びようとしている！！黒いウナギっぽい何かが意志を侵略し始めたんだよ！だから、俺達はそれを今食い止めてるんだ！出来れば、戦い終わったら、俺の方に来てくれ！！』

『む、無茶言うなよ！！俺だってギリギリの限界バトル繰り広げてんだぞ！？今はなんとか生きてるけど、下手したら一回死んでる男だぞ！？』

『どーでもいい！！でも、さっき世界の意志がお前に“ありとあらゆる異端を打ち消す力”を託したって通信が入ったんだ！』

『“ありとあらゆる異端を打ち消す力”ぁ！？んなもん装備されてねぇよ！どーゆーことだよ！？』

お互いに感情をぶつけ合いながら喋っているが、意志疎通をしているのは確か・・・
だが、俺には分からない“力”が俺に託されたって言われても、困るんだよ！！
だけど、おっさんの方の通信に凄まじい爆音が響いて、おっさんは一度舌打ちをして、俺の話しかけた

『ちぃっ！！時間が無い！！いいか！簡単に言うぞ！お前の“誓い”と“決意”がお前に力を授けたはずだ！その力は、俺達神をも超える！！それともう一つ！この異端（バグ）どもは、この物語の引き金（トリガー）となった奴に憑依してるらしい！だから・・・』

そして、もう一度回線が切れて、今度はこちらから呼びかけても、ザーッとノイズの音しかしなかった

『おっさん！！おっさん！！おい！なんだよ！？“ありとあらゆる異端を打ち消す力”って！？それと、最後の意味深な言葉はなんだ！？おっさん！おっさん！！』

「見つけたわよ！！」

「っ！？」

俺のもたれかかっていた岩が突然破壊され、爆音が辺りに響き渡った
俺は咄嗟にしゃがんで砕けた岩の破片から回避したが、明らかにこちらに向かい殺気を放つプレシアの姿があった

「見つけたわよ・・・さぁ、いい加減終わりにしましょう！！こんな無駄な時間をね！！」

そういい、彼女は鞭の形を変えて、アグニの銃口をこちらに向けていた
そして、俺を葬り去ろうとしたあの砲撃を俺に放った
ゴォオオオオオオッ！！と凄い勢いで迫る砲撃に、俺は立ち向かおうと、必死に何かを考えていた

（くそっ！！いくら今の姿でも、制服だけじゃ俺が確実に消し飛ぶ

！！なら、どうすりゃいいんだよ！？“ありとあらゆる異端を打ち消す力”ってモンも何か分からねぇし！！）

あぁもう！！なんだよ引き金（トリガー）って！！

引き金なら、今プレシアが引いたわ！！！

何！？幻想殺し（イマジンブレイカー）でも託したのか世界の意志は！？

なんでインデックス！？なんで上条センパイ！？

もうなんでもいい！とりあえず、俺は状況を打破出来りゃそれでいい！！

「こんチクショウがァァァァァァァァァァァァ！！！」

俺は無我夢中で右手を前に突き出した

「・・・・・・あれ？」

戦いの最中だというのに、不抜けた声が出た・・・

おかしいな・・・痛くないぞ・・・？

若干、掌が熱いだけで、特に俺の身には何も起こってないんだけど・・・

「な、何が起こったの！？」

いや、んな事俺が聞きたいんですけど・・・・・・まさか！？

俺はそっと右手を見た

明らかに、さっきの攻撃を受け止めた感覚が残っている

「・・・・マジ？」

俺は心から思った・・・

なんで幻想殺し（イマジンブレイカー）が俺の右手にあるんだよぉおおおおおおおお！！！

なんだよ！？最弱の癖に最強の能力手に入れたんだけど！？

いや、心の奥底じゃ「やべぇ！！嬉しい！！これで勝つる！！」って思ってるけど、なんで俺が異端（チート）を手にしにゃならんのだぁぁぁぁぁぁぁ！！

文字通り手にしたんですけどぉおおおおおお！！！

「まさか・・・残りの魔力を全て身を守るために使ったのね・・・そうね、きっとそうよ・・・！！私は負けないはず・・・！！そう！私は負けないのよ！！私は！何者にも負けない力を手にしたのだから！」

そういい、彼女から真っ黒な魔力が溢れだし、その魔力が真っ黒な蛇の形をして、俺を睨んできた

黒い蛇は舌を出して、俺に威嚇をしていた

だが、俺は威嚇に屈することなく、手にした力について考えながら
プレシアと向き合った

俺の勝手な考えだが・・・プレシアは、ある存在から力を受け取ったらしい。
その力を使って、自分の魔力を膨大に底上げして、自分の作った手下達に自らの手を下さずに、敵を倒すことを続けていたようだ・・・

簡単に言えば、モンハンの悪魔ネコだな。
ハンター（プレイヤー）は戦わないが、オトモアイルー（チート）を使って
自分の強さじゃないのに「俺は最強だ！」みたいな事を言っているプレイヤーだ
だけど、いざソロプレイでG級のミラルーツに挑むと、あっさり負けて
それを「まぐれ」だと言って誤魔化しているのだ

今、その状況下に置かれているプレシア（プレイヤー）・・・
悪魔ネコ（チート）に頼って、自分が最強だと、自我自賛している
愚かな異端

「そう！！私は最強なのよ！！！」

「っ！！！」

俺はプレシアが動き出すと同時に、俺も動いた
アグニから放たれる攻撃を右手を突き出して無効にして、そのまま
構わず突き進む

「だから！！だから！！私よりも優れた能力なんて存在しないのよ

！！！」

そういい、彼女は全ての魔力をアグニに注入し始めた
黒いオーラがアグニの銃口に集まって、銃口の中に入った黒い蛇が、
今行くぞと言わんばかりに俺を睨みつけている

「んなわけあるか！！」

それをもろともせず、俺は地面を蹴った
どんどん彼女との距離を詰める・・・・
銃器などは距離が近ければ近いほど、威力を増す物だ
だが、俺は気にも留めず、走っていた

「大きすぎる力は、やがて全てを失う！大切な人も、物も！！全部
！！それが自分で手に入れてない物なら尚更だ！！」

それは、俺がチートを嫌う理由だった
確かに、チートを使えば、どんなことでも成し遂げられるだろう・・
・
でも、１０００回中１０００回が正解じゃ、間違ってると思う
１０回に１回失敗して、挫折して、それを乗り越えてこその人間だ
そんな中で、たくさんの悲しみを背負う事になるだろう
でも、それを支えてくれる友達や、仲間が居るから、人は強くなれ
る・・・

「人間誰しも失敗するものだ！アンタがどう言う理由で、アリシア
を失ったかは知らねぇ！でもな、自分の手で生み出した娘を・・・
フェイトをお人形呼ばわりするんじゃねぇ！！姿形を似せたのはお
前じゃないのか！？記憶も、命も！！全部与えたんだろ！？」

それに、化け物染みた力を使えば、人から恐れられるに決まってる・・・
故に、妖怪と人間は相容れぬ存在と認められてしまったのではないのか？
妖怪を恐れた人間が、妖怪を一方的に避けてきたのではないのか？
チートは、自分の能力を底上げして、限界の無い・・・
いわば∞の状態にするのだろう？
でも、人間いつしか死ぬもの・・・
それは俺が生まれるずっと前から定められたルール・・・
それを破る、神という存在が俺には信じられなかった
パソコンを開いて、適当にネットサーフィンしても、見つかるのは
「神」や「天使」などが自身の権力で、死んだ人間を他の世界に送って、最高の人生を楽しませるというものばかり・・・

俺は別に、原作厨というわけではない
他の人が思いついた面白い作品を、素直に楽しむし、関心しながら見る・・・
俺だって、チート等を否定しているが、認めている部分もある！
俺はそんな矛盾を抱えているんだ！

「なら、アンタがやるべき事は、フェイトを、実の娘を・・・愛してやることじゃないのか！？」

「貴方に・・・何が分かるのよぉおおおおおおお！！！」

彼女は涙を流しながら、俺に真っ黒に染まった砲撃を放った
その反動で、アグニの銃口があまりの威力に耐えられなくなり、溶けていた

「いいぜ・・・まず！！その幻想を・・・・・」

結局、俺の言っていることにも矛盾はある
でも、人間はその矛盾の中で生きているんだ！
だから、俺はチートを許さない！
人は、不完全だからいいんだ！
完璧な人間なんて居ない！
Ｎｏｂｏｄｙ’ｓ Ｐｅｒｆｅｃｔって奴だ！！！

「ぶち殺す！！！」

俺は雄叫びを上げると同時に、プレシアの放った砲撃を右手で受け止めた
予想外にも、プレシアの攻撃が先ほどよりも重く、打ち消しにくくなっている・・・
どうやら、本当に彼女の全てを賭けているらしい・・・

「うぉおおおおおおおお！！」

だが、俺は掌を前に突き出し、前進していた
それは、小さな一歩かもしれない・・・
でも！どんなに小さな一歩でも、一歩前に出れた勇気があればいいんだ！

俺は・・・・・
俺を・・・暗い殻から出す勇気を与えてくれた彼女達(みんな)に、俺は会うんだ！！
会って、一言言うんだ！！

それは、とても当たり前で・・・

「くるな・・・くるなくるな・・・来るなっ・・・・！！」

とても大切で・・・

「来るな！！来るなぁっ！！！」

忘れてはならない言葉・・・！！

“ありがとう”って言うために！！！

完全に、彼女の砲撃が止まった時、俺はすでにプレシアの半径１０メートル内に入っていた・・・

どんなに小さな一歩でも・・・いつかは終点（ゴール）に届く・・・

人間の人生は、長いマラソンのような物と聞いたことがある。

その途中で、足が痛くなったり、辛くなったりするけど、人間はそれを乗り越える事で強くなれるんだ・・・

途中で脱落する人もいるだろうけど、最後まで走り続ける人だっているんだ・・・

「私が・・・負けた・・・・？」

「・・・・・・」

俺は、プレシアの前に立って、拳を握った

彼女は、逃げようと後ろを向こうとするが、足にあった石に躓いて、その場に転んでしまった

そして、俺は彼女を見下すように、立った

「う・・・そ・・・・」

そして、俺は拳を振り上げた
すると、彼女が手をクロスさせ、殴られまいと、ガードしようとしていた

・・・だが、俺の目的は殴ることじゃない・・・

俺は彼女に目線を合わせるように足を曲げて、振り上げた拳を解いて、凸ピンをする体勢で待機していた
そして、彼女が目を開けると同時に、俺は凸ピンをお見まいしてやった
俺の目的は、殴る事じゃなくて・・・

「確かに、一発叩きこんだぜ」

「・・・・・え・・・・？」

彼女が「絶対に無理」と言った事をやっただけだ。
さてと・・・おっさんが言った「この物語の引き金（トリガー）」となったプレシアを倒したし・・・これで解決・・・なのか？
だが、俺のそんな甘い考えは粉砕され、突然プレシアが張った結界から黒い何かが放たれた

「っ！？危ねぇ！！」

俺が咄嗟にプレシアを突き飛ばし、俺が盾となって、その攻撃を受けた

その時、プレシアからパキンッ・・・と、何かが割れる音がした・・・

突然の脱力に驚くプレシアは、俺の突き飛ばすがままに後ろに倒れただが、タダでやられる俺じゃねぇ！！

「ふんっ！！！」

右手を前に突き出して、その攻撃を相殺して、無効にした

危ねぇ・・・後少しでプレシアに当たる所だったじゃねぇか！！

『ふむ・・・やはり、人間の力はこの程度か・・・』

突然、プレシアの張った結界から、緑色の液体の入ったポッドが出てきた

先ほどまで身体を丸めるようにポッドの中に入っていたアリシアは、まるで意志があるかのように、手と足を動かして拳を握ったり、放したりを繰り返していた

まるで、その身体に違和感が無いのを確認するように・・・

『やはり馴れんな・・・人間の身体という物は・・・』

「あ、アリシア・・・！？」

突然のことに驚くプレシア・・・

だって、原作では事故死しているはずのアリシアが、まるで生きているかのようにこちらにその瞳を向け、口を開いているのである・・・

驚かないはずが無い・・・

内心、俺もかなり驚いている・・・・

「アリシア!?貴方、生きていたの!?」

『人間・・・私はお前の知っているアリシア・テスタロッサではない・・・この者の身体を借りているに過ぎない・・・だが、この娘は死んでいたわけではない・・・一時的な仮死状態となったのだ』

「・・・・・・・・」

コイツが・・・異端(バグ)の親玉・・・・・

俺は拳を握りしめた・・・

俺が大好きな原作を破壊して、なのはや、フェイトを殺そうとした存在・・・

「アンタが親玉か・・・」

『いかにも・・・私はハートレスを纏める者・・・幻影(イリュージョン)』

「幻影(イリュージョン)・・・か・・・」

『そう・・・『実態を掴むことが出来ない幻影、闇に紛れ、世界を破壊する者』だ』

なんつぅ厨二病全開な名前だよ・・・・

まぁ、厨二病を通り越した能力「幻想殺し」を装備してる俺が言う事じゃないけどさ・・・

『御主が、神とやらが送りだした者か・・・だが、何故だ?今までの介入者は全て“物語”に居た存在の近くに近づき、私達のやりやすいように“物語”を破壊してくれるのだが・・・御主は異例じゃ・

・・・』

「そりゃそうだろーな」

だって、俺は女性に関しちゃトラウマしかない人間だぜ？
どうしてそう簡単に近づけるんだよ・・・アホかっつの・・・

「俺は、介入者だ。それが、物語の人物と会ってちゃおかしいだろ？」

『ほぅ・・・御主は面白い考えを持っているな・・・』

さぁて、俺も頑張るかねぇ・・・
あくまで、今の俺がやってる事は時間稼ぎでしかない・・・

さっき、俺が突き飛ばしたせいで、プレシアのリンカーコアとやらが壊れる音がしたからな・・・
女性を抱えて戦えるほど、俺は器用じゃねぇし・・・
ここは、大人しくなのはかフェイトが駆けつけてくれる事を祈るさ

それに、さっきおっさんが言って言った「この物語の引き金（トリガー）」がなんなのか、ようやく分かったしな

『御主も変わった奴よ・・・“物語”を破壊する事を望む“介入者”が、破壊をしないとは、・・・いやはや、私達は驚いたよ・・・
まさか、そんな人間が居るのかとな・・・人間は、己の欲望のために動く物だからな・・・』

・・・確かに、この異端（バグ）が言っていることは正しい。
どっかで聞いた事あるけど、人間は生まれながらにして、７つの大

罪を背負って生きて行くらしい
確か、傲慢、嫉妬、憤怒、怠慢、強欲、暴食、色欲だったっけか？
「俺の欲望ってのは、本当に貪欲でね・・・会いたい人が居るんだ。その人の為に俺は必死に戦ってるんだ。だから、この物語にはぶっちゃけ、そんなに用は無い」
『・・・やはり、面白いな・・・御主、名前はなんという？』
ポッドの中で感心しているかのように腕を組むアリシア（バグ）
・・・まぁ、真っ裸だけど、俺はロリコンじゃないので、大丈夫だ
「・・・天城、蒼痲。ただの人間さ。」
『では天城よ・・・私と賭けをせぬか？』
「賭け・・・？」
突然持ち出された賭け・・・
一体どんな賭けだ・・・？
『簡単な事じゃ・・・我の本体が、もうじきこの空間に転送される・・・それを、倒すことが出来たら、御主の勝ちじゃ。私達は大人しく消え去るとしよう』
「・・・もしも、出来なかったら？」
『この物語を、私達が喰らわせて貰う。だが、それでは、フェアじゃないだろう？』

「・・・確かに、俺の方が不利だな。」

俺の後ろには、先ほどから話を聞いて、真剣に考えているプレシアの姿
アリシアがどうして喋っているのかなどを必死に思いつこうとしているのだろう

『少し時間をやろう。三十分じゃ。その間に、邪魔者達を他の空間に置いてくるがいい』

「・・・いいぜ。十分後、ここで会おうぜ・・・」

『ふふふっ・・・良い見せ物を期待して置くぞ?』

「待て!!」

アリシアごと闇の空間に消えようとしたバグを引きとめた
アリシア（バグ）はその場で振り向き、俺をじっと見ていた

・・・原作を破壊する気ぁぁさっぱりなかったんだけどな・・・

「俺が勝ったら・・・アリシアを解放しろ!彼女は関係ない!」

『・・・良いだろう。だが、負けたらどうなっても知らぬぞ?』

そう言い残し、アリシアのポッドごと闇の中へと消えて行った・・・
プレシアは、アリシア!と一度名前を呼ぶと、彼女を追いかけようと駆け出した
だが、届くはずもなく、プレシアは右手を前に出して止まっていた

「・・・・プレシアさん・・・・」

「そんな・・・どうしてアリシアが・・・なんで・・・・！？」

「落ち着いて下さい・・・・」

取りあえず、敬語で話しておく事にする

だって、俺、女性苦手なんだぜ？へたにため口聞いてなんかされたくねぇもん

「わ、私は何をしていたの・・・・！？このロストロギアは・・・・！？」

「・・・・・・」

ま、まさか・・・・

身体が乗っ取られてて、記憶がないとか・・・・？

「も、もしかして・・・・覚えてません？」

「だから、何を・・・・・！？」

・・・・やべぇ、本当に覚えてないっぽい・・・・

あーぁ、残り３０分切ったのに、俺は何してんだろう・・・・

十八章　原作破壊？そんなもんとっくに始まってんだろ！？なら、それを始めた

「さぁて、次回、ラスボスの前！」

蒼痲「なんつぅか、ありきたりだよな。設定が」

敦「そ、それは言った駄目だと思うんだけど・・・」

蒼痲「知るか。さぁて作者・・・ちょっと俺と“お話”しようか？」

「嫌だ！！俺はなのはとなら“お話”されたいけど、男のお前じゃ嫌だ！！」

蒼痲「黙ってろ！！！（バキィッ）」

「痛ぇぇぇぇぇ！！」

蒼痲「なんで俺に幻想殺し装備させたんだよ！俺はもっと別のオリジナル装備が欲しかったわ！！」

「仕方ないじゃん！その方が面白いかなって思ったんだから！！！」

蒼痲「お前は一回死んどけぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「ぎゃあああああああああ！！！」

敦「え、えぇっと・・・か、感想や指摘など、いつでもお待ちしておりますので、お気軽にどうぞ・・・で、ではでは！？」

おっさん「なんで疑問形？」

敦「ど、どうやって締めればいいか分からないんです！」

おっさん「・・・やれやれ、最近の若人は・・・」

十九章　“絆”って大切

俺は残り時間が刻々と迫っているというのに、呑気にプレシアは今まで会ったことを話している

プレシアが一体何をしていたのか、プレシアがフェイトにした事や・・・

とにかく、色んなことを話した

そのたびに、プレシアは悲しそうな顔や驚いた顔が見れた

・・・いや、熟女好きじゃないけど、ちょっと萌えた・・・

そこ、疑うような目で俺を見るな。

「そんな・・・私・・・そんなことを・・・」

「・・・個人的に、あの時のフルボッコはめちゃくちゃ痛かった・・・」

「ごめんなさい・・・私、意識が無い間に勝手な事を・・・」

・・・やばい・・・ちょっと萌える・・・

少し頭を下げるプレシアに、俺は内心萌えていた

だってさ？一期ではS全開で、フェイトを突き放した親が、今、俺の目の前で頭を下げてくれてるんだぜ？

おまけに・・・胸の部分がちょっと見えて・・・アレだよ。目のやり場に困ってる

さて、とりあえず、本題に戻ろうか・・・
今俺は最終決戦前だというのに、プレシアに説明を終えて、萌えているんだよ。
・・・とりあえず、フェイトかなのは・・・どっちでもいいから、とっとと来てくれ・・・

「・・・母さん・・・・・？」

ふと、空から澄んだ声が響いた
・・・ようやく来てくれたか・・・

「母さん・・・・」

「フェイト・・・よね・・・・？」

フェイトが降りて来て、プレシアの前に立った
プレシアはそんなフェイトを見て、自分のやってきたことを悔やんだように、静かに拳を握っていた

・・・さて、空気になる前に俺は退散するかね。
とりあえず、近くにあったデカイ岩の後ろにでも座っておくか

『フェイト・・・ごめんなさい・・・私、貴女に酷い事を・・・・』

『・・・・母さん、私ね・・・まだ、始まってもなければ・・・終わってないって気づいたんだ・・・ごめんなさい・・・私・・・・母さんの期待に添えないことばっかりして・・・・』

・・・何言ってるんだ。

フェイト、お前は一生懸命頑張ってたよ。
俺がお前の苦労を減らす事ができたのに、何もしなかったんだよ・・・ごめん。

二人の会話を聞いているうちに、何故か少し会いたいと思える人が浮かびあがってきた

（・・・・親父・・・今、何してんのかな・・・姉ちゃんも・・・元気かなぁ・・・）

こういう親子の会話を聞いてると、俺も家族に“会いたい”と言う気持ちが出てくる
だけど、もう会う機会はないだろう・・・

離婚した後は、どこに住んでいるかも分からないが、姉ちゃんとなら、連絡を取り合っていた
元気か？とか、学校行ってるか？とか、心配してくれている物ばかりだった

まぁ、家族の離婚の時に、一番傷ついたのは俺じゃなくて、姉ちゃんだったと思う。

俺は、親父の言葉を無視して、母さんの方についたけど、姉ちゃんは、結局最後までどっちにつくかなんて決めてなかったし
その時、姉ちゃんが泣きながら俺に聞いて来たんだよな・・・
「愛」って何？って・・・

その答えは、俺も知りはしないし、実際、俺は愛を受けて育ったわけじゃない。
いや、多分、受けて育ったと思うけど、俺はそう感じなかった。

実を言うと、親父と母さんの喧嘩よりも昔の記憶はそんなにない。
小学生の記憶なんて、喧嘩以外の記憶なんて残っていない。
残ってるのは、じいちゃん達と一緒に釣りとかしたことくらいしかない。

そんなことを考えている俺の上に、空気を切る音があった
それは、犬耳と尻尾を生やしたアルフだった

「フェイっ・・・・！！」

「・・・・・・・・（くいっくいっ）」

とりあえず、空気は読んで貰おう。
二人の邪魔をしてもらいたくないので、こっちに来るように誘導しておいた

「あんた・・・誰だい？」

降りてくるなりそれは酷いぞ？
まぁ、子供の頃の姿の俺がいきなり１７歳の姿してたら驚くよなぁ・・・

「俺だよ。天城蒼痲。」

「う、うそぉ！？」

「バーカ。少しゃ静かにできねぇのか？後ろ見ろって。」

そんなにデカイ声出されちゃ、ＫＹとして見るぞこの野郎・・・
折角こっちまで呼んだのに、意味がなくなるだろ・・・

「・・・な、なんでアンタそんなにデカくなってるんだい？」

「・・・呪いが解けた。はい、説明終了。」

「はやっ」

まぁ、実際そうなんだけどさ・・・

俺だってさ・・・こんな簡単な説明できる日が来るなんて思わなかったよ・・・

さぁて、そろそろ終わったかなー？

『私は・・・世界中の誰からも・・・どんな出来事からも・・・母さんを守る・・・』

『フェイ・・・ト・・・・！！』

・・・なんつぅか、話を聞かないで親について考えるんじゃなかった、って深く後悔してる俺が居る・・・

なんでこんなことになってんの？なんでプレシアとフェイトが抱き合って泣いてんの？

チクショウ！！初めて見るアニメをトイレ行ってって見逃した気分だぜ！！

まぁ、簡単に言うと「どうしてこうなった！！」って心から叫びたいだけだ・・・うん。

「やれやれ・・・おら、アルフだっけ？行くぞ」

「お、おい・・・」

俺が岩陰から出て、プレシアとフェイトの方へと歩いて行った
アルフも急いでこちらへ向かって歩いて来ていた

プレシアとフェイトは抱きあうのをやめて、涙の浮かんで目を擦って、こっちを見てきた
だけど、フェイトは俺の姿を見てかなり驚いた顔をしていた

「そ、蒼痲・・・！？」

「あー・・・簡単に説明するわ。呪いが解けた。はい、説明終了。」

「・・・それだけなの・・・？」

「あぁ。それだけだ」

実際、それ以外何を言えばいいんだ？
子供の姿から変身しましたー、って言えばいいのか？
無理がある。確実に嘘だってばれるって
なら、呪い的な何かに子供の姿にされてたって言っとけば大丈夫だ

「え・・・？じゃあ、蒼痲って・・・」

「17歳。高校2年生だ。」

それを聞いてまた驚くフェイト・・・
まぁ、今度はアルフも一緒に驚いていたが、時間が無いので無視する事にした

「ほら、3人とも、とっとと行け。ここに居ると危ないぞ」

「え・・・？蒼痲・・・さんはどうするの・・・？」

「あー・・・さん付けは無しでいいぞ。まぁ、アレだ。まだラスボス的な奴倒してねぇし、アリシアも助けなきゃいけねぇし・・・ま、それなりに頑張るさ。」

「な、なら私も・・・！！」

「いんや、いい。お前はプレシアさんのそばに居てやれ。」

そういうと、フェイトは辛そうに俯いた

・・・やれやれ、子供はすぐに落ち込むから困るねぇ・・・

俺は左手でフェイトの頭を撫でた

いや、右手だったら幻想殺し（イマジンブレイカー）が発動しそうで怖いからなんだけどね・・・

「心配すんなって。俺はちゃんと生きて帰るし、まだお前からの貸し返して貰ってないし」

「で、でも・・・」

俺はそのままフェイトの髪をくしゃくしゃにした

なんつぅか、さらさらして、まるで風を触っている気分だった

透き通るようなこの感覚が・・・癖になりそうだ

「ん～・・・それじゃ、約束。」

そういって、俺は右手を差し出した

小指をたてて、指きりげんまんをしようと言ったのだ
フェイトは少し怯えるように俺の小指に小指を絡ませた

「ゆーびきりげんまん、うーそついたらはりせんぼんのーむぜ！ゆーび切った！」

「や、約束だよ・・・絶対、帰ってきてね・・・・」

「私からも・・・アリシアを、お願いします」

そういって、身体を駆け巡った脱力感から解放されたフェイトは、
アルフと一緒にプレシアを抱えて飛んで行った
まぁ、幻想殺し（イマジンブレイカー）が発動したんだろうな・・・
それと、プレシアさん・・・飛ぶ前に置き土産的な物はいらないので、とっとと行って下さい・・・

「さぁて、なのはとユーノも先に脱出してるだろーし、俺はゆっくり待ってるか・・・」

俺はその場で大の字になって、崩れかけた空間を見上げた
やれやれ、思えば、どうしてこんな危険なことをすることになったのやら・・・

思えば、俺がおっさんに出会ったのは、なんの変哲もない日だったんだよなぁ・・・
いつも通りの日常を、ただ俺なりに当たり前に過ごすだけの日常・・・
正直、飽き飽きしていたのかもしれない。

嫌いな母親と一緒に居る事とか・・・嫌いな奴の近くに居るとか・・・

だけど、そんな中で俺は明日を生き抜く方法を見つけた
まぁ、アニメ見て、来週号に発売されるジャンプみたりとかなんだけどさ。

まぁ、おっさんと出会った当初は、めっちゃ厳しかった気がする。
だって、自称神とやらと一緒に生活ってのがちょっとイライラしてたんだよなぁ・・・
でも、おっさんのアホらしいトコとか、馬鹿な所見て、俺に似てるなーって思いながら過ごしてたんだよなー・・・

「・・・はぁー・・・無駄に賑やかな毎日だったぜ・・・」

そりゃそうだ。
おっさんが毎日デュエルしろデュエルしろってうるさかったんだよなぁ・・・
まぁ、流石に負けるわけにゃぁいかないから、俺の時たま本気出してたんだよなぁ・・・
といっても、ガチのＥ－ＨＥＲＯデッキはおっさん相手には絶対に使わないけどな。
さすがに、おっさんが強くなってからじゃないと、あのデッキは使えないんだよなー・・・

「・・・後１０分か・・・」

残り１０分間、俺は何をすればいいか分からず、とにかく今まであった事を思い出した

だってさ?ラスボス前って、なんか知らないけど、ワクワクすんじゃん?
見た事ない技とかで、自分を苦しめるラスボスに勝つのが、一番嬉しいと思うんだ。
それを、やれチートやら改造で、最初の村とかで、すでにステータスが異常なプレイヤーなんて、俺は嫌だね

「さぁて・・・・・・来週号のジャンプの表紙、なんだろーなぁ・・・」

そんなことを口に出しながら、俺は幻影(イリュージョン)の定めた時間が来るのを、ワクワクしながら待っていた・・・

十九章　“絆”って大切（後書き）

蒼痲「どうしてこうなった・・・」

「さぁ？」

蒼痲「つか、原因はてめぇの後先考えない更新のせいだろぉがぁぁぁぁ！！」

「うるさい！！いいじゃないか！」

蒼痲「よくねぇよ！！本来こんなことしないで、ラスボス戦だったはずだろ！！」

「俺だって聞きてぇよ！！どうしてこうなった！！」

蒼痲「それを俺が聞いてるんだろうがぁぁぁぁぁぁぁ！！」

おっさん「・・・やれやれ・・・」

敦「次回は、ラスボス戦です♪見逃さないでくださいね♪」

おっさん「出来れば感想とか指摘とかを送ってくれると嬉しいぞぅ☆（キラッ）」

蒼痲「おっさん死ね♪（イラッ☆）」

おっさん「（バキッ！！）いてぇぇぇぇぇ！！」

「やれやれ・・・騒がしい物だ・・・」

二十章　これで、心おきなく本気が出せる・・・・！！（前書き）

今回、若干残酷な描写があるので、ご注意を・・・・

話がｇｄｇｄなのはいつもの通りです・・・

では、どうぞー

二十章　これで、心おきなく本気が出せる・・・！！

・・・時間が後1分を過ぎたあたりから、収まっていた地震が突然揺れ始めた・・・

ジュエルシードが無い今、次元震というものは起きないと思う。
だけど、この揺れは・・・・何か、大きな何かを呼び起こそうとしているよう・・・
さっきまでワクワクしていた気持ちが、不安へと変わっていく・・・

そして・・・残り、１０秒・・・

９・・・８・・・７・・・６・・・５・・・
４・・・３・・・２・・・１・・・！！

「うぉぉ！？」

突然、大きな地震が時の庭園を襲った・・・
そして、落ちたら魔力が発動できなくなると、クロノが言っていた
空間が裂け、地面の足場へと姿を変えていく・・・

突然、足場が傾き、俺は重力に押し潰されるがまま、落ちて行ったというか・・・・

時の庭園事態が傾いてるんだけど！？

そして、重力に押し潰されるように、時の庭園はそのまま落ちていった

「やばっ・・・・！？」

俺も本格的にやばくなってきたので、とりあえず、穴のあいた所から外の様子を見た

時の庭園が落ちようとして居るのは・・・・大地！？

まずい！？このままじゃ、俺ラスボス前に死ぬ！？

「ちくしょう！！こんな時どうすれば・・・・！？」

そんな時、俺の左手にまた重みが加わった

・・・またお前か、相棒・・・

「仕方ねぇな！！」

俺はデュエルディスクを展開して、エクストラデッキから一枚のカードを取り、モンスターゾーンに叩きつけるように召喚した

「現れろ！スターダストドラゴン！！」

突然、眩い閃光が俺のデュエルディスクから発せられて、美しい輝きを放つ竜が外へと羽ばたいて行った

「ウオォオオオオオオオオオ！！！」

そのまま、傾いた時の庭園を駆け抜けていく

穴まで辿り着き、俺は助走をつけて時の庭園から脱出した

そして、図ったかのように、スターダストドラゴンが俺を背中に乗せて飛翔していた

・・・・やべぇ、本当に綺麗だなぁ・・・スターダスト・・・

そのまま、地面へと着地すると、スターダストドラゴンが少し寂しそうに俺を見て唸っていた

「大丈夫・・・今度また一緒に飛ぼうぜ。背中に乗っけてくれると嬉しい」

コクっと一度頷き、スターダストのカードをデュエルディスクから離し、エクストラデッキに戻した

・・・・辺り一面、ただっ広い大地しか広がっていない空間に・・・

あからさまに大きな影がずんっ・・・と、佇んでいた
それは、地震と共に、前へと進んでいた・・・
肉眼で見る限り、かなりデカイ・・・

へたすりゃ、闇の書のバグよりもデカイんじゃね？
そんなことを考えている俺に、緊急の通信が入ってきた

『そ、そーま！？どうやってこの空間に入ってきたんだ！？』

『あ？おっさん？どうやって入ったって・・・知らん。時の庭園ごと転送された』

『んなアホな・・・・げっ、当たる当たる！！！』

・・・・何言ってんだこのおっさん？と、心で思っていると、巨大な影に巨大な何かが当たって、爆発する光景が目に入った

・・・なーる。おっさん達、あそこで戦ってるんかい・・・

んじゃ、

俺はデュエルディスクを展開して、未完成だが、リチュアのデッキを取り出し、デッキを装填した

「っしゃあ!!行くぜぇぇぇぇぇ!!」

俺は、ラスボス戦を開始した・・・

最初に、五枚のカードをドローして、手札の確認をした

・・・よっしゃ、まずまずの手札だけど、別段事故ってるわけじゃねぇ!

「俺のターン!ドロー!!」

・・・引いたカードは・・・ソニック・バードか・・・

まぁ、デッキ圧縮には丁度いいな

「俺は、ソニック・バードを通常召喚!!」

俺の目の前にソニック・バードが実体で現れ、俺は効果を発動させると同時に、ソニック・バードの背中に乗った

「ソニック・バードの効果を発動!手札に、リチュアの儀水鏡を加える!!」

ソニック・バードが高く飛びあがり、巨大な影の所まで俺を乗せて向かってくれた・・・

巨大な影に近づくにつれて、巨大な影の正体が分かった
黒くてドロドロした液体を身体に纏って、歩く度にそれがボトボトと地面に落ちて、ドロドロした液体が地面を溶かしていた・・・

うわっ、キモっ・・・

「そーま！！来てくれたんだな！？のぉ！？」

俺に気付いたおっさんが俺に声をかけるが、残念なことに、黒いドロドロに触れそうになり、回避した
・・・ちっ、そのまま当たって溶けちまえばよかったのに・・・

「野郎！！やりやがったな！！バオウ・・・ザケルガァァァァァァァ！！！」

おっさんの口からガッシュベルの技の名前が大声で叫ばれると、原作のガッシュベルと同じくらいの大きさのバオウが出てきた・・・
・・・おっさん、後で幻想殺しでリンカーコアをぶっ壊してやっからな・・・！！

なんだよ！存在そのものがチートつってたけど、まんま他の作品のキャラクターの技使ってんじゃん！！
つか、その攻撃受けてひるんでるだけのバグもバグだけどな！！

「ざっけんな！！さっきから攻撃叩きこんでるのに、全然ダメージ与えてる気がしねぇ！！」

「知るかよ・・・俺は、今来たばっかなんだから・・・ターンエン

ド」

手札に伏せられるカードもないし、仕方ないよなぁ・・・
仕方なくターンエンドすると、バグのターンとなった・・・
相手の場には幻影（イリュージョン）と言う名前のカードだけ・・・

って、アイツ、こん中に入ったのかよ！？
幻影（イリュージョン）が俺の場のソニック・バードに攻撃を仕掛けてきやがった！？
やべぇ！！なんか、満足神が掌で遊星を潰すように、バグは俺に向かって攻撃してきやがった！
よ、予想以上に速いんですけど！？

だが、ソニック・バードが俺を捨てて、自分から掌に突っ込んで行った
え・・・？おい、ソニック・バード・・・？

『マスターさん、また会いましょうや・・・』

俺の頭の中に、突然声が聞こえた・・・
それは、恐らく、ソニック・バードの声だ・・・

「そ、ソニック・バードぉおおおお！！」

それ死亡フラグ！とか言ってられないんだけど、なんで俺の事知ってるの！？
なんで喋れたの！？つか、消えないでくれよ！？頼むから、教えてくれよ！！
なんだよ、“マスターさん”って！？

「ぐぅっ・・・・！！」

「天城君！！」

「なん・・・ぬぉう！？」

重力に押し潰されるがまま、地面に落ちそうになっていた俺を、何か別の存在が俺を受け止めていたな、なんだ！？って・・・

「あ、敦・・・助けてくれたのか・・・サンキュ」

俺の前で、敦が心配そうに俺を見ていた・・・

戦いの最中に余所見すんなよ、って心の中で思っておくけど、助けてくれた事には礼を言わなきゃな

「うん・・・スキエル！」

・・・・ん？スキエル？

俺は下を見ると、空を飛びながら移動している機会に気付いた

・・・うわーぉ、機皇帝スキエル∞だー♪

キチアーノの使う、能力が残念な機皇帝じゃないかー♪

「随分とデケェもんに乗って戦ってるんだな・・・」

「あはは・・・でも、機皇帝は強いよ。」

「スキエルは残念な子だけどな・・・まぁ、使えないカードなんてないんだ。お前がスキエルを必要としたんだ。いいんじゃねぇの？・・・さぁて、俺のターンか・・・」

俺のライフに変動はなかったが、ソニック・バードを破壊されちまった・・・
つか、最後に変な言葉残して欲しくないわ・・・
だって、気になるじゃん・・・

「俺のターン！！」

「僕のターン！！」

俺と敦が一緒にターンを開始した、俺の場には、モンスターも伏せカードも無し・・・
おまけに、ドローしたカードもそんなに強いわけでもない・・・

「僕は、サイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚！そして、手札のエヴォリューション・バーストを見せて、サイバー・ドラゴンとして扱う！行くよ！僕は手札から魔法カード発動！エヴォリューション・バースト！！幻影（イリュージョン）を破壊！！」

お？これで破壊されてくれたら、終わりじゃね？
サイバー・ドラゴン・ツヴァイが口にエネルギーをためて、放つと、バグに当たるが、何故か飲み込まれてしまった・・・

ピコンッ！と俺達のデュエルディスクに相手の場のカードが画面に映し出された
そして、ようやく、幻影（イリュージョン）の効果を見る事が出来た

「・・・『このカードは効果で破壊、除外する事が出来ない。
このカードが存在する限り、相手の罠カードの効果は無効となる。
このカードの攻撃力は、場に存在するモンスターの合計＋１０００

０となる』
攻撃力、７６２２００・・・・？」

「ふ・・・・ふざけんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！！桁がおかしい！なんだ７５００００って！？明らかにチートカードだろ！？俺ルールか？！俺ルールでそんなに強いのか！？」

「ち、違うよ！僕の場見（フィールド）てよ！」

「あ゛！？」

・・・敦の場のカードを映し出すと、おっさんのカードと、ロードのカードと、スキエルのカードがモンスターゾーンに出ていた

おっさんの攻撃力→４５００００
ロードの攻撃力→３００００００
スキエルの攻撃力→２２００

スキエル＜＜＜＜越えられない壁＜＜＜ロード＜＜＜おっさんみたいなことになってんだけど？
ロードとおっさんカード化すると、クソチートなんだけど！？
何！？ふざけてんの！？

「とりあえず敦、この戦いが終わったら、おっさん達呼べ、ちょっとぶっ殺す」

・・・つか、さっきから普通に右手でスキエル触ってるのに、全然幻想殺しが発動しねぇや・・・
あっ、あれか。スキエルは異端（バグ）じゃないから、反応しないのか

「わ、分かったけど・・・それ、死亡フラグじゃ・・・」

「安心しろ。死亡フラグは、好きな人の前で立ってこそだ。俺がそのフラグをへし折ってやる」

「よぉく言ったしょーねん。俺達も、友達が死なれちゃ困るんでね・・・ま、頑張るさ」

ロードがスキエルの横を飛びながら言った

なんつぅか、ホントチートでうぜぇなこの二人・・・

さぁて、俺はもう怒ったぜ・・・

おっさん達にこの理不尽な怒りをぶつけようと思うけど、今はバグの方が先だ！！

「俺は手札から、カードブロッカーを召喚！召喚時に、自信の効果で守備表示になる！そして、手札から魔法カード、二重召喚を発動！俺は、カードガンナーを攻撃表示で召喚！そして、モンスター効果だ！！デッキから、三枚のカードを墓地に送る！」

で、相手の場の幻影（イリュージョン）の攻撃力にも変化が訪れるわけですよ。

まぁ、やることもないので、ターンエンドしかねぇ・・・ちくしょー！

そして、相手ターンになると同時に、俺の場のカードガンナーの効果がなくなって、４００に戻るんだよねぇ・・・

やべぇ、これ食らったら負けるんだけど・・・

そして、幻影（イリュージョン）は俺の場のカードガンナーを攻撃対象に選択しやがった！

だけど、俺の場にガード・ブロッカーがいる事を忘れるなよ！！

「ガードブロッカーの効果だ！自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、このカードに攻撃対象を変更することができる！そして、このカードが攻撃対象になった時、自分のデッキのカードを上から3枚まで墓地へ送る事ができる！墓地へ送ったカード1枚につき、このカードの守備力はエンドフェイズ時まで５００ポイントアップする！俺は、三枚墓地に送るぜ！！」

ドガァァァァン！！と自分から破壊されに行ったガードブロッカーは、そのまま破壊された・・・

くぅっ・・・！！やっぱ、怖ぇ・・・

攻撃し終わった後、幻影（イリュージョン）の身体に変化が訪れた

突然、巨大なバグが叫び出して、辺り一帯がビリビリと痺れるように揺れていた

まぁ、俺も敦も耳を塞いで、うるさそうに目を細めていた

『やはり・・・まだ、普通の姿には戻れぬか・・・！！』

突然、バグの背中に巨大な人が抜けがらからでるように現れた

その姿は、アリシアの姿をしていた・・・

やばい、若干エロいんだけど・・・・

「出たな親玉・・・俺がぶっ殺してやるよ！約束された勝利の剣！（エクスカリバー）！！」

おっさんが、まーた別の作品の技を使って攻撃してるよ・・・

うわっ、気持ち悪いほどに再現しようとしてる！？キモい！

約束された勝利の剣は幻影の身体に当たり、真っ二つになったと思われた・・・
だが、突然、別れた二つのバグはお互いを求め合うように再生し、もとの姿に戻った

「うげぇ！？気持ち悪っ！？」

まさに、グロテスクと言うのにふさわしい光景だった
グチャグチャと汚たない音を立てて再生するバグは、気持ち悪い以外の言葉は出なかった
・・・つか、見た目が完璧にラヴァ・ゴーレムになってるんだけど・・・
色はマグマっぽい赤じゃなくて、紫なんだけどね・・・

「くそぉ！！本来の力を出せればこんな奴ぅううううう！！」

「落ち着けリュウ。お前が本気を出したら、片手で世界が滅びるだろうが・・・」

「とりあえず、死ねチートども。」

「あ、天城君も落ち着いて・・・」

だってさ！！今の攻撃見て腹が立たない方がおかしいわ！！
何が約束された勝利の剣だ！！勝ててねぇじゃん！！
つか、おっさんが使うな！気持ち悪い以外の感想がでねぇよ！！

「まぁ、しゃあねぇよ・・・敦、お前の墓地に使えそうなカードあるか？」

「あ、うん・・・一族の結束が二枚と、光の護封剣が・・・後、オーバーロード・フュージョンが・・・」

「仕方ねぇな・・・」

俺はそういって、手札にあるリチュアの儀水鏡を一番右はじまで持っていき、手札に儀式モンスターがいるか再確認して、発動した

「俺は、リチュアの儀水鏡を発動!!手札のシャドウ・リチュアをコストにするが、このカードは水属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、このカード1枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる!俺は、イビリチュア・マインドオーガスを儀式召喚!!」

俺の場に現れる魚人・・・というか、魚と合体した女の子?

あれ?なんて説明すりゃいいんだろ・・・?

ま、いいや。そんな感じのカードが現れて、俺はなんか微妙な気分になった

やべぇ・・・乗ってる女の子、めっちゃ可愛い・・・

いや、リチュア・エリアルなのは分かるんだよ。

でもさ、なんで魚と合体したんだろう・・・

エリアルらしき女の子が俺をちらっと見ると、嬉しそうに微笑んでくれた

・・・・・・・惚れてまうやろぉおおお

あかん！ラスボスと戦ってるはずなのに、めっちゃ萌えてる！！
やべぇ！可愛い！！絶対破壊されたくねぇ！！

「イビリチュア・マインドオーガスの効果を発動！！お互いの墓地に存在するカードを5枚まで選択して、デッキに戻す！俺は敦の墓地のオーバーロード・フュージョン一枚と、一族の結束を二枚！そして、俺の墓地に存在する、シャドウ・リチュアを二枚デッキに戻す！！」

ふぅ・・・ガンナーの時に落ちたのはちょっと痛かったわぁー・・・
まぁ、これで5枚戻せたし、これで、敦の切り札のキメラテック・オーバーが出しやすくなったな・・・
だが、それを見た瞬間、幻影（イリュージョン）は俺のターンだというのに動き出した

『もうお遊びはすんだか？』

「なんだと？」

『俺の特殊効果を発動！！相手ターンに一度、俺以外のカードを全て破壊する事が出来る！！！』

「はぁっ！？チート効果もいい加減にしろやゴルァァァァ！！！」

突然、幻影（イリュージョン）に黒い炎が集まり、それが一気に放出された
スキエルも回避しようと、高く飛ぶが、炎が辺り一面を焼きつくし、
俺達の意識もブラックアウトした・・・

「ん・・・・あ・・・・？」

なんか・・・目の前が黒い・・・

あれ？今度こそ本当に死んだのか？俺・・・・・

『ます・・・ター』

突然、俺の頭の中に女の子の声が語りかけてきた

俺はゆっくりと目を開けた・・・

そこには、俺を押し倒すように俺と見つめあっているリチュア・エリアルの姿だった

一瞬ドキッとしたが、何故か俺の下半身に違和感を感じた・・・

なんか・・・べっとり、なんかが張り付く感覚があった・・・

「え・・・・・？」

俺の近くには、敦とロードが転がってて、おっさんは遠くの方で倒れているのが見えた・・・

だけど、俺は頭の中に直接語りかけるエリアルの声を聞いた

『良かった・・・生きてる・・・ゴフッ・・・・！！』

「え！？」

突然、彼女が血のような物を吐いた

それは、俺の服に付着し、どんどんと広がっていった

ま、まさか・・・・・！？

「嘘だろ！？」

彼女を押し退けるように起き上がると、彼女は俺にもたれかかるように肩に頭を乗せている・・・

よく見ると・・・彼女の上半身より、下が無かった

ありえない・・・・近くに、彼女と合体していたであろう、魚が粉塵となって、消えかかっていた

俺の服には、彼女の血のようなもので、べっとりと濡れて、服がべったりとくっついていた

『マスター・・・ごめんな・・・さい・・・私・・・護れなかった・・・です・・・』

そういい、彼女は静かに目をつぶっていた

嘘だ・・・・いやだ・・・そんな・・・！？

「おい！！起きろよ！！」

『でも・・・ようやく・・・マスターに会えた・・・それだけで、私は胸がいっぱいで・・・』

「喋んなくていい！なんで俺なんてかばったんだよ！？俺なんて・・・」

『そんな事ないですよ・・・貴方は・・・私を救ってくれた・・・』

エリアルが、目をつぶったまま、俺に話しかけてきた・・・

『貴方は覚えてないと思いますけど・・・・私、一度破られそうになったんですよ・・・？覚えて・・・ないでしょうけど・・・』

「・・・まさか・・・・・・」

前に、カードショップに出向いた時に、レアカード狙いでＤＴを回している中学生が居たんだ
だけど、２００円を入れて手に入れたのが、エリアルと、マインドオーガスの二枚だったんだよな・・・
でも、中学生達は、ダブったとか言って無情にも、その二枚を破って捨てようとしたんだよな・・・
それを、俺がトリッキーと交換したんだよな・・・
若干、マインドオーガスが折れてたけど、俺は気にはしなかった

『私達・・・カードの精霊は、カードが無ければ、実体を保てなくて、死んでしまいます・・・でも、貴方は・・・必要とされない私を、必要だと言って、私を助けてくれました・・・私なんて・・・必要とされないカードを・・・貴方は助けてくれました・・・』

「そんな事ない！！この世に、使えないカードなんてない！！それを俺は伝えたかっただけだ！俺は・・・助けた訳じゃない！ただ、君が必要だったから・・・」

『・・・その言葉だけで・・・私がどれほど救われるか・・・嬉しくて・・・泣いちゃいそうです・・・』

やめてくれ・・・・
そんな悲しそうな声で言わないでくれ！！！

『折れかかっている私を・・・大切に扱ってくれるマスターに・・・

会えてよかった・・・』

「・・・っ！！？」

突然、彼女から光が放たれ、彼女の身体が少しずつ消えかかっていた・・・

なんで・・・俺なんて助けたんだよ・・・・！！

「ま、待ってくれ！消えないでくれ！！」

『私は・・・消えませんよ・・・ただ、少し・・・貴方の前から居なくなるだけです・・・』

「それを消えるって言うんだよ！！」

『ふふふっ・・・・そうかも知れません・・・』

「笑ってる場合じゃないだろ！！」

『・・・ガスタの・・・あの娘にもよろしくお願いしますね・・・』

「ガスタのあの娘って、誰だよ！？」

『・・・マスターに、会えて良かった』

そう言い残し、エリアルは、彼女の帽子を残して消えて行った・・・

帽子がそのまま地面に落ちて、俺は、それをただただ見ていた・・・

そして、こちらへと向かってくる大きな影に気がついた・・・

俺は立ちあがって、幻影（イリュージョン）を見た・・・

俺達が居た地点が・・・あそこか・・・
およそ、６００メートルくらい吹き飛ばされたのか・・・
だけど、それをずっとマインドオーガスは俺の事を守ってくれていた・・・

身体に付着したエリアルの血は、彼女の消滅と共に消えたが、口から吐いた血は、まだ俺の胸元に残っていた・・・

一陣の風がこちらに向かって来て、足元にあったエリアルの帽子が飛びそうになった・・・
だけど、俺が飛ぶ前に手に取り、付いた土などを手で払い落した

『・・・マスターに会えてよかった』

俺の頭の中に、彼女が最後に言い残した言葉がよぎった
・・・俺の会えてよかった・・・か・・・

初めて、女性からそういう言葉を聞いた気がする。
だって、現実（リアル）じゃ俺は男ばっかとつるんでる、歪んだ奴だぜ？
そして、現実の女性に興味がないというおまけつき
そんな奴が、初めて女性から会えてよかったなどと言って貰えた・・・

内心、凄く嬉しい・・・

だけど、彼女が残した言葉に・・・俺は、虚無感を覚えた・・・
デュエルディスクを見ると、マインドオーガスのカードから、マインドオーガスのイラストだけが消えていた・・・
デッキを外して、中を見ると・・・
エリアルのカードも、イラストだけが消えていた・・・

『ふふふふ・・・はっはっはっはっは！！これで邪魔者は居なくなった！！我らの勝ちだ！！神の居ない今が好機！！皆の者！！物語を喰ろうてやろうぞ！！』

遠くから、幻影（イリュージョン）の声が聞こえてきた・・・

念入りに、神を見つけたら殺せなどと口走っていた・・・

だけど・・・俺は人の“死”と言う物を目の当たりにしている・・・

人が死ぬのを見るのは、三度目になる

一度目は、癌で目の前で命を落とした、俺のじいちゃんだった

一度目は、中学の時に目の前で交通事故で、人が目の前で死んだ時、偶然居合わせていたのだ

二度目の時は、ただ単に恐怖しかなかった

目の前で、一人の人生の幕が閉じるのを見ていたのだ・・・

それだけで、身がぞっと震える・・・

だが、一度目の時は違った・・・

親父達が離婚する年の前・・・

じいちゃんが癌で倒れたのだ。

その時は、治る可能性があったのだが・・・

突然容体が悪化して、俺の知ってる無敵のじいちゃんは、癌の前に負けてしまったのだ・・・

容体が悪化する前に、俺は一度じいちゃんと会っていた

その時は、じいちゃんと一緒に病院内を歩き回って、じいちゃんの

武勇伝を聞いていた

その時、じいちゃんが俺にこう言ったのだ

『男が一度心に決めた事は絶対に最後まで貫くことじゃ。でなければ、大切な物は護れん。そして・・・一度関わったことは目をそらさず、最後までやり通すこと・・・この事は、じいちゃんの最後の言葉だと思って、覚えておいてほしい・・・』

それが・・・本当にじいちゃんの最後の言葉になるとは、少年時代の俺には知るよしもなかった・・・

翌日、じいちゃんの姿を見て、俺は涙を流して、親父にこう問いかけた記憶がある

『どうして・・・人は死ななくちゃいけないの・・・？』と

答えは簡単だった・・・

『それが、人間を生きる上で背負っていくものだからだよ』と・・・

人間、いずれは死ぬ運命（さだめ）・・・

俺は、死ぬと分かっていても、今を精一杯生きているに過ぎない・・・

なら・・・最後まで精一杯生きてやろーじゃねぇか・・・

例えこの身がボロボロになっても・・・

例え、俺が俺でなくなったとしても・・・

じいちゃん・・・・俺、じいちゃんの言葉、ちゃんと覚えてるよ？

いつも元気で・・・優しいじいちゃんが、大好きだったよ・・・

ありがとう・・・

俺は、じいちゃんの武士道（教え）も背負って生きて行くよ！
だから・・・少し待ってて・・・いずれ、会いに行くから・・・

「・・・・・・・」

俺は、リチュアデッキをデュエルディスクから外して、まったく別のデッキをデュエルディスクに装填した

それは・・・俺のガチデッキ・・・
Ｅ－ＨＥＲＯデッキ・・・
最初の頃から弱い弱いと、皆が見下していたこのデッキ・・・
最初の頃からボロ負けで・・・勝てる確率がとことん低かったこのデッキ・・・
でも・・・今では俺の最強のデッキだ！！

「・・・行くか・・・デュエル！！！」

俺はそういい、もう一度幻影（イリュージョン）と向き合った
“一度関わったことは目をそらさず、最後までやり通すこと”・・・
じいちゃん、俺もちゃんとやり通すよ・・・！！

こっからが・・・本当の戦いだァ！！
見てろよバグ野郎・・・！！
俺の本気（ガチ）の力・・・見せてやる！！！

二十章　これで、心おきなく本気が出せる・・・！！（後書き）

「次回！本当の戦いが始まる！！乞うご期待！！！」

蒼痲「・・・・で、また次回まで引き延ばしたと・・・？」

「・・・・あはは・・・中々感想ってこないもんだね・・・結構寂しい・・・」

敦「それだけの理由ですか！？」

「仕方ないじゃん！！でもねぇ・・・エリアルに合わせたのは、ちょっとした伏線だったり・・・したらいいなぁ」

蒼痲「駄目だコイツ・・・」

「まぁ、そんな感じで、次回はお前一人での戦いだぞ？」

蒼痲「はっ！俺のデッキには、ＨＥＲＯが居るから大丈夫だ！！」

「・・・そうかい」

蒼痲「んじゃ、次回の更新も、結構かかりそうだなぁ・・・」

「うっせーい・・・」

敦「感想など、ご指摘があれば、お気軽にどうぞ♪」

蒼痲「俺達キャラクターが出迎えるぜ・・・まぁ、俺はそんなに居

ないと思うけど・・・」

「何してんだ？」

蒼痲「決まってんだろ？ラブプ〇ス＋」

「・・・・・・・・・・・」

蒼痲「急に黙るな！！」

「あはは・・・んじゃ、次回！！」

二十一章　ラスボスの連戦って、結構きついよね（前書き）

今回、最初は幻影視点で始まります。

そして・・・対に最終決戦が始まる・・・・！！

では、どうぞー♪

二十一章　ラスボスの連戦って、結構きついよね

初めてだった・・・
今まで、様々な人間を見てきた・・・
その中で、自分の願いをかなえるために、物語を改変する者が１００％だった
しかし、今日になって、その完璧だったはずの計算に誤差が生じた・・・

昔に、別の世界を喰らおうとした時に、転生者と名乗る人物が現れた
その人物は、我々異端に、異端で対抗してきたのだ

その後も、世界を渡るにつれて、他の物語に、イレギュラーな存在が混ざっていた
だが、我々は、物語が崩壊すればするほど、強さを増す存在・・・
全て、彼らのやっていることは無駄なことでしかなかった
中には「俺のハーレムは邪魔させねぇ！！」と言う理由で、我らに歯向かってきた介入者が多かった
その中には「護りたい物を守るために・・・」という理由で戦う者も、少なくなかった
前者のいた物語は完璧に侵食し、全てを喰らってやった
だが、後者の方は、救いがあるようであれば、我の独断で、喰らうのを止めた・・・

我らは、全ての影から生まれた存在・・・

影は・・・全ての世界に置いて、忌み嫌われる物だった
生まれてからずっと生涯を共にする者なのに・・・何故か、皆(みな)から我らは嫌われた・・・

光が近ければ、影も濃くなる・・・

今の世界は、光に近づきすぎた・・・
この世の理は、光と闇が均等にならねばならなかった
そして、その歪から生まれる者もいた・・・

我ら影は・・・闇と恐れられ、迫害を受けた・・・
ただ、姿形が違う、同じ生き物なのに・・・

『来るな化け物！！』

『消えろ！！消えろぉ！！！』

石を投げられ・・・銃で撃たれ・・・
われわれが、一体何をしたと言うのだ？
我々は・・・光と対となる存在なだけなのに・・・

しかし、今日、１００％の確率で当たると思っていた、次の世界の転生者によって、完璧だったはずの計算に誤差が生じた
１００％だったものが、一気に９８％にまで下がってしまったのだまず、その１％・・・
今度の転生者、天城蒼痲・・・

彼は、自らの意志でこの世界に転生をしたのに、物語の破壊をすることをせず、ただ、傍観者として、ずっと登場人物を眺めていた
物語を勝手に破壊してくれる分には嬉しいが、傍観されているのでは、物語の破壊ができない・・・

仕方なく、我々が動き出し、自動的に転生者が物語の破壊につながる行動を起こさせるように、我々が暗躍していたのだが・・・
彼は、予想外の行動ばかりを繰り返す・・・
物語の崩壊をさせる一番の方法は、その物語の引き金(トリガー)を探しだし、それを我らの手中に収めると言う事
今回の物語は、アリシアという少女の死が引き金となった物・・・
ならば、彼女を殺さず、生きたまま我らの手中に収めた。
そして、物語を加速させるべく、その物語で重要な人物に、我らの力を与えた
だが・・・・

『やはり・・・君か・・・』

「あぁ・・・・悪ぃけど、俺ァ一人になっても戦い続けるぜ・・・・」
やはり、彼は我々の思い通りに、全てを進ませてくれる気は最初からないらしい
どんなに策を講じようと、どんなに強い者を送り込んでも・・・
彼は、挫けず、真っ直ぐ立ちあがって、我々に立ちふさがる・・・

『賭けは・・・我らの勝利のはずだが・・・?』

「だーれがいつ負けた?俺はまだこのとーり、ピンピンしてるぜ?」

『・・・その血は、彼女の物か?』

「あぁ・・・俺を助けてくれたんだよ・・・」

我々の計算を狂わせたのは、彼だけではない・・・
残りの1%は、彼女達・・・別の世界の住人である。
何故か、天城蒼痲を守るように、影で支えている彼女達も、我々の考えを超えた・・・

先ほど、破壊の光(ライト・エンド)を使用し、神もろとも、全てを破壊しようとしたのだが、何故か、彼女だけは破壊する事が出来ず、彼女一人で立ち向かってきたのだ
だが、最終的には、天城蒼痲の前で力尽きたのだろう

『・・・いいだろう・・・我らの本気で、貴様を負かしてやろうぞ・・・その時が！この物語の終焉だ！！！』

「させっかよ・・・・！！俺は、一度した約束は、絶対に守るって決めてんだ！！俺は、約束したんだ！！アリシアを・・・連れて帰るってな！！」

そういい、彼はデュエルディスクを構えた・・・
ふんっ・・・所詮その程度・・・我にはかなわないものを・・・

『来い！！愚か者よ！！刻んでやろう！この地に！！貴様の血と、墓石に、貴様の名前をな！！！！』

「やれるもんならやってみろ！！俺だって、守りたい世界があるんだ！！お前等なんかに、負けてたまるかぁぁぁぁ！！」

そういい、彼はデュエルディスクにモンスターを2体召喚し、我に向かって突撃してきた

「行くぜ！フェザーマン！スパークマン！！援護頼む！！」

『分かった。』

『任せろ！！』

スパークマンにスパーク・ガンを装備させて、俺は幻影（イリュージョン）へとかけて行った

こちらに向かってくるザコどもは全部俺のＨＥＲＯ達に任せて、俺は一人、荒れた大地を駆けて行った

「俺は、手札から沼地の魔神王を捨てて、融合の魔法カードを手札に加える！！」

俺は、融合を手札に加え、俺は、フェザーマンの様子を見た

流石に、攻撃力１０００のフェザーマンにはキツいか・・・！！なら！！

「俺は、手札から融合を発動！手札のバーストレディと、フェザーマンを融合！現れろ！Ｅ－ＨＥＲＯ　フレイム・ウイングマン！！」

エクストラデッキから、フレイムウイングマンを特殊召喚し、フレイムウイングマンが現れ、ザコどもを蹴散らしてくれた
ザコどもは、幻影（イリュージョン）の背中から生み出され、何匹も何匹も増えて行くのである
さすがに、大勢の相手は出来ないので仕方がない・・・

今回の勝利条件は、ライフが尽きる前に、幻影（イリュージョン）を倒す事・・・
敗北条件は、俺のライフとデッキが尽きる事・・・

なら！俺は全力で勝ちに行くぜ！！！

「手札から、融合回収を発動！！俺は、墓地のＥ－ＨＥＲＯ　フェザーマンと、融合を手札に加える！！」

『幾らやろうと無駄だ！！我の特殊効果！！我以外を全て破壊する！！』

ぐぅっ！！やっぱそう来たか！！
だけどな！！俺は、まだ諦めない！！！

「頼む、フレイムウイングマン！！！」

『任せろ！』

俺がフレイムウイングマンの前に立ち、フレイムウイングマンが右手の炎を集め、俺の背中に放った
全身に、フレイムウイングマンの炎を通して、彼の力を受け取った・・・

そのまま、全力で駆けて行き、幻影(イリュージョン)の足元まで到着し、そのまま右手を振りかぶった

「喰らえ!!これが・・・俺達の力だぁぁぁぁぁ!!!!」

炎ごと、幻想殺しをたたき込み、当たった足が消滅した
体勢を崩した幻影(イリュージョン)は、自身の効果を、不安定な状態で発動した

光は、斜めに放たれ、俺は当たらなかったが、フレイムウイングマンと、スパークマンが当たってしまった

『グォオオオオ!!!!』

『すまん蒼痲・・・私達は・・・ここまでのようだ・・・!!』

「んな事ぁ無ぇ!!お前達はよくやってくれたよ!!」

『悪いな・・・!!』

消える間際に聞こえた、フレイムウイングマンと、スパークマンの声に答え、俺は、幻影(イリュージョン)と向かい合った

デカイ・・・だが、足は一本奪った・・・

状況は、俺の方が不利・・・

だけど、手札には融合とフェザーマンが居る・・・
後は、未来融合が一枚・・・！！
なんとかしないと、俺が負ける・・・！！

「ドロー！！」

ドローしたカードは・・・ラス・オブ・ネオス・・・・？
くそっ・・・！！こんな時に必要のないカードが・・・！！

だが、ピコンッ！！と俺のデュエルディスクが点滅した
そして、モニターが現れ、画面に相手の場は映し出された・・・
そこには、幻影（イリュージョン）のモンスター効果の欄に、まったく新しい効果が追加されていた

（『このカードは相手ターン中、このカード以外のカードを全て破壊する事が出来る、
この効果を使用した場合、2ターン、攻撃をする事が出来ない。
この効果を使用した場合、相手はデッキからカードを二枚をドローしなければならない・・・？』なるほど・・・あの効果にゃそんな制限があったとはな・・・！！）

「お前の効果で、俺は二枚カードをドローするぜ！！」

『ぐぅっ・・・！！貴様ぁぁぁぁ！！我の足をよくもぉおおおおお！！』

怒り狂った幻影（イリュージョン）が失った片足を抑えながら、こちらにパンチを繰り出してきた
しかし、俺はそれを回避し、デッキからカードを二枚ドローした

「っ！？これは・・・・」

相変わらず、空には幻影（イリュージョン）が生み出したバグが空中を飛行して、時たま俺を攻撃してきた

仕方ないか・・・・！！！

「俺は手札の未来融合　フューチャー・フュージョンを発動！！俺は、Ｅ－ＨＥＲＯ　アブソリュートＺｅｒｏを選択！！墓地に、ネクロダークマンと、バブルマンを墓地に送る！！」

『ぐぅっ・・・！！者ども！！奴を殺せぇ！！』

「簡単にこの首獲れると思うなよ！！！俺は、墓地のネクロダークマンの効果を発動！このカードが墓地に存在する限り１度だけ、自分はレベル５以上の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体をリリースなしで召喚する事ができる！！俺は、手札のＥ－ＨＥＲＯ　ネオスを通常召喚！！」

『ハァッ！！』

ネオスが現れ、俺に向かってきたザコどもを一発で叩き落してくれただが、流石に数が多すぎる・・・！！

こうなったら・・・・このカードに賭けるっきゃねぇ！！

「俺は、魔法カード、ラス・オブ・ネオスを発動！！ネオスをデッキに戻し、全てのカードを破壊する！！！」

ザコどもが一斉に俺とネオスに攻撃をしかけようと、青い空を真っ黒に染め上げていた

だが、ネオスが高く飛びあがり、眩い光を発して、全てを破壊した・・・

だが、やはり幻影(イリュージョン)を破壊する事は出来ず、相変わらず、無駄にデカイ身体で俺を見下していた

『ふはははははは！！結局、貴様では無理なのだ！！たかが人間ごときが、神を超えた我に勝とうなどとつけあがるからだ！！』

「・・・・・そうかもな」

『なにっ・・・・？』

確かに・・・力だけなら、神を凌駕してるかもな。
おっさん達を超える力を持っている、幻影(イリュージョン)は脅威だ・・・
だけど・・・！！

「悪いけど・・・負ける気ゃ最初からねぇんだ・・・とっとと来いよ・・・」

『まだ分からぬようだな・・・これを見ろ！！』

そういい、幻影(イリュージョン)の体の中から、金色の球体が外へと出された
そこには、アリシアが居て、幻影(イリュージョン)の根が、その金色の球体を覆い尽くしていた

『これを見て・・・貴様はどうする？まだ抵抗を続けるか？我らの仲間になるというのなら、彼女を解放してやろう』

「・・・だけど、この世界は喰うんだろ？なら、俺は断るね。それに、一度した約束は、絶対に守る主義でね」

『そうか・・・残念だ』

ＲＰＧとかでよくある「仲間になれ」って言うイベントをスルーし、俺は改めて幻影（イリュージョン）を見た・・・

やはり・・・大きい・・・

十メートルを軽く超える巨体に、凄まじい効果を持つ、恐ろしい敵だ・・・

でも・・・・！！！

俺は負ける気はねぇ！！！

「行くぜこの野郎・・・・これが、最後の攻撃だ・・・・！！」

そういい、俺は地面を蹴って、幻影（イリュージョン）へと突っ込んで行った

すると、大きな笑い声と共に、ゴゴゴゴゴゴッ！と幻影（イリュージョン）の拳がこちらに向かってくるのが分かった・・・

『ふん！！貴様など、握りつぶしてくれるわぁぁぁぁぁ！！』

そのまま、大きな拳がこちらに向かっていた・・・

俺は、その拳に向けて、俺は高く飛んだ

『さらばだ人間！！死ねェエエエエエエエエ！！！』

「死んで・・・たまるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺の幻想殺しと、幻影（イリュージョン）の拳がぶつかり合った

あまりの威力に、意識が飛びそうになる・・・

今、意識を飛ばしたら、確実に死ぬ・・・・！！

『はっはっは！！所詮貴様はその程度なのだぁぁぁぁぁ！！！！』

だが、幻想殺しが発動しているにも関わらず、幻影（イリュージョン）が消滅する気配ななかった・・・

こんだけデカイんだから、当然か・・・

だけどな・・・！！俺も最終手段ってのがあるんだよ！！！

「うおおお

「いんや・・・引き分けじゃねぇ・・・俺の・・・・いや、俺達の勝ちだ！！」

『何を馬鹿な事を・・・・！？あ、あれは・・・・！？』

幻影（イリュージョン）が俺に気を取られて、他のことに目がいっていない間に、俺達は念波で話しあっていたのさ！！

そう・・・俺を身代りに・・・・

敦の最強のカードで、幻影（イリュージョン）を倒すためにな！！

「キメラテック・オーバー・ドラゴン！！今が好機だ！！今なら、攻撃力が1だ！！これが、僕達の攻撃だぁ！！」

『ば、馬鹿な！？何故キメラテック・オーバー・ドラゴンが！？』

「バーカ！決まってんだろ！！俺に気を取られてた、てめぇが気づかなかっただけだ！！」

・・・といっても、ロードの能力で、幻を見せて、俺以外に目がいかないようにしてもらってただけなんだけどね

『馬鹿な・・・・馬鹿なぁぁぁぁぁぁぁ！！』

「喰らえ！！エヴォリューション・レザルト・バースト！！！」

・・・さて・・・レザルト・バーストが届くまで、今まであった思い出でも思い出すか・・・

なんつぅんだろう・・・死ぬ前って、どうしてこんなに時間がゆっ

くり進むんだろうな・・・
アニメとか見てると、なんでだろーなーって思ってたけど、今なら分かる気がする・・・
俺の頭の中に色んな思い出がフラッシュバックしてくる・・・
それは、決していいものばかりではないけど、少ない人生で、最高の思い出を残せた・・・かもしれない
おっさんと出会って・・・なのは達と出会って・・・
敦と友達になって・・・・
・・・・止めだ止め。
下手したら本当に死亡フラグで死ぬかもしれないし・・・
なら！最後まで生きてるって信じようじゃねぇか！！
せっかくおっさんからの報酬をまだ貰ってねぇし！！
まだ・・・ありがとうって言ってねぇし！！
そして・・・・俺は光に包まれて、意識を手放した・・・・
かに思えた

「・・・・・うぇ？」

『そんな・・・そんな馬鹿なあああああああああああああああ！！！』

なんか、レザルト・バースト、俺に当たってないんだけど・・・？
つか、都合良く俺の真横通ってるんだけど！？
何このご都合主義！？気持ち悪い！！
いや、死ぬのは嫌だけど、流石にご都合主義すぎだろぉおおおおおお！！

『そーま聞こえるか！？』

『なんだちくしょう！！死ぬかと思ったんだぞ！？なんだよ！？』

『良かったぁ・・・・今、咄嗟に俺の能力を使ったんだよ！！どうだ？生きてるって気分は！？（ドヤッ』

絶対おっさんの顔、ドヤ顔になってる！！
いや、俺の推測だけど、絶対そうだ！！！

『蒼痲君！？生きてる！？僕の攻撃当たってない！？』

『敦もうっせぇよ！！もう少し音量下げろおめぇ等ぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

『そういうお前が一番うるさいぞ少年・・・』

ロードもやれやれみたいな声で話しかけんな！！

あぁちくしょう！！ラスボスに勝ったのに、なんだこの微妙な気分は！！

数分後、敦達と合流して、お互いに勝利を分かち合った
まぁ、なんか微妙に納得できないけど、勝つ事ができた・・・
それだけで、なんか気が和らいだ。
なんつぅか・・・ラスボス前の、プレシア戦の時の方が辛かった気がする・・・
ま、しゃあねぇか・・・

「あっ・・・・あれ見てよ！！」

敦が指差した先に、先ほどまで幻影（イリュージョン）が居た場所に、金色に輝く球体があったのである
それは、俺の方まで飛んできて・・・
風船が割れるような音と共に、何かを落とした

「ぬぉう！？」

俺はお姫様だっこになる形で、受け止め、それを持ち上げる
・・・あれ？なんかぷにぷにして柔らかいんだけど・・・？

「あっ・・・アリシア・・・・！？」

「ウホッ★いい身体・・・」

「リュウ、目がエロイぞ・・・」

「〜〜〜〜っ！！！」

いや、お前等見せ物じゃないからな！？
とりあえず、アリシアも取り返したし・・・・
これで、一件落着・・・であって欲しいなぁ・・・・・

つか、敦、子供の裸見て顔真っ赤にするなんて・・・
結構可愛いな・・・・

プレシアさんに届けるのに、流石に裸のままはまずいので、俺のシャツを代わりに着せる事にした
おっさんがやーりーたーいー！とか言ったけど、取りあえずスルーしといた

まぁ、シャツ脱ぐのにデュエルディスクは邪魔だから外しておいた。
しゃーねーよなぁー・・・

・・・っ！？殺気！？

「っく！？」

『・・・っ！！』

突然、アリシアの身体が動き出して、俺を殺そうと、手に、黒い剣を構え、俺を刺そうとしたが、俺がアリシアを投げ飛ばし、なんとか傷は負わなかった

『ぐぅっ・・・！！まさか、我らを倒すとは・・・！！』

「いい加減にしろよ！！もう勝負はついてんだよ！！いい加減諦めろ、このデコッ八野郎！！」

おっさん、空気読め。
まぁ、こっちも一度敗北したようなもんだしなぁ・・・
明らかに、あっちもボロボロだし、こっちもボロボロだし・・・

「・・・幻影（イリュージョン）、お前、まだ戦えるよな・・・？」

『・・・なんだ・・・？』

「・・・・これが本当に最後の戦いだ・・・」

そういい、俺は右拳を握り、前へとつきだした・・・
この攻撃が、幻影（イリュージョン）に届けば・・・
全てが終わる。
この長い戦いも・・・
この物語の行方も決まる・・・

この物語は、まだずっと未来へと続く権利がある。
だけど、その中に、俺はいないだろう・・・
だって、介入者（俺）が一々出しゃばって、なのは達の未来を壊す気なんてないし
それに、所詮俺一人が居てもいなくても、世界は回り続ける物だ。
大丈夫だろう

『よかろう・・・我の全身全霊をかけて・・・勝負だ！』

「あぁ！！きやがれバグ野郎！！さぁ、お前の罪を数えろ！！」

そういい、俺と幻影(イリュージョン)は一斉に駆け出し、同時に拳を振り上げて、どんどん前へと進んで行く・・・

そして、拳と拳がぶつかり合い、俺達の喧嘩（決闘）は始まった

おっさん達も空気を読んで、その場でじっとその戦いの行く末を見ていた

「おりゃあああああああ！！」

身体はアリシアのままだというのに、本気で殴りかかる俺・・・

だが、相手も少女の身体だというのに、とんでもない力で俺を殴る

幻影(イリュージョン)

でも、やっぱり、経験不足ということが分かった

「はぁッ！！！」

『っ！？』

右手がアリシアの触れそうになり、右手の手首よりも下を掴んで、

俺を投げ飛ばす幻影(イリュージョン)・・・

やっぱり、この力は、異端を葬るための力らしい。

さきほどからずっと警戒して、中々攻撃が当たらない・・・

だけど、今まで下っ端どもに働かせすぎたな！幻影(イリュージョン)！！

「はぁぁぁぁぁッ！！！」

『なっ！？ぐぅっ・・・！！』

右手を警戒して、俺の手を掴もうとした幻影(イリュージョン)のわき腹に俺の蹴りが当たり、横に吹っ飛ぶ幻影(イリュージョン)・・・
結構深く入ったな・・・大丈夫かな・・・アリシア・・・

「・・・ぜぇ・・・・ぜぇ・・・・」

予想外にも土煙が上がり、アリシアの身体ごと、見えなくなってしまった
息を整え、じっと土煙を見る・・・

ようやく、土煙が晴れ・・・
中から一つの黒い影が見えた・・・
それは、先ほどの姿とは違い、目と鼻と口意外は真っ黒に染まった・・・
影のような存在が、そこに立っていた
その横には、アリシアの身体が転がっていた

「・・・それが・・・お前の本当の姿か・・・・」

『そうだ・・・問おう、天城蒼痲よ・・・我々“闇”は、異端なのか・・・・?』

「・・・そいつぁ違うな。」

ゆっくりと一歩前に出た幻影(イリュージョン)・・・
それと同時に、俺に問いかけてきた
“闇”とは、本当に異端なのだろうか・・・

「光に近づきすぎると、影はどんどん伸びていく・・・それと同じで、光からどんどん離れれば・・・影は暗闇へと変わってしまう・・

・光と闇は、常に表裏一体だ。どんなに片方が離れようとしても、無理なのさ・・・光が多くて、眩しい所も良いだろう。だけど、眩しい所にずっと居続けてたら、大切な物も見失う・・・かといって、暗闇の中で、闇雲に探し物を探すのも、悪くは無い。人ってのは、そーゆーもんさ。光の世界の住人も、闇の世界の住人も、結局は一緒さ。同じ心がある・・・通じ合えるんだよ。」

それは、俺の勝手な価値観と、偏見によって纏められたものである。だって、真実は結局は誰にも分からない・・・今世紀最大の謎って、言っても、来世紀まで持ち越しにされるほどの、超難題だ。でも、俺は、闇を異端だとは思わない。
“光”か“闇”かで言うと、俺は闇の方の人間だ・・・

人間の汚たない所も知っていれば、いい所も知っている。
だけど、俺は歪んでしまった・・・

俺よりも不幸な人なんて、探せば何人も出てくるだろう。
だけど、俺は、その人達よりも被害妄想などが激しくて、暗くて、深い闇の中を彷徨ったんだ

「だから・・・俺は闇を異端だとは思わない。」

でも、それを助けてくれた人達が居たんだ・・・
俺は、その人達に会って、お礼を言うんだ・・・・・！！

『・・・・そうか』

少し納得したように呟く幻影（イリュージョン）は、もう一度拳を構えた

『・・・これで最後にするぞ・・・我も全力で行く・・・』

「・・・あぁ、来い・・・・！！」

二人とも、拳を構えたまま、その場でじっ・・・と、何かが来るのを待っていた

それは、勝負の合図・・・

それは小さな音でも、風でも・・・なんでも良かった。

そして、風が吹き・・・コロンッと小石が落ちる音がした

それを合図に、俺と幻影（イリュージョン）は一気に走り出した

『「うぉおおお

（カーム・・・・？）

緑色の髪を一つに束ね、白いマントがぱたぱたと揺れて
ほのかな自然の香りが俺を包み込んでいた
その姿は、ガスタの静寂　カームそのものだった

『・・・マスター・・・・』

そう言い残し、カームは俺を見つめた・・・
その目には、ほのかに涙が溜まっていた・・・

『やっと・・・会えた・・・・！！』

（会えた・・・・？どう言う事だ・・・・？）

『っ！？もう時間が・・・！！マスター、また会いましょう・・・・』

（え・・・？どういう事だよ・・・？カーム・・・？）

俺を包んでいたほのかな香りがどんどん遠くへと消えて行き、俺は
意識を覚醒させた

「っ！！！」

倒れそうになっている俺は、右足を前に出し、なんとか自分を支えた
そのまま、ふらふらしながら後ろを振り向くと、幻影（イリュージョン）が、どんどん
と消えていた

『・・・我の負け・・・か・・・・』

「あぁ・・・・俺の勝ちだ・・・・」

『・・・何故だろうな・・・こう言うときは、人間の感情で言う『悔しい』がまず最初に出てくるはずなのだが・・・何故か、今我の心は満たされている・・・』

「・・・それは、お前に俺の想いが届いたからだ・・・人間はいつか死ぬものだ・・・だけど、その生きている中で、一体何を残せるかが・・・一番大切なんだと思う・・・」

『・・・そうか・・・我の残してきたものは・・・何もないな・・・』

「・・・なら、来世とやらで、残してみたらどうだ？お前の生き様って奴を・・・・」

『・・・・・考えておこう・・・・』

そういい残し、幻影（イリュージョン）は消えて行った・・・

まさか・・・本当に幻想殺しの能力を手に入れられるなんてな・・・

「蒼痲君！！やったね！！」

「さっすがそーま！！流石は俺の見込んだ男だぜ！！」

「よくやったな・・・しょーねん。」

三人が、勝利を分かち合うためにこちらへと向かってきた
だけど、その途中で、俺は後ろに倒れた

「そ、蒼痲君！？大丈夫！？」

「あー・・・・無理しすぎたな・・・正直、身体がボロボロだ・・・・」

「・・・そりゃそうだ。喧嘩が強いだけの高校生が、よくこんな事出来たもんだ・・・」

「そんなに・・・褒めんなって・・・照れるだろ・・・」

「褒めてる訳じゃない。皮肉を言ってるのだ。」

ロードめ・・・少しゃ心配してくれよ・・・

ま、俺はまだやる事があるんだけど・・・さっ！！

無理矢理身体に鞭打って、俺は起き上がり、アリシアのもとまで向かった
そして、彼女を抱え、俺はゆっくりと振り返った

「おっさん・・・俺、ちょっくら約束果たしてくるわ・・・飯、勝手に作って食べてくれ・・・外食でも可。」

「おうっ。行って来い！今夜は宴会だぁー！！酒買いに行こうぜロード！！」

「やれやれ・・・少年・・・いや、蒼痲。あんまり無茶をするなよ？」

うっせーやい・・・

俺も好きで無茶してんじゃねぇっつの・・・

「蒼痲君！僕も、準備するから、少しの間お別れだね・・・」

「・・・何言ってんだよ。俺はちょっと約束を果たしに行くだけだ・・・そんなに時間はかからない・・・」

「・・・そんな身体で？」

「・・・・と思う。」

俺が後でつけたすと、敦は俺の顔を見て、ぷっと笑った

そして、俺もくらくらしながらも、ぷっと笑った

そのまま、お互い笑いあい、少しにやけた顔で、見つめあった

まぁ、簡単に言えば、俺が見下げるような形なんだけどさ・・・

「・・・それが君の本当の姿なんだね・・・」

「あぁっ・・・いつか、お前の姿も見てやっからな・・・」

「・・・僕の本当の姿は、期待しないでね？眼鏡かけてるし・・・そんなにカッコ良くないよ？」

「んなことぁどーでもいいんだよ・・・とりあえず、俺は行くわ・・

・またな」

そういって、俺は歩き出した
だが、何故か目の前に闇の回廊が開かれ、一度後ろを振り返ると、おっさんとロードと敦がこちらを見ていた

「・・・・・・いってくる」

そういって、俺はもう一度前を向いて、闇の回廊への一歩を踏み出した
後ろから「いってらっしゃい」という言葉が返され、俺は少し微笑みながら、闇の回廊を通った

「・・・・ここは・・・・？」

俺が辿り着いた場所は・・・見知らぬ場所だった
原作の中じゃ、多分こんな場所あったと思うけど・・・今は頭がくらくらして思い出せない・・・

「そ、蒼痲・・・・・・・？」

「ん・・・・？」

ふと、後ろを振り返ると、フェイトとなのは、アルフ、そして、プ

レシアがこっちを見てきた・・・
ふっ・・・と一息吐いて、俺はプレシアとフェイトの方へと向かい、歩いた
来ている服はボロボロ・・・尚且つ、傷をついた身体を引きずるように彼女達へと向かい、そして、抱えていたアリシアを見せた

「あ、アリシア・・・・！？」

「約束・・・・果たしました・・・・・よ・・・・・」

そういい、俺は意識を手放し、少々眠る事にした・・・

二十一章　ラスボスの連戦って、結構きついよね（後書き）

蒼痲「・・・・グダグダじゃねぇぇぇぇかぁぁぁぁぁ！！！」

「仕方ないじゃん！！こういう話しか思い浮かばないんだから！！」

蒼痲「なんで俺のガチデッキが速攻で終わったんだよ！？オネスト積んで終わったぞ！？つか、俺光属性だったのか！？」

「あぁもう！！知るか！！もうどうとでもなれ！！って思って書いたんだから、仕方ないだろ！？」

蒼痲「でも、カームの部分はよくやった。正直、そこは感謝してる」

「そこだけかい・・・」

蒼魔「感想、指摘とかあったらコメントしてくれると嬉しい。作者もやる気出すっぽいし、俺的にも嬉しい」

「ようやく認めたかこのデコ助野郎！！」

蒼痲「パクるな！！んじゃ、また次回のあとがきでな！！」

「終わるの速っ！？」

二十二章　飯は一人で食うより、大勢で食った方が美味い・・・・気がする

「・・・・知らない天井だ・・・」

まぁ、そんな言葉から始まる俺の朝の始まり・・・
いや、本当に知らない天井なんだけど？
何ここ？ドコ？ここ？

「え、えぇっと・・・いでででっ・・・」

ゆっくり身体を起こして、辺りを見回そうとするが、痛みが電流のように俺を駆け廻り、それを必死に堪えて辺りを見回す
なんか・・・病室っぽいんだけど・・・
どこの？

「・・・あるぇー？誰だ？ご丁寧に包帯なんて・・・あ、ガーゼも・・・」

身体の至る所に包帯やら、ガーゼが俺に貼ったり、巻きつけられたりされていた
うーん・・・まず、状況の整理からだな。
来てる服は・・・もと通り、なんか半袖の白いシャツに、制服のズボン・・・
うん、やっぱ学校帰りしか思いつかねぇ格好だな

・・・あれ？おかしいな・・・なんか、目線がデカイままなんだけど・・・？

「あ、あれぇー？おっかしいな・・・」
自分の手を見て、自分が１７歳の姿のままだと確信した
まぁ、子供の頃の手だったら、もうちょっと小さかったし
「・・・うっし。行くか」
まだ身体が痛むけど、とりあえず出るか。
ウイーンと、俺を感知した扉が勝手に開いて、外の明かりが俺を照らした
「うぉーう・・・眩しいなオイ」
それは多分、寝起きだからだと思う。
基本、俺は低血圧だから、結構寝起きとかの機嫌悪いんだよなぁ・・・
しょっちゅう俺を殴って起こした姉ちゃんが懐かしいよ・・・
「・・・・アースラか？ここ？」
病室から出て分かったのは、アースラのどこかで、俺がぽつんと立っていることのみ。
あー・・・俺、ここどこか分からねぇや。
だって、一度だけしかここ来てないし。
「ま、てきとーにぶらぶらしてりゃ、どっか行きつくだろう。うん。」
気の向くままに、風の向くままに、ってな。

行き当たりばったりの人生は、そりゃ危ねぇかもしれないけど、中々スリリングのある生活だと思うな、うん。

「うっし、まずは・・・右だな」

とりあえず、隣の角を右に曲がって、適当にぶらぶら歩くことにした

・・・・あるぇー？なんでだろう・・・

どんどん知らない道に入っていくぞー？

なんか、段々明かりも少ない場所になってんだけど・・・

「・・・あれ？ここ行き止まりか？」

ふと辿り着いたのは、網のような物で、扉が固く閉ざされた行き止まりだった

「あれー？おっかしいなぁ・・・やっぱ方向音痴なのかな・・・俺・・・」

『・・・蒼痲・・・？』

「ん？誰だー？」

ふと、近くから声を感じた
なんつぅんだろ・・・どっかで聞いた事のある声だった

『蒼痲・・・そこに居るの・・・・？』

「だーから・・・誰だって・・・・」

『私・・・フェイト・テスタロッサって言えば・・・分かるかな・・・？』

「ぶうぅぅぅぅぅぅッ！！！！」

ちょ、おま！？
何いきなり！？ここ、フェイトとアルフの居る場所だったの！？
ちょー→ビックリだよ！！いきなりすぎて、何が起きたのか良く分からねぇよ！！

『え！？蒼痲！？そこに居るのかい！？』

「あ、アルフも居るのか・・・？」

『うぅん・・・アルフ意外にも、いるよ・・・』

『蒼痲君？聞こえるかしら？』

「ぷ、プレシアさん！？な、なんでんなトコに・・・」

なんでテスタロッサ一家が一緒の部屋に閉じ込められてる訳！？
これ、原作にないんだけど！？どーゆーことなの！？

『貴方が蒼痲さん？』

「うぇ？誰？」

いきなり、知らない声の主に話しかけられたんだけど？
いや、フェイトっぽい声してるんだけど、なんか若干違うんだけど・・・

『私、アリシア・テスタロッサって言います！！』

「ウゾダドンドコドーーーン！！！」

なんでや！？なんでアリシアも！？つか、せまくないのか！？
もう完璧な家族だよね？！どうしてこうなったんだよ！ｋｗｓｋ教えて！！

『蒼痲さんが倒れた後に、目が覚めたんです！あのっ、た、助けてくれてありゅがと（ガリっ！）～～～っ！！』

・・・なんだこの萌えキャラは・・・
姿見えてたら、完全に萌えてるんだけど・・・
扉の向こうから、プレシアさんがもっと落ち着きなさい的な事を言っていた
やれやれ・・・俺、こーゆーの嫌なんだよなぁ・・・

「あのさ、アリシアだっけ？俺に話があるんなら、今度話そうぜ？
俺、扉に区切られて話すんの、あんま好きじゃないんだよねぇ・・・
だから、今度会った時に、一緒に話そう？その時に、言いたい事も聞くから」

『で、でもそれじゃ・・・』

「俺は、逃げも隠れもしないし、毎日暇人だからさ。大丈夫だって。な？」

『・・・・うん。分かった・・・それじゃ、また今度・・・』

そういって、アリシアは黙った

・・・なんだろう、無性にどんな顔してるか見たいんだけど・・・

アニメだったら、どんな顔してるか分かるのになぁ・・・残念だなぁ・・・

『蒼痲・・・私も、その時でいい？私も・・・蒼痲に伝えたい事があるから・・・』

『私も・・・それでいいかしら？』

「おう。別に問題ない。んじゃ、俺はまた艦内をぶらぶらするわ。んじゃなー」

フェイトと、プレシアさんも、アリシアと同じように、時間ができたら俺に伝えたいことを伝えるらしい

まぁ、しゃあねぇよな。

その時が来るまで、俺はだらだらしてるさ。

俺は扉に区切られていると言うのに、ひらひらと手を振りながらその場を後にした

そして、ようやく俺の分かる道に出たので、俺は食堂を目指していた
確か、あの時は代金引き換えで飯を食ってないから、恐らく、タダで利用できるはずだ・・・！！
高校生になると、例え１００円でも大きな損害なんだよねー・・・
助かるっちゃ助かるんだよねぇー

「おっ、ようやくか・・・」

ようやく辿り着いた食堂で、俺は何を注文しようか、その場で立ち止まって考えていた
うーん・・・麻婆豆腐でもいいんだよなぁ・・・
でも、ラーメンも捨てがたいし・・・
しゃあねぇ、どっちも頼むか、どーせタダだし。

「すいませーん、ラーメンと麻婆豆腐お願いしやーす」

「分かりました。では、少しお待ちください」

そう簡単にできるわけゃねぇよなぁ・・・
まぁ、食えりゃぁいいけど・・・

５分くらいして、美味しそうな匂いがしてきて、俺の空腹が頂点まで来ていた・・・
やべぇ、胃液がさっさと食わせろって言ってうるさいんだけど・・・
つか、腹痛ぇ・・・・

「お待ちしました。麻婆豆腐と、ラーメンになります」

「うっしゃ、待ってましたぁ！！」

それを受け取って、とっとと食堂へと入って行った
ようやくだ・・・ようやく飯が食える・・・！！

ふぅっ、と息を吐きながら俺は席をとろうときょろきょろしている
と、結構近くに、なのはとクロノ、ユーノ達を見つけた
エイミィと艦長も居るし、一緒に食うか・・・

「よーっす。ユーノ、隣いいか？」

「あ、うん・・・って、蒼痲！？」

「な、なんだよ？いきなり大声出すなって・・・ビックリするだろうが・・・」

「蒼痲君、大丈夫なの！？」

「おう。大丈夫だ。」

わらわらと俺を見つけて寄ってくるちびっこ達・・・
おぉ、クロノの野郎も居る。こりゃ珍しい

「君のお陰で、この世界は守られた・・・感謝している」

「ゑ？何言ってんのお前？」

「知らないのか？君が戦っていた所は、全てアースラのモニターで
見えていたのだぞ？」

「な、なんですとー！？」

「君の背中から翼が生えたり、人型の召喚獣が出てきたり・・・君は本当に何者なんだ？」

・・・やべぇ、俺にオネスト積まれてたトコ見られてたのか・・・やべぇ、どれくらいやべぇかというと、マジやべぇ・・・いや、なんつぅか・・・恥ずかしいんだよね・・・

「さぁな。俺だって何者か分からないのに、んなこと聞かれても困るわ。とりあえず、腹減ったから飯食っておk？」

「あ、あぁ・・・そうか・・・」

そういって、クロノ達は席に座った

まぁ、ユーノの隣に俺も座って、ラーメンと麻婆豆腐を置いた

さぁて、食うか・・・・

「・・・・・（じーーーーーっ）」

・・・・なんか、横とか前とかからの視線が痛いんですけど・・・

「・・・な、なんだよ？」

「蒼痲君・・・どうしてそんなに背が伸びてるの・・・？」

「呪いが解けた。はい、説明終了」

「そ、それだけ・・・？」

うーん・・・それ以外にどう説明すればいいんだ・・・？
多分、これはコ〇ン君でも解けない難題かもしれないぞ・・・？

「そんだけだ。ま、どうして呪われたは聞かないでくれ。説明がめんどーだし」

そう言い終えると、俺は麻婆豆腐を口に運び、ご飯を食べた
・・・うん。普通に美味い。

まぁ、その後、他愛のない話をして、俺は飯を食い終えた。
その時に、何度か俺に質問をしてくるなのはとユーノに「まだ子供なんだなぁ」という感情を覚えながらも、俺は食堂を後にした

で、俺は転送装置など使わずに移動する手段があるのだが・・・

「・・・・おっかしいなぁ・・・せいっ！！」

いつもなら、ぶよーんと変な音を立てて現れる闇の回廊が、まったく出ないわけですよ。
あるぇー？おっかしいなぁ・・・

『あ、そーま？起きたかー？』

『おぉおっさん。丁度いいとこに・・・いやさぁー、なんでか知らないけど、闇の回廊が開けないんだよ・・・どうしたらいい？』

『あー・・・その事ね。』

おっさんが分かってますよ。みたいな感じに俺に行ってきやがった
まぁ、そりゃそうだよなぁ・・・俺も闇の回廊ないと、何かと不便なんだけど・・・

『実はさぁ～、その右手のせいで、そーまは今「魔力を持つ事ができない」んだ。何故かと言うと・・・』

『この右手が悪いんだろ？でも、どうして、デュエルディスクは使えたんだ？』

『その件は、俺が説明しよう。』

突然、俺達の回線にロードが介入してきた
まぁ、説明さえあればなんでもいいんだけどな。

『お前の右手は触ればたちまち『魔力』そのものを消し去る、恐ろしいものだ。ただし、この世界で言うリンカーコアを触れば、だがな。』

『え！？それじゃ、もしもなのは達の触ったらどうなるんだ！？』

『・・・まぁ、一日位、魔法が使えなくなるな。まぁ、原作でもそうだけど、魔力量も、回復力も普通の人よりも優れてるから、結構早く治るな。』

『へぇー・・・』

『で、話を戻すぞ。お前がデュエルディスクを使えたのは、お前の中にある魔力のタンクから、魔力を供給してたんだ』

『ん？ちょっと待てよ。普通におかしいだろ？俺は「魔力を持つ事ができない」んだろ？どうして、俺の中に魔力があるんだ？』

『簡単な話だ。その右手は“異端”ならなんでも打ち消すが、お前の中にある物は打ち消す事が出来ない・・・あ、ちなみに、その右手で胸をずっと触ったままにしてみな』

・・・・こうか？

そんな感じで、俺は自分の胸に手を当てて、数秒待機した

すると・・・・

「うをぉ！？」

いきなり身体から光が溢れて、俺を包み込んだ

それは、俺を覆い隠したと思ったら、突然光が晴れて、俺は先ほどとは違う目線となっていた

『な、なんだこりゃ！？何！？なんで俺ちっさくなってんの！？』

『簡単なことだ。リュウがお前をこの世界に送る時にかけられていた魔力・・・それを引き出してやったのさ』

『な、何それ・・・？』

『お前の中の魔力は、お前の中にある才能・・・つまり、お前だけの能力だ。だけど、リュウはそこにプロテクトをかけて、お前の魔力に覆いかぶさるように、かかっていた。だが、プレシアとの戦いの時、魔力を根こそぎ持って行かれただろう？その時に、お前のプロテクトごと全て持って行かれたのさ。』

『な、なるほど・・・』

『そっから先はおっさんが説明するＺＥ☆で、今そのプロテクトは、お前の魔力の中に封じ込められてたわけ。で、プロテクトをかけようにも、外に出ようとした魔力がお前の魔力と、お前の右手に相殺して、子供の姿に戻れなくなったってわけ。つっても、お前の魔力は層みたいにいくつもあるから、面倒なんだけどな』

『で、そこで、お前の幻想殺しが役にたったってことだ。お前の魔力を０にして、プロテクトだけを残した状態にしてもらったのさ。その魔力が外に出て、右手ごとプロテクトをかけたわけだ。』

『俺のかけたプロテクトは、魔力１割、おっさんの能力９割で構成されてっからなー♪』

『・・・・死ねチート親父』

何これ？上手く説明してるつもりだろうけど、全然理解できん。なんつぅんだろ・・・・ケーキの層の中にイチゴがあって、それがプロテクトで、俺の魔力がスポンジって言いたいのか？
・・・自分で何説明してんのか分からなくなってきた・・・・

『ま、簡単な話、右手を胸に当てて、数秒待ってれば、青年から少年へ。同じ事をもう一度やると、少年から青年へ・・・簡単だろ？』

『え！？これ（幻想殺し）ってそんなに便利なの！？』

『便利といえば便利だが・・・不便と言えば不便だ。青年から少年

に戻れば、魔力は全て満タンの状態からスタートするが、少年から青年になると、魔力がゼロになる。そう毎回ぽこぽこ変身すると、お前が壊れるぞ？』

『用は、乱用するなってこったろ？んなもん、俺がするかっての・・・んじゃ。今からそっち向かうから、場所はどこだ？』

『んなもん決まってんだろ？俺達の家。』

・・・・なんつぅトコに居るんだお前等・・・

ん？ちょっと待てよ・・・

俺とおっさんの住んでいる家に、ロードも居るんだろ・・・？

って事は、敦も居るってことだよな・・・？

俺のパソコン・・・確か、デスクトップが・・・ミクの・・・

・・・・まずいいい

かった

家のまんまえに到着し、そのまま、真っ直ぐ家へと目指しダッシュ
そして、凄いスピードでドアを開けた

「た、ただいまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

そのまま、靴を脱ぎ棄て、そのまま二回にある俺の部屋へと突入した
間に会ってくれぇぇぇぇぇぇぇ！！
つか、こっちの時間帯じゃ、今夜なのかよ！？

俺の部屋に入って、そのまま辺りを見回した
荒らされた痕跡・・・無し！
ＤＶＤボックスとか、その他・・・全てよし！！

問題はパソコンだぁぁぁぁぁぁ！！

慌てて起動！
そして、現れたデスクトップから、誰も使っていないことを確認するため、インターネットにつないだ
履歴は・・・無し・・・

よかったぁ・・・これで、俺のパソコンとかその他が敦とかに見られてないのが分かったぜ・・・

ふぃ～・・・安心したぜ・・・・
・・・なんか、後ろから視線を感じるんだが・・・

「・・・・はっ！？」

「・・・・・（ニヤニヤ）」

「・・・・・・」

「イタタタ痛いわ～！１７歳の青年が、デスクトップ見られるぐらいでそんなに焦るもんかねー？（ニヤニヤ）」

・・・・おっさんが、俺の姿を見て、めっちゃニヤニヤしてやがった・・・

プチっと何かが切れる音がして、俺の怒りが有頂天となった

「うぉおおおお！！ファイナルッ！！フューーーージョォオオオオン！！！」

今なら勇者王でも、なんだってなれる気がするぅぅぅぅぅ！！

とりあえず、このおっさんをぶっ殺ぉおおおおおす！！！

右手を胸に当てて、そのまま俺の掛け声に合わせて身体に光が包み込み、その光が俺を少年から青年へと変身させる・・・

「うぉおおおおおおおおおお！！ヘルッ！アァァァンド！ヘヴン！！！」

「え！？ちょ、そーま！？」

「光になれぇぇぇ

おっさん死ねぇえええええええええええ！！！

おっさんの事を思いっきりぶん殴って、そのまま通路までブッ飛ばして、その後俺は追撃をかけた

おっさんの顔面にパンチをたたき込み、その時に、おっさんの中にあるリンカーコアが割れるような音がしたけど、俺は無視して、おっさんをぶん殴り続けた

「うぉおおおおおおおおお！！」

「ちょ、ロード！？下に居るんだろ！？俺の声聞こえるんだろ！？助けてくれぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

・・・・その後の事は、御想像にお任せします。

「・・・・えぇっ、この度、我々は、この物語を侵食しようとしていたバグを駆除することを祝いまして、ここに！宴会を開始しようと思います！！」

体中に包帯を巻いたおっさんがどこから取り出した分からないマイクで宴会の開始を告げた

んなもん、誰も聞きたくねーっつの・・・

そんな事を考えながら、俺は手羽先を食べていた

まぁ、普通に美味いんだけどね。

つかさ、なんでタンドリーチキンみたいなのが机の上にどどん！って置いてあるの？
何？食っていいの？俺食った事ないから、食ってみたいんだけど・・・

あ、ちなみに俺は子供の姿で出席してる。
流石に、敦一人を子供にするのも嫌だし。
俺も敦と同じ目線で食いたかったからさ。

ふと、俺の目線と敦の目線が重なり、ふふっと小さく笑った

「なんか・・・楽しいね」

「あぁ。たまにゃぁ馬鹿騒ぎすんのも悪くねぇよな。」

そういって、俺達はお互いに笑った
なんか、こういう日常も悪くないかもしれない。
そういえば・・・俺、こうやって3人以上で飯食うの、久しぶりじゃね・・・？
・・・なんか、暖かくていいな・・・
こういうのも、悪く・・・ないかな。

「うぉーらい！ロードももっと飲めよ！！」

「うわ、何をする、やめろ！！」

・・・近くでおっさんとロードが酒を飲んでる事以外はな。

んで、料理のほとんどが無くなり、おっさん達が飲み終わった頃・・・

・

「第二回、モンハン２ｎｄＧ、朝までやるっきゃねぇ！大会ー！！」

「いえぇぇぇ

二十二章　飯は一人で食うより、大勢で食った方が美味い・・・・気がする（後

おまけ

おっさん「ちょ！？そーま！！爆弾なんてこんなとこに仕掛けるなよ！？」

蒼痲「妨害ありなんだろ！！んじゃ、死んでくれや！」

おっさん「ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！力尽きたぁぁぁぁぁぁ！！」

ロード「ほ、報酬がどんどん減っていく・・・」

敦「蒼痲君！流石に殺りすぎだよ！」

蒼痲「あ、悪い悪い。・・・あれ？いつの間に名前で呼ぶようになったんだ？」

敦「・・・あれ？なんでだろ・・・？」

蒼痲「ま、いっか」

二十三章　ＨＥＲＯは誰にでもいる。

・・・・・・あー・・・・頭痛ぇ・・・・

そんな感じで始まった、俺の朝・・・
というか昼過ぎ。

今日は平日なので、普通の学生たちは今頃昼休みが終わりに近づいて授業の準備をし始めている頃だろう
まぁ、俺が学校に居た時ゃ普通に会話してたけどな。
勉強道具なんて全部置き勉してたし。

「ふぁぁぁぁぁ～～～～」

ゆっくりと身体を伸ばして、伸び終えると、辺りを見渡した
・・・ふむ。敦が毛布可被って寝てて、おっさんとロードが見事に酔い潰れてやがる・・・

「よっと・・・」

起き上がって、辺りを見渡す・・・
酒瓶や、ポテチの袋などが床に散乱して、滅茶苦茶汚いのがよくわかった
おまけに、酒臭い・・・・
とりあえず、窓を開けて空気の入れ替えと、日差しを身体に浴びる

「うぉっ・・・眩しっ・・・・」

昼過ぎなので、太陽はサンサンと照らしていて、その光によって、俺の意識は覚醒し始めた

やれやれ・・・後始末は俺がやっておけゃいいんだろ・・・

そう思いながらも、俺はゴミ袋をゴミ箱の中に突っ込んだ

「・・・あっ・・・」

ふと、ある事を思い出した

掃除の手を一度止めて、自室に戻って、デッキケースを開いた

俺のガチデッキ・・・E・HEROデッキのエクストラデッキから、あるカードを取り出した

「・・・フレイム・ウイングマン・・・」

幻影(イリュージョン)との戦いで、共に戦ってくれた戦友・・・

思えば、このカードとは長い付き合いだ。

俺の・・・フェイバリットカードと言っても過言ではないほど、俺はコイツと苦楽を共にしてきた

最初の頃、E・HEROデッキと言う物は、誰も作らず、自分の作ったオリジナルデッキで戦う人が多かった時代・・・

俺は、必死にこのデッキで戦っていた・・・

当時、E・HEROの融合モンスターは、フレイム・ウイングマンと、サンダー・ジャイアントしかいなかったため、E・HEROデッキは、弱い弱いと言われてきたのである。

ブルーアイズや、ブラック・マジシャンにも劣る攻撃力・・・

何より、融合素材のモンスターが下級な物ばかりだったため、殆ど

の人がＥ－ＨＥＲＯと言う物を「弱いデッキ」と言っていたのである
そんな中で、俺は必死に勝負を続けて“弱い”や“デッキ変えれば？”などの言葉を無視して、このデッキを作った

今では、ＢＦやら、ライトロードやら・・・
沢山のデッキが作ることが出来る時代となった。
でも、俺はシンクロ等には頼らず、融合で、今の時代を戦い抜いてきたのだ
やはり、初心者と言う物は、一度飽きてしまえば、そのまま放置してしまう傾向がある。
俺は、飽きに屈せず、今まで遊戯王を続けてきたのだ・・・
コイツ（フレイム・ウイングマン）と共に・・・

「・・・・・・あ・・・・」

フレイム・ウイングマンをそっとエクストラデッキに戻し、俺はベットの上に置いてある、大切な物をとった

「・・・・エリアル・・・・」

小さく、俺を守ってくれた彼女の名前を呼んだ
俺が手に取ったのは、エリアルの帽子だった
俺達が倒れている中、彼女は俺を助けてくれた・・・
自分が犠牲にしてまで、俺と助けてくれたのだ・・・

「・・・どうして・・・俺なんか・・・・」

ぽつりと、小さく呟いた・・・

思い浮かぶのは、彼女の言った言葉・・・
『・・・マスターに、会えて良かった』という言葉だった

「あ？俺の会えて良かった？で？何？」と、昔の自分なら言っていただろう。
だけど、今俺は、まったく別の事を考えていた
どうして・・・彼女は消えなければならなかったのだろう・・・

心の底から、ずっとそう考えていた

俺を庇いさえしなければ、彼女はまだ消えていなかったはず・・・
それなのに、何故・・・・？

答えの分からない自問自答を繰り返す・・・
そんな時、俺の頭に、聞いたことのある声が聞こえた

『君は、彼女達にとってＨＥＲＯだからさ』

「！？お、お前は・・・・！？」

俺以外誰もいないはずの部屋に、もう一人、別の声が聞こえた
それは、はっきりと聞き取ることが出来て、後ろから声をかけられたかのように、俺は振り返った

そこには・・・・

『・・・こうやって会うのは、初めてだな。』

「・・・・・嘘・・・だろ・・・・？」

そこには、左肩に白い翼を生やしていて、右手には、まるで龍を封じ込めたかのような赤い腕を持った戦士・・・
E・HERO　フレイム・ウイングマンが立っていた

「お前・・・フレイム・ウイングマン!?どうして!?」

目の前の非現実的な事に驚いて、俺はベットに座り込んでいたつ、つか驚き過ぎて腰が抜けたんだけど・・・・

『君に、ようやく話しかける事ができた・・・初めまして・・・・では、ないな。私は、フレイム・ウイングマン・・・君の持っているカードの精霊だ』

「せ、精霊!?」

いやいやいやいやいや!!精霊とか言われても困るんだけど!?何これ!?何が起きてんの!?誰かぁー!!説明プリーズ!!

『・・・そんなに驚かないでくれ・・・少なくとも、私と君は一番長い付き合いなのだから・・・』

「・・・・え?そうなの?」

『・・・覚えているか?君がまだ蒼と名乗っていた頃・・・初めて私と出会った日の事を・・・』

・・・・忘れるもんか。

俺が、初めてウルレアを当てた日だぞ・・・

あれは、5年前・・・アンティークギア・ゴーレムのパックが発売

した日・・・
俺は、初めて見るモンスターに胸躍らせながら、パックを開けたんだ・・・
当時の俺は、ただ、遊戯王のカードを見ているだけの少年だった。
友達が始めている事がきっかけで、俺も遊戯王を始めようと思ったんだ。
そして、その日決意したんだ・・・デュエリストになろう。って・・・
その時、初めて出たウルレアカードが・・・フレイム・ウイングマンだったんだ。
あの時の喜びは、未だに覚えてる・・・
初めて、自分の運だけで、レアカードを手に入れた
初めて、遊戯王のパックを買った
初めて、デッキを作った
初めて、デュエルをした・・・
幾つもの初めてを、フレイム・ウイングマンに教えて貰った
「え・・・ちょ、・・・え・・・？」
パニくっている俺に、背中からとんっ、と肩をたたかれた気がした
後ろを見ると、ソニック・バードが少しボロボロになっているが、嬉しそうにこっちを見ていた
『マスターさん。またお会いしゃしたね。』
「そ、ソニック・バード！？お前、あの時死んだんじゃ・・・！？」
『か、勝手に殺さないでくだせぇ！ワテはただ、マスターさんを傷つけようとするアイツ等に突貫しに行っただけで・・・』

『ソニック・バード・・・あまり話を脱線させないでくれ・・・』
やれやれ、とフレイム・ウイングマンが呆れたように言った
ソニック・バードは『たはは・・・すいやせん』と頭を下げて謝っていた
「え・・・？何？ソニック・バードもいる・・・って事は、スパークマンとかも精霊なのか！？」
『察しが良いな・・・その通り。蒼痲。君の持っているカードには、カードの精霊は宿っている』
『ワテ等も、その一人や。・・・ワテの場合、一羽なんやけどな・・・』
「い、いや・・・落ち込まれても困るんだけど・・・」
後ろでがっくりとうなだれるソニック・バードに驚きながら、俺は状況の整理をした
え？何？フレイム・ウイングマンとソニック・バードって・・・カードの精霊だったの？
何？俺、十代と同じ能力持ってる訳・・・？
『話を戻そう・・・実は、エリアルも、カードの精霊なんだ。』
「え、エリアルも・・・？」
手に持っている帽子を見て、フレイム・ウイングマンが言った。
え・・・？何？エリアルも・・・？

『あぁ・・・彼女は、最近精霊になったばかりでな・・・彼女ともう一人・・・ガスタの静寂　カームも、同じ時期に精霊となったのだ』

「ウェ！？カームも！？」

ま、まずいぞ！？
前の世界で、普通にカームのやばい絵とか、普通に見てたんだけど！？
普通に、やばい事してたんだけど！？

『だが、彼女達は、ガスタとリチュア・・・侵略する側と、される側・・・どちらも仲が悪くてな・・・小さな事でいつも喧嘩をしていたのだ・・・』

・・・あ、そっか。
公式の方じゃ、リチュアが、ガスタに攻め込んできたんだっけ・・・

『それが、いつも蒼痲関係でな・・・いつも君の隣に居るべきなのは私だと、二人で言い争っていたよ・・・』

これなんてエロゲ？って聞き返したくなったんだけど・・・
やばい、二人がそんなこと言ってくれてたなんて・・・なんか、嬉しいんだけど、めっちゃ恥ずかしい・・・

『だが、最近、彼女達の様子がおかしかった・・・こちらに居るはずなのに、何故か精霊世界に引っ張られるように、存在が薄れていった・・・だが、当時の君は、まだ私達の姿が見えていなかった・・・』

「・・・・・・・・」

静かに、フレイム・ウイングマンが告げる事実に、耳を傾けることしかできなかった

俺が気づかないだけで・・・そんなことがあったなんて・・・

『だが、彼女達はそれに屈することなく、君の隣に居た。時折、君に微笑みかけていたりもしていたのだぞ？』

「・・・・・・・・」

聞いてて、どんどん辛くなってきた

ようやく見えるようになった、彼らの中で・・・そんな事があったなんて・・・

しかも、それが自分を中心にしている事だったなんて・・・思いもしなかった

『だが・・・幻影（イリュージョン）と戦った時、彼女達は、幻影（イリュージョン）の放つ闇に引き摺られ、そのまま引っ張り戻されるように、精霊世界へと行ってしまった・・・これは、とてもまずい事だ』

「？どうして、まずいんだ？本来、エリアル達は、精霊世界の住人なんだろ？じゃあ、なんで・・・」

『・・・我々は、カードという媒体が無ければ、存在を維持する事が出来ない・・・故に、カードの無いまま、精霊世界へと行ってしまった彼女達は、今、苦しんでいるはずだ・・・』

う、嘘ぉ！？ちょ、待てよ！！

なんでそんな事になってんの！？
なんで、いきなりそんなこと言ってんだよフレイム・ウイングマン！！

「ど、どうすればいいんだよ！？」

『落ち着くんだ・・・幸い、まだエリアルのカードも、カームのカードも、消えては無い・・・まだ、彼女達は存在している・・・だが、それがいつまで持つかは・・・私にも分からない・・・』

机の上に、リチュア・エリアルのカードと、ガスタの静寂　カームのカードと、イビリチュア・マインドオーガスのカードを置いたカームのカードは、イラストが若干消えかかっていて、ぎりぎりまで彼女の顔を見る事が出来た
マインドオーガスのカードも、少し消えているが、まだ大丈夫だと思った
だが、問題なのは、エリアルのカードだ。
イラストは完全に消えて、説明文の後半部分が消えかかっている・・・
このままでは、白紙のカードになってしまう・・・

『君に出来る事は二つ・・・彼女達を助けるか、見捨てるか・・・君の答えを聞きたい・・・』

「・・・・フレイム・ウイングマン・・・」

後ろで、一緒にカームとエリアルとマインドオーガスのカードを共に見ていたフレイム・ウイングマンと対峙した
そして・・・・ゆっくりと、俺の決意と共に、彼に俺の答えを告げた

「んなもん・・・決まってんだろ・・・俺は、助けに行くぞ。例え、それが危険な事でも・・・」

『・・・そうか。』

そういい、フレイム・ウイングマンが、ふっと笑った
それは、もうすでに分かっていたかのような笑いだった

『さっすがマスターさんでさぁ！ワテはてっきり、カームちゃん達を見捨てるかと思ってやしたぜ！』

「・・・ソニック・バード、殴っていいか？」

『す、すいやせんでしたぁ・・・』

なんつぅこと言いやがるこのブースター背負った鳥は・・・
というか、もう違和感なく話してるけど、これって普通に見たら独り言じゃね・・・？
ま、いっか・・・俺の部屋だし。

『ねーぇー！話し終わったー？』

『あ、ライナちゃん。まだ早いと思うんですけど・・・』

「ん？」

ふと、後ろを見ると、デッキケースがゴトゴト動き出して、なんか勝手にデッキケースが開いたと思ったら、白い髪の女の子と、白い長髪の女性が一緒に外へと飛び出してきた

『わぁー！マスターさんだー！！』

「うおっと！？」

出てきた時は半透明だったが、突然実体になって、俺に抱きついてきた少女に、若干驚きを隠せなかった

な、何これ！？これなんてエロゲ！？

『マスターさん！私の声聞こえる！？私の肌触れてる！？』

「う、うるさっ・・・あぁ・・・聞こえてるから・・・耳元で大声出すの止めて・・・」

『ら、ライナちゃん！マスターが困ってますよ！』

いきなり抱きつかれて、驚いている俺に、長髪の女性は、少女をはがしてくれて、俺と目があった瞬間、少し顔を赤くした

『はーい・・・あれ？ウェムコお姉ちゃん、泣いてるの？』

『！？あ・・・あれ・・・？』

「えぇっと・・・・」

なんで・・・この二人が居るんだろう・・・

長髪の美人さんが、救世の美神　ノースウェムコで、白い髪の女の子が、光霊使い　ライナだよな・・・？

な、なんかどっちも普通に可愛いんだけど・・・

『おかしいですね・・・さっきまで普通だったんですけど・・・』

ぽろぽろと涙を流すノースウェムコが、俺を見ながら微笑みかけてくれた
やばい・・・綺麗だ・・・

『むー！マスターさん、ウェムコお姉ちゃんのことじろじろ見過ぎ！ライナも見てよー！』

ライナがぽかぽか俺を叩きながら言ってきた
やばい・・・この子もこの子で、めっちゃ可愛いんだが・・・

「ちょ、フレイム・ウイングマン！説明してく・・・」

『インフェルノウイング！？何をする！？』

『アンタ、いい加減長すぎじゃないかい・・・？そんなに私を放置したいのかい・・・？えぇ？「マスターと話がしたいから、少しの間実体化しないでくれ」だって？』

『は、話を聞くんだ！私は・・・』

『ちょっと、頭冷やそうな・・・・？』

・・・・ごめん。フレイム・ウイングマン。
今回は見捨てさせて。だって、インフェルノウイングが、めっちゃ怖いんだもん。
ヤダよ俺・・・まだ、嫉妬の炎で焼き尽くされたくないから・・・

「・・・・賑やかだな・・・」

ここに・・・・カームや、エリアルもいたのか・・・
そう考えると、どうして、自分はこの光景が見れなかったんだろう・・・と、心の中で思った
恐らく、この世界に来て、敦が受け取るはずだった能力を、俺が横取りした時に、おまけとして付属してきたのだろう・・・
もしくは、幻想殺しを手にした時に、一緒にこの能力に目覚めたとか・・・

でも、今は、目の前で繰り広げられている、非現実的な光景を、微笑ましく見ていた

『マスターさーん！待ってよー！』

「ライナ、俺はそんなに急いでないから・・・走らなくてもいいんだぞー？」

そろそろ空気も入れ替わった頃だろうと、想い、一度部屋を出た瞬間、彼女達は、実態から、半透明な姿となった
理由を聞くと「ある一定の空間でないと、実体化できない」そうだ。
だが、フレイム・ウイングマンはインフェルノウイングと一緒にカードの中に戻ってしまい、今Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆をしている頃だろう。
フレイム・ウイングマン・・・さり気なくリア充になってた、あんたが悪いんだぞ・・・
と、心の中で思いつつ、俺は下の階に下がった
だが、ライナはよほど嬉しいのか『マスターさんと一緒に行くー！』とだだをこねて、一緒に降りることにしたのだ

実体が無いので、俺は触れられないのだが、ライナ達は一方的に俺に触れる事ができるらしい。
ただし、俺には触られているという感覚がないので、なんというか、微妙な気持ちになってるんだけどね・・・

「やれやれ・・・」

『マスターさんマスターさん！あれなぁに？』

「ん？あれは・・・」

ライナが指差したのは、酔い潰れて倒れているおっさんとロードだった

・・・やばい・・・なんて説明すればいいんだろう・・・

「・・・あれは、ちょっと、残念な結果になった人達だよ？」

『へぇー・・・・・』

・・・ライナ。そんなつぶらで、純粋な目で俺を見ないで・・・
なんか、どんどん罪悪感に包まれるんだけど・・・
・・・あれ？なんかロード起き上がったんだけど・・・

「ん・・・・・おぉー、しょーねん・・・おはよー・・・・」

「・・・おい、顔洗えよ。」

見るからに寝起き&二日酔いでふらふら＋口元抑えて吐きそうな顔を向けるな。

若干酒臭いから、こっちまで吐きそうになるじゃないか・・・

「・・・・ん？しょーねん、その子達を見えるようになったのか？」

「・・・ライナ達の事、知ってたのか？」

わーいと言いながら部屋を歩き回るライナを見て、ロードが呟いた・・・やっぱ、知ってたのか・・・

「あぁ。彼女達は、俺の管理する世界出身なんでな・・・会えば、ある程度どこに出身かは、分かる。・・・それに、バグの影響は、この世界じゃなくて、俺の世界にも影響を及ぼしたからな」

「！？マジか！？」

「言っただろう？俺は、一応これでも“神”という存在だ。まぁ、基本、仕事は放置しているがな。・・・所で少年。前に俺が言った言葉を覚えているか？」

「あ？いつのだよ？」

「しょーねんと初めて会った時の事だ。」

えーっと・・・確かあの時・・・ロード、何て言ってたっけ・・・？・・・あー、思い出した。アレか・・・

「『俺、実はツインテールじゃなくて、ポニーテール萌えなんだ・・・』って奴か？」

「誰がいつそんなこと言った。俺はツイン派だ。リュウはポニー派

だがな。お前が、俺の世界に来る権利を得たと、言ったであろう。」

「ごめん。わざとボケた。」

まぁ、わざとだから、結構スベったな。

あー、ライナ・・・おっさんの顔ぺちぺち叩いちゃ駄目だろ・・・

「話を戻すが・・・実を言うと、今、俺の管理している世界も、バグの影響で、ちょっとまずい方に向かってる。」

「・・・・んじゃ、俺の考えてることも分かるってか？」

「あぁ。お前は、苦しんでいる彼女達を助けたい・・・俺は、バグの影響で歪んでしまった世界をもとに戻さなければならない。お互い、共通しているのは、同じ世界と言う事・・・そして、お前はリュウによって送り込まれた救世主だと言う事・・・丁度いい機会だ。君に、精霊世界という場所を見に行ってもらおう。・・・ただし、命の保証は出来ないぞ？」

ロードが、ゆっくりと右手を差し出してきた

これは・・・おっさんと初めて出会った時と、よく似ている・・・

世界を渡る覚悟が、今、自分にあるか、無いか・・・

それを確かめるように手を差し伸べてくるロード・・・

・・・俺の決意は、もう決まっている。

「・・・俺はカームとエリアルを助けるだけだ。歪んだ、あんたの世界を救うのは、おまけみたいなもんだ。それに、命の保証なんて、この世界に来て、されてねぇのはすぐに分かったからな。」

俺はロードの手をとり、そのまま手を握った

元々、俺は命を捨てる覚悟で、この世界に来たんだ。
すでに賭けている命をいまさら、どうこう言うつもりはない。
だが、俺は満足そうに俺を見ているロードに言った
「だけど、今じゃない。明日・・・なのはとフェイトが友達として認め合う日だ。俺は、それを最後まで見届けたい・・・」
「・・・そうか。まぁ、俺の方もお前を転送するのに少し時間がかかるので、助かる。」
ロードは一度ふぅ、と息を吐き、俺に告げた
これで、明日、俺は無印の最終回を、直に見ることが約束された。
「明日の午後には、行く準備を済ませておく。それまで、ゆっくりと過ごすんだな・・・俺達も、出来る限り、バックアップするから安心してくれ。」
「おう。頼りにしてるぜ。」
さぁて・・・明日が楽しくなって来たぜ・・・
まぁ、ちょっぴり不安もあるが、なんとかしないとな・・・
「あ、そうだ。別の世界に行く前に、やり残したことはないか？」
「・・・いんや、今んトコ無い。」
これは、嘘である。
本当は『異端(バグ)の駆除が終わったから、今すぐ俺に報酬くれよ』と言

いたいのだが、この場合、カームとエリアルにお礼を言ってから、リンコ達にお礼をしに行った方がいいと、勝手に決め付けていたのだ。

「ま、どーせ戻ってくるだろ？なら、俺は二期になるまでの間、自分修業＋カーム達にお礼をしてくるさ」

「それも一つの手段か・・・なるほど。考えたな。・・・敦のことはまかせておけ。アイツは自分から悩みを言う事がなかったのだが・・・ようやく、学校でいじめられていた事を吐いたよ。まったく・・・こまっているなら言えばいいものを・・・」

「しゃあねぇよ。アイツは自分から意見を言うのが苦手なんだよ。」

「そうだな・・・きっと、前の敦なら何も言わなかっただろうな・・・アイツは、お前と出会って随分変わったな・・・この前なんて、キメラテックで負けかけたしな・・・」

「ははっ。俺も次も負けないように腕を磨くとするよ。」

ふふっとお互いに笑った
どうも、ロードとは気が合うようだ。
何かと共感できるところもあるし、何より、歳上だからって言って、何かと命令もしてこないし。
おっさんと違って、クールだし、話しやすい。

「さぁて・・・俺はお前を送る準備をしなくては・・・明日の午後、ここで待っていろ。」

そういって、ロードは闇の回廊的な物を開いて、どこかへ行ってし

まった
話が終わると、ライナがちょこちょこちらに歩いて来て、俺に話しかけた
『マスターさん！お話終わったー？』
「あぁ。丁度終わったよ。・・・あれ？おっさんは？」
先ほど、ライナが居た場所に、おっさんが転がっていたはずなのだが・・・
何故か居なくなっていた
『お兄ちゃんなら、さっき起きて何処か行っちゃったよー？』
「・・・・お兄ちゃん？」
おい待て。どう言う事だ？
おっさんがライナにお兄ちゃん呼ばわりされてるぞ？
「ライナ、どうしておっさんの事『お兄ちゃん』って言ってるんだ？」
『えっとね・・・この前あった時に「俺の事はお兄ちゃんって言ってくれ！」って言われたの。』
・・・おっさんの性癖が分からなくなってきた・・・
何？ロリコン？
この前は「俺は巨乳のお姉さんキャラの人の足に踏まれたい！」とか言ってたのに・・・
やばい・・・あの人がどう考えても変態にしか思えねぇ・・・

『？？？どうしたの？』

頭に？マークが出るように首をかしげているライナ・・・

やっぱ、普通に可愛いんだけど・・・

「いや・・・なんでもない」

そういって、俺は明日の準備のため、一度部屋に戻った

明日は、一期の最終回だし、ちゃんと見てから行かないとな・・・

二十三章　ＨＥＲＯは誰にでもいる。（後書き）

蒼痲「・・・で、俺が別の世界に行くフラグが立ったわけか・・・」

「ネタ切れだったけど、なんとかここまで行ったんだよ。むしろ、褒めてくれ。」

蒼痲「断る」

「ですよねー」

蒼痲「そういや、どうして最近更新できなかったんだ？」

「え？書いてたら寝落ちしてたりとか、書いてる途中にパソがフリーズしたりとか・・・色々あった。」

蒼痲「おいおい・・・」

「あ、感想や指摘、ダメ出しなどがあれば、いつでもどうぞ。」

蒼痲「感想の制限を解除したから、ユーザーじゃなくても、書き込めるようになったから。いつでも書き込んでくれ。」

「ではではー♪」

蒼痲「次のあとがきで会おうぜ。」

二十四章　誓いを胸に、異世界へ

爽やかな、土曜日の始まりー♪

今頃小学生や中学生は学校が無い事に喜びながら、今日の予定を立てている頃だろう。
私立の高校生は、今頃土曜講習という面倒な物に出ていて、ひぃひぃ勉強をしている頃だろう。
俺はそんな中、平和そーに目覚めた

「ふあぁぁぁぁ～～～」

大きなあくびと共に、起きた俺は、ゆっくりと辺りを見渡した
今日から、少しの間この部屋ともお別れだ。
そう考えると、帰ってきて、汚い部屋を見るのは正直嫌なので、昨日のうちに片づけておいた

「・・・よっと」

一度起き上がり、パジャマを脱いで、今日着る服を選んだ
出来る限り、軽装の方が、何かと小回りが利くので、ジーパンなどはやめて、適当に長くて動きやすいズボンを選んだ

『蒼痲、準備はできたのか？』

着替えている途中で、フレイム・ウイングマンが俺に話しかけてきた
幸い、ノースウェムコ達はまだ眠っているらしい。

いやー、昨日はめっちゃ騒がしかったなぁ・・・

精霊世界がどんな所かって聞いたら、皆揃って『生と死の飛び交う世界』とかいうんだもん・・・
めっちゃ怖かったし・・・

インフェルノウイングは闇の世界の方出身らしいから、暗黒界の連中にも知り合いが居るらしいし、ライナは精霊世界での記憶がないという事を聞かされたときはめっちゃ驚いた

だけど、一番驚いたのが、ヒーローシティとか、スカイスクレーパーとかのフィールド魔法が本当に実在するという事を聞いた時は一番驚いた

湿地草原とか、カエル系統のモンスター住んでそうだなぁ・・・
あ、でもイレカエル禁止ざまぁｗｗｗ

バッグを軽く持って、重さを測ってみた
こっちの世界にくるときに突っ込んだ不要物とか、この世界で買った遊戯王のパックとか・・・
お陰で少しばかり重い。

『・・・帰ってくるのだから、少しくらい置いて行ったらどうだ？』

「あ、それもありか。」

まぁ、異端（バグ）の駆除は終わったし、俺の自由に元の姿に戻れるようにもなったし、多分、これが終わったら元の世界に返されるだろう。
それまでに、やること全部やっとかないとな・・・

そういって、俺はいらない物をぽいぽいと机の上に放り投げた

ＰＳＰは・・・持ってたら壊れそうだから持っていかないっと・・・
ＤＳは・・・うーん・・・どうしよう・・・持っていかないと、リンコに会えないし、持って行って壊れたら困るし・・・
・・・・ちくしょう・・・断腸の思いだけど、置いて行くしかない・・・！！

「・・・ごめんなリンコ・・・」

そういって、俺はＤＳを机の中に入れた
一応バッグは軽くなったけど、何か大切な物を失ったかのようにはぁ～～～と深いため息をついた

『・・・ふっ、やはり君は変わっているな。蒼痲』

「・・・うっせ。」

そういって、俺はバッグを担いで自分の部屋から出た
そのまま階段を下りて、玄関にバッグを置いて、一度買い置きしておいたパンなどを取りにリビングに入った

机の上にはあんぱんやカレーパン等、様々なパンが買い置きされて会った
だけど、俺が買ったのはチョココロネとメロンパンが二つずつだったんだけど・・・

ふと、パンの横に置いてあった紙に目がいった
それをそっと手に取り、書かれている文字を読んだ

「・・・『蒼痲へ

おっさんはこの事の報告で忙しいから、当分会えそうにない。
ここにあるパンは、お前の門出を祝うような、物だと思ってくれて構わない。
当分会えないと思うけど、今度会ったらちゃんと約束を果たすよ。
またな。

おっさんより』・・・おっさんも気がきくじゃん。」

『蒼痲、まだ続きがあるぞ？』

「え？マジ？」

そういって、俺は続きを読んだ

「『ＰＳ
敦達の事は気にしなくていい。敦は二期になってから本格的に介入者になってもらうから。
何かあったら助けてやってくれ。
頼むぞ。先輩救世主。』・・・それだけ？」

なーんか物足りないので、紙を裏っ返しにして、裏面を見た
そこには、ＧＸの最終回みたいに敦とロードの絵が書いてあって、
その横に台詞が書いて・・・あるわけでもなく

普通に続きが書いてあった

「『ＰＳ（フェイズシフト）装甲って、響きがカッコイイよね。』
知るかよ！なんでいきなりフェイズシフト！？おまけにまだ続いてるし！！

『ＰＳ
ＰＳってくっつけるとめっちゃ楽しいｗｗｗ』知るかぁぁぁぁ！！！」

続きがあろうとなかろうと、俺はその場で髪をビリビリに引き裂いたビリィッ！！と凄い音が家に響き渡り、歪みねぇなと思いながらパンを全部手に持って玄関まで向かった

「ったく、無駄な時間とらせるなっつの」

そういいながらパンをバッグの中に突っ込む俺
後ろでフレイム・ウイングマンが少し面白そうに俺を見ていた

『でも、蒼痲もまんざらではないのだろう？』

「だ、誰があんなおっさんの事思うかよ！パン買って貰ったのは嬉しいけど、基本は厨二病患者じゃねぇか！！俺ぁアイツのことただの変態としか思ってねぇよ！！」

・・・・・ん？おかしいな・・・
今、明らかツンデレの言う台詞言ってね・・・・？
うわっ、自分で言っててキモくなった・・・

『そうか・・・そろそろ時間だ。急がなくていいのか？』

やべっ、もうすぐフェイトとなのはが会う頃じゃん！
やべぇよ！！急がねぇと！！！

「い、いってきまーす！！」

そういって、俺は家から出た
そういえば、いってきますなんて言ったのいつ以来だっけ・・・？
中学上がった頃にゃいってきますなんて一言も言わなかったっけな・・・
言っても、返してくれる相手が居ないんじゃ・・・ねぇ？

『・・・・いってらっしゃい』

「え・・・・・・！？」

鍵を取り出そうと、ポケットに手を突っ込んだ時だった
いきなり、ベランダの方から声をかけられた気がしたので、上を見上げるが、そこには誰も立っておらず、窓も閉まったままであった
だけど・・・この声は、リンコの声だと、俺の心が勝手に反応して、もしかしたら、リンコが俺に話しかけた・・・？と心で勝手に決め付けていたのだ
だけど、実際はそんなことはありえない。と、また勝手に決め付けて、俺は家の鍵を閉めてそのまま走り出した

だけど・・・やっぱり気になったため、走りながら一度振り返って家を見るが・・・
やはり、ベランダには誰も居なかった

「・・・やっぱか・・・」

残念そうにうなだれながらも、俺は目的地へと駆けて行った

「はぁ・・・・はぁ・・・・・！！」

遅刻ギリギリの時間に目覚めた高校生が学校に駆けて行くが如く、
俺は走っていた
まぁ、高校生なのは認めるけど、俺は遅刻ギリギリまで寝ないから。
ちなみに、姿は青年になっている。

いやー、でもさ。
海の方まで結構距離あるんだもん。
それにしても、結構走ってるのに、まだ走れるんだよねー
いやー、９歳の頃の自分と今の頃の自分って、やっぱり違うんだな
ーって改めて実感したぜ。

「おっ。見えた見えた・・・」

ようやく海が見えてきたので、一度荒くなった息を整え、ゆっくり
と歩き出した
いやー、こういう時って、タイミングとか必要になるし、慎重にい
かねぇとなぁ・・・

『フェイトちゃーん！！』

おぉ！聞こえたぞ！！
幼き頃の魔王さまの声が！！
・・・ということは、今ようやくフェイト達と合流した頃か・・・
なるほど。いいタイミングだ。

何事も無いかのように俺は近づき、そっとなのは達の居る橋の方に向かっている
物陰からそーっと覗き込むと、なのはとフェイトがお互い微笑んでいた
それを静かに見守るクロノとアルフとユーノ
やれやれ、まったくいいタイミングに来たもんだい。
・・・あれ？プレシアとアリシアが居ないぞ・・・？

まさか、先に移動したとか？
まぁ、どちらにせよ、物語通り進めゃどーでもいいや。

「蒼痲く・・・」

「ぎゃぁぁぁ

俺を見ていた

「なんであなたがこそこそしてるの？フェイト達に会いたいなら、行けばいいのに・・・」

「い、いや・・・なんつぅか、通りかかったらなのはの声がしたから・・・」

「・・・・あなたが蒼痲さん？」

そう言って、プレシアの横に居たフェイト似の少女が俺に話しかけたやべぇ・・・ほんとそっくりなんだけど・・・

「あぁ。俺が天城蒼痲だ。」

「ほんと！？あ、自己紹介が遅れました！私、アリシア・テスタロッサって言います！」

彼女を四字熟語で表すなら天真爛漫という言葉が一番似合うだろう。なんか、普通に可愛いんだけど・・・

「あ、あのっ！助けてくれてありがとうございます！」

そういって、頭を下げるアリシア

俺はそんな光景が信じられなくて、手をぶんぶんと横に振っていた

「い、いや！助けたって、あれは俺の目的があのゴミの駆除だっただけだ！た、ただその中で偶然・・・」

「それでも、助けてくれた事には変わりないでしょう？」

「うぐっ・・・」

俺は、女性から謝られる事は無い人間なんだよ！
初めて謝られたから、それでキョドってるだけなんだよ！
別に深い意味は無いからな！！

「私からも・・・家族を助けてくれて、ありがとう。」

そういって、深く頭を下げるプレシアさん
だ、だからこの前も言ったけど、貴方の身体はそんな事しちゃいけないんですってぇぇぇぇ！！

「・・・話は終わった？」

「はっ！？」

後ろからクロノとアルフとユーノが俺を見ている事に気づき、俺は振り返った
そこには、少し面白そうに笑うアルフと、やれやれと呆れているクロノの姿があった
ユーノはフェレットモードだから、何考えてるか分からない。
だが、突然クロノが俺に歩み寄って、右手を差し出してきた

「く、クロノ・・・お前・・・」

「本来、管理局と無関係だった君はかける言葉は無いんだが・・・
ただ、一つだけ・・・この世界の危機を、救ってくれてありがとう」

そういって、クロノは先ほどよりも高く右手をあげた

いい加減手を取って握手しろと言っているのか、また会おうと言う意味なのか、どういう意味なのかは俺には分からなかった
ただ、目の前の少年から、握手をねがわれたのだ。
なら、それに答えてやらねばならんだろう。

「・・・・おう。」

そういって、俺はクロノの手を取って握手をした

「あたしからも・・・フェイトを助けてくれてありがとう。」

そういって、アルフはハイタッチしろと言わんばかりに手をあげた
クロノも空気を読んで、手を離してくれた

「・・・あぁ。」

俺はアルフの手にハイタッチした
一瞬しか触れなかったが、暖かくて、柔らかいということが分かった

「フェイトも、あんたに言いたい事が残ってるんだ。行ってやってくれ」

そういって、アルフは橋の上で話をしている二人への道を開いてくれた
なのはとフェイトは、俺を待つように、こちらを見ていた

「やれやれ・・・散歩目的が台無しだぜ・・・」

そういって、俺はなのは達に近づいた
歩くにつれて、どんどん彼女達がどんな顔をしているか分かった

少し頬を赤らめていて、なんか、少し恥らっている感じで、友達になれて凄く嬉しい半面、少しだけ恥ずかしい気持ちがこみ上げてきたのだろう

彼女達の前まで辿り着くと、俺は静かに言った

「よう。元気だったか？」

「蒼麻・・・さんも・・・元気そうで何よりだよ・・・」

・・・なんか、さん付けは馴れないんだけど・・・

しゃあねぇなぁ・・・

静かに胸に手を当てて、俺は目を閉じた

突然、光が俺を包み込むと、俺は青年の姿から少年の姿となった

それに驚いているなのはとフェイト

「こっちのが、喋りやすいだろ？」

「あ・・・う、うん。」

子供の姿になった俺に驚きながらも、なのはとフェイトは俺に話しかけてくれた

「蒼麻君・・・困ってる時に助けてくれてありがとう。」

「よせやい。俺はなんもしてねぇよ。助言はしたけど、他はなーんもしてねぇんだしさ」

「それでも・・・ありがとう。」

そういって、手を差し伸べてきたなのは
俺も小さい手でなのはの手を取り、互いに見つめ合いながらも握手を交わした
この小さな手が・・・いずれ、エースオブエースと呼ばれる、大きな手となることに、俺は少し驚きながらも、なのはを見つめた
この澄んだ綺麗な瞳が、いずれ未来へ羽ばたく希望の翼を見極める物となると思うと、驚きが隠せない
こんなに小さな体が、いずれ大きな野望を打ち砕く存在になる・・・
そう考えても、やはり、驚きは隠せなかった
俺に見つめられて恥ずかしそうに顔を赤らめて俯くなのはに、少しドキっとしながら、俺は手を離した

「蒼痲・・・」

「フェイト・・・」

そういって、俺はなのはの隣に居るフェイトを見つめた
金色の長い髪が、太陽の光を浴びて、きらきらと輝いていた
この赤い瞳も、いずれはジェイル・スカリエッティと言う、無限の欲望を捕まえる物だと考えると、やはり驚いてしまう。
後十年後・・・彼女達の所属する、機動六課が生まれる
その中で、幾つもの挫折を知ることになるだろう。

だが、その中に、俺は少ししか関わる事が出来ない・・・
だけど、彼女達に少しでも覚えてもらえれば、俺は満足だった

「ごめんね・・・２０００円・・・まだ返せそうにないんだ・・・」

「え？２０００円？・・・あー、思い出した。ジュエルシードの。」

「うん・・・ごめんね。で、でも、必ず返すから・・・」

「・・・要らねぇ。」

「え・・・・？」

フェイトが悲しそうに俯いたので、俺は彼女が返そうとした２０００円を取り消そうとした

でも、ただ取り消すんじゃ面白くねぇし・・・

「もういいよ。んなもん。２０００円は無し。取り消し！だけど、一つだけ俺の願い事聞いてくれるか？」

「あ・・・・うん。」

そう言うと、俯いていたフェイトは俺を真剣そうに見つめた

や、やべぇ・・・普通に話しにくいんだけど・・・

「俺も、お前の友達になっていいか？」

「！？」

「いやー、生憎、俺にゃぁ友達が少なくてな。なんとなーく、そう思っただけ。それでもいいなら、２０００円はチャラ。ｏｋ？」

俺がそう言い終えると、俺は右手を差し出して、握手を求めた

フェイトは嬉しそうに俺を見つめると、言った

「・・・・うん！」

本当に嬉しそうに、俺の手をとってくれた
その目には少し涙が浮かんでいた
やれやれ・・・子供は涙もろいから困る・・・

『えっぐ・・・うえぇ・・・』

『大丈夫、アルフ？』

『フェイトがっ・・・フェイトがあんなに嬉しそうにしてるよぉ・・・っ・・・えっぐ・・・蒼痲にも・・・うっぐ・・・沢山迷惑かけたのに・・・蒼痲ぁ・・・ありがとぉ・・・うっぐ』

『・・・子供の成長というのは、早いものね・・・』

『？お母さん、どういう意味？』

『・・・その内分かるわ。・・・フェイト・・・蒼痲君・・・うっ・・・』

後ろの方で、アルフの泣いてる声と、クロノが落ち着いた雰囲気でアルフを宥めていると推測できた
その近くで、プレシアさんも若干涙ぐんで、アリシアがそれを分からなそうな顔で見つめているということも、簡単に思いついた

さて・・・フェイトにもなのはにも会えたし・・・
介入者（邪魔者）はとっとと消えるかね・・・

「すまないが・・・もう時間だ。」

「え？時間？」

え？何？もうなの？早くね？
つか、もうそんなに時間経ったわけ？
本編じゃもうちっと長かった記憶があるんだけど？

「あぁ・・・彼女達は本局で、裁判が行われるに行かなければならないんだ・・・」

「あー・・・そりゃそっか。」

・・・ん？ちょっと待て。
俺一応、ジュエルシード使ってクロノ脅してるんだけど？
これって、一応脅迫罪だよね・・・？

「あぁ。だけど気にする事はない。ほぼ確実に無罪が証明されている。君が戦ったあの存在・・・闇の存在と言ったか？あれの残党が洗いざらい全部喋ってくれたからな。プレシア・テスタロッサを操っていたのは自分達だと・・・だが、全て言い終わったと思ったら、全員消えてしまったよ・・・まるで、そこに何も居なかったかのように。」

「あー・・・・乙。」

・・・幻影（イリュージョン）の野郎・・・
手下にこっそり命令してやがったな・・・
「もしも自分が負けたら、今まであった事を話せ」って・・・
まぁ、俺の推測だけど、恐らく正しいだろう。

俺の後ろでフェイト達が自分の髪を結っていた紐をほどき始めた
そして、お互いにそれを交換し合い、嬉しそうに微笑んだ

「ありがとう・・・なのは」

「うん・・・・フェイトちゃん」

「きっと・・・また」

「うん・・・きっと、また・・・」

そういい、お互いに握っていた手を解き、お互いにもう一度微笑んだ
ほぅ・・・本編じゃこの後、アルフがなのはにユーノを渡すんだけど、こんな事があったのか・・・
なるほどなるほど・・・

「んっ」

「ありがとう、アルフさんも元気でね！」

「うん。色々ありがとね。なのは、ユーノ」

ふぅん。ここまでは本編と一緒か。
だけど、アルフの後ろにプレシアさんとアリシアを除けば、だけどな。

「それじゃぁ、僕も」

「クロノ君もまたね」

「あぁ。」

・・・やっぱり、ここまでは原作通りなんだよなぁ・・・
最終回のこの場に居る俺は、少しずつ心に何か温かい物が溢れだしてきた
なんつぅか・・・すげぇ、嬉しい

「蒼痲君。君には本当にお世話になったわね。」

「ん？いいえぇ、気にせんといてくだせぇ。俺はなんとなーくあの場に居て、なんとなーく、自由気ままに行動しただけでさぁ」

適当な喋り方で、プレシアさんの感謝の言葉に相槌をうった
やっぱり、俺は自由気ままに、その日の気分で行動した方が性に合うらしい

「それでも、蒼痲さんにはお世話になったんだもん！ありがとう！」

「ぬぉう！？」

そういって、俺に向かって抱きついてきたアリシア
ちょ、おま！？一体何をｂにゃおｄｂがｓどぁ！？

「ちょちょちょちょちょちょちょちょ！？！？！？！？」

もう何喋ってるのか分からねぇ！！何これ！？
めっちゃ嬉しい！！だけど、めっちゃ恥ずかしいんですけどぉぉぉぉぉぉ！！ちょ、誰か助けて！！

「ふにゃ～♪蒼痲さん、良い匂いがする～♪」

すりすりと頬ずりをするアリシア
って、ちょっとぉおおおおおおお！！？！？
ヤメテ！！俺のライフはゼロだよ！？
ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ☆！！！

「あ、アリシア！蒼痲困ってるよ！！」

珍しく、フェイトが怒鳴るようにアリシアを掴み、そのまま引きはがそうとした
若干顔を赤らめてるあたり、めっちゃ萌えるんだけど・・・

「やだ～～～！蒼痲さんと一緒に居たい～～～！！！」

「ちょ、放して！！俺を解放して！！見た目これ（少年）でも、高校生だからぁぁぁぁぁぁ！！！ほんまあかんて！！あかんとです！！！」

もう何喋ってるのか分からない！
誰でもいいから、俺専用の翻訳機作ってくれ！！！

「こら、二人とも。」

そういって、フェイトとアリシアを引き剥がすプレシアさん
良かったぁ・・・真面目な人が居てくれて助かったわ～～～

「蒼痲君困ってるでしょ？だから、困らないようにやりなさい。ね？」

「全っ然普通じゃなかったちくしょぉおおおおおおおおおおおお！！！」

こら！そこのテスタロッサ姉妹！！普通にうん！って言ってうなづくな！

なのはもムッとした顔で俺を見ないで！！

俺も困るんだけど！！めっちゃ困るんですけど！！

「やれやれ・・・本局に行くというのに、賑やかだな・・・」

「おいクロノゴルァ！！見てねぇで助けやがれ！！いや、助けて下さい！お願いします！！」

「はぁ・・・・」

ため息ついてねぇで助けろや！！このデコ助野郎！！

黄金の鉄の塊で出来たナイトさんにぶん殴ってもらうぞ！！！

「もうヤダ・・・帰りたい・・・・；；」

そう呟いても、誰の耳にも届かず、ただ、この場に居る魔法少女達と、大魔導士と、使い魔に呆れていた俺が居た・・・

で、それから3分後。

なんとか騒ぎは収まり、ようやくクロノが魔法陣を張って、お別れの時がやってきた

だが・・・

「やだー！！蒼痲さんも一緒がいいーーー！！！」

「・・・どういうことなの・・・」

何故かアリシアが離れてくれなくて、ぜーんぜん話が進まない訳ですよ。

終いには泣きだしてしまうことになっちゃうし・・・

もうヤダ・・・・

「アリシア！蒼痲君だって、帰る家があるの。我がまま言っちゃ駄目よ」

「でもぉ～～～～！！」

「アリシア！蒼痲だって、アリシアがくっ付いてたんじゃ、動けないよ！」

テスタロッサ親子も困ってるし、なのはに至っては、じーーーーっと俺に冷たい目線を送り続けてるし・・・

もう嫌・・・

「あー・・・アリシア？」

「ぐすっ・・・・何・・・？」

上目遣いで俺を見るアリシアに、一瞬ドキッとするが、俺は静かに胸に手を当てて静かに目をつぶった

そして、光が俺を包み込み、俺は少年から青年へと、姿を変えた

「俺さ。君達とは一緒に行けないんだ・・・ほら。」

そういって、俺はアリシアの頭に右手を乗せた
すると、何かが砕ける音がして、その場にアリシアが何かを消耗したかのようにふらついた

「俺の右手はさ・・・魔力その物を打ち消しちゃうんだ。だから、俺が魔法陣に入って、魔法陣に触れた瞬間に、魔法陣は消えちゃうんだ。これじゃ、転送もできないだろ？」

「で、でもぉ・・・」

ふらついた足取りで俺に抱きついてきたアリシア
その目には、まだ涙が浮かんでいた

「俺も、この後、ちょいと仕事があってね・・・別の場所に旅に出なくちゃいけないんだ。」

「た・・・び・・・？」

「あぁ・・・大切な人を、取り戻しにね。」

そういって、俺はバッグの中から、青い帽子を取りだした
これは、エリアルの被っていた帽子だ。
俺が戦っている所を見ていたのだから、誰が俺を守ってくれていたのか、プレシアさん達も分かったようだ
俺は・・・これから、彼女（エリアル）を探しにいかなければならない・・・と

「ぐすっ・・・それって・・・蒼痲さんの恋人・・・？」

「こ、恋・・・！？」

ちょ、そんなカウンターで返されるとめっちゃ困るんだけど！？
なんて説明したらいいの！？俺とエリアルの関係！？
えぇっと・・・大切な人以上知り合い未満・・・・？
答えになってねぇ！！！

「いや・・・恋人ってわけじゃないんだけど・・・」

「ほんと！？」

そういうと、アリシアは心の底から喜ぶように俺を見上げた
・・・いや、何この嫌ーな予感しかしないフラグ・・・？
フェイトとなのはもなんかほっとしてるし・・・

「良かったぁ・・・」

そういって、少しふらふらになりながら後ろに後退し始めたアリシア
その目は少し疲れたかのように閉じかけていた
後ろに倒れそうになったので、俺は彼女を支えるように受け止めた

「蒼痲・・・・さん・・・・？なら、約束・・・」

疲れ切った顔で、アリシアは俺に小指を立てた右手を見せた

「また・・・・会おうね・・・？」

「・・・・・・あぁ。約束だ」

不思議と、身体が勝手に動いてしまい、勝手に約束をしてしまった
・・・あーぁ・・・これが終わったらすぐに元の世界に帰ろうと思
ったんだけど・・・
約束しちまったから、帰るのは当分延長かねぇ・・・

「約束・・・・だよ・・・・？」

そう言い残し、アリシアは目をつぶり、静かに寝息を立て始めた
可愛い寝顔だ・・・
アリシアをお姫様だっこで魔法陣から出たプレシアさんにそっと手
渡した

「・・・・気持ちよさそうに寝てるわ・・・」

「そうですね・・・」

すぅすぅと眠るアリシアに笑みを浮かべながら、俺は彼女から離れた
プレシアさんも空気を読んでくれて、静かに魔法陣に入っていった

「またね・・・なのは、蒼痲・・・」

「・・・あぁ。またな。」

「フェイトちゃんも！元気でね！！」

先ほどあった事が嘘だったかのように、魔法陣の中に居るフェイト
達が涙を浮かべ、別れを惜しんでいる
やれやれ・・・ホントにさっきのが嘘みたいだぜ

「蒼痲・・・今度会ったら、剣術とか、教えてくれる・・・・？」

ふと目があったフェイトが、俺に向かい口を開いた

「・・・女の子がんなこと言うもんじゃありません。・・・・我流で良ければ教えてやるよ」

「うん・・・ありがとう・・・またね」

そう言い残し、フェイト達は消えて行った・・・

残された俺達は、一度向き合い、静かに話し合った

「これから・・・蒼痲君も、どこか行っちゃうんだよね・・・・？」

「あぁ。俺も忙しい身だからな。学校に、仕事、バイトに家事、洗濯・・・やることぁ沢山あるんだ。・・・子供の頃にやり残したことは沢山ある。だから、今のうちに悔いが残らないように楽しみな。」

そういって、俺は振り返って、歩き出した

だけど、なのはが「待って！」と叫ぶように言ったので、俺はその場に立ち止まった

「蒼痲君・・・また、会おうね。」

「・・・・おうさ。」

そういって、俺はまた歩き出した。

後ろで「またねー！」って言いながら手を振っているなのはが居た

俺は右手を軽く上げ、ぶらぶらと手を振って返した

さぁて・・・・
俺もそろそろ行こうかねぇ・・・・

『しょーねん。準備できたぞー』

『おっ、ナイスタイミング。丁度終わったトコだ。』

歩きながら念波で話し合う俺達
ロードの方も準備が終わったらしいし、俺も行こうかねぇ・・・・

『さぁてしょーねん。一つ質問だ。緑の箱と、青の箱。開けるならどっちだ？』

『緑と青の箱？うーん・・・緑かな。青も捨てがたいけど、なんとなーく、風っぽいし、そっちのが好きかなぁー・・・・』

『んじゃ緑を選んだ貴方を、異世界までご案な～～い』

『は？何言って・・・・』

最後まで話そうとした瞬間だった
俺が曲がり角を曲がった瞬間、俺の視界が真っ黒になって、突然浮遊感に襲われた
あれ・・・？おっかしいな・・・・？
なんか、下がめっちゃすーすーすんだけど・・・？

つか、風がめっちゃ当たってるんだけど・・・

『それじゃ、いってらっしゃーい』

「ぎゃ、ギャアアア

二十五章　何ここ！？え、異世界？んなもん分かってるわぁ！異世界のどこだ？

ぎゃあああああ！！
どう言う事なの！？
なんで俺落ちてるの！？
なんで！？このままじゃ、地面に落ちてミンチになるんだけど！？

「ぐぅっ・・・！？」

まーた俺の右手に重さを感じたので、よく見ると、やっぱりデュエルディスクが「おい、早くしろよ」みたいな感じで展開していた
うわーぉ、いっつもの事だけど、コイツうぜぇ・・・
いっつも死にそうになったり、ピンチの時ばっかに現れやがって・・・
・

ま、いいや。

「俺のターーーン！！」

うおぉおおおおおおお！！なんのデッキか分からないけど、取りあえず、飛行能力のある奴引いてくれぇぇぇぇぇぇ！！
っしゃぁ！！引いたぁぁぁぁ！！

「俺はソニック・バードを召喚！！」

「ちょいやっさー！！！マスターさん！背中に乗ってくだせぇ！！」

現れるなり、背中のブースターが凄い勢いで鳴り始めて、ソニック・バードも今か今かと、俺を背中に乗せようと必死にこちらに向かっ

て来てくれた

「っしゃあ！！ソニック・バードありがどぉおおおおお！！！？」

「ありがとう、助かった」って言おうとしたんだけど、背中に乗った瞬間、とんでもないスピードで空を飛ぶソニック・バードに驚いたやばい！！舌噛みそう！！

「マスターさん！！全速力で行きやすから、死ぬ気で掴まってくだせぇ！！」

「え！？どういうことなの！？」

「後ろでさぁ！！！」

後ろ・・・？

俺が後ろを振り返ると・・・・

なんか、暗黒プテラとか、恐竜族のモンスターがめっちゃ追いかけてきてんだけど！？

怖っ！？

「そ、ソニック・バード！！全速前進ＤＡ☆」

「了解でさぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

バビュウウウウウウウウウウン！！！という凄い効果音が付きそうなぐらい速いスピードで空を飛ぶ、ソニック・バード

だが、一体どこへ向かっているのだろう・・・？

それが、不思議で仕方なかった

ようやくプテラとかが追うのを止めて、辺り一帯にモンスターの気配がなくなり、ソニック・バードが少しだけ速度を落とした時に、俺はソニック・バードに話しかけた

「な、なぁ？ここって、異世界なんだよな？それも・・・遊戯王の精霊世界・・・」

「そうでさぁ・・・ここは、主に恐竜族モンスター達の蔓延るモンスターゾーンでさぁ・・・あ、モンスターゾーンを知らないでやんすね？ここは、大きく分けて5つの世界に別れてるんでさぁ。一つは、人の形をしたモンスターのいる、ヒューマンゾーン。二つ目は、モンスターが蔓延る世界、モンスターゾーン。三つめが、天使族達が暮らす、ライトゾーン。最後に、悪魔族達が居る、ブラックゾーンッスかね・・・ちなみに、オイラはヒューマンゾーンで生まれたモンスターッス。」

「へ、へぇー・・・」

ふと、下を見ると、暗黒ヴェロキが暗黒ステゴを群れで襲っていた力なく倒れる暗黒ステゴを、寄ってたかって、その肉を食い荒らしていた
その光景は、まさに弱肉強食・・・
弱き者は、強い者に虐げられる世界・・・

うぇっ・・・・吐き気がしてきた・・・

自分も、何度も命を奪っているが、それは虫等の小さな生き物ばかり・・・
目の前で、自分よりも大きな存在が寄ってたかって、餌にされている所を目撃した今の気分は・・・正直、最悪だった

気持ち悪い・・・
これが・・・命を賭けている世界・・・
一秒でも隙を見せたら、その場でガブリと食われそうだった・・・

「マスターさん？聞いてやすか？」

「あ、ご、ごめん・・・もう一度頼む」

「もう・・・ちゃんと聞いてくだせぇ・・・ここ、モンスターゾーンはヒューマンゾーンに二番目に近い場所でさぁ・・・良かったッスねぇ。案外カームちゃん達簡単に見つかりやすよぉ～？」

「そ、そうなのか？」

「えぇ。カームちゃんの住んでいる、ミストバレー湿地帯は、ヒューマンゾーンと、モンスターゾーンの近くにあるらしいんでさぁ。エリアルちゃんは、どこに住んでるか教えてくれませんでしたがねぇ・・・」

なるほど・・・
あ、そういえば、この前の変な空間で見たあの景色の中で、悪魔族と人間達が戦ってる映像があったよな・・・？
悪魔族って、何しようとしてんだろうなぁ・・・

「あ、ちなみにこの前、この世界で大きな争いごとがあったらしいッスね・・・まぁ、どーせまた悪魔族が人間世界に侵入してきたんでしょうねぇ・・・」

「は？それどういう事？」

「簡単でさぁ。悪魔族出身のインフェルノウイングさんに聞いたんですが、悪魔族の7割は、地上に魔の手を伸ばしたいらしいんスよ・・・なんか、ブラックゾーンで有名になりたいからだとか・・・」

「意味分かんねぇ・・・まぁいいや・・・で、俺達の向かってるのがミストバレー湿地帯ってのは分かった。でも、そこまで大体何日かかる？」

「あー・・・それはワイにも分からんとです。すいません・・・」

「あ、気にすんなって・・・」

よく見ると、ソニック・バードが少し疲れたかのようにぜぇぜぇと息を吐いていた

どうやら、本当に全速前進してくれたらしい

「・・・ソニック・バード。降ろしてくれ。」

「え！？そんなにワテの背中って乗り心地悪いんスか！？これでも、毛並みには自身があったんですが！？」

「い、いや・・・そういうわけじゃなくさ・・・お前、疲れてんじゃん。少し休もうぜ？それに、飛べるのはお前だけじゃないだろ？」

「そうでやんすけど・・・！？マスターさん！掴まってくだせぇ！！」

突然ソニック・バードが怒鳴ると、俺はそれと同時に体勢を低くして、ソニック・バードに掴まった

すると突然、俺達が先ほどいた場所に大きな火球が向かっていた
それは真っ黒な黒い球が、とても早いスピードで俺達に向かって放たれたのだ

「う、うそぉ・・・・・・!?」

俺は、飛んできた方を見ると、黒く煌めく身体に、鋭く尖った爪・・・
邪悪なオーラを身に纏っている、紅い瞳を持った竜だった
身体は少し傷ついていて、まるで前に、何か大きな存在と戦って負傷したかのように、傷ができていた

身体はとても大きく、ソニック・バードを軽々と越える大きさ・・・
人を踏みつぶすには十分な大きさ・・・

そこには・・・・

「真紅眼の黒竜(レッドアイズブラックドラゴン)・・・・!?」

黒き身体に、鋭く俺を睨みつける瞳が、俺達を映し出していた

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

まるで怒り狂ってるかのように大きな叫び声を上げるレッドアイズ
それと同時に、口に黒い炎の塊が溜まっていた
まずい!!黒炎弾だ!!

「そ、ソニック・バード、回避!!!」

「む、無理でさぁ!!速すぎます!!」

気がつくと、レッドアイズは黒炎弾を放っていて、その黒く禍々しい炎は俺達の方に向かって放たれていた
こうなったら・・・やるしかねぇ！！

そう思った俺は、ソニック・バードの背中を踏み台に、一気に青い空を跳んだ
そして、こちらに向かっている黒炎弾に向かい、拳を構えた

これは、命と命を賭けた戦いだ・・・！！
一瞬の隙が死へと繋がる・・・！！

頼む・・・！！“ありとあらゆる異端を打ち消す力”・・・！！
黒炎弾を・・・・打ち消してくれ！！！

「うおぉおおおおおおおおおおお！！！」

そのまま、祈るように拳を突き出した俺は、それと同時に目をつぶった
頼む・・・俺は、ここで死んでらんねぇんだ・・・！！

ドゴォオオオオオン！！と、凄い音が鳴り響き、俺は静かに目を開けた・・・
目の前には、羽を羽ばたかせ、空を飛んでいるレッドアイズ・・・
そして、空一杯に広がる、青い空が目に映った
先ほどの黒炎弾は、なんとか打ち消す事が出来たようだ・・・

だけど、俺は重力に逆らう事が出来ず、そのまま地面に向かって落

下を始めた

こうなったら・・・ストライクで迎え撃つしかねぇ！！

だけど・・・あれ・・・？

なんでだ・・・・？

身体に・・・・力が・・・入ら・・・・ない？

右手に装着されているデュエルディスクが、物すごく重く感じた

まるで、片腕だけにダンベルを３つ持ったかのような感覚・・・

凄く・・・・重い・・・・

「マスターさぁぁぁぁぁぁん！！！」

ボスッ！！！と何かに落ちた感覚が俺に伝わった

俺の下に、温かい羽毛を感じる・・・

あ・・・ソニック・バードか・・・

「大丈夫ですかい！？つ、次が来ますよ！？」

「分かってる・・・けど・・・身体に力が・・・」

「え！？」

とりあえず・・・このままじゃ・・・確実に俺達は死ぬ・・・！！

それは、なんとしても避けなければ・・・！！

俺は、手札を確認し、一度拳を握った

これは決闘（デュエル）ではない・・・

命と命を賭けた戦いだ・・・

なら、ルールは一つ・・・・

“どちらが死んで、どちらが生きるか”だけ・・・

なら、こっちもとことんやってやる・・・！！！

「俺は・・・レッド・デーモンズ・ドラゴンを召喚！！！」

エクストラデッキから、レッド・デーモンズ・ドラゴンを取り出し、俺のデュエルディスクに乗せ、召喚した

俺とソニック・バードの横に、真っ赤な紅蓮の炎を纏ったドラゴン・・・

レッド・デーモンズ・ドラゴンが飛翔した

その勇ましい姿を見ると同時に、俺は静かに目を瞑った・・・

頼む・・・起きた時は、ヒューマンゾーンに居ますように、と密かに願いながら・・・

俺は静かに眠りについた・・・

目を瞑る少し前に、遠くの方から何か巨大な鳥がこちらに向かってきたのが見えたけど・・・

恐らく、レッドアイズが呼んだ飛竜かもしれない・・・

俺は、そのまま深い眠りについた・・・

『それは本当か？この者が・・・・』

『うん・・・お姉ちゃんが言ってたもん』

・・・いってぇ・・・

なんか知らねぇけど、体中めっちゃ痛ぇ・・・

ジャラッ・・・・

あれ・・・？なんだぁ？今の鎖みたいな音・・・

つか・・・なんで動けねぇんだ・・・？

「ん・・・・んぁ・・・？」

ゆっくりと意識が覚醒していく・・・

ぼやけた視界に移ったのは、鉄檻のような物に、俺が閉じ込められている事・・・

それだけだった

「・・・ようやく目覚めたか」

「ん・・・・まだ寝る・・・」

そういって、俺はもう一度目を閉じた

それを見て、イラッときたのか、何かが俺に当たった音がした

それと同時に、俺の頭に電流にも似た痛みが走った

「いってぇな！！何しやがるこのクソガキがぁぁぁぁぁ！！！」

思いっきり不機嫌な状態で飛びあがった俺

しかし、何故か俺の動きは制限され、ピンッ！！と、鎖が俺を繋いでいた

「・・・・・・は？」

え・・・？何これ・・・？なんで俺・・・・

鎖で繋がれてんの・・・・？

「いいか？今から言う質問に答えろ。答えなければ、お前の命は無い。まず一つ目・・・どうやってここまで来た？ここの近くにはミストバレーや、氷結界の者たちが居るはずだ。どうして、氷結界にも、ミストバレーにも属していない、普通の人間が居るのだ？」

開口一番、そんな事を言い出したフードを被った人物・・・

声からして、男だが、今はそれどころではない・・・

俺は今、囚われている身なのだ。

辺りをある程度見回し、何かないか探す・・・

だが、俺のバッグが何故か無くなっている事に気づき、辺りをすぐに見渡した

あそこには、沢山のカード達が入っているのだ

その中には、ノースウェムコや、ライナといったカードも入っており、それを失くしてしまったとなっては、精霊と話せる者の名折れだ

「・・・・お前の探し物はこれか？」

「！？」

フードを被った男が、俺のバッグを乱暴に鉄檻の近くまで投げた
それを見た俺は、まるで怒り狂ったかのように、前に前進した
だが、鎖が邪魔をして、檻まで届く事はなかった

「てめぇ・・・ライナ達になんかしてみろ・・・その顔、思いっきりぶん殴って、二度と人前に出れないようにしてやるからな・・・！！」

「ふん。そんなことはせん。我々は、悪魔族のように非道な事はしない。・・・話が逸れたな。もう一度問う。どうやってここに来た？」

「んな事ぁどーでもいい！！ソニック・バードはどうなった！？ライナ達に手ぇ出してねぇだろぉな！？」

「・・・・お前は、自分の置かれている状況が分からないのか？」

そう言い放つと、男は、何やら杖のような物を取り出して、その杖を俺のバッグに向けた
すると、杖に緑色の球体が溜まり始め、今まさに、俺のバッグに放とうとしていた

「やめろ！！そこには、俺の大切な人達が入ってるんだ！！やるんなら俺にしやがれ！！」

「・・・自分が牢の中に囚われているのに、他人の心配か？随分と余裕なのだな」

「知るか！！俺の事ぁいい！！俺なんて死んでも誰も悲しまない存在が消えようと、俺は構わない！！でもな！そこに居る、俺の大切な人達は、消えたら悲しむ人が居るんだよ！！」

「・・・お前は面白い事を言うのだな。」

そう言うと、男は杖を降ろし、攻撃を中止した
だが、状況が不利なのは変わらない・・・
ここは、大人しくコイツ（男）の言う事を聞いた方がよさそうだ
まだ、打開策が無い訳ではない・・・
いざとなれば、子供の姿に戻って、アイツに先制攻撃をすればいい。
そんな甘い事を考えながら、俺はゆっくりとその場に座った

「・・・さっさと答えろ」

「・・・どうやってきたかは知らねぇ。いきなり変な空間から落ちてこちたら、空から落ちてた。」

「ではもう一つ問う。お前は、カードの精霊を知っているな？という事は・・・リアルワールドから来たのか？」

「・・・リアルワールドが一体なんなのかは知らねぇ。けど、別の世界から来たのは確かだ」

次々と問われる質問に、冷静に答える俺
男は、少し興味深そうに質問を続けた

「では、最後に一つ・・・何のために来た？」

・・・・なんのため・・・・？

そんなもの決まってる。

「大切な人を・・・助けに来たんだ。カードだけを残して、何処かへ消えてしまった、精霊を助けに来たんだ」

「だが、その者がお前が来るのを望んでいなかったらどうするのだ？」

「・・・その時は、カードを渡して消えるさ・・・俺の目的は、ただ一つ。大切な人に・・・会いに来たんだ」

「・・・・そうか。・・・・・・・すまなかったな」

突然、男が謝り、俺の手脚を拘束していた鎖が突然、バキンッ！！

と破壊された

身体に自由が戻ると同時に、男は鍵を取り出して、牢を開けてくれた

「・・・・どう言う事だ？」

殺気を込めた目で、ギラリと男を睨んだ

だが、男はひるむことなく、俺に言い放った

コイツ・・・・かなりの強者（ツワモノ）だ・・・！！

「すまなかったな。天城蒼痲よ・・・」

突然、フードを脱ぎ始めた男は、その顔を露わにした

「なっ！？」

「私の名は、ウィンダール・・・・“ここ”では賢者と呼ばれている」

緑色の髪をした男が、その場に立っていた
この顔、そして、あの杖を見て俺は思い出した・・・

コイツは、ガスタの賢者　ウィンダール・・・
“ガスタ”のモンスターの一人だ・・・・

確か、公式の方じゃ、ウィンダの父親って設定なんだよな・・・

「おとーさーん！話終わったー？」

俺が牢から出て、ウィンダールの顔をじっと見つめていた時に、女の子がウィンダールの事を「お父さん」と呼んでいた
その女の子は、ヒョッコリ入口の方から現れて、こちらを見ていた
どうやら、俺達の話を聞いていたようだ

「ウィンダ・・・先に帰っていろと言っただろう？」

「ぶー！お姉ちゃんだって一緒に聞いてたんだから、なんか言ってよー！・・・あれ？お姉ちゃん？」

入口付近をキョロキョロと、誰かを探すように首を振る女の子・・・
もう、完璧に確信した・・・
ここは、ガスタの住んでいるミストバレー湿地帯・・・

そして、俺はそこの、ガスタ達の住んでいる村のような場所に居るのだ

「カームまで一緒に居たのか？まったく・・・困った娘達だ・・・」

「！？お、おいウィンダール！！・・・さん。」

“さん”は要らん。ウィンダールと呼んでくれて構わない」

「んじゃ、ウィンダール！！い、今“カーム”って言ったよな！？それって、ガスタの静寂　カームの事だよな！？」

俺が詰め寄る形でウィンダールへと近づいた

すると、ウィンダールとウィンダは驚いたかのように一度顔を引きつらせ、ウィンダールは一度何かを溜めるかのように息を吸った

「・・・あぁ。合っている。・・・それに、私も彼女から色々聞いている。君が・・・彼女のカードを持っていることも・・・」

「え・・・・！？」

「もう！！お父さん！！そんな事はいいから、カームお姉ちゃんの事追わせてあげなよ！あ、自己紹介が遅れました！ガスタの巫女ウィンダです！」

天真爛漫な笑みを浮かべ、俺に話しかけてくれたウィンダ

やっべ・・・可愛い・・・

つか、見た目１４歳くらいなのに、その身体は反則だろ・・・・！？

「あ、あぁ！！と、とりあえず、どこに行ったか分かるか！？」

急いでバッグを背負い、出入り口かと思われる場所に駆けた

すると、背中越しに、ウィンダが俺に「そのまま真っ直ぐ行ってー！」と大きな声で言ってくれた

「分かったー！！」と叫ぶような声を上げて、そのまま俺はカームが走り去ったと思われる場所まで駆けて行った

頼む・・・！！追いついてくれ・・・！！

二十五章　何ここ！？え、異世界？んなもん分かってるわぁ！異世界のどこだ？

「さぁて、異世界編が始まったばっかりだと言うのですが・・・」

蒼痲「カームぅぅぅぅぅぅぅ！！！どこだぁあああああああああ！！！」

「・・・この通り、主人公がもう何をしているのか分からない状態になっています」

蒼痲「どこだあああああああああああああああああああああ！！！」

「うっせぇよ！！ちゃんと後書き位静かにしろや！！」

蒼痲「知るか！！今はカームの方が大切なんだよ！！カァァァァムウウウウウ！！！」

「・・・・感想、駄目だし、ご指摘などがございましたら、お気軽にどうぞ（若干引き気味）」

二十六章　すっげぇ嬉しい時って、何喋っていいか分からないよね

ウィンダに言われた方へと駆けていくと、ウィンダールと一緒のフードを被った人が、俺の前を走っていた

走ってるから、揺れて見え隠れするその緑色の髪と、段々近づくに連れて、その人が女性だと言う事が分かった

間違いない・・・！！

カームだ！！

「お、おい！待ってくれって！！」

「・・・・・！！」

突然、カーム（と思われる人物）がその場で高く跳び、何かを跳び越えるように遠くへ跳んだ

いきなり、なんで跳んでんだ？みたいな事を考えていたら

踏み込んだ右足がズボッ！！と下に沈んだ

「うぉおおおおおおお！！？？」

そのまま勢い余って前に突っ込みそうになり、左足を前に出して踏み込んだ

だが・・・・

またしても俺の足が何かにはまった

「こ、これって泥！？」

そうか！！確か、湿地帯だから、辺りに鳥が住みやすいようになっ

てんのか！！
だから泥が！！あるんだ！なるほどなるほど・・・・ってアホかぁぁぁぁぁぁ！！
気がつくと、カーム（と思われる人物）が地面に着地すると、一度ちらっと俺の方を振り返り、そのまままた駆けて行った
一瞬見えた頬は、少し赤く染まっていたように見えた
つか、女性の割にめっちゃ速いんだけど！！あり得ないくらい速くて困る！！
くっそぅ！！なんでこんなトコに泥があるんだチクショウ！！

「まだまだぁぁぁぁぁ！！」

足を思いっきり引きぬいて、そのまま前へ前進した
だが、進むたびに足は深く沈み、引き抜くために大きなスタミナを使う・・・
やべぇ・・・正直足がとんでもなく疲れてきた・・・
でも・・・！！俺はカームに会わなくちゃいけないんだ・・・！！

「こんなとこで・・・止まってられるかぁぁぁぁあああああああああ！！」

そう叫んで、俺はもう一度前進を始めた
こんなところで・・・！！諦めてたまるかぁぁぁぁ！！！

（・・・・何をしてるんだろう・・・・私・・・・）

必死に走りながらそんな事を考える私・・・

今日は、精霊世界に戻ってから、一ヶ月が経過したある日のことだった

ミストバレーとガスタの間にレッドアイズが現れたから、お父さんが様子見に行って・・・

そしたら、人が戦ってて・・・

それが・・・・マスターだったなんて・・・・・

（・・・なんで・・・こんな所に・・・）

段々、自分の身体に違和感があったのには気づいていた

どんどん身体が重くなって、夜も寝れない日が続いた・・・

苦しくて・・・虚しくて・・・それでも、私の隣には、大切な人は居なかった・・・

でも・・・久しぶりに聞いた声は壁越しに声を聞いただけ・・・

けど・・・

『知るか！！俺の事ぁいい！！俺なんて死んでも誰も悲しまない存在が消えようと、俺は構わない！！でもな！そこに居る、俺の大切な人達は、消えたら悲しむ人が居るんだよ！！』

聞き覚えのある声が、何かを訴えて居た・・・

ウィンダに呼ばれて来たと言うのに・・・突然の事で驚いた私は、壁に耳を当てて、話を聞いていた

『では、最後に一つ・・・何のために来た？』

『大切な人を・・・助けに来たんだ。カードだけを残して、何処かへ消えてしまった、精霊を助けに来たんだ』

この言葉を聞いた時、一瞬胸がドキッと大きく高鳴った
そして・・・嬉しくて涙が零れた・・・

『だが、その者がお前が来るのを望んでいなかったらどうするのだ？』

お父さんが、非情にも厳しい事を言い放った
私は・・・マスターが来る事を、心の中でずっと待っていた・・・
だけど、それはあり得ないこと・・・と、勝手に決め付けて
心の中にぽっかり空いた穴を必死に隠すように毎日を過ごしていた
だけど・・・やはり・・・会いたい・・・
会って・・・言いたい・・・
会って・・・伝えたい・・・
「私は・・・マスターに会えてよかったです」と・・・

『・・・その時は、カードを渡して消えるさ・・・俺の目的は、ただ一つ。大切な人に・・・会いに来たんだ』

それを聞いた瞬間、恥ずかしさのあまり、居ても立っても居られなくなって、牢の入り口ではなく、外の方へ駆けて行った
どんなに微笑みかけても・・・話しかけても・・・触れようとしても・・・

私の声も・・・手も・・・彼に届く事は無かった・・・
この世界に戻る時に・・・少し話せただけで、私は満足していた・・・
ずっと・・・話したかった・・・もっと、一緒に居たかった・・・
でも・・・身体が勝手に引っ張られて・・・無理矢理こちらの世界に連れて来られるように辿りついた・・・

（は、恥ずかしい・・・）

心の中で、密かに思っていた人が、突然“大切な人”と言ってくれた・・・
それだけで、心の中に開いた穴が、突然埋まって・・・
それに気づくと同時に顔が赤くなって・・・恥ずかしくなって・・・
マスターから逃げるように走り出していた

顔・・・見られたくないのに・・・
今、凄く嬉しくて・・・涙が出そうなのに・・・そんな顔・・・マスターに見られたくないのに・・・！！

そう思い、全力でマスターから逃げた・・・・
何故か・・・マスターと会いたくなかったから・・・
何故か・・・マスターの隣に居るのが怖いから・・・

「ぬぉおおお！！！っしゃぁあ！！抜けたぁぁぁぁ」

ようやく泥の中から足を抜いて、地面に足がつくと、めっちゃ安心した

チクショウ・・・この泥絶対忍者だろ・・・汚いな流石忍者汚い・・・

そして、俺の足も汚いっと・・・

「・・・はぁ～～～」

大きくため息をついて、一度その場に座り込んで、靴を履き換えたうわーぉ・・・靴下までとんでもねぇことに・・・

あーぁ、ズボンも換え持ってきといて良かったぁ～

がさごそとバッグの中に手を突っ込んで、袋の中に入れたズボンやら靴を取りだした

一度汚れたズボンや靴を脱いで、新しい服を着て、そのまま一度伸びをして、冷静に考えた

・・・第一の敗因は、まずここが湿地帯である事を忘れていた俺のミス

第二の敗因は、カーム（と思われる人物）に夢中に会えると思って、テンションを上げ過ぎて冷静になれなかった俺の馬鹿

第三の敗因は、この泥道で無駄に時間を食った俺のアホ。潔く後ろに下がって遠回りした方がよっぽど速かったぜチクショウ

全部改善点があるので、とりあえず、今度はこんなミスが二度と起こらないようにしないよう努力しないとな・・・

「・・・・待ってろよ、カーム・・・・」
そう小さく呟くと、俺はもう一度走り出した
今度こそ、大切な人に会うために・・・・！！

「・・・・・・・！！」
今度は、冷静にカーム（と思われる人物）を追う事にした
つっても、さっきの泥のせいでめっちゃ時間食っちったから、どうすりゃいいんだろうねぇ・・・・
ほんと、どこ行ったんだ・・・？

「・・・・・！？」

「あっ・・・・」

上の方から気配があったので、上を向くと、こちらを見降ろしている影があった
樹齢を軽く１００年超えたであろう大きな木の上から、誰かが俺を見降ろしていた
曇っていた空が突然晴れて、日の光が丁度その影を照らした時、一陣の影が吹いた
その風が、影のフードを外し・・・日の光がピッタリその子を照らした

「っ！？」

「カーム・・・・・・？」

その綺麗な瞳は、薄い緑色に輝いていて・・・
少し長い髪は、吹き抜けた風によってゆらゆらと揺れていて・・・
そして、動く事に特化した服は、少しだけ露出していて、ヘソや太股まで見えていて、目のやり場に困った
落ちついた雰囲気で木の上からこちらを見ている少女が、とても可愛かった・・・

やっと・・・見つけた・・・！！

「っ！！！」

その場から次の木へと跳び、俺から逃げようとするカーム
くそぉ！！やっと会えたのに逃げんのかよ！！

「カーム！！」

「！？」

突然俺に呼びかけられてビクッと震えるカーム
これで・・・少しは話を聞いてくれそうだ・・・

「なんで・・・なんで逃げるんだよ！？俺、お前になんかしたか！？何か気に障ることしたら、ごめん！！俺が悪かった！」

「・・・・・・」

後ろを向きながら話を聞くカーム
ふと、彼女の右手を見ると、強く握っているのが目に見えた
やはり・・・怒っているのだろうか・・・

「でもさ・・・俺、お前に言いたい事が会って来たんだ。・・・聞いてくれるか？」

「・・・ないで・・・」

小さな声で、カームが呟いたのが聞こえた
でも・・・俺は、伝えたい事があるんだ・・・！！
それが・・・俺が、世界を・・・次元を超えて言いたい事だから！！

「・・・カーム・・・ありがとう。」

「言わないで！！」

「っ！？」

突然、カームの凛とした声が辺りに響いた
俺も突然の事で驚き、身を震わせた

「・・・それ以上・・・言わないでください・・・」

「カーム・・・・？」

静かにカームに問いかける・・・
だが、彼女の声は少し震えていて・・・
今にも泣きそうだった

「もう・・・私は・・・マスターに会えないって思ってたんですよ・・・？話も出来なければ・・・触れる事も出来ない・・・想いも・・・伝えられない・・・」

「・・・・・・」

黙って、カームの訴えたい事を聞いていた
声がどんどん震えて、もう泣いているという事が分かる位震えていた

「それでも・・・私は・・・貴方の側に居たいと思った・・・どうしても・・・伝えたい事があったから・・・」

「・・・・・」

「私は・・・フレイム・ウイングマンさん程、長くマスターの側に居た訳でもなければ・・・ソニック・バードさん程、マスターを慕っている訳でもありません・・・私は・・・新参者だから・・・マスターは、私に気づくこともなければ・・・存在すら知りませんでしたね・・・」

・・・それはそうだ。
現実世界で“カードの妖精が居る！”みたいな事を口走ってる奴は、大抵厨二病患者か、イタい奴位だ。
むしろ、俺の場合は「そんな非現実的な事ありえるか」と言って切り捨ててしまう人間だ・・・
恐らく、夢も希望もない奴に育ってしまったのだろう・・・
けど・・・おっさんや、ロード、なのはやフェイト達に出会って、俺の考えは少しずつ変わって行った・・・

「・・・マスターも・・・私だけに会いに来た訳じゃないでしょう・

・・・？」

「そ、それは・・・・・」

「分かってます・・・新参者でも、マスターがどんな人で、どんな事をする人なのか・・・私には分かります・・・」

「・・・・何も言い返せません。」

意外にも、カームはいじられキャラではないようだ・・・自分からも、積極的にいじめるようなタイプだと、心でそっと思っておいた

「・・・そうですよね・・・どうせ・・・私なんて・・・」

そう呟くと、カームはもう一度跳び、隣の木へと飛び移った

だが、着地すると同時に、カームは一度フラッと揺れ、そのまま上手く着地できずに、木から落ちた

（・・・・あれ・・・？おかしいな・・・？）

身体から力が抜け、着地と同時に立ち眩みがしたと思ったら、突然、自分は落下を始めていた

まずい・・・このままでは、転落死してしまう・・・
でも・・・力が入らなかった・・・
どんなに杖を出そうとしても、身体の力も・・・魔力も出る事は無く、そのまま重力に押し潰されるように落下した・・・

下に、どんどん地面が迫ってきていた
あぁ・・・折角マスターに会えたのに・・・
折角・・・話しあえたのに・・・
折角・・・・・触れ合う事が出来たのに・・・
折角・・・・・想いを伝える事ができたのに・・・

ごめんなさい・・・マスター・・・
ごめんなさい・・・！！

心の中で何回も謝りながら、私は目を閉じた・・・

「カームっ！！！」

突然、私の名前が呼ばれ、ゆっくりと重い目蓋を開いた
そこには、心配そうに顔を覗き込んでいるマスターの姿があった
え・・・？
どうして・・・？

どうして・・・マスターが私を抱え込んでいるの・・・？

（・・・あっぶねぇなオイ・・・）

カームが落下を始めた時、俺の身体はすでに前へと進んでいた
今なら、まだ間に合う！！と、心で勝手に決めて、地面に落下しそうなカームに全力で駆けて行った
そして、ドンピシャでカームをキャッチする事に成功した

・・・落下した時にキャッチした時ゃめっちゃ重かったけど、今は信じらんねぇ位軽いんだけど・・・

「・・・・どうして・・・・」

「え？」

「どうして・・・助けたんですか・・・？」

・・・・改めて見ると、本当に可愛い女の子だ・・・
先ほどは遠くで見ていたが分からなかったが、本当に綺麗な瞳だ・・・
そして、整った顔立ち・・・綺麗な髪・・・
その全てに魅了され、俺は言葉を失った

「・・・マスター・・・・？」

「あ、いや・・・ごめん。・・・なんか、身体が勝手に動いたんだよ・・・」

「い、いえ・・・そちらではなくて・・・な、なんで私の顔をじっと見たんですか・・・？その・・・は、恥ずかしいです・・・」

じっと顔を見られて、恥ずかしいと言って俺から目を逸らすカーム

その頬は、少し赤くて、凄く可愛い・・・

「ご、ごめん・・・」

「そ、それと・・・あの・・・この抱え方は・・・」

「・・・あっ」

いまさらになって気づいたが、俺はカームをお姫様抱っこしていたや、やべぇ・・・一つ一つのしぐさがかわいくて、めっちゃ萌えてるんだけど・・・

「ご、ごめん！い、急いで下ろすから！！」

「ま、待って下さい！！」

下ろそうと腕を下げようとした時に、突然カームが抱きついて、耳元で大きく言った

ちょ、ちょっと耳痛いけど・・・なんつぅんだろ、可愛いから許す！みたいなノリで流した

「こ、このままでいいですか・・・？」

・・・あかんてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！
ちょ、この体勢もあかんし、本当に色々あかん！！
ちょ、ちょっと胸も当たってるし、何より、耳元でささやかないでぇぇぇぇ！！
恥ずかしいんだけど！！めっっっっちゃ恥ずかしいんだけど！！

「すみません・・・私・・・ずっと・・・こうしたかったんです・・・」

本当に嬉しそうに俺に抱きつくカーム・・・
いや・・・いくら人が居ないからって、こんなとこでんな事言われても困るんだけど・・・

「こうやって・・・マスターに触れて・・・こうやって・・・ずっと話したかったんです・・・」

「・・・・そっか・・・俺、カーム達の事気付けなかったからな・・・」

必死に心の中の状態が悟られないようにする俺
だってさぁぁぁぁ！！ずっと「ありがとう」が言いたい相手に抱きつかれてんだぞ！？
おまけに、嫁宣言もしてるから、マジパネぇぇぇぇぇぇ！！！
やっべぇよ！！もう何がしたいのか俺には理解できない！
誰かぁぁぁ！！俺に答えをくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

「・・・エリアルにも・・・会いに来たんですよね・・・？」

突然、カームがさびしそうな声で呟いた

「・・・・うん。・・・・俺、エリアルに助けてもらったし・・・・それに、帽子も返さなくちゃ・・・・」

俺は、ゆっくりとカームの髪に触れた
さらさらしてて、指通りの良い・・・・まるで、風を掴んでいるかのような感触・・・・
この感触に病みつきになりそうだ・・・・

「・・・・えいっ」

それを聞いて怒ったのか、カームは一度抱きつくのを止めて、俺の頬を思いっきり引っ張った
つか、めっちゃ力こめられてやられてるんで痛いんだけど!?

「いひゃひゃひゃひゃ!か、カームしゃん!?（いたたた!か、カームさん!?）」

「・・・・優柔不断な事を言うのはこの口ですか?この口ですよね?なら、もっと強くやらないと・・・・」

「いだいだいだいだいだい!!」

本気で俺の頬を引っ張っているようで、頬がミチミチと音を立てているのが分かった
ちょ、あかん!!ほんまあかんて!!ちぎれる!!ちぎれるうううう!!

「・・・・マスターは、本当に酷いですよね・・・・・・私が、どんなに思っても、画面の奥に居る女の子に釘付けなんですから」

ようやく頬から手を放してくれたカームが少しジト目で俺を睨んでいた
や、やばい・・・か、可愛いんだけど、めっちゃ怖い・・・
つか、言ってる事が、心に槍の雨を降らせてるんですけどぉおおおお！

「い、いやぁ～・・・それは・・・・ね？」

「そうですよね～。毎回毎回、夜になるとDSでしたっけ？を毎日開いて、毎日毎日語りかけてますもんねぇ～・・・私には一度も「大好きだよ」とか「愛してるよ」とか言ってくれませんでしたよねー」

もうやめてえええええええええ！！
ちょ、おま！？俺の秘密暴露されても困るんだけど！？
つか、なんでそんなに恨むような目で俺を見るのぉおおおお！？

「・・・ずるいです。私のカード見た時は「可愛い」と言ってくれたのに、ノースウェムコさんのカード見たら「ふつくしい…」って言ってましたよねー」

「もうやめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

もうやめて！！俺のライフゼロだから！！
もう勝負ついてるから！！
頼むからぁぁぁぁ！！これ以上俺の秘密バラすのやめてぇぇぇぇ！！

「それから・・・ライナちゃんの「すいませんでした！」・・・それに「やめてくださいお願いします！！」・・・」

とりあえず、言われる前に全部止めて欲しいと懇願しておくことにした
いや、だってしゃあねぇだろ！？
俺、一般人じゃないから、人に知られちゃまずいことが沢山あるの！！

「・・・分かりました。今回だけは許してあげます。」

そういうと、カームはまだ満足していないようだが、納得してくれた
ふぅ・・・よかった、と心で深いため息をついた
カームを降ろし、お互いに見つめあった

背丈は俺の方が勝っていて、俺がカームを見降ろす形で見つめあっていた

「・・・・・・／／／」

「・・・・・・」

少し頬を赤くして、カームは俯いた
なんか、もじもじしているのが、結構可愛くて、ずっと見つめていた

「あ・・・む、村はこっちです・・・」

「あ・・・・うん。んじゃ、連れてってくれるか？」

「え・・・？」

「い、いや・・・俺、この世界来たの初めてだし・・・それに、ま

だ会った事ない人とか居そうだし・・・頼めるか？」
カームは少し考え込むように首をかしげると、何かを閃いたのか、頬を赤くして俺に話しかけた
「い、いいですよ？・・・で、でも・・・」
そういうと、カームは俺の手をとった
そして、俺の手に指を絡めるように握った
俺も恥ずかしくなり、顔が赤くなったのが分かった
「そ、その・・・村までいいので・・・このままで・・・いいですか？」
「・・・・・・うん。」
そんなに何かを頼みこむような顔で言わないでくれ・・・
「うん」しか答えられないじゃないか・・・

そのまま、俺とカームは一緒に歩き出した・・・
お互いの手を取り合って、一歩ずつ前へ進んだ
一度カームの顔を見ると、少し恥ずかしそうだが、とても嬉しそうに歩いていた
それを見ると、なんだか心のどこかが安心して、俺も不思議と笑みがこぼれた

二十六章　すっげぇ嬉しい時って、何喋っていいか分からないよね（後書き）

「・・・というわけであとがきコーナーなんだが・・・」

蒼痲「・・・・・／／／」

カーム「・・・・・／／／」

「・・・いつまでイチャイチャしてんだこのバカップルがぁぁぁぁ！！」

カーム「か、カップル・・・！？」

蒼痲「お、おい！！俺達ゃ付き合ってないぞ！？」

「どこがだ！！どこからどー見ても、お前等カップル以外の何物でもねェよ！！ふざけんなよ！！リア充嫌いなくせに、リア充してんじゃねぇよ！！」

蒼痲「こうなるように仕向けたのはてめぇだろぉが！！」

カーム「か、カップルって、恋人って意味ですよね・・・？あ、そんな・・・いきなりこんな所でキスなんて・・・／／／」

蒼痲「どこの大胆ヒロインの台詞！？」

「・・・嫌いじゃないくせに」

蒼痲「うるせぇよ！！」

「あー、リア充はほっといて、カーム、いつものよろしく」

カーム「そ、それで子供は・・・・・ぇえ!?い、いきなりですか!?」

蒼痲「すでに人生設計までされてんの俺!?」

カーム「ち、違います!!ま、まだ結婚は早すぎます!!も、もっとお互いの事を知ってから・・・」

「・・・もういいや。一生イチャイチャしてろ、バカップル」

蒼痲「誰がバカップルだ!!」

「・・・感想、駄目だし、指摘などございましたら、いつでもどうぞ。・・・今度、新キャラ説明の所にカーム達のも追加しないとなぁ・・・」

蒼痲「どーでもいいけど!エリアルの帽子はどうなるんだよ!!一応伏線なんだろ!?」

「おいバカやめろ。ネタばれすんなアホ」

カーム「・・・・マスター?まさか・・・私より先にエリアルに手を出したいんですか・・・?」

蒼痲「ち、違う!!違うから!!だから、その手に持った杖に魔力溜めるの止めて!!」

「修羅場だな（笑）」

蒼痲「笑ってんじゃねぇぇぇぇ！！」

二十七章　さっすが異世界！俺の考えの斜め上を軽く超えるぅ！そこに痺れる憧れるぅ

カームと手を繋ぎながら歩くこと数分
なんか、途中で恥ずかしくなってきて、両方とも俯いたままで、全然話しなんてしてないんだけどね・・・

「あ、あのさ・・・」

最初に口火を切ったのは俺だった
突然話しかけられて、カームは一度ビクッと肩を震わせた

「は・・・はい」

少し顔を赤くしながら俺を見つめるカーム
一度立ち止まると、カームもそれにつれて立ち止まってくれた
不思議そうに俺を見つめるカーム

「カームは・・・俺の事どう思ってる？」

「・・・・はい？は、はぃいい！？」

突然の質問に少しキョトンとした後、絶叫にも似た声をあげた
か、顔真っ赤だから、めっちゃ萌える・・・

「い、いや・・・ライナにさ・・・一回聞かれたんだ。自分たちの事、どう思ってるってさ・・・」

「そ、そうですか・・・ライナちゃん、そんな事言ってたんですか・・・」

そう言うと、カームは少し俯いて、赤くなった顔を見せないようにしていた
こういう仕草がすっげぇ萌えるんだけど・・・
やばい・・・俺も恥ずかしくなってきた・・・

「・・・わ、私は・・・」

そういうと、カームはバッと顔を上げ、俺を見つめた
その目には、決意が込められていて、俺と真剣に見つめあっていた

「私は・・・ま、マスターのこと・・・その・・・す、好きです・・・」

「・・・・・・・・・・・は？」

「そ、その・・・ひ、一人の男性として・・・」

な、何言っちゃってんのこの子！？
い、いや！！どう思ってるって聞いたけど、そういう答え求めたんじゃないんだけど！？

「は、はぁあああああああああああああ！？」

「す、すみません！！で、でも本当ですよ！？その・・・好きなのは・・・」

「いやいやいやいやいやいやいや！！なんで俺！？俺、そこまで顔が良い訳でもないぞ！？髪も、天パだし、性格もひねくれて、最低な奴だぞ！？」

正直、俺はイケメンと言う奴ではない。
そういえば、チート能力を持った奴らは大抵、神に頼みこんで顔も弄ってる奴が多い気がするよね
・・・じゃなくてぇぇぇぇ！！

「・・・そんな所も・・・好きなんです」

・・・は？
ナンデスト？

「素直になれなくて・・・可愛くて・・・友達想いで・・・本当は、誰よりも寂しがりやなマスターが・・・私は、好きなんです」

・・・誰が寂しがりだ・・・
でも・・・素直になれない・・・・ねぇ・・・
それって、俺がツンデレだって言いたいのか・・・？

「だから・・・その・・・」

繋いだ手をぎゅっと握り、カームは俺と対峙した
そして、ほんのり赤く染まった顔を逸らすことなく、俺を見つめた

「・・・この想い・・・受け取ってくれますか・・・？」

「え？！いや・・・その・・・・」

・・・・あれ・・・？
なんでだ・・・？急に視界が悪くなって・・・

『マ・・・スター・・・』

（いや・・・カームさん・・・そんな小さな声じゃ起きたくても起きれねぇって・・・）

『マスター・・・・・マスター・・・』

いや・・・そんなに近づいても困るって・・・
いや・・・出来ればもっと近づいて下さい・・・いや、マジで・・・

『マスター！！起きて下さいマスター！！』

うーん・・・声デカイって・・・
もう少し声小さくして、囁くように起こしてくれ・・・
ん？起きる・・・？
どう言うこと・・・・・？

「マスター！！」

「ぬぉう！？」

なに！？私はどこ！？ここは誰！？
バッと起き上がり、辺りを見渡す俺・・・
だが、近くにはカームが居るだけで、特に何もなかった

「・・・・何か考え事ですか？」

ふと隣を見ると、カームが手を握ったまま俺を見つめていた

・・・・・え？・・・・・まさか・・・

（・・・夢オチ・・・・？）

・・・・ざけんなやゴルァァァァァァァ！！！

心の中で「あ、やべぇ・・・こう言う時、どういう顔したらいいか分からないよ」って考えちまったじゃねぇかぁぁぁぁぁ！！

きっとその後は「笑えばいいと思います」ってカームが言ってくれてキスするはずだったのにぃいいいいいい！！

・・・・・はぁ・・・なんか、無駄に疲れた・・・

「・・・・・・・」

カームは何故か冷たーい目で俺を見つめていた

ま、まさか・・・やましいことを考えてたのがバレた・・・？

「・・・マスター？何を想像してたんですか？」

ニコニコした笑顔を俺に向けるカーム

うん・・・・すっげぇ可愛いよ

すっげぇ可愛いけど・・・・手ぇめっちゃ痛いんだけどぉおおおおお！！

ちょ、力強っ！？俺の手が悲鳴を上げてるぅぅぅぅぅ！！

「い・・・いや・・・なんでも・・・ナイヨ・・・？」

ぴくぴくと頬を吊り上げて必死に作り笑いをする俺

だって仕方ないじゃん！！なんか男の意地みたいなのが働いて、全然怒れねぇんだよ！！

「そうですか。なら安心しました」

そういって、手の力を緩め、もう一度彼女の温かい手の感触が俺の掌一杯に広がった

なんというか・・・女性って分かりづらい・・・

「・・・・あっ、見えてきましたよ。」

カームが見つめる先には村があった

そこは、木々に囲まれて、まるで自然の中を生きてきたという雰囲気を醸し出している村だった

「うわぁ・・・・・」

門と思われる場所からカームと一緒に中に入ると、緑色の髪をした人達が果物等の食料を運んだり、鳥と戯れたり・・・

とにかく色んな事をしていた

俺はというと・・・なんというか・・・感動して、何をしゃべっていいか分からなくなっていたのである

だってさ・・・嫁宣言してる娘と一緒に手ぇ繋いで、その娘の村に来てるんだぜ・・・？

なんか、緊張するんだけど・・・

カームと一緒に商店街にも似た通りを通ると、道行く人達がカームに話しかけていた

「おぉーカームちゃん！！今日も元気かい？」

「はい・・・元気です。」

静かに返事をするカーム

だけど、なんか嬉しそうに頬を緩めていて、顔も少し赤かった
あれ？なんで恥ずかしそうにしてんの？って心で思っていると、中年のおっさんがカームに話しかけてきた

「カームちゃん！今日の果物は美味しいよー！一個どうだい？」

「あ・・・頂きます」

「おぉっ！？カームちゃん、隣の人は彼氏さんかい！？ほぉー！あんなに小さかったカームちゃんが彼氏をかー！彼氏さん！カームちゃんを幸せにしてやってくれよ！」

がっはっはっは！！と大きな声で笑うおっさん
ちょ！？なんで俺彼氏扱いになってるわけ！？

「い、いや！俺達まだそんな関係じゃ・・・！！」

「ほぉれ！！持って行きな！！」

「っとっと！！」

俺の方へと投げられた見たことのない果物に反応し、その場でキャッチして、まじまじとその果物を見た
・・・・なんか形が歪なんだけど・・・
食えんの？これ・・・？

「ありがとうございます。おじさん」

「はっはっは！！また来てくれよ！！おっ、リーズちゃーーーん！！」

おっさんが俺達の後ろに居るであろう“リーズ”という子に向かってぶんぶんと手を振った
俺はそのまま後ろを向いて、どんな子だ？と思いながら振り返った
横では、カームがチッと小さく舌打ちをしたような・・・
まぁ、気のせいだろう・・・

「おぉ、おじさーーん！！」

俺が振り返ると、こちらへ向かってくる女の子の姿が目に映った
長い髪を高く結って、ツインテールにしている女の子・・・
そして、薄緑色の目が、まるで自然を思わせるようにきらきらと輝いていた
服は・・・胸に巻くように来ている緑色の服と、スカートっぽい物を着こなしていて、絶対領域を保っている二ーソックス・・・っぽい物を着こなす同い年くらいの女の子だった

・・・・近づくに連れて分かるんだけど、なんか、若干腹筋割れてね？
うわっ、すげぇ・・・女性で腹筋割れてる人見たの初めてかも・・・

「おぉ、カーム。帰ってきてたの？」

「・・・うん。」

「へぇー・・・おっ、見ない顔だね～。ひょっとして、カームの旦那さんか？」

「だ、旦那ぁ！？」

カームに気づくと、急ぎ足でこちらへ向かってくる“リーズ”と呼ばれた女の子
俺に気付くと、少し悪戯してやろうというような顔をして、俺をおちょくってきた
・・・俺、まだ結婚できないんだけど・・・

「ち、ちがっ・・・！ま、まだ違うよ！！」

「へぇー・・・ま・だ、ねぇ～」

「～～～～っ！！」

リーズに言い包められているカームの顔が、滅茶苦茶可愛かったです。はい。
いや、だってさ・・・可愛いんだもん。可愛すぎるんだもん。
可愛すぎて、生きるのが辛い・・・

「はっはっは！良かったね～、未来の旦那さん。この子一途だから、浮気なんかしちゃ駄目だよ～？じゃないと、ナイフで腹に風穴が出来ちゃうかもよ～？」

「そんな馬鹿な・・・ナイフの大きさを考えてくれよ・・・えぇっと・・・リーズ？」

「あぁ、そっか。自己紹介がまだだったね。あたいはリーズ。ガスタの疾風　リーズさ！こう見えて、前線で戦うから、結構鍛えてるよー！」

やけにテンションの高い娘だ・・・
はっはっは！と笑ってる辺り、ハ〇ヒで言う鶴〇さんポジションだ

な。
うん。でも、こういう子もアリだよね？
「リーズちゃん！仕入れておいたよー！氷結界の方まで行って、直々に貰って来たんだぞー？」
ぽいっとリーズに向かっておっさんが青い果実を投げた
リーズは片手で掴むと、それを見て喜んだ
「おぉー！氷結リンゴ！！これ大好きなんだよねー！」
「ほら、まだあるから。」
「やったー！！」
・・・氷結リンゴって、モン〇ンで出てこなかったっけ？
というか、そんな氷の塊が美味いのか・・・？
つかおっさん、どっからそんなデカイ箱取り出した・・・中に氷結リンゴしか入ってないじゃん・・・
「・・・・マスター」
ん？とカームの方を見ると、少しさびしそうに俺を見つめるカームが居た
・・・なんというか、ウサ耳つけたら似合いそうだなーって心で思っておく。
「・・・行こう？」
ふてくされて拗ねているのか、カームはぐいっと俺の手を引いて歩

き出した
俺もそれに引き寄せられる形でカームについて行った
・・・なんか、デートで彼女に振りまわされる彼氏の気分なんだが・・・
まぁ、俺にはリンコが居るからいいけど！！
そのまま、俺はカームについていって、商店街っぽい通りを抜け、村の外れの方までカームと一緒に歩いていった

そして、ようやくカームの足が止まったかと思うと、そこには大きな木の上に家がある大きな木の前で立ち止まっていた
入口にはちゃんとドアがついており、その入口まではハシゴで登らなければいけないらしい

「・・・カーム？」

カームを見つめると、カームは目を瞑って、静かに言った

「ここが・・・私の家です。」

「へぇー・・・・」

首を上へと見上げても、まだまだ大きく伸びる木・・・
こりゃ、全体を見るのにゃ結構離れないと見れそうにねぇな・・・

「・・・マスター？」

「ん？なんだ？」

少しもじもじしながら、俺と繋いでいた手を離したカーム
そして、俺と対峙すると、大きく息を吸って、吐いた

「マスター！！」

「は、はい！！」

「私・・・ガスタの静寂　カームはっ・・・マスターに・・・天野蒼・・・いえ、天城蒼痲に会えて良かったです・・・ありがとうございますっ！」

頭を下げてお礼を言うカーム
え、ちょ！？いきなりそんな事されても困るんだけど！？
・・・・あれ？なんでだろ？なーんか、この先を知ってるよーな・・・
あれだよ・・・遊戯王の再放送を見てる気分・・・

「そ、それで・・・ですけど・・・ま、マスターは・・・その・・・好きな人は・・・居ますか？」

「・・・・は？」

「い、いえ・・・その・・・マスターは・・・その・・・私のイラストを見ていつも微笑みかけてくれましたよね・・・？か、勝手な想いかもしれませんけど・・・その・・・わ、私の事・・・どう思ってますかっ？」

「え、い、いぇ！？ど、どんなつっても・・・え、っと・・・その・・・」

おい待て！！どう言う事なの！？
誰か！！教えて！？こういう時ってどうしたらいいの！？

「あのっ・・・私は・・・マスターのことっ・・・す、す・・・」

「カァァァァァァムゥゥゥゥゥゥ！！！」

「「！！？？」」

突然木から何かが転げ落ちたかと思って木を見た瞬間、緑色の髪をしたマントを着た男がカームの名前を叫んで落ちてきた
ベチャッ！！と顔から地面に突っ込んだのだが、バッ！！！と起き上がると、カームの方へ全速力で駆けよって来た

「お父さんは認めんぞぉおおおおおおおおおおおおお！！！」

「・・・・・・・・・」

肩を掴まれて揺さぶられるカーム
・・・良く見ると、この人、ウィンダールじゃね？

「カーム！！お前にはまだはや・・・」

「・・・・・お父さん・・・」

「おぉ！！ようやく目を・・・ゴァッ！？」

カームが拳を握って、肩を掴んだままで無防備だった顎にアッパーを繰り出した
ウィンダールはそのアッパーを直で喰らい、後ろに吹っ飛んだ

うわーぉ・・・すげぇ・・・

「・・・・・・・」

後ろからで分からないけど・・・なんか、カーム怒ってね？
いや、なんか、オーラで言うなら、金色のすんげぇオーラだしてウィンダールに怒ってるんだけど・・・
やべぇよ、今にも元気玉でとんでもない事やらかしそうなんだけど・・・

「か、カーム！！何をする！！私はお前の事を思ってだな・・・」

「・・・少し・・・消え去ろうか・・・？」

そういうと、カームは杖を取り出して、緑色に輝く球体がカームの杖に現れ
さながら、元気玉を溜めこんでいるかのように辺りから緑色の小さな球体が集まって、それがどんどん蓄積されていった
ウィンダールが「落ちつけ！話せば分かる！！」みたいな事を言っているが、カームはそれを無視して、めっちゃデカくなった球体を放った
それに当たったウィンダールは、結構遠くまで飛んでいった
こ、こわっ・・・

「・・・・マスター？」

「は、はぃい！！」

「・・・・入りましょう？」

こちらに振り向くと、作り笑いで俺を迎えてくれたカーム・・・
その姿を見て、俺はただ茫然と立ち尽くす事以外、何もできなかった・・・・

二十七章　さっすが異世界！俺の考えの斜め上を軽く超えるぅ！そこに痺れる憧れる！

「イエェェェェェェェェイ！！！モンハン買ったぜぇぇぇぇぇ！！！」

蒼痲「うっさ！？」

「イィィィィヤッホォオオオオオウ！！！！！」

蒼痲「・・・で、どういう事だ？」

「ん？それだけ。」

蒼痲「それだけかよ！？」

「いや・・・最近感想来ないからさ、なんとなーくテンション上げて頑張ってみた」

蒼痲「ただの寂しがり屋じゃねぇか！」

「あっはっは・・・はぁ～～・・・どうしようかな・・・モンハンの小説の方更新したいんだけど、まだまだ時間が必要っぽいよ・・・マジ泣ける・・・」

蒼痲「おい待てゴルァ。んなもん活動報告で言え。ここでいうなアホ」

「わーったよ・・・あ、感想、指摘、ダメ出しなどがあれば、どうぞ。いつでもお待ちしております。」

蒼痲「はぁ～・・・なんか、原作がリリカルなのはのはずなのに、異世界編になってから、なのは達が完璧に空気になったよな」

「・・・・ごめん。」

蒼痲「・・・・・・・・・はぁ～～～」

「深いため息つくなよ・・・つきたいのは俺だっつの・・・はぁぁぁぁ～～～～～」

二十八章　心の底から思うんだ・・・女性って分かりづらい・・・

カームの家に入ると、意外と普通で、必要最低限の物はちゃんとそろっていて、現実世界と比べるなら、電化製品などが一切無い事くらいしか思いつかないぜ・・・

「ここが、マスターの部屋になります」

そう言って、俺の手を引いて向かったのが、一つの大きな部屋だったなんつぅか・・・確実に一人部屋じゃないんだけど・・・

「あ、私の部屋は、隣なので・・・何かあったら来て下さい。」

「あ、うん。」

バッグをベッドの近くにバッグを置いて、カームに返事をしたすると、バッグから「痛っ」と言う声がしたので、バッグを覗き込んで見ると・・・

コトコトと、俺のデッキケースが右に左に揺れていたのだそっとデッキケースに触れ、デッキケースを開けると・・・

「わーーーーい!!マスターさーーーん!!」

「ひでぶ!?」

俺に抱きつくように飛び出した見覚えのある女の子・・・その子が、俺の腹目がけて飛んできたのだこ、こんな事するのはライナしかいねぇじゃん!!

「マスターさん！会いたかったよ～～」

すりすりと猫のように俺の体にすり寄るライナ・・・

か、可愛いんだけど、腹・・・めっちゃ痛いんだけど・・・・！！

「あ、カームお姉ちゃん！！」

「ら、ライナちゃん・・・」

カームを見つけるや否や、ライナは俺から離れ、カームの胸へ抱きついた

・・・いや、別に羨ましいなんて思ってねぇよ？

というか、ライナめっちゃ嬉しそうなんだけど・・・

まぁ、座り込んで見てる俺からしたら、微笑ましい光景だよ。うん

「カームちゃん！」

「オウフ！！」

今度はノースウェムコまで出て来て、俺を踏み台にしやがった！？

ちょ、マジ痛いんだけど・・・

洒落にならないくらい痛いんだけど！？

ちょ、背中背中！！踏み倒された挙句、背中踏んだまま立たないで！！

「ウェムコさん・・・ご迷惑おかけしました」

「いいの・・・いいのよ・・・カームちゃん・・・元気でよかった・・・」

そういって、ノースウェムコはカームを抱きしめた
うん・・・美しい友情だと思わんかね？
でもさ・・・

「ライナ・・・ノースウェムコ・・・そろそろ危ない・・・」

主に俺の命という名の砂時計がね
このままじゃ圧迫死するんだけど！？
ライナもノースウェムコも意外と軽いと思ってたけど、二人で乗られるとマジで困るんだけど！！
ライナは「あれー？マスターさん居たの？」みたいなこと言って俺の顔をツンツン触ってきた
ノースウェムコは「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」とかいって、すぐに退いてくれた
退いた時にコケたのは俺的にＧＯＯＤだったんだが、見れないのが非常に残念だ！ライナぁぁ！！頼むから退いてくれェェェ！！

「ライナちゃん、マスターから退いてあげよう？」

「えぇー・・・ヤダ～」

「だ、駄目よライナちゃん！マスターだって困ってるんだから！」

「は～い・・・よいしょっと・・・」

ようやく俺から退いてくれたライナ
ふぅ～・・・これで安心して立てるぜ・・・

「ふぅ～～助かったぁ～～」

「ライナちゃん、マスターの上に立っちゃ駄目だよ？マスターだって口には言わないけど、迷惑がってるんだよ？」

「ごめんなさい・・・」

カームに叱られてしょんぼりとするライナ
ノースウェムコは俺に失態を見られまいと、急いで立ち上がって、頬を赤らめて俺に大丈夫かと聞いてきた
うん。コケた時の「きゃあ！？」はめっちゃ萌えた。
やっぱ、こうやって見ると・・・

「？？？」

「マスターさーん？なーに？」

「な、なんですか？」

顔赤らめて俺を見て恥ずかしがってるノースウェムコは、ドジだけど、めげずに頑張る長女で
なんでじろじろ見てるんでしょう？みたいな眼差しを送ってくるカームは、しっかりした次女で
天真爛漫な行動をするライナは、末っ子の妹みたいな感覚だなぁ～・・・

・・・となると、俺の立ち位置ってどこだろ？
うーん・・・出来の悪い弟か？
もしくは、変な趣味持った幼馴染とか・・・？
まぁ、そこらへんが妥当だろうな。
俺みたいに歪んでる奴が主人公なわけもねぇか。

「いや・・・こうやって見ると、三人って姉妹みたいだなぁーって思っただけ」

「・・・というと、マスターは、私達姉妹を纏め上げてくれる幼馴染、というポジションになりますよ？」

「いやいやいや、それはないって。俺はお前等の幼馴染なんて無理無理。精々、クラスメイト位が限界だろ。」

はっはっはと笑っておく

すると、カームは納得いかないような眼差しを俺に向けてきた

・・・あれ？おかしいな・・・なんか、ライナとノースウェムコからも感じるんだけど・・・？

な、なんか空気重いんだけど・・・

と、取りあえずポケットに手を突っ込んで、この状況を打破できる物を・・・！！

そして、右手に広がったスリーヴの感触で、ようやくこれがなんのカードが気づく事ができた

「あっ・・・カーム。」

「・・・・・なんですか？」

まだ冷たい目線を送るカームが、少し嫌そうに答えた

俺はそんなカームに手を要求するように手招きをして、右手を差し出した

カームは、突然の事で驚きながらも、おずおずと俺に右手を差し出してくれた

「これ・・・必要なんだろ？」
カームの手に、一枚のカードを手渡した
カームは、それが何か分かった瞬間、少し驚いたようにカードに目をやった
「これ・・・私のカード・・・」
「大変だったんだぞ・・・傷つかないように６重のスリーヴに入れて保存して、出来るだけ傷がつかない場所に、大切に保管してたんだぞ。」
「・・・ありがとう・・・ございます・・・」
カームの手に、カームのカードを手渡した
これで、俺の最初の役割は終わった。
後は、エリアルに帽子とカードを届けるだけっと・・・
案外、簡単に事が進みそうだ・・・
「・・・うっぐ・・・」
ふと、カームを見ると、カームは泣いており、涙が頬を伝ってぽたぽたと地面に零れ落ちた
その姿を見ると、俺はぎょっと驚いて、どうしたらいいかを模索し始めた
とりあえず、カームの後ろに居るノースウェムコにアイコンタクトを送って見た
（頼む！！この状況の打破の仕方を教えてプリーズ！！）と、目で訴えるも、ノースウェムコは、一度深呼吸をして、ジェスチャーで伝えてきた

・・・・（抱きしめてあげてください）と

・・・・・・・・いやいやいやいやいやいやいや！！！待て待て待て待て待て！！！

そんなハグするように抱き締めろってジェスチャーされても困るんだけど！？

無理無理無理！！俺、こういう時の状況の打破の方法なんて知らねぇから！！

それ以前に、女性抱きしめるの初めてなんだけど！！

抱きしめられた事はエリアルとカームにあるけど、あれはノーカンだ！！

ライナに視線を移すと、カームがどうして泣いているのか分からないのか、ノースウェムコに「カームお姉ちゃんどうして泣いてるのー？」と小さな声で聞いていた

ちくしょーーーーー！！やっぱ、最終手段の、ノースウェムコの作戦を使わなくちゃいけないのか！？

まだ泣くカームを見つめ、ギクシャクした動きでゆっくりカームを抱きしめた

初めて・・・俺は女性を抱きしめた。

凄く、甘い香りと、温かい体温と、柔らかい感触が俺に伝わってきた・・・

すると、どうしようもなく愛おしくなり、カームを抱きしめる力を強めた

「マスター・・・？」

「・・・ごめん。こう言うときって、俺、どうやって話振ればいい

か分からないんだわ・・・でもさ・・・一つだけいいか？」

「・・・っぐ・・・なん・・・ですかぁ・・・？」

涙を堪えるカームが、さらに愛おしく感じた
そして、さらに抱きしめる力を強くした
すると、カームは少し苦しいのか、一度小さな悲鳴を上げると、俺は耳元で囁くように言った

「・・・・おかえり」

「！？・・・・うっ・・・・うわぁ・・・・っぐ・・・・た、ただいま・・・・帰りました・・・！！うわぁぁぁぁぁあ！！！」

もう、俺はカーム以外の事を考える事が出来なくなってしまい、俺の全神経を全てカームに集中していた
俺よりも小さなこの体で、辛い思いをさせてしまった・・・
俺が気づかない・・・ただそれだけのことでも、彼女はとても傷ついたのかもしれない・・・
だけど、それでも、俺のそばを離れないで、ずっと隣に居ようとした彼女がとても愛おしい・・・

親父も、あの人（母さん）を抱きしめる時はこんな気持ちだったのだろうか？
俺には、正直理解が出来なかった。
“愛”と言うのは、言葉だけの薄っぺらいものだとばかり思っていただけど、今なら少しだけ分かる気がする・・・

この、ゆったりと流れる時間が、一秒でも長く過ごせますように・・・

そんな願いを込めながら、俺は泣きじゃくるカームの頭を撫でていた

・・・それから、大体何分が経過した頃だろう・・・
俺にとっては、とても長く、短い時間だった気がする
ようやくカームが泣き止むと、カームは俺をぎゅっと力強く抱きしめ返してくれた

「・・・マスター？」

「・・・なんだ？」

「・・・もう少し・・・このままでもよろしいですか？」

・・・・俺も、まだ離れたくない。そんな気持ちになってしまっただけど、心に芽生えた悪戯心が、少し悪戯をしてやろう、と俺の口を滑らせた

「うーん・・・カームがどうしても、って言うならいいぞ？」

本来なら、俺はこんな事は絶対に言わない。そう確信できた。
俺がこんな主人公っぽい台詞が言えるなんて、夢にも思ってなかったからな。そりゃ当然か。

「では・・・・お願いします。どうしても・・・・まだ離れたくないんです」

カームがお返しとばかりに、俺を抱きしめる力を強くした
そのまま数分、抱きしめあったまま無言の時間が続いた
だけど、何故か意思疎通してるようで、俺とカームはずっと抱きしめあっていた
突然、カームが俺を抱きしめていた手の力を緩めた
それを見計らって、俺もカームを抱きしめていた手の力を緩めた

「・・・・・ありがとうございます・・・我がまま・・・聞いて貰って・・・・」

「気にすんなよ・・・泣きたい時は、胸くらいは貸せるからさ・・・・いつでも言ってくれよ」

「ふふふっ・・・・ありがとうございます。では、その時に言うとします。」

「あぁ、待ってるよ。俺は逃げもするし隠れもするが、約束は守る男だからな。」

俺がそういうと、カームの肩に置いていた手をゆっくりと離した
少し・・・・いや、とても名残惜しいが、俺は・・・・カームと離れた・・・・突然、視線を感じたので、ドアの辺りを見ると、何かが揉め会う声が聞こえてきた

『うわぁ～・・・・お姉ちゃんだいた～ん』

『ちょ、ワテを踏み台にするのを止めて頂けませんかいお嬢さん！

？』

『シッ！静かにしてください！気づかれちゃいますよ！』

『ウェムコお姉ちゃんが一番うるさいよ～！』

『蒼痲・・・立派な男になったな・・・』

『フレイムウイングマン・・・嬉しそうだな』

『あぁ・・・これで、蒼痲の未来が少し安定した物になるだろう。』

「・・・・おいコラ待てやゴルァ」

なに？今までの出来事、ドアの隙間から見てたわけ？

・・・・何晒しもんにしてんじゃお前等ぁぁぁぁぁぁ！！！

『あっ！！気づかれたでやんすよ？！』

『ウェムコお姉ちゃんがうるさいからバレちゃったじゃ～ん！！』

『わ、私ですかぁ！？』

『いいから、逃げようよ～！！』

どたどたと音がすると、ドアの辺りから人の気配が全て消えた

・・・ソニック・バード達、全部見てやがったのかよ・・・！！

「あぅ・・・あぅぅ・・・・」

見られていた事に恥じているのか、カームは顔を真っ赤にして俯いたその顔を見ると、俺も恥ずかしくなって、ばっと顔を見るのを止めた。
や、やばい・・・！！可愛すぎて死ぬ！！！
やばいって！！もじもじしてる姿も可愛いし、俯いてる所も可愛い！！
あかん！！あかんて！！マジやべぇ！！パネェ！！パネェッス！！

「あ、あの・・・マスター・・・・？」

「な、なんだ？」

「その・・・そろそろ晩御飯の用意をするので・・・その・・・手伝ってもらえますか・・・？」

「お、おう・・・・」

なんだか、ギクシャクした動きで台所へと向かう俺達・・・
だけど、この時、俺は幸せな時間を過ごす事が出来た・・・
それはもう、リア充に匹敵するくらいの超ド級の幸せを・・・・

「ま、マスター・・・？」

「な、なんだよ・・・？」

「・・・これからも、よろしくお願いしますね・・・」

そう言い残して、先に台所へ向かうカーム
それが、一体どういう意味で言われた事なのか・・・俺には理解ができなかったが、とにかく、今日からカームの家でお世話になるの

だ・・・
居候は居候らしく、彼女の手伝いをするとしますか・・・
そう思いながらも、俺はドアを閉めた
だが・・・・

この時、俺は気づかなかった・・・・
バッグの中にあったエリアルの帽子が、一度だけ怪しい光を放った事に・・・

暗く、薄暗い洞窟・・・
そこに、サメの姿をした魚人が、何かに気づくように後ろに振り返った
その魚人は何かを感じたのか、洞窟の中にある湖の中に勢いよく突

っ込み、湖の中へと潜って行った
その魚人が辿り着いたのは、宮殿の跡地のような場所・・・
宮殿の前に着地し、そのままゆっくりと歩いて行った

ピタピタと、魚人の足音が辺り一帯に響いた
そして、魚人が宮殿の奥へと辿りついくと、魚人は静かに口を開いた

「・・・エリアルの帽子の反応があった。」

「ほぅ、そうかい。で？どうするんだい？」

宮殿の玉座のような場所に座っている女性は、ヒステリックなイメージを持たせるほど、見下すように魚人に言った
魚人は、静かにこう言った

「・・・娘が危ないのに、親はなんとも思わないのか？」

「はっ！あんな出来の悪い奴を娘だと思った事は無いよ！」

「・・・・・・」

女性の返事を聞いた瞬間、魚人は少し眉をピクリと動かし、その場から背を向けた
そして、宮殿の外へと出ようと、歩き出した

「おや、どこへ行くと言うんだい？」

「・・・エリアルのマスターを連れてくる。それだけだ」

そう言い残し、魚人は去って行った

宮殿の玉座に腰掛ける女性は静かに笑い、その笑い声は次第に大きくなり、狂った笑いのように、高笑いをした

その声を、聞きながら、ゆっくりと歩みをとめた魚人・・・

彼の前には、一人の青年の姿があった

「・・・行くのか？」

「あぁ・・・エリアルが危ないのでな。」

「・・・・俺も行こう」

「いいのか？ヴァニティよ？」

ヴァニティと呼ばれた青年は、ゆっくりと魚人と肩を並べ、歩き出した

ひたひたと足音が辺り一帯に響き、彼らは暗い闇の中へと消えて行った・・・

二十八章　心の底から思うんだ・・・女性って分かりづらい・・・（後書き）

オマケ１

部屋を出てすぐ

蒼痲「あれ？そういえば、ここカームの家なんだよな？ウィンダールとかは一緒に住んでないのか？」

カーム「あっ・・・私、捨て子なんです・・・この村で生まれたんですけど・・・父と母が戦争に巻き込まれてしまって・・・それで、お父さんが引き取ってくれたんです・・・」

蒼痲「あ・・・悪い。聞いちゃ悪かったか？」

カーム「いえ・・・気にしてません・・・でも、これだけは言えます。ウィンダも、お父さんも・・・私の大切な家族です」

蒼痲「・・・そっか。」

カーム「・・・いつか、マスターも家族に・・・（ぼそっ）」

蒼痲「ん？なんか言ったか？」

カーム「い、いえ！！なんでもないです！！」

蒼痲「？？？？」

オマケ2

台所にて

ウィンダ「あ、お姉ちゃん遅いよー！」

蒼痲「うぃ、ウィンダ？」

ウィンダ「あ、お姉ちゃんの旦那さん！」

蒼痲「ぶうぅぅぅぅぅ！！」

カーム「うぃ、ウィンダ！マスターに失礼でしょ！！」

ウィンダ「えー？さっきまであんなに抱きしめあってたのにー？」

蒼痲&カーム（（み、見られてた・・・／／／／））

あとがきコーナー

「いやー、最近寒いねぇー・・・キーボード打ち込むのが寒くて遅くなるよチクショウ・・・」

蒼痲「いや、知らんがな・・・」

「さて！久々に感想が届いたよー！竜王さん、ありがとうございますね！これからも、応援よろしくお願いしますね！！」

蒼痲「送り物に、エメラルドとサファイアの指輪貰ったんだけど・・・これ、どうすんの？」

「無論、お前に二人に渡して貰う」

蒼痲「はぁ！？」

「いやー、贈り物はちゃんと受け取らなきゃダメだろー？それにー、竜王さんも、お前がカームとエリアルに告白するの待ってるかもしれないだろー？」

蒼痲「い、いや！！ねぇから！！そんなドキドキイベントねぇから！！」

「ま、渡すか渡さないかはお前が決めるんだな。」

蒼痲「け、結局俺任せなのかよ！！」

「まぁね。あ、いつもの言えよー？」

蒼痲「わーってるよ！！・・・えぇーっと・・・ごほん！感想、コメント、駄目だし、指摘等ございましたら、お気軽にどうぞ！！

・・・こんな感じか？」

「大分様になってきたな。」

蒼痲「うるへー。」

「それでは、次回のあとがきで！！」

蒼痲「・・・あれ？カーム達は？」

ライナ「ずるいーー！！カームお姉ちゃんだけ抱きしめられてずるいよーーーー！！ライナもマスターさんに抱きしめられたいーーーーー！！」

カーム「わ、私は狙った訳じゃ・・・」

ノースウェムコ「酷いですよねぇ・・・私の方がカームちゃんより長くマスターと一緒に居たんですけどネー・・・」

カーム「うぇ、ウェムコさん・・・？どうしてそんなに暗いんですか・・・？」

ソニック・バード「・・・マスターさんも大変ですねぇ～」

フレイムウイングマン「そうだな・・・」

二十九章　“ありとあらゆる異端を打ち消す力”・・・ねぇ・・・

俺は、カームから貸してもらった部屋から夜空を眺めていた
あの後、何故か居たウィンダとカーム、ノースウェムコ、ライナの5人と食事をとったんだが・・・
俺以外全員女性ってどう言う事なの・・・？
いや、確かに嬉しい状況だったよ？めっちゃ嬉しかったよ？
でもさ・・・ノースウェムコとカームが俺の隣になるかで揉め初めて、ライナはちゃっかり俺の横に椅子をスタンバッテたりとかさ・・・
それで言い争いが勃発して・・・なんか、どこぞのエロゲの主人公になった気分だったぜ・・・
まぁ、カーム達が俺に好意なんて・・・ねぇ？
普通に考えて、ただのカードの所有者と、カードの精霊だからなぁ～
それ以上でも、それ以下でもないな。うん。

「・・・・・・はぁ～～～」

でも、めっちゃ疲れたのは全然変わらないんだよね～
ベッドに横になった時に押し寄せてきた突然の疲労感。
それは俺がレッドアイズと対峙した時と同じく、突然現れた
どうして、こんなにもどっと疲れるのか・・・正直、思い浮かぶ物は一つ・・・

「・・・この右手か・・・」

俺の右手には“ありとあらゆる異端を打ち消す力”が宿っている
それは、世界から委ねられた希望。
異端を打ち消すためだけの最強にして、最弱の力・・・

おっさんは、この能力にあまり頼り過ぎるなと言っていた
俺は青年から少年へ、少年から青年へなることができる・・・
ただし、それはあまりにも大きいリスクを背負った物だ。
何度もぽこぽこ変身したら、危険だと、おっさんとロードが言っているにもかかわらず、俺は無視してぽこぽこと変身を続けた
何回も何回も・・・無駄なことに・・・

『おーい、しょーねーん？聞こえるかー？』

『・・・なんだよ、ロード？』

突然俺の頭の中にロードの声が響き、俺は機嫌悪そうに応答した
じっさい、少しだけ頭にきていた。
自分が注意されていた事をすっかり忘れて、それが危うく命の危険に晒されるなんて・・・
自分の不注意と、馬鹿さ加減に呆れていたのだ

『いやー、無事にガスタまで辿り着いたんだなー。よかったよかった～』

『・・・待てやクソ野郎。お前がいきなり落っことさなきゃ何もおきなかったぞドアホ』

『おいおい、今日は機嫌悪いな・・・どうした？そんなに落とされたのが頭にきたのか？』

『うるへー。黙ってろ。』

俺はそう言って寝がえりをうった
どうして、俺はおっさんとロードをの警告を無視してポカポカ変身

したのだろう・・・
文字通り「神の警告」を受けていたのにも関わらず、俺は、それを無視した・・・
当たり前のように使っていたら、それがとてつもなく大きな力だと言う事を思い知らされた

『・・・・お前、倒れたろ？』

『・・・・何を根拠にんなこと言ってんだよ？』

突然、ロードが俺に“倒れただろ？”と質問をしてきた
・・・恐らく、俺がポンポコ変身していたのに気づいていたのだろう。
故に、心配か・・・もしくは、呆れているのかもしれない・・・
だけど、その声は心配しているような声ではなく、何か大切な事を告げるための声だと、雰囲気で分かってしまった
・・・どうやら、俺が思っている以上に深刻な事らしい

『まだ倒れてないならそれいい。ただ、もしも倒れてたら・・・悪い事は言わない。今すぐ、その世界から帰ってこい。』

『・・・なんで？』

『・・・お前の能力は“異端”ならなんでも打ち消してしまうのは知っているな？』

『あぁ。ようは、幻想殺し（イマジンブレイカー）だろ？それがどうした？』

『あぁー・・・まぁ、お前の場合、それ以上の可能性があるけどな・・・』

ロードが何やら考え込むように言った
俺はその言葉に反応しないように、冷静に答えていた
悟られてはいけない・・・俺が倒れた事を・・・
だって、もしもバレて、連れ戻されたら・・・俺は、エリアルに帽子を返す前に、帰ってしまうのだ
それは嫌だ・・・

自分を犠牲にしてまで俺を助けてくれた女の子の忘れ物を届けるくらい、俺の手でやりたい・・・
それに、エリアルにも「ありがとう」の言葉を伝えたい・・・
俺が気づいてやれなかったせいで、彼女達は、傷ついてしまった・・・

なら、傷つけた本人が、何もせずただグータラしてたんじゃ、意味が無い。
もう、俺は失いたくない・・・

大切な絆も・・・大切な人も・・・大切な物も・・・

だから、俺は、自分で手渡しで返してあげたい。
エリアルの帽子を・・・そして、彼女のカードを・・・

『お前の右腕は・・・いわばマイナスの働きをする。これは分かるな？』

『・・・そのマイナスがどうした？』

『・・・分かるだろう？お前の体は普通の人間の物だ。それは、プラス側の物だ。その一部にマイナスが入ってみろ？どうなる？』

『・・・マイナスがプラスを打ち消す。』

『そのとーり。マイナス×プラスはマイナスだ。ただ、マイナス×マイナスはプラスになる・・・故に、体がマイナスになろうと、プラスをマイナスに変えようとする・・・』

『・・・俺の身体が完全にマイナスになったらどうなるんだ？』

・・・俺がそう質問すると、ロードは深刻そうに悩むと
驚きの真実を告げた

『・・・お前が、人で無くなる。』

『・・・それは、俺も“カミサマ”って呼ばれる存在になるのか？』

『いや、違う・・・俺達神は、＋側に位置する物だ。お前がなろうとしているのは・・・“悪魔”だ』

・・・真実を伝えられた
それは、当たり前のことを、当たり前のように告げるように告げられた
俺が・・・悪魔に・・・・？

『一度マイナスに堕ちたお前を引っ張り上げる方法はただ一つ・・・』

『・・・俺の死か？』

『いや・・・もっと簡単だ・・・お前が・・・・・・・・』

“お前が”から先の言葉が聞こえてこない・・・

ロードが伝えていいのか、駄目なのか、自分の中で答えをだしているようだった

俺は、ロードの答えを聞きたい・・・

俺が・・・一体どうなってしまうのか・・・

俺が・・・この先、どうなるのか・・・

このロードの一言で・・・決まるのだ

そして、ロードは答えを出したのか

一度息を吸って、大きく吐くと、俺に聞こえるようにはっきり答えた

『・・・・元の世界に帰る事だ。』

ロードから告げられた答え・・・

それは、俺が一番聞きたくない言葉だった・・・

―ビュォォオーーーー・・・・―
風を切る音が、俺の耳を通じて聞こえてくる・・・
そして、風が俺の体を通り抜けるように感じる・・・・

「イィィィィィヤッホォオオオオオオオオオオ！！！」

「・・・マスター、舌噛みますよ？」

「だいじょーぶだいじょー（ガリッ）～～～～～ッ！！！」

今俺は、カームと一緒にある場所へと向かっていた

それは、今日の朝の出来事だった・・・

昨日の夜、俺はロードから真実を聞き、どうしようもない気持ちをただ胸に抱えながら一日を過ごした
そしてその日の朝。
カームが料理を作ってくれて、皆で一緒に朝ご飯を食べていた頃だった・・・

『キュルル～～』

『あ・・・イグル、どうしたの？』

突然、大きめの窓から大きな鳥が口に手紙を咥えてやってきた

緑色の体に、白い羽・・・それは、ガスタのチューナーモンスター
「ガスタ・イグル」そのものだった

イグルは、俺を見つけるや否や、いきなりじゃれ始めて、俺が頭を撫でてやると、めちゃくちゃ喜んでくれた
どうやら、ガスタ・イグルは人懐っこいらしい
ライナは興味深そうにイグルの羽に触ると、イグルは突然の事で驚いたのか、一度その場で大きく跳ねた
ノースウェムコはその光景を頬を引きつらせながら見ていた
カームはその間、イグルの咥えていた手紙を読むと、イグルとじゃれている俺に話しかけてきた

『・・・マスター、その・・・お父さんから・・・』

『え？ウィンダールから？』

カームから渡された手紙に目を通す・・・
だが・・・・

『・・・・これ、なんて書いてあるの？』

勿論、字が読める訳が無く。
カームにそのまま手紙を返して読んでもらおうとした
すると、カームは「そうでした」と小さく呟いて、一度咳き込み、内容を教えてくれた

『『天城蒼痲へ
今日はお願いがあって手紙を渡した。
実は今日、ジェム高山から手紙が届いた。

最近、ラヴァルとの戦闘が悪化してきた。だが、ラヴァルと交戦中に黒い闇の生物が現れた。
その存在は無差別に攻撃を仕掛けてきたため、ジェム高山の一部が破壊されてしまったらしいので復興作業を手伝って欲しいとの事だ
だが、私は忙しく、向かう事が出来ない。故に、今手が空いているお前とカームに向かって欲しいと思っている。
勿論、二人だけでは人手不足だろう。
門の前に助っ人を呼んでおいた。一緒に連れて行くといい。『・・・だそうです。』

『ジャム高山って・・・・どこ？』

『・・・・アレです』

イグルが入ってきた大きな窓の外に大きく聳え立つとても大きな山・・・
それは、一つではなく、二つ・・・
カームが指差していたのは、その双山だった

で、その後門の前に行ったのだが、門の前でリーズがガスタ・ガルドの群れを追いかけていた訳で・・・
「何してんの？」と聞いたら「お前たちを待ってたんだよ」という返答が返ってきた
リーズ曰く、追いかけっこをしていたらしいが、追いかけている途中に「捕まったら焼き鳥な～♪」と言う声を聞いた瞬間、俺はガルドの気持ちを察した
これは・・・追いかけっこではなく、ガルドにとっては命を賭けた物なのだろうと・・・

で、現在ジェム高山に向けて移動しているのだが・・・

「おーーーい!!遅いぞー!!」

俺はソニック・バードの上に乗って移動していて、カームはガスタ・ガルドに乗って移動している

え？サンボルトじゃないかって？

・・・サンボルトは番犬のような役割なんだってさ・・・

だけど・・・リーズは・・・・

「なんで走って移動してんのにそんなに速ぇんだよぉおおおおおおお!!!!」

そう！俺とカームは移動手段をソニック・バードにしているのだが、リーズは自分の足で移動しているにもかかわらず、ソニック・バードとガルドを追い越して先を突っ走ってるわけですよ!!

おかしいって!!絶対無理だって!!だって速さが尋常じゃねぇんだもん!!

絶対強化人間だろ!!もしくは、サイボーグかなんかだろ!?

じゃないと納得いかねぇ!!

「はっはっは〜〜!!先に行ってるぞーーー!!」

すンごいスピードで走り去っていくリーズに、俺は溜め息を吐いた

やべぇって・・・凄すぎだって・・・松岡〇造もビックリだよ・・・

「・・・なぁカーム」

「はい？なんでしょう？」

「・・・・リーズって昔っからあぁなのか？」

走り去って、姿の見えないリーズを指差し言った
すると、カームは一度苦笑して、言った

「はい・・・昔から、体を動かす事が好きだったので・・・・移動手段の殆どが自力なんです・・・」

「・・・・・・」

だからあんなに腹筋割れてたのか・・・
足の筋肉も結構あったし・・・でも、なんか納得いかねぇ・・・・
おまけに、着やせするタイプだから、結構細いんだよなぁ・・・・・
ツインテールだし、胸もそこそこ大きいし・・・うん。体育会系の女の子だね。
基本俺は雑食だから、あぁゆー子でもイケるんだよなぁ・・

「・・・・・・マスター？今変な事考えてませんでした？」

「ウェ！？い、いや・・・何も考えてないよ？」

「・・・嘘ですね。口元がにやけてましたもん。」

カームの冷たい目線が痛い・・・・
いや、カームだってよく見ると、ほっそりした手に、優しそうな瞳・・・
しっかりしたボディライン・・・白い肌・・・

うん。やっぱ可愛い。

「な、なんですか・・・？」

じろじろ見られて恥ずかしいのか、カームは自分を抱きしめるように胸を隠した

頬も赤く染まっており、恥ずかしがっているのが丸分かりである

流石俺の嫁、可愛いな。・・・・流石に恥ずかしいから、本人の前じゃ言わないけどネ。

「いや・・・可愛いなぁ～って思って」

「か、かわっ・・・！？あ、あぅ・・・」

ふぉおおおおおおお！！顔赤らめて俯いてらっしゃる！！かわええええええ！！

はっ！？ごほんごほん！！・・・ふぅ、いったん落ち着こう俺・・・紳士（変態）たるもの、落ちつきを持たねば・・・

「おっ、見えてきたな・・・」

目の前に大きく聳え立つ大きな山を見つめた

一つはまるで今でも活動しているかのごとく、赤く燃えた色をしていて、一つはもう活動していないのか、火山灰が降り積もっている山となっていた

「・・・で、カーム。俺達はどっちの山に向かってるんだ？」

「あ、まだ伝えてませんでしたね・・・右がラヴァル高山、左がジ

ェム高山となっています。私達は、左の灰色の山に向かっています」

「あ・・・そうなんだ。ありがと」

右がラヴァル高山か・・・

ということは、ラヴァルの種族が住んでいる山か・・・

公式の方だと、ジェムナイトに一方的にラヴァルが喧嘩をふっかけたんだっけな・・・

その途中にヴァイロンが現れた設定なんだよなぁ・・・

俺が公式の設定を思い出している最中に、ジェム高山のまん前でぜぇぜぇと倒れているリーズを発見し、俺はソニック・バードの上から降りて、リーズに駆け寄った

カームはジェム高山直前でぶっ倒れているリーズに呆れたような顔をして先にジェム高山に向かった

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

「・・・おい、大丈夫か？」

「ははは・・・だいーじょーぶだいじょーぶ・・・ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

全力で走るからそうなるんだよアホ、と心の中で馬鹿にしておく

ガルドとかイグルに頼らなかったリーズが原因だろ・・・と心で思っておいて、その場でため息をついた

「はぁ・・・お前さぁ・・・なんで一人で突っ走ったわけ？」

「ぜぇ・・・き、鍛えるためだよ・・・あたしには、それしか・・・

ぜぇ・・・でき・・・ないから・・・」

「・・・・・・・」

まじまじとリーズを見つめた

疲れてその場にぶっ倒れるのは、スポ魂漫画の特権と言う奴だと思うが、生憎、倒れているのが男子ではなく、女子という時点で間違っていると思う。

それ以前に、腹筋も結構割れてて、足の筋肉もしっかりしてるし、格闘経験者の俺が思うに、これでも、十分凄い事だと思う

細く、しっかりした腕には、ちゃんと筋肉ついてるし、握力もあると思うし・・・

普通の女性でも、ここまで鍛える事はあまりないだろう。

でも、どうしてリーズはこんなにも頑張るのだろう・・・？

ふと疑問に思ったので、俺は静かに問いかけた

「・・・どうしてそんなに鍛えるんだ？お前、そのまんまでも十分強いだろ？」

「鍛える・・・理由・・・？んなもん・・・一つしかねぇよ・・・」

ガクガクに震えた足で立ち上がるリーズは、どこか男らしくて、でも、どこかに辛さを抱え込んだ瞳に、俺は言葉を失った

そして、リーズは続けた

「・・・アイツは・・・カームは・・・私の幼馴染だから・・・でも、私はアイツのような才能はない・・・なら・・・やれる事は一つ・・・才能で勝てないならっ・・・努力するしかないだろっ・・・

！！」

才能・・・それは、自分の中の力
自分が気づかずとも、勝手に開花していく不思議な物
俺も、才能と言う物はあまりない。
あるのは、新作のゲームなどを買った初日で終わらせられる事や、
遊戯王の腕位のものだ
だけど、リーズは、自分と幼馴染であるカームに・・・子供の頃から負けていたのだ
それが悔しくて・・・他の事で彼女（カーム）に追いつこうとしたんだ・・・
それが・・自分を鍛え、磨く事・・・

間違いではないと思う。
俺だったら、他の分野で見返してやろうって努力するかもしれないし、自分の誇っていた事で負けたら、俺は挫折して、その場で諦めてしまう。

でも・・・リーズはそれでも、諦めずに進んでいるのだ
正直、俺はリーズの一生懸命な姿に、昔の自分を照らし合わせていた
どうしても・・・子供の頃の俺にそっくりで・・・
“夢をあきらめない姿勢を応援したい”という気持ちが現れてしまう
俺だって・・・彼女のように必死になっていたから

立ちあがったにも関わらず、もう一度座り込んでしまったリーズの前に立ち、俺は手を差し伸べた
そして、静かに言った

「・・・ほら。手ぇ貸すぜ」

「え！？あ、ぇ・・・あ、ありがと・・・」

そのままゆっくり立ちあがるリーズは、少しふらつきながらゆっくりと歩き出した
だけど、何故か俺の手をとったまま歩き出すリーズ
まるで、こちらへ来いと言っているかのように手を引くリーズに、俺は仕方なく一緒に歩き出す事にした

ジェム高山までもう少し・・・
高く聳え立つ山を見上げながら歩く俺達
リーズの息はまだ荒く、それでも、しっかりと一歩を踏み出そうと、必死に足に力を込めていた

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

「・・・ほら。」

腰に下げるタイプのバッグの中から、水の入ったペットボトルを渡した
だが、ペットボトルを見るのが初めてなのか、リーズは水の入った容器だけを渡され、どうしたらいいか分からないという顔をしてこちらを見てきた

「あぁー・・・なんだかんだでこの世界って面倒なんだな・・・ここを、こう開ければいいんだよ」

ペットボトルのキャップを外して、そのまま水の入ったペットボトルを渡した
リーズは一度「あ、ありがとう」と言って、中に入っている水を全部飲み干しやがった

「ぷはぁ～～～～～！！い～き～か～え～る～♪」

「やれやれ・・・本当に嬉しそうだなぁオイ・・・」

「いや～、運動した後の水ってサイコーだろ？お前はそう思わないのかっ！？」

ずびしっという音が付きそうな位鋭く俺を指差していた
少しだけ元気を取り戻しただけにも関わらず、見ているこっちまで元気を分け与えられている気分になった

「思うよ。俺だってバテバテになってりゃ、無駄にテンション上げようとしたりするし、水も欲しがるわ。」

「おっ！？とうとう私の話にノってくれる男第一号を見つけた！！」

「第一号って、今まで居なかったのかよ！！」

「いやー、私達の同年代の男は今まで居なかったからなぁ～。ガスタは基本的に女が多いからさ～。はっはっは！よろしくな、第一号！」

「誰が第一号だ！！」

こうやって本当に楽しくて笑っているリーズの笑顔は、本当に可愛くて、見ているこちらも笑顔になれるような気がしてきた
こうやって見ても・・・リーズも、どっかのエロゲのキャラで出てきそうだし、

「おっ、カームだ！！おーーーい！！」
前方にカームがガルドから降りて、こちらを見つめて待っていてくれた
さっすがカーム。優しいねぇ～～
「今行くから、待ってろよー！！」
・・・なぜか、遠くに居るはずなのに、カームの冷たーい目線が俺に突き刺さっていた
あれ・・・？なんで、あんなに怒ってらっしゃるの・・・？
・・・・まさか・・・・？
「あ、リーズ。手・・・」
「ん？あ、そうだったな。ごめんごめん。一心同体みたいな感覚だったから、まったく気づかなかったＺＥ☆」
いやＺＥ☆じゃねぇから！！俺もすっかり忘れてたけど、いつの間にか一心同体みたいに扱われてんだけど！？嫌だよ！？あなたと合体したい・・・ってフレーズは当分昔で終わったと思うぞ！？
「・・・まぁ、アレだ・・・手・・・繋いでくれて、ありがと・・・」
突然、リーズがそんな事を呟いた
とても小さな声だったので、聞き逃しそうになったが、俺の耳にはしっかり聞こえた
だが、リーズの顔を見ていた

微かに頬を赤らめて、恥ずかしがっているのか、こちらをちらちら見てきている
なんつぅんだろ・・・こういうギャルゲってどっかに売ってなかったっけ？

ようやく俺と視線が重なり、俺は静かに微笑んだ
すると、リーズは突然顔を真っ赤にして、手をつないだままなのに走り出した

「～～～～～ッ！！」

「え、ちょ、おま！？お、落ちつけ！！話せばわかる！！ぬぉぅ！？」

走りながらリーズを説得する俺
だが、リーズは聞く耳を持ってくれず、俺を引きずるように走っている
ちょ、足痛くて寿命がマッハなんだが！？

「きゃああ！？」

突然、前を走っていたリーズが何かに躓いて、その場に転んでしまった
だけど、俺と手を繋いだまま・・・

簡単に言うと
俺、リーズに引き摺られる→リーズ、コケる→勢いを殺そうと必死になる俺→結局止まらずその場でコケる→だけど、何故か俺は痛くない。→何故？

答えは簡単・・・・

「あ・・・・あるぇー・・・・？」

なんか、柔らかいんだけど・・・
主に頭の辺りがさ・・・
つか、なんか、良い匂いするんだけど・・・・？

「・・・あ・・・ぅ・・・そ、う・・・ま・・・・？」

いつの間にか、リーズは俺の名を呼んでいた
だが、俺は、今何が起こっているのか、さっぱりわからなかった

あれ・・・・？なんで俺の前にヘソ的なものがあるの・・・？
つか、視線下げると、スカートっぽいものが見えるんだけど・・・
・・・・ま・さ・か！！！

バッと起き上がると、目の前にはリーズの顔が目いっぱい広がって、
恥ずかしそうな顔と、目じりに若干たまった涙が見えた
頬も染まっており、いかにも恥ずかしがっていた

「ご、ごめぇぇぇ

リーズから離れ、後ずさると、俺は何か柔らかい物に当たった
それは木のように固い感触ではなく、ぷにぷにした感触だった

「・・・・マスター？」

そーーーっと上を見上げると、真っ黒な炎を纏ったカームが居た
い、いや・・・このアングルまずいんだけど・・・！！
い、いくら短パンでも、す、隙間から見えそうなんだけど・・・・・
！？

「・・・リーズの感触はどうでした？」

まるで脅すように俺に言い放つカーム
若干ドスの利いた声だったので、めっちゃ怖いです。はい。
こ、ここは真剣に答えないと死ぬ・・・！！
本能が勝手にそう告げていたので、俺は愚かなことだと知りつつ、
カームの質問に答えた

「す、すっごく柔らかかったです・・・・」

「そうですか・・・では・・・」

いきなり魔法の杖みたいなのを取り出したカームは、俺にこう言った
「ご感想、ありがとうございました」と・・・
その後、俺は魔法の杖のような物で脳天をぶっ叩かれ、気を失った・
・・

・・・・マスターは酷い人だ。
どんなに私が想っても、他の娘に目移りしてしまうのだから・・・
この前は、リーズは脈なしだと思ったのに、突然マスターの事を意識し出したのが分かってしまった
乙女の感・・・というものかは分からないけど、何故か、マスターとリーズに黒い感情を持ち始めてしまった・・・

「・・・・か、カーム？あ、あた、あた、あたしは・・・・・！？」

「・・・リーズ・・・」

マスターをソニック・バードさんの背中に乗せて、静かに言った

「な、に、も・・・無かったよネ？」

「い、いぇ・・・！？あ・・・うん！！何もなかった！！」

「・・・・そう」

ソニック・バードさんの背中の上で気絶するマスターを見て、何故か少しだけ落ちついた
それと同時に、私の中にあった黒い何かも徐々に消え始めた・・・

「・・・・・行こう？」

「あ、うん・・・・」

ガルドを呼んで、静かにリーズを見つめた
・・・私よりも大きな胸。引き締まった体・・・
マスターは、一体どんな女性が好みなのだろう・・・？

ずっと疑問に思っていた事を考える私・・・

マスターは、どんなに女の子でも、好きになってしまう・・・

だが、その基準が分からない・・・

なら、今度聞いて見る事にしよう・・・
その時に・・・今度こそ、私の想いを届けるために・・・

二十九章　“ありとあらゆる異端を打ち消す力”・・・ねぇ・・・（後書き）

「というわけであとがきコーナー」

蒼痲「・・・ぅん・・・？あれ・・・？ここどこ？俺は何してたんだ・・・・？」

「あー・・・知らない方がいいと思うぞー？あ、そだ。今日はカームを呼んでるぞー」

カーム「ど、どうも・・・が、ガスタの静寂　カームです・・・よろしくお願いします」

蒼痲「あれ？カーム・・・？な、なんでだ・・・？なーんか思い出せそうなんだけど、何も思い浮かばない・・・？」

「だから、知らない方が幸せのことだってあるって。」

蒼痲「・・・・ま、いいや。で、今日のあとがきコーナーはなんだ？」

「まぁ、簡単に言う「コラボ募集！！」みたいな物だな」

カーム「コラボ・・・・ですか？」

「まぁね。簡単に、ウチの作品に出て頂けませんか！？みたいなノリの企画。」

蒼痲「おい待てゴルァ。お前、異世界編のせいでリリカルなのはの

話がぜんぜん出てこねぇんだけど？」

「まぁ、アレだ。A”sまでの主人公の外伝みたいな話だから、正直、こっち書いててていいのかなぁーって思い始めたトコ。」

カーム「え・・・じゃあ、どうするんですか？」

「まぁ、アンケートでも取るさ。このまま異世界編続けるのか、それとも、A”s編を別の小説で書くか・・・まぁ、個人的には、異世界編続けて、A”s編にいきたいなぁ・・・」

蒼痲「んじゃあ、それでいいんじゃね？」

「・・・そだね。んじゃ、これからの方針は「異世界編終了まで頑張る！！」でいこうか」

カーム「・・・・あれ？アンケートは・・・」

「・・・しないでおこう。」

蒼痲「おいィ・・・」

「で、でもコラボ募集はやりたいなぁ～って思ってるんだぞ！？まぁ・・・俺の駄文じゃなくて、他の作者の方々にお前等を操作していただければなぁーと思ってるけど・・・」

蒼痲「ざっけんな。俺みたいな歪んでる奴動かしたい奴なんて居るか。ましてや、チート嫌いだぞ？おまけに、得もないしな。な？カームも嫌だろ？」

カーム「・・・あの、私の得は・・・？」

「・・・もしかしたら、他の作者様が蒼痲とイチャイチャさせてくれるかも（ぼそっ）」

カーム「やりましょうマスター！！」

蒼痲「あれ！？味方が居なくなったぞ！？」

「ということで、コラボ募集しまーす！何かありましたら、感想の所にコメントをどうぞー＾＾」

カーム「では・・・また次回」

蒼痲「・・・俺の話は無視？無視なのか？」

番外編　祝！初コラボ！・・・鬼畜じゃない。立派な戦法だ

それは・・・突然の出来事だった

『・・・は？今なんつった？』

幻影（イリュージョン）を倒して手に入れたこの世界の平和・・・

だが、突然、俺の回線におっさんからの連絡が入って、俺は飛び起きるように跳ねた

『いやさー・・・なんか、幻影（イリュージョン）達の残党が残ってるらしくてさー・・・』

『へぇー・・・で、俺にそいつらの駆除をしろと？』

『まぁ、簡単に言うとそうだな。』

俺の回線に入ってきたのはロードとおっさんの二人。

リビングで寛いでいた俺と敦はその場で話を聞いていた

最近、ようやくライナ達の姿が見えるようになったってのに・・・

まだ居やがったのが異端（バグ）野郎ども・・・

『でもさー、実は問題が発生しちゃってさー・・・』

『は？問題？』

『あぁ・・・実は、俺と同じように、世界を管理している神から連絡があってな・・・そいつの管理してる世界から、二人ほど、別の

世界に飛ばされてしまったそうだ』

『そ、そうなんですか？それっと、まずい事じゃ・・・』

『あぁ。すっごく悪い事だ。元々、世界の均衡と言う物は・・・』

『あーもう！！長くなる話却下！！結論言え結論！！』

ロードの野郎が長ったらしい事を言い始めようとしたので、俺が結論を求めた

まぁ、どうせ駆除して、その二人保護しろみたいなことだろうけどさ

『まぁ、簡単なことだ。バグの駆除と、その二人の保護。以上。ゲートは今開くから、一応デッキとか持っていけよ』

『・・・なんでデッキが必要なんだよ？』

『それは、会えば分かる』

ロードがそう言い残し、回線は切れた

それと同時に、おっさんも回線を切って、俺達の寛いでいたリビングに突然闇の回廊が開いた

・・・なーんか、本当に嫌な予感するんだけど・・・

「・・・どうする敦？」

「行くに決まってるよ！！その二人が困ってるかもしれないじゃないか！！」

・・・時々、お前のその純粋さが羨ましいよ・・・（涙）

そう思いつつ、俺はバッグの中からデッキを取り出した・・・

・・・どうすっかなぁ・・・このデッキも持っていくか・・・？

俺が手にしたのは、最近新しく作ったデッキだ。

テーマは「アンチシンクロデッキ」

このデッキのコンセプトは、シンクロモンスターを奪うデッキ

正直、このデッキは要らないような気がするんだけどなぁ・・・

ま、いっか。一応持っていこう・・・

「よし！！行こう！蒼痲君！！」

「おうよ・・・」

俺よりも先に闇の回廊に入った敦の背中を見つめ、俺は一度小さな

ため息をつき、そのまま歩き出した・・・

「・・・・（　。д。）ハァ？」

突然、目の前に広がった光景を見て、俺は絶句した
な、なんか・・・おかしいんだけど・・・？

「行け！！ＢＦ－アーマード・ウイング！！」

「裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）で攻撃！！」

・・・なんか、ガチＢＦとガチライトロードを使って敵をねじ伏せてる男女が居るのですが？
アレ・・・？おかしいな・・・俺の目って狂ってたっけか？
今度眼科に行ってみよう・・・

「なぁ敦・・・これ、どういうことなの？」

「い、いや・・・僕に聞かれても・・・」

「！？お前もコイツ等の手先か！？空！俺はデカイ方をやるから、お前は子供の方を頼む！！」

「は、はぁ！？」

突然、俺達を見つけたと思ったら、いきなりデュエルディスクを展開してこっちに向かって来たんだけど！？
ちょ、おま・・・いい加減にしろよ！！
俺だってまだ状況分かってねぇのに、いきなりなんだってんだよ！！

「お、おい待て！！俺達は敵じゃ・・・」

「デュエル！！先行は貰うぜ！！俺のターン！！」

「おい待てゴルァ！！」

俺の話を余所に、勝手にデュエルを始める黒髪黒眼の・・・美少年？

うわーぉ、いかにもモテてそうでうぜぇ・・・

・・・つか、俺の右手にも重りっぽいもんがついてんだけど・・・

まさか・・・

「・・・・どういうことなの」

やはり、デュエルディスクが勝手に作動していて「早くデュエルしろやこのクソガキがぁ！！」みたいな感じでいつの間にかデッキもセットされていて、ライフポイントが表示されている所を見ると、アニメのように４０００と表示されていた

・・・まさか、ロードが言ってた会えば分かるって・・・

「俺は手札から永続魔法発動！！「黒い旋風」！効果は・・・」

「あぁー、ガチＢＦの基本中の基本なんて分かってっから、とっとと

とデュエル進めろ」

「そうか、なら話が速い！！俺は手札から、ＢＦ－蒼炎のシュラを召喚！黒い旋風の効果でデッキから、月影のカルートを手札に加える！そして、手札のＢＦ－黒槍のブラスト、ＢＦ－疾風のゲイルを特殊召喚！！」

「あーはいはい。一ターン目から飛ばすねぇ・・・」

「レベル４黒槍のブラストに、レベル３疾風のゲイルをチューニング！！黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！現れろＢＦ－アーマード・ウィング！」

うわーぉ、ガチＢＦのチートカードだー（棒読み）
きゃー、怖いよー（棒読み）

「俺はカードを一枚セット・・・ターンエンドだ！」

ふぅん・・・相手の手札は二枚。
その内の一枚はカルート・・・
で、伏せカードが一枚か・・・
なかなかうぜぇ始まりだなぁ・・・

「俺のターン！ドロー！」

ま、いいや。ガチＢＦ専用に作ったと言っても過言ではないこのデッキで勝負してやるよ！！

「俺はフィールド魔法！機皇城を発動！！そして、デッキから青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）をゲームから除外！現れろＳｉｎ　青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）！」

「Ｓｉｎモンスター！？」

「やれやれ・・・戦闘破壊されなくて、ダメージゼロのチートカードに、モンスターを戦闘破壊するとデッキからＢＦ釣ってくる厄介なモンスター揃えられちゃ、こっちも困るんだよ・・・」

「だが、俺にはこのカードがある！リバースカードオープン！サイクロン！！」

おっ、機皇城を破壊してくれたか・・・

だが、これがなにを意味するのか、アイツは分かってるのかねぇ・・・

さぁて・・・こっからは一方的ななぶり殺しの始まりだぜぇ・・・

「Ｓｉｎモンスターは、フィールド魔法が無ければ破壊されるはず！Ｓｉｎ　青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）が破壊される！！」

俺の場のブルーアイズが突然苦しみ始め、そのままバァン！！と爆発しながら消えてしまった

だけど・・・お前は運が悪かったな

「俺の場の表側表示で存在するモンスターが、効果によって破壊された事により・・・俺は手札の機皇帝ワイゼル∞を特殊召喚するぜ！！」

「き、機皇帝だと！？」

「さらに、機皇城が破壊された事により・・・デッキから、機皇帝と名のついたモンスターを手札に加える・・・俺は、機皇帝スキエル∞を手札に加える・・・さぁ！こっからが本番だ！機皇帝ワイゼルの効果！！一ターンに一度、相手のシンクロモンスターを装備カード扱いで装備する事が出来る！！愚かなガチＢＦのシンクロモンスターよ！消え失せろ！！」

ワイゼルの中の光る球体が突然、何かを奪う鎖のようにアーマード・

ウイングを捕縛した
そして、そのままアーマード・ウイングはワイゼルの中へと消えた・・・

「俺のアーマード・ウイングが！？」

「さらに、機皇帝は吸収したシンクロモンスターの攻撃力分、その攻撃力を上げる・・・そして、俺はおとぼけオポッサムを通常召喚！効果で、このカード自身を破壊する！！さぁ！俺に喧嘩を吹っ掛けたことを後悔するんだ！！バトル！！ワイゼルよ！愚かなＢＦに裁きを下せ！！」

「ぐぅっ・・・！！」

シュラは破壊され、その戦闘ダメージを受ける黒髪の美少年・・・
うっし、大ダメージ・・・

黒髪の美少年　４０００→８００
俺　４０００

・・・あれ？なんでカルート積まなかったんだ？
そうすりゃ、もう少し持ちこたえられたのに・・・
ま、いっか。こっちもガチＢＦ相手にそこまで手加減してらんねぇし

「俺はカードをセット・・・ターンエンド・・・」

さぁて、状況的には俺が勝ってるかな・・・
ん？なんでオポッサムを破壊したかって？
そんなの簡単だ・・・保険だよ、保険。
もしもワイゼルが破壊されたらって考えてやっただけだっつの

「俺の・・・ターン！！」

ぷぷっ、後攻1キルの出来るガチBFがこのあり様wwwざまぁwww

マジシンクロ奪えるとか最高www

「俺は・・・強欲な壺を発動！！デッキから、二枚ドロー！！」

「おい待て禁止カードだろそれ！！」

ざっけんなよ！！なんでんなアニメでしか使われない強欲な壺があるんだよ！！

ざっけんな！！だったら俺も入れてるわ！！

「お前の世界が禁止カードでも、こっちの世界じゃ使えるんだよ！！」

「納得いかねぇえええ！！」

知らねぇよんな理屈！！

チクショウ！！こいつやっぱ、アニメの方の遊戯王の世界から来た奴だろ！！

卑怯だ！！インチキだ！！

「しゃあねぇな！！認めてやるよチクショウ！！」

「俺は・・・BF－極北のブリザードを守備表示で召喚！黒い旋風の効果で、俺は鉄鎖のフェーンを手札に加える！」

・・・やっぱアニメと同じかよ・・・
こうやって思うと、アニメってセコイなぁ・・・

「効果で、俺は墓地の疾風のゲイルを守備表示で特殊召喚する！疾風のゲイルのモンスター効果！お前の機皇帝の攻撃力と守備力を半分にする！俺はこのまま・・・ターンエンドだ」

手札は3枚で、場には二体のモンスターか・・・
おまけに、ゲイルは早めに潰さないとな・・・後後厄介になるし

「俺のターン！！ドロー！！」

ここで、俺が貫通効果を持ってる奴を引けば勝つんだけど・・・
・・・魔法カードか・・・仕方ねぇな・・・

「スタンバイフェイズに、おとぼけオポッサムは自身の効果で戻ってくる・・・だが、もう一度効果を発動！もう一度オポッサムを破壊するぜ！！ま、スキエルは出さないでやるよ。」

「正確には、出せないが正しいだろう？」

「へぇ・・・機皇帝の効果、知ってんのか・・・なら話が速い・・・
俺はこのままバトルフェイズに移行！ワイゼルでゲイルに攻撃だ！！」

「ぐぅっ・・・！！手札のＢＦ－蒼天のジェットのモンスター効果を発動！このカードを墓地に送って効果を発動！自分フィールド上に存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターはその戦闘では破壊されない！！」

なぁっ！？そんなＢＦのカード見たことねぇぞ！？
アレか！？俺がこの世界に来たから、元の世界で新しく売られてるパックに収録されたってのか！？
うわ・・・やべぇ・・・一度そのパック買ってみたいわ・・・

「ぐぅっ・・・上手く繋いだな。俺はこのままターンエンドだ！」

ま、状況は俺の方が圧倒的なんだけど・・・
ゲイルの効果で、またワイゼルが半分にされるのは困るんだよなぁ・・・
ま、その為のこのカード（伏せカード）なんだけどな！

「俺のターン！！ドロー！！」

まるで居合い切りをするかの如く、黒髪の美少年はカードをドローした
ほぅ・・・もしかして、コイツ・・・
なんかキーカードでも引いたか？

「俺は、ＢＦ－疾風のゲイルの効果を発動！！もう一度攻撃力、守備力を半分にさせてもらうぜ！！」

「あぁ！別に構わねぇよ！だが！その効果処理後、俺はリバースカードオープン！デストラクト・ポーション！自分のフィールド上のモンスターを選択して発動！選択したモンスターを破壊し、その攻撃力分だけライフを回復する！」

攻撃力１２５０となったのワイゼルを破壊して、俺はライフを１２５０ポイント回復した
これで、俺のあいつのライフは大分離れたな・・・これで、ワンキ

ルされなくて済むな・・・

「そして、俺の場の表側表示のモンスターが効果によって破壊された時、手札の機皇帝スキエル∞を特殊召喚！！さぁ！馬鹿の一つ覚えのシンクロしかできない、ＢＦの力を見せてみろ！！」

「確かに、シンクロ召喚が主軸の俺のデッキには機皇帝との相性は最悪だ・・・だけど、勝てない訳じゃない！！俺は、ＢＦ－鉄鎖のフェーンを通常召喚！！黒い旋風の効果を発動！俺はデッキからＢＦ－銀盾のミストラルを手札に加える！！」

んな事言っても、お前の場にはチューナーが二体と、フェーンだけじゃねぇか・・・

フェーンで俺のスキエルを守備にしても、なんの意味もないけどな・・・

なにが狙いだ・・・？

「そして、手札のＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚！！」

・・・やっぱ、ブラストはガン積みだよなぁ・・・

貴重なアタッカーだし、貫通持ってるしな・・・

ん・・・？待てよ・・・？レベル２のチューナーとレベル４のモンスターと、レベル２のモンスター・・・

おまけに、ＢＦ使い・・・・

・・・なーんか、嫌な予感がしてきたぞ・・・

「俺はレベル４黒槍のブラストとレベル２鉄鎖のフェーンにレベル２極北のブリザードをチューニング！吹き荒べ嵐よ！鋼鉄の意思と

光の速さをえてその姿を昇華せよ！シンクロ召喚！現れよＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド！」

銀色の閃光と共に、シルバー・ウィンドは現れ、俺の機皇帝を睨むように佇んでいた

うわっ・・・いかにもやばいモンスター来ちゃったよー・・・・

「効果は使わない！だが、俺は疾風のゲイルを攻撃表示に変更！行くぞ！バトル！！行け！シルバー・ウィンド！！パーフェクト・ストーム！！」

シルバー・ウィンドの巻き起こした風が、俺の機皇帝に向かい放たれ、スキエルは短い悲鳴を上げ、どんどん降下してきた

「馬鹿な！？シンクロモンスターに、機皇帝が敗れるだと！？」

・・・まぁ、心からはそんなこと思ってないけどネ（笑）

つか、よくここまで演出できるよなぁ・・・

すげぇったらありゃしねぇ・・・

「まだだ！俺はダメージステップ時に手札の月影のカルートの効果を発動！シルバー・ウィンドの攻撃力を１４００ポイントアップさせる！！」

「ぐぅっ！！」

俺のライフが少しばかり削られ、５２５０もあった俺のライフは一気に３２５０まで減らされ、まだ疾風のゲイルの攻撃が残されていた

「疾風のゲイルでダイレクトアタック！！」

「ふん。たかだか１３００位くらってやらぁ！」

「俺はリバースカードをセット・・・俺はこのままターンエンドだ」

・・・あぶねぇな・・・

ライフ８００しかねぇくせに、滅茶苦茶強ぇな・・・

油断したら、こっちが負けそうになるぜ・・・・

だけどな！！シンクロモンスターを封じる事だけに特化した俺のデッキを舐めるなよ！！

「俺のターン！ドロー！・・・残念だったな、ガチＢＦさんよぉ・・・これで、アンタの負けは確定したぜ・・・見せてやるよ・・・機皇帝の力をな・・・！！俺は、墓地のおとぼけオポッサムの効果を発動！スタンバイフェイズ時に、このカードは自身の効果で戻ってくる！！」

「何・・・・？まさか、手札に機皇帝が！？」

「その通り・・・もう、お前にはターンは回さねぇぜ・・・このターンで終了だ。おとぼけオポッサムの効果を発動！！自身を破壊！！さぁ・・・絶望を味わえ・・・自分の場のモンスターが効果で破壊されたことにより！手札の機皇帝・・・・グランエル∞を特殊召喚！！」

「馬鹿な・・・！？グランエルだと！？」

「・・・終わりだ。グランエルの効果を発動。一ターンに一度、相手のシンクロモンスターを装備する・・・さぁ、調子に乗るのもそこまでにしな。さっさと消えな・・・シルバー・ウィンド」

「シルバー・ウィンド！！」

機皇帝に吸収され、場から居なくなったシルバー・ウィンドの名を叫ぶ美少年

・・・・つか、この状況って、主人公がライバルに負ける図じゃね？

うーん・・・ライバルじゃないしなぁ・・・

まず、名前すら知らねぇからなぁ・・・

おまけに、俺の事“敵”って思ってる奴が、俺と友達（ダチ）になるとは思えねぇからなぁ・・・

「・・・保険はかけておくか。俺は、もう一枚の機皇城を発動。エクストラデッキから・・・スターダスト・ドラゴンをゲームから除外・・・現れろ！Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン！！」

「！？な、なぜＳｉｎモンスターを出した！？グランエルで攻撃すれば、勝てるだろう！？」

「保険だ。それが、攻撃反応型のカードだと思ってな・・・グランエルの効果を発動、メインフェイズ時に奪ったシンクロモンスターを守備表示で特殊召喚する。現れよ、孤高のシルバー・ウィンド」

グランエルの中から、まるで鎖に繋がれるかのようにシルバー・ウィンドが現れ、守備表示だが、まるで主である美少年に「すみません・・・」と謝っているように顔を伏せていた

「ま、絶望を味わうんだな。俺は手札の魔法カード発動、地砕き。お前の場のゲイルを破壊するぜ。さぁ、バトルフェイズだ・・・Ｓｉｎスターダスト・ドラゴン！ダイレクトアタック！！」

「ぐぅっ・・・使うしかないか・・・！俺はリバースカードオープン！聖なるバリア　ミラーフォース！！」

Ｓｉｎスターダスト・ドラゴンが攻撃すると、それは光の障壁のような物に阻まれ、そこから発せられる光で、俺の場のグランエル、Ｓｉｎスターダスト・ドラゴンは破壊されたほらね。攻撃反応型だった。
なんだよあのタッグフォース並みのデスティニードローは・・・
でも、保険かけといて良かったぜ・・・これで、本当の絶望って奴を思い知らせてやれるんだからな・・・！！

「これで・・・次のドローで・・・」

「悪いが、お前にターンはこないぜ・・・・俺の場の「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターが破壊されたことにより・・・ライフを半分支払い・・・・手札から、Ｓｉｎトゥルースドラゴンを特殊召喚！！」

俺の後ろから、とても巨大な竜がその場で飛翔し、まるで全てを破壊しにきたかのように、その場で大きな叫び声をあげた
残りライフが例え８００でも、つねに本気で相手に相手をするのが決闘（デュエル）というもの・・・
さぁ！終わりにしようぜ・・・！！

「馬鹿な・・・攻撃力５０００のモンスターだと！？」

「・・・もう諦めな。場は旋風のみのお前が・・・俺のトゥルースに勝てると思うなよ？それに、まだバトルフェイズというのを忘れるなよ・・・さぁ、消えな。」

俺の掛け声とともに、Ｓｉｎトゥルースドラゴンは口にエネルギーを溜め、俺が手を振りおろすと同時に、そのエネルギー波を放ち、あの美少年は爆炎に包まれた

デュエルディスクに「勝利しました」という文字が浮かび、俺はあの美少年との決闘（デュエル）に勝利した・・・
さて、敦はどうなってるかねぇ・・・

「私のターン！！私は、ライトロード・ウォーリアー・ガロスをリリース！ライトロード・エンジェル・ケルビムをアドバンス召喚！！効果を発動！デッキの上からカードを４枚墓地に送り、相手の場のカードを二枚まで破壊する事が出来る！私は、伏せカードを二枚破壊！！その後、デッキから墓地へ送られた、ライトロード・ビースト・ウォルフのは特殊召喚される！」

「ぐぅっ・・・！！」

・・・やばいねぇ・・・セットモンスターが1枚で、伏せは二枚とも割られたか・・・
これは、状況的にはまずいかもなぁ・・・
お互いのライフに変動は無いけど、これは相当まずいな・・・

「バトル！ライトロード・エンジェル・ケルビムで、攻撃！！」

敦のリバースモンスターは・・・プロト・サイバー・ドラゴンか・・・

そりゃ、勝てねぇわな・・・

つか、あの子の使うデッキはガチライロかよ・・・

二人揃ってガチすぎだろ・・・

「ビースト・ウォルフでダイレクトアタック！！」

「あぁぁぁぁ！！」

ビースト・ウォルフの攻撃をくらい、後ろに後退する敦

だが、その目にはまだ闘志が宿っているのが分かった

ほぅ・・・まだやれるのか・・・

「私はこのままターンエンドです」

「僕のターン！ドロー！！」

敦の奴、マシンガジェでやってるのか・・・

キメラテック狙いなのか？それなら、とっととカタつけねぇと、負けるぜ・・・？

「僕は、未来融合―フューチャー・フュージョンを発動・・・対象はキメラテック・オーバー・ドラゴンです！僕は、デッキから・・・全てのモンスターを墓地に送ります！！」

おいィィィィ！？！？！？

それ自殺行為だぞ！？不味いって！！それは本当に不味い！！

俺みたいに状況を読めばそうだけど、今はそんな時じゃないだろ！？ピンチじゃねぇじゃん！！

「僕は・・・オーバー・ロード・フュージョンを発動！！墓地の・・・全てのモンスターをゲームから除外！！現れろ・・・キメラテック・オーバー・ドラゴン！！」

だから、まずいってえええええ！！
ライロにはオネスト積まれるなんて当たり前の話だぞ！？相手の手札見ろ！！ハンドレスだったらいいけど、手札がある状態だったら警戒しろよぉおおおおお！！
つか、その戦法俺とよく似てるんだけど！？何！？俺から学んだのか！？

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの召喚に成功した時・・・僕は自分の場のカードを全て墓地に送ります・・・そして、ネクロフェイスを通常召喚！！」

・・・・あれ？あんなカード、敦入れてたっけ？
つか、ネクロフェイスなんて渋いカード入れるか・・・・？
・・・と言う事は、一族の結束をデッキから抜いたのか・・・・？

「ネクロフェイスの効果を発動！！お互い、除外されているカードをデッキに戻し、シャッフルしてください・・・その後、ネクロフェイスの攻撃力はデッキに戻したカードの数×１００ポイントになります！僕は、ゲームから除外されているモンスターカード全てをデッキに戻し、その数の合計・・・２１枚×１００ポイント！つまり、攻撃力を２１００ポイント上昇！！」

・・・やるな敦・・・
だけど・・・・オネストを警戒した方がいいぜ・・・？
お前の残りライフ、１９００だし・・・

「バトル！！ネクロフェイスで、ウォルフに攻撃します！！」

「ダメージステップの時に、私はオネストの効果を発動します！このカードを墓地に送って、エンドフェイズ時までウォルフの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップ！！」

「え・・・・・！？」

あ・・・・負けた。

ま、相手がライロならしゃあねぇって・・・

おまけに、ライフ４０００だし・・・・

「ま、また負けちゃった・・・・」

敦がその場でぺたんと座りこんだ

俺は、敦に駆けより、静かに言った

「まったく・・・少しは警戒しようぜ？相手にオネストがあるかもしれない、って思いつかなかったのか？」

「あ、あはは・・・つい熱くなっちゃって、忘れてました・・・」

「・・・・はぁ～・・・今度、ライロとか、ＢＦとかの対策の仕方教えてやっから」

「え！？ほんと！？」

ったく・・・敦はまだまだ初心者だなぁ・・・

相手がライロとか魔轟神だったらオネスト警戒は普通だっての・・・

あぁー、グリムロのプレマ欲しい・・・

「大丈夫？恭夜？」

「あぁ・・・大丈夫だ・・・久々に負けたなぁ・・・」

ゆっくり後ろを振りかえると、恭夜と呼ばれたあの美少年がその場に座りこんでいた

まぁ、このデッキは全然ガチじゃないし・・・おまけに、あっちも一群使ってなかったっぽいし、今回は俺の勝ち・・・だけど、次戦ったら、どこまでいけるかねぇ・・・

その場合、俺も本気で潰しにかからないとな・・・

「あそこでＳｉｎトゥルース・ドラゴン出されちゃ、仕方ないよ」

「はぁ～・・・」

・・・つか、アイツ等、俺達の事敵って思ってバトルしかけてきたんだよね・・・？

あれ？何この雰囲気・・・？

「あー・・・俺とデュエルしたそこの・・・えぇーっと・・・」

「恭夜。黒羽恭夜（くろばきょうや）だ。」

「恭夜か・・・俺は天城蒼痲。ただの馬鹿だ。覚えなくていいぞ」

「ただの馬鹿があんなに機皇帝を出すか？それに、Ｓｉｎモンスターも入ってるし・・・そのデッキのコンセプトは「破壊」か？」

「まぁな。おとぼけオポッサムは自身を破壊する事が出来る。あの時、シルバー・ウィンドじゃなくて、スターダストでも出してればまだ分からなかったのにな・・・ダメージ優先に考えたお前のミスだ。」

「・・・次は負けないからな・・・」

そういうと、俺に手を伸ばしてくる恭夜
その瞳には、リベンジに燃える闘志のような物が映っていた
・・・今度は、俺もアンチシンクロじゃなくて、ちゃんとしたデッキで戦うか・・・

「おう。いつでも待ってるぜ。」

俺は恭夜の手をとって、そのまま引っ張り上げてやった
恭夜はゆっくりと立ち上がり、俺と手を握ったまま、握手をした

「・・・気になってたんだが、お前等は敵・・・じゃないよな？」

「敵じゃねぇから・・・むしろ、お前等の保護に来たんだよ。・・・ったく、いきなりデュエル仕掛けやがって・・・「おい、デュエルしろよ」って言われたら、応じなきゃダメだろ？」

「そうだったのか・・・すまないな。俺達も一時間くらい戦いっぱなしだったんだ。普通に考えて、小学生くらいの少年と、高校生くらいの男が敵なわけないか・・・」

「いいっていいって。俺もそれなりに楽しかったし、アンチシンクロのテストデュエルにもなったしな」

「テスト・・・ということは、今日が初めての実戦なのか？」

「おう。このデッキは最初はＳｉｎモンスターで攻めて行って、効果破壊されれば機皇帝が出てくるって言うシンプルなデッキだ。でも、それなりに強かっただろ？」

後ろの方では、恭夜と一緒に戦っていた女性が、敦と自己紹介をしていた

俺達は普通に遊戯王の話で盛り上がり、ここをこうした方がいいなどの話をしていた

ついでに、その時に恭夜に敦と自己紹介をしている女性は自分の彼女と言ってきやがった

その時に一発ぶん殴って「リア充してんじゃねぇよ！！」って大声で叫んでやった

『あー、おっさん？保護しろって言われてた二人見つけたぞー』

『おう！見てたから全部分かるぞ！つーかさぁ、なんで機皇帝デッキ作ったんだよ？まさか！？俺のレッド・デーモンズを・・・』

『あれは機皇帝というよりもＳｉｎ機皇帝デッキの方が正しいぞ？おとぼけオポッサムが入ってるなら・・・ジャンク・シンクロンは入ってるのか？』

『いらねぇ。このデッキは相手のシンクロと奪って「ざまぁｗｗｗ」って言ってやるデッキなんだ。それを自らシンクロしてたんじゃ意味ねぇじゃん。』

『そうか・・・』

まぁ、元々は悪役デッキを作ってみたくてこうなったんだけどな。
それはどうでもいいとして・・・

『で、この二人をどうすりゃいいんだ？』

『あぁー・・・その場で待っててくれ。なんか、めっちゃ若ーい奴が来てさ「行方不明になった二人の保護をしにきた」とか言って、そっち向かったぜ？』

『・・・また神かよ・・・で、推定年齢いくつだ？』

『あぁー・・・見た目は１５歳位。』

『よし殺す。』

まただよ（笑）
また“カミサマ”って奴が特権使ってきやがったヨ・・・
しかも、１５歳位って、どんだけ見た目若くしてんだよ・・・
年齢詐欺もいい加減にしろっての・・・

「蒼痲君！！空見て空！！」

突然、敦の声が聞こえたので、俺は回線を切って、言われるがままに空を見上げた
すると・・・

「な、なんじゃありゃ・・・」

雲の隙間から、真っ黒な人の形をした何かが現れて、こちらを睨むように見つめていた
うわっ、無駄にでけぇ・・・

『オオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』

まるで、獣が雄叫びを上げるように、その人型の何かは俺達に向かって拳を握り、放った
俺と敦は咄嗟にデュエルディスクを展開して、その場に飛行能力のあるモンスターを召喚した

「現れよ、スクラップ・ドラゴン！！」

「飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！！」

敦はロードから渡された初めてのシンクロモンスター、スクラップ・ドラゴンをスキャンして、スクラップ・ドラゴンを飛翔させた
俺はスターダスト・ドラゴンを選択し、その場に召喚した
背中に乗る俺と敦
下の方では、恭夜と空（殴った時に教えてもらった）が驚いていた

「恭夜！俺のトコ乗れ！！空さんは、敦の方に！！」

「分かった！」

スターダスト・ドラゴンは体を低くして、背中に乗れと恭夜に言っていた
敦は、空さんをスクラップ・ドラゴンの背中に乗せて、先に飛んで行った

「っしゃあ！行くぞ！！！」

俺は恭夜を引っ張り上げて、スターダスト・ドラゴンの背中に乗せて、スターダスト・ドラゴンにＧＯサインを送り、その場から飛んだ

「うぉっ！？」

初めて竜の背中に乗ったのか、少しぎこちなくスターダスト・ドラゴンの背中にしがみつく恭夜

まぁ、当然っちゃ当然か（笑）

それにしても、デカイな・・・

あんなデカブツ相手に遊戯王で勝負挑むのも馬鹿か・・・

・・・あ、そだ。いい事考えた

「きょーやー？」

「な、なんだ？」

スターダスト・ドラゴンがあのデカブツの攻撃を回避しつつ、攻撃を仕掛けている中、俺はスターダスト・ドラゴンの背中の上でデュエルディスクを外した

「はい。装着して、戦ってくれ」

「は、はぁ！？いきなり何言って・・・うぉ！？」

っとっと・・・流石に二人乗せて飛ぶのはキツイよなぁスターダスト・・・

少しでも軽くしてやらんと、本当にやばいな・・・

「頼む。今はお前しか頼れないんだよ」
ずいっ、とデュエルディスクをつきつける俺。
恭夜は、少しの間眼を瞑り、ようやく開けたと思ったら、俺のデュエルディスクを掴んでこういった
「まかせろ。」
「・・・・おう、頼んだ」
デュエルディスクを渡すと、俺はそのままスターダスト・ドラゴンの上から飛び降りた
そして、落下しながら右手を握り、叫んだ
「変身!!!」
右手を胸に当てて、落下しながら俺は変身した
青年の姿から少年の姿へ変貌を遂げる俺の体
そして、眩い閃光はもう一度俺を包み、緑色の光を放ち、消え去った
「うっしゃあああああい!!!」
背中のブースターに魔力を送り、上まで駆けあがる俺
そして、スクラップ・ドラゴンを捕えた拳に、ランチャーを構え、撃ち出した
「蒼痲君!?」
「よぅ敦。こっからが本番だぜー?ま、死なない程度に頑張ってく

れや」

そう言い残し、俺はブースターに魔力を送り込み、その場から離れた
今の姿は、ブラストインパルスフォーム・・・
インパルスは基本的にストライクと変わらないが、ブースターに送る魔力の量、ランチャーの重さ、俊敏性等に関してはストライクを上回る
先ほど撃ったケルベロスも、実はそこまで魔力を込めたわけじゃないし、まずは様子見で撃っただけだし

あの黒いデカブツは撃ち抜かれた拳の痛みに耐えているのか、その場で手を抑えていた
ふぅん・・・叩くなら、今がチャンスだな

「ウィルッ！ジャベリンッ！！」

本当は「ウィルッ！！ナイフ！！」って大声で叫んでナイフで切りかかるんだけど、俺は腰に装備されたビームサーベルに手をかけて、ビーム・ジャベリンにして、ビーム・ジャベリンをデカブツの頭に向かって投げた
だが、予想外にも俺の攻撃は小さく、対してダメージを与える事はできなかった

「蒼痲！少し離れてろ！！」

後ろからスターダスト・ドラゴンに乗った恭夜の声がした
ほぅ・・・何かするつもりらしいな・・・

「俺はフィールド魔法！地縛神の祭壇を発動！！」

な！？なんだそりゃ！？
見たことねぇカードだぞ！？

「俺は手札の地縛神Ｕｒｕを墓地の送る事で、ダーク・グレファーを特殊召喚！効果は使わないぜ！そして。手札から地縛神の導き手を通常召喚！効果を発動！このカードが召喚に成功した時、デッキから地縛神と名のついたカードを手札に加える！俺は、地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕを手札に加えるぜ！」

うわーぉ・・・見た事ないカード達だな・・・
つか、あれ地縛神デッキか・・・？随分と事故率の高いデッキ使うんだな・・・

「そして、手札から魔法カード発動！二重召喚！俺はもう一度通常召喚を行うぜ！俺はダークグレファーと、地縛神の導き手を生贄に・・・現れよ！地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ！！」

おぉ！！場から離れるととんでもない効果を発揮するハチドリさんじゃないか！！
俺の目の前に、めっちゃデカイハチドリが現れ、雲の上からこちらを睨むデカブツに向かって大きな鳴き声を浴びせた
恐らく、威嚇しているのだろう・・・

「行け！Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ！！」

恭夜の掛け声とともに、地縛神は攻撃を開始し、ドデカイ旋風を巻き起こして攻撃を仕掛けた
・・・って、ぎゃあああ！？！？
ちょ、風強っ！？お、俺にまで被害きてるぞ恭夜ぁぁぁぁぁ！！

「敦君！私が教えてあげるから、頑張って！！」

「は、はい！！」

・・・ん？おいスクラップ・ドラゴンの上。何してんだ？

・・・つか、敦の野郎、若干困ってね・・・？

何？またなんか起きるの・・・？

「ぼ、僕は光の援軍を発動！デッキから三枚を墓地に送って、デッキからライトロード・パラディン・ジェインを手札に加えます！そして、デッキから墓地に送られたウォルフが特殊召喚されます！！」

・・・なーんで敦がライロのデッキ使ってるわけ？

つか、もう墓地にライロ二枚揃ってるんだけど・・・

「で、ここでウォルフを生贄にして・・・」

「・・・わ、分かりました！僕はライトロード・ビースト・ウォルフを生贄に、ライトロード・エンジェル・ケルビムを通常召喚します！効果を発動します！デッキから四枚を墓地に送って・・・伏せカードを二枚破壊します！」

・・・何？あのデカブツセットカードあったの？

うわっ、次元幽閉だったら危なかったぜ・・・

「その後、死者転生を発動します！手札を一枚捨てて、墓地の裁きの竜（ジャッジメント・ドラグーン）を手札に加えます！」

・・・今捨てたのが、ジェインだから・・・

墓地にはウォルフが一体、ライコウが一体、ジェインが一体と、ラ

イラが一枚か・・・
あ、こりゃ決まったな
「これで、裁きの竜(ジャッジメント・ドラグーン)が出せるの」
「お、教えて頂きありがとうございます！僕は、手札から裁きの竜(ジャッジメント・ドラグーン)を特殊召喚します！」
・・・終わったな。
さて、俺もそろそろ決めに行くかねぇ・・・
「裁きの竜(ジャッジメント・ドラグーン)か・・・俺も決めるか。俺のターン！ドロー！俺は天使の施しを発動！デッキから三枚カードをドローし、その後二枚を墓地に送る・・・そして、墓地に送られたダンディ・ライオンの効果を発動！俺の場に綿毛トークンを二体特殊召喚！俺はカードを二枚セット・・・そして、俺は綿毛トークン二体を生贄に！地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａを召喚！！効果を発動、伏せカードとＡｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕの3枚をデッキに戻し、戻した分だけ相手の手札を捨て、このカードの攻撃力をアップ！！」
うわっ、すげぇなオイ・・・
まさか、最強の地縛神（笑）をデッキに入れてる人なんて初めて見たぜ・・・
「さぁ！行くぜ！！地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａで攻撃！！」
「裁きの竜(ジャッジメント・ドラグーン)で攻撃します！！」
・・・二人とも、ガチなカード使ってんなぁ・・・

さて、俺もそろそろ決めるかな・・・

「うぉおおおおおおおおおおお！当たれぇえええええええええ！！」

体の至る所に魔力を送り込み、追尾ミサイルや、ケルベロスを一気に放射した

その攻撃は裁きの竜の放つ光（ジャッジメント・ドラグーン）と、地縛神Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａの放つ攻撃よりは劣るが、何発も放たれた攻撃は確実にデカブツを捕えていた

攻撃は全て辺り、とても大きな爆炎に包まれた

そして・・・ゆっくりとあのデカブツの居た場所を見つめると、そこにはボロボロだが、まだ生きているデカブツの姿があった

「まだ生きてるのかよ・・・」

「獄炎・・・一閃！！」

ちっ、と舌打ちをした瞬間、一筋の閃光が放たれ、デカブツは一瞬にして光になった

辺り一帯に、とんでもない量の炎が現れ、デカブツを包み込んだ・・・

塵のように粉となったデカブツは、空に溶け、消えた・・・

そして、そのデカブツが居た場所には、一人の青年が居た

「・・・・・・・・」

俺はその姿をじっと見つめた

・・・あれが・・・おっさんや、ロードと同じ存在・・・

まだ分かったわけではないのだが、俺が勝手に推測していたのだ。
先ほどまで居た黒いデカブツを一瞬で消し去る力・・・
何事も無かったかのように静かに大空を見つめるその姿を見て、俺はおっさん達と同じ瞳をしている事に気付いたのだ

「・・・お前が・・・“ありとあらゆる異端を打ち消す力”を託された者か・・・」

俺と目線が会った途端、そいつはいきなり俺に話しかけた
すると、魔力を感じとった俺はその“カミサマ”とやらを思いっきり睨んだ

「ギャラクシー・・・・」

げぇっ・・・こいつも砲撃魔法持ってんのかよ・・・
なら・・・俺も手加減しないでいいんだよな!!!

「ブレイカーーーー!!!」

まさか、世界の意志が人を選ぶなんてな・・・
俺は死んで神になったから、そういう物は分からない・・・

世界の意志なんて知ったのは、当分前だし、久々に会った同胞は見
た目がおっさんの奴と、クールな奴だし
まぁ、世界に意志が託した「ありとあらゆる異端を打ち消す力」っ
てのも気なってたし、丁度いい機会だから、見てみる事にしよう

ためしに、ギャラクシー・ブレイカーを撃って、様子を見た
だが、一向に爆発音は聞こえず、ギャラクシー・ブレイカーは先ほ
どの少年が居た場所を通り過ぎて、そのままどこかへ飛んで行って
しまった

「そぉい！！」

「！？」

突然、体に痛みが走った
後ろには、先ほどの少年が姿を変え、青年の姿となって攻撃をして
きていた
放たれた右ストレートを受け止める俺・・・
だが、こんな小さな攻撃じゃ俺は・・・・

―バキンッ！！！―

刹那、どこかから窓ガラスが割れるような音がした
それは嫌と言うほど俺の脳内に響き渡り、消えて行った・・・

「っ！？」

すると、突然俺の中にある何かが無くなっている事に気付いた
突然の疲労感・・・これは・・・！？

（魔力が・・・消された！？）

無限と言っても過言ではないほどの魔力が、一瞬のうちに消し去られたのだ
突然の事だが、冷静に対処しようと力を込めるが、体にも力が入らない・・・
おかしい・・・ま、まさか、魔力その物を消し去ったのか！？
こ、これが・・・

（“ありとあらゆる異端を打ち消す力”・・・！！）

このままでは重力に押し潰されるがまま、地面に激突してしまう
その衝撃で、生きていられる保証はないだろう・・・
だが、突然の浮遊感が俺を襲った

「ざまぁｗｗｗ神ざまぁｗｗｗｗ」

ケセセｗｗｗと悪魔のように笑う少年に首根っこを掴まれ、そのまま地上に降ろされた
よく見ると・・・先ほどの少年の姿ではないか

「これが神をも超える“ありとあらゆる異端を打ち消す力”・・・か」

「ぷくくくくｗｗｗ神が一般人に負けてやんのｗｗｗだっせぇｗｗｗ」

「・・・・・・・」

「（バキッ！！）いってぇ！？何しやがるこの野郎！！」

少し、お灸を据えてやろう・・・

「・・・で、他の世界の“カミサマ”とやらがなんのようだよ？」

いってぇ・・・事実を言ってやっただけなのに一般人をボコボコにするか？普通？

まぁ、図星って事だなｗｗざまぁｗｗｗマジざまぁｗｗｗ

「ロードから聞いただろう？あの二人を保護しに来ただけだ」

「あっそ。んじゃ、とっとと頼むわ。」

『マスターさーん。終わったー？』

いきなり、俺の袖をくいっくいっと引っ張るライナ

あれ・・・？おっかしいな・・・普通は実体化できないんだけど・・・？

「へぇ～・・・カードの精霊もいるのか・・・興味深いな・・・」

ライナをじろじろ見ながら言う年齢詐欺神（俺命名）
・・・コイツ、ロリコンか・・・？
いや、そんな雰囲気ないけどなぁ・・・こうやって見ると、ホント女顔だよなぁー・・・
見た目だけでも、女っぽいのに、なーんか男っぽい雰囲気あるんだよなぁ・・・

「・・・まぁ、今すぐ帰りたいのだが・・・」
ちらっと、俺の右手を見て“カミサマ”がため息をついた
何・・・・？え・・・？俺なんかしたっけ・・・？
「お前が帰る分の魔力を全部消してくれたおかげで、帰れなくなった・・・」
「は、はぁ！？お前“カミサマ”なんだろ！？“カミサマ”らしく特権使って帰れよ！！」
「その特権を使う魔力ごと全部お前に消された。・・・どうしてくれるんだ？」
「い、いや知らねぇから！！先に攻撃仕掛けてきたのはそっちだろ！？俺は被害者だ！！」
「・・・まぁ、一日もあれば回復するから、それまで少し世話になるぞ？」
「ふっっっっっざけんなぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

荒野しか見えないこの世界に、俺の叫び声だけが木霊した・・・

その後、この自称“カミサマ”とやらの名前が「哭堵優」と言う名前だと言う事が判明し、恭夜達と一緒家に連れてったわけなんだけど・・・

「だーかーら！魔道戦士ブレイカーの優先権をだな・・・」

「お前ルール知らねぇのか！！魔道戦士ブレイカーは元々魔力カウンターは乗ってねぇよ！召喚に成功してから乗るんだって！で、それを取り除いてようやく、相手の場のカードを一枚割れるんだよ！！なら、召喚時に奈落打たれたら普通に除外されるわアホ！！」

「うわぁぁーーーん！ブレイカーがぁぁぁ！！」

おっさんがデュエルトーナメント開きやがって、現在トーナメントの真っ最中ですよ（笑）

はぁ～・・・優も少しゃ止めてくれよ・・・

その後、俺達のデュエルトーナメントは夜まで続いた・・・

ん？優勝者？んなもん決まってんじゃん。俺だよ俺。

対ライロ＋ＢＦの対策が出来てる俺を舐めんなよ・・・

でも、恭夜とのデュエルはめっちゃ燃えたね。
地縛神と戦うのは久々だったし、地縛神の弱点突いたりしたり、ダイレクトアタックされたり、レインボー・ネオスでデッキに戻してやったり・・・
ほんと、楽しいデュエルだったぜ・・・・
残りライフがお互いに１０００以下になって、最後にオネスト引くという神ドローができてよかったぜ・・・

で、次の日・・・

「ふぅ・・・これで帰れるな」

俺とおっさんの家の庭に大きな門が現れて、その前に恭夜と空さんと優が立っていた
やっと別れの時か・・・長かったようで短かったような・・・ほんと、楽しい時間だったぜ・・・

「蒼痲・・・また会おう」

優は俺の前に来て手を差し伸べた
ご丁寧にも、右手じゃなくて左手で。

「・・・俺はもう会いたくねぇよ」

心の底からそう思った
こんなチート野郎と会うなんてこっちから願い下げだぜ・・・
ま、普通の友達としてなら会ってやってもいいけど・・・

「そうか・・・そろそろ行くか・・・」

「蒼痲！今度は絶対に負けないからな！」

恭夜は俺に手を振りながら言った

なんつぅデュエル馬鹿っつぅか・・・馬鹿っつぅか・・・

空も敦に手ぇ振ってるし・・・ま、返事位はしてやるか

「あぁ。今度も勝ち逃げしてやるからな！」

「覚悟しろよ！」

「敦君。頑張ってね」

「はい！！いつか、リベンジしますからね！今度は負けませんよ！」

敦も敦で、空さんに再戦願ってるし・・・

また・・・会えるかな・・・？

「じゃ、行くか。」

優がそういうと、門は勢いよく開き、その場に眩い閃光が包み込み、

眼を開けた瞬間、恭夜と空さんと優の姿はなく、門も消えていた

ゆっくりと家に入る俺・・・

振り向き様に、俺はこう言い残した

「・・・またな。」

恭夜から返されたデュエルディスクにそっと触れて、そう呟いた

番外編　祝！初コラボ！・・・鬼畜じゃない。立派な戦法だ（後書き）

あとがきコーナー

「イェェイ！！初コラボ小説です！！」

蒼痲「テンション高ぇなオイ」

「いや～、これほど嬉しいもんは無いよ。うん。」

蒼痲「・・・で、俺が異世界に行く前の番外編か？」

「おう。丁度良かったから書いて見た。で、どうだった？チート神様は？」

蒼痲「・・・正直納得いかねぇ・・・なんだアイツ・・・女顔じゃん・・・おまけに、トーナメント中に結婚してるとか言いやがって・・・リア充しすぎだろ・・・恭夜も恭夜だ・・・なんだよ彼女持ちって・・・納得いかねぇ・・・」

「・・・・・そっか。乙」

蒼痲「しっかし、俺の右手って本当にすげぇんだな・・・改めて知ったぜ・・・」

「まぁな。文字通り“ありとあらゆる異端を打ち消す力”だからな。アンチ異端（チート）だからなぁ・・・」

蒼痲「えぇー・・・この度、コラボさせて頂いた「ユタ様」。そし

て、恭夜、優・・・機会があったら、またな。」

「えぇー。コラボの申し込み、感想、駄目だし等ございましたら、感想欄に書き込んで頂けると嬉しいです！」

蒼痲「じゃ、また次回！」

「ではでは～♪」

キャラクター紹介２　新キャラも居るよ！（前書き）

「新年あけましておめでとうございま～す♪今年も頑張ります！」

蒼痲「で、２０１１年の最初の小説はキャラクター紹介と・・・」

「いーじゃん！！あ、でも今回から敦とか、ロードとかの設定を追加したよ！後、あとがきにおまけコーナーとして、ロード先生の遊戯王講座を始めたよ！」

蒼痲「おいおい・・・」

カーム「わ、私達の設定もあるんですか？」

「勿論！カームを始め、リーズやウィンダール達の設定も追加したぜ！」

蒼痲「あー・・・エリアルはどーなるんだ？」

「そりゃ、一応伏線としてまだ書かない・・・じゃ、駄目？」

蒼痲「ですよねー」

「まぁ、一応書くけどネ・・・そんなわけで！キャラクター紹介・・・」

全員『始まりまーす！！』

キャラクター紹介２　新キャラも居るよ！

天城　蒼痲（元天野　蒼）

年齢　１７歳　９歳

性別　男

見た目
青年時　黒髪の天然パーマ
少年時　まだ天然パーマではなく、ストレート

性格
ひねくれ者だが、実は寂しがり屋だったり、いわゆるツンデレ・・・っぽい何か
チートや、バグ等を嫌い、正々堂々ゲームをする事を心がけている

趣味はパソコン、ゲーム、遊戯王、散歩等々・・・

参考
この物語の主人公。
おっさんに導かれ、この世界へとやってきた苦労人。
現在、異世界でエリアル探しの旅に出ている。
少々歪んでいるが、実はかなりいい奴。
子供の頃は剣道や柔道、合気道などをやっていたが、父親と母親の離婚を気に引退・・・したかに思えたが、中学校の部活では剣道部に所属し、全国大会まで行ったほどの実力者
暇さえあれば木刀などを振るったり、トレーニングをしている。
おっさん達以外で唯一カードの精霊が見れる。

過去に様々なトラウマがあり、そのトラウマのせいで、女性が苦手になってしまった
何気にノリが良く、本当は結構負けず嫌い。
友達思いで、家族よりも優先させる事が多い
趣味の遊戯王の腕は上の中と言ったところ
公式大会でも必ず１０位以内には入る事ができるが、トーナメントパック目当てなので、殆どわざと負けたりすることもある。
世界大会に出ない理由は「めんどくさいから」との事

主に使用するデッキはシンクロデッキ
ガチデッキはＥ－ＨＥＲＯデッキ
サブデッキはいくつもあり、サイバー・ダーク、Ｓｉｎ機皇帝、Ｅ－ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）等、沢山のデッキを作っている

作りかけのデッキも沢山あり、ガスタ、リチュア、インフェルニティ等、ガチだったり、ガチじゃなかったりするデッキを作っている

主な戦い方は場と相手の状況を見て戦う遊撃型。
基本的には隙を見つけては攻め、状況が悪ければ防御にまわる。
ちなみに、チートドローをよくしたりするが「チートドローじゃねぇ！立派な実力だろ！？」と、本人はチートではないと言っている。

エースモンスターはＥ－ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン、Ｅ－ＨＥＲＯ　ネオス、レインボー・ネオス

実は結構ヘタレで、撃たれ弱い所がある。

おっさん（通称リュウ）

性別　男

見た目　３０代後半のおっさん。

性格

めんどくさがりで、極度の厨二病

趣味は遊戯王、ゲーム（格ゲー中心）、アニメ観賞等々・・・

参考

蒼痲の前に突然現れた、自称“神”のおっさん

蒼痲をこの世界に連れてきた張本人。

今は忙しく、報告書等を作っているらしい

家事、料理等を全て蒼痲に押し付けて、いつも楽をしてる

空気は読むどころか、悪化させる事ばかりをするトラブルメイカー

本人曰く「空気は読む物じゃなくて、吸う物だＺＯ☆」らしい

やる事成す事全てが厨ニ病と言っても過言ではないほどの行動と、

考えがアホすぎるため、蒼痲は彼のことを「厨ニ病の塊」等と言われる事が多い

存在そのものがチートらしく、他の作品のキャラクターの技を使ったり、自分の世界に相手を引きずり込む技を使ったりする

典型的なチート主人公を形にした感じだが、幻影(イリュージョン)の前では無力だった。

実はロリコン疑惑があり、アリシアの全裸を見ておかしな発言をしたりしている
本人はこれを認めておらず「俺は幼女よりも巨乳美人の方がいい！！」と大声で叫んだ結果、蒼痲と敦にドン引きされている
カードの精霊を見る事ができるらしいが、おっさんにはカードの精霊が居ないらしい。

遊戯王の腕は初心者に毛が生えた程度で、そこまで強いという訳ではない
主に使うデッキはパワー型シンクロデッキ。
文字通り、攻撃力の高いモンスターでアタックしていき、さらにはシンクロに繋げると言うデッキ

エースモンスターはレッドデーモンズ・ドラゴン

火野(ひの)　敦(あつし)

年齢　９歳

性別　男

見た目　赤い瞳にストレートヘアーの茶髪

性格

引っ込み思案で、臆病。
一人を誰よりも嫌う少年

趣味はお茶を淹れる事、遊戯王、蒼痲と一緒に笑いあう事等々・・・

参考
誰の手も借りず、転生してしまった少年。
前の世界では引っ込み思案が不幸を呼び、友達が出来なかった
何をするにも奥手で、考えている事を行動に移す事ができない性格
になってしまった
転生したリリカルなのはの世界でロードと出会い、彼に保護され生
きている。
最初の頃はロードとあまり話さなかったが、ようやく話すようになっ
った。

常に、心の中にある殻に隠れようとしてしまい、中々人に意見を言
う事が出来ない

だが、蒼痲との出会いが彼を大きく変えた。
殻を破り、ようやく人に意見を言えるようになった

蒼痲が初めての友達で、常に蒼痲と一緒に居る。
自分よりも上級者な蒼痲に憧れ、いつかは遊戯王で勝とうと、日々
努力している。

遊戯王の腕はほぼ初心者に近く、よく目立ったプレイミスをする。
使用するデッキは「サイバー流（機械統一）」デッキ
最近、ネクロフェイスをデッキに入れて、ワンキルデッキになりや
すくなったとか・・・

エースモンスターはキメラテック・オーバー・ドラゴン

ロード（本名不明）

年齢　不明

性別　男

見た目　茶色がかった黒髪に、少しツンツンした髪型

性格　何を考えているのかよく分からない性格。
簡単に言うと、雲のように掴み所の無い人

参考
おっさんの親友で、よき理解者。
唯一、おっさんの事を“リュウ”と呼ぶ
誰の力も借りずに転生した敦を見つけ、一緒に暮らしていた。
おっさんと同じく、“神”と呼ばれる存在だが、自分は“神”と分類されただけのただの人間だと言っている。
遊戯王のカードの世界を管理していて、カードの精霊などが見える。
遊戯王の世界を管理しているだけあって、遊戯王の腕も相当な物らしい。
蒼痲を自分の管理している世界に送り込み、異端（バグ）の駆除に向かわせている。

おっさんとは違い、しっかりと神らしい事をやっている。

遊戯王を敦に教えた張本人で、最近ではデュエル教室（蒼痲も一緒に）を開いているらしい。
分かりやすくルールを教えたりしてくれるので、おっさんや敦は彼によって遊戯王を学んでいる
エースモンスターやデッキは不明。

Ｅ－ＨＥＲＯ　フレイム・ウイングマン

年齢　不明

性別　男

見た目　カードイラストを見れば分かるかと・・・

性格　人に優しく、誰とでも仲良くなれる

参考
蒼痲が前の世界に居た時からずっと一緒に居た精霊。
蒼痲と一番長い付き合いで、共に苦楽を共にした、言わば戦友と言っても過言ではないほどの付き合い
蒼痲が初めて当てたレアカードで、何よりも思い入れがあり、一番大切にしているカードである。
そんな蒼痲をマスターとし、フレイム・ウイングマンは誰よりも蒼痲の事を誇っている。

昔、蒼痲の家が離婚した時には触れることも、話す事もできないのに、ずっと彼を励まし続けていた。
サポートカードなどは無い物の、蒼痲がしっかり彼をサポートしてくれるので、デュエル中でも大活躍している。

ソニック・バード

年齢　不明

性別　男

見た目　ブースターを背負った鳥

性格　気分屋で、誰よりも蒼痲を慕っている

参考
蒼痲の持っているカードの精霊の一人（一羽？）
「〜〜でさぁ」が口癖

フレイム・ウイングマンの次の蒼痲の隣に居た精霊
最初は蒼痲の精霊ではなかったのだが、置いてけぼりにされ、子供達に破られそうだった時に蒼痲が駆け付け救出される。
それ以来、蒼痲の事を慕っていて、蒼痲のためなら自分の命も惜しまない。
蒼痲はそんな彼の事を「いい友達」と言っており、マスターと精霊という関係ではなく、一人の友達同士のやりとりをしている。
彼は長年それを待ち望んでいたため、初めて蒼痲に「友達だ」と言われた時は号泣したとか・・・
人をおちょくったりするのが好きで、よく蒼痲をからかったりする

リチュア・エリアル

年齢　不明

性別　女

見た目　青い髪に、青い目が特徴

性格　不明

参考

蒼痲が異世界に行くきっかけを作った人物
幻影（イリュージョン）との戦いで傷つき、そのまま精霊世界へと送られてしまった
今はどうなっているのかも分からない状態に・・・
蒼痲の事を一人の男性として意識しているようだが・・・

ガスタの静寂　カーム

年齢　１７歳

性別　女

見た目　緑色の髪に、緑色の瞳

性格　クールで、少し冷めていると思われがちだが、実は寂しがり屋

参考
蒼痲が嫁と豪語しているカードの精霊
初めて蒼痲と出会ったのはカードショップ。
デュエルターミナルで、蒼痲と出会った。
この時、すでにエリアルのカードを持っていた蒼痲は、彼の後ろではいつもカームとエリアルが喧嘩をしていた事をまったく知らなかった
出会った時に初めて言われた言葉が「可愛い」だったため、最初の頃は赤面していた
その後、蒼痲が友達と会話をしてる時に「カームは俺の嫁。異論は無しだ」と言った瞬間、その場で気絶したとかしなかったとか・・・
蒼痲の事は“マスター”としてではなく、一人の男性として意識している。
意外に恥ずかしがり屋で、何かあるとすぐに赤面したりする。
それと同時に、とても嫉妬深く、蒼痲が他の女の子を見てデレデレしていると、笑顔で杖で脳天をぶっ叩いたりする

ウィンダールの事を父と呼ぶが、実はカームは孤児で、本当の父親と母親はガスタと他の勢力であった戦争に巻き込まれ死亡してしまった。
ウィンダは彼女にとって妹で、ウィンダもカームの事を「お姉ちゃん」と言っており、どこからどう見ても普通の姉妹にしか見えない。

デッキはまだ未完成なため、蒼痲は使用しておらず、本人は複雑な気持らしい
本人曰く「どうしてリチュアはよくてガスタは駄目なの・・・？」と思っているらしい

光霊使いライナ

年齢　不明（恐らく１０～１４歳）

性別　女

見た目　白髪、薄い青色の瞳

性格　天真爛漫で、いつも笑顔の絶えない女の子

参考

蒼痲の事を「マスターさん」とよぶ、小さな女の子
実は、精霊世界での記憶があまりなく、記憶喪失らしいが、本人はどうとも思っていないため、記憶を元に戻すつもりはないらしい
いつも笑顔で、純粋な笑顔を蒼痲に向け、蒼痲はいつも困っている。
心の底から蒼痲の事を思っているのだが、一人の男性としてではなく、「蒼痲は蒼痲だから（マスターさんマスターさん）」という、曖昧な答えになってしまう
ノースウェムコよりも遅く精霊になったため、ノースウェムコを「ウェムコお姉ちゃん」と呼ぶ

自分より遅れて精霊になったカームやエリアルも「お姉ちゃん」と呼んでいるため、先輩風は吹かせていない様子。

救世の美神　ノースウェムコ

年齢　不明

性別　女

見た目　長いクリーム色の髪に、青い瞳

性格　穏やかだが、少しドジっ子

参考

ライナよりも少し早く精霊となった女性。

ライナの事を「ライナちゃん」と呼んでおり、傍から見れば姉妹のように見える

世話焼きで、いつも身の回りの掃除や、お茶などを淹れてくれる。

カームやエリアルの事を心配しているのだが、蒼痲の事を一人の男性として意識しているため、二人を恋敵にしている

カームには劣るものの、嫉妬深く、蒼痲に冷たーい目線を送る事が多い

蒼痲の作った「ノースウェムコデッキ」の主軸。

ガスタの賢者　ウィンダール

年齢　不明

性別　男

見た目　濃い緑色の髪に、濃い緑色の瞳

性格

ガスタを治める賢者。

普段は真面目で、冗談を言わないのだが、娘達の事が絡むと暴走す

る。
ウィンダとカームの事を過保護と言えるほどの教育をしていたのだが、どちらも我がままには育たなかった
最近、カームが人間世界(リアルワールド)に行ってしまったため、心の底から落ち込んでいたとか・・・
ようやく帰って来たカームを抱きしめたら、ウィンダとカームのダブルアッパーを喰らったとか・・・
帰って来たカームに蒼痲の事を聞くと「よし殺す♪」みたいな事を言ったため、カームに粛清された
蒼痲の事は認めているようだが、カームを預けるに値する人物ではないと思っている

キャラクター紹介2　新キャラも居るよ！（後書き）

「ま、こんなもんかな？」

蒼痲「おい、インフェルノウイングとかの紹介はどうした？」

ウィンダ「私の紹介もないんだけど！？」

「あー・・・後から書き足すじゃ駄目？」

蒼痲「おい・・・・・」

カーム「それでは、おまけコーナーです。」

蒼痲「あれ？！速くね！？」

カーム「・・・仕方ないですよ。」

おまけコーナー

教えて！ロードせんせー！！

蒼痲「・・・・何この「教えて！銀八先生！」みたいなノリ・・・」

ロード「気にするな。えー、では今回は、このおまけコーナーの説明をしよう。先生役の俺、ロードと・・・」

蒼痲「・・・アシスタントの天城蒼痲だ。」

ロード「んじゃ、今回から始まるこのコーナー。このコーナーは遊戯王に関する用語等の説明をしていく。後、読者の方々の感想も読みあげて行くものだ。・・・簡単に言えば「教えて！銀八先生！」と遊戯王講座を合わせたものだな。ちなみに、不定期更新だから、次回はあるかどうかは分からない」

蒼痲「分からないんかい！！」

ロード「んじゃ、生徒の出席とるぞー。敦ー」

敦「はい」

ロード「リュウー。」

おっさん「ほーい」

ロード「以上。二名」

蒼痲「少ねぇなオイ！？」

ロード「んじゃ、今日の題材は「強制効果」だ。」

蒼痲「そして、無視された！？」

ロード「強制効果とは。「～～～しなければならない」や「～～～する」等の効果を持つカードのことだ。一番分かりやすい例は「光と闇の竜（ライトアンドダークネスドラゴン）」だろう。」

蒼痲「まぁ、ライダは強制効果の割にめっちゃ強いけどな。死んだら蘇生出来ちまうし・・・」

ロード「だが、ライダは同じ強制効果を持つモンスターに弱い。リユウ、何故か分かるか？」

おっさん「え？うーん・・・・ブルーアイズに殴り負けるから？」

ロード「よし死ね。」

おっさん「親友に死ねって言われた！？」

ロード「いいか？まず、自分の場にライダが居て、相手の場にユベルが居たとする。」

おっさん「そして無視された！？」

蒼痲「うっせぇぞおっさん。少し黙れ。」

ロード「ユベルはエンドフェイズ時にモンスターをリリースしなければならない強制効果を持っている。だが、ライダはモンスター効果、魔法、罠の効果を攻撃力と守備力を下げて無効にする強制効果がある。この場合、どうなる？」

蒼痲「まず、ユベルの効果で、リリースしなくちゃいけないけど、ライダがチェーンしてくるな」

ロード「その通り。だが、ライダの効果は「無効にする」としか書かれていない。そのため、ユベルの効果は一時的に無効になるのだ

が・・・敦。この後、どうなるか言ってみろ。」

敦「え、えぇっと・・・またユベルの効果が発動する・・・ですか？」

ロード「その通り。またユベルの強制効果が発動する。だが、それにまた強制効果のライダの効果が生まれる・・・これの繰り返しが起こったらどうなる？」

蒼痲「ライダの攻撃力と守備力がとんでもねぇことになるな」

ロード「そういうことだ。ライダは何にでもチェーンしなければならないからな・・・場に居るだけ邪魔だから、早めに駆除する事をお勧めする。」

蒼痲「ただし、相手の墓地にもよるけどな。」

ロード「もしも、攻撃力のデカイモンスターが居たりしたら、とんでもないな。だから、なるべく墓地を肥やされる前に駆除しよう。分かったか？」

敦「はい！分かりました！」

おっさん「ちょっとしつもーん！」

蒼痲「どうしたおっさん？」

おっさん「えっとさ、レッドデーモンズの効果はダメステ中に起こるけど、それも無効にされるのか？」

蒼痲「あぁ。強制的に無効にされるけど、無効にされるだけで、破壊はされない。」

おっさん「へぇ～」

ロード「以上。ロード先生の遊戯王教室！！」

蒼痲「次回はないだろうけどな・・・」

ロード「そういうなって。きっとある・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はずだ。」

蒼痲「今の間はなんだ！？」

ロード「それじゃ、次回！！」

蒼痲「無視された！？」

三十章　ジェム高山ってすげぇ・・・

・・・・・あれ？・・・おっかっしいなぁ～・・・・・
ここ・・・どこだっけ・・・？

「ん・・・・ぁ・・・？」

ふわ～っと大きな欠伸と共に起き上がる俺
そしてゆっくりと意識を覚醒し始めて、どうして自分は毛布がかけられていて・・・そして・・・

「すぅ・・・すぅ・・・」

俺の隣で同じ毛布（ここ重要）で寝てるライナとノースウェムコが居る訳を考えた
あ、あれぇ～？・・・おっかしいなぁ・・・えっと・・・
ここ・・・どこだっけ？

「・・・うわっ、すげっ」

ゆっくりと辺りを見渡すと、どこかの小さな一室に寝かされていた事に気づき、ゆっくりと辺りを見渡すと、壁にいくつも敷き詰められた光り輝く何かに・・・俺は心を奪われそうになった

「これって・・・」

毛布をライナとノースウェムコにかけて、ゆっくりと壁へ歩み寄る俺

そして、きらきら輝く物が何かと、手で触れ、確かめた

「・・・宝石・・・か？」

俺の手にひらに転がって来た小さな光を放つ石・・・
それは宝石だった。緑色に輝いている辺り、これはエメラルドだと、分かった
それは壁の至る所にも確認する事が出来て、エメラルドを壁に埋め込み、部屋をぐるっと一周回った
そこには、ルビー、サファイア、エメラルド、ダイヤモンド等と言った美しい宝石がいくつも埋め込まれていた

「・・・・あっ」

ようやく思い出した
俺は、カームとリーズと一緒にジェム高山って所に復興の手伝いに来たんだった
つまり・・・ここは、ジェム高山のどこかの一室って事になる

・・・あれ？でもどうして俺眠ってたんだっけ・・・？
えぇーっと・・・・・・・・・

・・・・思い出したぁぁぁぁ！！カームが何故か怒って俺の脳天に杖を思いっきりぶっ叩いたからだ！！
あ、あれ！？カームは！？

バッ！と後ろを振り返って、辺りを見渡すも、俺以外には、眠っているライナとノースウェムコしかいなくて、リーズやカームの気配は一切しなかった

「な、なんだ・・・」

そう呟くと、かけていた毛布ががさごそと動き出した
小さい体がもぞもぞと動いて、白い髪が右に左に揺れて、とても可愛い顔で静かに欠伸をした
毛布から出てきたのはライナだった。意外と早起きらしく、歳上のはずのノースウェムコよりも先に起きている

「ふぁぁぁぁ～・・・」

「ライナ、おはよう。」

「ましゅたーしゃぁん・・・まだねる～」

欠伸交じりにそう言うと、ライナは後ろに倒れるように毛布に入っただが、後ろには丁度良くノースウェムコが居て、ぶつかると思ったのだが・・・

「んっ・・・」

グニッと、ライナの頭に押し潰されてもボリュームのある双山がライナをしっかり受け止めていた
ライナもその感触が気持ちいいのか、ノースウェムコの方を向いてノースウェムコを抱きしめた
・・・なんという羨ましい光景・・・イヤ、アレダヨ？別に、ライナの事羨ましいなんて・・・思ってナイヨ？

「だめぇマスター・・・そこはまだ・・・やっ・・・ライナちゃんはまだ・・・」

「なんの夢見てんの！？」

ノースウェムコが突然爆弾発言にも似た事を言ったので、心の底から叫んだ

いや、夢の中で何が起こってるの！？俺、なんかとんでもないことしてそうなんだけど！？

ちょ、やめて！！ライナは普通に可愛いなぁ～って思うけど、別にそういう対象としちゃ見てないんだけど！！

「年齢制限がありますよぉ～・・・・」

・・・恐らく、ジェットコースターにでも乗せる夢でも見ているのだろう。うん。そうだろう。

いや、でも・・・見た目で言ったら小学生の中じゃ高学年に入るから・・・一応ライナはセーフ・・・かな？

いや、だったら変な夢じゃ・・・・は！？げふんげふん！！

紳士たるもの、常に平常心を・・・

「私はまだ１７歳ですし・・・」

「いや、ねぇから！！」

確実にそれはないから！！どっからどう見ても２０代前半だから！！

何！？永遠の１７歳って奴！？言ってって悲しくないのか！？

「おっ、起きたのか少年」

突然、ドアのような場所が開けられ、俺は声のした方を向いた

すると、そこには、赤いルビーの甲冑のような物を身に纏った戦士

が居た
俺は知っている・・・コイツの事を・・・
「おっと失礼。自己紹介が遅れたな。私はジェムナイト・ガネット・・・ここ、ジェム高山の誇り高きジェムを受け継いだ戦士だ。」
「あ、あぁ・・・俺は天城蒼痲・・・ガスタから復興作業の手伝いに来たんだけど・・・」
「あぁ。聞いている。ウィンダールは私の古くからの友人でな・・・手紙に君の事が書いてあったよ。『勇気ある少年』と綴られていたよ。」
ゆ、勇気ある少年って・・・俺、そこまで勇気はないんだけどなぁ・・・
無駄にビビりだし・・・
「はっはっは・・・君を見ていると、若き頃のウィンダールを思い出すよ・・・」
「え・・・？俺とウィンダールって似てるんですか？」
「敬語はいいよ。私も、敬語で無い方が話しやすいのでな・・・」
「あ、あぁ。分かった。で・・・俺とウィンダールが似てるって？」
ガネットの質問を若干嫌そうに聞く俺
いや、あんな変態と同じって言われちゃ・・・・ねぇ？カームに顎殴られてぶっ飛ぶ位だし・・・
本当に賢者か？って思ったんだけど・・・

「あぁ。ウィンダールは昔から素直じゃなかった・・・事あるごとに人に迷惑をかけて、いつもレンに怒られていたなぁ・・・」

「・・・レン？」

「あぁ・・・レンは、ウィンダールの妻の名前さ。・・・当分前に、亡くなってしまったがな。立ち話も難だ。復興場所まで行こうじゃないか」

「あ、うん。」

ガネットが開けた扉からガネットと一緒に外に出る俺
すると、廊下にも美しい宝石が埋め込まれており、とても美しく輝いていた

「レンは、昔からウィンダールと一緒に居た・・・当時のジェムとガスタは、お互いに敵対していてな・・・今のような良好な関係ではなかった」

「へぇ～」

こりゃ、公式にもねぇ設定だな・・・
それを聞いてる俺も、ある意味凄いけどな。
さて、進んでくに連れて、どんどん明るくなってきたぞ・・・？

「当時、私は親を失い、誤ってガスタの湿地帯に入ってしまった。勿論、当時のガスタ・サンボルトに見つかってね・・・もうだめかと思った時だった・・・ウィンダールが私を助けてくれたのだよ」

「へぇ～・・・・」

「それ以来、私はウィンダールと共に行動をするようになった・・・
彼も、ガスタの中では浮いていてな・・・孤独だったんだよ。」

ん・・・？なんか、めっちゃ眩しい場所についたぞ・・・？
目を覆うように手で隠し、光が止むのを待つと・・・光はゆっくり
と止んだ

「そして・・・それから数年後・・・レンとウィンダールはここで
結ばれた」

「うわぁ～・・・・すっげぇ・・・・」

なんか、説明するのがめっちゃ難しい場所に俺は立っていた・・・
右も、左も、上も、下も・・・全て宝石が埋め込まれたこの不思議
な空間・・・
上を見れば、とても大きな穴から青空が広がっており、そこから入
った光が宝石を照らし、美しく輝かせていた
そして、下には復興作業を必死に行っている人達（？）が居て、砕
けてしまった岩や宝石をトロッコのような物に乗せて移動させていた

「君からは、ウィンダールと同じ雰囲気がする・・・ひねくれてい
るのに、実はものすごく真っ直ぐな心の持ち主の雰囲気がな」

「・・・・うっせい」

「さて・・・昔話はここまでだ。君には、下に降りて、復興作業を
手伝ってもらう・・・いいかな？」

「おう。つか、そのために此処に居るんだ。んじゃ、手伝ってくるぁ」

手すりのようなものに身をのりあげ、俺は下を見つめた
うげっ・・・予想外にも怖いんだけど・・・高さ的に言ったら15メートルくらい・・・か？
うわっ、やべぇ・・・目ぇ痛くなってきた・・・
でも・・・こっから降りた方がなんかよさげの雰囲気だから・・・降りるか！！

「お、おい！？」

バッ！！とその場から飛び降りて、下に降りる俺
うぉおおおおおおおおおおおおおおおお！！怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！
風がすげぇぇぇぇぇぇ！！つか、重力半端ねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

「変身！！」

少々落ちつきを持つべく、俺は右手を胸に当てて、その場で子供の姿へと変身し、インパルスフォームとなってブースターに魔力を込めた
落下速度はどんどん落ちて行き、俺はゆっくりと地面に降下した
飛び降りた地点を見上げると、ガネットが呆れたかのようにうなだれていた
そして、辺りからの視線に気づいた俺は、静かに言った

「手伝えそうなことあったら言ってくれー。」

そういって、俺は近くに転がっていた大きな石を掴んで、運び出した

周りの連中が物珍しそうな顔で俺を見つめていた

さて、復興作業を初めて俺だが、子供の姿では流石に無理があるので、一旦青年の姿に戻り、復興作業を手伝った
まぁ、これからは変身回数も減らさないといけないし、今のうちにやれる事はやっとかないとな・・・
そう思いつつ、ジェムナイト達の復興作業を手伝っていた

「少年、そこにある石運んでもらっていいか？」

「ん？あぁ、これか？分かった」

俺よりも一回りも大きい石を見つめ、俺は静かに手に力を込めた
ふんっ！！と力を込めるが、流石に大きいだけあって、普通の高校生には持ちあがらないらしい・・・
だが、俺は普通の高校生じゃ・・・・ねぇ！！

「うぎぎぎぎぎぎぎぎ！！！」

自分よりも一回り大きい岩を持ち上げ、そのまま指定された場所まで持っていき、叫んだ

「「どっせえええええええええい！！！」」

ドガンッ！！！と凄まじい音と共に、岩は真っ二つに割れたが、指定された場所には持って行った

ふぅ・・・いい仕事したぜ・・・・
・・・・あれ？なんか、俺と一緒に叫んだ声があったような・・・？

「ふぅ～、あぁ～。重かった～」

「・・・・リーズ、お前何してんの？」

何故かリーズが俺の前に居て、仕事を終えたＺＥ☆みたいな感じで
額の汗をぬぐっていた
俺がジト目でリーズを見ると、リーズはようやく俺を見つけたのか、
腕を組みながら言った

「おぉ蒼痲！起きたか！見ろ！この岩！これ私一人で持ち上げたん
だぞ！！凄いだろ～？」

若干ドヤ顔で俺を見つめるリーズ
・・・指差してる岩、俺運んだ奴なんだけど・・・
・・・・まさか・・・・ね？

「あのさリーズ、お前、どっからこの岩持ってた？」

「は？どっからって・・・普通に前から・・・」

・・・・はい。理解しました。
恐らく、俺がリーズの反対側持ってて、リーズも俺の反対側を持っ
てて、一緒にこの岩を運んだって奴ですね。分かります・・・
・・・って！そんな都合よく行く訳ゃねぇだろぉおおおおおおおお
おおお！！！

「そ、そういえばさ・・・気絶する前の事・・・いや！やっぱなん

でもない！！」

リーズが少し顔を赤らめたかと思ったら、顔を真っ赤にしてどこかに走り去って行った

えぇっと・・・俺がカームにぶん殴られる前に、なんかあったっけ・・・？

うーん・・・思い出せねぇ・・・

だけど、なーんか引っ掛かるぞ・・・？

おっかしいなぁ・・・

「・・・・マスター？」

「ん？げっ、カーム・・・」

突然、後ろから声をかけられ、聞き覚えのある声だなーって思いながら振り返ると、そこにはカームが俺を見つめていて、俺の袖を引っ張っていた

それに驚いた俺は、ぎょっと驚いて後ろに後退した

それを見て俺の事をじっと睨んできたカームの視線が俺に突き刺さり、めっちゃ痛いです。はい。

「・・・またいやらしいこと考えてたんですか・・・？」

明らかに怒ってるオーラ全開で、杖を取り出したカームは、ニコニコと笑いながら俺に問いかけた

俺は誤解を必死に解こうと、一生懸命喋った

「い、いや！！いやらしいことなんて考えてませんよ！？むしろ、この復興作業終わったらカームと一緒にどっか行こうかなーなんて考えたり、考えてなかったりしてました！はい！！」

「なっ！？い、いきなり何言ってるんですかぁ！？」

俺の口がある事ないこと勝手に喋り出して、それを聞いたカームは少し顔を赤くして俺に向かって怒鳴った

密かに俯いてる所が可愛かったりするんです。はい。

「マスターさーん♪」

「ぬぉう！？」

今度は俺の後ろからタックルが！？

って、この白髪はラ、ライナぁ！？ちょ、勢い殺せそうにないんだけど！？

あかん！！こ、このままじゃ・・・カームとぶつかるっ！？

簡単に状況の説明すると・・・

俺とカーム、お互い向き合って話してる。↓後ろからライナがタックル↓勢い殺せずそのまま前へ↓カームが前に居るため押し倒す。↓俺がエロゲ主人公になる。

ってな感じだ。

ん？最後がおかしいって？いや、間違いでは・・・ないだろ？

「きゃあああああああ！？」

「ぬぉう！？」

「うわあああああ！？」

まぁ、そんなわけで・・・俺はカームを押し倒すような形で見つめあって、ライナは俺の腰をぎゅっと握ったまま離さなかったわけで・・・

とんでもない状況になっております・・・

「まままままま、ましゅ、マスター！？かかかかか、か、顔がちちちち、ち、近いです！！」

カームの顔がドアップで映し出されて、俺の脳内で理性と言う名の糸を必死に切れないように支えている俺が居ます。
だって、こりゃまずいってぇぇぇぇぇぇぇ！！顔近っ！？そして、息かかってるんだけどぉおおおおおおお！！

「ご、ごめん！ちょ、ら、ライナ！？退いてくれないと、俺キツイんだけど！？は、早く退いて！！」

「ご、ごめんなさい！！」

とりあえず、バタバタしながら状況の整理をし、俺はカームから離れ、ライナは俺から離れてくれた
えぇっと・・・とりあえず、空気読んでカームと背中合わせになってお互いの顔を確認しないようにした
なんか、異常なまでに緊張するんだけど・・・

「マスターさん・・・カームおねえちゃん・・・私、何か悪いことしたのかなぁ・・・」

「え・・・？」

突然、ぷるぷると震えた声が俺とカームを包んだ
先ほどまでの緊張感は一瞬で消えさり、俺とカームは一斉にライナの居る場所を向いた
すると、そこには、今にも泣き出しそうなライナの姿があった

「うっぐ・・・ごめんなさい・・・ごめんなさぁい・・・」

ついには泣きだしてしまい、俺とカームは一生懸命ライナを元気にしようと話し始めた

「ら、ライナは悪くないぞ！？こ、これは・・・そう！事故！事故って奴だから！！」

「そ、そうだよライナちゃん！今回は事故だから仕方が無いんだよ？だから、ね？泣かないで？」

「うえぇぇぇぇん・・・えっぐ・・・うえぇぇぇぇぇぇえん！！」

本格的に泣きだしてしまったライナをどうしたらいいのか分からず、俺は過去の記憶をたどった
えぇっと・・・こう言う時の対処法は～～～・・・・・
・・・そういえば、１０年以上前に、俺が泣き崩れた時に、姉貴が泣きやむまでずっと手ぇ繋いでくれたっけ・・・
懐かしいなぁ～・・・って、今は思い出に浸ってる場合じゃねぇし

！！

「ごめんなさぁい・・・えっぐ・・・ごめんなさぁぁい！！」

「あ～もう、謝らなくていいって。」

泣き崩れるライナの頭にそっと手を置いた。
そして、優しく頭を撫でた。
すると、ライナは少しだけ泣きやみ、俺を見つめた
こうやって見ると・・・本当にライナって可愛いなぁ・・・

「俺は別に怒ってないし、ライナを怒るためにカームと離れたわけじゃないからさ・・・怒鳴って、ごめんな？」

「うっぐ・・・ごめんなさい・・・私が・・・うっぐ、抱きつかなければぁ・・・」

「いいよ、ライナちゃん。別に、怪我してないし・・・」

そういって、カームは俺の隣に立って、ライナの頬に手を置いた
ライナは一度ビクッと体を震わせ、目を閉じた
恐らく、ビンタでもされると思ったのだろう・・・

「で、でもぉ・・・」

「はぁ～・・・ライナ、手ぇ出しな」

俺はライナに俺の手を差し出した。
勿論、幻想殺し（イマジンブレイカー）が発動したら嫌なので、左手を差し出している

ライナはそれを見て、おずおずと左手を伸ばした

「よっと」

「うわわわ！？」

左手を引っ張り上げて、ライナを立たせてあげた
そして、俺はライナの手をとり、ゆっくりと言った

「俺は、泣いてるライナより、笑いながら走り回る、元気なライナの方がいいな。だから、泣かないでくれるか？」

ぎゅっとライナの手を握り、ライナと同じ視線になって言った
ライナは袖で涙をぬぐい、言った

「・・・うん！！」

「うん・・・やっぱり、ライナちゃんは笑顔が一番いいよ。」

カームも俺と同じくライナの手を握り、ゆっくりと立ち上がった
ライナは先ほどまで泣いていたのが嘘かのように俺達に微笑みかけていた

「それじゃ、復興作業の手伝い、行こうか」

「うん！！」

「行きましょうか。」

ライナと手を繋ぎながら、俺達はまだ復興の終わってなさそうな場

所へ向かった
ライナに視線を移すと、とても嬉しそうに微笑んでいた
カームに視線を移すと、俺とカームの視線が重なり、お互いに微笑み合った

「マスターさーん♪カームお姉ちゃん♪」

「ん？なんだ？」

ライナがスキップしながら俺達の歩幅に合わせてくれている事に気づき、俺とカームはほぼ同時に歩幅をライナに合わせた
そして、ライナが嬉しそうに俺達二人を見上げ、言った

「私、大きくなったらマスターさんやカームお姉ちゃんを守れるようになるんだ！それで、ウェムコお姉ちゃんにも負けないくらいに気がきく人になる！！」

「へぇ～、そうか。」

「むっ、マスターさんは見たくないのー！？」

ライナがむっとした顔で俺を睨んできた
まぁ、確かにライナのデカくなった姿か・・・・
つまり、憑依装着―ライナ・・・か？
・・・・うん。めっちゃ可愛いだろうなｗｗｗ

「あー・・・一応見てみたいかな」

「・・・・・・・・・」

はっ！？カームから冷たーい目線が！？
カームはいつものように俺の事をめっちゃ冷たい目線で睨んでいた
ちょ、なんで！？俺ロリコン・・・・・・じゃないから！！
画面の奥の娘なら大丈夫だけど、現実(リアル)じゃ無理だから！！

「あ、マスター！！」

おぉ！！ここで救世主登場か！？
俺達の前にはノースウェムコが現れて、早足で駆けよって来た
流石救世の美神！俺のピンチに颯爽と現れてくれる！！

「あ、ウェムコお姉ちゃーん♪」

「・・・マスター、何してるんデスカ・・・？」

って、あれぇぇぇぇぇぇぇ！？
おかしいな！？なんか冷たい目線が増えたんだけど！？
ちょ、俺にロリコン疑惑かかるんだけど！？
それは困る！！俺、ロリコンなのは一応認めるけど、ノースウェムコとカームの中での俺の像が崩れるんだけど！？それは、流石に困る！！

「い、いや・・・これは、泣いてたライナを慰めようとしていただけで、け、決してやらしい気持ちは・・・」

「・・・マスターさん・・・私と手ぇ繋ぐの・・・嫌？」

ちょっと待ってぇぇぇぇぇぇ！！
ちょ、おま！？前と横からは冷たい目線で、目線を下げれば、寂しそうな目線って、どういうことなの！？

ちょ、誰かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！俺に打開策を教えてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

―ドゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！―

「ぬぉ！？」

「きゃあ！？」

「うわわわわ！？」

「きゃあ！？」

突然、ジェム高山が揺れ、ライナと繋いでいた手を離した

揺れが収まり、俺はとりあえず、この高山から出た方がいいと直感が告げ、俺は青年の姿から子供の姿になった

「ま、マスター！？」

「カーム、ノースウェムコ！！ライナ連れて安全な所行ってくれ！俺は外の様子見てくっから！！」

そう言い残し、俺はフォースインパルスフォームとなって、その場から飛び去った

『は～～はっはっは～！！誇り高きジェムナイトの戦士達よ！今日も派手な喧嘩と行こうじゃないか！！』

『またお前たちか！いい加減にしろ！！我々ジェムナイトは敵対する気はない！！』

『敵対じゃない！我々は強き者と戦いたいだけだ！！さぁ、構えろ！！』

・・・何この状況？
え？なんか、ラヴァルのモンスター達がジェムナイトに喧嘩吹っ掛けてんだけど・・・
でもさ・・・ちょっと待てよ・・・
なんでジェムナイトの方にさ・・・・

『ちょっとお前等！！今は喧嘩してる場合じゃないだろ！？今は、この前現れた黒い奴らの事をどう対処するのか考えるべきじゃないのか！？』

・・・なーんでリーズがあんなトコに居んの？
いや、リーズが馬鹿キャラだってのは知ってたよ？でもさ、ジェムナイトとラヴァルのいざこざに自分から突っ込むって・・・ただのバカだろ・・・

『では聞こうガスタの娘！！その黒き存在にビクビク怯えながら我

々に停戦しろという報告書を送ってきたガスタの連中は何をしている！？』

『だから！あたし達は戦うことなんて望んでない！あたし達ガスタは、争うためにイグルや、ガルドの力を借りてるんじゃない！！』

『はっ！やはり怯えているだけではないか！我々はあの黒き存在を恐れてなどいない！我々は知りたいのだよ！この地に共に暮らしながらも、巨大な悪に臆することなく立ち向かっていく、ジェムの戦士たちの力をな！』

『だから何度も言っているだろう！？我々は、世界を脅かす悪としか戦わぬ！お前達ラヴァルが言っているのは、我がままだ！我々ジェムナイトは、来たるべき決戦に備え、ガスタや氷結界と手を結んでいるのだ！！お前たちもいい加減理解したらどうだ！？今度の戦いは、ヒューマンワールドも・・・いや、リアルワールドも脅かす大きな戦いになるのだぞ！？』

リアルワールド・・・？
確か、リアルワールドって・・・俺達の世界・・・
つまり、現実ってことか！？

『はっ！そんな事知った事か！！我々は、お前達と戦えればそれでいい！もう話は終わりだ！行くぞ！者ども！！』

『『『『ォォォ

チクショウ！！中にはライナ達が居るってのに！！

「おりゃあああああああああああああああああああ！！」

こうなったら、やるしかねぇ！！

このまま「はい、そうですか」って言って、この状況を見過ごせる訳ねぇじゃねぇか！！

フォースインパルスフォームから、ブラストインパルスフォームにモードチェンジして、ラヴァルとジェムがぶつかり合う地点に向かい、ケルベロスを構えた

そして、大きく息を吸い・・・

大声で叫んだ

「いい加減にしろやゴルァアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

俺の叫び声と共に放たれた攻撃・・・

それは、今まさにぶつかり合おうとして居たジェムとラヴァルの間を見事に打ち抜いた

『むっ！？誰だ貴様は！？』

上空に居る俺を発見したのは、ラヴァル・グレイターだった

ジェムナイトの方も俺を見て、驚いていた

リーズに関しちゃ口を開けたままぽかーんとしてやがった

「名乗るような名は持ち合わせてねぇけど、ただ一つ言える事はある！俺は・・・正義の味方だぁあああああ！！」

思い切って厨二病真っ盛りの中学生のいいそうな台詞を大声で言ってみた
いや、だってさ？なんか、雰囲気的に言わなくちゃいけない気がしてさ・・・

「正義の味方か！面白い！！なら、その正義の味方がどこまでやれるのか、確かめさせていただこう！！」

素手で俺に立ち向かってくるラヴァル・グレイター・・・
その拳は確実に俺を捕えていて、炎を宿した拳が俺を焼きつくそうと、迫っていた
だが・・・俺は思った

（遅い・・・・・な）

ラヴァル・グレイダーの攻撃は単調で、真っ直ぐ俺に向かって来ていた
これなら、幾らでも対処する方法はあるし、それに、真っ直ぐ打ち込んでいるというのに、俺の瞳にはスローモーションのように映し出されていた

プレシアの攻撃と比べると、遥かに遅く、そしてキレがない・・・
これなら、子供の姿の俺でも簡単に捌けるだろう・・・

ケルベロスを捨て、ブースターの勢いを殺さないままラヴァル・グレイターに向かって突貫した
ラヴァル・グレイターは俺を完璧に捕えたと思い、その拳を俺に向けて放った

「どう・・・・・だ!?」

だが、俺にはその攻撃は届くことなく、まんまと懐に入る事が出来た
俺は拳を握りしめ、右手を軽く引き・・・・

「おっせぇんだよ!!!!」

ダンッ!!と足が地面に着地し、止まる事無い勢いをそのまま拳に乗せ、放った
簡単に言う、アッパーをラヴァル・グレイターにかましてやった

ザザザーーー!!と、辺りに土ぼこりが広がり、吹っ飛ばされたラヴァル・グレイターは後ろに居たラヴァルの仲間達に受け止めて貰っていた

「おいお前等ァ!単純に喧嘩してぇんなら、俺に言いな!!その喧嘩、俺が買ってやるよ!!」

調子に乗ってデカイ事を言ってみた。
いや、まぁ・・・流石にラヴァルの中じゃ強い方に分類されるラヴァル・グレイターを一撃ノックアウトしたら、流石に調子に乗るじゃん?

「ほぅ・・・面白いな少年・・・名は何と言う?」

倒れたラヴァル・グレイターの後ろから、ラヴァルロード・ジャッジメントが俺の方へ歩み寄って来た
やべぇ・・・デケェなオイ・・・

「・・・天城蒼痲。」

「アマギソウマ？珍しい名前だな・・・」

「俺は謙虚だからさん付けでいいぞ。」

「ほぅ・・・随分と態度のデカイ少年だな・・・いいだろう。グレイターを倒したその腕・・・私で試してやろう・・・者ども！手出しするなよ？」

ラヴァルロード・ジャッジメントが手をかざすと、俺とラヴァルロード・ジャッジメントを囲むように炎のリングが出来上がった
恐らく、逃げないようにするためにしたのだろう。

「自己紹介が遅れたな・・・我の名はラヴァルロード・ジャッジメント。ラヴァルの長だ。」

「長が直々にジェムに喧嘩売りに行ってたのかよ・・・」

「あぁ・・・我の楽しみは強者（ツワモノ）に出会い、勝負をする事・・・だが、ジェムの者達は中々勝負をしてくれなくてな・・・強気力を持つなら、それを使いたいとは思わないのか？」

「・・・・少なくとも、ジェムは正しい力の使い方をしてるからだ。」

「なんだと？」

炎で囲まれたリングに、俺の声が響いた
ラヴァルロード・ジャッジメントも物珍しそうに俺を見つめた

「お前等は、自分の力をフルに活用して、戦いたいだけだろ？だけど・・・ジェムナイト達は来たるべき戦いのために力を温存してんだよ！それなのに、わざわざ喧嘩を吹っ掛けにきたお前達に迷惑してんだよ！それに、ジェムの戦士たちは、お前たちみたいに戦闘狂じゃない！！」

「ほぅ・・・言ってくれるではないか・・・」

「あぁ！何度でも言ってやる！ジェムナイト達は、お前達よりも遥かに誇り高くて、力の扱いに長けてる！でも、お前たちは自分たちの力に溺れてる、ただの愚者だ！！」

「言わせておけば！！！」

ラヴァルロード・ジャッジメントが俺に向かい、炎を放った
俺はそれを紙一重で避け、ブラストインパルスフォームから、ストライクノワールフォームにモードチェンジをした

「面白い能力だな・・・だが、いくら能力があろうと、我の炎の前では無力！！」

ラヴァルロード・ジャッジメントから放たれた炎を避け、先ほど自分の居た場所を確認した
すると、岩がマグマのように溶け始めていて、当たったら骨も残らず焼けるという事が推測できた

「さぁどうした正義の味方とやら！！逃げてばかりじゃ喧嘩にならんだろう！！」

「っは！やっすい挑発だな！！」

ストライクノワールとなって、ビームライフルでラヴァルロード・ジャッジメントを必死に攻撃するが、まったく届くことなく、岩をも溶かす炎が俺へと迫っていた

・・・・まずいな・・・こりゃ、子供の姿のままじゃ勝てねぇな・・・

少なくとも、青年の姿になれば、喧嘩にまで持っていけるけど・・・

『・・・・元の世界に帰る事だ。』

ロードに言われた事が何度も俺の頭の中でリピートされ、振り払おうと首を横に振るが、何度も何度も頭の中で再生されるロードの声・・・

（・・・嫌だ・・・・俺は・・・帰りたくない・・・・・！！）

それは、現実から目をそむけているだけ・・・

それが分かっているにも関わらず、俺は右手を見つめた

「これで終わりだ！！！」

止まっている俺が見せた隙を突いて、ラヴァルロード・ジャッジメントが炎を繰り出した

スロー再生されるように俺に向かってくる炎・・・

体を必死に動かそうとするも、まったく言う事を聞いてくれなかった・・・

嫌だ・・・死にたくない・・・・！！

俺は・・・まだ死にたくない！！！

（命と、俺の運命を天秤にかけんのか・・・）

今、この場で青年の姿となれば、状況は変わり、形勢逆転できるかもしれない・・・

しかし、青年となれば、俺が元の世界に帰る日が早まってしまう・・・

運命の選択・・・

これは、俺の人生で何度目かになるものだ。

覚えている限りでは・・・・おっさんに導かれて、なのは達の世界に行った時だったか・・・

あの時は、今のような状態ではなかった・・・・

そう、もっと余裕があったんだ・・・

だから“すぐに”とは言わずに答えを出す事が出来た・・・

瞳を閉じて・・・俺は運命の選択を選んだ・・・

『マスター！！！』

それと同時に、俺の耳に、大切な人の声が聞こえた・・・

透き通るような声・・・・

そして、瞳を開けて、その人物の姿を確認した・・・

（カーム・・・）

こちらを心配そうに見つめるカーム・・・
そして、その瞳にはうっすら涙が浮かんでいる事が確認できた・・・
・・・やっぱ、こうするしかないよな・・・
俺は、ぐっと右手に力を込め、右手で胸を触った・・・
それと同時に、光が俺を包み込んだ・・・

バキィイン！！と、ガラスのような物が割れる音がした
それは、俺だけが聞こえた物ではなく、辺りに居たラヴァルの戦士達と、俺の事を見守っているカーム達にも聞こえたようだ・・・

「な、何故生きている！？」

俺を包み込もうとした炎は、俺の前で掻き消され、跡形もなくなっていた
俺は、右手を前に突き出し、静かに言った

「さぁな・・・・」

そう静かに呟くと同時に、俺は行動を開始した
先ほどまで恐れていたラヴァルロード・ジャッジメントの炎は、もう怖くない・・・
恐れる物がなくなった俺は、そのままラヴァルロード・ジャッジメントとの距離を詰めた

「我と殴り会おうというのか！！気に入った！！」

ラヴァルロード・ジャッジメントも、炎を放つのを止め、俺に拳を向けていた
拳を後ろに引き・・・ゆっくりと俺は殴る目標を見定めていた

「勝負だ少年！！！」

その言葉と同時に放たれたパンチ・・・
それとほぼ同時のタイミングで打ち放った俺の拳・・・
拳と拳がぶつかり合い、ガンッ！！と鉄と鉄がぶつかり合う音が辺り一帯を包み込んだ

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「何！？」

だが、俺は拳を前に突き出し・・・
俺とぶつかり合ったラヴァルロード・ジャッジメントの拳を押し返した
そして、それと同時に俺は声を上げた

「その幻想を・・・ぶち殺す！！！」

あらかじめ引いていた俺の左拳を前に突きだした
突きだすと同時に、ぶつかり合っていた右拳を引き、俺はもう一度パンチを行った

「がぁっ！？」

それがラヴァルロード・ジャッジメントの顔面を確実にとらえ、ラヴァルロード・ジャッジメントの顔面に直撃した
それと同時に、俺の左拳に痛みが走り、俺は苦痛に顔を歪ませた
だが、俺の勢いは止まる事を知らず、そのままラヴァルロード・ジャッジメントをぶっ飛ばした
ぶっ飛んだラヴァルロード・ジャッジメントは、ラヴァル・グレイターと同じように仲間の居る場所までブッ飛ばしてやった

「はぁ・・・・はぁ・・・・ったぞ・・・・」

小さく、その場で呟く・・・
そして、どんどんと声を大きくしていき、俺はその場で叫んだ

「勝った・・・ぞ・・・勝ったぞぉおおおおおお!!!!!」

それと同時に、俺は意識を手放し、その場で倒れた・・・
最後に見えたのは、こちらに走って寄ってくるカームと、ノースウェムコの姿だった

三十一章　動き出す物語・・・ってか？

う、う～ん・・・？

あ、あり？おっかしいなぁ・・・なんか、体が重いんだけど・・・

ぱちっ、と目を開け、とりあえず、まず最初に呟いたのは・・・

「知らない天井だ・・・って、ベタだなァ・・・」

そういいながら、ふわ～～～と起き上がる俺

いや～、結構いい夢見たな～♪いや～、なんか目覚めがいいってイイネ☆

「あぁ、マスターさん。おきたでやんすか？」

「ん？ソニック・バード？」

「後ろでやんす後ろ。」

後ろを向くと、俺の枕となってくれていたソニック・バードを見つけた。

あ～、どうりで寝やすいと思った・・・ソニック・バードって見た目に寄らず、結構モフモフしてるからさわり心地とかいいんだよね～

周りを見渡すと、最初に俺が起きた部屋だと言う事が分かった。

辺り一帯に埋め込まれた小さな宝石たちが、そう言っているかのようにきらきらと輝いていた

「おぉー！起きたか少年！！」

ん？と声のした方を見ると、ラヴァルロード・ジャッジメントが俺に向かって歩いてきた
ご丁寧に、開けたドアは思いっきり閉めました（笑）
げっ、やばっ・・・・！！あのパンチ、予想外にもクリーンヒットしたから、根に持ってらっしゃる！？
ちょ、怖いんだけど！？

「はっはっは！！なんだその寝ぼけた顔は！顔でも洗ってくるがいい！！」

「・・・・あれ？怒って無いの？」

「はっはっは！！何を言う！昨日の敵は今日の味方と言うではないか！！よろしく頼むぞ盟友！！」

「め、盟友！？」

ちょ、どういうことなの！？教えて！！教えてったら教えて！？
俺の背中をめっちゃ叩くラヴァルロード・ジャッジメント。
やはり、俺が人間だから、少しは加減をしてくれているのだろう。
まぁ、痛いのは変わらないんだけどさ・・・・

「おぉ、起きたのか蒼痲。」

すると、ラヴァルロード・ジャッジメントの後ろから黄色い鎧のような物を着こなしている戦士、ジェムナイト・ルマリンが俺の所へやってきた
あ、そっか。俺、一応ジェムナイトとラヴァルの戦争止めたんだっけ・・・

・・・・後後思い返すと、結構恥ずかしいことしてるな俺・・・
つぅか、良く一人で戦争止められたな・・・

「では盟友！またな！！」

そう言って、ラヴァルロード・ジャッジメントはどこかへ向かって歩き出した
俺はソニック・バードと顔を合わせ、静かに言った

「なぁソニック・バード？どうして敵対してたジェムナイトとラヴァルが一緒に居るんだ？」

「あぁー・・・・それは・・・・マスターが戦いを未然に防いでくれたおかげで、ラヴァルがジェムナイトとガスタに同盟を結ぼうと呼びかけたんでやんすよ・・・」

「え〝・・・・マジ？」

「本当だ蒼痲。」

ジェムナイト・ルマリンが俺の持って来ていたバッグを俺に優しく手渡してくれた
「あっ！！」と驚きながらも、ルマリンからバッグを受け取り、中身を確認した

良かった・・・・全部ある・・・
デッキケースも・・・俺の食糧とかも・・・

「君のお陰で、ラヴァルがようやく話を聞いてくれたよ・・・ありがとう。これで、我々も本格的に戦いに備える事が出来る・・・」

「お、おう。」

不思議と、俺は照れていた。
自分よりも背が高く、生きた年月も俺よりも長く生きているであろうジェムナイトの戦士に褒められて、単純に喜んでいた

「これから、宴をやるのだが・・・君にはぜひとも参加して欲しいのだが・・・いいだろうか？」

「宴？何すんの？」

「マスターが結んだこの関係を祝って、宴をするそうですぜぃ。」

ルマリンが説明しようとしたところをソニック・バードが説明してくれた。
へー・・・宴かぁ・・・俺、この世界に馴れてないんだけどなぁ・・・

「そんなわけで、マスターさん。起きてくだせぇ♪」

「お、おう。」

ソニック・バードが体を震わせて俺を退けた
俺はソニック・バードのモフモフ感から離れ、小さく欠伸をした

「ふわぁ～～～～あ・・・さて、俺はどこに向かえばいいんだ？」

「さぁ？分かりやせん。とりあえず、歩いてみれば・・・ふあぁぁ～～」

恐らく、歩いてみればいいと伝えようとしたのだろう。
だが、ソニック・バードは最後まで言い切る事が出来ず、その場で欠伸をした
どうやら、眠いのに看病をしてくれていたらしい

「あー、ソニバ。お前休んどけ」

ちなみに、“ソニバ”とは、ソニック・バードの略である。
勿論、命名は俺だ。

「い、いいんですかい？わ、ワテまで起きて・・・ふぁぁぁ・・・」

「見るからに寝むそうじゃねぇか。ほら、とっとと休んどけ。」

そういって、バッグからリチュアのデッキを取り出して、ソニック・バードのカードを突きだした
実は、裏話だけど、カームの家じゃソニック・バード達は大きすぎるので住めないので、ソニック・バードとかスターダスト・ドラゴンとかはカードの中で住んでる。

イラスト通り、結構広い所らしいが、外の空気の方がいいらしい

「ふあぁぁ・・・すんませんねぇ・・・んじゃ、少し休みますわ・・・」

そういって、ソニック・バードはふっと消えて、カードのイラストの中に入った
イラストにはソニック・バードが眠っている姿が映し出されていた

後後気付いたのだが、精霊が宿っているカードには毎回変化が現れるようだ。
おかげで、今その精霊がどんな風に過ごしているのか、どんなことをしているのか、イラスト越しに見る事が出来る。
まぁ、勿論風呂等は覗くことはできないし、写っているイラストの殆どが寝ていたり、昼寝していたりと、本当にそれぐらいしか映し出されないのだ。

「おやすみ、ソニック・バード。・・・さて、宴の準備でも手伝ってやるか・・・」

ソニック・バードをデッキに戻し、ゆっくりと部屋から外へ出た
廊下に出て、恐らく宴が始まるであろう会場を目指し、俺は歩き出した

「ん？おぉ、蒼痲。調子はどうだ？」

出口の近くの、宝石の敷き詰められた廊下でジェムナイト・ガネットに出会った
手にはいくつもの小道具を持って、どこかへ向かおうとしていた

「あぁ、ガネット。おはよう・・・つか、もうそろそろ夜になるから、こんばんわ・・・か？」

「そうだな・・・こんばんわ」

「で・・・何してんだ？そんな小道具持って・・・」

左手には工具箱のような小道具を持っており、これから何かを直しに行くのだろうか？と心で思ったのだが、ガネットは少し笑い、言

った

「はっはっは・・・それは、外に出てから分かる事だ。」

「外？外で何かやってんのか？」

「あぁ・・・宴の準備だ」

「へぇ～・・・んじゃ、俺も手伝うか・・・んじゃ、ガネット。また会おうぜ」

「あ、ちょっと待て蒼痲。」

出口の方まで歩き始めた俺を、ガネットが止めた
なんだ？俺、なんかやったっけか？

ガネットはがさごそとポケットのような場所から、小さな箱を二つ取り出した
一つは、青い箱・・・もう一つは、緑色の装飾が施されている箱だった
大きさ的には、掌に丁度収まる程度の物だ

「これを・・・君に」

「・・・なんだこれ？」

最初に手渡されたのは、青い箱だった
とりあえず、箱を開けて中身を確認した。
すると、そこにはサファイヤの埋め込まれた指輪がきらきらと輝いていた

「・・・指輪？」

「君には、本当に感謝している・・・我々の戦いを止めてくれて、ありがとう」

「い、いや・・・別にいいって・・・」

そういって、俺は指輪を突き返した
だが、ガネットは突き返した手を押し返し、静かに言った

「・・・君達人間には分からないと思うが、我々ジェムナイトは、宝石の声を聞く事が出来るのだ。この宝石たちが、君と一緒に居たいと言っているのだ・・・受け取ってくれぬか？」

ほ、宝石って喋るのか？
つか、宝石が自分から「この人の物になりたいの！」って言うのか・・・？
怖いわぁ・・・

「・・・わぁったよ。貰うよ」

そういって、俺は手渡された二つの宝石箱を手に取った
手に取った二つの箱をポケットの中に突っ込んで、俺は静かにガネットを見つめた
鎧の隙間からうっすら見えるガネットの瞳は、満足そうに閉じていた

「おっと、忘れていた。私はこれから取りに行く物があるのだ。では、またな。蒼痲」

「おう。またな」

そういって、ガネットはジェム高山の奥へと進んで行った
俺は、ガネットとすれ違うようにそのままジェム高山から外へ出た

「・・・・マジか」

ジェム高山から出て、外に出ると同時に分かった事・・・
それは、ラヴァルとジェムナイトが共同で宴の準備を進めているという事
山の外で、ジェム高山とラヴァル高山との間に、大きな土台があり、
そこで何かをスタンバイしているラヴァルとジェムナイト
大きい物を担いで運ぶラヴァル・・・
宴の料理を調理しているジェムナイト・・・・
どうやら、本当にお互いに手を組んだらしい。
うん、いい事だな。
そんな中で、ラヴァルにも後れをとらないほどの怪力で岩を運ぶ緑色の髪が一つ・・・
・・・あれって・・・

「おーい、リーズー！」

「ん？おぉ！！蒼痲！！起きたのか！！」

岩を放り投げ、一仕事終わったぜ！みたな顔をしていたリーズに駆け寄った
リーズは、俺に気づくと同時にその場で手をぶんぶん振った
リーズの大声のお陰で、ラヴァルとジェムナイトの視線が一斉にこっち向いたぜチクショウ！！

「お、おう。なんか、手伝う事・・・」

「お前がジャッジメントを倒した人間か！！」

な、なんだぁ？どこだ！？俺を呼ぶ声は！？
・・・とか、思いつつ、後ろを振り返るも、後ろには長い赤い髪を振るわせる女性しか見当たらないんですよ。
あれ？この人、誰？
つか、今の声・・・この人からなの？
なんか、感じるオーラが、完璧にメイド長って感じなんだけど？
うん。咲〇さんポジションだな。

「下じゃ下！！見えぬのか！！」

「下？」

そのまま、赤髪ロン毛の女性から視線を下げると・・・

「・・・・幼女？」

「幼女ってなんだ！？私は妖女だ！！」

ラヴァルの幼・・・・妖女が居ました。

うん。普通にフード被ってるあたり、俺の萌えキュンポイント1点だな。

「まさか、お主みたいな者がジャッジメントを倒すとはなぁ・・・未だに信じられんわ。」

「えぇっと・・・リーズー・・・この幼女とロン毛の人って誰？」

「幼女ではない！！妖女じゃ！！！」

いや、ほんとにどっからどーみても、幼女です。いや、マジで・・・

「蒼痲様。申し遅れて申し訳ありません。私（わたくし）、ラヴァル炎火山の侍女と申します・・・そして、ここにおられる方が・・・」

「ふんっ！ラヴァルの勇者の血を引く、ラヴァルの妖女じゃ！！どうじゃ！覚えたかこのぼさぼさ頭！」

「ぼさぼさゆーな！！天然パーマじゃ！！」

「どっちも一緒だろ（笑）」

この幼女かわえぇ・・・やっべぇ・・・素で萌えるぞこの子・・・というかリーズ。お前さらっと酷い事言うな。天パには天パなりの悩みがあるんだっつの。

つか、後ろのロン毛の人“侍女”って言ってるから・・・メイドってことか？

ぉお！！流石俺！！思った事が当たったぞ！！さっすが俺！

「所詮お前のような人間はその程度なのだ！私の偉大さを知らない

から、そんな事を言えるのじゃ！！この変人め！！」

「誰が変人だ！変態なのは認めるけど、変人ではない！！」

「このロリコンめ！！！」

その言葉と同時に、俺の頭は何かによって殴られた

え・・・？ちょ、また眠く・・・・

なってたまるかぁぁぁぁぁ！！さっき起きたばっかなのに、もう一度お寝んねしてたまるかぁぁぁぁ！！

「いっつもそうやって、やれると思うなァァァァァ！！！」

「！？」

主人公の座を奪われた主人公の名（迷）言を大声で叫びながら反撃をした

勿論、その場で左足を軸にして、回し蹴りを繰り出しただけなんだけどＮＥ☆

ガキンッ！！と、鉄のような物を蹴った俺に、電流にも似た痛みが走ったが、俺が攻撃した相手を見て、俺は驚きを隠せなかった

「なっ！？」

「くっ・・・！！」

そこには、俺の回し蹴りを受けて杖を手放したカームの姿があった

俺が蹴ったのは、カームの杖だったらしい

恐らく、俺の叫び声と共に、咄嗟に杖でガードをしたらしい

いっつぅ～・・・足痛ぇ・・・

「なんだ・・・カームか・・・」

「・・・なんですか？ロリコンマスター」

ちょ！？ポケモ〇マスターみたいに言わないでください！！
俺はロリコンなのは一応認めるけど、マスターになった覚えはねぇ！！
つか、なんで皆俺の事“マスター”って言うの！？所有者だからか！？
せめて、ご主人様とかにしてくれよぉおおおおお！！

「あ、あのなぁ・・・ロリコンマスターって・・・俺、変態なのは認めるけどロリコンではない！！・・・と思う。」

「・・・マスター、冗談抜きで妖女ちゃんがドン引きしてますよ？」

「・・・御主、やっぱり・・・変態だったのか・・・！？」

「お譲様、近寄っちゃ駄目ですよ。」

「ちょ、誤解だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ちょ、侍女さん！！妖女を俺から遠ざけるのやめていただけません！？

「ふんっ！信じられぬ！！なぜ御主のような輩に、我らが長が敗れ

たのだ！！」

「知らねぇよ！！つか、俺が勝てたのは、相性が良かったからだ！第一、ラヴァルロード・ジャッジメントはめっちゃ強かったよ！！危うく死にかけたんだぞ！」

「では、グレイターは弱かったと申すのか！？あの者は、ラヴァルの中でも屈指の強さを誇るのだぞ！！」

いや、グレイターも十分強かったけど・・・あんなに単調な攻撃じゃ・・・ねぇ？

「いや、どっちも強かったよ。ただ、グレイターは調子に乗って、俺を一撃で倒そうとしたから負けたんだ。ジャッジメントは、俺の事を甘く見てた。それだけだ」

「だが納得がいかぬ！！なぜ、御主のような者が・・・！！」

何かを言いかけた妖女の前に、侍女が現れ、言う前に妖女を止めた侍女は一度ためいきをついて、こう告げた

「お譲様。ジャッジメント様も、グレイター様も蒼痲様に負けたと申しています。誇り高い二人の戦士を倒した蒼痲様に、それは失礼ではないでしょうか？」

「うるさいぞ侍女！！私は、こんな奴に・・・」

「いいですかお譲様？ジェムナイトの戦士達もそうですが・・・蒼痲様も望んで戦いを起こすような人ではありません。我々は戦争を仕掛けたのにも関わらず、蒼痲様やジェムナイトの方々は許して下

さったのですよ？ようやく結べた同盟を、ここでお破りになられるおつもりですか？」

「・・・・・・」

侍女がきつく妖女に説教をすると、妖女は俯いた
ほっとその場で息を吐いた侍女は、俺に向き合い、静かに言った

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません・・・お譲様は、プライドが高いお方なのです・・・どうか、許して頂けないでしょうか？」

「あ・・・うん。」

「ありがとうございます。蒼痲様。」

そういって、スカートの端をつまんで俺に静かにお礼をする侍女
やばっ・・・可愛いんだけど・・・！？

「・・・・・・」

「ちょ、か、カーム！？」

突然、俺の手を握りしめたカームが俺を引きずるように歩き出した
ちょ！？どういうこと！？
そのまま引きずられるようにカームと共にラヴァル高山とジェム高山の前にある大きな森の中へと歩き出した
侍女と妖女とリーズは、そんな俺を見つめていた
リーズは手を振りながら「ちゃんと帰ってこいよー」と大きな声で言った
んな事分かってるっつの！！

そしてそのまま、俺はカームに手を掴まれたまま森の奥に入っているわけですよ・・・

「ちょ、カーム!?俺達どこ向かってんの!?」

「静かにしてください・・・すぐ、つきますから・・・ほら。見えてきましたよ」

「だから、なにがっ・・・・!?」

カームの指差す先をゆっくりと見つめると・・・

「うわぁ・・・・」

とても美しい湖があった。
もうすぐ夜になりそうだというのに、太陽の光が反射して幻想的な光景を生みだしている
思わず声を上げるほどの美しさに見惚れ、その湖と一緒に映っているカームの姿がとても美しすぎて・・・感想が思い浮かばなかった

「・・・どう・・・ですか?」

「どう・・・って聞かれると、綺麗以外の感想が出てこない・・・」

「良かった・・・気に入って貰えて・・・ここ、私しか知らないん

ですよ？」

「そっか・・・でも、なんでそんな場所に俺を？」

「・・・ひとまず、休みませんか？」

カームは嬉しそうに俺に微笑みかけてくれた
ふつくしい・・・・いや、ネタじゃなくてマジでな。
湖の前にある少し大きめの岩に腰掛けるカーム。
不思議と、カームの目線が“こっちへ来い”と言っているように思え、俺もカームの横に腰掛けた

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・（ぽすっ）」

「ちょ、おま！？」

腰かけた俺達は、ゆっくりと湖を見つめていた
しかし、突然カームが俺に寄り掛かって来た
だが、一度驚いただけで、俺はそのまま瞳を瞑っているカームを見つめた
やはり・・・綺麗だ・・・
風に靡く緑色の髪も・・・閉じている瞳も・・・微笑んでいる唇も・・・
・・・はっ！？何考えてんだよ俺！！！
落ちつけぇ・・・落ち着くんだ・・・紳士たるもの、常に落ちつきを・・・あれ？これ前にも言わなかったっけ？デジャブ？

「マスター・・・？」

「ん？」

辺りを見渡して、俺以外居ない事を確認したカームは、寄りかかるのを止めて、立ちあがった
そして、俺と対峙して、少し頬を赤くしながら言った

「私・・・マスターに出会えてよかったです。」

「・・・なんだよ、いきなり。」

「ふふっ・・・なんででしょうね・・・私も、忘れちゃいました♪」

可愛らしく笑顔を向けるカーム
その後、俺に背を向け、もう一度笑うカーム。
その一挙一動が可愛くて・・・俺は見とれてしまっていた

「まったく・・・ほんと、お前って分からない奴だよな。」

「よく言われます♪」

くるっと半回転して俺と見つめあうカーム
不思議と、カームの頬が赤かった

「・・・マスター？」

「なんだ？」

カームは一度大きく息を吸い、大きく吐いた
そして、俺を見つめ、言った

「私・・・マスターの事が・・・・・・」

カームは、頬を真っ赤染めて少し深刻そうに溜めこんだ
え・・・・？これって・・・告白フラグ・・・？
ちょ、待て！！落ちつけぇぇぇぇぇ！！まだ心の準備がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！

俯いた顔をあげて、俺と視線が重なった瞬間、カームは大きな声で言った

「マスターの事が！！・・・！？危ない！！」

しかし、何かを言いかけた瞬間、カームは俺に向かい抱きついてきた
いや、押し倒してきたという方が正しいのだろうか？
だが、先ほどまでとは違い、カームの表情は柔らかい物ではなく、深刻な物だった

「ぐっ！？」

ゴスッ！！！と、何かと何かがぶつかる音がした
その音と共に、カームが短い悲鳴をあげたのが分かった

「なっ・・・・！？カーム！！！」

俺を押し倒していたはずのカームが近くにあった木に投げ出され、
俺はそれを追った
一体、どっから攻撃してきたんだよ！？

「はぁッ！？」

カームの肩を抱き、俺は俺達を襲った物体を凝視した
湖の中から・・・手が出ていた
いや、“手”というよりも腕と言う方が近いだろう。
湖の中の水が腕の形をして、俺達を見つめていた
腕には、どこかで見た事あるような変な紋章が赤く輝いていた

『オォオオオオオオオオ！！！』

口がある訳でもないのに、雄叫びをあげた腕に若干引きつつ、俺は腕に立ち向かった

「うぉおおおおおおお！！！」

『ァァァァァァァァァァ！！！』

腕がこちらに向かって拳を構え、突きだした
それとほぼ同時に、俺も右拳を引き、前へと突きだした
ゴンッ！！！と、鉄と鉄がぶつかり合う音がした
だが、その音に遅れて、バキンッ！！とガラスの割れる音が響いた
俺とぶつかったはずの腕はその場で水と化し、湖の中へ消えた
辺り一帯に水が散乱したが、俺は気にせず、倒れているカームに駆け寄った

「大丈夫か！？おい！！」

瞳を閉じているカームを揺すって起こそうとするが、一向に反応が無い
畜生！！なんだってんだよ！？なんだよあの腕！？なんで俺達を狙

ったんだよ！！
・・・まさか・・・？
なんで・・・水が？
水が意味するのは・・・“リチュア”の象徴・・・
先ほど見た赤い紋章は間違いなく“リチュア”の紋章だ・・・
“リチュア”は、ガスタ湿地帯を侵略しようとした・・・ガスタの敵・・・
「まさか・・・な・・・」
いや、間違いないだろう。
リチュアの紋章があった時点でそれは確定している。
だが・・・なぜ俺達を・・・？
「・・・・う・・・ん・・・・・？」
「カーム！！カームッ！！俺だ！！蒼痲だ！！分かるか！？」
ようやく反応を見せたカームを揺すって、生きているかどうかを確かめた
そして、ようやく開いた瞳を見て、俺は安心して息を吐いた
「良かった・・・・生きてるな・・・なァッ！？」
カームを見つめ、安心した直後だった
左足に何かが絡まった感覚があったため、それお見た瞬間、俺は何かによって引っ張られていた

「!?マスター!!!」

起きたばかりだと言うのに、俺の手を取って木に掴まるカーム
だが、先ほどこの木と衝突しているため、まだ意識が朦朧としている
握っている手が少し震えている・・・
左手で木を掴んで、俺を離さないように必死に力を込めるカーム・・・
なんて忠誠心の高い精霊だよ・・・!!

「くっそ!!」

左足を見ると、先ほど倒したと思った水の腕が復活しており、俺の
左足を掴んで湖の中に引きずり込もうとしていた
くそっ!!なんで生きてんだよてめぇよォ!!大人しく死んどけっ
つの!!

「マス・・・ター!!」

「くっ・・・カーム!手ぇ離せ!!このままじゃお前も道ずれにな
っちまう!!」

「嫌です!!もう、貴方の側から離れないって決めたんです!!」

どうやら、カームは絶対に離してくれないらしい
これがラブコールだったら最高なのにな・・・って!呑気にんな事
考えてんじゃねぇよ俺!!

「うぅ・・・マスター!!」

「カーム・・・・」

俺はゆっくりと握っている手の力を緩めた
カームは、俺がカームから離れようとしている事を悟ったのか、先ほどよりも強く力を込めた
爪も立てているため、かなり痛い・・・

「やめてください！！手を・・・離さないでくださいっ！！！」

「悪い・・・俺も男なんだわ・・・」

このままこんな事を続けて居ても、誰も助けに来ないだろう。秘密の場所らしいし・・・
このまま、無駄な消耗戦をやっていても、俺が助からないという事を悟った俺は、徐々に力を緩めて行った

「嫌です・・・もう、離れたくないんです！！」

「カーム！！俺はこのままどっかに連れ去られるけど・・・この事をウィンダールと、ラヴァルとジェムナイト達に伝えてくれ！」

「嫌です！！このまま、一緒に・・・」

「カームッ！！！」

「！？」

初めて・・・カームを怒鳴った。
だが、俺は険しい顔をするのをやめて、静かにカームに微笑みかけた
カームの瞳には、涙が溜まっており、今にも泣き出しそうだった

こんな状況でなければ、頭を撫でて慰めて居ると言うのに・・・

「約束する・・・絶対帰るから。」

「嫌ぁ・・・マスター・・・行っちゃ・・・駄目・・・ですっ・・・・」

とうとう泣き出してしまったカームに、静かに言った

俺は微笑みかけながら、静かに言った

「俺を誰だと思ってんだよ?逃げも隠れもするけど、約束は命をかけてでも守る男だぞ?」

「・・・・マスター・・・・・」

「だから・・・頼んだぞ。カーム」

そういって、俺はカームから手を離した

そして、突然息が出来なくなり、俺に視界に水が入り込み、周りが水色一色に変わった

朦朧とする意識の中、最後に聞こえたのはカームの叫び声だった・・・

「・・・ようやく・・・・か。」

どこかの薄暗い洞窟・・・

そこに、一人の青年が居た。

湖の中を覗き込むと、腕のような物が何かを掴んでいて、それを乱暴に陸に放り投げた

ゴロっ・・・と転がったのは、青年と同じ年頃の青年だった

青年は、静かに近づくと・・・

肩に手を回し、引きずるように洞窟の奥へと進んだ

「・・・ノエリア。捕まえてきたぞ」

「・・・そいつが、エリアルのマスターだって？」

洞窟の奥は、宮殿のような物に繋がっており、その宮殿の玉座に、頬杖をつきながら青年を見下ろす女性の姿があった

「・・・あぁ。間違いない」

青年が、肩に担いだ青年の頭に手を置いた

そして、そこから魔力を込めると、魔法使いの帽子のような物が現れ、うっすら蒼く輝いていた

「・・・ふん。で？そのマスターを捕まえたという報告のためだけにここに来たのかい？」

「・・・お前は、娘をなんとも思わないのか？」

「あんな出来損ない、私は望んで産んだわけがあるまい！！」

そういって、ノエリアと呼ばれた女性は鞭のような物で玉座の近くを叩いた

青年は、静かにそれを見て、後ろを振り返った

そして、そのまま歩き出した

「お待ち！！まだ話は終わってない！！」

「・・・何故、女王気取りのお前の話を聞かねばならぬのだ？」

「言わせておけば！！！」

ピシンッ！！！と、鞭が青年の頬に当たった

ノエリアのコントロールがいいのか、担いでいる青年にはかすりもしなかった

「・・・・・・」

「まぁいい・・・そいつが持っている、ガスタの情報を洗い浚い吐いて貰えばいい。ふふふ・・・あーーーーっはっはっはっはっは！！」

そして、狂った声で大きく高笑いをするノエリア

その声を無視し、ゆっくりと進む青年・・・

そして、青年とすれ違うように、真っ黒な存在が宮殿の玉座の間へと入って行った
その姿を見て、青年は小さく呟いた

「・・・インヴェルズめ・・・・！！」

吐き捨てるように言った青年は、そのままゆっくりと奥へ進んだ

そして、廊下ですれ違ったサメの姿をした魚人に、ゆっくりと話しかけた

「・・・エリアルの様子は？」

「・・・正直、最悪だ。一刻も早くカードを渡さねば・・・」

「・・・マスターが・・・居るの・・・？」

薄暗い廊下に、少女の声が木霊した
青年と魚人はバッ！！と振り返り、声がした方を向いた
そこには、廊下の壁を這うように歩み寄ってくる少女の姿だった

「エリアル！！」

「安静にしないとだめだろう！？」

「いいの・・・マスター・・・居るんでしょ・・・？ヴァニティ・・・？」

「・・・・・・」

ヴァニティと呼ばれた青年が、ゆっくりとエリアルに近づき、担いでいる青年を見せるように壁に寄り掛からせた
それを見て、エリアルと呼ばれた少女は弱弱しい声で言った

「マスター・・・・会いたかった・・・！！」

弱弱しい声で、小さく呟き、そして壁にもたれかかった青年に向かって抱きついた
「ん・・・」と小さな声で反応している辺り、青年はまだ生きているということが分かった

「・・・っ・・・」

「エリアル！！」

青年から離れようとしたエリアルが、後ろへ倒れた
ヴァニティが近寄り、エリアルを抱きしめた
良く見ると、息も荒く、体に生気と言う物を感じられない・・・

「ありがとう・・・ヴァニティ・・・」

「・・・エリアル・・・少し休め・・・この男と共に、お前の部屋まで運んでやる・・・」

「うん・・・おやすみ・・・ヴァニティ・・・アビス・・・」

そういい、エリアルは瞳を閉じた
ヴァニティは、ゆっくりとエリアルをアビスに手渡し、壁に寄り掛かった青年の肩を再び担いだ
アビスはゆっくりと先に進み、エリアルの部屋と思われる場所へと歩き出した
ヴァニティも遅れて、アビスの後を追った

三十一章　動き出す物語・・・ってか？（後書き）

敦&おっさん「「教えて！！！」」

蒼痲「・・・ロードせんせー」

ロード「うーっす。まさか続編があるなんて思ってなかったロードでーす。」

蒼痲「アシスタントの天城蒼痲だ。」

ロード「さて、今回の授業の内容は・・・・」

カーム「（ガシャンっ！！！）待って下さい！！」

蒼痲「おい！！廊下は走るなって学校で教わっただろ！？つか、ドア吹っ飛んだぞ！？」

カーム「作者はどこですか！？今すぐに切り刻みます！！（何故かウィンダールの杖を装備）」

蒼痲「お、落ち着け！！つか、なんでウィンダールの杖なんだよ！？」

カーム「止めないでくださいマスター！！このままじゃ、マスターとエリアルがくっ付く可能性があるじゃないですかァァァァ！！」

蒼痲「落ちつけつってんだろォォォオがァァァァ！！」

ロード「・・・あー、まさかこんな感じで二回目が終わるなんてな・・・」

敦「え！？もう終わりなんですか？！」

おっさん「ちょ！？はやくね！？」

敦「納得いきません！！ただでさえ全然出番が無いのに！！」

おっさん「そーだそーだー！！」

作者「いや・・・俺に言われても・・・」

カーム「作者覚悟ぉおおおおおおおお！！」

作者「ちょ！？あぶな！？」

蒼痲「作者逃げろぉおおおおおおおお！！！」

作者「なに！？よくわからないんだけどぉおおおおおおおおおおおお！！！」

カーム「逃げるなァァァァァ！！！」

作者「ぎゃあああああああああああああああ！！！」

作者（真っ二つ）「えぇー・・・今回のお話はどうだったでしょうか？」

蒼痲「おい、上半身と下半身真っ二つだぞ」

作者（復活）「えー、今回は竜王さまからの贈り物である「サファイアの指輪」と「エメラルドの指輪」を登場させました。」

蒼痲「・・・渡す相手なんて居ねぇんだけど・・・」

作者「エリアルとカームにあげろ。きっと竜王さんもそれを期待しているはずだから」

蒼痲「・・・まぁ、頑張るよ」

作者「んじゃ、報告終わりっ！以上！！また次回！！」

蒼痲「無駄に早ぇなオイ！！！！」

三十二章　リチュアとキスと巨大な悪と

―ピチャン・・・・ピチャン・・・―

・・・うるせぇよ・・・なんで雨漏りなんてしてんだよ・・・

―ピチャン・・・・ピチャン・・・―

うっせぇって言ってんだろ・・・

―ピチャン・・・・ピチャン・・・―

『蒼。お前には才能が無い』

『俺はお前の頃の年だったら、もっと出来てたぞ』

『何度でも言ってやる。お前じゃ無理だ』

「！！？」

バッ！！とその場で起き上がる俺

ご丁寧にも、俺に毛布がかかっていたが、今はそれどころではない

「親父っ！？」

辺りを見渡すが、先ほどの声の主が見当たらない・・・
・・・幻聴か・・・？

・・・思い出したくねぇのに・・・なんでアンタはいっつも俺の中に居るんだよ・・・ッ！！

「・・・あれ・・・？ここ・・・どこだ？・・・あ、そっか。連れ去られたんだっけ・・・」

あー・・・ここどこだよ？
つか、このタイミングじゃ「知らない天井だ・・・」ってのもできねぇじゃねぇか！！
・・・あれ？それ、さっきもやったような・・・？
ま、いっか。

「・・・うーん・・・見た感じ、どっかの一室・・・だよな？」

辺りをキョロキョロ見渡すと、どこかの一室だと言う事が分かったつか、箪笥ってどの世界も共通してあるんだな・・・ちょっと発見できてラッキーかも・・・
・・・あれ？ここ、床・・・だよな？

「まぁ・・・とりあえず、どっか行くか」

そういって、俺は立ちあがった
だが、俺は立った瞬間に、俺はベッドの上で寝て居たであろう少女と目が合った

「・・・え・・・？」

「マ、マスター・・・？」

そこに居たのは、幻影（イリュージョン）との戦いで、自分の身を呈してまで守ってくれた女の子だった
カームと同じくらい長い蒼い髪が腰にまで届いていて、カームとは違い、少しタレ目の瞳が俺を映していた
俺を映している瞳は、カームのような透き通った緑色ではなく、深く、海のように濃い蒼の瞳
そういえば、この前知ったんだけど、カームの瞳って、緑って言うか、翡翠に近いんだよネ。

・・・って、そんな場合じゃなかった・・・

「え、エリアル・・・？」

「マスター・・・起きても、大丈夫なんですか？」

「え・・・いや・・・あ、うん。大丈夫だ、問題ない。」

どこのエルシャ●イだよ・・・
そんな受け答えをしていた俺とエリアル
突然、エリアルが俺の顔を見てくすくす笑い出した
不思議と、その笑顔を見て居ると、とても癒される・・・

「ふふふっ・・・」

「な、なんだよ？俺の顔、なんかおかしいか？」

「いえ・・・こうやって、マスターと話せるのが、とても嬉しいんです・・・」

あ・・・そっか。

カームも、俺と会った時に嬉しいって言ってたっけ・・・

でも、その後カーム泣いちゃったからなぁ・・・

「・・・マスター？少し、近くに来てくれませんか？その・・・私、動けないんです・・・」

・・・あ、そうだった！！

エリアルのカードのイラスト、結構消えかかってたんだった！！

「ご、ごめん！！今、カード出すから・・・って、あれ！？バッグがねぇ！？」

「貴様の探し物は・・・これか？」

突然現れた謎の男が、俺に突き出すように俺のバッグを差し出した

良く見ると、男は自分と同じくらいの年頃だという事が分かった

・・・こいつって・・・

「ありがとう。ヴァニティ」

「・・・ヴァニティ？」

「・・・自己紹介が遅れたな。俺はリチュア・ヴァニティ。エリアルの兄だ」

「え！？兄貴ィ！？」

「・・・・なんだその目は」

え、ちょ、マジ・・・？

まさかの裏設定かよ・・・まさか、エリアルに兄貴が居るなんて・・・

つか、ヴァニティってリチュアのデッキに入るのか・・・？

確かに、弾圧とか奈落の落とし穴とかの発動をさせないってのは強いけど、手札に腐るなんて落ちは嫌だからなぁ・・・

「い、いや・・・エリアルに兄貴なんて居たんだって思って・・・」

「・・・俺の評価などどうでもいい。・・・少し時間をくれてやる。ノエリアがお前を呼んでいた。・・・話が終わったら出て来い。」

そういって、ヴァニティは部屋から出て行った

残された俺は、少しの違和感と疑問を抱えてベッドの上に居るエリアルを見つめた

まず、少しの違和感・・・それは、渡されたバッグから、俺のデッキが消えていた事

それも、精霊のカードが入った物のみ。

そして、唯一入っていたデッキがエリアルのカードが入っているリチュアのデッキのみだった

しかし、幾ら探しても俺のガチのＥ－ＨＥＲＯや、作りかけのガスタや、ノースウェムコデッキなどは、全てバッグの中から消えていた

そして、俺の中で生まれた疑問・・・

それは・・・・

（なんで・・・エリアルの帽子が・・・？）

バッグの中に入れた覚えの無い、エリアルの帽子が何故か入っていたまぁ、ヴァニティが突っ込んで置いたのだろうと勝手に解釈したが・・・

やはりおかしい。

確か、カームの家に置いたままのような気がしたのだが・・・

・・・まぁいいや。

エリアルの帽子の中に、何故かエリアルのカードも入っていたため、それも一緒に取り出して、ゆっくりとエリアルの居るベッドにまで向かった

「ほら・・・・これ。」

「あ・・・私の帽子と・・・カード・・・」

あまり元気がないようなので、ゆっくりと帽子を被せてあげて、帽子をかぶったエリアルを凝視した

やはり・・・幻影（イリュージョン）との戦いで、俺の助けてくれた女の子と同一人物である事を確認した

「も、もうっ・・・なんですか？」

少し顔を赤くしながら俺に微笑みかけるエリアル

それは、見つめて貰って恥ずかしいのか、嬉しいのか・・・良く分からない顔だった

そんな表情を見て平常心を保てる訳でもなく、俺は顔を赤くしながら静かにカードを手渡した

「ほ、ほら。カード。」

「ありがとうございます。マスター♪」

直接手渡しで渡したのが嬉しかったのか、エリアルはとても嬉しそうに満面の笑みで答えてくれた

ふ、普通に可愛いんだけど・・・つか、顔赤いだろ俺・・・

「あ・・・・・・」

カードから発せられた光が彼女を包み込み、エリアルが驚いたように声を上げた

光が止むと、エリアルは、先ほど寝ていたとは思えないほどの勢いでベッドから起き上がった

「あっ・・・一人で歩ける・・・ありがとうございますマスター！わざわざ、私の為にこんな所まで・・・」

一人で歩けるのが本当に嬉しいのか、俺にタックルにも似た抱きつきをしてきて腰に手を回すと同時にそんな事を言ってきた

ちょ、おま！？い、いきなりなにをぉおおおお！？！？

「そのっ・・・お礼と言っては難ですけど・・・その、少し屈んで頂けますか？」

腰にまわしていた手を俺の頬に持って行き、静かに言うエリアル

良く見ると、彼女は小柄だ。

恐らく、俺と同じくらいの年頃だが、明らかに成長していない

俺が大体１７８センチだから・・・多分、１５０センチくらいか？

随分と小さい物だ・・・こんなに小さな女の子に、俺は守られてい

たのか・・・
そう考えると、なんだかどうしようもない気持ちが心の中を行ったり来たりしていた

「屈めばいいのか？」

「もうっ！何をためらってるんですかっ！？」

そういいながら少し怒ったかのように俺を無理矢理エリアルの方に引っ張るエリアル
ちょ！？このままじゃ、接吻的なアレをしちゃうんですけど！？
いや、接吻と言うかキスだけどさ！？

「い、いや！君は一体何をしようとしているのか分かっているのかね！？」

「もう・・・こうなったら・・・えいっ！！」

「ぬぉう！！？」

いきなりグイッと引っ張られたかと思ったら、先ほどまでエリアルが眠っていたベッドの上に見事倒れ込んだ俺
そして、俺に馬乗りになるような形で俺を見下ろすエリアル

「ちょ、エリアル！？落ちつ・・・」

「マスター・・・・・」

落ちつけと言い終える前に、俺の唇が何かによって塞がれた
指とか、そんなんじゃなくて、誰かの唇によって。

だけどおっかしいなぁ・・・なんか、エリアルの顔が超ドアップなんだけど・・・

・・・え・・・？ｍｊｄ？

ファーストキスはレモンの味とか、イチゴの味とか言う言葉が頭の中を超スピードで通り過ぎて行った
ちょ、俺のファーストキスがぁぁぁぁぁぁ！？！？
ど、どういうこつ！？つか、この図もおかしいだろ！？
普通男が女にするもんじゃなかったっけ！？キスって！？
あれ！？おかしいな！？なんか、冷静になれないぞ！？

ちょ、紳士たるもの落ち着きと言う奴を持たねば・・・
ま、まずは落ちついてタイムマシンを探さなきゃ・・・って、落ち着けっつってんだろ俺ェェェ！！！

「んっ・・・わ、私何してるんでしょうね・・・」

俺から離れたエリアルが、両手を真っ赤になった頬に当てて、黄色い声にも似た声をあげていた
首を横に振って恥らっているのやら、嬉しがっているのやら・・・
俺にはまったく理解が出来なかった
つぅか、俺の中での処理速度じゃ現在起こっていることが全然理解できなかったのだ

（ちょ、俺のファーストキスがエリアルに！？ちょ、えぇ！？き、キスって好きな人にするもんだよな！？そ、それをなんでエリアルが・・・！？え、まさか俺の事・・・いやいやいやいやいや！！ないないないないないない！！俺なんてどうしようもない存在を好きな奴なんて居る訳・・・）

とまぁ、見事にテンパってるわけで・・・
エリアルが嬉しそうに顔を赤らめているの対して、俺はただただベッドの上で固まっていた訳ですよ
いや、マジ助けて・・・

「私の初めてのキス、マスターのあげちゃった・・・♪」

「え、ぁ、ぇ・・・・・？」

「マスター・・・困惑してるようで悪いんですけど、私、行く所があるので・・・では、また後で」

そういって、帽子を深く被ったエリアルが部屋を飛び出して行ったのが分かった
だが、俺はというと、先ほどの感触を思い出して赤面していた・・・

「・・・・お前、エリアルに何をした？」

それから、十分くらいの時間が流れた時だった
突然、ドアが開いてヴァニティが俺を睨むように見た
ようやく我に帰った俺は「いや・・・別に」と小さく呟き、エリアルの匂いの残るベッドから去った

廊下に出て、ヴァニティの歩く方へ静かに歩き出す俺
ヴァニティは、少し早足である場所へ向かっていた

「・・・エリアルの兄として忠告しておいてやろう。やめた方がい

い。エリアルは、人を愛するにはあまりにも不器用だ。」

「・・・なんで兄貴のお前がそんな事言えるんだよ？」

「何年アイツと一緒に居たと思っている？・・・まぁ、お互い愛を受けずに育った者だ・・・嫌でも理解してしまうのだろうな」

「・・・・・・・」

・・・なんでだ・・・？コイツと俺は・・・なんか、どことなく似ている・・・？

嫌、んなわけないか・・・だって、まず初対面だし・・・

でも・・・なんで、俺みたいに歪んだ雰囲気を纏ってんだよ・・・

コイツ・・・

「・・・これから会う相手は、俺とエリアルの母・・・いや、母親の名を語る別人だ。先に言っておくが、怪我をしても文句を言うなよ？・・・それと、俺の事はヴァニティでいい。」

「・・・ヴァニティ、一ついいか？」

「・・・答えられる範囲なら答えよう」

「・・・お前・・・まさか、父親か母親になんかされて・・・」

「っ！？」

「っつ！？」

俺が質問を言いかけた瞬間だった

ヴァニティは、俺に殴りかかって来た
間一髪で後ろに避けた俺は、そのままいつでも殴れるように構えていた
そして、少し殺気を込めた目でヴァニティを睨んだ

「何しやがる！！」

「何も知らぬ赤の他人が・・・リチュアの一族である俺達の詮索をするな！！」

そういって、ヴァニティはまるで呪殺でもするかのように右手の人さし指と中指を合わせ、まるで十字を切るように何かを生み出した
それは、水で出来た何かの弾丸・・・
それに向かって渾身の一撃を放ち、弾丸は俺の方まで真っ直ぐ飛んできた

「はぁッ！！」

だが、その弾丸は俺の右手に触れると同時に、ガラスの割れる音と共に弾丸は消えた
それに驚いたヴァニティの隙をついて、俺はヴァニティとの距離を詰めた
生憎、喧嘩だけなら・・・同い年の奴に負ける気はねぇんだよ！！

「うぉおおおおッ！！！」

久々に、人間を殴った感触がした
驚くほど綺麗に入った右ストレート・・・
そして、それとほぼ同時に聞こえたガラスの割れる音・・・

そして・・・

「がはぁっ！！」

地面に倒れるヴァニティの悲鳴・・・
それを見下すように見つめる俺・・・・・

喧嘩なんて、今時の番長漫画のように何かがあってやるようなものではなく、自分の勘に障る相手が居たなら、そいつをボコボコにするような物だ
ちょっとしたきっかけでもすぐに喧嘩になるご時世だ。警察も苦労しているだろうに・・・
ま、俺は警察が来る前に逃げる人だから、さっさと勝負つけるんだけどな
最近は何かと警察に頼る根性無しが多くなったしなぁ・・・
やれやれ、困ったご時世だぜ・・・

・・・って、そんな場合じゃなかった！！

「お、おい！悪い！！結構普通に・・・」

「黙れ！！・・・なぜ、エリアルを支えられるのが俺ではなく・・・
お前のような奴なんだ・・・ッ！！」

慌てて近寄ったヴァニティは、俺の差し出した手を振り払い、一人で立ちあがった
だが、その瞳には憎しみにも似た何かが宿っていた

エリアルの中では・・・どうやら、俺と言う存在は唯一無二の存在で、変えが利かないらしい

だが、エリアルの中では、肉親である兄よりも・・・俺と言う存在が大切らしい。
家族でありながら、赤の他人に負ける屈辱を思い知らされたヴァニティの瞳は・・・何故か、寂しそうであった
俺は、心に何故か空いてしまった虚無感と共に、立ちあがったヴァニティと共に前へと進んだ
だが、その途中、サメのような魚人と出会った・・・
「・・・ヴァニティ。時は来た。我々も、そろそろ動き出す頃だ」
「・・・分かっている。・・・エリアルのマスター・・・あ、そういえばお前の名前を聞いていなかったな」
突然、動き出す頃だとか言われても分かる訳ゃねぇだろアホんだら!!って大声で叫びたかったけど、場の空気を呼んで静かにした
「・・・天城蒼痲だ。そーまでいい」
「それでは、蒼痲。お前に頼みたい事がある」
「頼みごと？」
場所は変わり、俺とヴァニティは魚人と別れて、別の場所へ向かったまるで、神話に出てくるような玉座に不満足そうにこちらを見下ろ

す女性・・・
赤い、返り血でも浴びたんじゃないかって思うくらいの赤い髪を巻貝のように束ねた女性が、俺とヴァニティを静かに睨んでいた
だが、それがリチュアの物ならば違和感はなかっただろう。
だが・・・俺は感じる違和感を抑える事ができなかった
「・・・あんたが、出来損ないのマスター・・・ねぇ・・・どう思う？ギラファ？」
『グルルルルルッ！！』
なぜ・・・リチュアの人間が、“インヴェルズ”という敵と共に居るんだ・・・？
確か、公式の方じゃインヴェルズはリチュアとガスタ、両方に襲いかかったんじゃなかったのか・・・？
まさか・・・これが、ロードの言ってた・・・バグ・・・？
でも、インヴェルズ・ギラファって、確かインヴェルズの中じゃ上級クラスだけど・・・
でも・・・何故・・・？
「お前・・・名前はなんという？」
「・・・・・・」
ここは、沈黙を保っておいた方がいいだろう
そうすれば、勝手に話が進むはずだ・・・

「・・・だんまりか。それは・・・困るんだけどねぇッ！！！」

「！？」

だんまりしていた俺に、鞭で攻撃を仕掛けてきた変なババア
一瞬、幻影（イリュージョン）に操られていた頃のプレシアを思い出したが、俺は冷静に後ろにバックステップをして回避をした

「おい、いきなり攻撃してきてんじゃねぇよ！！」

「ハッ！！人間風情が・・・リチュアの王である私に歯向かうんじゃないよッ！！」

突然、鞭から変な杖になったと思ったら、杖を俺の足元に向けて構えた
すると、俺の陰からテントウムシにも似た、黒い無視がうじゃうじゃとわいて出てきた

「なっ！？魔細胞！？」

そのモンスターを俺は知っていた
インヴェルズに分類されるモンスター軍の中の一体だ
だが、なぜ俺の影から・・・！？

「はっはっはっは！！面白いダンスを期待させて貰おう！！」

「ダンスは・・・苦手なんだけどなッ！！」

そういって、俺は自分の影を殴った
やはり、あのババアが扱っているのは異端のようだ

魔細胞は、俺が影を殴ったと同時に全部粒子となって消えた

「な、何！？」

「うぉおおおおおおおおおおおおおお！！」

まるで牽制するように大きな声で叫んだ
後ろでヴァニティが驚いたかのように口を開けて居たのが目に入ったが、俺は目の前に居る異端の手掛かりを持つ変なババアに向かって走った
恐らく、このババアはヴァニティの言っていた“ノエリア”という奴だろう
だが、いくら女性でも、異端だというのなら、俺はそれを叩きのめすだけだ！！

『グルァァァァァ！！！』

ノエリアの居る玉座の階段にさしかかった瞬間、インヴェルズ・ギラファが右腕についた・・・サイコガン？のような物を俺に向けて、真っ黒な弾丸を放った
だが、俺の中にあったバグセンサーが、青年モードだというのに、何故か大きな警報を鳴らした

あの弾丸は囮・・・あの弾丸の後ろには、見えない弾丸がいくつもある。注意しろ

俺のバグセンサーが、そう呟いているように大きく警報を鳴らしていた
だが、青年モードの時のバグセンサーは、少し強化されているようだ

（見える・・・私にも弾丸が見えるッ！！）

そう、俺の目にカーソルが現れ、こちらへ向かってくる弾丸の数、どんな形なのかを全て把握できるようになっていた

まぁ、簡単に説明するとストライクフリーダムとかの、あのカーソル画面みたいな感じ。

・・・つか、いつの間にこんな昨日ついたんだろ？

ま、いいや。

とりあえず、ギラファの顔面殴っとけば勝てるような気がする！！

さっすが二次元能の俺！！すっげぇ考える事がシュールだ！！

「オォオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

『グルァ！？』

右手を前に突き出して、向かって来た弾丸をすべて打ち消した瞬間、ギラファの顔色が変わった

そのまま、ノエリアの前まで向かい、拳を構えた

「何っ・・・！？」

「人間・・・舐めんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！」

そういって、俺はノエリアに拳を向けたはずだった

「マスター！！危ない！！！」

「え・・・？」

今まさに、ノエリアに拳が当たろうとした瞬間だった
まるで、何かにタックルされて体勢を崩した俺は、横に倒れようとしていた
だが、俺を突き飛ばした犯人であろう声には聞き覚えがあった

（エ・・・エリアル・・・？）

だが、次の瞬間、思いもしなかったことが起こった
エリアルが、突然何かに殴られたように後ろにブッ飛ばされていた
しかし、俺の瞳には、スローモーションのように映し出されていた
それと同時に、俺の瞳のカーソル画面にエリアルに何か黒い物が当たったと表示されていた

「・・・・・・」

玉座の階段を転げ落ちたエリアルは、うつぶせになったまま動かなくなった
それを見た俺は、居てもたっても居られず、玉座からエリアルの倒れている場所へ走り出した

「エリアルッ！！」

敵に背を向けるのが愚かなことがというのはよく分かる。
だが、それよりも、倒れてしまったエリアルを優先させるのが一番だ！！

「・・・ッ！？ヴァニティてめぇ！！」

「・・・悪いな。」

だが、俺がエリアルに近づこうとした瞬間、ヴァニティが倒れて居るエリアルの前に立ちふさがって、俺がエリアルと接触する事を封じた

ちっくしょう・・・！！後ろには変な巻き貝頭のババアと、変な黒いサイコガン持ちの怪物がいて、前にはイケメン魔法使い（？）が立ちふさがりやがって・・・！！

・・・・あれ？これ、よく考えたら・・・俺、不利じゃね？

味方も居なければ、敵に囲まれ

頼れる戦友はデッキごと行方不明・・・

・・・普通に考えて、俺・・・殺されるぞ・・・？

「ふんっ・・・先ほどのお返しだ。」

そういって、ヴァニティが何かをポケットから取り出した

「っ！？盗んだのはてめぇかこのイケメソ野郎！！」

ヴァニティが持っていたのは、俺のデッキケースだった

だが、デッキケースには黒い札のような物で覆われており、微かにライナの叫び声のような物が聞こえた

「・・・イケメソではなく、イケメンではないのか？・・・まぁいい。貴様は少し・・・自分の立場という物を思い知らせてやる・・・」

そういって、ヴァニティは俺のデッキケースを握りつぶそうとした

だが、俺は動き出そうとしていた
大切な人達が・・・目の前で潰されるのに、耐えられないのだろう

「おっと、動くな・・・動くと、この箱が・・・どうなるだろうな？」

「っ！！てっめぇ・・・うぐっ！？」

すると、俺の両手両足に黒い何かが抱きつくように張り付いた
それは、額にゴーグルを装着した黒い子鬼のような風貌・・・
間違いない・・・コイツは、インヴェルズの斥候だ・・・
インヴェルズの斥候が俺に張り付くと同時に、俺の自由は奪われ、
俺はその場で膝をついた

「ふんっ！動くんじゃないよクソ人間！！」

そういって、斥候に抑えつけられている事をいい事に、あの腐れバ
バアが俺に向かって鞭を振るってきた
それは、人間が虫を踏みつぶす時のように、当たり前のような顔で・
・・

「ぐぅっ・・・はっ・・・その程度が巻き貝頭！！やるんならもっ
と徹底的にやりな！！」

「舐めた口をきくんじゃないよ！！」

だが、不思議と、俺へのダメージは殆どといってもいいほどなかった
頬や胴体にも何度も何度も叩きつけられているというのに、俺には
傷という物は出来なかった
ふと、目線をヴァニティに移すと、ヴァニティがちらっとこちらを

見た

（・・・聞こえるか蒼痲？）

（・・・聞こえてるわ。お陰さまでほぼダメージ無しだっての。・・・つか、すげぇのな。リチュアってのは・・・）

（そんな事はどうでもいい！！貴様！！作戦に無関係のエリアルを巻き込みやがって！！この作戦が終わったら覚えていろよ・・・！！）

（い、いや！俺はてっきりお前等がエリアルに作戦伝えてるんじゃないかって思って・・・つか、なんでエリアルが居るんだよ！？こんなの作戦で伝えられてねぇぞ！！）

そう・・・実は、俺達はここに来る前に作戦をたててていたのだ

その目的は・・・反逆。

リチュア内部の人間の反乱だ。

で、俺は不幸にもその反乱の手助けをする事となったのだ。

どうも、あのババア・・・リチュア・ノエリアだっけ？

ソイツの独裁的な考えに嫌気をさしたヴァニティ達が、反乱を起こそうとしたそうだ。

だが、決行しようにもインヴェルズと手を組んでいるノエリアには太刀打ちができない。

で、そこに異端を打ち消す俺、参上。

偶然にも、俺の能力がヴァニティ達の手助けになると分かった瞬間、

ヴァニティ達が目の色を変えて俺に反乱の協力をさせてきたのだ。
しかも、ご丁寧に逆らえないようにデッキケースを抜き取った・・・
ということらしい。

だが、勿論ヴァニティの持っているデッキケースは偽物であり、本物の俺のデッキは、先ほどのサメ・・・リチュア・アビスに渡しておいたのだ。

「はぁっ・・・はぁっ・・・ふんっ！人間なぞ、所詮その程度・・・ギラファ、後は頼んだぞ・・・」

『ウアアアアアアアアア！！！』

俺を鞭で攻撃していたというのに、先に根をあげたらしい。
なんというか・・・あのババア、運動してねぇからスタミナねぇな。
明らかに肥えてやがる。さて・・・そろそろ反撃の狼煙とやらをあげるかね・・・

インヴェルズ・ギラファが俺に向かって近寄り、サイコガンを構えた瞬間だった
俺は右手に思いっきり力を込めた
その瞬間、俺の周りが爆発するかのようにボフッ！！という音を立てた
そして、その音と共に、俺の体に張り付いていたインヴェルズの斥候が、全て消えた

俺がやったのは、俺の右手の“ありとあらゆる異端を打ち消す力”を掌にのみ集中して、それを一気に破裂させただけだ。
簡単な話だと、風船の中に限界まで空気を入れて、それを圧縮して破裂させる・・・まぁ、そんなもんだろう。

『グァァッ！？』

「どうしたギラファ！？とっとと止めを・・・！？」

「おっせぇよ、ゴキブリもどき！！」

サイコガン（？）を俺に突きつけ、砲撃を行おうとしたギラファに
一瞬の隙が生まれた
その隙を見逃さず、俺は砲撃を中断したギラファの顔面を思いっき
り殴った
ふんっ！自分からうかつに近づくからそーなるんだよ！！ざまぁｗ
ｗｗマジざまぁｗｗｗｗ

「なっ！？貴様っ・・・ヴァニティ！こ奴を殺せッ！！」

「・・・悪いなノエリア・・・俺は・・・いや、俺達はもうお前に
は従わない・・・」

「なっ！？裏切るというのかい！？実の母親を・・・実の肉親を！
！」

「・・・お前は、俺達子供を本当に子供だと思ってくれた事は一度
もないだろう？・・・俺達は・・・あんたの玩具じゃない！！」

そういって、ヴァニティは十字を来るように水の弾丸を発射した
それは真っ直ぐノエリアに向かって進んで行った・・・
当たった・・・そう思った瞬間だった

『ノエリア・・・大丈夫か？』

突然、ノエリアの影の中から巨大な手が現れた
それは、まるでどこかの神話にでも出てくるんじゃないかと思える
ほどの大きな腕・・・
その腕の曲線部分には黄色い線が嫌と言うほど目立っていて、黄色
という明るい色だというのに、纏っているオーラはまったくといっ
ていいほど明るくはなかった
いや・・・明るいんじゃない・・・アレは・・・“邪悪”・・・！！

「ぐ、グレズ様！？な、何故このような場所に！？」

あの巨大な腕がヴァニティの放った攻撃を全て受け止めた
だが、攻撃を受けたというのに、まったくと言っていいほど傷はつ
いていなかった

コイツは・・・・危険だ・・・
俺の本能がそう告げていた

前にも、プレシアの時もこんな事があった気がする
だが、あの時とは比べ物にはならないほどの・・・“闇”
まるで、全てを闇の底へと叩き落すんじゃないかと思うほどの黒い
オーラ・・・
そのオーラを纏った異端（アイツ）が、とうとうノエリアの影から全身を出した

『何を手間取っているかと思えば・・・リチュアの反乱・・・か。
はっはっは！面白い・・・実に面白いぞ・・・』

「も、申し訳ございませんグレズ様！！し、しかし・・・私には・・
・」

『まぁいい。・・・そこに居る人間がリアルワールドから来た・・・と言う事は、我々の計画が順調に進んでいる・・・ということか。』

「っ・・・てめぇは・・・なにもんだ・・・・!?」

気がつけば、俺の後ろに居たヴァニティが腰を抜かしてその場に座り込んでいた

俺の頬からも嫌な汗が流れ始めて、俺も改めて今の状況に気がついたまずい・・・このままじゃ、俺達の作戦が無意味になるっ・・・・!!

『ほう・・・威勢のいい人間だ・・・いいだろう、教えてやる。我の名はインヴェルズ・グレズ・・・太古の昔、氷結界の龍やジェムナイトの英雄達によって、この地に封印された者だ。』

「インヴェルズ・・・グレズ・・・・!!」

コイツが・・・インヴェルズの長・・・・!!!

明らかに、ギラファの纏っていたオーラとは桁違いだ・・・・!!

ど、どうする俺・・・このまま、逃げるか?いや、捕まったら終わりだ・・・

戦う・・・?あの巨大な“闇”と・・・?

「き、貴様!!たかだか人間風情が、グレズ様になんという口の利き方を・・・・!!」

『うるさい!!ノエリア、貴様は黙っていろ!!』

ノエリアが俺に向かって怒鳴った瞬間だった

グレズが手に集めた闇をノエリアに放った

勿論、ノエリアは避ける事が出来ず闇に当たり、壁に叩きつけられた

『人間・・・お前達の世界では、我々のカードを使って決闘をするのだろう？』

仲間であるはずのノエリアを壁に叩きつけたのに、当たり前のように話を進めるインヴェルズ・グレズ

あの野郎・・・言葉で表すんなら暴君だな・・・！！

「それが・・・どうした！？」

『ふははは！！何を熱くなっている人間！我は貴様らを喰おうなどとはまったく思ってはいない。ただ・・・貴様らの世界に興味があるだけだ。』

「興味がある・・・？」

『そう、興味だ。それ以外に何かあると言うのか？』

「てめぇは・・・てめぇのやったことが分かってんのか！？たかだかてめぇの興味だけで、ジェムナイトやラヴァルの戦士たちが被害を受けてんだぞ！？それに、戦いに無関係なガスタの種族まで巻き込みやがって・・・てめぇはてめぇの欲望に忠実に従ってるだけだ！！」

俺が、声を張り上げてインヴェルズ・グレズに言い放った

インヴェルズ・グレズは一度眉をピクリと動かし、静かに言った

『・・・それがどうした？』

「何・・・・・！？」

『それがどうしたと聞いている。ジェムナイトやラヴァルと言った一族は、自分を守る力があるのだろう？ならば、我々を押し退け、その地を守る事が出来るはずだろう？』

「てめぇっ・・・・！！」

『もう話し合いは終わりだ・・・ここからは、決闘（デュエル）といこうではないか』

突然、インヴェルズ・グレズが俺に決闘（デュエル）を挑んできた
しかし、俺は一瞬のうちに理解してしまった・・・
俺とインヴェルズ・グレズがやろうとしているのは・・・
恐らく・・・闇のゲーム・・・
命を賭けた戦いだ・・・

「・・・・・・・・」

ちらっと後ろを見ると、インヴェルズ・グレズの闇に当てられたのか、ヴァニティが気絶しているかのように目のハイライトを失っていた
その横では、エリアルが力なく倒れている・・・
まずい・・・このままじゃ、作戦がッ・・・！！

「・・・・・・いいぜ。受けて立ってやる」

そういって、俺は右手に力を集め、デュエルディスクを展開した

俺がデュエルディスクを構えるのを見て、インヴェルズ・グレズも右手を影に向かって振りおろした
右手が影に飲み込まれ、ズズズッ・・・と、何かを飲み込むような音と共に、インヴェルズ・グレズは右手を引き抜いた
その手には、真っ黒な闇を纏った、デュエルディスクのような物が展開していた

「・・・・頼むぞ・・・・HERO達・・・・っ！！」

俺は、俺の最強のガチデッキ「E－HERO」デッキを見つめ、インヴェルズ・グレズと対峙した

そして・・・

『「デュエル！！！」』

命を賭けた闇のゲームの火ぶたが、切って落とされた・・・

三十二章　リチュアとキスと巨大な悪と（後書き）

「いやー・・・更新遅れちゃった」

蒼痲「お前なぁ・・・モンハンにハマりすぎるのもいいけど、まだランク5じゃねぇか」

「うっせぇよ！！上位クエスト全部ソロでプレイしてんだよ！！一緒に狩ってくれる友達なんていねぇんだよ！！！」

蒼痲「はぁ・・・そうかい。」

「んで、次回は分かる通り、蒼痲とインヴェルズ・グレズのデュエルだな」

蒼痲「つっても、闇のゲームだけどな」

「さぁて・・・ウラガンキンでも狩りにいくか・・・」

蒼痲「いや、小説書けよ！！！」

三十三章　ＨＥＲＯと悪魔

『「デュエル！！」』

玉座を全て包み込むように覆われた真っ黒な霧・・・
その真ん中でデュエルディスクを展開する俺とインヴェルズ・グレズ
だが、今の俺がやっているのは“遊戯王”というカードゲームでは
なく、正真正銘命を賭けた戦い。
闇のゲームという奴である。

だが、俺は体にへばりつく殺気を全て振り払い、自分の全てをデッ
キへ委ねた
相手のデッキは恐らく“インヴェルズ”で統一された純インヴェル
ズデッキ。

それに対して、俺のデッキは十代のデッキを元に構築されたファン
デッキとも言える「Ｅ－ＨＥＲＯ」デッキ
だが、俺のデッキは遊城十代のデッキとは違う・・・
そう、似て居て異なるデッキだ。

「俺が先行を貰うぜ。」

『構わぬ。』

「いくぜ、俺のターン！」

そういって、俺はデッキからカードを五枚ドローした
よしっ・・・別段事故ってるわけじゃない！これなら、ワンキルは
出来ないはずだッ・・・！！

勿論、ライフポイントは８０００からのスタート。
これなら、ワンキルはドラギオンを一ターンで出さない限り削れないはずだ・・・！！

「ドロー！！」

引いたカードは・・・融合か・・・
でも、こっちは先行１ターン目だから、そんなに速く展開できねぇな・・・
取りあえず、相手がどういう動きをするのか見てみねぇとな・・・

「俺はＥ－ＨＥＲＯ　エアーマンを召喚！効果を発動！デッキから、「ＨＥＲＯ」と名のつくモンスターを手札に加える！俺は、Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマーを手札に加える！カードを二枚伏せて・・・ターンエンド。」

これなら、少しは警戒して動けないだろう。
これで・・・アイツがどう動くかによって戦況が変わるな・・・

『我のターン・・・ドロー。・・・私は場にモンスターが存在しないため、手札のインヴェルズの魔細胞を特殊召喚する。そして、ワン・フォー・ワンを発動。手札のインヴェルズの斥候を墓地に送り・・・デッキから、インヴェルズの斥候を特殊召喚する。』

一気に場にモンスターが二体か・・・
やっぱり、インヴェルズ軸のデッキか・・・

『私は斥候と魔細胞をリリース。手札のインヴェルズ・ホーンをアドバンス召喚！』

な、なんだあのゴ〇ブリ！？
あんなインヴェルズのモンスターなんて見た事ねぇぞ！？

『インヴェルズ・ホーンの効果を発動。「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして
このカードのアドバンス召喚に成功した場合、以下の効果を得る。
１０００ライフポイントを払う事で、フィールド上に存在するモンスター１体を選択して破壊する。』

「ぐぅっ・・・！！」

インヴェルズ・グレズ　８０００→７０００ＬＰ

俺の場に存在していたエアーマンが、インヴェルズ・ホーンから放たれた闇のよって破壊された
ぐぅっ・・・モンスターが破壊されただけで、こんなに爆風がくるのかよっ・・・！！

『ふん。所詮、人間などその程度か・・・バトル。インヴェルズ・ホーンでダイレクトアタック。ダークネス・ホーン！！』

インヴェルズ・ホーンから放たれた闇が真っ直ぐ俺へと向かって来ただけど・・・！！！

「罠発動！！聖なるバリア　ミラーフォース！！」

『ほぅ・・・やってくれるな・・・』

俺を守るように展開されたバリアが、インヴェルズ・ホーンの攻撃を跳ね返し、攻撃その物をインヴェルズ・ホーンへ叩き返した

インヴェルズ・ホーンは苦しみの声を挙げて、その場から消え去った
まるで、そこに何もなかったかのように・・・

『ふんっ・・・使えぬゴミめ・・・私はこのまま、ターンエンドだ』

「なにっ！？」

カードも伏せないのかよ！？
確かに、インヴェルズの斥候は、黄泉ガエルみたいな効果持ってる
けど・・・
だが、ターンエンド前に言った言葉に俺はカチンときていた

「お前、自分のモンスターにゴミって・・・」

『ふんっ。貴様のライフを削る目的で出したはずのモンスターだが、
みすみすやられるとはな。それをゴミと言って何が悪い？むしろ、
我が払った１０００ものライフが無駄になった・・・と言い直した
方がいいのか？』

「てめぇっ・・・！！」

どこまでも気にくわねぇ奴だ・・・！！
自分のモンスターをゴミ呼ばわりかよ！！
許せねぇ・・・！！

「俺のターン！！ドロー！俺は、プリズマーを召喚！効果を発動！
エクストラデッキの、Ｅ－ＨＥＲＯ　アブソリュートＺＥＲＯを相
手に見せる事によって、デッキから、その融合素材となるモンスタ
ーを一体墓地へ送る！俺は、ネオスを墓地に送る！！」

『ふんっ。たかだか攻撃力１７００のモンスターか・・・ゴミだな。』

「てめぇ・・・ッ！！俺は、手札から魔法カード発動！融合！手札の沼地の魔神王と、フェザーマンを融合！現れろ・・・フレイム・ウイングマン！！」

『ハァッ！！』

融合を使って、エクストラデッキからフレイム・ウイングマンを融合召喚した俺は、今の状況をフレイム・ウイングマンに説明した

「フレイム・ウイングマン！説明してる暇ねぇんだけど、手伝ってくれるか！？」

『勿論だ。私は、君の相棒だ。どんな時でも一緒に戦おう。』

『ほぅ・・・どうやら、貴様はこの者にカードを預けた者か・・・』

インヴェルズ・グレズが珍しそうにフレイム・ウイングマンを見たカードを・・・渡す？

『そうだ。私と蒼痲は、正真正銘のパートナーだ。』

『ほぅ・・・と言う事は、貴様は現実世界（リアルワールド）に行った事のある者か・・・丁度いい。この者を殺し、ゆっくりと現実世界（リアルワールド）の話を聞くとしよう』

『そんな事をさせるものかっ！！蒼痲は私が守る！！』

パートナー？カードを渡す？なんだ？
コイツ等は・・・何話してるんだよ！？

「フレイム・ウイングマン！今は、話し込んでる場合じゃねぇ！アイツを・・・インヴェルズ・グレズを止めるぞ！！」

『おう！！』

「バトル！！プリズマーでダイレクトアタック！！」

俺の場のプリズマーがインヴェルズ・グレズへと向かっていき、右手を振りかぶると同時にインヴェルズ・グレズへ空中チョップを喰らわせた
その姿は、ネオスのラス・オブ・ネオスとまったく一緒で、恐らく、俺がプリズマーの能力で、ネオスと同名として扱ったからである。

インヴェルズ・グレズ　７０００→５３００ＬＰ

「まだだ！フレイム・ウイングマンで、ダイレクトアタック！！フレイムシューーート！！」

『うぉおおおおおおお！！！』

フレイム・ウイングマンが放った炎の塊が、真っ直ぐインヴェルズ・グレズへと向かって行き、そのままインヴェルズ・グレズに直撃し、大爆発を引き起こした

「見たか！！これが、俺達の力だ！！」

インヴェルズ・グレズ　５３００→３２００

これで、勝負の流れは完全に俺に向きつつある。
未だにノーダメージ＋、手札にはオネストという優秀なカードがある。
フレイム・ウイングマンが倒されても、次のターン、俺にはプリズマーがいる。
プリズマーの効果で墓地を肥やしつつアタックしていけば・・・勝てる！！

『ふんっ・・・温いな。』

「なにっ！？」

爆発の時に生じた土煙が空高く舞っていたが、それが晴れると同時に、俺は目を疑った
インヴェルズ・グレズを守るように、黒い物体が覆っていたからである

『我は、手札に存在するインヴェルズ・ダークネスの効果を使わせてもらった。このカードは、相手による戦闘ダメージが３０００を超えた場合のみ特殊召喚する事ができる。
このカードは、インヴェルズと名のつくモンスターをアドバンス召喚する時に、二体分の生贄となることができる。』

くそっ！！まさか、戦闘ダメージを与えた場合に特殊召喚することができるインヴェルズなんて居たのかよ！！
でも、なんでインヴェルズのモンスターの癖に、あんなに禍々しいオーラがあるんだよっ！！
・・・あれ・・・・？

良く見るとあれって・・・

「幻・・・影・・・？」

そう。幻影（イリュージョン）のような姿をしているのだ

真っ黒な人型の闇・・・それが、インヴェルズ・ダークネスだった

そして、インヴェルズ・ダークネスが現れた瞬間に分かったこと・・・それは、俺のバグセンサーがプレシアの時と同じように機能しなくなったのだ。

これで・・・はっきり分かった。

インヴェルズ・グレズが・・・この世界に入り込んだ異端（バグ）・・・！！

『さぁ、どうした？ターンエンドをしないのか？』

「ターン・・・エンドだ」

不思議だ・・・こちらが優勢だというのに・・・まったくと言っていいほど勝っている気がしない・・・

なんでだ・・・なんでだよ・・・！？

何でアイツ・・・劣勢のはずなのに・・・笑ってられるんだよ・・・！！

『ふふふっ・・・やはり、人間ではその程度か・・・見せてやろう。

我の力を・・・我のターン！！ドロー！！』

インヴェルズ・グレズがドローしたカードを見た瞬間、にやりと笑った

まさか・・・キーカードを引いたのか！？

『ふん・・・これで、貴様を永遠の闇へと葬る事が出来る・・・私は、墓地のインヴェルズの斥候の効果を発動！墓地から斥候を特殊召喚！！そして・・・インヴェルズの斥候と、二体分の生贄となれるインヴェルズ・ダークネスをリリース！！暗黒の底に封印されし絶望よ・・・光によって生まれた次元の裂け目より現れ、世界を混沌へ導け！！』

「なんだ・・・・・あれ・・・？」

インヴェルズ・グレズの上に、真っ黒な雲が渦巻いて、竜巻のように渦を巻いていた

だが、その雲を見て居るだけで、今にも吐きそうになった

その真っ黒な雲から放たれる真っ赤な雷が、まるで閃光のように輝いていた

『蒼痲！！あの光を見るんじゃない！！』

「あ・・・・あぁっ・・・！！」

なんだ・・・あの・・・闇は・・・！！

「うっ・・・・おごぉっ・・・おえぇ・・・！！」

突然、俺はその場で膝をついて、口を抑えた

だが、どんなに口元を抑えても膨れ上がって行く恐怖・・・

そして、今すぐに何かを吐き出したい衝動・・・

逃げたい・・・こんな所から早く逃げ出したい！！！

『蒼痲！！大丈夫か！？』

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！来るな！！来るなぁぁぁぁぁ！！」
あの真っ赤な光が、光るたびに、俺の中のトラウマが何度も何度も蘇ってきた
それも、そのほとんどが、俺の中に蔓延る最悪の記憶・・・
そして・・・その中心と思える人物の顔・・・
「来るな・・・来るなぁぁぁ！！！」
頭を抱え、瞳を瞑った
だが、どんなことをしても蘇る俺のトラウマ・・・
『蒼、元気か？じいちゃんは凄く元気じゃよ・・・』
「やめろ！！俺の中に・・・入って来ないでくれぇぇぇぇ！！」
『蒼、今日は父ちゃんと一緒に走るか！！』
やめてくれ・・・じいちゃん・・・親父・・・そんな笑顔で俺を見ないでくれ・・・
頼む・・・やめてくれ・・・
『あらあら、蒼は元気ねぇ～。』
やめろ・・・母さん・・・そんな笑顔で・・・俺を見るな・・・
頼む・・・もう、俺には・・・

『蒼ー！遅れたら承知しないからなー！！』

姉ちゃんも・・・俺に、笑顔で見ないでくれ・・・
俺を・・・これ以上追い詰めないでくれ・・・！！！

『流石は、俺の息子だな！』

「やめろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

最後の親父の一言で、俺の中にあった何かが砕けた音がした
それは・・・もう二度と聞きたくない言葉だったのに・・・
なんで・・・・なんでだよ・・・

なんでいまさらになって・・・

『おい蒼痲！！気をしっかり持て！！このままでは、敵の思うつぼだ！！』

『はーっはっはっはっは！！少年よ、これが絶望だ！！現れよ、封印されし最強の闇！！我自信・・・インヴェルズ・グレズ！！』

ようやく、渦が消えたと思ったら、その中からインヴェルズ・グレズが腕を組んで現れた
そして、俺を見て一度鼻で笑い、そのまま俺を見下した

『我の効果を発動！！ライフを半分支払い・・・場のカードを全て破壊する！！』

『蒼痲！！！』

インヴェルズ・グレズから放たれた闇の波動が、俺達へと向かって来た
それを少しでも軽減しようと、フレイム・ウイングマンが身を呈して俺を守ろうとしてくれた

「うあああああああああああああああああ！！！」

『うわぁあああああああああああああ！！』

だが、フレイム・ウイングマンは破壊され、波動が俺の体に当たったその波動に身を任せ、俺は壁へと叩きつけられた

「ぐッ・・・！！」

『さぁ・・・終わりだ。我自信で攻撃・・・ダークネス・エンド』

インヴェルズ・グレズが攻撃名を口に出した瞬間、俺の足元の影が広がり、俺を拘束した
良く見ると、俺の足の影から手が出現していた
それが、俺の足を捕まえて、離さなかったのだ
そして、こちらへゆっくりと進んでくる闇の弾・・・

「くそっ・・・くそっ・・・！！動け！！動けよ！！！」

『はっはっは！！どうした？抵抗してみろ！！我をもっと楽しませてみろ人間！！』

畜生・・・畜生！！！
こんな・・・こんな所で・・・！！

「マスター！！」

「え・・・・・・？」

だが、俺の目の前まで迫った闇の弾が、何故か横へと避けて行った
いや・・・違う・・・俺の身体が・・・横に倒れさたんだ・・・
でも・・・誰が・・・？

「マスター・・・貴方は、生きて下さい・・・」

「エリ・・・アル・・・？」

『ほぅ・・・人間を庇うか小娘・・・』

「マスターは・・・私を救ってくれた！！だから・・・今度は、私がマスターを救う番なんです！！」

そういって、エリアルは杖の振りかざした
それとほぼ同時に、俺の足元に真っ黒な空間の裂け目が現れた

「え・・・・・！？」

『何！？空間転移だと！？させぬわぁ！！』

インヴェルズ・グレズが俺に向かって闇の弾丸を放った
だが、エリアルが光見に纏ったと思ったら、エリアルはイビリチュア・マインドオーガスとなってその攻撃を全てはじき返した
そして、俺の半身が空間の裂け目に入った所で、マインドオーガス

と目が合った
マインドオーガスは静かに微笑んで、嬉しそうに言った
「マスター・・・大好きですよ・・・」
マインドオーガスがそう呟いた瞬間、俺の視界が真っ暗になった
「嘘・・・だ・・・・・・」
俺なんて存在を・・・好きになってくれる奴なんて居ないと思っていた
当然だ。何せ、歪んでいてどうしようも無い奴だからだ・・・
だが・・・エリアルはそんな俺を“好き”と言ってくれた・・・
それは恐らく、一人の異性として・・・だろう。
空間の裂け目の中で、俺のデッキからカードが全て飛び散るのが見えた
俺の目の前に映し出されるカード達・・・その中には、何故かノースウェムコ達のカードまであった
しかし・・・全部・・・全部消えて行く・・・
どんなに手を伸ばしても・・・どんなに声を張って名前を叫んでも・・・
全部・・・全部・・・・
デュエルディスクも・・・俺の手から離れて、消えて行くカード達と共に消えて行った・・・
「皆・・・消えて行く・・・・」

信じたくなかった・・・
俺の大切な物が・・・全部消えて行った・・・
自分の手から離れて行くというのに・・・まったく、手が届かない・・・
心の中に敗北感が残る・・・
しかし、それ以外は何も感じる事が出来ない・・・

「畜生・・・・・・」

やはり・・・俺も人間のようだ。
自分では、歪んでしまったから、人の道を外れたとずっと思っていたが、やはり俺はどこまで行っても人間のようだ
過去の出来事や、トラウマには・・・やはり勝てない物だ・・・
いや・・・たとえそうだとしても、俺は嫌だ・・・
確かに・・・あの家族全員で笑う合う事は俺にとってのトラウマだ・・・
しかし、あれこそ・・・俺が最も望んでいた事だ。
皆が笑いあって・・・平和で・・・失われない幸せ・・・
あれこそ、俺の一番欲しかった物だ・・・
しかし・・・もう、それは叶わぬ夢だ・・・

「・・・・・・」

今では、笑いあえる祖父も、両親も・・・姉も居ない・・・
だが・・・あの夢を・・・何度も拾いなおしたいと思った・・・

しかし、それは無理だった

「・・・ざっけんな・・・・」

俺は、消え失せそうな意識の中で呟いた
今の俺が求めている幸せ・・・それは、手も、声も届かぬ存在（人達）と話したり・・・恋をする事・・・

俺は歪んでいるからこそ・・・そんな考えしか持つ事が出来ない・・・

絶対に手に入らない幸せ・・・だからこそ、それを望む・・・

どっかの英雄王が言ってたっけな・・・
『手に入らないからこそ美しい物がある』って・・・

「俺は・・・諦めねぇ・・・ぜ・・・！！」

しかし、俺はチャンスを与えられた・・・
“神”と名乗るおっさんによって・・・

「ぜってぇ・・・ぜってぇ・・・言うんだ・・・！！」

俺は、何が目的で世界を超えたのかを思い出す・・・
それは、世界や、次元の壁を越えてまで言いたかった言葉を言うため・・・
こんな俺を救ってくれた人達に・・・感謝の言葉を言うために・・・

！！

「伝えるんだ・・・“ありがとう”って・・・！！」

右拳を握りしめて、俺はもう一度誓った

絶対に諦めない事・・・

そして・・・もう一つの誓いを立てた

今度は・・・インヴェルズ・グレズに負けない事・・・

あの時、まだ俺のライフは残っていた。

それも、ほぼ満タンの状態で・・・

ならば・・・今度は絶対に勝つんだ！！

胸の奥底に誓いを立て、俺は静かに瞳を閉じた・・・

今は一時の休息をとるとしよう・・・だが、今度目覚めたら、アイツ（インヴェルズ・グレズ）に勝つために・・・！！

三十三章　ＨＥＲＯと悪魔（後書き）

「はい！今回は、蒼痲の敗北の回でーす」

蒼痲「うっせ。つか、オリカあったろ。」

「まぁね。ちなみに、インヴェルズ・ダークネスは完璧なオリジナルカードです。苦手だった人は申し訳ございません・・・」

蒼痲「ちなみに、効果はこんな感じだ」

インヴェルズ・ダークネス
闇属性　レベル６
攻撃力０
守備力０
効果モンスター

このカードは、このカード以外の効果で召喚する事は出来ない。
バトルフェイズ中、３０００以上の戦闘ダメージを与えられた場合、手札から特殊召喚する事が出来る。
このカードを召喚したターン、自分は魔法、罠を発動する事は出来ない。
このカードはインヴェルズと名のつくモンスターのアドバンス召喚以外にリリース、シンクロ召喚の素材にする事も出来ない
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをアドバンス召喚する場合、このカードは2体分のリリースとする事ができる。

蒼痲「・・・召喚条件が３０００以上の戦闘ダメージを受けた時に出てくる特殊召喚効果。二体分のリリースの確保・・・そんでもって、ダメステ中に出てくるゴーズとかに似てる効果・・・か。」

「まぁ、ぶっちゃけ攻撃力とかは０だから、神の警告もうてないけどな」

蒼痲「さてさて・・・俺は一体どうなるのやら・・・」

「それは、俺にも分からない。それではまた次回！！」

蒼痲「またなー」

三十四章　氷の里と、舞姫と

遠い・・・
本当に遠い昔の夢を見ている気分だった・・・

『・・・ここは・・・？』

空間の裂け目に吸い込まれた俺は、一体どんな末路をたどったのか・・・
俺には分からない。
でも、これだけは分かった
今、俺が居るこの空間は・・・夢だと

『・・・ここ・・・どこだよ・・・？』

辺りをぐるりと見渡して、自分が今どんな場所に居るのかを考えた
しかし、見覚えの無い場所だ・・・

ただ、分かったのは・・・・

『・・・インヴェルズ・・・か・・・・』

インヴェルズの軍勢が地上に蔓延って、軍隊のように列を成していた
インヴェルズの軍勢の後ろの方には、インヴェルズの上級モンスターが腕を組みながら飛んでいた
だが・・・インヴェルズの軍勢の一番前に、見覚えのある奴の姿があった・・・

インヴェルズの中で・・・・もっとも威圧感を放つ存在が・・・

『・・・インヴェルズ・・・グレズ・・・！！』

だが、インヴェルズ・グレズは俺に気づくことなく、そのままインヴェルズの軍勢を引き連れるように飛んで行った

俺は、ただただその背中を眺めていた

それと同時に、俺の右手が疼くように握られていた

（俺の右手が疼くぜぇ・・・！！ってネタは厨二病の基本中の基本ですね。分かります）

心の中ではこのように落ちついているのだが、俺の右手は今か今かと解き放たれるのを待つように握られていた

どうやら、“ありとあらゆる異端を打ち消す能力”とやらは俺の意識とは関係無しに発動するらしい

だけど・・・俺の中にあるバグセンサーは、インヴェルズ・グレズが居るというのにまったく反応していなかった

どうやら・・・この時のインヴェルズ・グレズにはバグとやらはなかったらしい

『キュルエエエエエエーーーーーーー！！！！！』

『ヒュォォオオオオオーーーーーーーー！！！！！』

『キュルエエエエエエエエーーーーーーーー！！！！！』

『な、なんだぁ！？』

突然、後ろの方から何かの鳴き声が聞こえたため、振り返ると・・・

あまりの美しさに、言葉を失った・・・

真っ白な雪のような鱗・・・
氷のように反射する身体(ボディ)・・・
冷たい氷河を思い浮かべさせる冷たい瞳・・・

その姿に、俺は言葉を失い、ただただその姿を見つめていた・・・

俺が見つめる先には、三匹の巨大な龍が居たのだ。
遊戯王をやっていて、その龍達の名前は必ず聞くであろうその知名度・・・
出されると場を制圧してしまうその姿・・・

俺は・・・この三匹の名前を知っている・・・

“氷結界”というシリーズの中で、屈指の強さを誇る三匹・・・

氷結界の龍　ブリューナク・・・
氷結界の龍　グングニール・・・・
氷結界の龍　トリシューラ・・・・・

公式の設定では、その龍達は、あまりの強さに封印する事を余儀なくされた龍達だったとか・・・

でも、俺はその姿をじっと見つめていた・・・
だって、本当に綺麗だったから・・・・

『・・・あれは・・・』

そして、その龍達から視線を下げると、宝石を埋め込んだ鎧を見に纏った多くの戦士たちの姿があった
どれもこれも、見た事の無い姿だったが、思いつく名前はただ一つ・・・

『あれが・・・ジェムナイトの英雄達・・・』

あれが・・・インヴェルズの軍勢を封印したジェムナイトの英雄達・・・
ジェムナイト・ルビーズや、ジェムナイト・パーズのようなジェムナイトも居るが、装備している武器が全く違った
斧を持っているジェムナイトや、巨大な盾を持っているジェムナイト・・・
一番驚いたのが、宝石で出来た弓を装備したジェムナイトが居た事だ。
なんという金の無駄遣い・・・って、この世界って金あるのか・・・？

『ウォオオオオオオオオオオ！！！！』

突然、ジェムナイトの英雄が大きな雄叫びをあげてインヴェルズの軍勢に突撃しに行った
それにつれられるように、他のジェムナイトの英雄達も動き出して、それに少し遅れるように氷結界の龍達が飛び出した

『・・・これが・・・・戦争・・・』

俺は、その光景を見下ろすように見ていた

インヴェルズの軍勢が次々とジェムナイトの英雄達によって殺されて行く・・・
だが、インヴェルズも負けておらず、ジェムナイトの英雄達に襲いかかって、喰らうように噛みついている・・・
言葉で表すなら・・・死屍累々。
屍の上を踏み越えて、敵の将を討とうと、命を賭けて戦う英雄達の姿・・・
しかし、その屍の中には自分達の仲間が居るにも関わらず、ジェムナイトの英雄達は構わず突き進んでいる・・・

『・・・・・・・・』

これが・・・本物の戦争・・・・
平和を願うがゆえに生まれる争い・・・
争いの無い世界なんて無い・・・だって、争うからこそ分かりあえる事があるのだ。
しかし、この戦いには・・・分かり合いなんて言う物は最初(ハナ)っからなかった
ただ、自分達の住む世界を守るため・・・
自分達の力を証明したいがために生まれた戦争・・・

『・・・これが・・・また繰り返されるのか・・・・?』

次々とジェムナイトの英雄たちが倒れて行った
氷結界の龍達も、疲れが目立って来ているし・・・
これが・・・また繰り返されるのか・・・・?

インヴェルズによる・・・侵略が・・・・

『・・・させねぇ・・・』

させねぇよ・・・ぜってぇさせねぇ・・・！！

俺が・・・異端殺しの右手がそんな事させねぇ・・・！！

させてたまるかよ！！！

『絶対に・・・守ってやる！！カームも・・・エリアルも！！！』

そういって、俺は右手を前に突き出した

『いったぁ！？』

ん・・・・？おっかしいなぁ・・・

なんか・・・殴ったような・・・？

いやいやいや・・・そんなはずは・・・・

『何すんのよ、この馬鹿ぁ！！！』

「ふごぉ！？」

な、なんだぁ！？

俺の頭にとんでもないほどの痛みがァァァァァ！！！

「いっつつつ・・・」

頭を抑えながら辺りを見回してみる

どこかの・・・一室・・・だよな？
でも、なんでだ・・・異様なまでに寒いんだけど・・・

「あ・・・起きたんだ。・・・じゃなくて！あんた！なんてことしてくれるのよ！！痛いじゃない！！」

「ウェ！？Σ（０ｗ０　）」

突然俺の視界に入ってきて女の子に驚いて、ベッドから転げ落ちてしまった
頭から落ちたから、頭めっちゃ痛ぇ・・・

「いってて・・・」

「痛いのはこっちも同じよ！まったくもう・・・」

頭を抑えながら声のする方を見上げると・・・
ツインテールの女の子が俺を見下ろしていた。
それも、少し呆れているかのようにため息をつきながら

「あんた、自分が誰だか分かる？一ヶ月も眠ったままだったのよ？」

「い、一ヶ月ぅ！？う・・・さむっ・・・」

なんか無性にベッドの中の温もりが恋しくなった
それもそのはず。
だって、吐いてる息が白いんだもん。
明らかに冬真っ盛りな気温なんだもん。

「そりゃ寒いに決まってるでしょ。ここ、氷結界の里よ？ラヴァル

みたいに温かいところじゃないんだから、当然じゃない。」

「え・・・えぇっと・・・とりあえず、ここ・・・どこ？」

「だーかーら！氷結界の里だって言ってんでしょこの馬鹿！」

な、なんだこの気の強い女は・・・！！

なんか、若干イラッてくるんだけど

だが、俺はどうしようもなく腹が鳴った。

あー・・・コイツ曰く、俺一ヶ月間何も食ってなかったんだっけ・・・

「・・・お腹、減ってるんでしょ。少し待ってなさい」

そういって、俺を見下ろしていた女の子はどこかへ行ってしまった

あるぇー・・・？どこだよここ・・・

とりあえず、窓あるから外見てみるか・・・

「オープンザドア～～・・・」

そういいながら、俺は窓を開けた

すると、俺の目にはありえない光景が広がっていた

「・・・なんでさ・・・」

俺が目にしたのは、辺り一面が雪に覆われている村だった

俺は、その村のどこかの二階の部屋に居るということしか分からなかった

確か・・・氷結界の里・・・とか言ってたよな？

ってことは・・・・

「ここって・・・氷結界の奴らの住んでる場所・・・だよな？」

辺りを見渡しながら俺が呟いた

しかし、里という割には家が少ない気がした

窓から見下ろしただけだから分からないが、ここって、結構里の外れ・・・だよな・・・？

「うーん・・・どうなってんだ・・・？」

とりあえず、状況の整理。

あ、ありのままに今あった事を話すぜ・・・

なんか、変な空間に放り込まれたかと思ったら、変な女の子の家に居たんだ・・・

「って、何やってんだ俺・・・馬鹿馬鹿しい・・・」

「なーに一人でぶつぶつ言ってるのよ。」

ガンっ！と頭に硬い物がぶつかった

頭を抑えつつ後ろを向くと、先ほどの女の子が鍋を持って立っていた

「いってぇじゃねぇか！！」

「アンタねぇ・・・それが、命の恩人に言う言葉？」

「命の恩人・・・・？」

「あんた、覚えてないの？あんた、川に流されてたのよ？おまけに、ここの気温は低いから、凍死しかけてたのよ？」

・・・・普通、川に流されたんだったら凍死じゃなくて、溺死じゃね？

つか、あの次元の裂け目って川に繋がってたのかよ・・・・

・・・って、待て待て待て！！

一ヶ月俺眠ってたんだよな！？じゃあ、エリアルは！？カームはどうなってんだよ！？

「そ、そんなことぁいいんだよ！！ガスタは・・・ジェムナイト達はっ・・・」

「ほら、落ちつきなさい。」

「むぐっ！？」

そういって、女の子は俺の口の中に蓮華を突っ込んできた

ちょ、いきなり何すんじゃこの小娘・・・って、熱いいいいい！

舌が痛いんだけど！？

「あっつ！？何これ！？つか、辛っ！？」

「お粥よお粥。何？辛いの苦手だったの？」

「か、辛ぇのは苦手じゃねぇよ・・・ただ、俺猫舌なんだよ・・・

あっ・・・」

「どう？少しは落ち着いた？」

・・・なんつぅんだろ・・・

コイツ、言い方はキツイけど、結構優しいな・・・

「・・・ありがと。」

「は？なんか言った？」

「な、なんでもねぇよ！！で、ここ・・・どこだよ？氷結界の里ってのは分かったけど・・・」

「何よ、気になるわね・・・まぁいいわ。ここは、氷結界の一族が守る地、氷結界の里よ。」

そういって、女の子は何かを指差した

その先には、大きな雪山があって、その雪山を指差しながら言った

「あそこが、伝説の氷結界の龍達を封印してる、氷結界の山。・・・えぇっと・・・位置的に言うと、ガスタ湿地帯よりも遠い所にあるのよ。ここ」

「へぇー・・・」

「ちょっと、聞いてるの？」

「聞いてる聞いてる。いやー、一ヶ月眠ったままでも、腹って減るんだな～。あ、おかわり希望」

話を聞きながら鍋をバクバクと食べる俺

中身をぺろりと食べ終えた俺は、鍋をそのまま女の子に突き返した

「はやっ！？あんた猫舌なんでしょ！？」

「いやー、この粥美味くてさ。ちょっと濃い目の味付けだけど、好きな味だったからさ。ありがとな」

「な、なにいきなり言ってんのよ！ほ、ほら！な、鍋出しなさいよ！とっとと作ってあげるから・・・」

俺から鍋を奪った女の子は、そそくさと部屋から出て行こうとした

あ、そういえば・・・名前教えて貰ってねぇや・・・

「あ、あのさ・・・お前、名前は？」

部屋のドアを開けた時に、俺が言った

すると、女の子が少し呆れたように言った

「あ、あんたねぇ・・・人に名前を聞く時は、自分から名乗るって物が筋じゃない？」

「あ、そっか。そういえば、俺も自己紹介してねぇや・・・えっと、俺は天城蒼痲。なんか、別の世界からこの世界に飛ばされた魔法少年（笑）だ。」

「（笑）ってのは気になるけど、まぁいいわ。私は、氷結界の舞姫。舞姫って呼んで頂戴。」

「へぇー・・・舞姫か・・・痛々しっｗｗｗ」

「うっさいわね馬鹿！！」

「いでぇ！？」

舞姫が、履いていたスリッパを蹴りあげるように俺にぶつけた
いっつぅ・・・なんつぅスキル持ってんだよコイツ・・・！！

「ふんっ。お粥作って来て上げるから、少し待ってなさい！」

「いっつつつ・・・ほらよ、スリッパ！」

「あ、ありがと」

よくもスリッパで攻撃してくれたな！喰らえ俺の・・えぇっと・・・
ソーマトリニティアタック！！
ってな感じで、スリッパを投げ返した。
だが、涼しい顔でスリッパをキャッチした舞姫がふんっと捨て台詞
を残して、そのままどこかへ行ってしまった

「・・・・・・・・あ」

あ、そだ。ようやく思い出した
右手に力を込めて、いつものようにデュエルディスクを展開しよう
とするが・・・

「・・・やっぱ駄目か・・・」

だが、デュエルディスクは現れなかった。
まぁ、それもそうか・・・
俺の願いを叶えるために“命を賭ける”とまで言った癖に、あんな

異端風情(バグ)に怯えて、動けなくなるなんてな・・・
あーぁ。これだから人間は・・・って、俺も一応人間だったっけ。
現実に興味出せなかったからまったく気付かなかったわ・・・やべぇやべぇ

「・・・となると・・・」

辺りを見渡して、俺のバッグを発見し、とりあえず中身を漁って見る事に
しかし・・・

「うげっ・・・綺麗な白ですね・・・」

そう。俺の持っているデッキの全てのカードが真っ白になっていたおまけに、シンクロモンスターっぽい白じゃなくて、コピー用紙みたいな白だった
・・・これじゃ、“遊戯王”じゃなくて、ただの切り取った紙だな。うん。

―ガサッ・・・―

ん？なんぞこれ？

「・・・あ、やべ。すっかり忘れてた・・・」

ガサガサとバッグの中でビニール袋が擦れる音がしたため、ビニール袋を開けてみる事に
そこには、この世界に出発する前に補充しておいたパンがいくつも入っていた
やっぱなぁ～、さすがに一ヶ月以上放置した物は食いたくねぇなぁ・

・・

・・・あれ？なんだ？このチョココロネ、異常なまでに固いんだけど・・・？

「えぇっと・・・賞味期限、賞味期限・・・っと・・・はぁ！？賞味期限∞！？」

ど、どういうこつ！？何！？なにこのチョココロネ！？賞味期限∞とか怖いんだけど！？やっべ、カッコいい・・・

ん？なんだこれ？

ビニール袋の仲をさらに漁ると、中から変な手紙が出てきた

・・・確か、この中の多くのパンはおっさんからの差し入れだったよな・・・

まwwさwwかwww

『そーまへ

よう。この手紙を呼んでいる時は、お前の前に俺は居ないだろう。お前の門出を祝って、パン的なアレを用意したのは覚えてるよな？

実は、ちょっと細工させてもらったわwww

俺の魔力を使って、保存性を限りなく・・・』

「死ねよお前！！！」

そういって、俺は手紙をビリビリに破った

あのヤロウ！！んなモン、最初の手紙にでも書いとけよあの髭面爺が！！

「あのヤロウ、何が魔力だ！！チートでご都合主義なのもいい加減にしろよ！！そんなんだったらな、士郎とセイバーは別れずにすんだんだよチクショウ！！」

あー・・・俺、恋するんなら、セイバーみたいに「シロウ・・・貴方を愛している・・・・」ってな感じな恋がしたいなぁ・・・

まぁ、一生無理・・・・・いや、一生無理って可能性も否定できなくなったんだっけ・・・

エリアルが・・・俺のこと、好きで居てくれたから・・・

「・・・はぁ・・・・なんで、俺なんて・・・・」

ため息をつきながらチョココロネの袋を開封した

あーぁ・・・なんつぅんだろ・・・こう、もやもやした何かがあるんだよなぁ・・・

チョココロネの取りあえず一口食ってみた

うん・・・なんか、ほんとに懐かしい味っつぅか、なんつぅか・・・

まぁ、美味いな・・・

「・・・あの時のアレが・・・きっかけだったのか・・・・」

生憎、俺は恋愛とか、愛とか、そういうのは全く知らない。

なぜなら、そういう経験を一度もした事が無いから。

だって、彼女いない歴＝年齢の俺にそれを聞かれても困る。

でも・・・まさか、あんな些細な出来事がエリアルが俺を好いてくれる理由になるなんて・・・俺は、思いもしなかった。

「・・・・・・・・」

あれは、俺がおっさんと出会う前の事だ。

俺がいつも通っているカードショップには、デュエルターミナルが置いてあるのだ。しかも、デュエルスペースもきっちり確保されていて、沢山の決闘者（デュエリスト）が集まってくるのだ。
中には、大学生の人や、２０代後半の人も居る。勿論、既婚者の人も訪れるから驚きだ。まぁ、そんな場所にいつも入り浸っている俺は、何かとジャッジとかをやる事が多い。
やれ、効果処理がどうだとか、召喚制限やら・・・沢山の事を聞かれたりする。まぁ、答えられるのは全部答えるけどネ。
勿論、定員さんとも仲がいい。男性定員の殆どが遊戯王をやっている人なので、バイトとかが終わった人とデュエルすることもしばしば・・・
そんな中で、そのカードショップの近くにある私立学校の生徒達がデュエルターミナルを回していた。俺も、結構な数回したし、相当当たりは減ってるんだけどなぁ・・・それに、そいつらがやる前に俺がノーレアのＴＨＥ・トリッキー出しちゃったし・・・その後も、作りかけのガスタを構成するために何回か回したんだっけな・・・

で、だ。

そこで、俺とエリアル（エリアルだけ？）は出会った。

『なぁ、ＤＴ回そうぜ！！』

『俺さ、今回のノーレア狙いなんだよなー！』

『んじゃ、俺から回すわ～』

ＤＴ（デュエルターミナル）の近くで友達を待っていた俺は、先ほど当たったカード達をスリーブに入れる作業を黙々と行っていた。だって、カードは大切に扱ってやらないと・・・ねぇ？

『うっしゃ、トリッキー来い！！』

その時、一人の少年がカードを今か今かと待っていた。
俺はそれをちらりと見て、心の中で呟いた（いや、俺当てたから無理だって・・・）と・・・

『うわっ、リチュア・エリアルかよ・・・うわ～、無いわ～・・・』

『ほらほら、もう百円入れたんだろ？早く回せって』

『わーってるよ・・・げっ、マインドオーガス出た・・・』

（ほぅ・・・少年、いい物を当てたじゃないか・・・さぁ、リチュアのデッキを組むんだ・・・って、俺は何助言してんだか・・・馬鹿馬鹿しい・・・）

心の中で自分にツッコミをいれつつ、俺はファイルの中にトリッキーを入れた。
よしっと・・・これで、ファイルが肥やせたな・・・

『ざまぁｗｗｗリチュアのデッキ組めよ。面白いデッキになりそうじゃん』

『うわー、無いわー・・・いらねぇよこんなカード！！』

『！？おい、やめろ馬鹿！！』

突然、カードを破り捨てようとした少年を静止した俺。
よく見ると、俺の後輩だった。いや、このカードショップのプチ大会で知り合っただけだけど・・・まぁ、そんな奴らがマインドオーガスを真っ二つにしようとしていたのだ

『あ、先輩・・・ど、どうしたんですか？』

『どうしたもこーしたもあるか馬鹿！お前、何晒してんじゃボゲェ！！カードは大切にしろって言ったろ！！』

『い、いや・・・その・・・トリッキー狙いでして・・・』

『だからって、マインドオーガスを破っていいのか！？なぁ！？』

『いえ・・・』

『・・・・ったく、馬鹿野郎どもが・・・てめぇらも少しゃ止めろ。まったく・・・次はこう言う事するなよ？』

『『『は、はい・・・・』』』

そういって、萎んだ花のようにしょんぼりする後輩達・・・そういえば、あの時はリチュアがまだ未完成だったんだっけな・・・今もだけど。

『ったく・・・おい、そのマインドオーガスとエリアル。俺のトリッキーと交換しろ』

『え!?い、いいんですか!?こっち、ただのスーレアとノーマルですよ!?』

『いいんだよ・・・ほら、そいつをこっちに寄越しな。』

そういって、俺は先ほど当たったトリッキーをファイルから出したスリーブは勿論取ったが、トリッキーをそのまま後輩に渡した。

『え・・・ちょ、これ明らかにサメトレなんですけど・・・』

『いいんだっつってんだろ。ほら、マインドオーガスとエリアル。確かに交換したからな。』

俺は受け取ったマインドオーガスと、エリアルのカードを凝視した。うーん・・・マインドオーガスのこの折れ方は、どうしようもねぇな・・・

んじゃ、仕方ねぇ・・・5重のスリーブに入れるかな・・・エリアルは無事だし・・・ま、いっか。

こんな、ありふれた俺の日常の出来事が・・・まさか、エリアルと俺を繋げてくれるとは思わなかった。

あの後に、後輩達にデュエル挑まれて、ボコボコにしたんだっけな・・・懐かしいなぁ・・・

(・・・あ、そういえばアイツ等と会ってねぇや・・・なんか、寂

しいな・・・）

そう、現実の世界では今頃アイツ等は学校に居る頃だろう。
俺は今、二次元の世界に居るんだよな・・・
友達に言ったら『嘘つけｗｗｗｗ』とか言われるんだよなぁ・・・
ま、とーぜんか。
三次元では、液晶が邪魔するせいで、手が届かなかった存在に・・・
俺は会えた。そういえば、初めてはやて見た時なんて、ボロボロに泣いたんだっけ・・・懐かしいなぁ・・・あれが、何年も昔の出来事のようだぜ・・・

「ほら、お粥出来たわよー・・・って、なに食べてるのよ？」

「んぁ？あぁ・・・チョココロネ。」

「ちょこころね？何それ？心？」

あ、そうだった・・・この世界に、チョココロネなんかある訳・・・ないよな。

「あー・・・この世界にパンってあるか？」

「パン？あぁ、ヒューマンワールドにあるアレ？でも、あれってぱさぱさしてるから苦手なのよねぇ・・・」

「あぁー・・・そうなんだ。」

へぇー・・・この世界にもパンってあるんだ・・・こりゃ、新しい発見って奴かな？まぁ、どうでもいいけど・・・・・つか、すっげぇ今さらだけど、舞姫って結構可愛い部類の女の子だな。結構、

言葉の棘が目立つけど、いい奴だと思うんだけどなぁ・・・

「・・・・・・・・」

そんな舞姫の目が、俺のチョココロネに釘付けだった。やっぱ、チョココロネってこの世界じゃ珍しいんだなぁ・・・

「・・・要るか？」

流石に、俺の食いかけのチョココロネなんて食いたくないだろうし、バッグの中にゃまだ余りのチョココロネ入ってるし。欲張って全部食いたいって思わないしなー

「うぇ！？い、いいわよ！！あんたの口のつけたものなんて・・・」

「いや、余りがあるから。ほら」

鍋を机の上に置いて、両手をぶんぶん振りながら遠慮する舞姫。・・・結構可愛いな・・・

「ぇ・・・いや・・・で、でも・・・」

「ほら、人の好意はありがたく受け取っとけって。」

そう言って、俺は舞姫にチョココロネを放った。上手くキャッチした舞姫は、未だにおろおろとこちらを見たり、チョココロネを見たりと、何度も何度もそれを繰り返していた

「んじゃ、俺はその代わりにお粥食うわ。」

そういって、まだおろおろしている舞姫に近づく俺
・・・別に、おろおろしてる舞姫の顔を見たくて舞姫に近寄ったわけじゃありません。俺は、舞姫の近くに置いてある粥の入った鍋が欲しいだけです。

「っ・・・み、見るな変態ッ！！！」

「うごぉ！？」

ちらっと舞姫を見ただけだというのに殴られた！！
なんという理不尽な理由！！

「ふ、ふんだ！お礼なんて言ってあげないからね！！」

そういって、舞姫は部屋を出て行って扉を閉めた
な、なんだよアイツ・・・わけの分からねぇ奴・・・

「・・・ま、いいや。食お」

鍋のふたをとって、皿と蓮華を手にとる俺
少し多めに粥を盛って、両手を合わせ、静かに言った

「いただきます・・・っと」

本当なら、ここにライナとか、ノースウェムコが居るはずなのだが・・・今はいない。
だけど、いつか絶対に取り返す・・・俺の能力も・・・ノースウェムコ達も！！

まぁ、とりあえず・・・この粥食ってからにするか。
これ食い終わったら、舞姫に今がどんな状況か聞かないとなぁ・・・・
・・・うん。やっぱ美味いな。

三十五章　小さな叫びと懐かしい感覚

粥を食い終わった俺は、鍋を持って部屋を出たわけですよ。
お分かりの通り・・・寒いです。えぇ・・・めっちゃ寒いです。寒いですとも・・・
まぁ、流石に家の中なんだから、きっと暖房があるはずだ！なら、この寒さを超えた先には、温かい暖房があるはず・・・！！

「ふぉぉぉお・・・寒ィなオイ・・・」

変な声を上げながら階段を下りて行く俺。
すると、舞姫が他の誰かと話をしている声を耳にした
しかも、階段を下りるに連れてどんどんどん大きくなっていく。

声からして恐らく、舞姫以外に女性が一人と・・・３０代後半くらいのおっさんかな？

「嫌よ！！なんで私は行っちゃ駄目なの！？この世界の危機よ！？一人でも戦力が多い方が良いに決まってるでしょ！！！」

「だから言ってるでしょ！仮に、私達が敗れたらこの村はどうなるの！？それに、私達が居ない間に他の勢力が襲ってくるかもしれないのよ！？」

・・・なんだぁ？話の内容がさっぱり分からん。
とりあえず、階段の半分の辺りで立ち止まって、話を聞いて見る。
えぇーっと・・・とりあえず、鍋を台所的な場所に持っていかないと話にならないし・・・

でもなぁ・・・この階段の先って玄関っぽいしなぁ・・・しかもご丁寧に、そこで話してるし・・・

「いい加減にしろ舞姫！！確かにお前の力は強い。だが、お前は連れていけないのだ」

「なんでよ・・・なんでなのよ！！私の強すぎる力が悪いの！？なんで！？ねぇ、なんでよ！？」

―ピコンッ！！！―

ッ！？今・・・バグセンサーに反応が現れたぞ！？
しかも、発信源は・・・舞姫・・・なのか・・・？

「お、落ちついて舞姫！！」

「なんで・・・なんでよ！！！」

舞姫がそう叫んだ瞬間だった。突然、暴風が辺りを包んだ
勿論、その風が階段にも来ている訳で・・・

「な、鍋がっ！？」

暴風から鍋を落っことさないように必死に持っている俺。
ちょ！？寒いんですけど！？いまさらだけど、この辺りって雪が積もってるからすっげぇ寒いんだけど！！
どれくらい寒いかというと、冬場に半袖半ズボンの状態で布団から抜け出すのと同じ位に寒いぃいいい！！そして、俺の例えが微妙過ぎるーーーー！！

「落ちつけ舞姫！！うぉ！？」

「もう一人ぼっちは嫌・・・もう、嫌ぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

暴風によって、足場を踏み外した俺は、そのままゴロゴロと階段を転げ落ちた

ちょ、不味いって！！鍋が！！舞姫特製の激ウマ鍋がッ！！！いや、もう中身ないけどね！！！

階段から転げ落ちた俺は、そのまま舞姫のいる玄関の方まで転がった

「いっつつ・・・」

「き、君逃げて！！」

ふぉおおおおおおお！？なんか、氷の塊が飛びまわってるんですけどーーーー！？

そして、その中心に何で舞姫が居るんだよぉぉおおおおお！！って事はこの暴風を起こしてるのって舞姫ってことか！？

「ちぃっ・・・めんどくせぇな！！」

鍋を安全そうな場所に置いて、俺は舞姫の方へ駆けた。理由は簡単だ。命の恩人が困っているのに、それをじっと傍観しているのは嫌だから。それだけが俺の原動力となって動いていた

とにかく、アイツを止めないと話も何も出来なさそうだし！

「舞姫！！」

「来ないで・・・来ないでよぉ！！」

「なぁッ！？」

舞姫の間下にあった地面が盛り上がって、舞姫の周りに氷塊がぐるぐると取り囲むように回転した。どうやら、俺を舞姫に近づけたくないらしい。流石に、“ありとあらゆる異端を打ち消す力”があるけど、実体のある氷塊をぶっ壊すのは無理だぞ・・・！？

そう。俺の能力には弱点がある。
それは、どこかの上条さんと同じで、幻想（異端）を打ち消す事はできるが、実体がある物には俺の能力は通じない。
くっそ・・・どうすれば・・・・！？

「むぅぅん！！」

「嘘ぉ！？」

なんか、スキンヘッドのおっさんが向かって来た氷塊をぶん殴ってぶっ壊した
あ、あんな芸当はアニメでしか見た事ないんだけど・・・！？つか、あのおっさんド●ゴン●ールに出てきそうなんですけどーーー！！

「少年！力を貸してくれ！私がこの氷を壊す！！少年は、舞姫を頼む！！」

「あ、はい！！」

スキンヘッドのおっさんが、キッ！！と凄い剣幕で俺を睨んできた。
めっちゃ怖いです。はい。
でも、それと同時に俺は分かった事があった。このスキンヘッドの

おっさんは、氷結界の中での上級モンスター・・・“氷結界の虎将　ガンターラ”エンドフェイズ時に氷結界のモンスターを蘇生させる、正直微妙なモンスターだ。
だけど、その微妙なモンスター（モンスターっつぅか、人？）と対峙した時に分かったこと・・・それは、この人は・・・幾つもの試練を乗り越えて、強さの頂きに達した者の目だということ。

現実世界（元居た世界）で剣道や柔道をやっていたが、こんな目をした人は本当に久しぶりに見た。その目を初めて見た時は・・・俺のじいちゃんの目だった。親父とじいちゃんが稽古をしている所を見学した時に、初めて見たあの目・・・殺気・・・というわけではないが、凄まじい覇気のような物が辺りを包んで、見るもの全てを恐怖させていたあの目・・・その目と、まったくと言っていいほどの目を持っていた。

「では・・・行くぞ！！」

「はいっ！！」

ガンターラが叫んだ瞬間、俺は駆け出した。ガンターラが先行し、俺がその後ろからついて行っている。ガンターラが進むに連れて、俺の前に壊されて行く氷塊が視界に入った。見て居て分かったが、とても綺麗に破壊出来ている・・・職人技といっても過言ではないほどに、本当に綺麗に破壊出来ている。

「うぉぉおおおお！！」

「来ないでって・・・・言ってるでしょ！？」

完全に真っ黒となった瞳・・・その瞳の先には、俺とガンターラが

映し出されていた。
舞姫の瞳の色は、紫に近い青色・・・といったところだろうか？だが、その瞳から光は消え、完全に真っ黒となっていた。そんな舞姫（命の恩人）を見て・・・俺は“救いたい”という気持ちがふつふつと湧いてきた。

「来ないでぇぇぇぇぇぇ！！！」

「ざっけんじゃ・・・ねぇぇぇ！！」

振り上げた右腕を、そのまま舞姫へと振りおろした、だが攻撃は当たることなく、空を切った
くっそ！！外れた！！つか、俺と同じ年くらいの女の子（？）がなんで俺の攻撃避けれるんだよ！？普通の女の子だったら「きゃぁ！？」とかそんな感じの悲鳴上げて転んだりするんだけど！？といっても、俺は女性は殴らない人だから、例外以外は殴らないけどな！！

「なんで・・・なんでみんな私から離れるの・・・？」

だが、そんな考えを余所に舞姫は辛そうに小さな声で呟いていた。
それは、近くに居なければ聞こえる事のない小さな叫び声だった。
彼女も・・・必死で異端（バグ）と戦っているようにもみえるが、その真っ黒に染まった瞳にはうっすらと涙があった

「お願い・・・もう、私を独りにしないで・・・お願いよぉ・・・お願いだから・・・助けて・・・」

「っ！！・・・いいぜ。」

・・・俺もこんな感じに、小さな叫び声をずっと叫び続けていたん

だ。その叫び声には、誰にも届かなくて・・・ずっと、たった一人の部屋で叫び続けてたんだ。「助けて」って・・・
だけど、俺を変えてくれた人達が居た。助けてくれた人達が居たんだ。一人は・・・俺の先生。中学だったかな？その時に、俺をずっと心配してくれた先生に人との絆の大切さを教えてもらったんだ。
そして・・・パソコンの奥に居た、リンコや霊夢。士郎・・・アーチャーの兄貴。色んな人達に、勇気を貰ったんだ。

着地した俺は、舞姫を睨むようにその場に着地した。

「っ！？これは・・・・・？」

その時、俺の身体が疼きだした
いや・・・疼いてるんじゃない。これは・・・何かが目覚めようとして居るのだ。
インパルスや、ストライクノワールの能力を得た時のような、あの感覚。
だけど・・・あの時とは違って、何かがひっかかる。瞳を閉じて、ゆっくりと考えた・・・

・・・何か・・・鍵のような物が見える・・・
見知らぬ真っ白な空間に、ぽつんと置いてある扉。
その扉には、鍵のような物がかかっていて、奥が見えなかった。
だけど・・・この奥に・・・何かがあるという事しか分からなかった

「・・・体は剣で出来ている。血潮は鉄で、心は硝子。」

この言葉は・・・そんな俺に、勇気を与えてくれた人の言葉・・・
本当は、英語で書かれていたけど、全部覚える事が出来ずに、仕方

なく日本語訳の方で喋っている。

「助けて・・・助けてよぉ・・・・」

「幾たびの戦場を越えて不敗。ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし。担い手はここに独り剣の丘で鉄を鍛つ。」

「少年！！！」

舞姫が、俺に新たに作った氷塊を放ってきた。

だが、俺は内に眠る力を解放するように・・・静かに瞳を閉じていた。

後少し・・・後少し何だ・・・！！俺の中にかかってる・・・この鍵のような物を開けるには・・・！！

「ならば、我が生涯に意味は要ず。この体は・・・・”無限の剣で出来ていた”！！」

俺が叫ぶのと同時に、氷塊が俺に直撃した。

だけど、俺の意識が真っ白な空間に導かれたような感じがした。

『・・・・・・？』

俺は、真っ白な空間の中に居た。

後ろを振り向くと、先ほどの扉が開かれており、俺はその扉をくぐってこちらに来たのだという事が分かった。

『っ！？』

突然、真っ白な空間が赤く包まれた。
下を見ると、俺は変なガラスのような物の上に立っていて、下が透けて見えていた。

下には・・・・・

『嘘・・・だろ・・・・！？』

無残にも、散って行ったであろうジェムナイトと、ラヴァル・・・
そして、ガスタとリチュアの戦士達。ジェムナイトの戦士の装備していたであろう、宝石で出来た鎧は輝きを失い、真っ赤に染まった空でひっそり輝いていた。だが、美しくはなかった・・・

そして、目線を変えると・・・

『ブリューナク！？グングニールも！？』

氷結界の龍が、無残にも仰向けで転がっていた。その身体からは血が流れており、大地を真っ赤に染め上げていた。
そして・・・信じたくなかった物まで・・・目に入ってしまった

『トリシューラ・・・リーズ！？』

氷結界最古にして最強の龍、トリシューラの死体の横に、大きな岩にもたれかかって死んでいるリーズを発見した。
近寄ろうとしても、大きな壁が俺をはじき出してしまい、リーズに近寄る事ができなかった。

そして・・・一番信じたくない物まで、俺の目に映ってしまった

『ウィンダ・・・ウィンダール！？』

リーズの近くに、まったく動かないウィンダを発見した。
そのウィンダの肩を抱いて、抱きしめながら死んでいるウィンダールも発見した。

だけど・・・・それよりも一番驚いたのは・・・

『カーム！！！！』

カームが誰かの手によって首を絞められている所を目撃したのだ。
カームを助けようと、必死に走る俺。
そして、徐々に首を絞めている相手の顔が見えてきた

『嘘・・・だろ・・・・？』

なんで・・・なんでお前がインヴェルズの所に居るんだよ・・・！？
なんで・・・なんでだ！？

『エリアル・・・なんで・・・！？』

そこには、頬にインヴェルズのマークを刻まれたエリアルが真っ黒な瞳でカームの首を絞めていた

「少年！！大丈夫か！？」

怒鳴り声にも似た声によって意識を覚醒していく俺・・・

・・・不思議だ・・・痛くない。

「あ・・・れ・・・？」

最初に分かったのは、身体が熱い事。身体の内側からふつふつと湧き出る熱・・・そして、燃えるように熱い身体・・・

よほど熱いのか、辺りの氷が解けて蒸発していた。どうやら俺は、その蒸発した煙の中に居るらしい。

「剣・・・だよな・・・？」

右手を確認すると、どこかで見た事がある剣が収まっていた。銀色の刀身にうっすら輝く緑色の刀。左手には、小さなシールドが装備されており、シールドに隠れるように小さなビームライフルが付属していた。

「・・・これは・・・エクシア？」

ようやく思い出した。これは、ガンダム００に出てきたエクシアの装備じゃないか。うん。途中からＧＮ粒子が何か分からなくなったけど、あれは良い作品だったな。

「そういえば・・・おっさん言ってたっけ。」

確か、ＳＥＥＤから００までの機体の殆どになれるって。といっても、その後に制限かけられて、ノワールとかインパルスとかの主役機体にしかなれないとか言ってたっけ。

・・・これなら・・・舞姫を止められる。いや、止めるんじゃないな。

「助けてよ・・・蒼痲ぁ・・・」

先ほどの映像はなんだったんだろうか？いや・・・今はそれどころじゃないな。それよりも・・・今は・・・

「あぁ・・・助けてやるよ・・・」

先ほどの声よりも大きく言った。風で、土煙が晴れた瞬間、俺は右手を前に突き出した。

「俺は、お前の味方だからな！！」

そういって、俺は舞姫の方へ走り出した。そして、その場で高く跳んだ。

「うほぉぉぉ

「な、なんだこれ！？うぉぉおおおおおおお！？」

こ、こいつぁとんでもねぇ力だな・・・まったく言う事聞いてくれねぇ・・・

下に降りようとしただけだというのに、そのまま地面に向かって超スピードで降下を始めたのだ。

勿論、この世界にもGという物がありまして・・・

「ぐべっ！？」

急ブレーキをかけても、上から押さえつけてくる重力に逆らえるはずも無く、そのまま地面に激突したのだ。

「しょ、少年！？大丈夫か！？」

「いっつつ・・・」

だが、言う事を聞かない割に、めっちゃ頑丈だった。地面にぶつかったのに、全然痛くないのだ。だけど・・・なんか、気分が最悪だった。だってさ、新しい力を手に入れたのはいいけど、これをまったくといっていいほど制御できないんだぜ？そりゃ、気分も萎えるわな・・・

「嘘吐き・・・どうせ・・・貴方じゃ無理なのよ・・・」

そんな俺に、舞姫の冷たい目線が突き刺さった。予想外にも痛いけど・・・だけど、コツが掴めてきたぞ・・・！！

「うっせぇ！初めてこの力使ったんだよ！だから、制御できてないだけ！まだ慣れてないだけだっつの！！こっから、俺の本当の力を

見せてやる！！」

そういって、俺は舞姫の方へと飛んだ。
今度はようやく制御する事が出来て、思うように飛ぶ事が出来た

「邪魔・・・しないでよ！！！」

舞姫は、俺へ攻撃を仕掛けてきた。先ほどと変わらず、氷塊を放ってきた。
だけど・・・俺にはどこに飛ぶかなんて・・・

「お見通しなんだよ！！」

そう。先ほどから分かった事・・・それは、氷塊の攻撃パターンが決まっているのだ。氷塊が向かってくれば、追撃にもう一つの氷塊が飛んでくる。ただそれだけの事だが、すでに分かってしまったので、攻略法も掴めているのだ。

「うおぉおおおおおお！！」

左手のビームライフルで一撃目の氷塊をビームライフルで砕き、追撃の氷塊を右手のＧＮソードで真っ二つに切り裂いた。だが、まだ完全に制御できているわけではないので・・・

「うぉぉ！？」

舞姫を追い越して、その後ろの舞姫の家に突っ込みそうになったのだ。いやぁ、危ない危ない・・・

「なんで・・・なんで邪魔するのよ・・・・」

「だから、さっきも言っただろ？俺は、お前の味方だって。それに、今のお前苦しそうだし。」

「私は・・・・・・・」

「苦しいんだろ？寂しいんだろ？・・・・一人は嫌なんだろ？」

「・・・・・・・」

問いただせば、問いただすほど舞姫は俺に似ているという事が分かってしまった。それは仕方がない事だ。一人ぼっちで、悲しい思いをしたのも一緒だ。だけど・・・彼女を救ってやるきっかけを作ってやらないと、彼女は本当に一人ぼっちになってしまう。俺は・・・救って貰えたから変われたのだ。明るくもなれたし、友達もできるようになった。

「なら、今日から俺達は友達だ。これで、お前は一人ぼっちじゃないだろ？」

この言葉は・・・俺の親友に言われた言葉。今は会えない・・・かけがえのない絆を結んだ友達の言葉・・・

「友・・・達・・・・？」

「あぁ。だから・・・少し痛いけど、我慢してくれよ？」

そういって、俺は舞姫の居る所に飛びだした。彼女の中に巣食っている異端（バグ）を・・・ぶち壊す！！

「やめてよ・・・そんなの・・・私は・・・」

「その幻想を！！！」

彼女の小さな叫び声を消すように、俺は叫んだ
だが、舞姫の叫びは止まらなかった

「貴方を不幸にしちゃうのよ！？」

「ぶち殺す！！！」

舞姫が大きな声で叫んだ。それは、人には聞こえない心の叫び。ずっと、心の奥で引き摺っていた想い・・・それを吐き出したのだ。どうやら、彼女は俺よりもずっと強い人間らしい。俺は、そんなことできなかったし。
俺が叫ぶと同時に、彼女の手に触れた。異端（バグ）は、彼女の手を使って俺に攻撃をしかけていたし、俺の目にはしっかりと黒い靄が映っていたのだ。俺が触れると同時に、その靄は消えて、ガラスが割れるような音が辺りに響いた

「きゃあ！？」

「舞姫っ！！」

飛ぶ力を失った舞姫を、俺が捕まえた。正確には、抱きかかえたと言うべきだろうか？
そのまま、舞姫を抱えたままゆっくりと降下した

「・・・不幸なんかじゃない。俺は、お前に出会って良かったと思えてるんだ。」

「・・・やめなさいよ・・・嘘つくのは・・・」

「嘘じゃない！！」

「でも・・・私は・・・」

彼女が、俺から離れようと俺の手を解こうとしてきた。だが、俺は彼女をしっかりと捕まえて、ゆっくりと微笑んだ

「俺は、舞姫に助けられなかったらここに居なかったし、この力だって手に入らなかった。それに・・・お前は、優しいし。綺麗だ。その辺に居る男なんて惚れちまうくらいにさ。」

「・・・何が言いたいのよ？」

ジト目で睨んできた舞姫に、たははーっと優しい笑みを浮かべながら言った

「さっきも言っただろ？俺は、お前の友達だ。友達が困ってたら、支えてやらねぇと駄目じゃん？」

「・・・・馬鹿。」

「馬鹿で悪かったな「でも」ん？」

「・・・・ありがと。」

顔を赤くした舞姫が小さく呟いた。俺は、若干照れながら地面に降りた

「もういいわ。ありがと」

そういって、舞姫は俺から離れた。そして、先ほど俺に逃げろと警告した女性の方へと駆け寄って行った

恐らく、謝りに行ったのだろう。ごめんって言って頭下げてるし

「少年、助かったよ。」

「あ、はい。」

後ろからガンターラに話しかけられて、ゆっくりと後ろを向くと感心したような顔で俺を見つめてきた。

よく見ると、ガンターラも結構優しい人だったんだなぁ・・・つか、毎回思うけど、氷結界ってイラストのレベル高いんだよねぇ・・・かっこいいし、可愛いのもいるし。凄いよなぁ・・・

「・・・見るからに、君も武術の心得があるが、何かしていたのかね？」

「え？あー・・・はい。元居た世界で父と一緒に剣道や空手を・・・」

「元居た世界・・・ということは、君は現実世界（リアルワールド）から来たのだな？」

げっ・・・このおっさん、俺のこと誘導してたのかよ・・・汚いな、流石ハゲオヤジ汚い・・・

「はい。そうです・・・俺は、現実世界(リアルワールド)から来ました。」

「そうか・・・」

そう呟いて、ガンターラは静かに言った

「私はガンターラ。この氷結界の里を納める虎将の一人だ。」

「俺は天城蒼痲です。そーまって呼んで下さい。」

「では蒼痲。少し話がしたい。こちらに来てくれるか?」

話?なんでだ?まぁ・・・いいけど・・・

そんなこんなで、俺はガンターラについて行く事にした

勿論、エクシアの能力は勝手に解除されて、いつもの格好に戻ってしまったが、戦う訳ではないのでよしとしよう。

「・・・・・少年、私と手合わせ願いたい。」

変な広場のような場所に連れて行かれたと思ったら、いきなりそんな事を言われた。

は?何言ってんのこのおっさん?何この人怖いんだけど・・・

いきなり、名前を知ったばかりの人に手合わせ願うか普通?

「い、いきなり何言ってるんですか？」

「来ないのであれば・・・こちらから行くぞ！！」

突然、ガンターラの周りに風が吹いた。それは、先ほど見た覇気を身に纏って、襲いかかって来た

そして、その覇気を拳に乗せた拳が俺に襲いかかった。

「ぐぅっ！？」

か、硬ぇ・・・！！それに、なんつぅ威力だよ！？軽く吹っ飛んだぞ！？

「はぁぁぁぁッ！！」

そのまま追撃を行うガンターラ。とても速いジャブが俺を襲う。俺は、その攻撃を捌くのではなく避ける事を前提に動いていた。生憎、俺は避ける事ばっかしてたから、目だけはいいんだよ！一日１２時間パソコンの前に居ても、Ａ以下の判定なんてだされたことないんだぜ！！舐めんなよ！！

「ふっ！！！」

「なっ！？ぐぁぁっ！！」

だが、ガンターラにはそれは無力だった。むしろ、それを逆手にとられて簡単なフェイントに引っかかってしまった。右ストレートに見せたジャブに気を取られ、左足を軸にした回し蹴りの対処が出来なかったのだ。綺麗に頭に当たったガンターラの足。余りの威力に、

そのまま蹴り飛ばされてしまった。

「げっほげほっ・・・」

「どうした蒼痲！！その程度か！？」

「ッ！！野郎ッ！！」

・・・あれ・・・？この感覚・・・ずっと前にあったような・・・？あれ・・・？だけど、何時頃だ？なんで・・・？

いや・・・そんなはずない・・・だって、この感覚は・・・もう、二度と感じられないと思ってた・・・あの感覚にそっくりなんだよ・・・

「うぉぉぉおおおお！！！」

「そうだ！！もっと攻めて来い！！」

右足を軸にした左回し蹴りを繰り出し、ガンターラに攻め込む。しかし、それも綺麗に捌かれ、俺も追撃を繰り出す。だが、それを全て捌かれても俺の心には悔しいという感情は微塵も現れなかった。いや・・・悔しいんじゃない・・・これは・・・

（すげぇ・・・すっげぇ懐かしい・・・）

そう・・・十年以上も昔、まだじいちゃんが生きていた頃のあの感覚・・・

必死でじいちゃんに一撃を入れようとしていたあの頃にそっくりなのだ。

「はぁっ！！！」

あの構えは廻し左踵落とし！？これ、じいちゃんの得意技だったよな！？なんで、ガンターラがやってんだよ！？まぁいい！！一度、その技とぶつかってみたい技があったんだよ！！！

「うぉおおおおおおおお！！！」

俺の体重を全て足に託し、そのままガンターラとの距離を詰めた。そして、左足を軸にその場で胴廻し回転蹴り。この攻撃は、カウンターにはもってこいの、俺のよく使う技だ。相手の顔面に向かって蹴れるのもあるし、何より威力が高いのだ。相手を心理的にも追い詰める事も出来て一石二鳥という事だ。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！」

届けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！

三十六章　あぁそっか。負けたんだっけ・・・

『・・・・あれ・・・・？』

俺・・・どうなったんだろ？確か・・・ガンターラと戦ってたはずなんだけど・・・

それに・・・この空間って・・・

辺りを見回せば、前に見た事のある光景が広がっていた

真っ赤に染まった大地・・・だが、この真っ赤に染まった大地は先ほど見た物ではなく、もっと前にみた物だという事が分かった。

『あれは・・・ジェムナイトの英雄達・・・だっけ？』

久しぶりに見たジェムナイトの英雄達

その姿は幾つもの戦場を駆け抜けた者の姿をしていた。雄々しく、そして勇ましいその姿・・・

見ている者全てに勇気や力を与えてくれる背中・・・傷ついた鎧・・・途切れることのない覇気。その全てが、彼らから溢れていた。

『・・・っ！？あれは！！』

だが、彼らの前にはインヴェルズが迫って来ていた。だが、インヴェルズの軍勢の数は、最初に見た頃よりも減っていた。恐らく・・・ジェムナイトの英雄達が数を減らしたのだろう。・・・己の命と引き換えに。

ジェムナイトの英雄達は武器をとり、今まさに始まろうとしている戦いに備えていた

ジェムナイトの英雄達の後ろには、傷ついてはいるが、まだ戦うと

いう意志を見せている氷結界の龍達と、氷結界の戦士達。

『・・・・また・・・戦争が・・・』

真っ赤に染まった大地を、さらに真っ赤に染め上げようとインヴェルズ達の軍勢が一歩、また一歩と進んで行く
ジェムナイトの英雄達が今まさに突撃しようとした時だった

『な、なんだ!?』

真っ黒に染まった雲が晴れ、太陽の光にも似た光を放った。そこから、機械のような天使がゆっくりと舞い降りてきた。俺は・・・その姿を知っている・・・

『あれは・・・ヴァイロン!?』

そうだ・・・・すっかり忘れていた。
この世界の戦争では、ヴァイロンがインヴェルズを封印したんだ!
その後、インヴェルズが目覚めて・・・ヴァイロンを喰らうための力を蓄えるためにガスタやリチュアを襲ったんだ!!
じゃあ・・・この光景はやっぱり・・・

『ヴァイロンが・・・インヴェルズを封印しに来たんだ』

ヴァイロン・エプシロンや、ヴァイロン・ソルジャーがジェムナイト達と共闘してインヴェルズを蹴散らしている。
そして・・・インヴェルズ・グレズが真っ白な光に照らされ、封印される光景をその目で見ていた

『・・・これが、戦争の終結・・・』

そう、これがジェムナイトの英雄達と氷結界の龍達、そして、ヴァイロンの天使達が戦争を終わらせた結果。それから、何年、何十年という時が経っていたのだ。

だが・・・今回の戦いにヴァイロンが助けに来てくれるとは限らない。確か、ヴァイロンは神に近い存在だったような気がする。そんなのがそう簡単に助けてくれるわけ・・・いや、助けないとアレだよな。５７３さんもそこら辺考えてるだろーし・・・

『・・・・・・』

だが、今回の戦いはそうやすやすと終わるような物ではない気がする。そして・・・嫌な予感がする。いや、ヴァイロンが負けるとかじゃなくて・・・ホント、別の嫌な予感がする。だけど・・・

『・・・エリアル・・・』

俺が見た映像では、エリアルはインヴェルズの手に堕ちて、カームを殺そうとしていた。瞳の奥のハイライトが・・・完全に消えていた。ヤンデレ・・・という単語が最初に出てきたが、あれとは違う何かを感じた。なんというか・・・“心”がないみたいな・・・

「ちょっとガンターラ！！蒼痲起きないわよ！？」

「う、うぅむ・・・すまぬ・・・何故か途中から熱くなってしまい、つい本気で蹴ってしまった・・・」

だが、どこからか声が聞こえてきた。声の主は舞姫とガンターラだ

という事が分かった。だが、不思議と舞姫の声は凄く近く感じられた間下に広がる光景からどんどん離れて行き、俺はどこかに引っ張り戻されるような感覚に囚われた。

「ぅ・・・うん・・・・・？」

「あ、起きた！！大丈夫？」

ゆっくりと瞳を開けると、目の前には舞姫の・・・・顔が広がっていた

「なぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！？何！？何よ！？」

あ、ありのままに今会った事を話すぜ！！ガンターラと戦ってて、目ぇ覚ましたらいきなり美少女（？）の顔がいきなり視界いっぱいに広がったんだ！！何かとても恐ろしい片鱗を・・・って、んな場合じゃなかった！！

「い・・・っつぅ！！」

起き上がろうとした時、俺は頭に鈍い激痛が走り俺はその場に倒れたいっつぅ・・・なんでだ？えぇっと・・・俺は、胴廻し回転蹴りでガンターラの廻し左踵落としにカウンターをしようとしたんだっけ・・・

でも、俺の足よりも先にガンターラの足が届いて、俺は・・・負けたんだな

「動いちゃ駄目よ！ガンターラの一撃を喰らったんだから！普通だ

ったら死んでたかもしれないのよ！？」

「・・・あの、舞姫さん？何をしているのでしょうか？」

動くなと言ってるくせに、俺の頭に手を添えて自分の膝に乗せたんですが・・・つか、これ膝枕だよね！？何してんのこの子！？

「何って、膝枕よ膝枕。見て分からない？」

「い、いや！そういう事じゃなくて・・・って、そういうことだけど・・・」

「・・・何よ、嫌なの？」

いや、嫌ってわけじゃないけど・・・だけどさ？あれじゃん。俺と同じくらいの女の子が、知り合って間もない男に膝枕って・・・ねぇ？

「嫌じゃ・・・ないけど・・・」

「ならいいじゃない。ほら、逃げない」

だ、だけどさ！！流石に恋人でもない人に膝枕をされるのは、なんかむず痒いとです！！

俺は頭を振って抵抗するも、舞姫ががっちり俺の頭をホールドして、上から押さえつけるように膝に固定した。不思議と、見上げた舞姫の顔は赤かった

「・・・な、なんか照れるわね・・・こういうのって」

「照れるんならやるなよ・・・いっつつ・・・」

「少年、大丈夫か？」

ガンターラが心配そうに俺を見ていた。だが、俺は手をひらひらと動かしながら大丈夫だと主張した

「大丈夫だ、問題ない」

「・・・そうか。」

それを聞いて安心したのか、ガンターラが静かに口を開いた
その瞳には、何かを伝えようとしているようにも見えた

「・・・蒼痲。君は“戦神”を知っているか？」

「・・・“戦神”？」

戦神？んなもん、知る訳・・・・・・・・あれ？なんでだ？どことなく・・・その響きを・・・俺は知っている？いや、そんなわけない・・・だって、俺の記憶にはそんなモン知らねぇし・・・だけど、なんでだ？妙に引っ掛かるぞ・・・？あれ？あれれ？

「・・・そうか・・・つまり、君は・・・」

ガンターラが呟くような小さな声で言った。だが、最後の方の声は俺に届く事はなかった
だが、俺はそんなことよりも、心の中にひっかかる“戦神”という単語について必死に考えていた
なんで・・・なんでだ？俺は・・・“戦神”を知っている・・・？

だけど、なんで・・・？いつ、どこで俺はそんな事を知ったんだ？アニメ？いや、違う・・・もっと違う何かだ・・・そう、誰かに教えてもらった・・・のか・・・？

「・・・蒼痲。君は、力が・・・欲しいか？」

「・・・力？」

「・・・いや、なんでもない。君は、この力についてはあまり深く知らない方がいい・・・」

・・・そういわれると、異様なまで気になるんだよなぁ・・・そういう話って、やっぱり知りたいよなぁ・・・だが、俺の中では不思議と気にはならなかった・・・

（・・・なんでだろうなぁ・・・いずれ、“戦神”について分かる気がするんだよなぁ・・・ま、今はいっか・・・）

「ガンターラ様！インヴェルズの奴らがッ！！」

すると、俺達のいる広場にバタバタと音を立てながら青年がガンターラの方に近寄った

それも、インヴェルズの情報まで持ってきてくれた・・・なんという好都合。今度こそ、ガスタとかの状況について知らねぇとな。

「よーし、その事ｋｗｓｋ教えてくれ」

「なっ？！侵入者！？」

青いバンダナをした青い服を基準にした、青ばっかの青年が俺に向

かって構えた・・・こいつ、どっかで見た事あると思ったら、氷結界の御庭番じゃねぇか・・・低級の癖に、守護獣と大僧正が居ればロックの決まる奴じゃないか。まぁ、守備力も微妙だしなぁ・・・氷結界のデッキに入るかどうか・・・

「落ちつけ御庭番!!蒼痲は敵ではない!!むしろ、舞姫の暴走を止めてくれた仲間だ!!」

「そ、そうなのですか!?そ、それはすまない事をした・・・って、それどころではないのです!村の入り口にインヴェルズの連中が・・・」

「ぐぅっ!!思ったよりも速いな・・・舞姫!蒼痲と見ていてくれ!御庭番!奴らを追い返すぞ!!」

「御意!!」

そういって、ガンターラと御庭番は村の入り口へと飛んで行った。いやぁ・・・すげぇ速いな。多分、俺じゃ追いつけねぇんじゃねぇかな?

「・・・二人っきりになっちまったな」

「えぁ!?い、いきなり何言ってるのよ!!」

「ふごぉ!?」

「あ、ご、ごめん!!」

俺が舞姫に話しかけると、舞姫は俺の頬に思いっきりビンタをした。

な、なんて奴だ！！自分で勝手に膝枕した癖に、膝枕をした相手をビンタで吹っ飛ばすとは！！！この女子、やってくれる！！

「いってて・・・ったく、仮にもこっちゃけが人・・・って、あれ？」

普通に立って頭をぼりぼりと引っ掻いた。あ、あれ？なんでだ？もう痛みがないゾ・・・？あ、そういう事か！つまり、俺は頭をぶつけただけなのに、それを大げさに痛がってただけなのか！！

なんだよ、ただの自演じゃねぇか・・・アホらしっ

「あー、なんか、入口の方やばそうだなぁ・・・」

こっからじゃよく分からないけど、どこかから爆発音がするのは確かだ。恐らく、この音をたどればこの村の入り口に到着するだろうな・・・

「ま、待ちなさいよ！あんた、さっきぶっ倒れたの覚えてる！？いいから、ここはガンターラに任せて・・・」

「いんや。それは無理だ。俺は、この村に御世話になる身だから、この村の人達に挨拶しないと」

「で、でも！！」

俺が入口の方に向かおうとすると、舞姫が俺の手をとって俺を止めようとした

その手をぎゅっと握りしめて、絶対に離さないという意志を俺に伝えていた

「・・・あのな、舞姫。俺は何も、戦争に行く訳じゃないんだぞ？」

「そ、そんなの分かってるわよ！で、でも・・・あんた、目ぇ離したらどっか行っちゃいそうで・・・心配なのよ」

「お、おいィ・・・」

「だ、だから！あんたは絶対に行かない事！！いい！？」

いや・・・そんな怒鳴らなくても・・・
つってもなぁ・・・舞姫頑固っぽいしなぁ・・・
・・・・あ、いい事考えた。

「あぁぁぁーーーー！！ガンターラが被っていたと思われるヅラがッ！！！」

大げさに声を張り上げて、舞姫の後ろを指差した。
まぁ、すっげぇベタな方法だが、一回やってみたかったんだよねぇー。もしも、これが失敗したら行くのやめるか・・・いや、でも行かないと不味そうな予感がするしなぁ・・・どうしよ・・・

「え！？どこどこ！？」

ズコーーーーーッ！！！
ベタな展開に、俺の脳が追いつかなくなっている。いや、だってさ？普通「うわ、何この子・・・痛いわぁ～～」みたいな目線を送ってくるはずなのに、まさかそんなに王道な返答をしてくれるとは俺も思ってなかったですたい・・・

（ま、いっか。とっとと行こっと・・・）

思い立ったが吉日。俺は、その場でもう一度、力を解放するイメージを行った。

俺がやろうとしていることはただ一つ。もう一度エクシアの能力を使って、入口まで速く向かう事。だが、エクシアになるのにそこまで時間は必要なかった。恐らく、これは一秒の間のできごとであろう。俺の身体が覚えていたのだろうか？俺の中にある“ありとあらゆる異端を打ち消す能力”が右手から光を放ち俺の身体を覆った。それと同時に、右手に感じる鉄の重さ。だが、不思議と重くはなかった。左手に装備されたシールドに、背中に感じる太陽炉の重さ・・・

俺は、もう一度エクシアの能力を発動した。

「うっし・・・」

「ちょ、ちょっと！！何もないじゃない・・・って、蒼痲！！」

「悪ぃな舞姫！ちょっくら行ってくるわ！！」

「あ、ま、待ちなさいよ馬鹿ぁぁぁぁぁぁ！！！」

太陽炉から溢れる緑色の粒子・・・これが、太陽の光を受け、まるで蛍のように仄かに輝き消えて行く・・・そんな幻想的な光景を見ながら、俺は足に魔力を送りこみ空へと飛翔した

そのまま、どんどん小さくなる舞姫を余所に、村の入り口の方へと向かった。

まぁ、純粋に雄叫びとかがする方に向かってるだけなんだけどネ。

（・・・というか、エクシアの力・・・まだ制御しきれてねぇな・・・）

そう。俺はエクシアの能力を発動したと同時に分かった事があった。それは、この力が俺の手に余る能力を所持しているという事。恐らく、俺が物にするためにはかなりの時間が必要になるであろう。正直に言おう・・・俺は、この力が怖い。それもそうだ。一歩間違えれば人を殺すための兵器としても使えるこの剣・・・そして、人を殺す事の出来る力・・・これを恐怖と言わずになんと言えよう？

（・・・あーぁ。やだやだ・・・どうしてこんな力手に入れたんだろ？）

今はなんとか制御できているが、正直ギリギリである。魔力を込める個所を間違えれば、魔力を込めた個所にぶっ飛んでしまうだろう。それほど、このエクシアの力が強いという事だ。恐らく、俺の魔力を全て剣に込めれば００ガンダムと同じ事ができる気がする。あ、００ガンダムと同じってのは大気圏にあった衛星（？）を地上から真っ二つにしたアレね。

「うぉぉおおおおお！！」

おぉっと、所がぎっちょんここでガンターラの声が聞こえた。いきなりのことも驚きつつ、俺はガンターラが居るであろう場所に目を向けた。

そこには、村に押し寄せてくる真っ黒な虫達の姿があった。闇に蠢く瞳が辺りを埋め尽くし、そこから一匹ずつインヴェルズの魔細胞や、斥候が溢れ出ている。

インヴェルズの侵攻を食い止めるべく、ガンターラを始めとした虎将もインヴェルズから村を守っていた。
中には女性の姿も交じっており、インヴェルズの侵攻を必死に止めていた

「・・・エクシア、目標を確認。これより、武力によるインヴェルズの根絶を始める・・・」

なんか、どこかのガンダムさんの台詞をオリジナル込みで呟いた。
いや、だってさ？人殺しにも成りうるかもしれないけど、この能力の元ネタの人の台詞って言ってみたくなるんだよなー。まぁ、イタい言動は避けたいけどｗｗｗ

その場でゆっくり剣を構え、背中に魔力を込めて地面に降下した。
勿論・・・・

「ぬぉぉぉ

！なんと簡単な方法でしょう！！つっても、ガンダムＶＳガンダムのエクシアのダッシュ時の△ボタン押したアレなんだけどさ。
突風と共に現れた俺に轢かれるようにインヴェルズの魔細胞達が消滅を始めた。大体今ので４割くらい消えたかな？

「なっ！？」

「ぬぉお！？」

「きゃあ！？」

まぁ、その途中で氷結界の方々を巻き込まないように動くのは俺流である（キリッ
といっても、俺の巻き起こした突風で少し後退してるけどネ

「そ、蒼痲！！大丈夫か！？」

「ガンターラ！」

「動いて大丈夫のようだな・・・・・・すまないが、手伝ってくれるか？」

「勿論。助太刀するぜ。」

「助かる・・・奴らの狙いはブリューナクやグングニールの封印場所だ。恐らく、封印されたまま捕獲したいのだろう」

なんだと？やっぱり、この里にはブリューナクとかグングニールが封印されてるのか・・・。てっきり、嘘かと思ったんだけどなぁ・・・

「どちらにせよ・・・」

「あぁ・・・こいつらは、害を与える害虫って所か。んじゃ・・・」

ガンターラと背中合わせとなって、剣を構えた

不思議と、ガンターラと肩を並べられる事がとても嬉しかった。歴戦の戦いを勝ち抜いた男の背中・・・その背中に、俺の背中を預けられるという安心感に、俺は包まれていた。不思議と・・・心地が良かった

「俺はその害虫駆除を手伝うとするわ！！」

そういって、俺はインヴェルズの湧き出る闇に突貫した。俺が跳ぶと同時にガンターラも跳び出し、インヴェルズの斥候や魔細胞を次々となぎ倒して行った

「邪魔だ邪魔だぁ！！死神様のお通りだァ！！！」

「ふんっ！！！」

俺とガンターラの邪魔をするインヴェルズ達を斬り伏せ、前へと進むインヴェルズの湧き出る闇の歪みに、ビームライフルを叩きこみ、牽制。そして湧き出るインヴェルズの駆除を行う

「あぁチクショウ！！邪魔くせぇなオイ！！」

降りかかる火の粉を払うようにインヴェルズを斬り伏せる。左足を軸にその場で回転し、俺の周りに居るインヴェルズ達を一掃。刀をマウントしてその場で体勢を低くしてビームライフルでインヴェル

ズを打ち抜く。

「めんどくせぇな！！一気にブッ飛ばす！！」

そういって、インヴェルズの湧き出る歪みの中に突っ込もうとその場から駆け出した。闇の歪みの中に突入し、内側からインヴェルズの奴らをブッ飛ばすって寸法よ。これで、カンペキ☆

「うぉおおおおおおおおおお！！」

実戦を重ねるごとにエクシアの能力を使いこなせるようになり、命をかけた戦場の中で俺はエクシアの能力に覚醒しつつあった。恐らく、このまま上手くいけばトランザムをも使いこなせるようになるだろう。

「邪魔だ邪魔だぁぁぁぁぁ！！」

目の前でインヴェルズを呼ぶ者がとても大きな悲鳴を上げて消えて行った。だが、俺は魔細胞を斬り伏せるのにいっぱいいっぱいで、それに気づく事はなかった。

「これで・・・・ラストォオオオオオオオオオ！！！」

最後に残った魔細胞を斬り伏せ、俺はその場で立ち止まった。警戒しつつ、辺りを見回すと闇の歪みからまた新たな歪みが生まれ、何かが出てきた

マウントしたＧＮソードを構え、警戒しながらソレを見つめた

「・・・お前か。我々の手下達を殺したのは」

「なっ・・・・！？」

そこには、女の子が立っていた。どこかで見た事のある魚のような模様の書かれた真っ黒な帽子だ。

「まぁいい闇は腐るほどある。この程度減った所で、我々に支障はない。」

見慣れたマントが真っ黒にされており、まるで闇に堕ちた事を伝えるような威圧感を与えている

「どうした？じろじろ見て。戦場に女が居るのはそちらも同じであろう？」

頬にインヴェルズの模様が刻まれているが、それ以外は普通の女の子だ。

しかし、唯一違うのは、俺の知っている彼女の瞳は黒ではなく、青の瞳をしていた。

「ふんっ。だんまりか・・・まぁいい。さっさと終わらせよう」

「なんで・・・なんでお前がインヴェルズなんかに居るんだよ・・・エリアル・・・ッ！！」

そう。そこに居たのは、リチュア・エリアルという、俺の大切な人だった。

「気安く私の名を呼ぶな人間！！」

エリアルがそう叫ぶと、彼女の周りが闇に包まれた

そして、闇が晴れると同時に、彼女は魚と合体していた

「はぁぁぁぁぁッ！！」

「ぐぅっ！！」

儀水鏡の埋め込まれた杖で俺を攻撃するエリアル。俺はその攻撃をGNソードでカードし、華麗に捌く。しかし、マインドオーガスとなったエリアルの攻撃はとても重く、受け止めらた物ではなかった

「その程度かッ！！」

「ぐぁぁぁぁぁぁぁ！！」

魚の尾びれに吹き飛ばされ、後ろに後退する俺。反撃する余地は幾らでもある。しかし・・・攻撃すれば、エリアルを傷つけてしまう・・・！！どうすりゃいいんだよ・・・！！？

「どうした！？私が女だから攻撃しないのか！？貴様、戦場で何を甘ったれた事を言っている！！ここは戦場！命を賭ける場所だ！！」

「・・・ざっけんな・・・」

「何？ふざけているのはお前だ！！私が女だという理由で攻撃しないなど、言語道断！！笑わせるな！！「ちげぇよ！！！」何っ！？」

ふざけるな・・・俺の知ってるエリアルはんな言葉使わねぇよ・・・！！少ししか知らないけど・・・これだけは言える！！！

「俺の知ってるエリアルはそんな事言わねぇ！！辛くても、笑顔でいてくれる女の子だ！！お前はエリアルじゃない！！エリアルの皮を被った偽物だ！！」

「っ！！・・・抜かせ！！何も知りもしない奴が・・・出しゃばった事をいうな！！」

「あぁそうだ！！俺は少ししかエリアルの事を知らない！一緒に居た時間も少ないし、少ししか知らないけど！！だけど一つだけ言える！！お前は・・・エリアルじゃない！！」

俺が叫ぶと、マインドオーガスは持っていた杖をその場に叩きつけた。そして、怒りをあらわにした瞳で俺を睨みつけた

「いい加減にしろ人間！！私を・・・馬鹿にするなぁ！！！」

そういって、マインドオーガスは俺に攻撃を仕掛けた。魚で突撃するというだけの簡単な物だったため、横にジャンプし回避した。そのまま、マインドオーガスの魚の上まで跳んだ

「目ぇ覚ませ！！エリアル！！」

「くぅっ！！」

そういって、右手を振りかぶってエリアルに殴りかかった

だが、エリアルは身体を逸らしてパンチを回避した。まだだ！！！まだ・・・終わらんよぉッ！！！

「おぉぉぉ

右ストレートを行ったままの体勢で、左拳を構えて、アッパーを撃ち放った。
ゴッ！！という音とともに、俺の拳に何かを殴った感触が伝わった。しかし、身体を逸らされているため、当たったのは顎ではなく、肩だろう。
この時、不思議と時間がスローに流れている事に気付いた俺は、ゆっくりとエリアルの方を向いた

「マスター・・・」

「ッ！？エリアル！？」

体勢を崩した俺を見つめる青い瞳・・・その瞳にはうっすら涙が流れていた。手を伸ばせば届くような距離で、彼女は泣いていた。必死に左手を伸ばすが、彼女には届く事が無かった

「助けて・・・・・ッ！！」

“助けて”と小さな叫び声が聞こえたと共に、彼女の瞳は青から黒へと変わった。そして、自分から流れる涙に触れると、俺を振り落とした

「貴様・・・私に何をした！！」

「エリアル・・・お前・・・操られてるだけなんだな・・・！！」

これでようやく分かった。エリアルは、インヴェルズに操られている。これが分かった以上、彼女をなんとしても助け出さねば・・・！！

闇で出来た地面の上に着地すると、俺はマインドオーガスに向かってＧＮソードを構えた。
だが、それと同時に、マインドオーガスは闇で出来た湖のような物にその身体を沈めていた

「今日の所はこの位で勘弁してやる・・・だが！次会った時が貴様の最後だ！！」

「エリアル！！俺は・・・絶対にお前を救って見せる！！！」

「気安く私の名を呼ぶな人間！！」

そう言い残し、エリアルは闇の中へとその身を沈めた。ゆっくりとその姿を見送り、俺は僅かに輝く光を頼りに、闇の歪みから抜け出した。

そこには、先ほど居た氷結界の里が広がっていた。
インヴェルズの奴らは完全に居なくなり、辺り一帯を雪が覆い尽くしていた。

「おぉ蒼痲！！無事か！！」

ガンターラがこちらへ寄ってくると、俺の無事を確認してくれた。
すると、ガンターラの後ろからこちらへと走ってくる姿が目に映った。あの見慣れたツインテールは・・・

「おぉ、まいひ「何恩人残して戦いに行っとるんだオンドリャァァァァ！！！」ごぉッ！？」

舞姫と名前を呼ぼうとしただけなのに、俺の腹目がけて舞姫のドロ

ップキックが炸裂しました。理不尽すぐる・・・つか、ガンターラの野郎ッ！！舞姫の声が聞こえたと同時に避けやがって！！綺麗に腹には行っちまったじゃねえか！！

「バカバカバカ！！人の話も聞かずに戦場に行く馬鹿が居る！？」

「いや、その馬鹿が目の前に「うっさいわよ変態！！」へ、変態とか言うなし！！変態だって生きる権利はあるんだよ！！」

「寝言はそのぼさぼさ頭が治ってからいいなさい！！」

まさに外道。

天然パーマの何が悪い！！俺はオサレとかそういうのには興味がないんですー！あぁ言うのはイケメソのやることなんだよ！非リア充の俺にゃぁ無関係なんだよ！！！

「舞姫落ちつきなさい。仮にも彼は、この村の危機を救ってくれたのだから」

「で、でもライホウ様！！」

「そうだぞ舞姫。」

「グルナード様まで・・・」

おぉっと、ここで氷結界の虎将達のおでましだぁ！！どっちも氷結界の中じゃ微妙な効果しかない虎将達じゃないか！！

「ようこそ、天城蒼痲。ここは、氷結界の里だ。」

グルナードが手を伸ばして、握手を求めてきた。勿論、右手で。

「あぁー、悪いな。今は握手出来ない。」

「？どうしてだ？」

先ほど気がついたのだが、エクシアを発動している間、身体全体が“ありとあらゆる異端を打ち消す力”を持っているため、微弱だが、左手で触っても効果が発動するだろう。ましてや、その能力の根源の右手を触れば当分の間能力は使えないであろう。

「ちょっと色々あってな。話がしたい。できれば、今の状況とかも知りたいんだけど・・・」

「あぁ、そうだな。では、順を追って説明しよう・・・」

俺は、カームやジェムナイト達に会えるという淡い希望を持ってグルナードの声に耳を傾けた。

しかし、俺の希望は、グルナードの一言で崩れ去って行った

「・・・・・・インヴェルズが、ガスタやジェムナイトの連合軍を破り、今まさに、世界は終わろうとしている」

・・・その言葉で、俺の希望は一瞬で砕け散った

三十七話　雪、洞窟、広場にて修行。

「嘘・・・・だろ・・・・！？」

俺の希望が打ち砕かれ、その場で意識を失いそうになる俺・・・あまりにもショックだったため、ふらついてしまったのだ。

「そ、蒼痲！！大丈夫！？」

そんな俺を支えてくれた舞姫は、心配そうに俺の顔を覗き込んだ。だけど、俺は舞姫を振り払い、ライホウの胸倉を掴んだ。

「嘘だって言ってくれよ！！なんで・・・なんでガスタとジェムナイト達がッ！！！！」

「落ち着け。まだ話の途中ではないか。確かに、ガスタやジェムナイト。ラヴァルやリチュアの連合軍が負けたのは事実だ。だが、彼らは一時撤退をしたのだ。」

な、なんだよ・・・て、撤退かよ・・・

「貴様！！ライホウ様になんという事をしているのだ！！」

「あ、わりぃ・・・」

「なんだその態度は！！貴様のような訳も分からぬ者が、何故氷結界の里に足を踏み入れているのだ！！」

おぉーっと、早速御庭番が俺に喧嘩ふっかけてきやがったぞーぅ。

よし、いっちょ殺るか・・・

「よし、そこのイケメン。ちょっと面貸せや・・・」

「ちょっと！何御庭番に喧嘩売ってるのよ！！今はそれどころじゃないんでしょ！？」

ちっ・・・舞姫たんは横から口だししないでくださいませんかねぇ？興が覚めたじゃねぇか・・・

「ちっ・・・分かったよ」

「話を戻そう。連合軍が負けたのには理由がある。」

「理由？どんな理由だよ？」

理由・・・ねぇ？まさか、ワーム・ゼロとかのワームが現れたってんじゃねぇだろーな？そんなの嫌だわ・・・だって、ミミズっぽいのもいれば、ネバネバしてそうな緑色の奴とかも居るし・・・うげっ・・・そんなのと戦うなんて、考えたくないね・・・

「恐れていた事が起きたのだ。かつて、我々やXセイバー、霧の谷などが覇権を争っていた頃、突如現れた謎の侵略者・・・ワームが生き残っていたのだ。」

「ワーム・・・？」

・・・最悪だ。あんな気持ち悪いのを相手にするはめになるのか俺ァ・・・あぁー・・・俺のGNソードがネバネバで汚たなくなりませんよーに！いやマジで！！

「そのワームが、インヴェルズに操られているようでな・・・連合軍とインヴェルズが戦っている最中、奴らがインヴェルズに加勢したそうだ。我々の技術の結晶とも言えるＡＯＪ（アーリーオブジャスティス）達は、全て破壊されてしまったのだ」

え・・・？ＡＯＪって独立した機械の軍団じゃなかったの・・・？てことは・・・氷結界とか、Ｘセイバー達の技術を合わせた結果、ＡＯＪが完成したってこと・・・？

マジかよ・・・そんな裏事情があったとは・・・じゃあ、雷神鬼が引きちぎったカタストルの意味って・・・？

「状況は最悪なのだ。侵略者であるワームと、太古の昔に封印された侵略者インヴェルズ・・・その二つの勢力が手を組んだとなると・・・本当にまずいことになるのだ。」

「・・・・・・」

そんな・・・・・・

た、確かに俺の知ってるＤＴ（デュエルターミナル）の話では、ワームは滅びたんじゃ・・・

いや、でも・・・・・・そうだ・・・これは、バグが紛れこんだ世界なんだ・・・

だから、俺の知らない事が起きるし・・・俺の分からない事も起こる。俺が知っている情報も・・・あてにならないっぽいな・・・

「・・・だが、希望はある。・・・風水師」

「此処に。」

俺が悩んでいるにも関わらず、ライホウが風水師と呼ばれる少女を

呼んだ。
その少女がずいっと俺の前に立つと、手の持った鏡に俺を映した。
「な、なんだ？」
「少し黙って下さい。気が散ります。」
俺を映した鏡をゆっくり見つめる風水師。そして、瞳を閉じながらゆっくり告げた。
「・・・『かの者、異端を打ち消す異端の力をその身に宿し、暗闇に染まった世界を引き裂き、流星の輝きを放つ者なり。』・・・」
「？？？？」
「そうか・・・ありがとう風水師。蒼痲、君に選択肢をあげよう。ここで逃げ、どこまでも続く地獄を歩むか・・・ここで駆け出し、地獄を切り裂く刃となるか。さぁ、選ぶがいい」
グルナードが静かに告げた。二つの選択肢から選べ。さもなくば、殺す。そんな覇気を纏った声で告げた。俺は、ゆっくりとその場で考えた
（・・・ここで逃げれば・・・俺は、大切な物をまた失う・・・でも、残れば・・・何が起こるか分からない・・・まーた運命の選択かよチクショウ・・・）
まただ・・・・どうして、自分はこうも運命の選択に迫られるのだろう？そういう不幸な運命でも背負っているのだろうか？そんな人生嫌だなー・・・と、考えながらも、俺は静かに告げた

「・・・俺は、逃げない。こうなったのも、俺がグレズを倒さなかったからだ。なら、後始末は事の発端である俺がやらなきゃ、誰がやるってんだよ」

「・・・本当にいいのだな？」

「あぁ。下手したら、死ぬかもな・・・」

「では、何故逃げない？」

逃げない理由？んなもん。決まってらぁ。じいちゃんの・・・・俺の、師匠の・・・

「・・・大切な人に言われたんだよ。「一度関わった事は、中途半端に終わらせるな」ってな。その教えを胸に、俺は生きてるんだ」

「・・・そうか。いいだろう！天城蒼痲！！お前を、この氷結界の里を納める我々の指導者に会わせてやろう！！」

指導者？え？それって・・・ガンターラとかの虎将じゃねぇの？・・・ん？待てよ？

虎将・・・コショウ・・・こしょう・・・調味料？いや、違うか。

あ、そっか！！虎将って、虎がついてるから・・・

「なぁ、ここの指導者って・・・誰だ？」

本当は分かっているのだが、とりあえず舞姫に聞いて置いた。

舞姫は「まぁ、当然よね。」みたいな顔で俺に言った

「私達、氷結界の指導者・・・ドゥローレン様の所よ。」

あ、ですよねー・・・・

そういって、虎将達と舞姫に導かれるように歩く俺。

はてさて・・・一体どうなる事やら・・・

ライホウ達につれていかれたのは、氷結界の里の近くにある洞窟だった。

洞窟の前まで行くと、舞姫は洞窟の前で待っているといって、洞窟の前で待っててくれるそうだ。

そこから先はライホウとガンターラ、そしてグルナードが俺を誘導してくれた。

洞窟の中は、氷で出来た空間だった。まさに、氷結界と言うにふさわしい光景だ。そんな光景を眺めつつ、ゆっくり前へ進んで行く俺達。

そして・・・とても大きな扉の前に到着した。ライホウがカギを取り出し、ゆっくりと鍵を開けると、ガンターラが俺に小さく耳打ちをした

「ここから先に居るのがドゥローレン様だ。失礼のないようにな。」

「お、おう」

そういって、俺は開け放たれた扉の中に入った。

扉の奥に広がっていたのは、氷によって出来た王座のような場所に、静かに佇む虎が居た。

バタンッ！！という扉の閉まる音とともに、虎は目を覚ました。

そして、俺を見つめると、ゆっくりと王座から立ちあがった

『・・・ようやく来たようだな。』

「？ようやくってことは、知ってたのか・・・じゃなくて、知っていたのですか？」

『そう硬くならんでもいい。我が名はドゥローレン。氷結界に封じられているブリューナク様や、グングニール様を守護する者だ。』

「・・・・・・・・・」

『・・・トリシューラ様の事を知っているな？』

トリシューラ・・・確か、どっかの神話に出てくる武器の名前だったらしい。ブリューナクやグングニールも、それと同じ意味だが、遊戯王という単語から考えると、出てくるモンスターはただ一つ。

氷結界の龍　トリシューラ

この名前に聞き覚えのないデュエリストはいないだろう。レベル９の中ではミスト・ウォームと共にエクストラデッキに投入されるモンスターだ。三枚除外という強力な効果を持ち、場を制圧する攻撃力を誇るモンスターだ。

「・・・あぁ。知ってる。」

『・・・私は、封印されているブリューナク様達と会話をする事が出来る。だが、トリシューラ様とは中々話せないのだ。私がまだ未熟というのもあるが・・・トリシューラ様は、何百年も一緒に居る私にも心を開いてくれないのだ。』

すげーなオイ・・・そりゃ、太古の昔に封印されたらしいしな・・・何百年か・・・すげぇ単位だな・・・

『・・・だが、ここ最近、トリシューラ様が封印されているにもかかわらず、あり余った力を解放しようとするのだ。まるで、暴走しているかのように。』

「・・・・・・・・・」

ターミナルの話では、封印を解いたはいいけど、暴走したトリシューラが世界を滅ぼしたとか・・・

だが、ドゥローレンは話を続けた。

『だが、数週間前、トリシューラ様が私にこう告げた「もしも、私が暴走しようものなら・・・この村に訪れた、伝説の力を受け継ぐ者と戦わせてくれ・・・」とな。』

「ま、待ってくれ。俺に伝説の力なんて・・・」

『気付かぬのか？私と話している時点で、お前は伝説の力を受け継いでいるのだぞ？』

「は、はぁ！？」

い、いや！！普通に話しかけられてんだけど！？これが、伝説の力を受け継いだ証ぃ！？ありえないだろ！？ま、まさか伝説の力って・・・精霊と話せるって奴か・・・？

『・・・私からお前に言える事はただ一つ。後悔をするな。後悔する前に、行動を起こせ。以上だ』

そういって、ドゥローレンは玉座に座り込み、瞳を瞑った。
俺は、その姿を見つつ、ゆっくりと後退し、扉を開け、外へ出た。

『・・・・・・あれが、貴様の孫・・・か。』

去り際に、ドゥローレンがそんな事を呟いた気がした。しかし、俺は気にも留めず、そのまま外へ出て行った。

「あ、あり？」

外へ出ると、洞窟の入口に繋がっていた。先ほど入った場所だというのに、俺は辺りを見渡した。あ、ありえねぇ・・・なんというどこ●もドア・・・

「ほら。終わったんでしょ？」

「ぬぉおおう！？」

いつの間にか、真後ろに居た舞姫に声をかけられた。
驚いて変な悲鳴出しちまったじゃねぇかこの野郎！！！

「・・・何よ、気持ち悪い悲鳴出して・・・あ、そうだ。ライホウ様達から言伝があるの。」

「こ、言伝？」

「「話が終わったのなら、広場に来い」だって。・・・頑張ってね。晩御飯、作って待ってるから。」

そういって、舞姫が手に持った何かを俺の肩にかけて、残念そうな目線を送って来た。俺は、肩にかかった重みを確かめるべく、ソレを手に取った。

「・・・毛布？」

「違うわよ。上着よ上着。あんた、寒いでしょ？」

おぉ！！なんと気がきく娘なんだろう！！俺の中の好感度急上昇してるよ舞姫！！といっても、振られるのがオチだけどな！！（まさに外道）

だけど、なーんで残念そうな顔になるんだ？ま、いいや。おぉ、意外とぬくぬくじゃん！！これで勝つる！！

「さんきゅ、舞姫！！んじゃ、とっとと行ってくるわ！！」

「あ、うん・・・逝ってらっしゃい」

ん？なんでだろ・・・なんか、見放された感があるのは・・・俺だけ？

広場に到着した俺は、腕を組みながら待っていた虎将達を見つけた。だが、なんか・・・目がマジなんだけど・・・

「・・・来たか」

「なぁ、なんで俺は呼ばれたんだ？」

「・・・それは簡単だ。」

グルナードが小さく呟くと、俺と虎将達を囲うように、青い結界が俺達を取り囲んだ。

結界の気配を感じた瞬間、俺は結界を破壊しようと、右手を前に突き出すが、ライホウが右手首を掴んで阻止した。

「な、何すんだよ！！」

バッ！！と掴んだ手を振り払い、ライホウとの距離をとった。俺の事を見つめている虎将達の瞳からは覇気が感じられ、戦いたいようにうずうずと拳を構えていた。

「言っただろう？君は、地獄を切り裂く刃となってもらう。そのためには・・・修行を行う。勿論、生半可な物ではないがな・・・」

「だからって、結界を張る意味は！？」

「言っただろう？生半可ではないとな。君にはこれから・・・我々と限りなく実戦に近い模擬戦を行って貰う。死ぬ気で来い・・・さもなくば、君を殺してしまうかもしれないのでな・・・」

限りなく実戦に近い模擬戦って・・・つまり、死合いをしろってのか！？ま、マジかよ・・・

「勿論、我々全員に勝つまで毎日行う。修行時間は半日・・・君がこれを終えない限り、我々は連合軍には参加しない。さて・・・話を終ったところで・・・始めるぞッ！！！」

その瞬間、ライホウ、グルナード、ガンターラが一斉に俺との距離を詰めた。ぜ、全員でやるのかよ！？

「ちょ、ちょ待て・・・うぉぉ！？」

ライホウが俺に向かって蹴りを放ってきた。間一髪で反応できて、体勢を低くして回避する事に成功。しかし、後ろからも殺気に気付き、その場で前に前転した

先ほど俺が居た場所には、ガンターラが踵落としで小さなクレーターを作っていた

「どうした！！避けてばかりでは勝てぬぞ！！」

そういって、俺に猛攻をかけるグルナード。ほぼノーモーションのパンチのラッシュ。それを全て両腕を使って右や左に捌いて行く。だが、横からはガンターラやライホウが拳を構え迫っている・・・どうすりゃいいんだよ！？

「ちっくしょぉおおおおおおおおおお！！」

そういって、俺は初めて攻撃を繰り出した。無駄な動きを減らして右廻し蹴りだ。しかし、右から迫って来たライホウには当たること

なく、いつの間にか左手でガードを行っていたガンターラに攻撃が当たった。しかし、左手を盾にしているため、ダメージを与えられていない。それどころか・・・蹴りを放った右足が悲鳴をあげていた。な、なんつぅガード性能だよ！！

「やっとやる気になったか・・・では、行くぞ！！！」

こうして・・・元一般人（歪んでるがそのはず。いや、人間と言う定義でいうならそのはず。）だったはずの俺に地獄のいじめ・・・もとい、修行が始まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・あり？」

いつの間にか、俺はベッドの上に居た。それも、どこかで見た事のある天井だ

えーっと・・・この場合ってなんて言えばいいんだろ・・・

「知ってる天井だ・・・」

「知ってるんじゃない。なら、いいでしょ。」

「ぬぉう！？」

突然ドアが開けられて、箸を持った舞姫が呆れたような顔で俺を見ていた。あ、やっぱ箸ってあるんだ・・・すげぇな箸って・・・どの世界にもあるんだ・・・

「覚えてないの？あんた、ライホウ様達にボコボコにされたのよ？」

「あー・・・どーりで身体の至る所が痛いわけだ。」

右手を見ると、無残にもボロボロとなって包帯を巻かれた俺の右手があった。あー・・・おまけに、筋肉の節々がいてぇ・・・確実に明日筋肉痛だよ・・・

「起きたんなら、とっとと降りて来てよね。晩御飯が冷めちゃうじゃない。」

「あ・・・うん。ッ！！いでででで！！」

体中に電流が走ったかのような痛みが走った。

いっつぅぅ・・・なんつぅ痛さだよチクショウ！！起き上がっただけでこれじゃ、先が思いやられるぜ！！

「・・・はぁ、ちょっと待ってなさい」

そういって、舞姫はドアから外へ出た。

ちょ！？また、ベッドの上で飯か！？それは嫌だね！！なんで飯を食う筈のリビングじゃなくて、寝室で食わなきゃいけねぇんだよ！

！寝室で食っていいのは夜食と、ポテチとかのお菓子って決まってんだよ！！！

「ふぉぉぉおおおお！！動け俺の身体ぁぁぁぁ！！」

なんとも間抜けな声だろう。だが、こうやって気合を入れなければ身体が動こうとしなかった。

なんとか立ちあがり、ドアを開けて外へ出た。ふ、ふぅ・・・これで一安心・・・・

いや、だって普通に考えてみ？打撲した個所が何箇所かあって、両足に力を入れるだけで痛む体に鞭打って、必死こいて外に出たんだぜ？俺、ある意味勇者じゃね？というか、いずれ神にもなれるんじゃね！？

こんな感じのテンションで外に出た俺に・・・・

・・・一階へと続く階段が俺に立ちはだかっていた。

俺は絶望した。

あまぎそうまはちからつきた！めのまえがまっくらになった！！

しょうぶにまけたため、ばいしょうきんをようきゅうされた！さいふのなかがまっしろになった！！

よし！これであんしんだ！！

（安心できねぇぇぇぇぇ！！！）

例えるなら、片足を骨折したのに、杖とかそういう類の物をしないで、両足で階段を降りろといっているようなものだ。もうやだ・・・・・・

「・・・何してるのよ？」

階段の下から、舞姫が鍋を持って上がってきた。
恐らく、階段の前で突っ立ってる俺を見て呆れているだろうなぁ・・・・

「身体動かせるんなら言いなさいよ・・・ほら、一回で待ってるから、早く来なさい。」

「・・・はい」

・・・はぁ・・・救世主（笑）としてなのはの世界を駆け巡ってた俺がなんと無様な姿だろうか・・・
カームとかを助けるためにこの世界に来たけど・・・まさか、こんなにも長引くなんてなぁ・・・

・・・まぁ、自分から首を突っ込んで関わったんだ。最後まで・・・やり通すしかないっしょ！！

「・・・ま、頑張りますか・・・」

そういって、俺は階段をいつも通り（元居た世界では一般人が階段を下りるスピード）で階段を下りた。
勿論、足から伝わる振動で体中が痛くなったのは言うまでも無い。

おまけ

それは、晩御飯の後の出来事のことである。

「あ、そうだ。あんたにこれ渡せって言われてたんだった」

舞姫が救急箱のような物の中から、何かを取りだした。
それは、どこかのモンハンで出てきそうな巾着袋のような黄色い袋だった。
・・・あれって、秘薬じゃね？見た目的な意味で。

「あのー・・・舞姫さん？それは一体何ですか？」

「あー・・・・えぇっと、これは氷結界に伝わる秘薬よ。丸薬だけど、一つ食べればたちまち身体の痛みを和らげて、明日には打撲や擦り傷が消えてあら不思議！骨折も二日で治っちゃう優れ物！今ならこのお値段、安いよ安いよー！！・・・みたいな物。」

舞姫が表情を変えながら説明してくれた。
お前、どこの通販番組の人だよ・・・・と、心でツッコミをいれつつ、ゆっくりとその秘薬とやらを手に取った。
そして、少し憐れんだ目で舞姫を見つめた。

「・・・舞姫。お前・・・・・」

「み、皆まで言うな！！うるさいわね！！仕方ないでしょ！？私だってそう言うこと言いたい年頃なのよ！！だから、こっち見んな！！」

なんか、理不尽に怒られた（´；ω；、）
その割に、顔を真っ赤にしてこっちを睨んでくる舞姫が異常なまでに可愛かった。

「・・・まぁいいや。とりあえず、一粒・・・」

そういって、秘薬を手に取った。
・・・これ、ジャンプに出てくる有名な忍者の漫画で出てくる増血丸によく似てるんだけど・・・

「あ、噛まないと効果でないから。あ、これ水ね。」

そういって、コップに水を汲んで俺の前に置いた。
すると、舞姫が少しくすくすと笑いながら俺を見つめた。
その表情を見て、俺はある事を悟った

「・・・嫌な予感がするけど・・・そぉい！！」

目の前に黒く輝く丸薬を一粒、口の中に放り込んだ。
そして、ゴリッという音と共に歯で噛み砕いた。そして・・・

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ！！！」

なんというか、口の中にみかんと納豆を放り込んで、牛乳で流したような味がした。
素直に言おう。不味い。そりゃぁもう、吐き出したいほどに。

「あっはっはっはっは！！あはははははは！！」

口を抑えてゴロゴロと転がる俺を見て、腹を抱えて爆笑する舞姫。
この野郎！！くすくす笑ってたのはそのせいかこの野郎！！

「水！！水水水水水水水！！」

水を口に含み、口に残ったあの丸薬の味を流そうと必死に水を飲む俺。
だが、水で口を潤しても、あの味は消える事はなかった。

「あはははははは！！げっほげほ、ごっほごっほ！！」

舞姫に関しちゃ笑いすぎて咳き込んでるし・・・なんというか、気分が悪い。いや、精神的な意味でね？

「おいコラ舞姫！！お前この味分かってて飲ませやがったな！！」

「うん！分かってたわよ！」

口元を吊り上げ、けたけたと笑いながら返事をしてきた舞姫。その

姿を見たらそこら辺のナンパ野郎なんて惚れてしまうんじゃないかって思うほど綺麗だった。
だが生憎、今の俺にそんなことは関係ねぇ！！

「お前何しとんじゃゴルァ！！」

「だって、他人の不幸は蜜の味って言うじゃない？面白かったわよｗｗｗ」

小刻みに笑うなよ！！おかげでこっちも気分悪いわ！！
・・・だけど、あれ？さっきから転がったりしてるのに・・・まったく痛くないぞ？

「・・・味は最悪だけど、ちゃんと利くのな・・・」

心の中じゃ納得がいかないが、身体を治すのは無駄に早いらしい。
はぁ・・・今度から、この秘薬を服用しないように、全力で虎将達に挑むか・・・

心の中で虎将達を倒す事を誓った。
その誓いが揺るがぬように、拳をしっかり握りしめる俺が居た。

三十八章　暴走龍　前編（前書き）

どうも、めっちゃ時間を開けてしまいましたね・・・
申し訳ありません・・・
最新話です。見てくれると嬉しいです・・・では

三十八章　暴走龍　前編

「うぉぉぉおおおお！！」

「はぁッ！！」

ぶつかり合う拳と拳。

ライホウの攻撃をかわし、隙の出来たガンターラの懐に入った蒼痲は、拳を突き上げた。拳を間一髪で避けたガンターラはそのまま後ろへ後退し、次の攻撃チャンスを見計らうように戦線を離脱した。その姿を見て追い打ちをかけようとしたが、その場で殺気を感じ、後ろへ飛び回避。蒼痲が居た場所には、グルナードが放ったであろう氷塊が突き刺さっており、あの場に居たら死んでたなぁ・・・と思いつつ、こちらへと向かってくるガンターラと向き合った

その場で地を蹴って、こちらへと向かって来たガンターラとぶつかり合った

ガンターラが繰り出す攻撃を全て捌ききり、こちらからも攻め込み、ガードが崩れた所を容赦なく左中段蹴りを放つ。ガンターラの顔に当たる前に、左手を使ってガードしたが、威力を殺しきる事が出来ずにそのまま横へ吹っ飛んだ。

「っしゃあ！！」

「まだだ！！！」

ガンターラを倒して浮かれていた俺に容赦なく氷塊を放つグルナー

ド。しかし、蒼痲は横に避けて回避する事はなく、蒼痲はその場で拳を構えた。そして、そのまま向かって来た氷塊に向けて拳を放った

「ウォォオオオオオオオオオオオオ！！！」

次々と氷塊を砕く蒼痲。空中で砕ける氷塊は、まるで壁にぶつかって砕けるのと同じようにどんどん消えていった

そして、氷塊の雨が止んだ瞬間、蒼痲は動き出した

「オラオラオラオラオラァァァ！！！」

「ぐぬぅっ！！」

氷の塊で出来た壁に蹴りを放ち、破壊を試みる蒼痲。

攻撃が衝撃となってグルナードを守る壁に響く。そして・・・

ピシッと小さなヒビが入ると、そこから崩れるように壁が崩壊した

「っしゃあ！！喰らえェェェェェ！！！」

左足を軸に廻し蹴りを繰り出そうとする蒼痲。しかし・・・・

「なぁッ！？」

突然、蒼痲の足元が凍りつき彼を捕縛し攻撃を中断させた。

首を回して後ろを見るとライホウが少しドヤ顔で蒼痲を見つめていた

（くそっ！！後少しなのにッ！！！）

「はぁぁぁぁぁッ！！！」

「オォォォオオオッ！！！」

「セヤァァァァァァァ！！！」

捕縛され、動けない蒼痲に向かって拳や扇子、剣を構える虎将達・・・

蒼痲は、その場で拳を握りしめ、大声で叫んだ

「チクショォオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

その声と共に、蒼痲の公開処刑・・・もとい、太刀の悪いいじめが始まった。

「くっそぅ・・・ガンターラの奴ら、手加減してくれたっていいじゃねぇか・・・いや、それじゃ意味ねぇか。」

ボロボロになった蒼痲が氷結界の村の外れを歩いていた。
体中に絆創膏（？）のような物をつけて、怪我が酷い場所には包帯を巻いていた。

（・・・あれから、二週間か・・・）

蒼痲が、氷結界の里に来て二週間が経過した。
最初の頃こそ、氷結界の虎将達との訓練を嫌がっていたが、今では逃げることなく向き合っている。

「はぁ・・・やれやれだぜ」

だが、この二週間での進歩と言ったら、目を見張るものがある。
蒼痲は、人間を超えた力を手に入れた事。今では、腕の力だけで自分よりも大きな物を運ぶのなんてお茶の子さいさい。朝飯前にできるようになってしまった。

「・・・誰も・・・居ないよな？」

氷結界の里の外れにある、川の近くで一人小さく呟く蒼痲
人の気配は・・・無い。よしっ・・・

「・・・ふんっ！！！」

右手に力を込めて、一秒でエクシアに変身する蒼痲。
氷結界の里での修行のお陰でエクシアの能力をほぼ１００％まで制御する事に成功したのだが、エクシアの隠された力は完全に制御できていないのだ。
そこで、蒼痲はガンターラ達虎将達との修業とは別に、自分で特訓をしているのだ。この制御できない力を制御するために

そして、もう一度辺りを見渡し、人気がないことを確認し、小さく呟いた

「・・・うっし、やるか。」

そういって、蒼痲は秘密の特訓を始めた

「いっつつ・・・・・」

特訓を終えた蒼痲はボロボロだった。
所々ぶつかった後であろう土が付着していて、酷く打ちつけたであろう腰をさすりながらゆっくりと立ち上がった

「あぁぁぁぁ・・・後ちょいなんだけどなぁ・・・」

大車輪ロケットパンチでも繰り出すんじゃないかと思えるほどぐるぐる回転させ、右手に異常が無いかを確認し、ゆっくりと森を後にした

だが、彼が訓練に使っていた道具は木端微塵に砕かれており、その周辺には小さなクレーターが出来上がっていた

「ただいまー」

舞姫の家に到着し、ゆっくりと靴を脱ぎ居間へ向かう蒼痲。

すると、舞姫がお茶を飲みながら流し眼で迎えてくれた

「ん？あぁ、おかえり・・・って、大丈夫？ボロボロじゃない。」

「うっせ。ちきしょー・・・なんだよ、あの虎将達全員チートじゃねぇの？勝てる気がしねぇんだけど・・・」

「当然じゃない。この里を納める将達よ？むしろ、その三人と戦って生きてるあんたの方が凄いわよ。」

そうなのか？と心で呟き、舞姫と向かい合うように席につく蒼痲。

「はぁ・・・あんたねぇ・・・虎将三人を同時に相手して勝てる相手なんて、ブリューナク様と、グングニール様と、ドゥローレン様と・・・トリシューラ様ぐらいしかいないわ。」

「トリシューラって・・・あのでっかい山に封印されてる奴？」

“トリシューラ”この単語を聞くだけで嫌な思い出しか思いつかない蒼痲がいた。

なにせ、デュエルターミナルの中でもっとも鬼畜で、最強の象徴と言っても過言ではないその能力、強さ、そして・・・・美しさ。

新弾のデュエルターミナルだと心躍らせカードショップに赴き、一体何回１００円玉をあの機械に入れたのだろう。いや、数えるなんてほぼ無理だろう。何せ、給料が入ればいつも最低１０回は回していたのだから。

「トリシューラかぁ・・・どんぐらい強いの？」

「少なくとも、世界を滅ぼす悪魔にもなれるし、救いの神にもなれ

る力を持ってるとしかいいようがないわ。」

「なんつぅか、曖昧だけどどれくらいの強さを持ってるかは把握できたよ・・・」

「仕方ないじゃない。実際にどんな力を持ってるかは明確じゃないのよ。」

「じゃあさ。質問なんだけど、グングニールとブリューナクだっけ？その二体とトリシューラ。どっちが強いの？」

「トリシューラさまよ」

「即答かい・・・」

「だって仕方ないじゃない。もとはと言えば、ブリューナク様とグングニール様の争いを止めたのもトリシューラ様よ？私達氷結界はトリシューラ様達の力を悪用されないように守る番人だもの。」

「ふーん・・・」

静かにお茶をすする蒼痲。しかし、視線は舞姫とは重なる事はなく、ただ窓から見える大きな山をじっと見つめていた

（・・・あそこに、トリシューラが居るのか・・・）

あのモンスターが現れたお陰で一体どれだけの人がＤＴを回した事だろうか・・・

さらに言えば「はっ！？白枠！？トリシューラか！？・・・エンシェント・ゴッド・フレムベルさんちーっす！！！」などといった行

動をとるようになったのだ。いや、エンシェント・ゴット・フレムベル良いと思うよ？あのジョジョ立ちとドヤ顔いいと思う。うん。

「あ、そうそう。私この後でかけるから、午後は好きにふらふらして来ていいわよ。御庭番の家にでも遊びに行ったら？」

「えー・・・御庭番と俺じゃ相性（？）悪いんだけど・・・」

「知らないわよ。暇なんだから行ってきなさいよ」

なんというか・・・酷いなこのツインテール娘。
別に御庭番のこと嫌いってわけじゃないけど・・・でもなぁ・・・
一方的に敵視されるとイラッてくるんだよなぁ・・・ムカつくし。

「んじゃ、私はそろそろ行ってくるわね。それじゃ、鍵はいつもの場所にあるから、出かけるときは閉めてね。それじゃあね～」

そういってひらひら手を振りながら家から出て行く舞姫。
蒼痲はお茶をすすりながら午後はどうしたものかと考え始めた

「うへぇ・・・寒ぃ」

外の寒さに耐えるためにコート（舞姫がくれた奴）を着こんで外に出た蒼痲はゆっくりとある場所へ向かって歩いていた
それは勿論・・・高く聳え立つ山。そう。氷結界の龍達の封印される山の麓まで来ていたのだ。

「しっかし、マジでけぇなオイ・・・」

あまりの高さに首が痛くなるほどだ。
その山の中に封印されているのだから、とてつもなくデカイに決まってる。

「あら？アナタは、蒼痲さん？」

「ん？あぁ、交霊師・・・さん」

突然後ろから声をかけられたと思ったら、そこには水色の髪を靡かせる女性が居た
彼女は氷結界の交霊師だ。確か、デュエルターミナルの第三弾辺りに出てきたモンスターだ。
大将軍紫炎と同じ相手の行動を制限させるけど、打点が少々物足りない残念な・・・

「・・・何か失礼な事を考えてますね？」

「え！？い、いや・・・その・・・」

ま、まさかばれた！？た、確かに失礼なこと考えてたけど、気付くの速くね！？
つか、人の心読むなよ！？

「い、いや・・・というか、なんで交霊師さんはこんな所に!?」
じと目でじーーーっとこちらを睨んでくる交霊師の視線に負けそうになりつつ、蒼痲は話を切り替えた
「・・・まぁいいです。どうしてと言われても困りますね・・・私の仕事は此方で封印されているブリューナク様達に交信することなのです。ですから・・・」
「あー・・・長い説明はいいです。」
正直に言おう。何を隠そうこの交霊師さんの説教は長いのだ。
この前も、ガンターラ達にボコボコにされた俺にアドバイス・・・というなの説教地獄をしてくださったお方だ。正直、見た目は綺麗なんだけど、中身が・・・なんとも言えないお方だ
「見た目“は”とは失礼ですね。いいですか?貴方のように女性と関わりを持とうとしない人が・・・」
「ちょっと待って!なんで俺の心読めるの!?」
それなんてテレパシー!?いや、テレパシーじゃねぇや・・・なんていうんだ?第三の目?それはどっかの小5ロリだし・・・
いや、でもこの人に第三の目なんてないし・・・
じーーーっと交霊師の上半身を見つめて、第三の目がないかを確認する。
うん・・・やっぱ大きいね。・・・何がとは言わないけど
「貴方は顔に出やすいんですよ。少しは精進したらどうですか?そ

れと、私の胸を見ないでください。目何てありませんから」

「ちょま！？」

そんなにスパスパ俺の心読まれると結構傷つくんだけど！？つか、胸なんて見てない・・・・・・・・・・・と言いたいなぁ・・・いや、だって仮にも僕男の子だよ？一応、そういうのには反応しちゃうわけで・・・いや、何をいってるんだ自分・・・

「・・・はぁ・・・見るだけなら減りもしませんし構いませんが、それはセクハラなので世界中の女性を敵にしているという事を考えて下さいね。そもそも、貴方は舞姫という者がありながら他の女性に手を出そうなど・・・」

「ちょっと待って！？なんでアンタの中の俺と舞姫が結婚してる設定なの！？」

「違うのですか？同じ年頃の男女が一つ屋根の下で暮らして、あれそれこれで意思疎通が出来ていて、お互いに支え合っているのですから結婚とそんなに変わらないと思いますよ？」

「いやいやいやいや！！ないから！！絶対にないから！！確かに意思疎通できてるかもしれないけど」

・・・実をいうと、ちょっぴり嬉しかったりしてます。はい。だってあんな美少女と結婚してるみたいな事を考えただけでも・・・ねぇ？一応健全なオトコノコですし・・・

さらにおまけをいうと、俺が「あれ？アレどこにあるか知らない？」と舞姫に言うと「スプーンは食器棚の近くよー」と料理をしている

舞姫と意思疎通できちゃったりしてたり。
逆に「蒼痲ー、これちょーだい」と舞姫が言えば、この世界の言葉を頑張って覚えようと地味ーに勉強してる俺は見ずに「チョココロネくらいだったらやるよ」と見ないで答える事ができちゃったり・・・

・・・・・いや、よく考えたら新婚夫婦っぽくね？しかも、重度のリア充してる感じの。
ちょ、やばっ・・・顔熱くなってきた・・・！！

「ふぉおおおおおおおおおお！！！？！？！？」
氷結界の龍達が封印されている山のふもとで、俺の情けない叫びが木霊したとか・・・しなかったとか

「・・・・で、なーんで俺が交霊師さんの荷物持って一緒に山登りしてんスか？」
「おや？貴方はか弱い乙女が重い荷物を持って山を登ろうとしているのに、助けようという気持ちが微塵にもないのですか？」

「・・・んじゃ、その背負ってる荷物も渡して下さいよ」

「それはできません。この中には交信のために必要な氷結界の鏡が入っているんです。それを部外者である貴方に渡す事はできません。」

「はいはい。そーですかい・・・」

「なんで嫌そうな顔をしているのですか？嫌なら嫌で下山してもらっても構いませんよ？」

・・・来なかったら舞姫にある事ない事言いふらしてやるとか言って脅迫してきたのに、それをあろうことか“か弱い乙女”と表現するのかねこのお方は・・・

「・・・・・・（ガスッ！！」

「っ～～～～～！！！」

ちょ、この人どさくさにまぎれて人の足の指先踏ん付けてきやがった！？

しかも、的確に小指を狙って攻撃してきやがったぁぁぁぁ！！

「どうしたのですか？突然足を抑えて・・・」

「だ・れ・の・せ・い・だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「あ、山頂付近でそんな大声を出すと・・・」

キィィィィン！！！！てきたァァァァァァァァァァァ！！！
あ、頭がぁぁぁぁぁぁ！！！

頭を抑えてその場に座り込む蒼痲をやれやれ・・・と言った感じの目で見つめる交霊師は心底呆れていた

「まったく・・・山を登っているのですから、少しは常識を持って行動して下さい。」

「・・・空気も薄くなってんのにピンピンしてるあんたに言われたくないぃ・・・」

もうやだ帰りたい・・・と心の奥で何十回もエコーが響き、それでもこの人について行かなければ自分の地位（主に舞姫からの視線）等がとんでもないことになりそうなので、それでもと心を振るい立たせて立ちあがる蒼痲を、誰が責めようか・・・

「はぁ・・・もうすぐです。もうすぐ祠につきますよ」

「もうすぐって、どのあたり・・・？」

「もうすぐそこに見えているではないですか」

交霊師が指差した場所には小さな祠がぽつんと鎮座していた
ようやく荷物持ち（パシリ）が終わるのかと考えると、心が何とも言えない幸福感を与えてくれた

「はぁ・・・やっと終わったぁ・・・」

「情けないですねぇ・・・仮にも貴方は救世主になれるかもしれな

いというお告げを貰ったではないですか。この程度の事でへこたれていては困ります」

「いや、体力的には大丈夫なんだけど精神的にはキツイんだよ。どっかの誰かさんのせいでね」

「そうですか。では、そのどこかの誰かさんに恨みつらみをぶつけてみてはいかがですか？」

蒼痲を見てニコニコと笑っている交霊師。

しかし、その目だけは笑っておらず思わず「あれ？死フラなんていつ立てたっけ？」と心の奥底で小さく呟く蒼痲の姿があったとか

「い、いえ！別に何でもないので、気にしないでください！じゃ、僕はこの神聖な山から下山させていただきます大佐ぁ！」

「別に、私は大佐と呼ばれるほどの地位ではないんですけど・・・」

んな細けぇこたぁいいんだよ！！と心の中で叫びながらも祠の近くに荷物を置いて、そのまま下山の体勢に入った蒼痲は、来た道を真っ直ぐ戻ろうと“限りなく速さを求めたまったく無駄のない無駄で無駄な動き（早歩き）”を使い、その場から脱出することにした

ちなみに、“限りなく速さを求めた洗練されたまったく無駄のない無駄で無駄な動き（早歩き）”は一年に夏と冬にしか行われない祭事で培った能力の事である。

「・・・まさかこんなトコで役立つなんてなぁ・・・」

「危険ですので走らないでくださーい！」とか警備員に言われても

「早歩きです！！」って普通に答えれるしな・・・うん。どうでもいいわ
さぁて・・・太陽はまだ昇ってるし、後の残り時間はどうやって過ごそうかな・・・？

「・・・やれやれ・・・」

祠の前でため息をつく交霊師
その視線は先ほど居た蒼痲の場所をじっと見つめていた

「・・・・・・さて、始めましょう」

そういって、交霊師は氷結界の鏡の鏡を取り出し、静かに目を閉じた
そして、小さく呟くように念じた

「氷結界に封印されし龍神さま・・・どうか、我が声に答えてください・・・」

じっと念じ・・・そして交信を待つ・・・
最近は、グングニール様やブリューナク様との交信が多い。
だが、ここ数ヶ月トリシューラ様からの交信が途絶えてしまった。
理由は分かる訳もなく、ただただ交信をし続ける毎日・・・

『来たか・・・遂に・・・遂に・・・！！』

「ッ！？ト、トリシューラ様！？」
突然のトリシューラ様からの交信。
だが、微かだが氷結界の龍神達を封印しているこの山が揺れた気がした

「ん？」
足元が揺れた気がして、ふとその場に立ち止まり辺りを見渡した
（地震か・・・？）
別段、揺れた感じはしないが・・・だが、嫌な予感がするのは確かだ
「・・・あんましこの能力使うのは好きじゃないんだけど・・・」
蒼痲はゆっくり力を解放して、エクシアモード（蒼痲命名）となった
ゆっくりと浮遊して、その山から離れようと試みたが・・・

「・・・ん？はぁッ！？」

先ほどの祠のあった辺りから氷の塊が突き出ている事に気付き、空中で立ち止まったのだ

「ちょ、あそこには交霊師がいんだぞ！？だあぁ！チクショウ！！！」

ブースターに力を込めて、凄いスピードで空を飛ぶ蒼痲
山頂に向かい、取り残されているであろう交霊師を助け出すためにだ

「きゃあああああああああああ！！」

山頂から放り出されるように落下を始める交霊師
それをいち早く発見した蒼痲は、さらにブースターに力を込めた

「交霊師さぁぁぁぁん！！」

手を伸ばし、交霊師の手を取る蒼痲
そして、抱き寄せるように身体を抱えると、交霊師の息は少し荒れていて、山頂を見つめていた
交霊師の目線を追うように山頂を見上げると・・・

「なんだ・・・・ありゃ・・・・！？」

山頂から突き出していた氷の塊はまるで槍のように尖っていて、突然二つに割れたかと思うとまるで口であるかのように白い息を吐いた
山全体が地震で揺れているのか、どんどん雪が雪崩の如く山を伝っ

て地面に向かって行った

「ちょ、ま、待てよ！？下にゃ里があるんだぞ！？」

抱きかかえている交霊師を見ると、緊張の糸が切れたのか蒼痲の手の中で気絶していた

ふと殺気のような物を感じて上を見ると先ほど自分が見た祠が自分達目がけて落ちていた

「っと、あぶねぇ！！」

交霊師を抱えながら避け、どこか安全な場所がないかを確認した

だが、蒼痲は気が付いてしまった

雪崩が里の方へと向かって流れている。

小規模な雪崩に見えるかもしれないが、未だに山は揺れており、まるで内側から何かが溢れ出るかのようにブルブルと小刻みに震えているようにも見えた

「くそっ・・・背に腹は代えられねぇか！！」

交霊師と里の皆の命を守るために、一度村に戻る事を決意した蒼痲はブースターに力を込めた

後ろを振り向けば、まだ山が揺れており、ギリッと歯軋りをする蒼痲が居た

（ここにゃトリシューラ達が封印されてるつってたけど・・・今は皆の命の方が大事なんだよ！！）

蒼痲は一度睨むように山頂を見つめると、ブースターに力を込めて氷結界の里へと向かった

なるべく、氷結界への被害を少なくするため・・・そして・・・歴戦の猛者達である氷結界の虎将に協力を仰ぐためである
だが、制御できているとは言えエクシアのスピードでは雪崩を追い越す事は出来ない
このままでは、確実に里に被害が出てしまう・・・！！

「使うっきゃ・・・ねぇよな！！」

蒼痲がそう叫ぶと、エクシアの装甲が赤く発光を始めた
そして、白を基準とした装甲が真っ赤に染まった瞬間、蒼痲はその場からすでに居なくなっていた

「――――――――――――ッ！！！」

蒼痲は氷結界の里の入口付近に居た
だが、エクシアの能力は解除されていて、氷結界の里の門にもたれかかるように倒れていた

「いっつつ・・・だから、トランザムは使いたくねぇんだっつの・・・！！」

そう、蒼痲はトランザムの能力を制御出来ていないのだ。
だが、この能力の凄さには驚きである。
なんといっても、スピードが通常の三倍以上のスピードで動く事も出来るし、攻撃力も飛躍的にアップしているのだ
しかし、強すぎる力には代償があるのだ。蒼痲はトランザムになることはできるが、トランザムが解けてしまえば変身は解けてしまうし、体中に痛みが走るのだ。
簡単に言ってしまえば、諸刃の剣なのだ

「でも、戻って来れたから・・・いっか」

体中が悲鳴を上げているが、蒼痲は無理矢理立ち上がり、自分にもたれかかるように倒れている交霊師を抱えて、ゆっくりと里の中に足を踏み入れた

里に入った瞬間、村人たちの目線は全て氷結界の山に向けられており、その中に見慣れたツインテールを見つける事が出来た

「舞姫ッ・・・」

「そ、蒼痲!?な、なんで交霊師と一緒なのよ!?」

バスケットのような物に果物を沢山入れているにも関わらず、こちらに駆けよってくる舞姫

だが、蒼痲は舞姫が駆け寄る前によろけてしまい、転びそうになってしまった

「交霊師様を抱えたまま倒れる気か貴様はっ」

「お、御庭番・・・悪ぃな・・・」

だが、蒼痲の肩を取り、倒れるのを支えてくれた御庭番のお陰で蒼痲は倒れずに済んだ

両足に力を込めて蒼痲は立ちあがり、抱えている交霊師を御庭番に手渡すと、ゆっくりと瞳を閉じた

「御庭番・・・頼みがある。里の皆を出来るだけ雪崩の被害が出ない場所まで避難させてくれ」

「貴様はどうするつもりだ！？」

「・・・ちょっくら雪崩止めてくるぁ」

「正気か！？あの山が揺れるということは・・・確実にトリシューラ様の封印が解けかけている証拠なのだぞ！？」

「だから・・・だよ。俺が行かなきゃ・・・いけねぇ気がするんだよ・・・！！」

傷む体に鞭打ってエクシアに変身した蒼痲。
だが、やはりよろけそうになってしまい、もう一度倒れそうになってしまった

「貴様が馬鹿かっ！！」

だが、御庭番がもう一度身体を支えてくれたため蒼痲は倒れずに済んだのだ
見るからに御庭番はこちらを心配してくれている顔をしていた

「あぁ・・・大馬鹿野郎さ。今さら気づくなデコ助」

「デコ助ッ」

デコ助と言われたのが腹立たしいのか御庭番は拳を握りしめプルプルと震えていた
あ、やっちまったなー・・・やっべ、殴られるかも・・・

「こんのアホがぁぁぁぁ！！」

「ぬぉう！？」

殴られる事を覚悟したのか、蒼痲は目を瞑った

だが、拳は蒼痲に届く事はなく・・・代わりに、胸のあたりに何かが当たる感触がした

「・・・俺がいつも携帯してる秘薬をくれてやる。さっさと行って来い」

「いいのか？全部使い切るかもしれねぇぞ？」

「構わん。それに、使い切れるほどお前の胃は丈夫ではないだろう？」

「・・・違ぇねぇ。」

秘薬を手に取り、まるで確かめ合うかのように御庭番を見つめたすると、御庭番は拳を突き出すように蒼痲に向けた

「約束しろ。俺は絶対にこの里を守る。お前はトリシューラ様の暴走を止めろ」

「・・・お前が俺の事“お前”って言うの初めてじゃねぇか？」

「もしも、この約束が守れたら、貴様を氷結界の一員として見てやろう」

・・・正直どうでもいいんだけどなぁ・・・

つまりは、仲間として見てやるって言いたいのか？まぁ、どうでもいいけど・・・

「・・・わーったよ。その代わり死ぬなよ？」

「誰に物を言っている。俺は一度した約束は絶対に守る。それだけは保障しよう」

「俺と同じだな。・・・頼むぜ」

「あぁ！！まかせろ！！！」

御庭番は俺に背を向けて走り出した。
蒼痲も決意を胸に、トリシューラの封印されている山に飛び立とうとした時だった

「・・・ん？」

エクシアの装甲から体温のように程良い温度を感じた
後ろを振り返ると、舞姫が蒼痲の右手をぎゅっと握っていた

「あんた・・・どこ行こうとしてるのよ？」

「・・・あの山だよ。」

「ふざけんじゃないわよ！！あんた、何ふざけたこと言ってるのよ！？あんたがトリシューラ様達に勝てるわけがないでしょ！？」

「でも・・・行かなくちゃ」

自分が行かなければ・・・もっと被害が増えるかもしれないのだ。
ここで俺が動かなければ・・・誰かが傷つくのだ。

「行かなくちゃじゃないわよ！！ここは、ドゥローレン様達に任せてあんたは休みなさい！！あんた、ボロボロなのよ！？」

「舞姫、何焦ってんだよ？別に俺は死にに行く訳じゃないんだぞ？」

「でも死んじゃうかもしれないのよ！？」

「だけど、俺が行かなかったらもっと人が死ぬかもしれないだろ？」

「駄目っ！！絶対駄目！！あんたが居なくなったら・・・私は・・・私はっ・・・！！」

舞姫が突然抱きついて来た。
そして、絶対に離さないという意志の表れなのか、ぎゅっと力を込めて抱きしめてくれた
・・・舞姫は泣いていた。それはとても辛そうに・・・そして、悲しそうに・・・

「あのなぁ・・・舞姫。毎日修業してるのは、俺が地獄を切り開く刃になるためだろ？だから、毎日辛い修業でも必死に立ち向かってるんだろ？」

「でも・・・でもぉっ！！あんたは人間よ！？世界を滅ぼす悪魔にもなれるトリシュ―ラ様を倒せるわけないでしょ！？馬鹿なことしないでよっ・・・」

「・・・舞姫。約束するよ」

そういって、蒼痲は舞姫の肩を掴み距離を取った

そして右手の小指を舞姫に向け、微笑んだ

「絶対帰ってくるから、美味い飯作って待っててくれよ。」

「・・・絶対よ。絶対の絶対の絶対だからねっ！！帰って来なかったら死刑だからね！！」

舞姫は涙を流しながら小指を絡めてきた

そして、約束の契りを結び、舞姫は離れてくれた

「あぁ、絶対帰ってくるよ。・・・・いってくる！！」

「絶対！！ぜーーーーったい帰ってきなさいよ！！馬鹿蒼痴ぁ！！」

「あぁ！！絶対帰る！！！」

さて・・・舞姫と御庭番に交わした約束を守るために、絶対生きて帰ってきますか！！！

三十九章　暴走龍　中編

「オラオラオラオラァァァァァァァ！！！」

里へと向かっている雪崩を食い止めるために木を薙ぎ倒し、バリケードのように横に敷き詰めた
これで少しは弱まって里への被害を軽減出来るはずだ。

「一応念のために・・・ドラララララララララララァァァァァァ！！！！」

一度空中に浮遊し、今現在のトップスピードで右手のＧＮソードを展開して何度も地面を抉るように切りつけた
そして、２メートルくらいの大きな切れ目を作った
流れの勢いを削ぐと同時に、これで雪がすっぽりこの切れ目に入ってくれるはずだ
え？もしかしてオラオラですか？・・・ジョジョ愛読者ですが何か？

「・・・うっし！これで雪崩は大丈夫かな？」

流石に右手の振りすぎで右手がピリピリとしびれるような感覚を放っていた
だが・・・まだ終わったわけではない

「あっ・・・」

山を見つめると、祠があった辺りで何か虎のような生き物の咆哮が聞こえた
どうやらドゥローレンやガンターラ達は里の危機をいち早く察知し

て里を飛び出したようだ

「・・・俺も行かなきゃな」

だけど山は未だに揺れていた。それほどトリシューラの封印は厳重であったのか、たびたび聞こえる甲高い鳴き声はまるで何かを叫ぼうと必死に伝えようとする赤子のような声に似ていた

一刻も早くあそこに辿り着かなければ・・・

「・・・ん？なんだこりゃ？」

エクシアの装備に違和感を感じた蒼痲はその違和感のある場所を調べた

そこには数珠のようなネックレスが引っ掛かっていた

「・・・これって、交霊師のだよな？」

このネックレスには身に覚えがある

確か、交霊師が肌身離さず持っていた物だ。見間違えるはずもない。

「・・・まぁ、これが終わったら届けるか・・・って、うぉ！？」

飛び立とうとした瞬間、地面が大きく揺れた

あまりにも突然の出来事だったため、よろめいてしまったがバリケードに張り付いてなんとか持ちこたえる事が出来た

山の方を見ると何かの足が突き出たと思ったら、そこから手やら顔が突き抜けるように出た

トリシューラの復活が解けたのか！？と心の中で驚くも、その姿は氷結界の山の姿よりも小さいが、小さい山程度の大きさを誇る竜が居た

「アイツぁ・・・ブリューナク！？」

結晶のような薄い青色の輝きを放つ竜が甲高い声を上げて、山から出てきた
その龍の名はブリューナク。氷結界に封印されている龍の一体でもある。

「ど、どういう事だ・・・？」

思考を重ね、ブリューナクが現れた理由を考えた
すると、驚くほど簡単にブリューナクが現れた理由が思い浮かんだ

「封印が・・・解けた・・・！？」

まずい事になってしまったのかもしれない。
一番最初に封印が解けたブリューナクが暴れてしまった場合、トリシューラと戦うスタミナを失ってしまうかもしれない。
何せ相手は氷結界に封印された龍なのだ。本気を出さなければ負けてしまうかもしれない・・・

「・・・あれ？」

だが、ブリューナクは暴れるそぶりは見せず、自分が封印されていた巨大な山へと向き直ると口から氷で出来た光線（？）を吐いていた
どうやら、ブリューナクは自ら封印を解いてトリシューラの暴走を止めようとしているのだ。

「な、なんだ・・・味方か・・・って、うぉう！？」

もう一度地面が大きく揺れたかと思ったら、今度は山の裏側の方から巨大な翼が現れた
まさかトリシューラの・・・・！？と思ったが、翼の形に違和感を感じたので、睨むように凝視すると、その翼の持ち主が空へと飛び立った

その姿は青い結晶のように薄い輝きを放っていて、その結晶の中を紅い光が薄く線を描くように流れていた
瞳は紅蓮のように真っ赤な赤。一度甲高い鳴き声をあげたと思ったら、ブリューナクの横に着地し、冷気の籠った光線（もうどう形容していいのか分からん）を吐き出し、ブリューナクと共に山を凍らせようと必死になっていた

あの龍の名はグングニール
氷結界に封印された二体目の龍だ。

「ということは・・・アイツ等は見たか何だよな！？っしゃあ！これほど心強い奴らは居ねぇぜ！！」

蒼痲のテンションがどんどん上がって来た
いや、だって氷結界の虎将とか、ブリューナクとかの力を合わせてトリシューラの暴走を止めるんだぜ？そりゃ、テンション上がらない方がおかしい。

「よっし、俺も行くか！！」

蒼痲も山へ目指し、助走をつけて空を飛んだ

それにしても、なぜ今になってトリシューラの封印が解けてしまっ

たのだろうか・・・
確か、デュエルターミナルではトリシューラは封印を解いたのはいいけど、なんか勝手に封印されてしまったんだっけ？
うーん・・・デュエルターミナルってストーリーの説明が入った画面に入るの長いんだよなぁ・・・ったく、ストーリー気にしてる人だっているんだからもうちょっと早く表示されてもいいよなまったく・・・

「・・・ん？」

山に向かう途中で森の中から違和感を感じたため、その飛ぶのを中断し森を見つめた

『どこに行くのですか破術師！！』

『あの山です！！あの山には、交霊師姉さまが居るんです！！』

『ですが雪崩がこちらに向かっているのですよ！！』

『僕の力があれば大丈夫です！！ですから姉さまは里にお帰り下さい！！』

片方はどこかで聞いた事のある声だった
山の方を見ると、雪崩はすでに山から降りてしまい、森の端を薙ぎ倒し里の方へと向かっていた

ここって・・・山の近くだよな？雪崩の勢いからして、あと数分で声のする辺りに雪崩が到達するだろう・・・・・・って！！

「冷静に分析してる場合じゃねぇだろ俺！！」

急いで声のする方へと飛び、雪崩が来ている事を伝えなければ！！
つか、なんで里から飛び出してんだよこいつらは！！

「おい！！雪崩がすぐそこまで来てるぞ！！急いで避難しろ・・・
って、あれ？」

声のした方に着地すると、そこには封魔団と見た事のない少年（少女？）が居た
えぇっと・・・確か、この少年（少女？）の名前は・・・えーっと・・・なんだっけ？
なんだっけ・・・・・？

「封魔団だよな？なーんでこんなとこに居るんだよ・・・というか、そっちの少年だれ？」

「そ、蒼痲さん！！蒼痲さんからも言って下さい！！」

封魔団はその少年（少女？）の手を取って山への進行を停止させていた
えぇーっと・・・なんていうんだっけ？こういう少年にも少女にも形容しがたい子の事の総称
・・・あー・・・

「男の娘（おとこのこ）？」

「・・・・お前が余所者か」

睨むように男の娘が俺を睨んできた

ちょ、俺の方が背高いから上目遣いしてるようにしか見えない件について・・・！！

「余所者だなんて、失礼でしょ破術師！！」

「ですが姉さま！！こんな奴が世界を救う器を持っているとは思えないのです！！」

「破術師！！貴方はまだ言いますか！！！」

「いや、どうでもいいけど雪崩がこっちに来てるんだってヴぁ！！話聞けゴルァ！！」

なんというか、カオスな空気が辺りを埋め尽くしているのしか分からなかった

とりあえず、一生懸命逃げろと言ってる蒼痲と、一緒に戻ろうと破術師に言い聞かせる封魔団

そして、二人の言う事をまったく聞かない破術師

だが、こうしている間にも雪崩はこちらへと向かってきており、蒼痲はどうしたものかと一度考えた

一つだけ、今の状況のままで雪崩を防ぐ方法がある。

それは、トランザムをもう一度使う事。

これがこの状況を打破し、そして、雪崩を食い止める一番有効な手段である。

しかし、それには一つだけ条件がある・・・

「・・・・・・・」

蒼痲は俯き、真剣に考え始めた
当たり前だ。もう一度制御出来ていないトランザムを使うのだ。
身体にとてつもない負担をかける事にもなるし、トリシューラと戦うだけの力を失う事になるのだ

（でも・・・今の状況は流石にまずいなぁ・・・）

“里の事は御庭番に任せてあるので大丈夫”と心で言い聞かせる半面、蒼痲は不安だったのだ
里を抜け出して虎将達の援護に向かおうと思った人も少なからずいたはずだ。
だが、御庭番がきっとひきとめていると信じていたのだが、御庭番の注意の行き届いていないとは思いもよらなかったのだ

「・・・破術師、里に戻れ。今ならまだ間に合うかもしれない。急いで避難するんだ！」

だが、蒼痲は怖かったのだ。
どんどんと“人間”というカテゴリーからかけ離れて行く自分の存在が
エクシアの力を発動するごとに分かってしまうのだ。
自分がどんどんズレていることに。
・・・確かに、強くなるのは嬉しい。助けを求める手を取る事ができるかもしれないから
だが・・・そこまでして自分が強くなろうとは思えなかった。
別に俺は善人じゃない。誰かが傷つくのは仕方がない事だと思う。
だけど、それを自己犠牲をしてまでも救いたいとは思えないのだ

「何をいう！！余所者に貸す耳など持たぬ！！」

「いいから早くしろ！第一、お前が探しに行こうとしてる交霊師はもうあの山にゃ居ねぇよ！！」

「ッ！？どういうことだ！？」

「交霊師は俺と一緒に里に帰ったよ！気絶してたし、仕方なかったんだよ！だからお前が言っても交霊師は居ねぇよ！」

「そ、そんなこと知るものか！第一、貴様がいつ交霊師姉さまを里に――――」

「これ見てそれ言えるのかよ！？」

「――――――ッ！？それは、交霊師姉さまの！！」

蒼痲が取りだしたのは交霊師の首にかかっていたネックレスを破術師に見せた

すると破術師は驚き言葉を失った

「これで分かったろ！だから早く避難しろ！！――――――――げっ！？」

蒼痲が破術師を説得し終えた所で突然自分の周りに広がる木々がバキボキという音を立てて折れ始めた

蒼痲は何かを悟ったのか、封魔団と破術師を抱き寄せ、そのまま地面を蹴った

「きゃあああ！？」

「うぉ！？な、何をする余所者！！――――――！？」

突然抱き寄せられて驚く封魔団と破術師

だが、先ほど自分達の居た場所を見つめるとそこは雪崩によって失われ、木々が薙ぎ倒されながら雪崩が自分達の里に向かって前進していた

「これで分かったろ・・・俺が居なかったら、お前ら二人は雪崩に流されてたんだぞ。」

「わ、私は・・・き、貴様に助けられずとも能力を使って雪崩くらい・・・雪崩くらいっ・・・！！」

破術師が悔しそうに蒼痲の手を握った

「・・・仮に出来たなら、お前は助かっただろうな。でも、お前の事を心配してきた封魔団は完全の無防備。お前は助かって、封魔団は雪崩に流される事になったな。」

「わた・・・しはぁッ・・・！！」

「・・・無理すんな。出来ない事は出来ないんだ。そうやって割り切らなきゃ生きてけないだろ？ほら、安全なトコまで運んでやるから少し黙ってな。舌噛むぞ？」

蒼痲はゆっくりと元居た場所へと戻り、バリケードの後ろの方まで封魔団達を下ろした

幸い、ここまでの距離ならバリケードまでそこまで距離は無いので、難無く封魔団達を運ぶ事が出来た

案の定バリケードが雪崩をせき止めていて、雪崩は里へと向かう事

は阻止する事ができたようだ

「ほら。ついたぞ」

封魔団と破術師を下ろし、蒼痲はもう一度氷結界の山を見据えた
揺れは収まり、氷結界の龍達が光線を放つのを止め、静かに氷結界の山を見つめていた

「封印が・・・完了したのか・・・？」

「分かりません・・・でも、まだ何かあるかもしれません」

封魔団が蒼痲の横に立ち、静かに氷結界の山を見据えていた
だが、突然蒼痲の右手に違和感が現れた

（なんだろう・・・この感じ・・・なんか、ムズムズするような・・・）

試しに右手を開いたり閉じたりを繰り返し、違和感を消そうとするが何も起きない
だがこの感じは間違いない・・・嫌な感じだ。

「封魔団、破術師。今から氷結界の山に行ってくるから、ちゃんと避難しろよ？里じゃ御庭番と舞姫が頑張ってるから、手伝いにいってくれると嬉しい。」

「分かりました。蒼痲さん・・・ご武運を」

「いや、別に戦に行くんじゃないんだけど・・・」

いや、ご武運をとか言われたら死にに行くみたいで嫌じゃん？
だったら、生きて帰ってきてくださいって言って欲しいなーなんて思ったり思わなかったり
・・・てか、ご武運をって生きて帰ってきてくださいってことだっけ？

「んじゃ、行ってくるわ！」

「待て余所者！！」

「うぉっほう！？」

地面を蹴って空に飛び立とうと思ったら破術師が蒼痲の足に飛び付き、そのまま一緒に空へと飛び立ってしまった

「ちょ、破術師！？なんで！？」

「貴様に聞きたい事がある！どうして・・・どうして貴様はそれほどの力を持っているというのに、他人に優しくなれる！？」

「は、はぁ？」

「風水師姉さまが強すぎる能力を身につけてしまったが為に冷たくなられてしまった・・・なのに・・・なのに！！なぜ貴様はそうやって他人に優しくできる！？自分のことで精一杯ではないのか！？」

・・・聞いた事がある。風水師は数年前までは普通の氷結界の里で産まれた女の子だったのだ。
だが、ワームの侵攻によって、望んでもない力が彼女の身に宿った

らしい
突然手に入れてしまった大きすぎる力・・・それに戸惑いながらも、今は氷結界の里で極力人を避けながらも暮らしているそうだ。
自分を産んでくれた両親や妹を遠ざけてまで、彼女は一人で居たがるそうだ

「・・・お前、風水師の・・・妹？」

「・・・そうじゃ。私は、氷結界の風水師の妹・・・氷結界の破術師だ」

「なるほどねぇ・・・確かに、俺は自分の事で精一杯だよ？この力だって、完全に制御できてるってわけじゃないし」

「ではなぜ！？何故優しくなれる！？答えろ！！」

「・・・精一杯だからこそ、他の人を安心させたいんだよ。どんなに力に押し潰されそうになっても、頑張りたいんだよ。」

「それだけ・・・なのか・・・？」

「本当はそれだけじゃないさ。怖いさ。自分がどんどん自分じゃなくなってくみたいでな」

蒼痲はゆっくりと降下を始め、足に掴まっている破術師を抱きあげ、ゆっくりと大地に下ろした

「では・・・なぜ・・・なぜ戦える・・・？」

「・・・俺が戦わなきゃ、俺じゃない他の誰かが傷つくからさ」

そう言い残し、蒼痲は飛び立った

終わらない自問自答が自分を縛りつけ、離さない・・・

だが、それでも自分は戦わなければならない・・・

『ねぇ蒼・・・“愛”ってなんなのぉ・・・？なんで・・・お母さんもお父さんも喧嘩するの・・・？なんで・・・私達の事なんて考えないのぉ・・・？』

（ッ！？）

頭の中によぎる嫌な言葉

その言葉をいったのはこの世にたった一人しかいない姉・・・武田（たけ）華夜（だかや）の言葉だった

自分がまだ子供だった頃、父と母の喧嘩を目の当たりにして、絶望と嫌悪感に押し潰された姉からの言葉・・・

その言葉が、今もなお自分を縛りつけていた

ぽたぽたと流れる涙、必死に押し潰そうとしている声・・・

ぐちゃぐちゃになった顔で、自分を見つめる瞳・・・

全てが蒼痲の心に残っていて、自分を縛りつけていた

あの時・・・自分に姉への言葉があっただろうか？姉の涙をぬぐう事はできたのだろうか？

・・・何もできなかった。自分も辛くて、なんともいえない感覚に囚われ、何もできなかったのだ

あの時の自分がもっと強ければ・・・姉は泣かなかったのかもしれない

「あの時、あぁしてれば」「あれをやれていたら」なんて何度も思ったし、考えた。
だけど現実は“もしも”なんて理想や空想を認めてはくれない
でも・・・今、自分に出来得ることはやる。
姉の涙と、自分の弱さにそう誓ったのだ

「・・・さぁて！今行くぜぇぇ！！」

蒼痲は太陽炉に力を込め、氷結界の山を目指した

山がどんどん近付くに連れ、その姿を現す・・・
遠くで見ていた時には気付く事が出来なかったが、雪の覆われていない氷結界の山は、とても大きな岩肌の中から氷が顔を出しており、非常に幻想的な光景を生み出していた

「なぁッ！？」

だが、近づくに連れて分かった事がある。
岩肌の中に輝く氷の中に、巨大な影があるという事に
その姿は影であるにもかかわらず、禍々しい威圧感と殺気をさらけ出しており、普通の人間が近づけば殺気にあてられて気を失うかもしれない

「なんつぅデカさだよ・・・！！」

だが、蒼痲は山頂を目指しひたすら飛んでいた

あそこにまだ氷結界の虎将やドゥローレンが居れば、封印が完了したのか、そうでないのかが分かる。
心の中では必死に大丈夫と連呼するも、どうしても心は落ちつかなかった

『キュルエェェェェェ！？』

「はぁッ！？」

突然ブリューナクが叫び声にも似た声を上げたかと思えば、ブリューナクの首の横を真っ黒な波動が貫き言葉を失った
すると、突然ブリューナクとグングニールを捕縛するように、龍達の足元から黒い鎖のような物がブリューナクとグングニールの動きを封じた

「な、なんだ！？うぉ！？」

今度は闇の波動がこちらの方に向かって放たれた
もう少しで山頂に到着するというのに、突然の襲撃。
だが、蒼痲は諦めることなく、そのまま山頂に向かった

後少し・・・！！後少しで山頂なんだ・・・！！！

「なっ！？」

ようやく山頂にたどり着くと、そこには氷結界の虎将達が血を流し

ながら横たわっている姿が目に入った
そして、次に目に入ったのは自分と同年代であろう女の子がドゥローレンを右手だけで制し、そのまま氷結界の山に叩きつける姿だった
その姿には見覚えがあった
冬真っ盛りの気温であるにもかかわらず、少しだけ薄着で、魚のような装飾が施されたとんがり帽子を被った少女だった
あの姿は・・・・・！！
「エリアル！？」
「・・・また貴様か・・・・」
少女――――――リチュア・エリアルが振り向き様に蒼痲に攻撃を放った
「ふっ！！」
だが、小さな闇の波動だったためシールドで対処できると判断した蒼痲はシールドで対処した
「おいおい、挨拶の魔法ってこれのことか？こんな挨拶誰も望んでねぇよ」
「・・・ふん。もう用は済んだ。私はここで引きかえらせて貰おう」
「おい待てよ。」
闇の回廊のような黒い扉を開こうと手を上げたエリアルを蒼痲が止

めた

「・・・なんだ？」

「なんだじゃねぇよ。それはエリアルの身体だ。今すぐあの娘に返せッ！！！」

蒼痲が山肌を蹴り、エリアルに接近し触れようとしたがエリアルは舞うかのように空中を回転し、祠があった辺りで着地した

「・・・計画変更だ。トリシューラを捕獲するというのは止めだ」

そっと地面に手をつき、闇の波動を山に流し込むエリアル

すると、山全体が大きく揺れた

「このまま暴れさせて、ＡＯＪの設計図もろとも消し去ってやれ。頼んだぞ・・・トリシューラ」

そう言い残し、エリアルは闇の回廊に身を任せ消えた

だが山の揺れは依然として収まる気配がなく、揺れは先ほどよりも大きく揺れ始めた

「ちょちょちょ！？酔う！！酔うぅぅぅぅ！！！」

蒼痲は岩肌にしがみ付きながら叫んでいた

元々酔いやすい体質の蒼痲はこういう揺れなどにはめっぽう弱く、バスで十分座ってるだけでも吐きそうになるという残念体質をお持ちになられているのだ

簡単に言おう。車酔いもとい山酔いのおかげで蒼痲の胃の中の物が外に出ようとしているのだ

「ちょ、シャレなんないってぇぇぇぇ！！」

だが山の揺れが止まる訳もなく、彼は心の底からシャウトした

「え・・・？」

突然の浮遊感に蒼痲は驚きながらも、その原因を調べた

自分は今・・・空を飛んでいた

いや、正確には飛んでいるのではない。

自由落下に任せて空を落ちているだけだ。

だが、落ちる理由がいまいち見つからない・・・

ただ、分かる事は一つ・・・

「ガンターラ！？ライホウ、グルナード！！」

蒼痲の近くだが、氷結界の虎将達が何かに支えられるように蒼痲の後ろに横たわっていた

だが、横たわっているようなので、どこかに寄り掛かる所がある・・・というか、蒼痲の足に違和感があったのだ

なんというか・・・氷のような冷たい場所の上に居る感じだ。だが、不思議と温かい・・・不思議な場所の上に居た

『蒼痲！！大丈夫か！？』

「うぉぉ！？ドゥローレンか！？」

突然頭の中にドゥローレンの声が響き、蒼痲は驚き辺りを見渡した

だが、そこにドゥローレンの姿はなく、どこからか遠くから念波を

送っているものと考えたのだが――――

『大丈夫そうだな・・・どうだ？私の背中の上は？』

「せ、背中ぁ！？」

そう。ドゥローレンは遠くから念波を送っているのではなく、蒼痲のすぐ間下から声をかけて来たのだ

慌てて身を乗り出し、下をみるとドゥローレンが巨大化した姿で蒼痲達を心配そうに見つめていた

「あーうん。なんとかだいじょーぶだ。・・・でも」

蒼痲は静かに振り返った

蒼痲の目線の先には真っ二つに割れた氷結界の山が映った

氷結界の山の真ん中から、巨大な龍が雄叫びを上げながらゆっくりと氷結界の山から抜け出そうとしていた

「・・・封印、できなかったなぁ・・・」

『・・・気に病むことはない。仕方がないのだ・・・だが、今やれる事は一つ・・・』

「・・・なぁ、ドゥローレン。ちょっと聞いてくれるか？」

蒼痲は、小さく呟いた

『キュエエエエエエエエエエイ！！！』

トリシューラは目覚めた
とてつもなく長い時間を眠っていた感じがした。
封印されている間朦朧とする意識の中、何かをじっと待ち続けていた
一体どういう理由で待ち人を待っていたかは忘れてしまった。
だが、分かる事は一つ・・・

“破壊したい”
自分に立ちふさがる敵を
“壊したい”
平和を守るために
“戦いたい”
本能が赴くままに

『キュエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエイ！！！』

「ピーキャーうるせぇよ。」

だが、立ちふさがる者がいた
自分よりも遥かに小さく、握りつぶせそうなぐらいひ弱な存在が

だが・・・感じる。
自分と対等に渡り合えるであろう大きな力を

「さぁ、デカ物。目覚めて早々悪いけど、とっととお寝んねしてもらうぜ」

『キュアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』

ならば、全力で戦おう。
何を巻き込もうがどうでもいい。
ただひたすら、自分のやりたいように暴れる
理由はそれだけで十分だ

「・・・さぁ、お前の罪を・・・」

小さき存在が地面を蹴るように、体勢を低くした

「数えろ！！！」

その声と同時に頭の中で臨戦態勢に入り、敵を迎え撃つ

果たしてコイツは・・・私の待ち人なのだろうか？

そんな事はどうでもいい。

『戦エ！！人間！！！』

久々に人間の言葉を発した気がする
いや、久々なのだろうか？それすら忘れてしまった
だが、どうでもいい

これから行われる正真正銘の殺し合いに、言葉は不要だから・・・

四十章　暴走龍　後編（前書き）

どうも、リュウガです。
本当は後編でトリシューラとの攻防を終わらせようとしたのですが、
終わらす事が出来ず編まで延ばさせていただきます。

といっても、半分くらいはかき上がっているので、今月中もしくは、
来月の頭には完成させる気でいます。

では、最新話をどうぞ。

四十章　暴走龍　後編

『キュエエエエエエエエエ！！！』

「はっ！！おっせぇよ！！」

蒼痲は持ち前の素早さを活かしてトリシューラに接近し、右手のGNソードでトリシューラの翼や胴体を切りつけ、ダメージを与えるだが自分よりも遥かに大きいトリシューラにダメージを与えているとは思えない

『キュアアアアアア！！』

左の頭から放たれるブレス
それを巻きつくように回避し、トリシューラと向き合う
今度は右と中央の頭からブレスが放たれ、それを当たらないように回避する。
そして、隙ができればすかさずに接近し、攻撃。
それを何度も繰り返しているのだ。

「はっ！！こっちだよノロマ！！」

だが、やらないのとやるのではまったく違う。
僅かでも希望を残しているのなら、その僅かな希望に賭けてみよう
そう心で何度も言い聞かせ、蒼痲はトリシューラと対峙をする
山一つ分の大きさを誇るトリシューラから放たれる殺気は、
身も毛もよだつ物だ

今こうして強がりを言わなければ心が挫けそうになってしまうほど、
蒼痲は震えていた
きっと、ここが空でなければ足がガクガク震えて動けないだろう

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァァァァァ！！」

自分の出来る限りの最高速度で常に移動しトリシューラの隙を見つ
け次第に切りつけ、また離れる
よくあるヒット&アウェイの戦法だ
ここでチート能力持ってる奴ならほぼ一発でケリがつくんだろうな
ぁ・・・と心で思いつつ、蒼痲はもう一度トリシューラから離れた

「オラオラ！どうしたテメェ！あぁん？ビビってんのかゴルァ！！」

生存本能と闘争本能によって自分の言動が意味不明状態になってい
るのだが、まったく気にせず戦う蒼痲
例えるなら、極度の極限状態に陥った場合に自分で自己暗示をかけ
るように大きな声を出している人の事を想像してくれればいいだろう

『キュルルルルルアアァァァァァァァ！！！』

叫び声にも似た雄叫びをあげ、トリシューラは口からブレスを放った
それに巻き込まれないように渦を巻きながら蒼痲は避け、もう一度
トリシューラに近づき、GNソードでトリシューラの翼に攻撃をした
苦しそうな声をあげ、トリシューラは一度目を瞑った
その隙に素早く離れ、次の攻撃に備える蒼痲

「はっ！氷結界最古の龍もこの程度か！？こんなにちっぽけな人間
にすら勝てねぇのかゴルァァ！？」

突然、自分の前に氷で出来た川が出来たと思ったらその川は突然こちらに向かって迫って来たので緊急回避を行い避けた
トリシューラの方を見ると口から未だにブレスを吐き続けていた
そして後ろからの違和感に気付き大空を縦横無尽に飛び、こちらに向かってくるブレスを避ける
というか、首が三つあるのは卑怯だろ・・・つか、首の付け根どこ！？

「ふははは！！ライトで俺を照らすん、だァァァ！？」

ダンスグランプリには出れないのだが、何故かそんな事を口走った蒼痲
だがネタをパクった事にイラッと来たのか、トリシューラはブレスを蒼痲に向け続けた
蒼痲は必死に避け続け、ブレスが終わるのを待ち続けた

「ッ！？やっべぇ！？」

だが、蒼痲はある事に気付いた
自分へと向かって放たれたブレスを自分が避けてしまった場合、ブレスの行きつく先はどこなのか？
それは足し算をするかのように簡単に分かってしまった
ふとブレスの先を見つめると、行き先を失ったブレスは先ほど自分の作ったバリケードに辺り、木で出来たバリケードを一瞬で氷塊へと変えてしまった

「うげぇっ・・・って、不味いじゃん！！」

このまま自分が避け続けた場合、間違いなく下に居るであろう封魔

団や破術師に当たって・・・

『きゃあああああああああああ！！』

（・・・っ！？）

一瞬にして被害を受けた封魔団と破術師の映像が浮かんでしまった

マズイ・・・！！それだけは駄目だ！！

（自分の知り合いが俺の不注意で死んだなんて・・・シャレになるわきゃねぇだよ！！）

蒼痲は意を決してトリシューラを見つめた

そして、両足に力を込めて地面を蹴るように空中を駆けた

「うぉおおお

ひたすら切る
例え決定打となる攻撃ではないが、少しでもダメージを与えるためなら仕方がない
何せ、相手は山一つ分の大きさを持つ怪物
だが、例えどんなに大きくても弱点があるはず。古傷や大きな切り傷でもあればそこを集中して狙えばいいのだが、トリシューラには古傷のような物は見る事が出来ない
つまり、自分がその傷をつけてそこを集中的に狙わなければならないのだ

「ッ！？」

だが、それは一瞬の出来事だった
気がついたら蒼痲はトリシューラの右手で振り払われており、必死に体勢を立て直そうと空中でもがいている時だった
気がついたら自分の前にブレスが迫って来ていた

・・・ここまでか。

まるで力を使い果たした戦士のように静かに瞳を閉じた
俺は・・・誰も救えずに死んでしまうのか？
――――――違う。
俺は・・・絶対にエリアルを・・・

「助けるんだァァァァ！！！」

自分を守るように盾を前に突き出し、全力で力を込めた
例え生き残る可能性が限りなく０であっても、諦めない。
僅かな可能性があると言うなら、その可能性に自分の全てを賭ける。
例え自分の命が終わりを迎えようと・・・これから起こるであろう

災厄に立ち向かう勇気と共にここで果ててやる。
ふと気がつき、蒼痲は静かに瞳を閉じた
自分がここで終わってしまったら、カーム達はどうなるのだろうか？
蒼痲が見た映像（ヴィジョン）ではインヴェルズに負け、その命を終わらせてしまうのだ。
・・・もしも、自分が生き残らなかったら、彼女達は死んでしまうのだろうか？
・・・そんなこと、絶対にさせない
どんなに無理だの、諦めろだの言われようと関係ない。
俺は、エリアルやカームを助けるんだ！
例え・・・自分の命を生贄にしても、俺は絶対に彼女達を助ける！！
『・・・いいだろう。君に、力を授けよう。未来を切り開く・・・力をな』
（・・・誰・・・だ？）
突然、心の中に響いて来た声に耳を傾け、蒼痲はブレスに飲まれた

「こっちだ！！荷物は最低限に減らすんだぁ！！」
「早く避難しなさい！！」
氷結界の里で避難活動を続ける舞姫と御庭番
次々と避難を開始する氷結界の里の住人達
だが、舞姫は声を張り上げるのを止め、空を見つめた
「蒼痲・・・？」

不思議と彼の名前が出た
何故彼の事を呼んだのだろう？
舞姫の中には嫌な予感がよぎった。

突然現れた人間・・・天城蒼痲。
彼は自分の中にある巨大な能力に臆することなく、一人の女性として接してくれた人間
そして・・・私を救ってくれた恩人・・・

「・・・え？」

空からこちらに振ってくる影が見えた
その影は次第に大きくなり人の形ではなく、巨大な獣のような姿を現した

「あ、あれは・・・ドゥローレンさま！？」

ドゥローレンがゆっくりと地面に着地し、舞姫と御庭番を見据えた

『・・・・・・・』

ドゥローレンは何も言わず、背中を見せつけるように背を屈めた
そこには、ボロボロになった氷結界の虎将達の姿があった

「が、ガンターラ様！？ライホウ様に、グルナード様も！？」

「な、何があったんですか一体！？」

『・・・・・・・』

ドゥローレンは答えない。
沈黙を保ち続けたままゆっくりと空を見上げた
それに釣られるように舞姫と御庭番も空を見上げた

「あ、あれは！！」

御庭番が指差した先には、トリシューラのブレスを受けても空中に留まっている紅い物体だった
真っ赤に燃える炎のように輝くそれを見て、舞姫は小さく呟いた

「蒼痲・・・」

そう、その真っ赤な存在の正体は蒼痲だった

・・・あれ？俺ブレスに撃たれたんじゃなかったっけ？

「・・・・って、うぉ！？」

自分から放たれている真っ赤な光に驚き、その場で自分の身体を見回す蒼痲
薄らと布のように纏われた真っ赤の光。右手に装備されたＧＮソードの刀身も薄く紅く光っていた
背中の太陽炉から放たれる薄緑色の粒子は、いつにもまして多く放

たれており、真っ赤な身体(ボディ)と合わさり、最強に見える・・・らしい背中からはGNドライブが忙しく呼吸をしているように機械音を放っていた

「・・・あれ？」

おかしい。それが蒼痲の感想だった。
蒼痲はトランザムになることは出来るが、制御することは出来ないのだ。
今もこうやって普通に浮遊しているだけで体力の半分以上を持って行かれて、動かなくなるはずなのだが・・・

『・・・ようやく気付いたか』

突然、自分の脳内に響く第三者の声。
だがその声には聞き覚えがあるのだが、なぜか思い出す事が出来なかった
推定年齢は18から25歳の男性。・・・世間一般で言うイケボ。
そして、何か確信したかのように喋る口調・・・何より、どこかで見ているかのような視線。
その全てから、蒼痲は疑いの声で話しかけた

「あ、あんた誰なんだよ！？さっきも力を授けるとか」

『呑気に話している場合ではないだろう？第二波が来るぞ？』

「え！？うぉおおおお！？」

気がつけばトリシューラが怒り狂った瞳で蒼痲を映しており、今まさに第二波とも言えるブレスを放とうと口を開いていた

急いで横に回避しようと考えたのだが、先ほどの考えが頭によぎってしまい、蒼痲は避ける動作を止めた

『それでいい』

「は？」

だが、頭の中の第三者はそれが正しいと言いまるで瞳を瞑って腕を組んでいるかのように呟いた

何故だろう・・・この落ち着いた口調・・・そして、声。全てを救おうとする意志のような物を感じる・・・

こんな雰囲気を放つ者とは一度も会った事が無いはずなのだが・・・

『ＧＮソードを使え。』

「こいつを使うのか！？無茶！！・・・・」

「無茶言うなよ！」と叫ぼうとしたのだが、蒼痲は叫ぶのを止めた・・・きっと、こいつは俺の力を知っている。

勿論、信用している訳ではない。だが、何故かはわからないが気分が良いのだ。

そう・・・まるで、探し続けた人に会ったかのような、あの感覚

「どうすればいい？」

『簡単だ。ＧＮソードをありったけの力で振ればいい。それだけだ』

「それだけかよ。」

『信用してくれるのか？姿も見せない俺のことを』

「・・・まぁな。なんだか知らねぇけど、お前の事を信用したくなったんだよ。」

そして、蒼痲はゆっくりとGNソードを仕舞い、まるで鞘に刀を納めるように身を屈め、体勢を低くした
右肩が前に出るように、そして、いつでも足は踏み出す用意が出来るように
蒼痲の体勢はいわゆる「居合い切り」をするための体勢だ。蒼痲は実際一度も居合い切りをした事はない。
故に少々不格好かもしれないが、それでも蒼痲は構えた

そして・・・ゆっくりと瞳を閉じた

真っ暗な世界が蒼痲を包み込み、その真っ暗な世界で瞳を開けた
何もない・・・漆黒の闇。変わらない景色・・・暗闇の世界。

「・・・・・・」

『自分を信じろ。君は、世界を守る力を持っている・・・』

第三者はゆっくりと語りかけてきた

蒼痲はまるで人を探すように真っ暗な空間で右往左往と歩き出した
そして・・・見つけた。
ボロボロになったローブに身を包んだ青年を

「あんたか。俺の中に語りかけてきたのは」

「お前が、天城蒼痲か？」

蒼痲はゆっくりと青年に近づいた
高い・・・最初の感想がそれだった。
自分を見下ろす青年。見下ろされる自分。
今の光景を知らない人が見れば、きっと歳の離れた兄弟が久々に会ったのだろうと決めつけるだろう
・・・もっとも、ローブを身につけている兄貴なんて御免だけどなだが、その声に違和感を感じる蒼痲が居た。
先ほど自分に語りかけてきた青年の声とはまったく別人だったのだ。

「あんた・・・」

「それ以上先は言わなくていい」

手を前に出し、蒼痲の言おうとした事を止めた青年。
そして、青年はゆっくりとローブを外した

「は、はぁッ！！？」

そこに居たのは・・・ガンダム少年・・・いや、ガンダム青年だったいや、分かりにくい説明だったな。

名前を言おう。・・・・彼の名前は・・・・・

「せ、刹那・F・セイエイ!?」

「・・・違う。」

「は?」

いや、どっからどーみてもガンダムＯＯの主人公です、いやほんとありがとうございました。

「俺は・・・旅人だ。ありとあらゆる次元世界を旅する・・・」

「厨二病乙」

「・・・というのは冗談だ。」

いや、図星だったよね?明らか、俺が発言した途端、若干目ぇ反らしたよね?

だったらこっちむいて話せよ!!

「ロードからの使いだ。お前を見極め、本当にこの世界に留まらせていい者かと判断するために来た」

「ほぅ・・・経験が生きたな」

「お前どこの黄金の鉄の塊のナイトだ」

「幻想郷でお願いします。」

「いや、そういうんじゃなくて・・・だぁ！もう！！めんどくせぇ！！」

先ほどから冷静を装って話を進めようとしたけど、見事にカリスマブレイク（笑）されているアワレな黒髪雑魚がいた！！

「あぁもう！！とにかく！てめぇに異常がねぇかの判断しに来たんだよ！！分かったかこの野郎！！」

「そーなのかー」

「うぜぇｗｗｗこいつｗｗｗ」

「・・・で、俺に異常が無いかでこっちに来たんだろ？どうだい？俺の体は」

そういって、成長した身体を見せつけるように胸を張った

引きしまった筋肉、無駄のない筋肉、見ていて力を分けてもらえそうな筋肉・・・

って、筋肉しかねぇのかよ！！残念スキルもいいトコだな俺！！

「ちょっと触るぞ」

「キャッ！こっち来ないでよ変態（笑）」

「きめぇｗｗｗ」

男子のノリは大体こんな感じだ。

いや、だって普通に「今日の朝パンチラできたよ！！やったね蒼ちゃん！！」『おいやめろ』のレベルだからなぁ・・・

「・・・異常はないかもしれないが・・・軸がどんどんブレ始めているな・・・」

「でっていう」

「少しは自分の心配をしろ馬鹿野郎」

「でっていう」

「でっていう以外に言う事はないのか！？」

「でwwwっwwwwてwwwwいwwwwうwww」

「だから、他にねぇのか！？」

「救いはないね」

「救いはないんですか！？」

うん。主に俺的な意味で。

というか、ネタで会話のドッジボールが出来る時点で、結構アウトな分類にカテゴライズされるから、皆注意しろよ☆

ネタ話に花を咲かせている（一方的）間に、真っ暗だった空間は徐々に晴れて行きどこかの草原へと姿を変えた

「・・・時間だ」

「まて、まだ慌てるような時間じゃない」

「時間だ（ドスの効いた声）」

「ＭＡＴＴＥ！！ＭＡＴＴＥ！！」

「・・・一応、この事はロードに報告しておく。それと、これは警告だ。お前、とっとと戻った方がいいぞ。このままじゃ、お前過労で死ぬぞ。」

「・・・・・でっていう」

「お前なぁ・・・お前だって、誰もが笑顔で過ごせるハッピーエンドの方がいいだろ？このままじゃ、ハッピーエンドどころかゲームオーバーになってＩＦストーリーになったＤＴの世界はバットエンドを迎えるぞ？」

・・・ゲームオーバーか。

確かに、このままじゃ俺死ぬかもしれないなぁ・・・

よくよく考えたら、相手は人外だし規格外の強さを持ってる挙句にバグでチートになってる奴らだからなぁ・・・

どうやったら勝てんだろ？やっぱ、どっかのドラゴ○ボー○みたいに「さよなら天さん！！」みたいな感じに自爆か？いや、そしたら俺だけ死ぬフラグだよなぁ・・・

・・・バットエンドか・・・はっ！？もしかして！！

「なぁ、そのバットエンドって【このコメントはスキマ送りにされました】とか【このコメントは掘られました】とか【平家ＢＯＹ♂】とかある！？」

【】で書いてあるものはあまりにもハードな内容なので、不適切用

語として削除されたようです（投げやり）
・・・まぁ、あれだ。年に二回しか無いどこかの会場で一冊５００円以上で買い取される薄っぺらいバーコードの無い本の中でも結構ハードな部類のお話です。はい。

「まぁ、あるだろうな。というか、【救いはないんですか！？】とか【救いはないね】なんて、よくそんな濃い内容の話知ってるな・・・将来、お前みたいな奴が犯罪を起こすんだよなぁ」

「幼女暴行とか俺のシマじゃノーカンだから。つか、俺が特殊な性癖をお持ちだと思われるから、その発言やめれ」

「いや、意外とＭプレイに興味ありそうだよなお前」

「ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ」

「おっと、もう時間だな。」

患者（笑）の身体が徐々に光となって消え始めた。
それと同時に、草原も光に変わっていき今にも消えそうになっていた

「最後に一つ」

「は？」

命に問題はない不治の病をお持ちのお方がこっちを見ながらゆっくりと呟いた

「何かを得るためには、何かを犠牲にしなければならない。この意味、分かるよな？」

「どっかの錬金術師ですね。分かります」

「ちげぇよ！！って、あぁ！？時間g・・・」

何かを言おうとした厨二病患者（笑）はそのまま光となって消えるのであった。

～完～

「・・・って終わってねぇし！！つか、トリシューラんトコ戻せよ！！」

『だいじょーぶだって～、そこの道真っ直ぐ進めば元居た場所に戻れるからー。後、現実はまだ一秒も進んでないぞー』

「ここは精神と時の部屋か！？つか、道なんてさっきまでなかったぞ！？」

気がついたら真っ暗闇の中に居て、光が指し示す道以外何もない場所にぽつんと立っていた

一人でツッコみをいれながらも、ゆっくりと瞳を閉じて前へと歩み始めた

すると、少しずつ・・・少しずつ冷たい空気が身体を覆って行くのが分かった。

そして、身体に張り付くような殺気・・・今まさに迫ろうとしているブレスの音・・・

全てが・・・身体を通して伝わってくる・・・

「――――――――――――――！！」

瞳をカッ！！と見開き、目の前に迫るブレスを見据えた
右手に今ある全ての力を蓄積し・・・それを全力で――――――放つ！！！

「セイヤァァァ

朦朧とする意識の中でゆっくりと自分の放った刃を見据えた
刃はトリシューラに直撃しトリシューラはそのまま飛ぶ力を失ったのか、そのまま瞳を閉じ落下を始めていた

「はっ・・・ざまぁ・・・みろ・・・」

だが、急激に襲ってくる眠気に勝てる訳もなく、ドロドロと溶かされるように視界が悪くなっていく
あ、不味いな・・・本格的に眠くなってきた

無駄な抵抗と分かっていても、俺は飛び続けなくちゃいけないのだなんてったって、ここは地上から離れた空中・・・もう少し高く上がれば雲にだって届く場所。
そんな場所から落下したら、ミンチになるに決まっているからだ

「あ・・・」

背中から響いていた機械音が徐々に小さくなってきた
あ、だーめだこりゃ。GNドライブ、止まったかな？

「あああぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ〜〜〜」

間抜けな声とともに高度が下がっていく。
あぁ、こりゃ死んだかね？うーん・・・流石に、死んだら色々とまずいから生きてたいんだけどなぁ・・・また舞姫の手料理食いたいし・・・それに、帰ってこなかったら舞姫に怒られるんだろうなぁ・・・

「怒られるとか・・・マジ・・・勘弁」

そう言い残し、俺の意識は闇に解けて行った

「蒼痲ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

トリシューラが第二波を放った辺りから、舞姫は走り出していた
何か嫌な予感がする・・・突然第六感が働き、舞姫は蒼痲の所へ急いでいた
嫌な胸騒ぎは、収まるどころか余計に悪化している
だからこそ、この胸騒ぎを安心に変えたい。
一刻も早く・・・蒼痲に会って、この胸騒ぎを止めたかった

「蒼痲・・・蒼痲・・・蒼痲ぁッ！！はぁ・・・はぁ・・・はっ・・・はぁ・・・！！」

何度も何度も蒼痲の名前を呼ぶ。
そうしていないと、自分が壊れて行くような気がして、心がくじけそうになるのだ
だが、そんな舞姫の近くを走りぬける影があった

「はぁ・・・はっぁ・・・な、なに、よっ・・・！！」

その影は、舞姫よりも速く蒼痲の着地地点を目指し走りぬけた
舞姫もその影を追うように走った。
影は一度高く跳躍し、大きな岩の上に着地した

そして、舞姫をじっと睨むように見つめていた
舞姫も一度立ち止まり、その影を見つめた
『ウォォオーーーーーーーーーーーーーン！！！』
その影は雄叫びを上げるように吠えた。
荒々しく猛る毛並み、一見狂犬にも見えるその風貌・・・
銀色の体毛は光を反射しキラキラと光り、足の付け根の部分は凍っておりまるで結晶のように光を反射していた
「あ、あんたは最近氷結界の里の周りに住み着いた銀狼！！」
そういえば、今日の氷結界の会議でこの銀狼の事が議題に上がっていた
なんでも、飼っている家畜を襲い食い荒らしたり、農作物を盗んだりと被害が悪化するようであればそれなりの対処をするとグルナードが話していた
「なんであんたがこんなトコにいんのよっ！邪魔するんなら、殺すわよ！！」
『ォォォオーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！』
すると、銀狼は岩から降り舞姫の前に着地した
そして身を屈め舞姫を待っていたかのように頭を下げた
「・・・あんた、まさか私の事待ってたの・・・？」
『ォーン・・・』

低い声をあげながら、銀狼は頷いた
そして、今すぐに乗れ！と言わんばかりに体毛を揺らした
「・・・分かったわ。でもこの騒ぎが終わったら、あんたの処分はちゃんと決めるからね」
そういい、舞姫は銀狼に跨った
銀狼は舞姫が乗った事を確認すると、大地を蹴って走り出した
「うぁあ！？」
突然の事で驚きながらも、舞姫は銀狼に掴まった
銀狼は気にすることなく、そのまま蒼痲の着地地点まで舞姫を運んだ
「見えた！！」
未だに落下を続ける蒼痲を見つけ、舞姫は銀狼にしがみつくように力を込めた
ダンッ！と地面を蹴る音と同時に銀狼は蒼痲の下へ辿り着き、もう一度地面を蹴り蒼痲を背中に乗せた
「蒼痲っ！！」
舞姫は、蒼痲を抱きしめた
蒼痲は疲れた表情ですぅすぅと規則正しい寝息を立てて眠っていた。巨大な敵に全力で立ち向かった蒼痲は、とても勇ましかった。そして・・・カッコよかった。先ほどの不安が嘘のように消え去り、今では顔が微笑むほど安心していた。

「・・・あ、あれ！？」

気がつけば蒼痲に見とれており、じっと眺めていた
首をブンブン振り、顔に手を当てた
熱い・・・きっと、鏡があれば自分の顔を確認しているだろう。
恥ずかしい・・・でも、心地の良いこの感覚・・・

「な、なんでコイツの顔見て恥ずかしいのよ！？うぅぅ・・・」

銀狼の上だというのに、大きな声を出して唸っていた
腕の中で眠る蒼痲は何も知らないかのように眠っていた

「うぅぅ・・・なんでこんな気持ちにならなきゃいけないのよぉ・・・」

もう一度蒼痲を見つめた。
・・・気付いてはいた。視線が勝手に蒼痲を追っていた事を・・・
ふと考えれば、いつも蒼痲の事を考えていた。今日の会議の時もそうだ。
会議に出ている間、蒼痲は何をしているのか・・・今、どんなことをしているのか・・・
ひたすらそんな事ばかり考えてしまうのだ。
会議が終わった後、蒼痲が美味しいと言ってくれた鍋を作ろうと思い、買出しにだって出かけてしまった

「・・・なのにあんたは」

「ん・・・んぅ・・・」

鼻を摘み、蒼痲の苦しそうな顔を見て満足そうに笑みを浮かべる舞姫。
だが、突然銀狼がその場で吠えた
「何よ？」
『ウゥゥゥゥゥゥ・・・！！！』
銀狼の睨む方へ目線を上げ――――――先ほどの安心感は消え、恐怖が心を支配していった
「な、なんで・・・！？」
銀狼の見つめる先・・・そこには、ボロボロに傷ついた翼を見せるように、こちらを睨む怒り狂う龍の姿があった

四十一話　暴走龍　完結編（前書き）

なんとか完成しました。

それでは、最新話をどうぞ

四十一話　暴走龍　完結編

『・・・まただよ（苦笑）』

気がつけば、蒼痲はまた別の場所へ飛ばされていた
流石に何度も同じ事が起きれば慣れてしまうのか、蒼痲はゆっくりと真っ赤に染まった大地を見下した

『うわぁ・・・』

蒼痲は真っ赤に染まった大地を見て気味の悪い物を見たかのように声を上げた
実際、気味の悪い物がゴロゴロと転がっているからなんとも言えないのだが・・・

『はぁ・・・今度は何だよ・・・』

真っ赤に染まった大地には、インヴェルズの門番やインヴェルズの魔細胞などの死体で積み上げられた山があり、その山を処理するためにきたのか氷結界の紋章を身につけた男達が死体の山を漁っていた

『・・・あれが・・・昔の氷結界の奴らか・・・』

正直に言おう。ゴツイ、でけぇ、ボディビルダーやってんじゃね？
どこからどうみても身長１９０センチ以上の筋肉がやヴぁいおっさ

んです。はい。

『こいつら絶対名字と名前でジョジョって名前になるだろ・・・』

いや、どっからどーみてもジョジョ立ちしながら語ってきそうなんだもん。

見下げてるのに、なんだゴゴゴゴゴゴ！！って効果音出しながらこっち近寄ってきそうなんだもん・・・

怖いお（；ω；）

『・・・ん？』

ふと、死体の山に目を移した時だった

インヴェルズの魔細胞がもぞもぞと動きだしていたのだ

じっと睨むように見つめると魔細胞の背中に亀裂が走り、そこから黒い靄が起ちあがった

『・・・なんだありゃ？』

黒い霧はまるでお互いに惹かれあうように一か所に集まり、人の姿を現した

その姿は“人間”と呼べるような物ではなく、全身を真っ黒に染め上げた・・・いわば“人間の影”の姿をしていた

そして、その影は氷結界の戦士に近づき・・・真っ黒に染めあがった剣で切りかかった

『誰だお前は！？』

『イナドナバトコスナハニラマサキ！！』

日本語でおk。
え？なんつった？胃などナベ？意味不明☆だわ！

『貴様らは・・・ヴェルズ細胞から生まれた戦士か！？』

ヴェルズ細胞？何それ？歌？外人？どうでもいいわ

『ヴェルズ細胞ねぇ・・・ん？』

『うぐ・・・ぁぁぁぁ・・・あ〝あ〝あ〝ぁ〝！！！』

突然ジョジョ・・・じゃなくて、氷結界の戦士が叫び声を上げた
氷結界の戦士はその場に倒れ込み、右手の痛みを訴えるかのように
右手を左手で抑えた

『ジョルディ！！大丈夫か！？』

・・・やっべぇぇぇぇ！！リアルジョジョの人だったの！？という、波紋戦士！？もしくはスタンド使いですか！？やべぇ、イケメソすぎる！！

『ァあァあああァァァァあああああ！！！』

するとジョジョ（仮）の顔や右手には黒い線が現れ、瞳が真っ黒に染めあがった
それは、まるで何かの細菌に犯されているかのような不自然な物だった

『こ、これが・・・ヴェルズ細胞！？』

『ガァァァァァああああ！！！』

『ジョルディ！？』

ジョジョ（仮）は真っ黒に染まった身体で仲間に攻撃を開始した
まるで自分の中にある破壊衝動の赴くままに暴れ回るその姿は、かつての氷結界の戦士の誇り高い精神は破壊衝動によってすべて蝕まれ、理性にまで影響を及ぼしているように見えた

『・・・・・ヴェルズ細胞・・・ねぇ？』

まるで誰かに聞くかのように呟く蒼痲
その細胞が身体に悪影響を及ぼし、破壊衝動の赴くままに行動してしまう・・・というのは分かった
だがその細胞が出ないためにはどうしたらいいか？どうしたら、ヴェルズ細胞なんて物が産まれないのかを必死に考えたが・・・

『・・・無理か。』

どんなにあがいても、ヴェルズ細胞の根源・・・インヴェルズの肉体ごと全部を消し去る術がないのだ。
そりゃメガ粒子砲だとかメガバズーカランチャーとかがあれば死滅出来るかもしれないけど、死体を残さない戦争なんて不可能だ。
そして何より・・・一番気になるのが俺の事だ。
厨二病の野郎は“軸がずれている”といっていた。俺の軸がずれている原因は・・・俺の能力と、ヴェルズ細胞が関わっているのではないか？
確かに、倒れたのはレッドアイズと対峙した時だけだけど、最近では身体の中に何かが蠢くようなそんな感覚に囚われる時がある。

・・・それは恐らく、ヴェルズ細胞によるものだろう。

『あーぁ・・・この歳で変な病気にかかっちまったなぁ・・・癌とかで死ぬのは嫌だから、せめて老衰で死にたかったなぁ・・・』

独り言をつぶやきながらも、過去に起こった事を思い出す
自分のやって来た事に後悔の念はないが、今になってはこの人生をどう生きるのかを必死に考えていた

『とりあえず、グレズの野郎にはお返しをしなくちゃな』

とりあえず、死に場所は自分で見つけるつもりだ。
戦って死ねるなら本望なんて昔の武士(もののふ)の考えなんてできるわけもなく、今を精いっぱい生きる事しか俺には出来ないからだ。
さぁて・・・とりあえず、こんな悪夢からは一刻も早く抜け出さなきゃな

『・・・氷結界の戦士、ジョルディ』

気がつけば、ジョルディは仲間の手によって葬られていた。
その横で、ヴェルズ細胞の塊が砂のように形を崩して消滅した。

『・・・あなたの無念、俺が引き継がせていただきます』

深々と頭を下げ、俺はゆっくりと瞳を閉じた

『蒼痲は絶対にやらせない！！例え、トリシューラ様が相手だったとしても！！』

『ウォオオオオン！！！』

『キュエエエエエエエエエ！！！』

・・・・なんだろう、現実に戻ろうとしているのにめっちゃ冷たいような、柔らかいような変な感じがする。
おまけに、いい匂いがする・・・なんていうんだろう？甘いような、心地良いような・・・そんな匂い

「う・・・うん・・・？わぷ！？」

「きゃあ！？」

起き上がろうとして上半身に力を込めた瞬間だった。
突然、大きな揺れが蒼痲を襲い、前に倒れ込むように突っ込んだのだ
だがぶつかったにも関わらず、痛みを感じるどころか逆に柔らかい
感覚が蒼痲の顔を覆った

「ちょ、ちょっと！？何してんのよアンタぁ！！」

「うべしぃ！？」

い、痛ぇ！？右頬に猛烈な痛みがあああああ！！
右頬を抑えながら目を見開くと、胸を両手で隠すように腕を組んでいた舞姫の姿だった。
あ、今日もツインテール輝いてますね…

だが舞姫の胸は…でかいわけですよ。正直、こんなにでかい人を見たのはテレビで見たなんとか姉妹だとか、二次元の女の子くらいだ。そんな子が胸を隠すために腕を組んだらどうなるか？
もちろん、行き場を失った胸が溢れんばかりにこぼれ落ちるわけでして…正直に言おう。エロい。
顔も真っ赤に染まっており、初々しいその反応を見れば誰だって反応してしまうわけでして…かく言う俺も釘付けで…
ガン見してます。やばいです。助けてくだしあ；；

「な、な、なんであんたは雰囲気をぶち壊すことしかしないのよ！！このエロ痴！！死ね！！」

いい加減エロい目線に気づいたのか、舞姫は腰に下げていたであろうチャクラムを装備し、振り上げた

「ちょ、チャクラムはあかんて！仮にも俺怪我人んんんん！！？」

間一髪でよける事ができたが、舞姫は顔を真っ赤にしてもう一度振り上げた

「うっさい！死ね！！死になさい！！」

「ちょ、すいませんでした！なんかもう色々と！？」

「きゃあ！？」

またしても大きな揺れに襲われ、今度は舞姫がこちらに倒れ込み、それを受け止めるように蒼痴が舞姫を抱きしめた

「な、ななななな！？うゅぅ…」

「おぉっと、大丈夫か！？」

知らずの内に、舞姫を強く抱きしめており舞姫が小さな悲鳴にも似た声をあげた

だが揺れは収まることを知らず、未だに揺れていた

『おい人間！旋回するから、掴まれ！』

「は、はぁ！？」

どこからともなく声が聞こえその声の主を探そうとしたが、突然自分の座っている場所が大きく傾いた

「おぉっと！？」

声の主に従うように、身を屈めてバランスを保った

「え！？」

「ま、舞姫！？」

だが、舞姫はまるで何かに振り落とされるように空中に放り出された

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

蒼痲は傾いた足場を踏み台にして、舞姫の方へと飛び出した

だが当然疲労感が蒼痲を襲い、視界を曇らせた

「き、あ、い、だあああああああああああああ！！」
疲労感に負けぬように大声で叫び、目を見開いた
空中で鎧を身に纏うイメージをし、エクシアの装備を身につける
そして空中でダッシュするように舞姫に近寄り、抱きしめた

「そ、そうま！？」

「だぁってろ！舌噛むぜ！」

突然感じた殺気に素早く行動を起こした蒼痲は、その場で急降下をした
舞姫は、先ほど居た場所を凝視した。
そこには白いブレスが放たれ、今まさにそのブレスが蒼痲目がけて追尾していたのだ

「うわぁぁぁぁぁ！？こっち！！こっちきてるぅ！？」

「暴れるなって！」

蒼痲が舞姫を庇いながら大空を舞っている
蒼痲はとても必死だが、舞姫は何故か微笑んでいた
見上げれば蒼痲の必死そうな顔が目一杯に映し出され、その顔を見て微笑んでいたのだ

「ふふふ・・・楽しいわね。空飛ぶのって」

「あ、あのなぁ！？アトラクションじゃないんだから！！というか、死ぬ！！避けないと死ぬぅぅぅぅぅ！！」

「あはははは!!その顔面白いわよ!!」

「笑い事じゃねぇぇぇぇぇ!!!」

大空で何度も旋回し、こちらへ向かってくるブレスをひたすら避ける蒼痲

死に物狂いで旋回を繰り返し、ブレスを吐いた主を睨んだ

「やっぱりトリシューラじゃねぇかちくしょう!!」

薄々感づいては居たが、やはり蒼痲の攻撃でトリシューラを一時的に倒す事が出来た。

今のトリシューラから放たれているオーラは禍々しい物ではなく、神秘的な・・・まるでオーロラを身に纏っているようなオーラを放っているのだ

瞳の色も禍々しい赤色から藍色に変わり、まるで芸術作品を見ている気分になれた

・・・状況が状況でなければ、だが。

トリシューラの羽は傷つき、飛行能力こそ無い物のブレスという強力な武器を行使し蒼痲達を攻撃していた

「おい舞姫!状況の説明してくれ!!」

「え!?あ、うん・・・えぇっと・・・あんたが気絶したのを助けに行って、あんたを助ける前に銀狼と会って、あんた助けて、トリシューラ様が目覚めた?」

「説明になってねぇぇぇぇ!!」

もう嫌だ!!なんでこんな状況になった!誰か状況を説明してくれ

え！！

『ようやく目覚めたか！我が君！！』

「ん？我が君？」

突然、脳内に響き渡った第三者の声
トリシューラの猛攻が終わりに近づくに連れその声はどんどんと大きくなっていった

『我が君！申し訳ありませぬが、トリシューラ殿の暴走を止めてください！！』

「いやいやいや！！まずアンタ誰だよ！？」

『こちらです！！』

「あんた、何さっきから独り事ぶつぶつ言ってるのよ？気持ち悪いわよ？って、あ！！」

「今度はなん・・・だぁぁぁぁ！？」

トリシューラが一息つくために口を閉じた瞬間、蒼痲の居る場所が急に影った
そして、蒼痲と舞姫はその原因を知るべく、上を向いたら・・・
巨大な龍がこちらを睨んでいたのだ。
鋭い眼光と、人を丸のみしてもあり余る位の大きさを誇る大きな口・・・
その姿を見た瞬間に、蒼痲は動きだしていた。バーニアに出来る限りの力を込めて後ろに退却したのだ。断じて怖かったからではない。

断じて食われると思った訳ではない。

「何アレ何アレ何アレェェェェェェェ！？でけぇし、こえぇしなんだあれ！？」

「お、おお落ち着きなさいよ！！よく見なさい！！あれはグングニール様よ！！」

「は、はぁ！？うっそーん！？」

『我が君！？そこまで驚かれると、悲しいのですが！！』

「何！？お前が喋ってたのぉ！？」

随分と見た目に反してイケメンボイスだったから、驚いてしまった。何度も言うが、決して怖くて逃げた訳ではない。

「蒼痲・・・あんた、見てて痛々しいわよ？」

「うぅ・・・申し訳ありません・・・」

舞姫から放たれる汚物を見るような眼があまりにも痛かったので、蒼痲は頭を下げた

・・・何度も言うが、決して怖かったわけじゃない。

『我が君！！第二波が来ます！！今のうちに舞姫殿を私の背中に！！』

「え？あ、うん。舞姫！グングニールに乗り移れるか！？」

「ちょっと！様をつけなさいよ！！あんたみたいな普通の人間と違って、グングニール様は何千年も生きてるのよ！！」

「んな事ぁいいんだよ！早くしろ！って、キタァァァァァァァァ！！」

トリシューラが大きく息を吸ったと思えば、口から先ほどのブレスとは比べ物にならないほど速く、ブレスと形容するのでは生ぬるいほど鋭利だった
いうなれば、氷のレーザーだ。当たれば最後、身体がバラバラに引き裂かれるだろう。

『我が君ィィィィィイイイイ！！！！』

「うるせェェェェェェェェェェェェェ！！！！！」

脳内に大声でグングニールの声が響き渡り、その声に負けない大声でシャウトした。
グングニールの口から放たれたブレスはトリシューラの放ったレーザーと衝突し、お互いに打ち消し合うようにバリバリと大きな音を立てていた。
行き場を失ったエネルギーが膨れ上がり、不安定に揺れ、空中に居る自分まで地震の真っただ中に立たされている気分になる。
正直に言おう。完璧にドラ●ンボー●の世界だ。

「ちょっと！！仮にも私は女の子なんだから、優しく扱いなさいよ！！」

だが、シャウトする辺りから舞姫を突き落とすようにグングニールの背中に放り投げてしまったため舞姫は蒼痲の事をキッ！！と睨ん

でいた

「今はそれどころじゃねぇぇぇぇ！！！」

だが、暴走しているトリシューラの攻撃の方がグングニールを圧倒していた。

このままでは、グングニールは堕ちてしまう。そう考えた蒼痲はすでに行動を起こした

トランザムを発動し、トリシューラに接近したのだ

『起きたか、待ちかねたぞ』

突然、脳内に響き渡るイケメンボイス

奴だ・・・奴が来たんだ・・・！！って、何考えてるんだ自分・・・・！」

「あんたか！悪いけど、今は話し相手になれるほど暇ぁねぇんだ！！」

『ＧＮダガーを使え！このまま接近しては間にあわない！』

「わぁったよ！！ＧＮダガー！！」

両腰に装備されたＧＮダガーをブーメランを投げる要領で投降した刃は回転しながらトリシューラへと向かい、トリシューラの口元に直撃した

『キュエエエエエエエエエ！！！』

「っしゃあ！！おまけだ！！」

痛みに顔を歪ませるトリシューラに接近し、蒼痲は中央の顔にトランザムをした状態で蹴りをお見舞いした
トリシューラは苦痛で表情を曇らせながら蒼痲を睨んだ

「よぉ！トリシューラ！！元気だったか！？」

『主ぃ・・・我が主はどこなのだぁ！？主ぃ・・・主ぃ！！』

中央のトリシューラが傷ついたことにより、左右の首が同時に口を開け大きく息を吸い込んだ
そして、ほぼゼロ距離と言っても過言ではないほどの距離でブレスを放ってきた
その攻撃を予測したのか、蒼痲はその場から離れ大空を舞うように飛んだ

「主主うるせぇよ！」

『人間！！今トリシューラに何を言っても無駄だ！！』

「今度は誰だゴルァ！！」

今度は別の場所から声が響きわたった
声がする方を向けば、グングニールよりも一回り小さい竜がトリシューラを睨みながら旋回をしていた

「今度はブリューかよ！！」

蒼痲に語りかけてきたのは、氷結界の龍　ブリューナク。

氷結界に封印された三体の内の一体だ。

『気安く呼ぶな人間！！』

どうやらブリューナクは交友的ではないようだ。
蒼痲は少しイラッとしたものの、ブリューナクに語りかけた

「おい！さっきっから主とか、我が君とかわけが分からん！説明プリーズ！！」

『…ほんとに貴様のような奴が私の主が務まるか分からぬな…』

「だーかーらー！！説明してくれっつってんだろ！？」

あまり交友的でないにしろ、こちらから説明を求めれば説明してくれるはず！と思っていた時期が、僕にもありました。

『・・・あまりに不本意だが、説明してやろう。私の背中に乗れ』

「・・・なーんか棘々しいなお前」

言われるがままにブリューナクの背中に乗り、背中越しに今自分がどこにいるかを確認した

「げっ！？ここ、氷結界の里の上！？」

そう。今自分の間後ろには氷結界の里が鎮座しており、トリシューラは氷結界の里へと前へ進んでいた
だがご自慢の翼には剣でつけられたであろう大きな傷があり、トリシューラは歩きで氷結界の里を目指していたのだ

「うわぁ・・・って、んな事言ってる場合じゃねぇじゃん！氷結界の里崩壊の危機！？」

『・・・説明してもいいか？』

「あ、うん。ごめん・・・」

ブリューナクが迷惑そうな声で蒼痲に話しかけた
蒼痲もふざけ半分だった心を入れ替え、真剣にブリューナクの話を聞いた

『・・・あれは、今から五千年以上昔だ。私は、あの氷結界の山で孵った。』

「・・・随分と長生きなんだな。」

『私達氷結界の龍は、産まれた時に未来を予知することができるらしい。だが、私が覚えているのはごくわずかだ。』

「無視かーい」

『私達氷結界の三龍が見た未来・・・それは、“巨大な闇が現れし時、流星の光を持つ英雄と会い見えん”とな。』

「マジかー」

ブリューナクが自分の誕生と、これから起こるであろう未来の事を話した。
蒼痲はふーん、はーん、ほー（＾ω＾）みたいな顔で聞き流していた

『・・・おふざけが過ぎるのであれば噛み殺すぞ？』

「すいまえんでした；；」

『話を戻そう。私やグングニールの見た流星の光を持つ者はどんな巨大な闇にも立ち向かい、仲間の為に命を賭ける・・・そんな男だった。私達はその予言を信じ、流星の光を持つ者を主としずっと待ち続けた・・・しかし、一向にその主は現れなかった』

ブリューナクが語る流星の光を持つ者・・・それは、どんな巨悪にも立ち向かい命を賭けてでも仲間を助ける自分とは正反対の人物であった。

だが、ブリューナクは語るに連れてどんどんと呆れるような声になり、ため息をつきながら話した

『そして・・・二年前。ワームの侵攻が起こり、我々三龍は奮闘した。だが・・・主は現れず、ワームとの戦いは一時休戦という我々にとって不名誉な物と共に終わりを告げた』

「・・・・・・」

『そして今。お前が私達の前に姿を現した。だが私は貴様を主とは認めない。どうして・・・どうして今頃になって現れた？』

「ストーップ。俺はお前等の主かどうかは知らないけど、俺はまだ状況の把握ができてねぇんだよ。いきなり主だろ？とか言われたってはいそーですかって言って認められるかってんだ」

『黙れ。貴様が何をしていたかは知らぬが、貴様が来なかったせい

で何人もの犠牲があったのだ。』

「知るか。生憎、俺だって今日初めてその話を聞いたんだよ。分かる訳ねぇだろ」

ブリューナクの背中で口論を続ける蒼痲とブリューナク。
だが、トリシューラは黙っている訳ではなくまるで涙を流しながら訴えるようにブレスを吐き続けた

『主ぃ！主ぃぃぃ！！助けて・・・助けてぇぇぇ！！！』

『お前に分かるか？お前を何千年も待ち続けて、現れなかった主の存在をまだ信じているトリシューラの痛みが。我々の争いを止め、人々の平和を誰よりも望むトリシューラの痛みが』

「・・・・」

『ブリューナク！！貴様、そこに居られるお方を誰だと心得ている！！』

ブレスを避けながら近づくグングニール
ブリューナクは怒りの血相でグングニールに怒鳴った

『グングニール！私は誰の指図も受けないと言ったはずだ！！』

『黙れ！！貴様このお方を待ち続けて、何千年経ったと思っている！？そして、このお方が来たと言う事は、世界の危機が訪れようとしていると言う事だぞ！！』

『もううんざりだ！！なぜ我々三龍が、たかだか人間の為に封印さ

れたのだ！？この巨大な力がいけなかったのだろう！？私は、こんな力望んでいなかった！！！』

「あぁもう！！人の頭ん中で大声出すのやめてもらえませんかねぇ！？」

自分の頭の中で大声で話す龍達に苛立ちを覚えながらも蒼痲はブリューナクの背中を蹴り、大空に舞った

『わ、我が君！？一体なにを！？』

「んなこと決まってんだろ！トリシューラを止める！！」

『人間では不可能だ！！命が惜しくば引き返せ！！』

ブリューナクが蒼痲に警告をした。

だが蒼痲は構わずトリシューラへと向かった

「断る！」

『何故だ！？』

「お前等がどれだけ苦しい思いしてたかは知らねぇ。けど！目の前で苦しそうにしてるトリシューラをほっとけるわけねぇだろ！！」

もう一度トランザムを行使し、トリシューラに接近した

勿論何度もトランザムを使用しているため、今意識を手放せば簡単に眠ってしまうだろう

しかし、蒼痲は自分の体に鞭を打ってで動かなければならなかった。

舞姫の話によれば、ブリューナクとグングニールの争いを止めたのはトリシューラだ。
そのトリシューラに二匹がかりで勝てるとは思えないのだ。
ならば・・・

「俺が・・・・・」

『主ぃい!!主ぃいいい!!』

やってやる。
例え、この世界が滅びの道を歩もうと・・・

「俺達が・・・・・・」

『主ぃ・・・何処(いずこ)へ・・・?主ぃ・・・主ぃい!!』

だから、俺達で作るんだ!
争いの無い世界なんて無いけれど・・・

「変えて行くんだ!!」

『助けて・・・助けてください・・・主ぃ・・・』

それでも!!インヴェルズだけは・・・戦争の根源は・・・なんとしても俺がぶっ潰す!!
これは俺がアイツ（グレズ）を倒せなかったから起こったんだ。
ならば、その落とし前はきっちり取らねぇとな!!

「だからトリシューラ!!」

『こっちに来るな・・・ニンゲンんんんんんんんんんん！！！！』

レーザーが真正面から迫る
だが、盾は構えずに真っ直ぐ突き進む
右手に今ある限りの全ての力を込めて・・・突き進む！！

「目ぇ・・・覚ませぇぇぇぇぇ！！！」

レーザーが右手によって打ち消され、どんどんトリシューラとの距離が縮まっていく
そして、今にも吹き飛ばされそうなほどの威圧に耐えながらトリシューラの顔面まで全力で駆けた

「起きろこのやろぉおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

右手がトリシューラの顔面を捉え、ガツン！！と大きな音を出した
岩を殴った気分だ。右手の装甲はトリシューラのブレスを物語るように凍りついていたりひび割れが酷く、装甲で守られていた手まで凍りついた
そんな状態で全力で殴ったらどうなるだろうか？
勿論右手の感覚はまったくない。正直に言おう。絶対に折れた。だってありえない方向に指とか手がむいてるんだもん。

「は、ははっ・・・」

トリシューラの二つあるデカイ頭がこちらのことを見ていた
はっはっは・・・これじゃ、頭からぱっくり食われるな。

「食えよ。もう・・・逆らえるような力ぁねぇよ。ははっ・・・おめぇみたいな綺麗な奴に食われるんのも・・・悪くねぇのかもな」

良く見れば、水晶のような目だ。見続けていればきっと吸い込まれそうになる。いや、物理的な意味でね？

「ふっ・・・わりぃなみんな・・・ここまでだわさ」

そういって、瞳を閉じ全身の力を抜いた

目を閉じたあたりから脱力感がドッと押し寄せ、今ではなにもする術がなくそのまま落下を始めた

ここで散るのか・・・無念なり・・・ってね。

・・・最後の最後まで緊張感の欠片もねぇな俺。

『主ぃ・・・そこに居られたのですね・・・』

薄れてゆく意識の中で、そんな声が脳内に響き渡った

四十二章　氷結界の主（前書き）

お久しぶりです。
最新話をどうぞ

四十二章　氷結界の主

気がつけばそこは・・・・・・・

・・・あー、眠ぃ
えぇ眠い、眠いですとも。
でもさ、人間って奴ぁ些細な事で目を覚ます生き物なんですよねぇ・・・

『ちょっとぉ！病室にこんなに押しかけたんじゃ、窮屈で仕方ないじゃない！！』

『仕方ないであろう！？少なくとも私達は怪我人なのだが！？』

『というか、兄上はいつになったら起きるのだ』

この状況を一言で表せる事が出来るぞ
騒がし過ぎる・・・というか、人の安眠を妨害できるほどの煩さだぞ！？

「ん・・・んん・・・？」

ゆっくりと起き上がり、ボーーーっとする意識を覚醒させるために
左目を擦った
ふわぁぁぁ～と大きな欠伸をして辺りを見渡した

だがこちらに迫る何かを把握するのには時間がかかり・・・それは俺の腹に飛び付いた

「兄上ぇぇ！！」

「ごっふぅ！？」

腹に衝撃が加わり、腰を折るようにもう一度ベッドに倒れた
しかし、その攻撃が引き金となったのか身体の至る所が悲鳴を挙げ始めた

「い、でぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？いててててて！？手がぁぁ！てがぁぁぁぁ！！」

主に痛いのは右腕。他には強打した背中や左腕や両肩等だ。
一言で言えば、超絶痛い。というか、この痛みに耐えんの辛いんだけどぉおおお！！
俺にひっついている物を引きはがさずビッタンビッタンとベッドの上で跳ねるのであった

「兄上！？大丈夫ですか！？」

「は、破術師ぃ！？」

ビッタンビッタンしてる蒼痲に張り付いていたのは氷結界の破術師だが、兄上兄上連呼されていたので誰かさっぱり分からなかったのである。
いや、だって・・・ねぇ？散々余所者余所者言われてたのに、いきなり兄上に昇格したんじゃビックリするって

「何故(なにゆえ)ここにいいい！！つか！腰！腰ぃい！！」

まぁ破術師の張り付いている場所も勿論怪我をしているのでそれなりに痛い

出血沙汰じゃないだけマシ・・・というわけではない。

「うぉっほぅ・・・あぁー・・・・・」

あぁぁぁぁぁ意識が遠のいて行くぅぅぅぅ・・・

「俺・・・この戦争が終わったら・・・好きな人に告白するんだ・・・（ガクン）」

その言葉と一緒にベッドに倒れ込んだ哀れなガンダム雑魚が居たとか居なかったとか・・・

「・・・で、なぜこうなったし。」

もう一度目を覚ませば部屋には誰も居なくなっていた

身体の調子も悪くなかったので、氷結界の秘薬を飲んでいったん外に出たのだ

勿論、目的は氷結界の里の様子を視察することである。で、今現在

目の前に広がる光景は・・・

「うわー！！ブリューナク様だぁ！！」

「すげぇー！グングニール様カッコいい！！」

「トリシューラ様でっけぇ！！」

氷結界の子供達がトリシューラやグングニールを見て驚き、その親達が子供がトリシューラ達に迷惑をかけていないか目を見張って見ていた

「うわぁ・・・」

正直に言おうシュールだ。シュール過ぎる。
トリシューラ達が身を屈めて子供達の相手をしてあげて、子供達がそれをキャッキャ言いながら喜んで、親がそれを必死に止める・・・
うん。シュール。

「おぉ！蒼痲殿！！」

「ん？おぉ、ロイヤルナイトか。どったの？」

「凄いではありませぬか！今回の事件、被害や死亡報告はきておりませぬぞ！！」

あー、そういやロイヤルナイトの仕事って里の防衛とか里の事務とかをやってるんだっけ？
あんま話しかけないから分からないや。

「しかし、トリシューラ様達を止めて下さるとは・・・貴殿は三代目の氷結界の英雄の称号を貰えるかもしれませぬ！」

三代目と言う事は・・・初代と二代目が居たってことだよな？

「なぁ、氷結界の初代英雄と二代目英雄ってどんなやつなんだ？」

何気なくロイヤルナイトに質問し、返答を待った。

ロイヤルナイトははっはっは！と笑いながら俺の背中を叩いて話してくれた

「それはそれは凄いお方であった！今の氷結界があるのは、あのお方たちが頑張ってくれたお陰！初代は氷結界伝説の力をお持ちになり、二代目はその御子息と言われております。我々も負けてはおられませぬ！」

「ふぅ～ん」

どうやら、氷結界の英雄と言われるだけあって相当の実力者らしい。伝説の力とやらはわからないが、二代目はその伝説の力を持った初代の子供らしい。

・・・英雄の子は英雄になれる・・・か。

「俺が三代目にねぇ・・・なれるわけねぇじゃん」

確かにその英雄とやら達が今回の件に関わっていたとしたら俺のような失態をせずともトリシューラ達を止める事が出来ただろう。

だが、俺はどうだ？身体は傷つき、装備もジリ貧。おまけを言ってしまえば、一度気絶してしまい女の子に助けてもらわなければ死んでいたのだ

なんと脆く、弱い存在なのだろう・・・それで、今回の件で英雄と称されても、俺は嬉しくない。むしろ、そんな事で称されたんじゃ虫の居所が悪い

「何を言っているのですか！貴殿はあの――――――」

「蒼痲！ようやく起きたのね！！」

「・・・・舞姫」

舞姫が慌てたようにこちらに駆け寄った。だが、あまり機嫌のよくない俺はつい舞姫を睨んでしまった
それに怯えたのか、舞姫はその場で立ち止まってしまった

「あ、わりぃ・・・あんま機嫌よくなくてさ」

「そ、そうなの。って、それどころじゃないのよ！あんたこっちに来なさい！！」

「はぁ？って、ぬぉう！？」

舞姫に無理矢理手を取られ、そのまま走り出す俺。
舞姫は必死そうに前を走っている。勿論息は挙がっているし、苦痛で表情が崩れてしまっている
見てられなくなったので、舞姫の手を振りほどき、彼女の前を走った

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！はぁ・・・はぁ・・・」

「辛いんだったら、辛いって言えよ！もう！！」

そういって、足を止めた
それに釣られるように舞姫も足を止め、その場でぜはぜはと息を吐いていた

「ちょ、ちょっとぉ・・・急いでるんだってば・・・」

「まぁいいから。とりあえず、息整えろ。」

本当に急いでる

といっても、役得の意味はそちらではない。
・・・変態とか言うな。健全な男子高校生なんだから仕方ないじゃないか。

「で、走りながら聞くけどなんで焦ってたんだ?」

「氷結界の門の前に行けば分かるわよ!というか、離しなさいよ!もう着くんだから!!」

「あ、暴れるなよ!わぁった!わぁったって!!」

腕の中で暴れる舞姫を下ろすために一度立ち止まった
まぁ、流石にこっちも色々限界だったため助かったが女の子をお姫様抱っこするのも悪くないなぁなんて思ったり思わなかったり。
舞姫が顔を真っ赤にしながらダッシュするのをきっかけに、俺もダッシュで門へと向かった

「おぉ!蒼痲!!こっちだ!!」

ガンターラが門の近くで俺と舞姫の事を待っていてくれた

だが、俺は上空に映し出されたマークに違和感を覚えダッシュしながら上空を睨んでいた

「あれは・・・インヴェルズ！！」

空中にはインヴェルズを呼ぶ者が二匹飛んでいて、何か布のような物を広げて何かを待つようにこちらを見ていた
呼ぶ者の上空には、インヴェルズのマークが赤黒く映し出されており、気味の悪い雰囲気を辺りにまき散らしていた
そして、俺が近づくのを確認すると二ィッと口をにやけさせて、布を大きく広げた
布はインヴェルズを象徴するように赤黒く、ザラザラと小さなノイズが走っていた

『ほぅ・・・そんな所に居たか。天城蒼痲』

「っ！？その声！！」

声とともに、ノイズが収まり黒い風景が映し出された
その声を聞くと同時に、怒りが込み上げてきた
何もかもを侮辱するような声・・・そして、見下すような視線・・・
そして――――――

『まぁいい。久しぶりだなァ諸君！！我の名はインヴェルズ・グレズ。この世界を奪いに来た者だ！！』

何もかもを破壊するために生まれたかのように振る舞うその姿・・・

『我々がこのような事に疑問を覚える者や、争いを糧として生きる者、全てに我の声を聞かせよう！今ここに、我々インヴェルズが全

ての種族に対して宣戦を布告する！！』

何もかもをあざ笑うかのように話すインヴェルズ・グレズ。
知らないうちに、右手に力がこもる。
その力が爆発するんじゃないかと思う位に、俺の右手は震えていた
今すぐ・・・本当は今すぐにでも乗り込んであの顔面が潰れるくらいに殴りたい。
だが、今は怪我をしていて満足に殴るどころか、返り討ちにあってしまうだろう

『今から我々は全ての種族に対して攻撃を開始する。死にたくなければ、二週間以内に我々のインヴェルズの城にまで辿りつき我々を殺すのだな！！ハッハッハッハッハッハッハ！！！』

「二週間以内・・・」

『さぁ！！全ての種族よ！我を退けてみろ！！新たな世界を生み出すために！！ハッハッハッ！！』

ブツンッ！！と画面が消えるかのように、インヴェルズ・グレズの演説は終了した
そして、演説が終わるのと同時に氷結界の門の前にインヴェルズの斥候やインヴェルズの魔細胞が現れ、氷結界の里の方目がけて侵略を開始した

「うげぇ！？こっちゃ怪我人だってのに――――いっつぅ！！」

「あんたは怪我人なんだからすっこんでなさい！！」

『すっこんでいるのは貴様達だ』

「ぬぉぉあ！？」

突然空が陰ったと思ったらトリシューラが氷結界の門の真上で息を吸っていた

それに気付いたのか、氷結界の虎将達や御庭番は危機を察知したのか門の後ろに下がり、トリシューラの攻撃に巻き込まれないように逃げた

『キュルルルアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！』

脳内に響き渡る大きな叫び声。そして、その声と同時に放たれたブレス。

気がつけば、氷結界の門の前に居たインヴェルズ達は全て氷漬けにされており次の瞬間には氷が砕かれ跡形もなく消滅していた

「うわぁ・・・」

その光景に目を奪われていた

あまりにも圧倒的過ぎるトリシューラの一撃。

その一撃で葬られる敵

その光景に目を奪われずにはいかなかった

「・・・トリシューラ？」

突然、トリシューラが氷結界の門の前に降り立った

そして、こちらをじっと見据えるように氷結界の戦士達を見つめた

『主よ。』

「・・・俺の事・・・だよな？」

頭の中で聞こえる声はトリシューラの物だった。
トリシューラは目をつぶり、頭を深々と下げた

『申し訳ありませぬ。私が未熟故、暴走してしまいました』

「い、いいって！頭下げんなよ！今回の騒動で被害はなかったんだし、いーじゃねぇか！」

「そ、蒼痲！！」

突然、舞姫が蒼痲の肩を叩いた
蒼痲は舞姫の方を向くと舞姫やグルナード達は驚いたかのようにこちらを見つめていた

「あ、あんた話せるの！？トリシューラ様と！？」

「ん？そうだけど・・・え！？まさか皆ゃ聞こえないの！？」

そ、そんな！？今まで皆にも聞こえる物だと思ってたのに！？うっそぉん！？

『私達の声を聞く事が出来るのは、この氷結界を護るほどの力がある守護神・・・即ち、伝説の力を持つ者にしか出来ぬ。』

「は、はぁ！？」

『ようやく会えましたな主よ。では、自己紹介を・・・私の名はトリシューラ。氷結界を守る最強の矛にして、最強の盾でございます。

『
トリシューラが頭を下げるや否や、遠くの方に居たグングニールとブリューナクもこちらの方に降り立った
『我が名はグングニール。敵を討つ光の矛にございます。』
『我が名はブリューナク。全てを守るための矛にございます。』
そして三龍はこちらを見つめ、もう一度頭を下げた
『『『我ら氷結界の龍、我が主にこの身を捧げます。何なりとご命令を』』』
「――――え、ちょ、えッ!?えぇっと・・・」
周りに助けを求めようとした時グルナード、ガンターラ、ライホウの三人がドゥローレンと共にこちらに向かって歩き出していた
（良かった、助け舟出してくれんのか!?）
心の中で歓喜しながら、蒼痲は三人の虎将達を待った。
だが、三人が蒼痲の前に立つや否やその場で右手を胸に当てこちらに忠誠を誓うようなポーズで前に屈んだ
「――――我ら氷結界の三将、ドゥローレン様よりの命によりこれより天城蒼痲。改め、我が君と共にこの氷結界の行く末を決めていただきたい。」
「え!?」

予想を遥かに超える事に驚きを隠せず、蒼痲はおろおろと辺りを見渡した。
前門に氷結界の龍、後門には氷結界の面々がこちらに向かって頭を下げているのだ。
正直に言おう。俺、場違いじゃね？明らかにおかしいって！！

「え、えぇっと・・・」

「貴方が願えば、この地を去り今一度あの戦場に戻りましょう。」

「あの・・・戦場？」

ライホウが静かに告げた。戦場・・・？
――――――――――――――――――――あ、そういえば！！

「・・・俺の願いは一つ。この願いは酷く我がままかもしれない。だが俺にはそれを見て見ぬふりをすることは出来ない。」

『「なんなりと、我が君。」』

氷結界の龍と氷結界の戦士達の声がそろって聞こえた。
大きく息を吸い込み、吐いた。そして――――

「・・・これより！我ら氷結界はインヴェルズの侵略を阻止すべく、インヴェルズの城へ向かう！この地を、共存すべき種族を守るために！！行くぞ！！」

『「応！！承った！！！」』

「明日にはこの地を発つ！だがこの戦いに志願する者のみ来い！！
戦いたくないものは来なくても構わない！！」

「氷結界の主の御心のままに！！」

その言葉と同時に、皆一斉に氷結界の里に駆け出した
氷結界の龍も空気を読んだのか、空へと飛び氷結界の山へと向かった

「・・・・はぁ。」

皆の背中を見送りながら、近くにあった大きな岩に座りこんだ
やっぱり、いざって時にカリスマって出るんだなァって思った。

「はい。」

「うぉおおおおおおお！？」

「何大声出してんのよまったく。」

突然現れた舞姫が呆れたようにこちらを見ていた
そして、こちらに歩み寄り蒼痲の隣に座り込んだ

「まさかあんたが氷結界の主に、・・・ねぇ。」

「うるせぇ。俺だって状況の把握できてねぇんだよ」
「あ、でも立場上あんたはこの里の中で一番地位が高いから、様付けで呼んであげようか？」
「やめい・・・」
「あら残念。つまらないわねぇ」
「・・・気になったんだけどさ」
蒼痲がおずおずと舞姫に聞いた
「お前・・・来るのか？」
「・・・それは、これから起こる戦争のこと？」
「あぁ。」
実は、蒼痲が一番気になっていたことは氷結界の主と呼ばれていることではなく舞姫が戦争に行くか行かないかが一番気になっていたのだ
「・・・私は行くわよ。」
舞姫は、まっすぐな瞳を蒼痲に向けた
その瞳に答えるように俺も目線を舞姫に合わせた
瞳から感じる舞姫の意志、思い・・・そして、願い。
何故かその一つ一つが俺の心に深い傷を負わせるようで、心が痛かった

「私も行く。私の力はきっと役に立つし、それにアンタ言ったじゃない。志願する者のみ来いって。」

「・・・そうだけどさぁ」

「・・・何よ？」

・・・えぇい！俺はこう言う時に気がきいた台詞を言えるほど知識なんかねぇんだよ！

おまけに言うと！女の子と話すってだけでも結構ハードル高ぇんだよ！！無理してんだよ！！それにさらに無理をしろってか！？

―神は言っている・・・ここで、死ぬ運命だと・・・―

じゃねぇんだよ！どこのエ○シャ○イのＭＡＤだよ！！

「いんや、個人的には残ってて欲しかったなぁって」

「嫌よ。あんたの命令でも、絶対に行くわよ。」

「そうかい。なら止めはしねぇよ。ただ・・・これだけは言っとくぞ」

「・・・何よ？」

腰かけていた岩から立ちあがり、氷結界の里を目指し歩きだした

そして後ろを向いたまま立ち止まり、静かに言った

「・・・お前は絶対、俺が守る」

そういって、俺は恥ずかしくなったので出来るだけ速くこの場を離

れた
じゃないと、顔に血がたまって爆発するんじゃないかと思ったから
（は、恥ずかしいんだよ馬鹿野郎ぉおおおおおおおおおおおおおお！！！）
本当が大声でそう叫びたかったけど、叫んだら叫んだで後で後悔すると感じたのでやめた。
うぅ・・・とりあえず、落ち着くまでどっか行くっきゃねぇ・・・

四十二章　氷結界の主（後書き）

おまけ

蒼（ぬぉぉ！まだ恥ずかしいぞ畜生！！）

破「兄上ーー！！」

蒼「おぉ、破術師！風水師も！（れれれ、冷静になれ俺状態）」

風「・・・（ぺこり）」

破「兄上ぇ♪（蒼痲に抱きついた）」

蒼「ぬぉう！？（ちょっとびっくりしたけど受け止めた）」

風「破術師、主様に失礼でしょ？」

蒼「気になったけど何で兄上って呼んでんの？（実はちょっと嬉しくてニヤケ顔）」

破「兄上のおかげで疎遠だった風水師姉様と少しずつですが、打ち解けられました！ですから、兄上と呼ばせて頂いております！・・・駄目でしょうか？（上目遣い）」

蒼「えぇぞ！えぇぞ！！（テンション→→）」

風「・・・（ちょっと冷たい目）」

蒼「すいまえんでした；；」

風「・・・私からもお礼を言わせていただきます。ありがとうございます主様」

蒼「・・・その主様ってのやめてくんない？ちょっと恥ずかしいからさ」

風「分かりましたでは、蒼痲様とお呼びします」

蒼「・・・ま、いっか。」

破「兄上ー♪（すりすり）」

蒼「えへへ・・・えへへ（超ニヤケ顔。キモいです）」

おまけ　その２

「あんの馬鹿蒼痲ぁぁぁぁぁ・・・！！」

実はこっそり蒼痲の後を追っていた舞姫ちゃん

おまけ　その３

蒼「ただいまー」

舞「・・・おかえり。随分と破術師達と仲が良くなったわね？」

蒼「え・・・？何故その事を・・・？」

舞「・・・ふん！（拗ねた）」

蒼「え！？俺なんか悪いことした！？」

リア充爆発しろ。

四十三章　侵略者（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

新年になって初めての投稿ですが、どうか身捨てずにいてくれると嬉しいです。

では、どうぞ

四十三章　侵略者

さて、あれからあった事を簡潔に述べよう。

俺達は氷結界は現在、トリシューラやグングニールの力を借りてインヴェルズの城へと向かっている

で、今現在は氷結界の空舟（俺命名）に乗って長ーい空の旅をしているわけだが・・・

「うえぇぇ・・・じぬぅ・・・」

俺は船酔いでダウン。

だって仕方ないじゃん！！風で結構揺れるんだもん！！

「姉上！見て下さい！！鳥達がこんなにも近いです！！」

「ふふっ・・・そうですね。」

視線を声のする方に向ければ、破術師と風水師が笑顔で話しあっていた

うぅむ、なんとも微笑ましい状況だ・・・俺がこんな事になってなかったら一緒に話してるだろうな！畜生！！

「まったく・・・氷結界の大将がこんなありさまでどうすんのよ」

「うっせぇ・・・つか、無理して俺の近くにいなくていいんだぞ？」

「いいじゃない。あんた酔って今にも吐きそうじゃない」

「理由になってねぇっつのぉ・・・うぇぇ・・・頭痛ぇぇぇ・・・」
で、俺は舞姫に介抱されてる。といっても、膝枕ではなくて頭に濡らしたタオルを置いてくれたりしてるんだけどね。
正直、膝枕して貰えれば嬉しいんだけどなァ・・・やらしい意味込みで言ってるけど、男の子なんだもん。仕方ないじゃないか

「まったくもう。ここで吐かないでよね。」

「・・・といっても、心の中じゃ心配しててくれる舞姫萌え」

「なんか言った？」

「いえ、なんも・・・」

すみません。ウソです。嘘ですからさっきまで額に乗せてたタオルを鞭みたいに引き延ばすのやめてもらえます！？

「はっはっは！蒼痲殿も大変ですな！」

「そう思うんだったら助けてくれよ武士・・・」

畜生・・・武士が大声で笑うから皆こっち見てんじゃん。うわ恥ずかしっ、ライホウとかこっち見んなよ！うわ、破術師こっち来たし！！

「兄上だらしないぞ！こんな程度でへこたれていては面目が立ちませぬぞ！」

はっはっは！！と皆が笑い始め、俺は若干ムッとなるが吐き気が押

し寄せたため顔をしかめた

「ふふふっいい笑い物ね」

「・・・・はっ！？」

そ、そういえば俺って飛べんじゃん！！何を今さら気づいてんだろ！？馬鹿なの！？俺って馬鹿なの！？あ、馬鹿でした

「だぁぁ！！分かったよ！！だらしなきゃいいんだろ！！」

その場から勢いよく立ちあがって、そして飛びあがった
緑色の光に包まれてエクシアモードに変身。そのままＧＮ粒子を散布しながら空を飛んだ
おぉ！！と皆から期待の目線を受け、そのまま空を飛んだ

「うぇっと・・・危ない危ない」

ふらふらしながらも空を飛ぶ。
久々とも言える空の旅はあまりにも綺麗な龍に囲まれながらの物だった

「ふぅ・・・」

こうやって見ると、トリシューラ達が芸術の産物であることを再確認させられる。
だって、太陽の光を浴びながら煌く翼とかを見てると異常なほど惹かれるんだもん。

「蒼痲ー！トリシューラ様達に失礼のないように飛びなさいよー！」

下から舞姫が注意を呼び掛けた
おっと、見取れて安全運転をしていなかったな。いかん、危ない危ない危ない・・・

「・・・・気持ち悪っ」

自分の中で意味もなくネタを繰り出し、自分で自分にツッコミをいれた。
まったく・・・相変わらず、俺は馬鹿だなァ・・・救いもないな。

『我が君！疲れたのであればいつでも私の背中に乗って下され！』

「え゛、いや・・・遠慮知っとくよ」

今ブリューナク達が氷結界の方舟を先導してるようなもんだし、俺もまだ飛びたい気分だからまだ休憩しなくても大丈夫だしなぁ・・・

「・・・いいなぁ、蒼痲。空が飛べて・・・」

つか、舞姫。そんな目で俺を見るな。異様にかまってあげたくなるだろ。
例えるならずぶぬれになった犬が寂しそうな目でこっちを見ている気分だ・・・つか、遠目から見ても舞姫は目立つなァ・・・・・・
スタイルとかじゃないからな？スタイル的な話をしたら交霊師とか風水師もいるから一番というわけではないだろう。
実際大きさ的には舞姫が勝ってるんじゃ？いや、でも交霊師は胸の大きさがいまいち強調されないし風水師も年の割には大きいんだよなァ・・・確か、俺より三歳年下だっけ？いや封魔団だって十分にでかいだろ。舞姫はレオタード（？）だから強調されてそう見えて

るだけかもしれないけど・・・

・・・つか、なんで胸の事考えてんだよ。アホか？アホなのか俺？
いやアホだけどさ。
よし、取りあえず俺の脳内補完で胸の大きさは

風水師＜交霊師＜封魔団＜舞姫

ということにしよう。
・・・つぅか、舞姫のスタイルはチートだと思うんだ。だって一緒に生活してたけどしょっちゅう視線を釘付けにしたりするからなぁ・・・ちょっとした行動も色っぽく見えるし・・・

「おーい！蒼痲ぁ！！」

「ん？おぉ！！御庭番！！」

氷結界の方舟の上にいる御庭番がこちらに向かって手を振って来た
丁度舞姫と風水師が近くにいるし、冷やかしにでも行くか
GN粒子を散布させながらゆっくりと御庭番の近くに寄った
・・・着地はしませんよ。また酔ったら嫌だもん

「どうしたんだよいきなり」

「いや、あれを見てもらいたいだ」

方舟から身を乗り出し、下を指差す御庭番
それに釣られるように方舟から離れ、下を見る俺
指差された先には何か薄暗く光る点がまるでこちらを見つめているかのように点滅を繰り返していた

「・・・囲まれたか？」

「いや、つけられているというわけでもないようだ。恐らく、あれはワームの残党だろう。」

「ワームって、あのワームだよな？」

なんか、ネヴァネヴァしてて触手ちっくな奴から液状な奴とか黄金に輝く奴とかが多いあのワームだよな？・・・まぁ、遊戯王のキャラクターで夜のお遊び（男限定かもしれない）をするためには必ずと言っていいほど関わってくるお方だ。うん、触手万歳。

「ねぇ、なんの話してるの？」

「・・・気になる。」

すると、タイミングを見計らったかのように風水師と舞姫がやってきた

おぉっと、これは面白い展開になりそうだな

「ふ、風水師！？」

風水師を見た瞬間に御庭番の顔が赤くなった

そして、風水師は頭に？マークを浮かべるように首をかしげた

本人にとっては当たり前のように話しかけただけなのに、こんな過剰反応されちゃ流石に驚くよなァ

「はぁ・・・アイツ等、まだ気付いてないのか？」

「仕方ないじゃない。あの二人だってフクザツなのよ」

あえて言おう。御庭番は風水師に好意を持っている。しかもＬｉｋｅではなくＬｏｖｅの方で。

風水師も御庭番の事が好きなのだろうが、いまいち御庭番に気持ちが伝わらないらしい。

だが立場上、風水師は御庭番の上司のような物だ。立ち場の都合上なかなか言い出せないらしい（御庭番談）。

なんという青春、なんという理想の恋愛。リア充爆発しろ。

二人がイイ感じのふいんき（変換できない）になり始めたので、舞姫と並んで二人の様子を見る事にした。

勿論、俺は宙に浮きながら腕を組みながらである。

「・・・御庭番、顔赤い」

「い、いや・・・これは・・・ですね・・・」

「・・・・・（無言で御庭番の頬を引っ張る）」

「いひゃひゃひゃひゃ！？」

「・・・敬語は駄目って言った」

「ひゅ、ひゅいません！」

「・・・・・・（無言の圧力）」

「ご、ごめん・・・なひゃい」

「・・・許してあげる（手を離す）で、何の話してたの？」

「いっつつ・・・えぇっと、先ほどから下の方でワームらしき動きがあって蒼痲に相談をしていたんだ」

「・・・ふぅん」

「幸い、こちらには気付いてないらしい。このままやり過ごす訳にもいかないし・・・」

ピトッ（二人の手が触れ合った）

「「ッ！！？」」

そのまま甘い空間が展開された。

ちなみに、俺と舞姫はその様子をじっと見ていた

（リア充爆発しろ。爆ぜろ。つか気付け鈍感カップルが）←俺

（・・・いいなぁ・・・私も、手・・・）←舞姫

ー実は手を繋ぎたいけど言いだせない舞姫ちゃん萌え（天の声です）ー

だが、事態は思わぬ方へと向かっていた

俺は先ほどに見た黒い点の事が気になり、何故か心の中で引っ掛かっていたのだ

「うーん・・・しゃあねぇ、俺が探索に出るか。」
「は？探索って・・・まさかワームの後を追おうっての！？」
「おぅよ。なんかどうしても気に何だよ。だって、ほら」
気がつけば方舟の間下ではなくまったく別の場所へ向かって走り出している
というか、スピード的には方舟より早いんだなぁ・・・ちょっとワームの性能にビックリ。
「はぁ・・・あんた、まぁた余計な事に首突っ込もうとしてない？」
「首って言うか前進突っ込もうとしてるかも」
「誰が美味い事言えって言ったのよ（蒼痲にチョップ）」
痛っ！？鳩尾に入ったぞ畜生！！
「いった！叩かなくてもいいだろ！」
「まったく・・・はい、信号弾」
舞姫から渡されたのは三色の弾頭の弾と銃っぽいなにかを貰った。
え？信号弾ってあれだよね？ガンダムでもよく出てくるあれだよね？
「信号弾？」
「赤いのが緊急招集ね。どうしても増援が必要だったら使いなさい。

青は帰還の信号ね。今居る地点から帰還する時に使いなさい」

「この黄色いのは？」

「それは・・・あんまりお勧めしないわ。」

舞姫が顔をしかめながら言った。え？なにそれ怖い

「ま、まさかこれって自決用！？嫌だよ！！俺死にたくない！！」

「違うわよ！間違ってないけど、全然違うわ！！」

「・・・ってことはこれを脳天のぶち込むのか！？」

「だーかーら！話を聞きなさい！！」

痛っ！？本日二回目の鳩尾にＩＮしたお！！（チョップが）

「それは、氷結界の秘薬を凝縮した弾よ。それを使えば爆発的な力が手に入るわ。だけど・・・反動が大きくてね。ヘタしたら命にかかわるわ」

「・・・マジか。」

「あまり使わないで欲しいけど、あんた丈夫だから大丈夫そうよね」

いや命にかかわるもんをホイホイ自分から使う訳ねぇだろぉが。

ははぁん、舞姫たんはツンデレだから実は表に出してないけど滅茶苦茶心配してるな？

「・・・なによ、にやにやして気持ち悪い」

「いや舞姫たんは可愛いなーって思って」

「なっ！？なにいってんのよ変態！！ほら、早く行くんでしょ！！早く行きなさいよ！！」

うぉっと！？あの構えはチャクラムを出そうとしてらっしゃる！！流石に痛いのはもう勘弁！！

そう思って、俺は方舟から離れてワームと思われる集団の跡を追った

だが、この行動が思わぬ再会を生むとはこの時の俺は知る由もなかった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4249n/

神に違和感を覚える俺　～転生とか死ぬほどどーでもいい～

2012年1月10日06時51分発行